
天啓的異世界転生譚

ウスバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天啓的異世界転生譚

【Nコード】

N5652V

【作者名】

ウスバー

【あらすじ】

タイトル通り、転生した高校生の主人公が冒険そつちのだけで三歳児のゲーマー女神様と天啓スオラクルキルでひたすら駄弁る話 だったはずが、もう今となつては……。

十八章辺りから主人公が俄然本気を出し、異世界転生物のテンプレ的なイベントをちよつと残念な形で解決していくお話に変わっていません。

主人公はまったくもって最強ではありませんが、たまりに最強よりもチートなので、その力でこれからも好き放題色々なイベントを蹴

散らしていく予定です。

漫画チックなノリでパロディ成分多めなので、苦手な方は注意してください。

第一章 よくある走馬灯

(これはずいぶん、早まっちゃったかなあ……)

華麗に空を舞いながら、結城 鋼は少しだけ後悔をしていた。

高校からの帰り道、家に帰る途中のちよつとだけ大きな通りで、車道の真ん中に白いものが見えた。

それが子猫であることに気付いたのと、それに直撃するコースで車が迫っているのが見えたのは、ほとんど同時だった。

子猫は、動けない。いや、動いてはいるのだが、背中であーちを作るような姿勢で小さく跳び上がっただけ。それは猫が驚いた時、反射によつて起こる生理的な現象で、鋼はそのせいで猫が車にひかれる事故は後を絶たないと聞いたことがある。

危急の時にそんな思考が頭をよぎったのは余裕の表れなのか、それとも取り乱していたのか。とにかく鋼はその光景を見て、とつさに体が動いた……かどうかはよく分からない。

意外と猫を見つけてから時間が経っていたのかもしれない。しかし結局鋼は子猫の下に駆け付けて子猫を両腕で抱きかかえ、そこで容赦なく車にはねられた。

車はほとんどスピードを落としていなかった。

勢いのついた車にはねられた鋼は、そんな走馬灯のような内省が可能になるほどの時間、宙を舞い、そして落ちた。

横になった視界に、泡を食ったように蛇行した車が、そのままスピードを上げて走り去っていくのが見えた。

(ひきにげか。救われないね、こりゃ)

救われないのは、相手が、自分か。よく分からないまま、なんとなくそう思った。

そして、腕の間からスルリと逃げていく白い子猫。

当たり前だろう。子猫に自分の状況が分かっていたとは思えない。鋼にとっては『苦勞して車から助けた猫』であつても、猫にとつては『自分に不意にタツクルしてきたよく分からない人間』に過ぎないのだ。

感謝どころか、最悪嫌われたり恐れられたりしている可能性もある。

しかし、それでも、

(助けられたんなら、よかつたかな?)

そんなことも思う。

それは特に鋼がお人よしだからではなくて、そう思わなければやつてられないということもある。

車に跳ね飛ばされた衝撃で、全身の感覚がおかしい。痛みはないが、不自然な寒気がする。異様に眠い。視界の隅には自分の流したもののらしい血が見える。

これは死ぬのではないか、と自分で思ってしまった。

いくら何でも、自分の命と引き換えにして子猫の命を助けるほど鋼は善人ではない。きれいごとを言つたつて鋼の知らない場所で子猫なんていくらでも死んでいるし、それを本当に助けたいと思うのなら、金を出してそういう団体でも作つた方がよほど効率がいいだろう。

自分が死ぬ可能性なんて考えなかつたから鋼は動けたワケで、そうじゃなければ鋼はただ子猫がひかれるのを硬直して見ていただけだろう。

(でも、だったらそれは、やっぱり少しだけ、よかった……)

もつろつとする意識で、そんなことを思う。

浮かぶ思考は、とりとめのないことばかりで。

(あの人も、こんな気分、だったのかな)

思い出したのは、年上の従姉。十年ちよつと前に、あっさりと事故で死んで、鋼は初めて身内の葬式に出た。

鋼が死を、間近に感じた唯一の瞬間。それでも自分が死ぬ時のことなんて、これっぽっちも考えなかったけれど。

「……あ」

横切った白いものに、鋼の口から、声にもならないかすれた呼吸が漏れる。

気が付くと、目の前には逃げ出したと思っていた白い子猫がいた。思ったよりも大きい、キラキラとした瞳で、こちらを覗き込んでいる。

(そう、か。死にざまとしては、これも、わるく、は、ない、か……)

そうして鋼は自らが助けた白い猫に看取られ、人知れず最期の時を迎えた。……はずだった。

だが、

(な、なんだ…?)

唐突に、周囲の光景が歪む。

晴天だった空が、アスファルトの道路が、うす茶けたビルが、全て歪んでねじれて消えていく。矛盾する言い方が許されるなら、世界が増殖する無に侵食され、塗り替えられていく。

とうとう視覚までおかしくなったかと鋼は自分を疑ったが、歪んでいく世界の中で、目の前にたたずむ子猫だけは、まったくぶれずに元の姿を保っていた。

そして、辺りの光景が全て虚無にぬりつぶされ、その結果、必然として世界の変化が収まった時、白猫が動き出した。

いや、動き出したというのは正確ではない。

鋼が簡単に抱きかかえられる程度だったその小さな体躯が歪み、その姿を変えていく。

鋼が驚きのあまり何も考えられない間に、子猫はあつという間にその体を変化させ、十二、三歳くらいの年の、人間の少女の姿になった。

「ふむ。『ゆーき はがね』か？ 変わった名前じゃのう。

それにしても驚くべきは世知辛いこの時代、こつも簡単にお猫様トラップにひっかかる人間がいようとはの「

あまりに突然すぎて、その声が少女の口から出たものだとは鋼には分からなかったが、子猫だった少女は一切斟酌せず、正しく鋼を見据えてこう言った。

「安心するのじゃ。 結城 鋼。 ワシがお前を生き返らせてやるのじ

「...」

第二章 シロニヤのお猫様トラップ

唐突に子猫の姿から少女の姿になったその存在に鋼は本能的な畏怖を感じ、見た目が年下であるにもかかわらず敬語で呼びかけた。

「生き返らせる、ってどういうことですか？ 僕は、助かるんですか？」

そういえば、さっきまで体を襲っていた倦怠感や違和感が消えている。この謎の少女が助けてくれたんだろうか。

そんな期待を込めて鋼は少女を見たが、少女は首を横に振った。

「残念じゃが、ワシにはそこまで損傷した体を癒す能力、というより権限はないのじゃ。しかし、別のことならできる」

「別のこと、ですか？」

「おぬしは、戦乙女、ヴァルキリーの伝承を知っておるか？」

おぼろげだが、覚えている。

鋼が昔やっていたゲームに、そういう内容のものがあつた。

「たしか、勇敢な死者の魂をヴァルハラに連れて行ってくれる、とか？」

「そうじゃ！ よく知つとつたの！」

「つて言つても、ゲームで見ただけの知識ですけど」

「心配するな！ ワシもじゃ！」

それはむしろ心配になる要素なのでは、と鋼は思ったが、当然口に出すのは自重した。

「結城 鋼。おぬしは勇敢にも子猫を助け、その命を失つた。よつてワシが、別の世界の戦士としておぬしをよみがえらせてやるつぞ！」

いきなりすぎる提案だつた。

それに、鋼にはそれ以上にどうしても聞いておきたいことがある。「お話は、一応は分かった……ことにしておきます。でもその前にいくつか聞いておかなければならないことがあります」「なんじゃ?」

「一つ目は、あなたの正体です。」

この不思議な空間を作ったり、別の世界によみがえらせると言ったり、そんなことができるあなたは、何者なんですか?」

その問いに、少女はよくぞ聞いた、とばかりにない胸を張って、言った。

「ワシは神様! 人の世の因果と転生をつかさどる神、シロニヤじゃー!」

「……シロニヤ、なんですか?」

「む、むろんじゃ」

「シロナ、とかではないんですか?」

「あ、当たり前じゃろう! ワシの名は創世神である母様からもらった大事な名前。間違えたりなどせにゆわ!」

言ったそばからもう囁んでいる。怪しさ満点である。

「じゃあ、シロニヤさま」

「にゃ、にゃんじゃ?」

心なしか、少女は動揺しているように見えた。というかよく見ると、少女の額からはおびただしい量の汗が出ている。

鋼は内心ため息をつきながら、助け船を出した。

「ええと、やっぱり神様を名前で呼ぶのは畏れ多い多いので……。何か、他の呼び方はないんですか?」

「え? あ、そうじゃな! そうじゃよな! 神様を名前で呼ぶとかビビっちゃうもんじゃもんな! よーしよーし、ばっちこーい!」

焦った反動なのか、場違いかつ俗っぽいことを口走りだす少女を

見て、鋼の中で少女の神秘性が八十パーセントほどダウンした。

「じゃったらもう少し詳しい話をせねばならん。

ワシは、もっとも古い神、創世神である母様と、もっとも新しい神、の神様である父様の間に生まれた子なんじゃ」

「え？ 何の神様って？」

「の神様じゃ」

やはり聞き取れない。

「すみません。もう一度」

「じゃから！ と、とと、トイレの神様じゃよ！」

「あ、ああ。トイレ、の神様ですね」

いるんだ本当に、と鋼が思ったのは言うまでもない。

「トイレへの神様の需要というか信仰が、ここしばらくこの国、日本を中心に急に強まったの。

とりあえず新しい男神が作られてトイレの神様になったんじゃが、その神様がシヨタ好きの母様の目に留まってその毒牙に……もとい、運命的な恋愛の果てにできたのがワシなのじゃ」

「そ、そうなんですか」

(……ツッコミ所満載すぎる)

それまでとはまったく別の意味で、鋼は内心冷や汗をかいた。

「あれ、でもそれだと(流行的に)計算合わないような？ ええと、失礼ですけど今のお年は？」

「ワシ？ ワシは三歳じゃ！」

「三歳なんだ……」

それでもまだ計算が合わない気もするが、まあいいと鋼はあきらめた。

「あ、それになんとかなく、しゃべり方に威厳があるというか、そん

な感じがしていたんですけど……」

どこか古めかしいその口調は、まるつきりゲームなどに出てくるロリっばいけど実は数百歳とかのキャラの口調そのものだ。

少なくとも『くじや』などという語尾で話す三歳児はそうはいまい。そもそも三歳児はそんなに堪能にしゃべることができないが。

「お、おお！ そうか？ そう思ってくれるかの！」

鋼は無礼な質問をしてしまったかとヒヤツとしたが、自称神様の少女はずいぶんとうれしそうに笑った。

「これはじゃの、つまりキャラ作りの一環なんじゃ」

「キャラ作り……」

またも神様の口から俗っぽい単語が出て、鋼は暗澹たる気持ちになっただ。

「そうじゃ！ もちろん色々な神様の口調も研究しておるが、ベースは伝説のモテモテ王国を統治したという皇帝、ファーザリオン一世の言葉遣いを参考にしておるのじゃ。

ふむふむ。やはりにじみ出る威厳というのは隠せぬものじゃのう。ふしししし」

鋼は（王国なのに皇帝なのか……）とか内心思ったが、あまり関係なさそうなのでやっぱり口に出すのはやめた。

「話がそれたの。つまりワシは旧神様と新神様の間に生まれた、いわばハイブリッドなのじゃ。

じゃから……そうじゃな！ ワシのことは気軽に神コ口様とでも呼んでくれ」

「ええと、じゃあ……神コ口様」

なぜハイブリッドだと神コ口様なのかは分からないが鋼はとりあえず言われた通りに呼んでみた。

神コ口様はすごく嫌な顔をした。

「やめるのじゃ。その呼び方は神様幼稚園でいじめられてた時のあ

だ名なんじゃよ……」

「じゃあ何で教えたよ！」

あまりのことについて敬語を忘れてツツコミを入れる鋼。

対する少女もそれにはあまり気にするそぶりもなく、

「むしる強烈すぎるトラウマのせいであまり口から出てしまったのじゃ。さすがタイガーホース、名前の通り精強じゃな！　ゼハハハハ！」

やけっぱち気味に大笑いする少女に、もう突っ込まないぞと鋼は思ったという。

「もうシロニヤでいいのじゃ」

やけっぱちから立ち直った少女の結論は、最初と同じだった。

「シロニヤなんて変な名前だと思ったが考えてみれば怪我の功名。あだ名と思えばかわいいとは思わぬか？　にやはははは！」

ケガの功名とかあだ名とか言っている時点で噛んだことは確定だったのだが、鋼はもうとつくにこういうのはスルーするのがベストだと悟っていた。

「では、……シロニヤ様」

「うむ。なんじゃ？」

「もう一つ質問があるのですが、先ほど仰っていたお猫様トラップとは何なのでしょうか？」

最初に聞いた時から疑問に思っていた。シロニヤは鋼がお猫様トラップにひっかかったと言っていたが、それが何なのかを。

その答えによっては、たとえこのまま消滅してしまうとしてもこの話は断らなければならぬ。鋼は心の内でそう決めていた。

シロニヤはことのほかあっさりと答えた。

「ワシの一番の仕事は、徳の高い人間に報いることなのじゃ。じゃから、弱々しい子猫の姿を模し、そのワシに善行を施したものを高

徳の人間として恩恵を授けておる。

それが、お猫様トラップじゃの」

「っ！ つまりそれは、車にひかれそうになったのはわざとだったことですか！？」

さすがの鋼もこれには声を荒げた。そんな神様の気まぐれのせいで死んでしまったのだとしたら、さすがに浮かばれない。

しかし、シロニヤは首を振った。

「いや、アレには本当にびっくりしたのじゃ。きちんと横断歩道を渡っていたのに、まさか車が横から突っ込んでこようとは。

おまけに……普段はあれくらいさつと避けられるんじやが、あの時は不思議と体がかたまってしまったの」

「は、はあ」

それは猫の生理的な反応だろう、と鋼は思ったが、神様にはプライドもあるうと武士の情けで何も言わなかった。

「じゃから、感謝しとるんじやマジで。子猫の姿の時は、ワシは力をセーブしとるからのう。あのままじやと、ワシは一体どうなってしまったことか」

神様がマジでとか言うなよと思わなくもなかったのだが、それだけにその感謝の言葉には妙な真剣味が感じられた。

「つまりおぬしが行ったのは、人助けならぬ神助け。それはもう誇ってよいことなのじゃ！」

「そう、なんですか？」

「そりやあもう徳ポイントもうなぎのぼり。本当は死んだあとの転生なんて、世界規模の善行を積まないといけないはずなのじやが、こちらの事情もあるし神助けをしたことでオツケーになったのじや！

……あと、命を助けてくれた人間を見殺しにしたと知れたら、ワシはきつと母様に殺されるのじや」

「なるほど……」

最後のやけに切実な訴えが本音のような気もしなくもないが、鋼

としてはここでこのまま死んでしまうのもやりきれない。
そういう事情なら、受けてもいいかなとは思っていた。

「でも、いいんですか？」

「？ 何がじゃ？」

それでも自らの疑問を解決しなければ前に進めないのが、鋼の美点でもあり欠点でもあった。

言う必要のないことだと知りつつ、つい聞いてしまう。

「行為としてみれば神助けになるかもしれないし、そのせいで死んでしまったので大きなことをしたような錯覚はありますが、僕が
実際意識してやったのは猫を助けようとしただけですよ。」

命を賭けてまで助けようとは思っていなかったですし、猫を助けるくらいのことを行った人は、いえ、それ以上のことを行った人は他にもたくさんいますよね。

でも、そんな人を差し置いて僕だけ転生するなんて、何だか不公平な気がします」

「ぐ、ぐぬう」

鋼の論理立てた訴えに、シロニヤは何か論破された人が出すような呻きを漏らした。

「それに、子猫を助けたのだから小さくてかわいいものを好む僕の個人的な嗜好の問題でもありません。」

これが醜いカエルなどであれば助けなかったでしょうし、たった一匹の子猫を助ける傍ら、僕は毎日食料としてたくさんさんの牛や豚の命を奪って……」

「う、うるさいのじゃあああああああああああ！」

鋼の言葉をさえぎって、シロニヤは急に吼えた。

「毎回なんとなく善人そうなのをさらってくるだけで、こちらろそんなに深く考えてないのじゃ！」

ぶつちやけとりあえずこっちの作戦にひっかかった人間に機械的になんかご褒美あげるだけのルーチンワークなのじゃあ！」

「それは……あんまりバラしちゃいけないことなのでは」

「あ、あうう。しまったのじゃ。また母様に怒られるのじゃあ」
どうやら神様の世界も世知辛いらしい。鋼は少しだけ同情しなくもなかった。

もちろん何かの手違いみたいない理由で死んでしまった自分の方がもっとかわいそうだと思わなくもなかったが。

「とにかくじゃ！ ワシはおぬしが何を言おうと、ぜったいに転生させるのじゃ！」

たえおぬしが『殺してください！ どうか殺してください！』と泣いて懇願しても、ぜったいに転生するのをやめないのじゃ！

おまえが泣くまで転生をやめない！ もとい、泣いても転生はやめないのじゃ！ 分かったかの？」

「は、はあ……」

正直よく分からなかったが、反対するのもバカらしいということ
は分かった。

これでようやく転生の話に入るのかな、と鋼は思っていたのだが、
「し、しかしじゃな。その前になんじゃが」

「はい？」

なぜかいきなりシロニヤは挙動不審に体をゆすったり両手をこすり
あわせたりし始めた。

「さっき、ほら、神コ口様のくだりのところで、おぬし、ワシのため
口だったではないか」

「え？ あ、あの時はすみません！ つい……」

「いや、そうではなくて、その、むしろそういつのはちょっと新鮮
でな」

そう言うのと、さらに挙動不審にもじもじとするシロニヤ。

「つ、つまり……別に、アレじゃぞ？　ワシに敬語とかそんないらないんじゃないぞ？」

「いや、でも仮にも神様ですし」

「いやいや、そっちがそんなに畏まっていると、こっちもやりたくいというか、威厳とか出しとかなきゃいけないんじゃないもん」

「いやいやいや、それはむしろ出しておいてほしいというか、とにかくシロニヤ様はやっぱり神様ですし」

「いやいやいやいや、おぬしはワシの命の恩人じゃし、遠慮なんてせんでいいのじゃよ？」

「いやいやいやいやいや、そこはそれ、いくら恩人であつても礼儀は……」

「いやいやいやいやいや……」

「いやいやいやいやいやいや……」

互いに譲らない譲り合いの末、結局綱が折れた。

「分かりました。じゃ、敬語はなしの方向で」

「うむうむ。それと呼び方も、シロニヤ様、じゃなくてシロニヤ、でいいんじゃないぞ？」

「じゃあ僕の方は、コウとでも呼んでくだ……呼んでほしい。親しい人はみんなそう呼ぶから」

「コウ、コウ、か。分かった。そう呼ぶとしよう」

「で、シロニヤは転生なんて本当にできんの？」

「う、うん?!　な、なんじゃろう。」

質問の内容はたぶんさつきまでと大して変わらないのに、敬語をやめた途端、急にバカにされてるみたいに聞こえるのじゃ……」

シロニヤは内心早まったか、と思ったが、さすがにすぐに言を翻すほど狭量ではなかった。

むしろ自分を鼓舞して見得を切る。

「甘く見るでないぞ、コウ！　ワシは三年前から異世界転生のエキ

スパート！ 人呼んでトイレの転生神とはワシのことじゃあ！」

「と、トイレの転生神！」

「すぐくかつこ悪い！」と鋼が思った時、急にシロナがお腹を押さえ始めた。

「うう。しまった。それは神様幼稚園でいじめられてた時の二つ名じゃったあ」

「何でいちいちそういう名前ばかり名乗るんだよあんたは?!」
敬語をやめた途端ツツコミの容赦なさも上がっていた。

鋼は苦勞して（よしよーしとか言いながらシロニヤの背中をさすつたりした）シロニヤの幼稚園時代のタイガーホース（虎馬）を抑え込むと、シロニヤはめずらしくキリッした顔で宣言した。

「よいか！ このあと、おぬしはワシの力でこの世界を離れ、遠く異世界に生まれることになるのじゃ」

「やっぱり、元の世界に生き返る、ってワケにはいかないんだよね？」

「それはの。原因であるワシが言っても納得などできないじゃろうが、悪いがあきらめてくれ、としか言えんのじゃ」

「……そつ、か」

鋼は万感の想いを吐き出すようにそう漏らして、同時にそつと、心の中で世界に別れを告げた。

両親や友達、親戚やご近所さん、よく行ったラーメン屋に、思い出深い図書館の隅の席、住み慣れた家に、これから一年を過ごすはずだった教室。

今までの生活を彩ってきた、思いつく限り全てのものに、感謝と決別を済ませた。

そんな簡単に割り切れるはずがなくとも、割り切れたフリをした。

シロニヤは何も言わず、そんな鋼を見守っていた。

次に口を開いた時、鋼の口から出たのはいつも通りの軽い調子の言葉だった。

「異世界、ねー。ピンと来ないけど、どういふ世界とかっていふのは分かったりする？」

それには何も言及することなく、シロニヤもただ前と変わりないトーンで聞かれたことにだけ答える。

「うむ。おぬしが行く世界はもう決まっとる。いわゆる『剣と魔法の世界』じゃな。

魔法が飛び交い、魔物が跋扈する、RPGの舞台のような世界じゃ」

「……ますますピンと来ないな。というか、僕なんかそんな世界に行っても数日も持たずに殺されちゃいそうだけど」

自慢にはならないが、鋼は今までのく喧嘩もしたことがないし、体だつて別に鍛えてはいない。

かといって交渉術に長けているワケでも、異世界で使えるような技術を持っているワケでもない。

特に変わった所のない高校生だと言える。

「そこはほれ、アレじゃ。それなりの特典が用意されておる。

少なくとも今回の場合、転生先には今までの記憶全てと、ワシら神の加護を持って行けるのじゃ」

「記憶はともかく、神様の加護？」

「特別な力や魔力、あるいは特別な技能や基礎的な能力を設定して……。」

まあいいのじゃ。百聞は一見に如かず、案ずるよりも生むがやすし、じゃよー」

そう言つと、シロニヤは大仰な仕種で後ろを示した。

「これが、おぬしを異世界へ送り出す、転生マシンじゃあああ！」

鋼が見たその先には、なぜかテレビとゲーム機、それにコントローラーが置かれていたのだった。

第三章 数字と遊ぶ

「なんじゃ？ その、『どう見てもゲーム機とテレビです。本当にありがとうございますございました』と言いたげな顔は」

「どんな顔芸だよ！ そんなこと思ってもないって！」

「ふん。どうじゃかな……」

シロニヤは疑いのまなざしを続けていたが、鋼は嘘ではないと伝えるようにその目を正面から見返した。すると、

「……な、なんじゃ、そんなに、見るでない」

なぜかシロニヤが照れて目を逸らしたのでうやむやになった。

なんだかなあ、とは鋼の心の声だ。

「昔、転生する者は、神様に口頭で希望を伝え、あるいは神様に勝手に能力を決められ、新天地へと飛ばされたらしい。

しかし、今時そんなレトロでアナログなやりとりはナンセンスじゃ」

気を取り直したシロニヤが自慢げに説明をする。

「ふふん。ワシは平成生まれのヴァーチャル世代じゃからの。昔の神などとは一味違うのじゃ。」

「IT、つまりインターネットのテクノロジーを駆使して転生を行う、次世代型転生神なのじゃ！」

「へえー。まあ、ITは情報技術、インフォメーションテクノロジーの略だったと思うけど」

「ぬ、ぬうう」

肝心な所で締まらない神様である。

「とにかく、おぬしもテレビゲームくらいはやったことがあるじゃろ？」

アレのキャラクターメイキングと同じと考えればいいのじゃ」

「なるほど。じゃあタロットカードと占い師の質問とかで来世の能力値が決まるとか？」

「む。おぬし、なかなか話せるの。……ではなく、そういうタイプもまあワシは好きなんじゃが、ちがう。」

ボーナスポイントを振り分ける形でキャラクターの初期タイプや持っている素質を決めるのじゃ」

「ボーナスポイント？　ということは、決定とキャンセルで厳選するタイプ？」

「おぬしは本当に話せるのう。じゃが、ボーナスポイントはこちらで決めるのじゃ。」

そこで出てくるのが、前に話した徳ポイントじゃな」

鋼にも、なんとなく読めてきた。

「たしか、生前の善行で上がるポイントだったっけ？」

はつきりとそう教えられたワケではなかったが、大体そんなものだったはずだ。

「そうじゃ。よく覚えておるじゃないか」

「つまり、生きている間にした良いことに応じて、来世が有利になるってこと？」

「その通りじゃ！　おぬしは何しろ神助けをしてくれたからのう！

奮発して、どーんとボーナス200ポイントを受けるとのじゃ！」

「ザル計算というか、すごくテキトーだなあ……」

たぶん数ポイントの差がその後の人生の明暗を分けたりするんだろが、神様にとってはどうでもいいんだろ。

「なんじゃ。嬉しくないのかの？　普通の転生者は100ポイント

や50ポイントくらいなんじゃぞ？」

「いや。まあうれしいことはうれしいんだけど……」

やっぱり、自分だけズルをしているような後ろめたい気持ちはぬ

ぐえなかった。

「なんじゃ。やっぱりまだひっかかっておるのか？」

鋼にとって意外なことに、シロニヤは鋼の葛藤を見抜いているようだった。

諭すように話し始める。

「ワシじゃって、もっとたくさんの人を公平に転生させた方が良いのではないかと思う時もあるんじゃがの。

しかし、神が干渉しすぎると、事態は決まって悪くなってしまう
そうなんじゃ」

「それは、因果律、とかそういうもの？」

「かもしれない。例を出すと、ワシの母様は創世神じゃ。何しろ世界を創った神じゃからの。強い力を持つておる。

その力を使えば、たとえば世界にいる病気の人間全てを完治させることくらいできるじゃろう。

じゃが、そんなことをすれば力の揺り返しで大災害でも起こって、
一年後には人類は滅亡しているかもしれない。

そう、母様本人が言っておった」

神は万能であつても全能ではないのだな、と鋼は悟った。

「じゃからの。そういうのをごまかしつつ、気まぐれに動くのが神の
仕事なんじゃ。

あとは、力を与えられた人間のがんばり次第じゃな」

そう言つて、シロニヤは鋼を励ますようにうなずいてみせる。

初めてシロニヤが神様らしく見えた。

「あと、そういう世界救済とかがやりたかったら、シ〇アースとか
シヴィライ〇ーションとかやればいいしの」

色々と台無しになった。

「まあ習つより慣れる、じゃ。色々といじつてみればよいじゃろ」
促されて、鋼はコントローラーを手に取った。

「すごいじゃろ。名人を超える秒間360連射を達成した、最強の

「コントローラーじゃぞ！」

と自慢されたが、鋼はそれ絶対無駄機能だろうと断定した。とりあえず愛想笑いで対応し、テレビ画面を見る。

大きめなそのディスプレイには『転生キャラクターエディター』という画面が最初から表示されていた。

「本当にゲーム感覚なんだな」

呆れ半分、感心半分で鋼が感想を漏らす。

それに対して、シロニヤは「うむ！」と胸を張った。

別にほめたワケではないのだが、いい加減そいう反応にも慣れてきたので鋼は当然スルー。それよりも、と画面を注視する。

画面上部のバーに『残りポイント：200』と表示されていて、その下には『能力値』『アビリティ』『タレント』という三つの欄がある。

そして、画面の一番下。画面下部のバーには『初期化』『決定』の二つが用意されている。

「『能力値』というのは、『筋力』や『知力』なんかの基礎的な能力の値で、これが高いほどその能力が高いことになる。」

『アビリティ』というのは、『カギ開け』や『魔法』などの技能のことで、アビリティレベルが高いほどその技能に熟達しておることになる。

『タレント』というのは、その人間の才能や体質のことで、レベルはない。一番後付けしにくいパラメータじゃな。

もちろん、能力値を上げたり、アビリティやタレントを取得するたびに、上の残りポイントが減っていくのじゃ。

項目によって上げるのに必要なポイント数が違ったりするので、注意が必要じゃ」

「なるほど」

鋼はために筋力を初期値の10から12まで上げてみる。

すると、上に表示されていた残りのポイントが200から190

になった。

これは分かりやすいな、と思いながら鋼は筋力を10に戻した、のだが、

「あれ？」

残りポイントは、192までしか戻らなかった。同じパラメータにしたはずなのに、初期値から8も減っている。

「ああ。これは注意じゃな。上げる時と下げる時では、ポイントのレートがちがう場合があるんじゃ。」

そういう時は初期化じゃな。そうすれば、最初の状態にもどる」
鋼が初期化を選択すると、たしかにポイントは200まで戻った。
理解不能なシステムだと鋼が首をかしげていると、シロニヤが説明してくれた。

「もちろんポイントを上げたり下げたりしてポイントを無駄にするバカはおらんし、これはそのためのシステムではないのじゃ。」

前世ボーナスを有効活用するための措置じゃな」

「前世ボーナス？」

また出てくる初めての単語に鋼はふたたび首をかしげた。

「生前の行動によるパラメータボーナスじゃ。ほれ」

シロニヤがコントローラーを奪い取って、アビリティの欄を選択する。

表示された大抵のアビリティは0になっているが、何も設定していないのに、最初から5や6くらいあるアビリティもある。

シロニヤの指がその内の一つ、社交力の欄を指し示す。

「ほとんどの人間がアビリティボーナスを得られるのがこの社交力じゃ。」

具体的には、生前の交友関係の広さによってアビリティにボーナスが入る」

「なるほど」

鋼が見ると、社交力のアビリティは最初から3になっていた。

「ちなみに、ここに来た奴らの社交力の平均は8じゃ。おぬし、相当友達おらんの」

「余計なお世話だよ！ 僕は友達が少ないんだよ！ 文句あるのか！」

「良いのではないか？ まあ、今となつては係累は少ない方が良いじゃろ。」

おぬしは、これから新しい人生を始めるのじゃからな」
「言われて、ハツとした。」

「……そうだった。ラッキーだった、のかも、な」
「どんなにバカらしい事情だろうと、どんなに現実感がなかりうと、鋼が一度死に、生き返るとしても別の世界に行くしかない、というのは事実なのだ。」

「と、とにかくじゃな。前世ボーナスのおかげで、生前力持ちだった人間は来世でも力自慢に、頭のよかった人間は来世でも賢い人間になりやすいのじゃ。」

能力を下げる時ポイントがあまりもどつてこないのは、それを尊重するためじゃな」

「ん。あー、そっか。そこにレートの違いが関係してくるワケか」
鋼は納得した。

たとえば、前世ボーナスで筋力10、知力0の人がいたとして、能力値を上げると下げると使うポイントが同じだとしたら、ポイント消費なしで筋力0、知力10のキャラが作れてしまう。これでは前世ボーナスによる個性の違いが出ない。

しかし、さつき試した所では能力値を上げるのに5ポイントずつ使うのに、能力値を下げて1ポイントずつしか戻つてこない。つまり、筋力を下げて知力を上げようとすると差し引きで4ポイントずつ損してしまうので、元々高い能力値はそのまま使った方が得だ

ということになる。

「まあ細かいことは考えんでも、高い能力値は下げずにそのまま有効活用した方が良くぞ、ということじゃ」

「了解。他に注意することはある？」

「そうじゃな。アビリティを上げる順番なんかも重要じゃぞ？」

たとえば『筋力成長+』のアビリティを上げれば筋力を上げるのに必要なポイントがわずかずつじゃが少なくなる。

両方を上げる場合、筋力を上げる前に『筋力成長+』を上げなければ、結果的に損をすることになるのじゃ」

「なるほどなるほど」

「他にもアビリティ関係は転生したあとで訓練すれば比較的簡単に上げられるからあとまわしにしてもいいとか、色々あるが……」

「あるが？」

「その辺りはセレクトボタンで表示されるヘルプに書いておいたから、そつちを見ればよいじゃろ」

「投げやりだなあ……」

「む。そのヘルプ、書き上げるのに一週間もかけたのじゃぞ。見てもらわねば働き損じやろうが。」

それと、ワシはこれから片づけなければならぬ用があるからしばらく席を外すぞ」

「え？ 行つちやうのか？」

「うむ。その他にも、アビリティや能力値にカーソルを合わせて三角ボタンを押せば簡易説明文も見られるし、大丈夫じゃろ。」

またしばらくしたら来るから、その時何かあったら聞くとよい。

あるいはもうこれでいいと思つたら、決定を押してもよいぞ。それで自動的に転生が開始する」

「分かつた。でも、たぶんシロニヤが来るまで待つてるよ」

「う、うむ。それはよい心がけじゃぞ」

シロニヤは、少しあわてたような顔で鼻の辺りをこすった。

「そつだ。生活に必要なそうなのはあちらに用意してある。この世界でも腹が減ったりはするのでな。」

遠慮せずに使うがよい」

シロナが示した方を見ると、今まで何もなかったはずの場所に小屋のようなものが建っていた。

鋼はさすが神様、何でもありだな、と思ったが、

「分かった。ありがとう」

と素直にうなずいておく。

シロニヤは今度こそ立ち去ろうとしたが、もう一度鋼を振り返って、にやりと性格の悪い笑みを浮かべた。

「考えるのは良いが、あんまり考えすぎるなよ。だいぶ前にやってきた男じゃがな。」

飲まず食わずのまま悩みに悩んで、三週間後くらいに様子を見に来た時にはすっかり干からびてミイラのようになってるのう。

あの時はワシも本当に驚いたのじゃ」

「で？ その人は？」

「もう仕方がないので死んだままで適当に動けるようにアビリティ設定して送り出したぞ。」

今ではグールことかになって、第二の人生を謳歌してるんじゃないか？」

「うげー」

さすがに鋼も、第二の人生がアンデッドスタートとか勘弁してほしい。討伐エンドか成仏エンドしかゴールが見えないし。

「それではワシはもう行くぞ。心配せずともおぬしがミイラになる前に様子を見に来てやる」

「まあ、頼むよ」

最後まで偉そうに胸を張って話すシロニヤを、鋼は苦笑しながら

見送った。

鋼の視線を背中に受けながら、シロニヤは、

「ふふふ。待つておれよ、ガ○ラもどきめ。配管工の真の力、今こそ見せてやるわ」

とか何とか言いながら去って行った。

「あいつ、用事とか言ってたけど明らかにゲームやりに行ってるよな」

しかもたぶんヒゲオヤジが大活躍するあの某有名アクションゲームだ、と鋼は思った。

だが、正直に言えば一人でじっくりとこの転生マシーンとやらに向き合いたいというのが鋼の本音だったから、それはそれで好都合ではあった。

何しろ自分のその後の人生がかかっている。

自分だけ転生できて不公平だとか神様は適当だとか文句をつけてはいたが、色々と理性とか理屈を取っ払ってしまった部分では、鋼だってまだ生きていたいと思っっているし、第二の人生が少しでもより良いものになればいいとは考えているのだった。

「さつてと。それじゃ、色々試してみますかね」

鋼は本腰を入れて、『転生キャラエディター』に取り組むことを決めた。

あまりデバックがされていないゲームや、慣れない制作陣が作ったゲームには、バランスの悪い部分というのが必ず存在する。

たとえば属性武器が異様に強かったりとか、補助魔法が完全に死にアビリティになっていたりとか、レベル補正が高すぎて他のパラメータがほとんど意味をなさなくなっていたりとか、バグとまでは言えない仕様の穴のようなものが見つかることは多い。

これをゲームとして見れば、まだ始まって三年も経っていない、おそらく数人しかプレイしたことのないゲームだ。

穴なんていくらでもありそうである。

鋼はできればそういう部分を見つけて、思いっきり得をするつもりでいた。

「まず、使えるポイントを確認してみるか」

『社交力』などの前世ボーナスによって上がっているアビリティや、筋力や知力などの最初からいくらか数値が高いものを、全て最低値まで下げる。

能力値だろうがアビリティだろうがタレントだろうが、どうやら1下げること1ポイントしか戻ってこないようだ。

しかし、その1ポイントずつでもかき集めると57ポイントまでになった。

現在のポイントは初期値の200と合わせて257だ。

一応これが、鋼が自由に使える最大ポイントということになる。

「実際には能力値を下げてポイントにするのは割に合わないし、やっぱり実質は200ってことになるか」

しかし色々試す分にはポイントは多い方がいい。

実験の開始。

「じゃ、まずは『筋力成長+』っていうのを試してみるか」

アビリティの欄を選択、その中から『筋力成長+』にカーソルを合わせ、三角ボタン。アビリティの説明文を見る。

このアビリティのレベルが1上がることに筋力の必要経験値を1割減らす

これを見た瞬間、鋼の頭に電光が走った。

(1上げること1割減るなら、10上げれば10割。つまり、ポイントなしで筋力が上げられるようになるんじゃないか?)

そのひらめきに従って、即座に実験。

実際にやってみるとアビリティ自体はたしかに10まで上がったのだが、

「やっぱりそんなにうまい話はないか」

最終的に、筋力1に対してポイント2の消費に留まった。

おそらく、アビリティレベルが上がるごとに100%から一割減って90%、さらに一割減って80%、さらに一割減って70%…となっていくのではなく、100%の一割減って90%、90%の一割減って81%、81%の一割減って72.9%、という具合になるのだろうと鋼は当たりをつけた。

鋼が小屋の中で見つけた紙とペンで筆算した所によると、そんな風に計算していくと十回で最終的に35%くらいになる。

アビリティなしで筋力を上げるのに必要なポイントは筋力1に対して5。『筋力成長+』がレベル10だった場合に必要なポイントは2。2÷5は0.4で、つまり『筋力成長+』がレベル10の時はレベル0の時の40%くらいのポイント消費で済んでいる計算になるので、計算は大体合う。

「200ポイントも使って、たった4割止まりか。割に合わないなあ……」

仮に残りの57ポイントを全部筋力につき込んだとしても、28しか上げられない。

それよりも最初から全部のポイントを筋力につき込めば、257÷5で51上げられる。結果として二倍近い差が出てしまう。

もちろん転生した後に筋力が上がりやすくなるというメリットはあるのだろうが、そのために大量のポイントをつぎ込むのは効率が良いとは思えなかった。

「そうだ。このアビリティを使って筋力を上げて、筋力を十分に上げた後でこのアビリティを外せば……」

と思ったが、ここでレートの違いが効いてくる。

筋力を上げた後で『筋力成長+』を0まで戻したとして、返ってくるポイントはたったの10。割に合わないにもほどがある。

「んー。さすがによくできてるなあ」

想像していたよりもきちんとしたバランスをしているのかもしれない。

鋼は方針の転換を決めた。

「じゃ、次はタレントを見てみるか」

鋼はとりあえず画面を初期化、ポイントを200にまで戻して、タレントの画面へと飛んだ。

「数、多いなあ……」

アビリティを見た時にも思ったが、そこに表示されているタレントの数は膨大だった。

画面いっぱいにはタレントと必要ポイントが書かれているのはもちろん、画面下で下ボタンを押すと、さらに画面がスクロール。新しいタレント満載の画面が表示された。

「しかも……」

よく見ると画面右側にバーがあり、そこを見る限りもっともつと下にスクロールできそうである。

「それにこの辺り、絶対にシロニヤの趣味だろ」

最初の方のページだからか、必要ポイントが10程度の効果の薄いようなタレントが並んでいるのだが、

『瞬間記憶復元』

思い出せそうで思い出せない芸能人の名前や昔の歌の歌詞などを瞬時に思い出すことができる

『絶対音感（駄）』

どんなアニメを見ても、キャラクターの声から声優の名前が分か

る

とかざっと見ただけでも百パーセント役に立たないだろうと断言できるようなものがたくさん交じっている。

「やっぱり中級以上のアビリティになると、役に立つのも増えてくるのかな」

膨大な量のアビリティに辟易としながらも、鋼は画面をスクロール。

適当な所で止めて能力を見てみる。

「なになに、アビリティ『幻想殺……』って、思いつきパクリじゃないか！」

危ない所だった。何だかよく分からないが、たぶん危ない所だった。

鋼は出て来てもない汗をぬぐう。

「よく見ると、どこかで見たようなものがちらほらと……」

『鶴亀仙流免許皆伝』に『ブランニュータイプ』、『絢爛舞踏者』

『流派：東方では不敗』とか、せめてもうちょっとひねれよと言いたくなるギリギリな、しかもたぶんギリギリアウトなネーミングのものばかりだ。

「これもあいつの趣味、なんだろうな」

ホントに遊び感覚なんだなあ、と今更ながらに神様の気まぐれに巻き込まれた我が身を呪ってみる。

しかし、おかげで使えそうなタレントを一つ見つけることができた。

『脳の誓い』

知力の必要経験値を10倍にする代わりに、筋力の必要経験値を半分にする

必要ポイントは50。もちろん知力へのペナルティは痛いですが、最初から筋力特化に決めるなら、200で4割の『筋力成長+』より、50で5割のこちらの方がはるかに効率がいい。

試しに取得して、実際に筋力を上げてみる。

1上げるのに3ポイント、さらにもう一度上げると、今度は2ポイントだけ消費された。

5の半分は2.5だからだろう。どうやら小数点以下もきちんと計算されているらしい。

前世ボーナスを全てポイントに変えて筋力に全振りすると、 $200 \div 2.5$ で82まで筋力を上げることができる計算だ。やっぱり今までで一番効率がいい。

思わずうれしくなった鋼だが、そこで素朴な疑問が生じた。

「アビリティとタレントって、重複するのかな？」

まあそんなものはただ試せばいいだけの話だ。

ふたたび画面を初期化。ボーナスポイントを200に戻して、せっかくなので前世ボーナスを全てポイントに。で、257ポイント。

『筋力成長+』をアビリティレベル10に。『脳筋の誓い』を取得。

これで250ポイント使ったので、残りポイントはたったの7になっちゃった。

それでも実験する分には問題ない。

残りのポイントを全て筋力につき込む。

残った7ポイントの消費で、筋力は7まで上がった。

「んー。必要ポイント1つてことは、効果は重複するみたいだな。というか、とうとう元の2割まで行ったかあ」

それはつまり、転生後に筋力が通常の5倍の速度で上がるということになるだろう。

「5倍、5倍かあ……」

手持無沙汰に、筋力の値を増やしたり減らしたりしながら、鋼は考えを巡らせる。

「……まあでも、ないかな」

成長率5倍という数値は魅力的だが、それ以外の全てと引き換えにしてまで手に入れるようなものではない。

そんな結論に達した時だった。

「あれ……？」

鋼は異変に気付いた。

テレビ画面の中、筋力の値がいつのまにか8になっていた。

「さっきはたしか、7だった、よな？」

その記憶には自信があった。

最後にはポイントが7しか残らなくて、それを全て筋力に振り分けたら筋力の数値が7になった。そのはずだ。

鋼を襲う強烈な違和感。

「一体何があった？」

今度は注意深く画面を見つめながら、ふたたび十字キーを動かした。そして、

「今の！」

筋力を上げ下げした時、稀に残りポイントが変動しない時があることに気付いた。

「これが、8になった理由？」

もう少し観察を続け、鋼は正確には十回に一回、筋力を上げた時にポイントが消費されない現象が起こることを突き止めた。

「あー。考えてみれば別に変わったことでもないか」

たぶん、筋力を1上げるのに必要なポイントが0.9くらいなのだろう。

だから、10回上げること一回、ポイントを使わずに能力値を上げられるだけだ。

別におかしな所は何もない。

試しに計算してみる。

「ええと……元の必要ポイントが5。アビリティで35%、さらにタレントで50%になるはずだから、 $5 \times 0.35 \times 0.5$ で……
0.875か」

やっぱりほとんど0.9だった。

だからこの結果は当然だった。何も不自然なことはない。
なのに、

「なんだ？ 僕は何を見落としている？」

違和感は、途切れることがない。

筋力を0まで減らして、また上げていく。

5から6に上がる所でポイントが減らなかった以外はスムーズに進み、12で止まる。

これの、どこに……、

「つて、あああああああああ！！！」

気付いた瞬間、鋼は大声で叫んでしまっていた。

気付いてしまえばなんてこともないというか、気付かなかった自分がバカだったとしか言えない。

自分につかりして思わず両手で顔をおおって落ち込んでしまったほどだ。

だが、

「仕様の穴、みつけ！」

次の瞬間顔を上げた鋼は、それはそれは邪悪な笑みを浮かべていたのだった。

第四章 やつとこやつとこ転生開始

東西南北、どちらを見回しても地平線すら見えない、不可思議な空間。

そこには先ほどまでと違い、迷いなく一心不乱にコントローラーを操る鋼の姿があった。

まず鋼は、12まで振り分けた筋力を一気に戻していく。筋力の値があつという間に0になり、その代わりに残りポイントが12になる。

次に鋼は、さっき減らしたばかりの筋力にまたポイントを振り分けていく。12あつた残りポイントがあつという間に0になる代わりに、筋力が「13」になった。

もう一度、同じ動作を繰り返す。筋力は「14」に。さらにもう一度。今度は筋力は「15」まで伸びる。増えていく。

「ほんとに、成功しちゃったな……」
鋼は呆然とつぶやいた。

この筋力の増強、というより、ポイントの増殖。仕組みは実に簡単だ。

最初の状態では、筋力を上げる時と下げる時のレートの比が5:1だった。だから、筋力を上下させるたびに、4ポイントずつ損をしていたのだ。

だが今、アビリティとタレントの効果で、そのレートが0.87:1になっている。そうすると、何が起きるか？
単純だ。

筋力を上下させるたびに、0.13ずつポイントが増える。

まさかのお手軽錬金術である。

鋼もこういうバグというか、仕様の抜け道のようなものを探していたはずなのだが、実際これほど単純で、これほど致命的なミスがあるとは想像していなかった。

そして一度できると知ってしまうと、とことんまで追求したくなるのが人情で、鋼はそういう欲求に素直な人間だった。

夢中になってポイントを増やす作業を進めていく。

地道のポイントの上げ下げを続けていくと、筋力の値はどんどん増えていき、とうとう筋力99に到達、頭打ちになる。

ヘルプを参照すると、能力値自体の上限は99ではないようだが、『転生キャラクターエディター』では、99までしか上げられないらしい。

しばらくは筋力を99まで上げ、0まで下げる、という作業を繰り返す。この一工程に大体30秒。一周につき大体13ポイントが増えた。

これを数分繰り返し、指が痛くなった所で中断した。

ポーンポイント筋力は筋力99の状態で220。初期値と同じくらいまでにたまってきた。

だが、鋼はこれを元手にさらなる作業効率の向上を目指す。

タレント一覧を開き、『脳筋の誓い』と同じような筋力の必要経験値を減らすタレントを探す。

しかし見てみると、デメリットはあるもののポイント50消費で必要経験値半分という『脳筋の誓い』は破格だったらしく、100ポイント使って1割減少とか、150ポイントで5パーセントだけ減少などの使えないタレントばかりが見つかる。最終的に、200ポイント使って3割減少というそこそこのタレントを発見。取得す

る。

残ったポイントは20ポイント。鋼は指を酷使してためたポイントのほとんどをこれに費やしてしまったことになる。

しかしそのかいあって作業効率は飛躍的に上がり、今まで一周13ポイントしか増えなかったのが、40ポイント程度になった。

数分間ポイントを増殖させる作業を繰り返し、そのポイントを筋力の必要経験値を減少させるタレントにつき込む、という流れを何回も繰り返し、少しずつ作業の効率を上げていく。

コントローラーの十字キーを押す鋼の指の疲労と引き換えに、それは順調に進んでいたと思われたのが、一周につきポイントを98ほど稼げるようになった辺りで低レベル帯にある筋力経験値を減少させるタレントを全て取り終えてしまう。

次に見つけた筋力経験値を減少させるタレントはポイントが4500も必要で、さすがになかなか手が出ない。

筋力によるポイント増殖法はここで一つの壁にぶつかることになった。

……ちなみに、たぶんこの辺りで鋼は当初の目的である自分の転生等の事情を完全に忘れていた。

ただポイントを稼ぐだけの機械になった鋼は行き詰った筋力増殖法に見切りをつけ、他の能力値を試す。

まずアビリティ一覧から『アビリティ成長+』をレベル10まで取得。アビリティを取得するのに必要なポイントを抑えた上で、『知力成長+』などの他の能力値の必要経験値を減少させるアビリティを限界まで取得する。

その後、他の能力値の必要経験値を減少させるタレントも取得。筋力と同じように試してみるが、

「……一周98から上にどうしても上がらない？」
筋力でポイントを稼いだ時と全く同じ壁に直面する。

「そうか。いくら消費ポイントを抑えても、一周で稼げるポイントの上限が99なのか」

どんなに能力値を上げる時のポイントが少なくても、99から0に下げる時に稼げるポイントが99で固定だという事実によつやく気付く。

それは、このやり方ではどんなにがんばっても一周99以上のポイントには稼げないという証明でもあった。

システムの限界点にぶつかった鋼だが、ここで大事な要素を思いつく。

完全に無駄機能だと見切りをつけて気にもしていなかった、コントローラーの連射機能である。

試しに連射機能を適用して十字キーを操作してみると、バグったような音を立てて一瞬で能力値が上限まで上がった。

秒間360連射が嘘でないのなら、99まで上げるのに約0.3秒しかかからないことになる。

ここへきて作業効率は飛躍的に向上。

鋼は一秒間に100ポイント強のペースでポイントを稼げるようになった。

そしてそのまま、数時間が過ぎる。

鋼の下から立ち去ったシロニヤが戻ってきたのは、結局鋼と別れて十時間ほど経ってからであった。

「ふう。あの似非怪獣め。ビビンバの親戚のような名前をしとるのになかなかしつこかったの。」

「じゃが、所詮ワシの敵ではないの、じゃ……」

上機嫌でしゃべりながら歩いてきたシロニヤの言葉が止まる。

戻ってきたシロニヤが見たのは、目をどんよりと曇らせて、まるで幽鬼のように画面にかじりつく鋼の姿だった。

「あー。シロニヤじゃないかあ……」

ゾンビのような緩慢な動作で、鋼がシロニヤに振り向いた。

ある意味昔見たミイラを超える、そのあまりに不健全な空気に、シロニヤは思わずたじろぐ。

「な、なんじゃ、そのパンダみたいなでっかな隈と、つや消したみたいなレイプ目は。おぬし一体何しとったんじゃ？」

十時間にもおよぶ超単純作業である。

「が、今の鋼にその質問に答えられるほどの正気は残っていなかった。」

コントローラーを動かしながら、ほけーっとした顔で首をかしげるだけ。

「それにおぬし、まだ『転生キャラエディター』をやっておるのか？

あまり考えすぎると言うに、どれだけ優柔不断な……」

「ぶつぶつと文句を言いながらシロニヤは画面を覗き込んで、

「な、なな、なんじゃあ！ これはあ！」

すっとんきょうな叫び声を上げた。

しかし、シロニヤが叫ぶのも無理はなかった。

その時すでに、鋼のボーナスポイントは三百万を超えていた。

そんな空気をまったく読まず、鋼が作業を続ける。

「あはは。シロニヤ、おもしろいんだよ。これを、こう、やって、こうやるとね。」

「こう、ポイントがバーツとふえるんだよ」

増減する筋力。そして、それに釣られて増えるポーナスポイント。「ま、まさか、アビリティとタレントで筋力の上昇レートを抑えて1以下にした？ し、しまったのじゃ！ それをされたらたしかにポイントが増えてしまうのじゃあ！」

さすがに制作者。

一瞬で鋼が何をやってたのかを見抜いた。

そして見抜いたからこそ、ことの重大さに気付いて顔を青くする。

同時に、シロニヤを見たことで鋼もほんの少し、当初の目的を思い出した。

「あー。そういうえば、きやらくたーをつくらなきゃ。これだけポイントあれば、つよいのつくれるかな？」

しかし、それで顔面蒼白になったのは当然シロニヤだ。

必死で止める。

「だ、ダメじゃダメじゃ！ そんなのダメじゃ！ だ、だってそんなのズルいもんじゃから！」

「えー。でもこんなにがんばったのに……」

「ダメったらダメじゃ！ 三百万ポイントとかもう神様の力超えちやつとるもん！」

「え？ むりなの？」

「無理なワケじゃな……そう！ 無理なんじゃ！ そんなポイントたくさんあると無理なんじゃからあきらめるしかないんじゃ！」

「へー。そうなんだー」

「そうなんじゃ！ そうなんじゃから、こう、ほら、ぼちっと初期化を」

「でもためしにやってみよー」

「だ、ダメじゃあああ！」

あせつたシロニヤは、鋼の予想もつかない掟破りの強硬策を取った。

「え、ええと……あ！ も、もう時間切れなのじゃ！ 残念なんじやがあと十秒でおぬしを次の世界に送らなきゃいけないんじゃあ！」
「え？ あと十秒？」

その言葉が、鋼のكارうつじて残っていた正気をよみがえらせた。
「そう！ そうなんじゃ！ じゃから残念じゃのう！ たくさん増やしたそのポイントを使う暇はないんじゃよ！」

「そーなんだー、ってそんなワケないだろこの前三週間悩んでた奴もいたって言ってたじゃないかこのほら吹き神い！」

ようやく正気に戻った鋼が早口に怒鳴るが、カウントダウンは止まらない。

「ダメなものはダメじゃもんねー！ ほーら。もう五秒経っちゃったんじゃもんね！ ごー、よーん……」

「く、くう！ こうなったらあ！」

破れかぶれになった鋼は作業を中断して『タレント』を選択。

タレントのページの一番外、必要ポイントの多い、最高レベルのタレントのページを開いて、

「これ、だあああああ！」

名人顔負け、360連射を起動させる。

「あああ！ そんなデタラメな！」

シロニヤの悲鳴。

しかしそれとは無関係に、固定された十字キーの上と決定ボタンは人の限界をはるかに超えた速度で連打を続ける。

残り時間はたったの二秒。

だが、その間に720回の連射を可能にする悪魔の機械は寸毫の遅れも緩みもなく自らの仕事を果たし、

「ま、まさか……!!」

とうとう三百万あったはずのポイントをきっかり0にまで消費した瞬間、

「う、うわぁあああああ!!」

鋼の体は、突如現れた闇に飲み込まれていった。

第五章 裸一貫男物語

存在が、ほどけていく。

「あ、あああああああああああああ！

うあああああああああああああ！」

我知らず、鋼の口から傷ついた獣の咆哮が漏れる。

だが、とまらない。

結城 鋼という存在を構成している要素の結合がほつれ、分解されていく。

闇しかないその空間に、かつて結城 鋼だった物体がまぎれ、消えていく。

存在が消える恐怖。自分が何者でもなくなるという怖れ。

まさにこの世の地獄を体現したかのような闇の世界に、

「とんでもないことをしてくれたのう」

鮮烈な光が差し込んだ。

「シロニヤ……」

その姿を目にして、鋼の存在は安定した。

それは、存在の分解が停止したという意味ではない。

いまだに鋼を苦しめる存在の分解という現象は絶え間なく続いている。

しかし、それを受けてなお、無視できない存在感がシロニヤにはあった。

いや、それでも無視できないほどの関係性が、彼とシロニヤの間についての間にか形作られていた。

「とんでもないことって、なんだよ」

間断なく続く恐怖と痛みに耐えながら、鋼は強がった口調で白い少女に問う。

「分からののか？」

静かな怒りを秘めたようなおごそかな声で、シロニヤは問い返した。

鋼の頭にひらめく、一つの可能性。

「まさか、僕が力を使わせすぎたせいで、因果律が……？」

「いや、それは大丈夫じゃ。それは神が直接力を使った場合。

今回の場合は人間のおぬしが自分で抜け道を見つけて力を獲得しただけじゃから問題ないじゃろ。

それでもあの時事態に気付いたワシが黙認したなら『神の過剰な手助け』扱いされていた可能性もあったんじゃが……。

実際にはワシは妨害したワケじゃから、やっぱり人間自身の努力という扱いで因果律は働かないはずじゃ」

「じゃあ、何が問題なんだ？」

「なに、簡単な、ごく単純な話じゃよ」

沈痛な、どこか自虐的とも取れる態度で、シロニヤはとうとう真相を打ち明ける。

「あんなバグがあつたつてバレたら、ワシは母様にお尻ペンペンされるのじゃあ…！」

「そんな理由かっ…！！！」

鋼はシリアスにしていた自分が一気にバカらしくなった。

しかし、それで収まらないのがシロニヤだ。

「そんな理由、で片づく話じゃないのじゃよ！　ワシはもう三歳なのに、母様はパンツまでおろして尻をたたくのじゃぞ！」

神としての基本的な尊厳まで奪われるあの屈辱と、でもちよつと気持ちよくなつてしまう感じ、おぬしに想像できるかの？！」

「したくもないわ！」

アブノーマルな告白ならよそでやるか、せめて転生中じゃない時にしてほしいと鋼は痛切に思った。

「ワシのお尻に紅葉ができちゃつたらおぬしのせいじゃぞ！　そうなつたら写メ撮つて見せに行くからの！」

「来なくていい！」

こんなバカなやりとりをしている間にも鋼の体は粒子になって絶賛消滅中なのだ。付き合っていていられないにもほどがある。

神様僕は何か悪いことをしましたかと祈りそうになって、鋼は自分の目の前にいるのが神様だったことに気付いてあわててやめた。

「それより、今僕はどうなってるんだよ！　なんか消えてるんだけど！」

生きながら存在を分解される恐怖なんてものは、体験しないと分かるものではない。

鋼は必死の形相でシロニヤに問いかける。

「そりゃそうじゃろう。おぬしはこれから赤子となって、別の世界で生を受けるのじゃ。」

じゃからこれまでの姿を捨て、新たな器を作る必要がある。当たり前の話じゃろ」

「当たり前つて、こんな……。誰かさんのせいで、心の準備もできなかったのに……！」

これで、今まで十七年近く生きてきた『結城 鋼』という存在が死ぬ、消えるというのに、それを平然と見守るシロニヤに思わず恨み言が漏れた。

だが、他のことはともかく、強制的に転生を開始してしまったことには責任を感じたのか、シロニヤはわずかながら譲歩した。

「う、うむ。仕方ないのう。ならばワシから餞別じゃ。」

ワシのとつておきを一つ追加で習得させてやるのじゃ」

シロニヤが手をかざすと、鋼の体に何かが入り込んできた。

同時に、頭の中に直接響く、メッセージ。

鋼はタレント『瞬間記憶復元』 思い出せそうで思い出せない芸

能人の名前や昔の歌の歌詞などを瞬時に思い出すことができる を
手に入れた！

「いらねえええええええええええええええええええええええ！」

それが鋼の、『結城 鋼』としての最後の、そして最期の言葉になった。



「あ、れ？ 僕は……」

鋼が次に目を覚ました時、そこはもう、何も無い世界でも闇の世界でもなかった。

「緑の、においがする」

辺りを見回す。鋼は木々に囲まれた野原のような場所にいた。

日本で似た光景を探すとすると、森林公園だろうか。

しかし、これだけではここが元の世界なのか、異世界なのかを断定することはできなかった。

「そうだ！ たしかシロニヤは転生すれば赤ん坊になるって……」
いそいで鋼は自分の姿を見下ろしてみた。

その時に鋼の、その両の眼に映ったもの、それは……

「な？ え？ どういうこと？」

大きさ的にはとても赤ん坊とは言い難いものの、生まれたままの自分の姿、つまり、

全裸になった自分の体だった。

第六章 神の言葉、人間の言葉

「これは、一体何が起こったんだ？」

木々に囲まれた野原で一人、鋼は混乱していた。

混乱の元は、一番見慣れているはずの自分の体だ。

しかしよく見ると生前(?)の自分の体よりもう少し小さいような気がするし、何より全裸だ。

状況がまったく分からない。

だが、ただ一つ、分かることもある。

それは、この事態がおそらく、ある一人の能天気な神様によって引き起こされたのだろうということ。

鋼は、その鬱憤全てを込めて、空へと咆哮を上げた。

「くっそお！ シロニヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

【なんじゃよ、もー。そんなに大声出さなくても聞こえるのじゃ】

「え？ え？ シロニヤ？ 何で？」

返事を期待しての言葉ではなかった。なのに突然頭の中におなじみの猫神の声が聞こえてきて、鋼は大いに狼狽した。

【大方、おぬしが転生前の最後の二秒間に『神託』のタレントでも取得しとったんじゃろ。

『神託』のタレントで習得できるスキル『オラクル』を使えば、面識のある神様と通信できるので】

「スキル、ってゲームで言う技みたいなのか？ でも僕は、別にそんな特別なことなんて何もしなかったけど」

【『オラクル』は通信したい神を思い浮かべて呼びかけるだけで発動するのじゃ。

まったく、人と話すのなんて面倒じゃから、必要ボーナスポイントを多めに設定したのに。

なんでこんなもの取得するんじゃ……】

シロニヤはさっそく不良神様ぶりを発揮して毒を吐き始めるが、今の鋼にそんなものに構っている余裕はなかった。

「そ、そんなことより！ いきなり転生前と同じくらいの年でスタートしてるんだけど！ あと全裸なんだけど！」

【ああ。そういうことならアレじゃ、たぶん、タレント『少年期編スキップ』を取得しとったんじゃな】

「『少年期編スキップ』？」

【ほら、よくゲームとかであるじゃろ？ 子供の頃はチュートリアルばかりじゃから、二週目からは飛ばせる機能。

ワシも二度もパ〇スが死ぬところなんて見とっないなあと思ったもんじゃし】

「いやいや！ ゲームなら分かるけど、そんなの現実に実装するなよ！」

じゃ、じゃあ何？ 僕の子供時代はそんな軽いノリで省略されちゃったワケなのか？」

【たぶん、そうじゃのう】

「いや、もうそれタレントとかの域を超えてるから！ あと全裸なんだけど……！」

鋼はあまりの事態に頭がくらくらしてきたが、とりあえずショックを受けるのを後回しにして、現状の把握に努める。

というか、子供時代がどうとかより、正直今だけはとにかく全裸を何とかしたかった。

【全裸……そうじゃな。少年期編をスキップした場合、装備は年相

応のものが支給されるはずじゃから、全裸の原因は『少年期編スキップ』ではないの】

「他に何か心当たりはないのか？」

【ふむ。そうじゃな。……おお、そうだ！ 過去に似たような事例があったのを思い出したのじゃ！】

「おおお！」

【コウよ。もしやおぬしがいる場所、公園なのではないか？】

「公園？ 言われてみれば、たしかにそんな感じかも」

【なるほど、なるほど】

過去の事例とやらに合致したのか、鋼の頭の中でシロニヤがしきりにうなずく気配がした。

【それと、何だか頭が痛かったりはせんか？】

「頭痛、はないけど？」

【うむ？ では、近くに空の瓶は転がってらんか？】

「？ いや」

【あと、おぬしの新しい名前は草薙つよ……】

「酔って脱いだとかじゃないからな？！」

三年前に生まれたはずなのにアイドルのスキャンダルとか詳しいのかこの神は。

この非常事態にボケを挟み込んでくる神経の太さに、鋼はあきれ果てた。

【なんじゃ、違うのか……】

声はなぜか残念そうだ。

「真面目に考えてくれよ！ 僕の異世界ライフが変質者からのスタートになったらシロニヤのせいだぞ！」

【ううむ。しかしのう。全裸になるアビリティなんてワシも設定しておらんのじゃ。本当に服はないんじゃろうな？】

「当たり前で……あれ？」

実際に体に触ろうとしてみて、鋼は服は見えないが、感触だけは感じられることに気付いた。

「もしかして、見えないだけで服はあるのかも」

【やはりか！ それなら分かるぞ。ならばアレじゃな！ アレ！

そうじゃ、『初期装備透明化』！】

「何であんたはそういう余計な能力ばかり作るんだよ！」

【いや、じゃって選んだのはおぬしじゃし】

「くう、この、ホントに、あんたって人はあああ！」

【人じゃないもん。神じゃもん】

「くううううう！」

この大人げない三歳児に何か痛烈な一言を浴びせ倒してやりたかったが、そんな時間はない。

今は周りに人影はないが、こつやってくだらない言い争いをしている間にも誰かがやってくる可能性はどんどん上がっているのだ。

「ふー。まあ、今はその話はいいや。それよりこれ、どうすればいい？」

【え？ ふつーに誰かに頼んで服借りればいいじゃろ？】

「あのね！ いくら何でもこの格好で人前に出れるワケないだろ！」

【そうか？ んー。最後の手段は、あるにはあるんじゃないか？】

「それは、どんな？」

【ある意味定番の方法じゃよ。まず、大きめの木を見つけてじゃな。その近くに落ちてている葉っぱを……】

「あ、オチ見えたからもういいや」

【葉っぱを拾って、股間に……】

「だからもういいって」

【通称『忍法木の葉かく……】

「いいからだまれええええええええええええええええええええええええ！」

鋼の大声に、耳がキーンとなった神様は、しばらく黙った。

【なんじゃよもお。せつかくのアドバイスじゃったのに……】

「頼むから司法当局ににらまれないタイプの解決法を教えてくださいよ」

【むう。仕方ないのう。もしかすると、こういう時に使えるタレントを習得しとるかもしれん。それを試してみるか？】

「あるなら最初からそういうのにしといてくれよ！」

鋼は半泣きで懇願したが、シロニヤがこのくらいで方針を変えないのはもう鋼にも分かっていた。

とりあえず見た目全裸を回避するため、シロニヤの指示に従うことを泣く泣く決意する。

【よし。ではまずは『配色変更！』と大声で叫んでみるのじゃ】

「は、配色変更……！！！」

無人の野原に鋼の音が響く。

コウは おたけびを あげた。

しかし なにも おこらなかつた

「何も起こらないじゃないか！」

しかも結構はずかしかつた。鋼の顔は少し赤くなっていた。

【うむ。『衣装配色変更』のタレントは所持しとらんようじゃの。

なら次は『燃える俺のコスモ！』と言ってくれるかの？】

「……………も、もえろおれのこすも」

鋼が小声でそう口にした次の瞬間、鋼の服が突然光を放ち、黄金色に輝いた。

【おおお！ おぬしは『黄金聖闘士化』のタレントを取得しとったようじゃの】

「黄金聖闘士って？」

【う、うむ。ペガサスとか、ドラゴンとかのかっこいい金ぴかの闘士のことじゃ】

「いや、それだけじゃ意味分からないんだけど」

【う、正直言うとワシもテレビCMでしか見たことないので、よく分からのじゃ。」

でもとにかく、『黄金聖闘士化』をすると装備が全部金ぴかになるので、全裸を免れるはずじゃ!】

「それ以外の効果は?」

【特はない! でもかつこいいじゃろ?】

「……まあ、全裸じゃなきゃどうでもいいけどさ」

鋼はだんだんと、あきらめの境地に達しようとしていた。

「あ、人だ!」

大声で叫んだり、金ぴかになったりしていたせいか、森の奥からこの世界の住人とおぼしき人間が向かってきていた。

「あの長い耳、エル、フ?」

こちらに小走りやってくるのは、ファンタジー世界の魔法使いが着るようなローブを身に着けた細身の男性。

しかも、地球の人間ではありえないほどに耳が尖っている。

【おお。そういえば転生前に言い忘れとったが、そちらの世界にはたくさんのおお人がおるぞ。

定番のエルフにドワーフ、ホビット、あとはちびのハーFRINGGや、トカゲ人間のドラコニアンなんかもおるの。

亜人の中ではエルフなんか比較的よく見る方じゃ】

ほんの数時間前の鋼だったら信じられないようなシロニヤの台詞も、さすがに実物を目の前にしては説得力が違った。

「こ、こんにちは! 今日はいいい天気ですね!」

初めての異種族間交流。せいぜい愛想よくしようと、鋼は元気よくあいさつをしたのだが、

「 f w f ; a a m p w a z v . @ g k j v a w i e ? 」

言葉が通じない！

相手が何を言っているのか鋼にはさっぱり分からなかったし、相手も鋼が何を言っているのか全く分かっていないようだった。

「これは、よくないんじゃないか……」

言葉が通じないなどと考えるにはいなかったもので、あまり深く考えはしなかったが、誰もいない場所で大声で叫び倒している見慣れない金ぴかの男。

これって結構怪しい感じじゃないだろうか。

「 w j a w f j ; d i e b o h z ; g i j r a j o ? 」

エルフの男性がふたたび話しかけてくるが、やっぱり何を言っているのか分からない。

見た感じでは急に警察に突き出されるような雰囲気でもないが、言葉が通じなければ事態の打開を図りようもない。

エルフの男性の方も、言葉が通じないことは分かったようだが、どう対応していいか分からず困惑しているようだった。

お互いに手詰まりになった、その時、

クウウウウウウ。

鋼のお腹が、心細げな音を出した。

転生したてというのは、どうやらお腹が減るらしい。

しかしそれは、どんな言葉よりも雄弁に鋼の状況を伝えてくれたようだ。

心もち難しい顔をしていたエルフの男性も、これには破顔一笑、
ついてこいとばかりに前に立って歩き出した。

もしかすると、人里に出れば鋼の言葉が分かる人にも出会えるかもしれない。

鋼は嬉々としてエルフの後をついていくのだった。

鋼がエルフの男に連れて来られた場所は、石造りの建物が並ぶ街だった。

海外旅行の経験はないからよく分からないが、ヨーロッパの古い町並みはもしかしたらこんな風なのかもしれない、と思わせるような光景だ。

同時にそれは、この街がよくゲームに出てくる街そのものだというので、街の人に突然「ハマジリの町にようこそ！」とか声をかけられても鋼は大して驚かなかつただろう。

とはいえ実際には街には多くの人がいたが、彼らが話しているのはやはり鋼にとっては異国語で、何を言っているのかさっぱり分からない。

当然だが、この街に日本語を話せる人間はいないようで、鋼を大変がっかりさせた。

【普通は転生しても赤ん坊からのスタートじゃからの。子供の内に言葉なんぞ自然に覚えるんじゃないが】

まだオラクルでつながっていたのか、聞かれてもいないのにシロニヤがそう補足する。

そんなことを言われても、鋼には今さらどうしようもなかった。

「というか、まだいたんだ、シロニヤ」

【うむ。今、ゲームは連コン放置してレベル上げしとるからのう。暇なのじゃ】

「あんだ、本当に神様なんだよなあ？」

ちなみに連コンとは連射機能付きコントローラーの略であり、その機能を使って自動でレベル上げやアイテム集めをすることを、連コン放置と言ったりする。

【失礼な奴じゃな！ じゃからこうやってゲームの合間に仕事してるじゃないか！】

「せめて仕事の合間にゲームしろよ！」

【あ、それよりワシの360連射コントローラー知らんかの？ 見当たらなくなっちゃったんじゃが】

「それよりじゃないし、そんなの知らないよ！」

などと頭の中で雑談をしながら、エルフの男性に連れられて街を歩いていると、

「光よ！」

唐突に、鋼にも理解できる言葉が耳に飛び込んできた。

あわてて声の主を探すと、道路の反対側を歩いている、地球で言うシスターのような恰好をした女の人を発見した。何か特別な道具なのか、鋼が現代日本では見たことがないような、ぼんやり光る球のようなものを手にしている。

彼女がどこかに歩き去ってしまう前に、鋼はいそいで駆け寄って声をかける。

「あ、あの！ 僕の言葉が分かりますか？ 今、たしか『光よ』って言っていましたよね？」

そう呼びかけながら、驚くべきことに、自分が今、日本語以外の言語をしゃべっていることを自覚した。

もしかすると今自分が話しているのがこの女の人の母国語だろうか。

鋼はそんな風にも期待したのだが、

「w j o a w a o a w - t j 4 b a k f k e p p q」

次にシスターの口から漏れたのは、エルフの男性と同じ言葉のようだった。

ただ、それが伝わらないと分かると、一度考え込むように首をかしげ、身振り手振りで鋼に何かを伝え始めた。
どうやら、ついて来いと言っているらしい。

状況はよく分からないが、もしかするとこれで言葉が通じる人に出会えるかもしれない。

鋼がシスターに声をかけにいつてからぼかんとしていた男に丁寧にお辞儀をし、シスターについていくことにする。

エルフの男性は、神経質そうな外見とは裏腹に、気さくに手を振って鋼を送り出してくれた。

案内人を変え、鋼の異世界探訪は続く。

第七章 呪いに打ち勝つもの

シスターらしき人の正体は、やはりシスターだったのか。

鋼が連れて来られた場所は、街の外れに静かにたたずむ教会だった。

身振りで鋼にその場で待つように伝えたと、勝手知った様子でシスター（？）は教会に入っけいき、すぐに誰かを連れて出てきた。

（また、シスター？）

出てきたのは、やはり修道服に身を包んだ女性だった。

ただし、今度の女性はある意味エルフ以上に異世界に來たことを実感させる、目の覚めるような青い髪を持つ美女である。

背は今の鋼より少し低いくらい。年は二十歳くらいだろうか。最初は髪の色にばかり目が行ってしまったが、よく見ると顔立ちも相次に整っている。

何しろその美女っぷりは、やぼったいはずの修道服も彼女が着ているだけで神に祝福された神聖な衣服のように見えてくるほどで、鋼も彼女を目にして数瞬、呼吸を忘れた。

さらによく見ると、服こそは最初のシスターと大差ないが、もしかすると高位の神官なのか、右手には青いクリスタルのついたロツドを手をしている。

そんな様子でしばらく、鋼は彼女に見とれていたのだが、新しくやってきたシスターが鋼を認めたのに気付き、表情を改める。

彼女は優雅な仕種で鋼に歩み寄ってくると、

「ワタシノ コトバ ワカリマスカ？」

この世界の住人で初めて、鋼に理解できる言葉を、はつきりと投げかけてきたのだった。

結局美人のシスターの指示で、鋼は教会に招き入れられた。

中には他の人の姿はなく、内密の話をするのにも都合がよさそう
だ。

鋼は色々と聞きたいことがあったが、とりあえず当たり障りのなさそうな所から切り出した。

「今、僕らが話している言葉は、一体どこの国の言葉なんですか？」
「ハルカムカシノ マハウブンメイジダイノ コトバデス。イマハ
シンセイマホウヲ ツカウドキダケ ツカイマス」

「……………」

あまり当たり障りのない感じでもなかったようだ。

そもそも冷静に考えれば自分の使っている言葉がよく分からない
というのはかなりおかししいし。

ともあれ、どうやら自分がはるか昔に滅んだ国の言語を使ってい
ると聞いて、鋼は真っ先にシロニヤを疑った。

【ん。そういえば、『古代魔法言語習得』のタレントを、2000
ポイントくらいで作ったような気はするの】

犯人はあっさり自白した。

しかし、今回に限っては鋼はシロニヤに怒ってはいなかった。

もしシロニヤがこのタレントを設定していなければ、鋼はまだ言
葉の通じる人を求めて街をさまよっていただろう。

むしろ鋼はシロニヤに感謝すらしていた。

(それにしても、神聖魔法、って言ってたっけ。やっぱりこの世界
には魔法ってあるんだな……………)

また、鋼にとってもさっきの質問は別の意味で衝撃だったのだ。街で見かけた最初のシスターが古代魔法言語で「光よ！」と言っていたのを思い出す。あれも、もしかすると魔法だったのだろうか。だとすると、彼女が手に持っていた光の球は魔法で作ったものだったのかもしれない。

鋼に残っていた少年らしい心が、魔法という未知の物への興味で満たされていく。

そんな鋼の様子をどう思ったのか。

「ソウダ スコシマツテイテ クダサイ」

突然シスターはそう言って、奥から何かを持って来た。

それはむき出しの、ちいさな革のベルトらしきものだった。

鋼に差し出してくる。思わず受け取る鋼。

「重っ！」

何か魔法でもかかっているのか、ベルトを渡された鋼は見た目の材質に見合わないその重量感に驚いた。

しかし、

「どうですか？ このリングには、翻訳の魔法がかかっているはずなのですが、きちんと通じていますか？」

「き、聞こえます。はっきり」

「それはよかったです。私の方もきちんと聞こえていますよ。」

翻訳されるのは大陸共通語だけですが、これを着けているだけで話せるようになります」

言葉が通じるようになったところで、改めて自己紹介。

美人のシスターはミスレイと鋼に名乗った。

「ハガネ様、いえ、コウ様とお呼びした方がよいのでしたっけ？」

装備が全て金色なんて、素晴らしいセンスですね。むしろギル様とお呼びしても？」

「は、はあ。遠慮しておきます」

呆気にとられながらも断ることは断る鋼。

ギル様ってなんだろう、と思わなくもなかったが、話すと長くなる上に面倒な上に実りが無い予感がしたので、鋼はスルーした。

鋼のスルーアビリティは既にレベル10だ。

「それにしても、本当に金ぴかで……」

なんて言いながら、鋼の服を見ていたミスレイが、不意に表情を変えた。

急に鋼にその整った顔を寄せてくる。

「え、ちょっとミスレイさん？」

「少し、待ってください。これは……金色になっていて分かりませんでした、やはり聖王の法衣」

ミスレイは金色に輝く鋼の服に目を見開いた。

その言い方だと金色に輝く鋼鉄の服を着ているみたいだが、もちろんそんなことはない。

「知ってるんですか？」

「ええ。最高レベルの法衣で、これを身に着けているだけであらゆる呪いを防ぐとか防がないとか」

「どっちなんですか？」

「防ぎます」

呪いなんてものに出くわしたことはないが、それは非常に便利そうだ。

「ほかに、効果は？」

「さすがにそこまでは……。でも」

「でも？」

「このゴワゴワしたさわり心地が癖になりそうです」

「もういいです。ありがとございました」

なんだろう。この世界の住人はオチをつけないと会話が終われない呪いとかかかっているんだろうか。

聖王の法衣でも貸した方がいいんだろうか、と鋼は一瞬本気で迷った。

「まあ、それよりもですね」

迷っている間、ミスレイは聖王の法衣のゴワゴワした感じを楽しみ続けていてやめる気配がないので、鋼は多少むりやりにでも話を打ち切った。

ミスレイは残念そうな顔で鋼から離れる。

「その、本当にこんな便利なもの。頂いていいんですか？」

「ええ。教会はいつでも困っている人の味方ですから」

こんな便利な翻訳魔法がかかったチョーカーを、ミスレイはただで鋼に譲ってくれるという。

鋼には、彼女の笑顔が輝いて見えた。

「それにどうせコレ、魔物用ですし」

「……え？」

ミスレイはやっぱり笑っている。

でも、鋼にはその笑顔は、さっきほど輝いては見えなかった。

しかしすぐに、ミスレイは自らの言葉を訂正した。

「冗談ですよ」

「で、ですよねー」

「本当は犬猫用です」

「……………」

「冗談ですよ？」

ミスレイは笑ってそう言ったが、残念ながら目がマジすぎた。

とりあえず試着。

やっぱりかなりの重量があるようでつけるのは若干苦労したが、

きちんと鋼の首に収まった。

「こんな感じ、でいいんでしょうか？」

実際首につけてみて、これチョーカーじゃなくてただの首輪じゃなかるうかと鋼は思ったが、すぐにそんなはずはないと疑念を打ち消した。

ちなみに、鋼がきちんと首にはめた瞬間、その首……チョーカーまでもが金色に輝いたのは言うまでもない。

「すごい！ 似合ってますよ！ 金色だし！」

「そ、そうですね。ありがとうございます！」

この人金色だったら何でもいいんじゃないかという疑惑は浮かんだが、お世辞でも美人に褒めてもらえるとうれしいものだ。

鋼は自然と笑顔になった。

「いえ、私も良かったです。ポチの首には合わなかったから……」

「え？ ポチ？」

鋼の笑顔が曇る。

「いやですね。弟ですよ」

「で、ですよねー」

「もしくは弟みたいなケルベロスです」

「……………」

「冗談ですよ？」

残念ながらやっぱり目がマジだった。

色々と釈然としないものを残しながら、鋼はやはり首……チョーカーは貰い受けることにした。

「その首……ではなかったチョーカーに込められた魔力は強力なので、着けている限り何年でも使えますよ」

「あはは。じゃあ、もうコレ、外せませんね」

「うふふ。それは心配しなくても大丈夫ですよ」

「そうなんですか？」

「はい！ どっちみち呪われてるからもう一生外せませんもの」

「……え？」

やはり笑顔のミスレイ。

虫も殺さないようなその善良そのものの笑顔が、なぜか鋼には恐ろしく見えた。

奇妙な緊張状態を破ったのは、ミスレイの方だった。

すごみのある笑みを崩して、朗らかに笑う。

「いやですね、冗談ですよ。ずっと外せないなんてこと、あるはずないでしょう？」

「で、ですよー」

「ええ。外したくなったらおっしゃってください。格安で解呪をお引き受けしますから」

「……えっと。それも冗談、ですよ？」

今度はミスレイも笑わず、ただそっと目を伏せた。

鋼は泣きそうになった。

「あ、あの。本当に、外せないんですか？」

あきらめきれずに言った鋼の言葉に、ミスレイはやはり無言。

ただ、何も言わずに鋼の首に手を伸ばした。

「あ、あのっ」

美人の繊手が自分の首の辺りをまさぐる気配に、鋼の声が裏返る。それでもミスレイは何も言わず、ただ慈しむような目で鋼を見て、

黙って鋼の首輪……もといチョーカーの留め金に手をかける。すると、

「あら？」

チョーカーは、あっさりと外れた。

自分の手の中で茶色に戻ったチョーカーを見て、ミスレイは蕩け

るような笑みを見せると、鋼の手にそつと握らせる。

最初に渡された時と同じ、軽そうに見えてずしつと来るその感触に、鋼はやっと息をつくことができた。

「な、何だ。外れるじゃないですか。びっくりさせないでくださいよ」

鋼がようやくひきつった笑みを見せると、ミスレイも満開の笑みを見せて、言った。

「私もびっくりしました。聖王の法衣って、本当に効果があるんですね」

「……………」

もうこの人だけは絶対に信用しないようにしよう。そう固く誓う鋼だった。

第八章 最強のチート武器！！

(しかし、これからどうしたものか)
これで鋼の目下最大の悩みだった言葉の壁は何とかすることができた。

だが考えてみれば鋼は今、住む場所も仕事もお金も知り合いもこの世界の知識も何もないままでこの場所に放り出されている状態なのである。

このままでは最悪、野垂れ死にだ。
恥をしのんで、ここはミスレイさんにこの世界でのお金の稼ぎ方を聞いて、と鋼は真剣に悩んでいた。

「ずっと気になっていたのですが、その金色の腕輪。もしかしてコウ様のアイテムボックスですか？」

「え？」

だから、ミスレイのその言葉に反応が遅れた。

ミスレイの視線は、まっすぐ鋼の左手首に注がれていた。そういえば、たしかに腕輪がある。

「アイテムボックス？」

「間違っていましたか？ 物を収納できる装飾品です。冒険者の方々がよくつけていらっしやるので。」

もちろん、私の知る限り金色のアイテムボックスはありませんでしたが……」

「ああ、いえ。それってどうやって……」

と使い方を聞くこととして、自分の持ち物の使い方を知らないというのは不審だともうやく思い至った。

こんな時に鋼が取る手段は一つである。

「ちょっとすみません」

とミスレイに断って後ろを向き、小声で呼びかける。

「シロニヤ。まだ見てるか？」

返事はすぐにあつた。

【見とるよ。おぬしはそういうおっとり巨乳お姉さんタイプが好みなんじゃな。よく分かったのじゃ】

「おっとり巨乳？」

言葉とイメージが合致しなくて、なんとなく、視線を戻してしまふ。

よく見てみると、やぼったい修道服に隠れて目立ってはいないものの、ミスレイの胸はそれなりにふくらんでいるようにも見える。

「？ 何か？」

「っと、すみません」

ミスレイに不思議そうな顔をされ、自分が胸を凝視してしまっていたことに気付いて、すぐに後ろを向く。

【ほれ見ろ！ これ見ろ！ そうれ見ろ！ おぬしはやっぱりエロエロなんじゃ！ むっつりなんじゃ！

やーいこのエロエロ魔神ー！ 色欲の権化ー！ むっつり大魔王ー！】

後ろを向き終わると、ここぞとばかりにシロニヤが責め立ててきた。

「いきなりそのテンションはなんなんだよ」

何かいいことでもあったのかい、とか言ってやりたいが、下手なことを言うとは爆発しそうだった。

【べーつにワシはいいのじゃよ。ワシがせっかく選んだ徳の高い人間であるはずのおぬしが巨乳にデレデレしとっても全く気にしないのじゃ。

ワシには何も反応しなかつたくせに、その巨乳にちょっと近付

かれただけでドキドキしとったって関係ないのじゃよ！】

「ええとつまり……………ひがんでる？」

【ひがんどらんわ！ ボケエー！！】

「うわっ」

かなり本気の怒鳴り声が入ってきた。シロニヤが耳がキーンとする、と言った気持ちも分かった気がした。

「ま、まあいいや。そんなことより、アイテムボックスの使い方を……………」

【そ、ん、な、こ、と、よ、り、じ、ゃとおおおー！！】

「いや、だつて冤罪だしさ」

近付かれた時にドキツとしたのはたしかだが、巨乳だなんてこともシロニヤに言われて意識したくらいであるし、現状鋼としては、状況がシビアすぎてそんなことを考える余裕なんてない、というのが正直な所である。

【むづう……………】

シロニヤはしばらく葛藤するように黙り込んでいた。鋼はゆっくりと待つ。

しばらくして、今度は少し落ち着いた様子で、シロニヤがふたたび呼びかけてきた。

【……………じゃ、じゃったら、そのおっとり巨乳女より、ワシの方が魅力的だと言えば教えてやるのじゃ】

「何だよ、いきなり」

【じゃから、ワシの方がその女より魅力的じゃろ？】

「あーはいはい。そうだね」

【も、もつときちんと言つのじゃー！】

「ミスレイさんよりシロニヤの方がかわいいよ」

さすがに魅力的だという言葉は鋼も気が咎めるので、嘘にならない範囲でそう答える。

だが、それはシロニヤにはいたく好評だったようだ。

【そ、そうか？ そんなに正直に言われると照れるのう】

「うん。かわいいかわいい」

【む、胸がなくても？】

「胸がなくても」

【失敬な！ ワシにだって胸くらいあるのじゃ！】

言わせたくせに、急にキレ出すシロニヤ。

「どうしろって言うんだ、これ……」

鋼は途方に暮れた。

だが幸いにも、それですっかり機嫌を直したシロニヤは、アイテムボックスの使い方を快く教えてくれた。

【腕輪に触れて、中に何が入っているか知りたいと念じるだけでいいのじゃ。

そうすれば、中に入っているアイテムの一覧が見れる。……まあぶっちゃけ、脳内にアイテムウィンドウが開く。

そこから欲しいアイテムを選べば、すぐにおぬしの前にそのアイテムが具現化するのじゃ】

「しまう時は？」

【入りたいアイテムと腕輪に触れながら、収納したいと念じればいいのじゃ。簡単じゃろ？】

「なるほどね」

念じるだけで起動するというのは実に便利だと鋼は思った。

ファンタジー世界のご多分に漏れず、この世界も文明レベルは中世程度に見えるが、魔法のおかげで一部は現代日本よりも進んでいるかもしれない。

【ワシの設定したタレントにも初期アイテムが増えるようなものはいくつかあったからの。

たとえばタレント『お金持ち』じゃったら初期アイテムに『金の延べ棒』が一本追加されるはずじゃ】

「金の延べ棒……」

鋼はぐくりとつばを飲んだ。今の鋼にとっては魅惑の響きである。【まあ『初心者用冒険者キット所持』辺りじゃと薬草と毒消し草十個ずつとかそういう可能性もあるがの。

じゃがあるいは、もしかするとチートクラスの最強アイテムとか入っとるかもしれんぞ?】

「チートクラスのアイテム、か」

タレントの効果で生まれてからの十数年をスキップさせられた鋼には、神様の設定したタレントのとんでもなさには身に染みて分かっている。

あるいは本当に、『最強剣何とかセイバー』とかが入っていて、中盤くらいの敵まで簡単に倒せるようになる、なんてこともあながちありえなくはない。

「そっか。まあ、試してみるよ」

まさかそんな都合のいいことがあるはずない、と思う一方で、心の奥ではやっぱり期待してしまうのが人間というものだ。

高鳴る胸を抑えながら、腕輪に右手を添え、中に入っているものが知りたい、と念じる。

初めてのことでコツがよく分からなかったが、ぼんやりとゲームのアイテムウインドウのようなものが脳内に現れてくる。

まだぼんやりしているが、パツと見る限り、そこには一種類しかアイテムが入っていないようだった。

どんなアイテムが入っているのかと、鋼はさらに目を凝らす。アイテム名が、はつきりと見えてくる。

ちきゅうはかいばくだん：999個

それを目にした途端、鋼は急に気が遠くなって、その場でふらつとよろめいた。

よろめいた鋼に驚いて、あわててミスレイが駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫ですか、コウ様！」

「す、すみません。でも、大丈夫です。ちょっと驚いただけで」

「でも、大丈夫という顔色ではありません。顔、金色ですよ？」

「それは単なる照り返しです！」

などとミスレイの軽いボケに対応しながらも、鋼の頭はぐつぐつと煮立っていた。

「ありえない。『ちきゅうはかいばくだん』とか、あいつホントにありえない！」

ちなみにこれが本当に鋼の知る『ちきゅうはかいばくだん』であるとするれば、それはあの国民的青狸の持ち物であるからして、フアンタジーというよりSF（サイエンスフィクション）の領分である。

ミスレイが近くにいることも忘れ、鋼は大声でシロニヤを呼んだ。
「シロニヤ！ ちょっと出てこい！」

【じゃから、大声出さなくても聞こえるのじゃよ。何かアイテムは

あつたのかの？】

「あつたはあつたけど。なんか、見るからに地球を壊しそうなものが入ってるんだけど？」

【ああ、アレか。いや、心配せんでも。アレは『ちきゅうはかいばくだん』とは名ばかりの単なるジョークアイテムじゃよ。中身はほれ、アレじゃよ】

「アレ？」

【ただの核爆弾じゃ】

「あほお おおお おおお おおおお！！！！」

鋼は思わず全力で叫んでいた。

いきなり叫び出した鋼に驚いて、後ろでミスレイがビクツとしていたが、当然気付かない。

【ちょ、おま、なんなのじゃ。なんなのじゃよ。

オラクルとはいえ、あんまり大声を出されるとワシはびっくりしてしまふのじゃ】

「びっくりしたのはこっちだよ！　なんで核爆弾がしれつと初期アイテムの中に入ってるんだよ！

しかも999個って何だよ999個って！　僕に人類でも滅ぼせていうのかよ！」

【そ、そんなのは知らんのじゃ。たぶん所持アイテムにボーナスが出るタイプのタレントの効果じゃる。

おそらく……タレント名『ねずみ退治キット所持』じゃ】
「明らかにオーバーキルじゃないか！」

むしろ一個で種そのものを根絶できそつだ。

【むうう。そんなの選んだのはそつちじゃし、それに核とはいえ核融合の方じゃから比較的クリーンで威力も高いのじゃよ？】

「威力が高いのが問題なんだよ。これ、一体どのくらいの破壊力な

んだ？ 地球壊しちゃうのか？」

【じゃから、それに星を壊すほどの力はないのじゃ。せいぜい大陸が吹き飛ぶ程度なのじゃ！】

「十分以上に危険物だよ！！」

【なんじゃよー。それじゃっておぬしが欲しがってたチートクラスのアイテムじゃろ？

むしろアレじゃ。ワシが設定したアイテムの中でも最強じゃぞコレ】

「あんまり最強すぎて、こんなの危なくて使えないんだよ！」

たしかに威力だけを考えたらチート級。

いや、凡百のチートアイテムなど寄せ付けないほどの力を持っているし、もしかするとこの世界に存在する兵器の中でも最強かもしれない。

だが、強力すぎて敵を倒すのに使おうとしても味方まで全滅させそうだし、何よりも、使った瞬間鋼は真っ先に蒸発させられているだろう。

おまけに物騒すぎて売ったり譲ったりということも下手にできない。

チートすぎるが故に、何の使い道も思いつかなかった。

しかし、そんな鋼の態度がシロニヤの癪に障ったらしい。

【ふん！ なんなんじゃよさつきから！ ワシが親切に色々教えてやっとするのにおぬしは怒ってばっかりじゃ！

ワシはもう何も教えてやらのじゃ！ 後から大変なことが起こって泣きついて来ても知らんのじゃからな！】

なんて言葉を最後に、シロニヤとの通信が途絶える。

「……少し、きつく言いすぎたか？」

もう一度オラクルを使って謝るか、とも思ったが、むしろもう少

し時間をおいた方がいいだろう。

そう判断して鋼はミスレイとの会話に戻ろうとしたのだが……。

「すみませんミスレイさん。ちょっとトラブルが……あ、あれ？

ミスレイさん。さっきより何だか距離が……」

ミスレイの方を振り向くと、さっきまで近くにいたはずのミスレイが、ずいぶんと遠くに立っていた。

「い、いえ。そんな気のせいですよ。さっきと同じですよ？」

「いや、気のせいってこともないでしょ。そんなに離れてると、話しくいですし」

数歩分空いてしまった距離を詰めようと鋼が一步進むと、ミスレイは一步下がった。

「いえいえ、お構いなく。大丈夫です」

「いや、大丈夫とか大丈夫じゃないとか、そういう問題では……」

「大丈夫です。ですからそこで止まってくれますか？ いや本当にもう、ほんと大丈夫ですから！」

「ですから大丈夫とか大丈夫じゃないとかそういう問題じゃなくて……」

「大丈夫です神は全ての人間を平等に愛してくれるので」

「だけどさっきまでと今のミスレイさんの態度を考えるとちょっと平等とは言えない感じになっているような気が……」

「私神様じゃないですし神様だって結局は我々信徒ばかりを依怙鼻負してますし！」

「いやちよつとそういうカミングアウトいいですから、っていうか逃げないでくださいよ！」

「私逃げてないですし全然逃げてないですしいやー助けて犯されるー！！」

「ちよつ！ 誤解ですって！ 話を聞いてください！」

「誤解なんてしてません分かってますそのゴワゴワした感触も金ぴ

かの服も初めから私を誘惑するつもりで着て来たんですよね分かり
ます！」

「それこそ誤解っていうかむしろ全然分かってませんから！」

「道理で金ぴかだったりゴワゴワだったり私の好みをピンポイント
で狙ってるなと思ってたんです！ それに途中私の胸、じっくり眺
めてましたし！」

「うわあバレてたしでも違うんです聞いてくださいいい！」

こうして鋼とミスレイは、誰もいない教会の中をそれはもうグル
グルと、虎がバターになるくらいグルグルグルグルと走り回ったそ
うな。

第九章 司祭の弱点

お互いの体力がなくなった辺りで、ようやく追いかけてこは終わりを告げた。

そして、鋼の必死の説得の結果、何とかミスレイの誤解を解くことができたのだった。

「はあ。なるほど。では、さっきまで遠くの方と通信していたのですね」

「はい。そういうことです」

さすがに神様と交信してました、とは言えないので、遠距離同士で通信するスキルを持っているのだと説明し、どうにかミスレイを納得せしめた。

「私はてつきり、コウ様が目に見えない神様とかと交信なさっちゃう方かと思って焦りましたよ」

「あ、あははははは！」

それはもう掛け値なしに真実そのものなのだが、鋼はごまかし笑いをした。

「で、誤解が解けたのはいいんですけど、そろそろ離してくれませんか？」

「え？ もうちよつとくらいいいじゃないですか」

こうして話している間にもミスレイは鋼の金びかの法衣をなでなでさわさわしていた。

お互い疲労困憊となって追いかけてこが続行不可能になった時、話を聞く条件としてミスレイが提示したのがコレなのだ。

つまり、鋼の聖王の法衣をさわらせること。よっぽど感触が気に入ったらしい。

「このゴワゴワ感が気持ちよくて、本当に癖になってしまいそうですねです。」

こうやってさわっていると、嫌なことも辛いことも何もかもがふわっと溶けてもうどうでもよくなって……ふわぁ」

「いえ、もう癖になってるといっつか、完全に中毒じゃないですか」

「中毒だなんて、そんなひどいこと……ふわぁ、もう、どうでもいいです」

「ちょ、ちょっと！ もう終わりにしましょう！」

鋼はあわててドクターストップをかけた。無理やり服を引っ張ってミスレイの手から取り戻す。

ミスレイはしばらく未練がましく何度か鋼の服に手を伸ばしかけたが、

「また来た時にさわらせませんから」

と言うとすっぱりとあきらめ、

「それで、通信の相手は恋人さんですか？」

現金なもので、今度は瞳をキラキラさせながら聞いてくる。

「いえ。それも誤解です。相手はただの……ただの、命の恩人、かなあ？」

どちらがどちらを救っているのか今一つ不明瞭だが。

「なるほど。命を救ったところから始まるラブロマンスですね」

ミスレイがまた勝手な解釈をしていたが、今度は鋼もスルーした。

「金ぴかだったり、レアな装備を持っていたり、古代の魔法言語を知っていたり、おまけにそんなスキルを持っているということは、コウ様はやはり冒険者の方なのですか？」

「冒険者、ですか？ いえ、違う、と思います」

「あら、そうなんですか？」

よほど意外だったのか、ミスレイが目を丸くする。

「私は、てつきり……。いえ、きっと事情がありなんですな」

しかし、鋼の顔を見てすぐに納得してくれた。
こういうところは大人のお姉さんという感じで鋼としてもすごく
ありがたい。

「冒険者って、やっぱりなるのは大変なんですか？」

ふと興味がわいて、鋼はそんな質問をしてみた。

「？ いいえ？ ギルドに行つてカードを作ってもらつただけで大丈
夫ですよ。」

過去に犯罪歴とかがなければ、それだけですぐに冒険者に登録さ
れるはずですよ」

「そうなんですか？」

「当然、ギルドのカードは身分証明になりますし……あ、身分証明
になるカード、持っていますか？」

「い、いえ……たぶん、ないです」

身分証明になるカードというのは、現代日本で言う免許証や保険
証のようなものだろうか。

しかしどの道、この世界で使えそうなカードなど鋼は持っていな
かった。

「それは大変ですよ！ よかったら今から行つて作つてきたらどうで
すか？」

「ぼ、冒険者カードを、ですか？」

「はい！ あ、私、この街の冒険者ギルドには知り合いがいるので、
紹介状を書いてあげますね！」

「い、いいんですか？」

鋼にとっては渡りに舟と言うべき申し出だが、あまりにとんとん
拍子に話が進みすぎて気がひけていた。

「ええ。教会は困っている人を助けるのが仕事ですし、金ぴかの人
に悪い人はいませんから」

「あ、あはは。ありがとうございます」

なんか一度思いつきり悪い人扱いされてたような気もしたが、あんまり気にしないことにした。

「それにしても、すごいんですね。そんなにお若いのに、もう冒険者ギルドにコネがあるなんて……」

では一筆、と言ってその場でさらさらと紹介状を書き始めたミスレイに、鋼は尊敬のまなざしを送った。

「ふふ。これでも、この教会の司祭ですからね。それくらい当然です」

「え、ミスレイさん。司祭、なんですか？」

教会の序列などは知らないが、鋼のマンガやゲームの知識では、司祭というのはそれなりに地位が高かったような気がする。

「若い、と言っても、私は捨て子でしたからね」

「え？」

「生まれたばかりの頃、この教会の前に捨てられていたそうです。その時からですから、もう教会にも十七年。充分古株ですよ」

そこはおそらく、ミスレイの境遇に驚くべきタイミングだったのだろう。だが鋼はそれ以上に気になることがあって、思わずこう口走っていた。

「え？ ミスレイさんまだ十七歳くらいなんですか？ てつきりもう二十歳を超え……痛い痛い痛い！ 痛いです！」

「あなたは、なにを、言っているのですか？ 私は、完全完璧に、花も恥じらう、十七歳です」

気が付くと、鋼の頭は一瞬の内にミスレイの右手に握られていた。見事なアイアンクローである。

「え？ じゃあ本当に十七歳？ 永遠の十七歳とか、十七歳と千日とかそういうのじゃな……痛たたた！」

「ちょ、やめ！ 脳がミシミシ言って……！ 待って！ ほら！ これ！ これを！」

ミスレイのアイアンクローが鋼の頭部に食い込む中、鋼は必死で余ったミスレイの左手に自分の服の生地を押し付けた。

「そんなことでごまかされると……ふわぁ」

「ごまかされた。鋼の命は救われた。」

「ふわぁぁ。本当にこのゴワゴワした感触、癖になっちゃいそうですねぇ」

だから絶対もうなってるって、というツッコミを鋼は飲み込み、代わりに安堵の息を吐いたのだった。

そういう事情があったので、推薦状を受け取ってすぐ、鋼はその教会を辞することにした。

「もう、行ってしまうのですか？　すごく、名残惜しいです」
立ち去ろうとする鋼に、切なそうにミスレイは声をかける。

もしかして自分との別れを惜しんでくれているのかと鋼は一瞬期待したが、ミスレイの右手がわさわさとか何かを求めてうごめいているのを見て、すぐに勘違いだったと分かってがっくりした。

それでも相手は一応恩人なので、鋼は精一杯気を使うことにする。

「あの、次に来た時は、たくさんさわっていいですから」

「あ、そんな、別に私、催促したつもりでは……」

「そ、そうですね」

「まあ、正直してましたけど」

「してたんですか!？」

ミスレイの言動は時々鋼の度肝を抜く。というより、服のゴワゴワに懸ける情熱が鋼には理解不能だった。

「と、とにかく、また来ますので、それまで、お別れです」

「はい。もう少し、さわったりお話したりさわったりしていたかったですけれど……」

「あ、あははは。それはまた、次の機会に」

この調子だと次来た時には「あ！　ゴワゴワの人!」とか呼ばれ

てもおかしくないなと思いつつ、鋼は歩き出した。
その背中に、ミスレイの聲がかけられる。

「私、ずっと待ってますから！ 絶対、また来てくださいね！ ゴ
ワゴワの人、じゃなかった、金ぴかの人！」
「もうすでに呼ばれてる上に言い直しても正解してない!？」

そうして、最後まで鋼を驚かせ続けたミスレイと別れ、鋼はふた
たび石造りの街に繰り出す。

外に出た鋼に、さわやかな風が吹き付ける。

「だいぶ、風が出てきたな。それに、さっきよりも暗くなってきた
気もする。」

そういうのは、この世界でも同じなんだな」
初めてこの世界に来た時は真上にあつた太陽も、今にも沈みそう
だ。

「今頃、きつと日本でも……」
そんな風に柄にもなくつぶやいて、感傷的な気分になろうとして
いた時だった。

【た、た、大変なんじゃよー！】

……そういうセンチメンタルをまとめて吹っ飛ばす声が聞こえて
きたのは。

そう、それは、

「し、シロニヤか？」

【こ、コウか？ よかった。とにかく大変なんじゃ！ ワシはもう、
どうしたらいいか……。】

お願いじゃから、ワシを、ワシを助けてほしいのじゃあ！…】

喧嘩別れしたはずの神様からの、SOSだった。

断章1（前書き）

断章は本編とは毛色の違う内容となっています。

本編のみでも作品を楽しむことはできますので、作風が合わないと感じた方は読み飛ばすことを推奨します。

断章 1

「おはよー」

「あ、おはよう。マキ」

朝の喧騒の中に、私は今日も自分を埋没させる。

私は真白 夕希。真っ白な夕方の希望、と書いて、『ましる ゆづき』と読む。

特に変哲のない、一束五百円で売っているような、十把一絡げ感のある普通の高校生だ。

強いて変わった所を上げるなら、私は少しイタイというか、自意識過剰というか、人よりポエミイというか、私ほど頭の中が装飾過剰な言葉で埋まっている人は、あんまりはいないと思う。もちろん、他の人の頭の中なんて覗いた事がないのだから、本当の所は分からないのだけれど。

でも、脳内ナレーションで自分語りな自己紹介をしちゃう女子高生なんて、たぶん他にいなさそう。

「あ、蒲田くん」

友達の挨拶と雑談をさりげなく躲して、教室を突っ切って目的の場所へ。

見つけたのは目的の大柄な男子生徒、が見つめる空っぽの机だ。

「あ、ああ。真白さんか」

大柄な男子、蒲田くんが気付いて、こちらを向く。

でも、その目は寝ぼけているみたいに精彩を欠いている。

二日前まではそんなによく見ていた訳ではないけれど、たぶんそうだ。

それとも、そうであって欲しい、のかも。

そんな思いをおくびにも出さず、私はいかにも世間話という体を装って声をかける。

「やっぱりコウくん。今日も休みなんだ」

「ああ。たぶんな。この時間なら、たしかいつも来てたはずだから……。もう、二日になるんだよな」

蒲田くんがまた後ろの席を見てため息をついた。

この蒲田くんが見つめる空席の持ち主は、結城 鋼。私の名前と同じ読みの名字を持つ男の子だ。そのせいで、クラスメイトは男女問わずほとんどが彼の事をあだ名である『コウ』と呼んでいた。

彼はもう二日、学校に来ていない。今日もこのまま来なければ、三日間の連続欠席という事になるだろう。

それが、ただの風邪や体調不良の類であれば大して騒ぎ立てるような事でもないのだが、その理由が行方不明 事件や事故か、あるいは家出か何か であることは、もうこの教室の公然の秘密となっている。

蒲田くんは、そんなコウくんの、たぶん一番の友達だった。

「やっぱり蒲田くん。コウくんがいないと寂しそうだよね。さっきも机見てたし」

「え？ 俺、そんなにジツと見てた？」

自分でも驚いたみたいに、蒲田くんは言う。

「分からないけど。私が来た時は、少なくともそうだったよ」

「そうかね。……まあ、HR前はすることがなくてヒマだからな」

蒲田くんはそう言って苦笑するが、そんな事はないだろう。少なくとも、周り中で楽しそうに囁っているクラスメイトを見れば、朝のこの時間が高校生にとって決して暇な時間ではない事は明白はずだ。

それが無為な時間でないかは、また別として。

「だけど、真白さんだって同じじゃないか？ 俺、コウがいなくなつてから毎日おんなじこと聞かれてる気がするぜ？」

「毎日って、大げさだな。まだ三日目だよ？」

「だよな。まだ、三日目だもん」

笑い飛ばす彼の瞳には、しかし勢いが無い。

それをからかおうかとも思ったのだが、代わりに私の口から出たのはもっと素直な言葉だった。

「コウくん。早く戻ってくればいいのにね」

「……そうだな」

最後のこのやり取りだけは、二人共もはや誤魔化しようがないほどの情感がこもっていた。

学校の帰り道だった。

蒲田くんの後ろの席が今日も空席のままだった事に、自分でも理解不能なほど気落ちして、独りとはとぼと家路を歩いていた時の事だ。

「か、可愛い……」

私が出た自分の名前を返さなくてはいけないほどに真っ白い子猫が、通りの向こうを歩いていった。

トコトコ、トコトコトコ。

あ、立ち止まった。

「む、むむ？」

立ち止まった子猫は、まるで見えない誰かとお話でもするみたいに虚空を見上げ、たまに相槌を打つみたいに首をこくこく動かしている。その動作一つ一つが、

「可愛い！ 可愛すぎる！」

超絶技巧的な可愛さを誇っていた。可愛さの宝石箱、否、可愛さの総合商社だった。

それに、あの白い子猫の姿を見ると、心の中が温かい、どこか懐かしい空気に満たされていくような感じがする。

嬉しいのと同時に切なくて、何だか胸が締め付けられる。

「あの子、そう、あの子にシロニャンという名前を授けよう」

茹った頭で私は更に暴走する。

白いニャンコでシロニャン。安易に見えて深遠、深遠と見せてた

だひたすらに可憐。何という素晴らしいネーミングセンスだろうか。自画自賛の嵐。

それに不思議と、自分で適当に付けた名前であるにも拘らず、あの白い子猫の本質をきちんと言い表しているような、具体的には八割ほど正解しているような、そんな奇妙な感覚があった。

もう自分でも何を言っているのだから分からない。それほどの可愛らしさだ。

「あ、れ？」

しかしそんな可憐な子猫が、突然ビクリと不自然に体を硬直させて動きを止めた。

どうしたのだろうと私が何の気なしに辺りを見回すと、

「危ない！」

目に映ったのは、ちょうど子猫に当たりそうな位置から落ちてくる植木鉢。

私は咄嗟に駆け出していた。

ガシャン！

アスファルトに叩き付けられ、耳障りな音を立てて碎ける植木鉢。私は間一髪、子猫を抱き上げて、落下する植木鉢を避ける事に成功していた。

急に抱き上げられた子猫はしばらく、私を驚いたような目で見ていたが、

「にゃ！」

と感謝の言葉のような物を告げると、するりと私の腕の中から抜け出して、歩き出して行ってしまった。

そのまま、すぐ近くにあった建物に入って行ってしまふ。見た所自動ドアのようだったが、他の人が開けた所にうまく滑り込んだみたいだ。

あそこは確か、ゲーム屋さんだっただろうか。

「……ふう」

それでも私に、それを追う気力はなかった。

我が身に起こった、あるいは起こりかけていた事の恐ろしさに、今更ながらに腰が抜けていた。

ギリギリのタイミングだった。

助けに入ったのが私より鈍臭い人だったり、飛び出すのを少しでも躊躇っていたりしたら、子猫を抱くだけで精一杯で、子猫を庇った代わりに植木鉢が頭に命中して死んでしまっていたかもしれない。全然関係がないはずなのに、何となく、コウくんの事が心配になった。

私は普段はいじいじと考え込む癖に、肝心な時には意外と考える前に動くタイプだ。でも、コウくんはどうだっただろうか。はつきりとは言えないが、真逆のタイプなのではないかという気がする。

それでも子猫を助ける為に命を張るなんて馬鹿らしい、と切り捨てられるタイプならいいのだが、コウくんになんかそんな事が出来るだろうか。一拍遅れで結局助けに入って、意外と要領悪く失敗してしまいそうな気がする。

「なんて、やめやめ！」

ネガティブになってしまった妄想を頭の中から追い出す。何でもコウくんに繋げて考えてしまうのは、今の私の悪癖だった。これでは陰で『妄想ガール』なんて呼ばれていても文句は言えない。ちなみに、私に妄想癖がある事は誰にも知られていないはずなので、実はその想像こそが純然たる被害妄想なのではあるが。

その時、件の白猫が店から出てきた。しかも、首からゲーム屋さんのロゴが入った買い物袋を提げている。袋の中のあのデコボコとした膨らみは、やっぱりゲームソフトだろうか。

「か、買い物をする猫……」

荷物が重いのか、どこかよたよたと、けれど不思議と嬉しそうに歩くシロニヤンのあまりの愛らしさに、私は瞬間、全ての悩みを忘れたのだった。

第十章 冒険者ギルドへ

「大変なことって、一体何があったんだ？」

今までは違う尋常ではないシロニヤの様子に、さすがに鋼も気を引き締めた。

【よ、よいか？ お、落ち着いて聞くのじゃぞ？

どんなにびっくりしても冷静に、決して走らず、急いで歩いてきて、そして早くワシを助けるんじゃないぞ？】

「どんな助け方だよ！ そっちが落ち着けて！」

このままでは話もできないので、鋼はまずシロニヤを落ち着かせることにした。

「ほら、深呼吸だ。」

吸って、吐いて、吸って、吐いて、

「すうー、はあー、すうー、はあー、」

「吸って、吐いて、吸って、吸って、吸って、吸って、……とって

おきの秘密を吐いてー」

「すうー、はあー、すうー、すうー、すうー、す、うう、ううう……

……母様にゲームは一日一時間って言われたから、裏庭にこっそり『精神と時の部屋』を作ったのじゃ」

「秘密が神様規模！！」

などというしょうもない一幕を交え、ようやく落ち着いたシロニヤは、厳粛な声音で語り始めた。

【さっきまでワシは、おそるべきモンスターと戦っておったのじゃ】

「ええとそれは、実は台所等に生息するGとかいう虫だった、なんていうオチじゃないよな？」

【ば、バカにするでない！ 奴はそんなものとは比べ物にならないのじゃ！

彼奴こそは本物の竜、月光にも例えられる白銀の鱗を持つ空の王者じゃ！】

「お、おい。それって真面目な話か？」

【もちろんじゃ！ ワシは神として、今まで鍛えた技、持てる知識の限りを尽くし、彼奴と死闘を繰り広げた。

彼の竜の翼を傷つけ、尻尾を切り落とし、勝利への道筋が見えた辺りでスタミナが切れた。

一度離れて態勢を立て直そうとしたその時、ワシは自分がとんでもないミスをしていたことに気付いたんじゃ】

常ならぬシロニヤの深刻そうな口ぶりに、鋼は唾を飲み込んでから尋ねた。

「い、一体、どうしたんだ？」

【肉を、こんがり焼けた肉を持つてくるのを忘れておったんじゃああああああ！！！！】

「やっぱりゲームの話かああああああああああああああああああ！！！！」

二人の叫びが交差する。

ちなみに一般の人にはシロニヤの声は聞こえないので、鋼は路上で一人でシャウトし始めたかなり変な人である。

【じゃってあんなに頑張ったのに、今はスタミナが全然なくて、あの前回り受け身みたいなのもろくに出せんのじゃよ！？】

「知るか！ っていうか支給された食料はどうしたんだよ！」

【全部食べちゃったのじゃ！ じゃって、おいしそうじゃったから……………】

「……………ま、まあ正直、そんな理由なのは予想外だけど、とにかく

あきらめて次に……」

【嫌じゃ嫌じゃ嫌なのじゃ！ おぬしも勇者なら何とかするのじゃあ！】

「僕は勇者になった覚えはない！」

【そんなこと言わずに助けてほしいのじゃ！ むしろ、アレじゃ！……助けてくりやれ？】

「ここに来て新しい語尾を使いだした？！」

新しい語尾まで出されては仕方ないので、鋼は少しだけ考えて、

「……死ねば？」

結果、かなりひどい台詞を言った。

【ひ、ひどいんじゃないよ！ おぬしは最悪の冷血人間なのじゃあ！

小学校の通信簿の担任のコメント欄に、

『まさに哺乳類離れした冷血さです。前世はきつとトカゲかイグアナ辺りでしょう』

とか書かれるくらいの冷血さじゃよう！】

「勝手に人の通知表のコメント捏造するなよ！

別にシロニヤ本人が死ぬとかじゃなくて、ゲームの中で死ねばいいんじゃないかってことだよ！」

【お、おお！……つまり？】

「スタミナ回復手段がないのなら、いつそ死亡してでもスタミナを回復させたらどうかって提案だよ！」

【なるほどのう！……分かりやすく言うとう？】

「いや、だから復活した時はスタミナが回復してるから、そこから頑張れば何とかなるんじゃないかって話だよ！」

【ふむふむ！……ちなみにかっこよく一言にまとめると？】

「死ねば、助かるのに……」

【カツコイイのじゃー!!】
シロニヤは大はしゃぎだ。

【それにしても、そんな方法、ワシは全然思いつかなかったのじゃ！
うむむむ。やっぱり持つべき者は友じゃな！】
などとシロニヤが言った瞬間だった。

「ッ!?」
不意に鋼の脳内で『テツテレ』という感じのファンファーレが
鳴り響いた。

頭の中にメッセージが浮かび上がる。

しろにゃ の なかよしど が 12 あがった。
しろにゃ との かんけい が こころのとも になった！
おらくる（ただとも）を しゅうとく した。
おらくる の つつわりよう が むりよう になった！

「な、なんだこれ……」

【おお！ どうやらタダ友になったようじゃな！
これでワシといつでもオラクル通話できるぞ！ オラクルには圏外もない
のっ】

「というかコレ、今まで使ったびに何か取られてたのか？」
喜ぶより何だかぞつとしないものを感じる鋼である。

【ふふーん。それよりワシは、ゲームに戻るのじゃ。
さくつと死んで、すぐに……あ】

「ど、どうした？」
【……ゲーム、つけっぱなしになっておった】

「お、おい！ とりあえずすぐに一時停止して……」

【あ……。いま、じかんぎれに、なった……】
「……………」

そうなってしまえば、鋼にも、もうかける言葉もアドバイスもない。

しばらくして……。

【ぐ、ぐすっ……。う、うあ、ぐずっ……】

ずっと無言だったオラクル越しにシロニヤのすすり泣きが聞こえてきた。

(めっちゃくちゃ、気まずい……！)

鋼には何も言えないし、シロニヤも泣きじゃくる以外の何かをする様子はなかった。

ゲームの時間は停止できなかったが、今、二人の時間は確実に凍り付いていた。

……まったくうれしくないが。

この間に冒険者ギルドに向かってもよかったのだが、鋼も泣いている三歳児を放っておいて、自分の用事を済ませるのはさすがに気がとがめた。

「なあ。そろそろ機嫌直せよ。もう一度今度は肉もちゃんと持って狩りに行けばいいだろ？」

泣き声がある程度収まったタイミングを見計らい、鋼はそう声をかけたのだが、

【……もう、いいのじゃ】

「え？ だけど……」

【ふん！ 大体ハンターとかるくでもない奴らなんじゃよ！

罪のないモンスターを自分の欲のためだけに狩って、その体で作った装備でその家族をまた狩りに行く。

どこまで外道なんじゃ！ まるで戦闘狂のサイコ野郎の44番じゃ！ 最悪じゃよ、まったく！】

「ええー」

自分が負けた途端、ゲームそのものの猛烈パッシングを始めるシロニヤに、さすがの鋼もひいた。

【日本人はそもそも農耕民族じゃし、こういうアクションは向いてないんじゃない！

やっぱりRPGこそ至高じゃよな！ これからはRPGをやるう

！RPGを！】

そうして何だか分からない内にシロニヤは復活してしまった。

【ところでおぬしは何をしておるんじゃない？ 教会はもういいのか？】

「……ミスレイさんの紹介で、冒険者ギルドに行くことになったんだよ」

一応冒険者ギルドがあると教えられた方に歩き出しながら、鋼は答えた。

【冒険者ギルドのう。転生物の王道じゃよな。よいのではないかしら？ けれど、もしギルドランクが最高まで上がったとしても油断は禁物。

銀の竜を討伐する依頼は軽々しく受けてはいかんのじゃぞ？

ほんとに、ほんとにダメじゃぞ？】

そう忠告をしてくるシロニヤに鋼はまだ癒えきらない心の傷を見て、とりあえず話を逸らすことにした。

「でも、今の僕は自分の素性が分からないというか、転生した後の自分の立場が分からないんだよな」

誰かさんのせいで、と声音に非難を載せて言ってみる。

【じゃけどそれは冒険者登録には問題ないはずじゃぞ？

たしかこの世界での冒険者登録なんて、ちよつと行ってカードにピツとするくらいで、スイスイ簡単に作れたはずじゃ。

……まあ、犯罪歴の確認はあつたはずじゃから、前世で悪行の限りを尽くしておつたら分らんがのう】

「なあ。僕って、仮にもシロニヤが直々に見つけ出した徳の高い人間なんじゃなかったのか？」

【うむ？ ああ、そういえばそんな設定もあったのう】

「設定って……」

そんな適当なことでもいいのか、と呆れる鋼。

【そういう出会いをしたとしてもじゃ。

おぬしとは短いながらも密度の濃い付き合いをしておるからのう。

もう、そんな風には思えんのじゃ】

「ま、僕も今さらシロニヤのこと、神様扱いなんてできないけどね」

【そうじゃろう？ 今となってはおぬしは徳の高い人間でも、ワシの命の恩人でもない】

【ただの……ワシのたった一人の友人じゃ】

「シロニヤ……」

鋼は思わず絶句してしまった。

シロニヤが打ち明けてくれたその事実、一言一言、想いを込めるようにして、答えた。

「やっぱりお前、友達、いなかったんだな」

【ええ！ そういう反応じゃと!?!】

シロニヤはそうやって驚いていたが、鋼にだって照れくさい時はあるのだ。

さっきだってシステム上は『こころのとも』になったみたいだし、今さらなことだと戸惑う思考を追い出した。

照れくさかったのは鋼だけじゃなかったらしい。

シロニヤもあわてて違う話を始める。

【ま、まあこの話はもういいのじゃ。

それよりおぬしは本当に大丈夫なんじゃろうな。ほれ、犯罪歴】

「お前、本当に僕のこと信じてなかったのか…」

冗談で言われてたとはかり思っていたので、本気で疑われて鋼は少しシヨックを受けた。

「大丈夫じゃないか？ 補導とかされたことないし、小さい時先生に怒られたことくらいは……まああるけど」

【逮捕、いや、タイーホは？】

「ないよ！ つうか今なんで言い直したよ！」

【じゃが、軽犯罪くらいはいくらかやっておるんじゃないか？】

「どうだろ。物心ついてからはアルコールの類は飲んだことないし、信号はきちんと守ってるし、路上にゴミとかを捨てたことはないし……。」

まあそれでも知らない内に何かやってちゃいけないことをやってるかもしれないけど」

【ふん。つまらんのじゃ。それではまるで、おぬしは本当に善人ではないか】

オラクルで聞こえてくる声を通じて、鋼にはつまらなそうに口をとがらせながらそう口にするシロニヤの姿が透けて見えるようだった。

それを、愉快に思いながらも、

「善人っていうのと、悪いことを何もしなかったのは、違うよ」

鋼は静かに否定した。

「向こうにいた時の僕の人生なんて、本当に平坦で退屈で何もなかったんだ。」

そりゃ、ちょっとくらい友達はいたけど、事件どころか女の子とだつて……」

【ぬ。コウよ。ちょっと待つっのじゃ】
「なんだよ？」

ちよつとだけ不機嫌そうな鋼の言葉に、シロニヤは「うむ」と特に意味のない相槌をはさんでから、

【その話、長くなりそうじゃからハ○ター×ハンターが完結した後で改めてゆっくり聞かせてもらってもよいじゃるか？】

「ああ。分かっ……って、何年待たせるつもりだよ！」

【あるいは永年、かもしれんのか】
「……………」

ああ、こいつと真面目な話をする事なんて一生できないんだな、と鋼は達観した気持ちになった。

【ところで、なんじゃが……】
「なんだよ？」

さきほどよりも幾分、トゲのある声で鋼は聞き返した。

しかし、シロニヤはそれほど気にした様子もなく、軽い調子でこつ言った。

【なんでたかが冒険者ギルドに行くだけに、こんなに時間がかかっ
とるんじやろつな？】

「全部お前のせいだよ……！！！！」

そうやって、いつものようにシロニヤのポケ発言にツッコミを入
れながら……。

もし鋼が異世界に来てからの一部始終を本にまとめたら、シロニ
ヤとのやりとりだけで紙面の半分が埋め尽くされてしまうのではな

いか。

鋼は漠然と、そんな危惧を抱いたのだった。

第十一章 今度こそ冒険者ギルドへ

「ようやく着いた……」

色々と紆余曲折を経たものの、何とか日が沈む前に鋼は冒険者ギルドの前にたどり着くことができていた。

【おぬしは何でそんなに歩くのが遅いのじゃ！】

おぬしと比べたらナメクジだってシヤ 専用機じゃよ！】

「うるさいな。こつちの世界に来たばかりだから、まだうまく体が動かせないんだよ」

なんて言い争いをしながら、ギルドの中に入る。

ざわ… ざわ…

鋼が入った途端、ギルドの中の空気が変わった、ような気がした。おまけに、どうやら部屋にいるほとんどの人から注目されているような気までして、鋼はたじろいだ。

「な、何でだ。もしかして、顔見知り以外あんまり出入りしないとか？」

【いや、どう考えても、おぬしが真っ金色じゃからじゃろ？】

めずらしい、シロニヤの呆れたような声。

ハッとして鋼は自分の姿を見下ろした。

金色の服に、金色の靴。帽子だって金色で、ついでに腕輪にチヨーカーまで金。

これで目立たないのだとしたら、むしろそっちの方が異常だった。

「なあ、シロニヤ。全身金色と全裸、どっちが目立たないと思う？」

【そこでワシが全裸と答えたなら、おぬしはどうするのじゃ？】

「……………」

実にもっともな指摘だったので、鋼は黙り込んだ。

周りにいるのは全部野菜だと思い込むことにして、鋼は受付らしき場所に向かった。

「ようこそ、冒険者ギルドへ。初めての方ですか？」

ギルド員らしきお姉さんが対応してくれる。

「初めてですけど……よく、分かりましたね」

もしかして、新人オーラでも出ているのだろうか。

受付の人は愛想のいいちよつと美人のお姉さん、という印象だったが、意外にやり手かもしれない。

鋼は心の中の警戒心メーターを少しだけ引き上げた。

「いえ。全身金色の装備でいらっしゃるような方は、あまりお見かけする機会がないもので」

苦笑いで告げられる。

やっぱり全身金づくめ(？)っておかしなことだよな、と自覚した。

当たり前のことだったかもしれない。鋼は警戒心メーターを普通に戻した。

「冒険者としての登録に来たんです。あ、これ、紹介状です」

「紹介状、ですか？ 登録だけなら、特に誰の紹介も必要ないのですが……」

「あ、そう、なんですか？」

「もしか、また騙されたのだろうか。」

そんな疑惑を鋼が持った時、紹介状を受け取った受付のお姉さんの表情が変わった。

どこか呆れたような、納得したような複雑な顔をする。

「ああ。ミスレイからですか」

「もしかしてお知り合いなんですか？」

「はい。昔からの知り合いです。それはもう、散々お世話になった相手ですよ」

そして表情を全く変えないまま、「ふふふふ」と地の底から響くように笑う。

よく分らないが、鋼の警戒心メーターは最大値まで振り切れた。

「も、もしかして、登録、無理ですか？」

おっかなびつくりで聞いてみると、お姉さんはにこやかに答えてくれた。

「いいえ。もちろん問題ありません。紹介状は後で拝見いたします」
しかしそこはやはりギルドで働くお姉さん。一瞬で私情を捨て去ったか、仕事をする顔に戻って鋼に向き直る。

「当ギルドに加入するにあたって、何点が注意事項がございますが、確認させていただいてもよろしいでしょうか」

「あ、はい」
「では、説明させていただきます。この冒険者ギルドは全大陸にある……」

もしかするとこれが紹介状の効果なのか。色々と聞かれるかと覚悟していたのだが、思ったよりスムーズにギルドの説明に入っていく。

「基本的にそのギルドで禁止されていない限り他職のギルドに同時所属することは可能ですが……」

この世界に不慣れな鋼にとって、たかだかギルドの通り一遍の説明でも大事な意味を持つ。

鋼は一言も漏らすまいと、受付のお姉さんの話を聞いていたが、そんな時に限って声をかけてくるのがシロニヤである。

【なあ、コウよ。どうでもいい話なんじゃが】

ギルドに入ってからには比較的静かだったシロニヤが、突然話しかけてきた。

「どうでもいい話なら後にしてくれよ。……何だ？」

それでもさすがに無視するのはしのびなく思い、受け付けのお姉さんに気付かれないよう、仕方なく小声で対応する。

【知ったか？ 『ねだる』と『ゆする』って、どっちも『強請る』って書くんじゃないよ？】

「本当にどうでもいい話だったよ！ほんとに後にしてくれ！今は大事な話を……」

【ま、待つんじゃない！ 『ざれごと』と『たわごと』もどっちも『戯言』って書くんじゃないぞ？】

「だから何だよ！」

【ルビ振られてない場合どうやって見分けるんじゃないだろうな？】

「知るか！」

【あと『だいにんき』と『おとなげ』もどっちも『大人気』じゃが、こっちは文脈で確実に判別できると思うのじゃ】

「じゃあわざわざ今言うなよ！」

耐え切れず、鋼は頭の中で怒鳴った。

ちなみに、オラクルだと普通の会話では伝わらない漢字の表記まで正確に伝わる。念話の地味な優位性である。

「 というのが、当ギルドの規約になりますが、よろしいでしょうか？」

「 え？ あ、はい！ 大丈夫です！」

受け付けのお姉さんに確認され、つい反射的にそう答えてしまった。

どうやらシロニヤに気を取られている内に説明が終わってしまったらしい。

（くっそう。シロニヤの奴めえ！）

内心で菌噛みするが、ここまで元気よくなずいてから、やっぱりもう一回聞かせてくださいというのはかなりかつこ悪い。

不安はあったが、鋼はこのまま押し通してしまふことにした。

「では、カードを作りますので、このカードにあなたの血をたらしてください」

「あ、はい！」

そうして、白紙のカードと針を渡される。

どちらも魔法の品なのか、現代日本のものよりずいぶん重く感じたが、当然持てないほどではない。

根っからの現代人である鋼は、針で刺して血を出す時点でかなりの抵抗を感じたが、ナイフでなかっただけマシ、と思つて人差し指の先を突き、にじんだ血をカードに押し付けた。

「はい。たしかに」

当然だが、慣れているのだろう。受付のお姉さんは血のにじんだカードを表情筋一つ動かさずに受け取る。

「これで、あなたに目立つた犯罪歴があれば自動的にカードは完成するはずです」

「その、もし誤作動とかで犯罪歴があると判定された場合は？」

「その判定は、審判の神にお願いしていますから。間違つことは絶対にありません」

「はあ……。神様が……」

あつさりと言われてもピンと来ないが、きっとこの世界ではそういうものなのだろう。

自分に犯罪の経験などないと分かっている、その待ち時間はやはり少し鋼を緊張させた。

「はい。出ました」

だから受付のお姉さんのその言葉を聞いて、ホッと体から力が抜

けた気がした。

お姉さんの手元を見ると、たしかに白紙だったはずのカードに文字が浮かび上がっているのが見えた。

「一応、項目の確認をしますね」

「はい」

「あなたの名前はハガネ・ユーキ。職業は学生。これで問題ありませんか？」

「はい」

なぜ職業が学生なんだろう、と一瞬だけ考えたが、日本で高校生をやっていたからだろう、とすぐに納得した。

それにしても、血をたらしただけでそれだけの情報を読み取るとは、この世界の魔法の関わるシステムは、本当に現代日本より進んでいたらしい。

「続けます。……あら？ あなたの名前、ハガネ・ユーキなのにニックネームがコウになっていますけど、これで合っていますか？」

「あ、ああ。大丈夫です。合っています」

ギルドカードにはニックネームまで設定されているのか、と驚かされる。

ちなみに鋼の呼び名がコウなのは、ユウキという鋼と同じ名前を持つ同級生が他にいて、さらに鋼という字は音読みだとコウと読むから、なのだが、その辺りの事情が異世界に人に説明できるはずもなかった。

「それでは、次に能力の査定に参りますね」

「能力の査定？」

「はい。ギルドに加入した直後のギルドランクは、カードに示された加入時の能力によって決められます。

基準としては、能力値の低い子供などは大抵ランクFから。

逆に、たとえば筋力などの能力が際立って高い場合、最高でランクBからスタートすることができません」

「ランクって、いくつからいくつまであるんですか？」

鋼が聞いた途端、お姉さんの目つきが摂氏20度くらいから、20ケルビンくらいに一気に下がった。実に273度もの落差の急速冷凍である。

「それは、さつき説明したはずですが」

両目から、冷凍ビームみたいなものが発射されているような気がした。

「あ、あの、ちょっと緊張してて、よく聞き取れなくて……」

苦しい言い訳をする鋼。

しばらく心臓麻痺を起こしそうな冷たい沈黙が横たわったが、

「分かりました。もう一度説明します」

受付のお姉さんが先に折れてくれた。

だが、その目は「次はないぞ」と雄弁に語っている。

鋼は必死でコクコクとうなずいた。

「通常の冒険者のランクは、現在確認されたところでG-から、A+まであります」

「現在確認されたところでは？」

「はい。最初の冒険者ランクは能力値によって機械的に振り分けられます。

ですので理論的な下限はもっと下とされていますが、今のところ

G-以下をマークしたことはありません」

「G-の人ってどんな人だったんですか？」

「毒消し草です」

「……どくけしそう？」

なんたるDQNネーム、と鋼は思ったとか思わなかったとか。

まあ実際にはそんなことを思う前に、受付のお姉さんがきちんと

説明をしてくれた。

「これも理論上の話ですが、冒険者カードは生き物なら何でも作ることが可能なはずなんです。

そこで、初代の冒険者ギルドマスターが苦心の末そこらに落ちて
いる草にカードを作らせたところ、G-になったとか」

「な、なるほど……」

そもそも何で草を冒険者にしようとしたのかが鋼には既に意味不明だが、まあさすがに野草より弱い人間はいないだろう。

「ちなみにその時のカードのアビリティ欄に『解毒』があったことから、その草に解毒能力があると発見され、毒消し草と名づけられました。

これが地味に初代冒険者ギルドマスターの最大の功績と言われています」

「なんですかそのプチ情報……」

微妙すぎるエピソードに、反応に困った。

「そして、今言った冒険者のランクはあくまで『通常の』ランクで、A+の上に特別なランクとしてSランクがあります」

「Sランクにはどうやったらなれるんですか？」

「A+まではギルドの用意したクエストなどをこなしていけばランクを上げられますが、Sランクとなると国家を左右するレベルの功績を上げないと昇格できません。

さらにSランクの次にS+ランク、S++ランク、S+++ランク、SSランク、SS+ランクと続いていき、最終的にSランクは百八式までであると言われています」

「嘘だッ!!」

「はい。嘘です。現在与えられたランクはSSSまでが最高です」

「あ、そ、うですよね」

ボケのにおいをかぎつけて思わず叫んでしまったが、冷静に返さ

れて怒鳴ってしまったことに赤面する鋼。

その時、一度は退散した神様の気配がまた頭の中で膨れ上がった。

【のう。コウよ】

「あのな。今度こそお前に構ってる暇はないぞ」

【いや、おぬし、よいのか？】

「え？ 何が？」

【じゃって、おぬしは三百万ポイントを使って、大量のタレントを取ったじゃろ？】

それがバレてもよいのかと聞いておるのじゃ】

「もしかして、あのカードって、そういうのも分かるのか？」

【当然じゃろ。むしろ、それを知るためのカードと言っても過言ではないのじゃ】

「念のため聞くけど、タレントをたくさん持つてるのって……」

【おるワケないじゃろ！ 普通の人間より有利な転生者じゃって百だの二百だののポイントをやりくりするんじゃぞ。

せいぜい二、三個持つておるのがせいぜいじゃ。

おぬしの場合、下手すれば数百種類のタレントを持つておるから
のう。大騒ぎになるぞー】

気のせいかもしれないが、ずいぶんと楽しみに宣告するシロニヤ。

まだ右も左も分からないのに、こんなところで悪目立ちはしたくない。

鋼はあわてて受付の人を制止しようとした。

「あ、あのですね。僕のタレントは……」

「そちらを先に確認しておきたいのですか？ では」
藪蛇だった。

【ぶ、ぶふーっ！】

脳内でシロニヤが吹き出すのが聞こえた。

「あ、ちょっと待つ……」

「あら？」

受付のお姉さんの眉が寄るのを見て、鋼は終わった、と思った。しかし、

「アビリティとタレントの項目を選んで閲覧不能になりますね。よく分からなかったが助かったようだった。

「それって、アビリティやタレントがないってことですか？」

「いいえ。その場合はなしと表示されるので。

何かの隠蔽スキルが働いているのかもしれませんがね」

「ああー」

心当たりはありすぎるほどあったので鋼は黙った。

「では、お待ちかねの能力査定に移りますね」

にこやかにお姉さんが言ったので、鋼はまだピンチを抜け出していないことに気付いた。

(ど、どうしよう……)

考えてみれば、危ないのはタレントだけではなかった。

鋼は基礎能力のパラメータをいじって、ポイントを稼いでいた。

問題はその時の記憶があいまいなことだ。

(99まで上げた後、僕はちゃんと能力値を普通くらいまで戻したっけ?)

もし、いくつかの能力値が、いや、一つだけでも99だったら大騒ぎになる可能性がある。

「あの、質問ですけど、冒険者登録の時の能力値って、どのくらいが普通なんですか？」

「ん？　そうですね。普通の成人の能力値平均は7とされています。冒険者に登録する人は平均より高い人が多いですけど、あなたくらいの年齢ならやっぱり7くらいが平均ですね」

「ち、ちなみに、今までで最高は…？」

「んー。個人の情報なので、あまり詳しくは言えませんが、わたしが担当した中では、平均が大体35、一番高いのが50越え、という人が最高でしたね。」

「魔術師として生計を立てていたのを、冒険者に転向することにした方だったと思います」

「そ、そうですね」

やはり99なんてどう考えてもおかしいらしい。

しかし、たとえ裏が取れても査定をやめさせるワケにはいかない。とりあえず冒険者として生計を立てるつもり。鋼としては、冒険者ランクが決まらなくても困ってしまうのだ。せめて、当時の鋼が、能力値を普通の値に戻してしてくれたことを祈るしかない。

だが、そんな鋼の祈りも虚しく、

「まさか……！　こんな、ことって……！」

鋼のカードに表示された能力値を一目見た途端、受付のお姉さんの顔が蒼白になる。

「これ、ご自分で、見てください。信じられない」

そう言って、受付のお姉さんが震える手でカードをかざす。

「あなたって、本当に、すじく……」

そこには……。

LV	1	HP	1	MP	0
筋力	0	知力	0	魔力	0
敏捷	0	頑強	0	抵抗	0

「……すごく、弱いです」

そこには、全項目が最低値をマークした、鋼の能力値一覧が表示されていた。

(も、戻しすぎてたああああああああああああああああああああ！！！)

今度は別の理由で顔を青くする鋼の脳裏には、

【ぶ、ぶぶっ！ さ、さいじゃく、最弱じゃ、ぶ、あひゃ、あひゃひゃひゃ……！】

どこの失礼な神様の笑い声が、いつまでも響いていたという。

以下の者を当ギルドのメンバーとして登録する。

ハガネ・ユーキ

LV1

職業 学生

冒険者ランク H (冒険者ギルド創設以来、最低ランク)

第十二章 紹介状の真意

【「僕は、何を間違ったのかな……」

あの、衝撃の『俺YOEEEEEEEE!!』事件から、一夜が明けた。

僕は自分が選ばれた人間だと信じていた。でも、それはただの勘違いだった。

それからの生活は、あまりにもみじめだった。

あまりに弱かった僕は誰にも相手にされず、最弱最低な冒険者の烙印を押された。

友人なんてできるはずもないし、仕事も全く見つからなかった。その日の食事を得るために、ほとんどただ同然の値段でアイテムボックスも聖王の法衣も売ってしまった。

それでもお金はすぐになくなる。初めてこの世界に来た日を思い出し、何とかお金を借りようと教会に行ったが、ミスレイさんに門前払いをされた。

後から聞いた話だが、ミスレイさんは近々、聖王の法衣を高値で買い取った貴族と結婚するそうだ。

今では服を金色にできる特技を生かして、乞食と大道芸の中間くらいのことをして何とか日銭を稼いでいる。

でも、それもだんだん飽きられているし、ボロを着た僕をみんなが汚物を見るような目で見てくる。

野良猫までが僕をさげすんで、通り過ぎる度に僕に唾を吐きかける。

そんな時だ。絶望の淵にいた僕の前に、一匹の白い子猫が現れた。ああ、忘れもしない。彼女だ。彼女だけが、いつだって僕の味方だった。

なぜ僕は、彼女を邪険に扱っていたのだろうか。

それこそが、全ての間違いだったのだと今ようやく気付けた。

ああシロニヤ、君こそが僕にとっての……】

「長いんだよ！勝手に僕のモノローグ騙るのもいいけど、いや、よくないけど無駄に長いよ！

しかもちよつとリアルだったからなんか聞き入っちゃったし！」

【自信作だったんじゃないが……。野良猫に唾吐かれるところとか、ちよつとうるつと来なかったかの？】

「いや、そこは不自然だったよ！」

と、あいかわらず脳内でハイテンションなやり取りを続ける二人。当然ながら鋼の能力値が判明してから一夜明けたりはしてはいない。

鋼の冒険者ランクが決まった後、

「紹介状のこととか手続きとかがあるから少し待っていてください」と言つて受付の人は奥に引っ込んでいってしまった。

あの人、奥に行ったのこっさり笑うためじゃないだろうな、などと邪推してしまうのは、鋼も若干シヨックを受けているからだ。

別に、転生先で能力値の高さを活かしてオレマン無双、なんて考えていたワケではないのだが、能力値オール0なんて予想外だったし、受付のお姉さんの最後の台詞なんかはちよつと衝撃だった。

「あ、その、待っている間、気を付けてくださいね！ 転んだりしないように」

「え？ あ、はい？」

「その能力値だと、派手に転んだらたぶん、死にますから！」

「……………はい？」
と来たものだ。

「でも、実際どうなんだ？　いくらなんでも転んだって人は死なないよな？」

【いや、たぶん死ぬのじゃよ？】

「マジかよ……………」

神様にあっさりと言断されて、鋼はちよつと泣きが入った。

【この世界は地球ベースの世界じゃからなあ。

言語はともかく、重力や日の長さ、大気組成に度量衡もほぼ地球と同じで違和感なんかあまりないんじゃないだろうが。

実はこの世界、おぬしの元いた世界とは根本的に法則が違うのじゃよ】

「具体的には？」

【たとえばじゃな。……………この世界、大地は球形ではなく平らで、世界は巨人が支えとる】

「嘘だツ！！」

【残念ながらマジじゃ。世界の果てに行くと、水が滝のようになって落ちていくところが見えるのじゃ】

「だ、だからって、いくらなんでも人間が転んだだけで死ぬなんて……………」

【あー。この世界はゲームが元になつとるからのう。

なんとというか、パラメータが物理法則より上位の法則となつているといふか……………】

「ゲーム？　パラメータ？」

【う、うむ。ここはもともと『神人類育成計画』、あるいは『新神類養成計画』などと呼ばれる計画に基づいて作られた世界でじゃな。そもそも『神人類育成計画』とは因果律に打ち勝つため神のごと

き人間を……うふう。説明が面倒なのじゃ【

「信じられない……」

【うむ。話が大きくてにわかには信じられないのも分かるのじゃ。じやがの、これを現実と受け止めて……】

「シロニヤがこんな神様っぽいことを言ってるなんて……」

【失礼じゃなおぬしは！！ ワシはすごい神様なんじゃぞ！】

「あ、普通に戻った」

久しぶりにシロニヤがキレて、なんか安心した。

【もう、分からないなら分からないでいいのじゃ！

ただ、思い出してみるのじゃ。

おぬし、あの巨乳の渡してきた首輪を重いと感じたじゃろ？

ここで渡されたカードと針についても同じじゃ！

それに、歩くのが異様に遅いとも思ったじゃろ？】

「そつえば……」

翻訳の首……：チョーカーやカードや針が特別に重いのかと思っていたのだが、それは逆だったのか。

【とにかく、ここではパラメータが肉体に影響するのじゃ】

「つまり？」

【転んだら死ぬのじゃ】

「それは嫌だあああ！」

叫んで駄々をこねる鋼。

いつもと逆の立ち位置に、シロニヤが呆れつつも優しい声をかけた。

【安心するのじゃ、コウ】

「シロニヤ？」

【おぬしが死んだら、墓にはメガド○イブとワンダース○ンカラーを供えてやるのじゃ】

「超いらねええええええええええええええええええ！！」

と、一応オチがついたところで、受付のお姉さんが戻ってきた。

「お待ちせしました」

そう言って受付に戻るお姉さんに、鋼も平静を装って、

「いえ、大丈夫です」

と返した。

まあ内心全然大丈夫ではないのだが、そこは一応男の子であった。

お姉さんは、言い出しにくそうに話を切り出した。

「その、ミスレイとは、親しいのですか？」

「ミスレイさん、ですか？ いえ、今日会ったばかりですけど、色々とお世話になった……恩人です」

「なるほど」

お姉さんはうなずいた。

「紹介状ですが、その、なんと言いますか……」

「何が書いてあったんですか？」

鋼が質問すると、お姉さんは少し迷ったようなそぶりを見せて、

「そうですね。……読んでみますか？」

紹介状を差し出してきた。

「いいんですか？」

「はい。どうせ大したことが書いてある訳ではないので」

「なら……失礼します」

受け取って、開いてみた。

中には、簡潔に、一言。

『よろぴく』

「……………」
なぜだろうか。色々とお世話になった恩人のはずのミスレイに、
今ちよつとイラツとしたのは。

大したことが書いていないと言っていたが、こんなに大したことが書いていない紹介状もめずらしいだろうと鋼は思った。

「こつという奴なんです、ミスレイは」

同情するような口調で、お姉さんが慰めてくれる。

「その……知ってました」

鋼があきらめたように言うと、ぽん、とお姉さんは優しく肩に手を乗せてくれた。

ハガネは 受付のお姉さんの同情 を手に入れた!!!

「他に、冒険者カードで分かることってあるんですか？」

すっかり協力的になってくれたお姉さん（キルリスさん、と言うらしい。名前を覚えてもらった）に、話を聞く。

「そうですね。後は、自分の装備なんてものも見れますよ。ほらキルリスがカードにさわると、カードの表示が入れ替わった。

まさかのタッチパネル方式かと思って驚いたが、どうやらそういうものでもなく、見たいものを考えながら触ると、その項目が自動的に映るらしい。

ある意味タッチパネル以上のハイテクである。

鋼の装備は以下の通りだった。

?ぼつし?

*祝福された*聖王の法衣+3

?ふく?

？ずぼん？

*呪われた*翻訳の首輪『バウリング・R』

？うでわ？

？デバイス？

「やっぱり首輪かあああああああ！！！」

ここで、ミスレイが渡してきたチョーカーが実は首輪だったことがはっきりと判明した。しかも、しっかり呪われている。

「分かる。分かるよ」

急に叫び出す鋼にも動じることなく、キルリスがそう言って慰めてくれた。

鋼としては感謝する一方、この人一体ミスレイさんにどんな目に遭わされてきたんだ、と恐ろしく思わなくもない。

ふたたび私人の顔から職業人の顔に戻ったキルリスは、鋼の姿を見て、目を細めた。

「残りの装備はほとんど未鑑定品ですね。でも、金色だということのをのぞけば、大体想像がつかます」

キルリスは『？ぼうし？』が『安物の帽子』、『？ふく？』が『布の服』、『？ずぼん？』が『ただのスボン』であることをただちに看破した。

『？うでわ？』は『アイテムボックス』かと思われたが鑑定できず、『？デバイス？』についてはどれのことを指しているのかもよく分からなかった。

ただ、

「そのポケットに入っているもの、なんですか？」

キルリスに言われて見てみると、たしかに鋼の右のポケットが不自然にふくらんでいた。

取り出してみると……。

「……あ」

思わず、鋼の目が点になる。

「心当たりがあるんですか？」

「はい。まあ……」

それは、懐かしきあの360連射コントローラーだった。転生のどさくさで持ってきてしまったらしい。

同時に、『？デバイス？』の表記が、『マジック・コントローラー』に変わった。

【か、借りパクは犯罪じゃよー！】

という声が聞こえた気がしたが、とりあえず無視。

これで、ようやく自分の初期装備が大体どんなものなのか、鋼には把握できるようになった。

「あと、冒険者カードで見られるのは、フィートだけですな」

「フィート？」

「特別なことをした時に手に入れられる、称号のようなものです。

行動次第で変動しやすいタレントのようなもの、と言えば分かりやすいでしょうか」

「特別なこと、ですか？ 僕には何もなさそうですけど……」

「とりあえず見てみましょう」

「これは……」

鋼が獲得しているフィートは三つだった。

「一つ目は、『戦女神の加護』ですね」

キルリスは、鋼が見やすいようにカードを鋼の目の前まで持ってきてくれた。

『戦女神の加護』

戦女神の加護を受けている証。戦闘にまつわる種々の事象に対して微量のプラス補正を得る。戦女神に仕える司祭、ミスレイによつ

てもたらされた

「ミスレイさんが……?」

「神官に認められた人間は、その神からの加護を受け取ることができたりするんです。」

たぶん、こうやって加護を得られる可能性を見込んであなたに紹介状を持たせたんでしょう。

……たまにこういうことをしてくるから、どうしても見捨てたりできなくなつて泥沼にはまるんですけどね」

後半は聞こえなかったことにして、鋼は他のフィートも見せてもらった。

『生物史上最弱』

最弱生物の証。スライムや子猫なんかが寄つてきて同情してくれる。嬉しいか? ん?

『異界の神とマブダチ』

懇意にしている異界の神がいる証。それにしても私、マブダチって言葉久しぶりに聞きました

「何だか、説明文に悪意が見えるんですけど」

「そういう仕様です」

仕様と言われれば仕方がない。それよりも、キルリスが『異界の神とマブダチ』のフィートを見ても何も言わなかったことに鋼は感謝した。

どうやらシロニャよりは数倍空気が読めるらしい。

「とりあえず、カードで分かることはこれで全部ですね。」

他に何か、聞いておきたいことはありますか?」

「そうですね。だったら、実際の依頼を見てみたいんですが」

鋼がそう言った瞬間だった。

今まで少しだけ打ち解けていた空気が、一瞬で凍った気がした。

「そのことなんです……」

そこで、キルリスは最高に申し訳なさそうな顔をする。

鋼が非常に嫌な予感をひしひしと感じる中、彼女は言った。

「実は、あなたが受けられる依頼は、このギルドにはないんです」

第十三章 最低の冒険者

半分くらいは予感していたとはいえ、それは冒険者としてやっていこうかと思いついて始めていた鋼にとってはちょっとショックな宣告だった。

「それは、どういうことですか？」

キルリスはやはり言いにくそうに話し始めた。

「その、冒険者ランクHなんて想定されていなかったので、受けられる依頼がないんです。」

街の雑用のような最低難易度の依頼でも、冒険者ランクFからなので……」

「あー」

それはそうだろう。

該当者が誰もいない冒険者ランクGやHの依頼があるはずもない。しかも、冒険者ランクを上げるにはおそらく依頼をこなさないといけないから、依頼が受けられないとどうしようもない。完全に詰んでいる。

それでもあきらめきれずに鋼は聞いた。

「冒険者ランクがHだと、受けられる依頼は本当に一つもないんですか？」

「あ、いえ。フリーランクの依頼なら、原則どのランクの方でも受けられます。」

でも、ハガネさんの能力値で単独で受けられるものでは……」

心配してくれるのはありがたいが、今は背に腹は代えられない。

「どんな依頼なんですか？」

「これですね」

キルリスが張り紙の一つを指さした。

「街の物見の、代行？」

期間は最大三日間。午前十時から午後八時までと書かれている。

「はい。基本的な仕事はそれになります」

ギルド経由の依頼らしく、張り紙に書かれていない詳しい事情までキルリスは鋼に教えてくれた。

「街の物見というのは、街に近づいてくる雑魚モンスターを倒したり、強力なモンスターが出た場合、街に警告を出す仕事ですね。」

最近街を襲う魔物の数が減っているので、この機会にと物見から休日の申請が出るそうです。

とはいえ、さすがに物見がないのはまずいので、その間の交代要員をやってくれというのが依頼内容ですね」

「物見は門番とは違うんですか？」

「門番はレベル30以上の戦士でないといけないと決まっています、モンスターの撃退の他に通行人のチェックなど様々な仕事をします。」

物見は門番が雑魚モンスターにわずらわされないよう露払いをしたり、倒すべき強力なモンスターが来ることを事前に知らせるため、街より少しだけ離れた場所で仕事をするんです」

「要は門番の補助か」

それなら何とかやれそうな気もする。

「この依頼がフリーランクなのは、最悪物見が何も仕事をしなくても、門番さえいれば一応街の安全は守れること。」

逆に高レベルの冒険者なら、普通の物見以上の仕事をこなせるだろうというのが主な理由です」

「普通の物見なら門番に任せるようなモンスターも倒していいってことですか？」

「はい。この依頼、基本給は出ますが、基本は出来高制。」

強いモンスターを倒せばボーナス、逆にモンスターを発見できずに門まで通してしまうとペナルティが課せられます」

「うーん。ちなみに、どんなモンスターがやってくるんですか？」

「弱いところだとレベル5のスライム、一番強くてレベル25のフロレストウルフくらいでしょうか。」

ただ、ここ数日は比較的安全で、モンスターもこっちから探さないと見つけれないくらいです」

冒険者としては仕事が減るのであんまり喜んでもいられないんですが、とキルリスは笑った。

「うーん」

鋼は大いに悩んでいた。

失敗してもあまりリスクのない仕事のようだし、引き受けてもいい気もするのだが、現状レベル5スライムも倒せないだろう自分が受けても迷惑だろうということはさすがに分かる。

しかし、こちらもお金を稼がなければ死んでしまうワケだし、だけど物見なんてやっていても死んでしまうかもしれないし、と思考の袋小路に迷い込んでいた時だった。

「依頼を探している！」

後ろから来た銀色の何かに、鋼は吹き飛ばされた。

「うわああ！」

地面に頭からぶつかりそうになって、慌てて手をついた。

「あ、あぶねええ…！」

心臓が早鐘を打っていた。

こちらら最弱人間であり、人とぶつかったり転んだだけで死の危険があるのだ。今のはむしろ九死に一生スペシャルと言えた。

「死んだらどうする…！」

押しのけられた苛立ちと、死にかけて恐怖をごまかすため、鋼は自分を押しつけた人影に怒鳴った。

だが、鋼の声に困惑したように振り返ったのは、

「あれ？ …… 女？」

ファンタジー物の勇ましいヒロインのような白銀の鎧をまとった、金髪的美少女だった。

ミスレイはかなりの美人であつたし、今日の前にいるキルリスもそれなりに身ぎれいに行っているが、今鋼の前にいる少女は、それを上回る美貌を持っていた。

なんというか、もうすでにオーラが違う。

薄い白銀色の板金で作られた鎧に包まれた身体は、やや細身ながら完成された美しさを感じさせ、その上を流れる煌めく金の長髪は、ややキツめながら整っている顔立ちを豪奢に彩っている。

そんな彼女がピンと背筋を伸ばしたその凛とした立ち姿は、『聖女』や『聖騎士』という言葉がこれ以上似合う者はいないだろう、と鋼に思わせるほどだった。

だが残念ながら、彼女が女であることを指摘してしまったのは、鋼にとって不幸なことになりそうだった。

困惑だけに彩られていた少女の緑色の瞳に、すぐさま怒りと敵意がにじむ。

「私が女であると、貴様に何か不利益でもあるのか？」

最初半身だけで振り返っていた少女は、鋼の言葉に全身を振り向かせた。

それから苛立ちと侮蔑を感じさせる眼差しで、地面に倒れる鋼の姿を見やった。

「大体何だ貴様は！ ほんの少し肩がぶつかっただけで、殺されかけたのだと因縁をつけるとは！」

そうやってそこに転がっていることだって、自らの実力不足が原因だろう!?

おまけにそんな金に飽かして集めたような、金色ばかりの趣味の悪い装備。まったく、男の癖に軟弱な!」

もしかすると、彼女には自分が女だということにコンプレックスがあつたのかもしれない。

だから売り言葉に買い言葉のようなもので、こんな暴言が飛び出したのかもしれない。

そんな理屈は鋼にも分かったが、やはりその台詞には、鋼もカチンと来た。

もつたいをつけて、ゆっくりと立ち上がる。

だが、その間にも鋼の頭の中はめまぐるしく回転し、これからすべきことを考えている。

「へえ。自分が女だと言われるのが嫌なくせに、他人には『男の癖に』、なんて言うんだな」

「ぐっ。それは……」

「おまけに事実を確かめもせず、因縁をつけただの、実力不足だのと決めつける。」

どっちが因縁をつけてるんだか……」

「う、うるさい! 私は、騎士……いや、『元』騎士だが、心には正義の心と公平無私の精神を宿している!」

謂れない誹謗中傷を続ける気なら、決闘だって辞さない覚悟があるぞ!」

「そうやってすぐに暴力に訴えようとする人が、正義だとか公平無私だなんて笑わせる!」

「貴様っ!」

皮肉げに笑う鋼と激昂する少女。

たちまちの内にギルド内の空気が張り詰める。

実際少女などは、今にも帯剣を抜きかねない雰囲気だった。

「ギルドの内での刃傷沙汰は禁止されています」

そんな二人の熱を覚めたのはキルリスの落ち着いた声だった。

少女はその声にハツとして、腰に伸びかけていた右手から力を抜く。

だが、もう一方の当事者であった少年、鋼は、それで矛を収めはしなかった。

「だったら、刃傷沙汰じゃない勝負ならいいんだろ？」

「ハガネさん?!」

鋼の弱さを知っているキルリスが思わずといった風に驚きの声を漏らした。

「私に決闘を申し込むというのか？」

少し冷静さを取り戻したものの、まだ感情の収まらない少女も、当然その流れに乗る。

「決闘じゃない。勝負だよ。まさか、正義と公平さの体現である騎士様がケンカなんてするワケにはいかないだろ？」

「む! 決闘とは喧嘩ではない! 互いの名誉を賭けた神聖な……」
「色々理由をつけても、どつきあうのは変わらない。だったら騎士らしく、人々を守ることで勝負つていこうはどうだ？」

「人々を守る、勝負？」

思ってもみなかった流れに、硬直する少女。

そこで鋼は、場の成り行きについていけないキルリスを振り返った。

「キルリスさん! 冒険者ギルドの力で、この街の物見を代わってもらうことはできますか？」

「……はい。ちょうど物見の方たちから休暇の申請が出ているそうですし」

「なら、お願いします」

まるで、決定事項のように頭を下げる。

「ま、待て！ 貴様は何をするつもりだ？」

思わぬ大事になり驚く少女に、鋼は告げた。

「分かるだろ。勝負だよ。」

ルールは簡単だ。これから四日間、午前十時から午後八時まで、僕ら二人はこの街の物見を務める。

あんまり複雑な勝負にしても興ざめだからな。

先にレベル30以上のモンスターを倒した方が勝ち、っていうのはどうだ？」

「レベル、30か。いいだろう。だが、四日間でもしレベル30以上のモンスターが出なかった場合は？」

「その四日までに物見をしながら倒した、他のモンスターの討伐数で決める、でどうだ？」

「……いいだろう」

少女は警戒したような目をしながら、うなずいた。

「分かっていると思うが、手を抜いたりするなよ。これは……」

「するはずないだろう！ 除隊したとはいえ、私は騎士だ！

街の治安維持の一角を担う仕事をないがしろにはせん！」

「なら、僕としても文句はない」

あっさり、鋼は引き下がる。

「勝負のルールはさっき言った通りだ。そして、敗者は……」

「何だ？ 金か？ それとも私の体でも求めるか？」

侮蔑と自嘲の交じったような笑みを浮かべる少女に、鋼は軽く首を振った。

「いや、そんなものは必要ない。」

「少なくとも、僕が敗者に求めるのは謝罪だけだ」

「……そうか。なら、私も、それだけでいい」

鋼の言葉を耳にして、少女の勢いが目に見えて鈍った。

それを不思議に思いながらも、鋼は話をまとめにかかる。

「勝負は明日からでもいいな？」

「なら、明日の九時半、ふたたびここに集合、キルリスさん……ここにいるギルドの人に物見についての説明を受けてから、勝負に向かう。」

「……何か異論は？」

少女はしばし考える仕種をした後、

「……ない。私が貴様を誤解していたとして、それも明日以降の勝負によって知ることができる。」

そして、私が己を語る術もまた、この剣以外にない」

そう言うなり、踵を返し、ギルドを出ようとする。

「待て！ まだ、一番大事なことを聞いていない」

それを引き留めるのは、当然鋼だ。

「一番、大事なこと？」

見るからに怪訝そうな表情で振り返る少女。

そんな彼女の目を一直線に捉え、少年は言った。

「僕はハガネ。ハガネ・ユウキだ。君は？」

少年の射るような視線に、少女は真っ向から応え、

「アステイエール。アステイエール・ベル・フォスラムだ」

それからもう、一度も振り返らずにギルドを後にした。

「ふひゃあ……」

そして、ドアが閉じて数秒後。

鋼は気が抜けたようにその場に座り込んだ。

そんな鋼に、キルリスがねぎらい半分、呆れ半分の言葉をかける。

「お疲れ様。でもよくやりますね、こんなこと」

「いや、ちよつとイラツとしたのも事実ですし。でも、内心ドキドキでしたよ」

それは事実だった。

鋼はできるだけポーカーフェイスを貫こうとしていたが、心臓は早鐘を打ち、手は汗ににじんでいた。

ついでに言うと、途中助言をもらおうと頭の中でシロニヤを呼んだのだが、

【なんでじゃ。なんで全然盗めないのじゃ！】

という独り言が返ってくるだけだった。

たぶん、というか間違いなく、何かのゲームに夢中になっていたのだろう。

しかし、もちろん、鋼はただカツとなって少女に勝負を挑んだワケではなかった。

「と、いうワケで、物見の代行の依頼、お願いします」

目的は、当然コレ。

鋼単独では物見の仕事はできそうもないが、勝負にかこつけてあの元騎士様に働いてもらえば（しかもただ働き！）その限りではない。

もちろんアステイエルとかいう少女が倒したモンスターの分まで報酬をもらおう、なんてがめついことは鋼も考えてはいないが、彼女のせいで死にかけた分くらいは儲けさせてもらってもいいだろうと思っっている。

「はいはい、了解です。でも、いいんですか？ この仕事、期間は最大で三日ですけど」

鋼は勝負の期間は四日と告げていた。

「あはは。だって一日余分にとっておけば、いざとなったら依頼のお金をもらって最終日に逃げ出せるじゃないですか」

「うわ。ひどいですね。ミスレイの素質があるかもしれないですよ」

「その台詞こそ、ひどいですよ。僕はひどいことなんて何もしてませんよ。」

僕はお金がもらえて幸せだし、物見の人は休暇がもらえて幸せ。

あのアステイエルとかいう人だって、街の人のために働けるんだから幸せですよね？」

「ふふ、ハガネさん……」

それを聞いて、キルリスは実に艶やかに笑うと、本当に楽しそうに、言った。

「あなた、最低です」

第十四章 凄いぜ、天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃！！

「では、依頼の前金をお渡しするので、カードを出してください」
鋼はキルリスの指示に従って、カードを渡す。

キルリスは手早く操作をすると、カードを戻してくる。

「今のは？」

「知らないんですか？ 霊子をカードに入れただけです」

「れ、霊子？」

「そこからですか？ 簡単に言えば、魔力の塊です。」

何にでも使えてどこに行っても需要が見込めるので、全世界的に貨幣の代わりになっています」

「な、なるほど……」

ファンタジー世界における常識という奴だった。

さらに詳しく聞いてみると、その霊子はカードにも宿らせることができるため、電子マネーならぬ霊子マネーとして、カード一枚で買い物ができるらしい。

「冒険者カードは身分証明や能力の確認、それに霊子のやり取りにも使います。」

基本的に登録者の許可がなければ使えませんし、紛失しても念じれば手元に召喚されますが、抜け道がない訳ではないので注意してください」

「わ、分かりました」

キルリスの説明を聞きながら、鋼はあらためてカルチャーショックを感じていた。

（文化レベルは現代日本の方が上だと思ってたけど、あながちそうでもないかも）

どうも、この世界では霊子を使って現代におけるライフライン、電気・ガス・水道のようなもの完備させているようだ。

この分では魔法で携帯電話みたいなものくらいは作ってそうだし、意外と快適な世界と言えるのかも知れない。

(万能すぎるよな、魔法……)

なんて考えながら、キルリスから霊子がチャージされた冒険者カードを受け取る。

依頼の前金は200マナ。マナは霊子の単位で、宿屋で食事つきで一泊するのが50マナくらいらしいので、それなりの金額だ。

ついでにその宿屋の場所を聞いて、泊まる上での注意点なんかも聞いて、ギルドを出ることにする。

「では明日の午前九時半にこちらに来てください。

くれぐれも、足元には注意して、絶対に転ばないでくださいね！」

最後のあいさつが転ぶなというのはどうなのかと思ったが、実際文字通り死活問題ではあるので、軽くうなずいて外に出た。

空は今度こそ、夕闇に染まっていた。

「結構時間、経ってたんだな。まあ、色々あった気がするもんなあ」

この世界にやってきてから、まだ半日も経っていないなんて信じられない。

いや、それを言えば、ほんの数日前までは鋼は平凡な高校生だったのだ。

それが、この剣と魔法の不思議な世界で一人で生きていかなければならない。

そこまで考えて、首を振った。

考えてみれば、鋼は一人ではなかった。

「シロニヤ、いるか？」

思いついて、今まで応答のなかった女神さまに一応声をかけてみる。

【なんじゃ？ 今、ちよつと立て込んでるんじゃ】

「ずつと熱中してたみたいだもんな。何してたんだ？」

【今、ちよつと攻略本片手にレアアイテム集めをしとったんじゃ。

敵ユニットが最強クラスのレア装備を持つておつてな。

盗める確率は0%と表示されるんじゃが、このゲームでは小数点以下を切り捨てとるから、実際には小数点以下の確率で盗めるそうなんじゃ】

「なんかうさんくさいな。それ、本当に盗めるのか？」

【大丈夫！ ファ○通の攻略本じゃぞ！？】

「大丈夫の基準が分からない！」

【まあ、ゲームはとりあえずよいのじゃ。……うむ。

か、神様たるもの、と、とと、友と語らう時間も大切にせねばい、いかんからの】

「そんなにどもるほどの台詞か、今の」

【ふん！ ぼっち歴三年のワシを甘く見るでないわ！】

「さすがに『友達いない歴〃年齢』の奴は僕も初めてだよ！」

【ふん！ ようやく分かったようじゃな。よし、ワシを崇め奉ることを許可するのじゃ！】

「なんか信仰するとご利益で友達が減つていきそうで嫌だな」

【それはご利益じゃなくて呪いじゃよ！！】

……じゃが、そのアイデアもなかなかじゃな】

「やる気満々かよー！」

【冗談じゃよ。そこまで言うならワシが役に立つところを見せてやるのじゃ。

何かやってほしいことや聞いておきたいことはないかの？】

「んー。聞きたいことか。あ、そういえば、受付の人が僕のアビリティとタレントが見れないって言ってたけど、心当たりは？」

【うむ。それは『技能完全隠蔽』の効果じゃろうな】
鋼としてはダメ元で聞いた部分もあったのだが、シロニヤはあっさり結論を出した。

「ぎのうかんぜんいんぺい？」

【うむ。そうじゃ】

「効果は？」

【アビリティおよびタレントを隠す能力じゃな】

「つまり、専用の魔法とか特技を使わないと見れなくなるって感じ？」

しかし、それに対してふふんと勝ち誇る気配。

【『完全』とあるじゃろ？ だからどんな高レベルの鑑定でも、どんな高レベルアビリティでも見ることはできん】

「へえ」

【それどころか、強い技能を感知する技能がある人間も気付かないし、特定の技能に反応する技能を持っていても反応しない】

「すごいな」

【ふふん。それだけではないわ！ 『完全』と言ったである？ それは誰にとつても例外ではない】

「つまり？」

【そのタレントを持っている本人にも自分の技能が分からなくなるのじゃー！】

「ドあほおおおおおおおおおおお！」

【ま、また！ また耳がキーンとなったのじゃ。おぬし、おぬしは鬼じゃあ……】

「お前なんか神さまだろ！ やーいやーいお前のかーちゃん創世神！」

【ううう。なんじゃろう。別にけなされてる訳じゃないというかむ

しろほめられておるのにバカにされてる気分になるう】

「あははは！ ざまーみるー！」

三歳児と張り合って、大いに精神年齢を下げる鋼。

【ふん！ そんなことを言うなら、アレじゃぞ！ 耳にふうーって息を吹きかける刑じゃ！

しかもオラクルだからおぬしに逃げ場はないのじゃ！】

「地味に悪質だな！」

鋼は戦々恐々とするが、そんなことで手心を加えるシロニヤではなかった。

【ふふん！ 今さらおののいても遅いのじゃ！ ワシの恐ろしさをその耳に刻んでやるのじゃあ！】

むしる勝ち誇ったように勝利宣言をすると、

【ふ、ふうーっ！ ふうううう！】

全力で耳に息吹きかけ攻撃を始める。

しかし、

「いや、何ともないけど」

鋼は特に何も感じなかった。

【しまった！ アレじゃな！ おぬし『ブレス無効』を持っておるな！】

ブレスというのはアレだろうか。竜とかが吐いてくる『しゃくねつ』とか『かがやくといき』とかのことだろうか。

しかしどうやらゴッドブレス（神様のふうーふうー攻撃）も防ぐ効果があるらしい。

なんて無駄なタレントの使い方。これがまさに才能の無駄遣いか、などと、鋼は自らの技能に感謝していいやら呆れていいやら、複雑な心境になった。

「やっぱり、僕の中にはこういう無駄タレントがたくさん眠ってる

んだよな」

【まあ、そうじゃのう。少なくとも三百万ポイント分は眠っとるはずじゃ】

三百万ポイント分のタレント、なんていうのも鋼には想像できない。

ただ、それよりもものすごい筋力とかもつと分かりやすいチート能力でも欲しかった、と思うばかりである。

【わがままな奴じゃのう。

目標にした相手が夜中に爪を切ると必ず深爪をしてしまうという『深爪の呪い』とか、左手の親指で相手の頭頂部を触ると十分後に腹を下すという『神の左手』じゃとか、色々と人の破壊欲を満足させる能力もあるというに】

「……………」

それで破壊欲が満たされる奴なんていないだろと思いつつ、絡むと面倒くさそうなので無言を貫いた。

無心で歩き続けるが、なかなか宿屋は見えてこない。

「それにしても宿遠いなあ」

【そりやおぬしの足が遅いせいじゃろ？】

「そうかな。…………つと、ちよつと待った」

【なんじゃ？】

「…蚊」

虫くらはいは元の世界と同じのがいるのか、と腕に止まった蚊を（筋力0なりの）全力ではたくと、

「うわあ!?!」

叩いた蚊から小さな白い何かが出て空に昇って行き、同時に、

『ハガネはレベルが上がった！ なーんてね』

冒険者カードが、いきなりけつたいな音を立てた。

「い、今のは何だ？」

動揺する鋼に対して、シロニヤは平然としていた。

【白いものが天に昇ってつたんじゃろ？

じゃったら蚊を倒したのじゃ】

「今の白いのはなんだったんだ？」

【そりゃ、アレじゃよ。魂じゃよ】

「ええ？ 魂？」

【この世界では、死んだ動物や魔物の体は霊子やアイテムに変換され、魂は天国に旅立つんじゃ】

「なんだその偽善的お手軽設定！」

【じゃってここ、ゲーム的世界じゃから。心配しなくても人間を殺した時は死体が残るから気にしなくてもいいのじゃ】

「まあ、それはそれで嫌だけど……。しかし魂に天国があ」

現代の科学万能主義に染まった鋼としてはなかなか受け入れられない話だった。

【まあ、天国という呼び名が嫌なら、『喜びの野』と言う奴もおるし、もつとゲーム的に言うこともできるのじゃ】

「もつとゲーム的？」

【うむ。『はじまりの森』じゃ！】

「……まあ、別に天国でいいけどさ」

鋼は折れた。

「で、それはそうとこっちだけど……」

現実逃避気味に冒険者カードを取り出すと、

「うわ。やっぱりレベル上がってる」

L V 2 H P 3 1 M P 1 1

筋力 0 知力 0 魔力 0

敏捷 0 頑強 0 抵抗 0

しかも、HPMPに関しては大躍進。だが、筋力などはまだ0のままだ。

【レベルによって上がるのは、基本的にHPとMPだけなんじゃ。他の能力値は、それぞれに対応した行動をすると上がるのじゃ】
先回りして、シロニヤが説明してくれた。

「そつか。これで最弱じゃなくなっただかと思っただけだ」

【ちなみにHPはどこまで上がったのじゃ？】

「31」

【……そりゃ、チートじゃのう。HPの上がり幅が大きくなるタレントを持つてるようじゃぞ？】

少なくともこれで、転んで即死、状態からは脱出したと考えていいじゃろ】

「そつか」

鋼はふいー、と息を吐き出した。常にサドネス状態は心臓に悪かった。

「というか、蚊を倒しただけでレベルアップとかするんだな」

【まあ所詮レベル1じゃしな】

「そついや、レベルが上がった時カードから変な音が出たけど……」

【『L V U P効果音変更』のタレント効果、かのう？】

「やっぱりまた無駄タレントの効果か……」

【無駄とはなんじゃ無駄とは！ 『L V U P効果音変更』のレベルアップ音声は、全十万三千種もあるんじゃぞ！】

「それが無駄だってんだよ！」

怒鳴ってはみるが、無駄機能としか思えないような『黄金聖闘士化』などに救われた経験もあるので、鋼としてはそう強くも言えない。

（そもそも、一番使ってるオラクルだって普通なら無駄機能っばい

し……)」

と考えて、鋼はふと気付いた。

「あれ？　そういえば、オラクルはタレントとかアビリティとかじやなくてスキルなんだよな？」

それもこのカードで見れるのか？」

【何を言ってるんじゃ？　スキルは技じゃからな。カードも何もなくとも、自由に使えるし見られるぞ？】

「え？　ほんとうに？　どうやって？」

【アイテムボックスを使った時と同じじゃ。今回は何にもさわらずに、ただ技を使いたいと念じればよい。

さすればスキルウィンドウが開くはずじゃ】

「え？　そんな簡単に？」

【そりゃそうじゃろう。じゃって、カードがなかったら技が使えないなんてことになれば、誰もが何かしらのギルドに入らなくちゃいけないなるじゃろ？】

一理あるようなないような……。

鋼は半信半疑くらいの気持ちで、脳内ウィンドウを開ける。アイテムボックスの時の経験から、今度はスムーズにいった。

「う、わっ！」

スキルウィンドウを開けた途端、大量のスキルが表示されて、驚いた。

だが、よく見てみると、その中で使えそうな技はわずかに二つだけ。他は消費するHPやMPが多すぎてしばらく使えそうにない。

一番消費量が多かったエターナルフォースなんかやらかいう技に至っては、MP消費が999999だった。一生使うことはなさそうだ。

使えそうな物の一つは、HP3消費の『時間停止』。そして、HP31消費の『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』だ。

どちらも強そうな名前の割に、消費が少ない。『時間停止』なら

問題なく今でも使えるし、『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』にしても、今の鋼の現在HPはちょうど31なので、あと少しでもHPが上がれば使えるようになるだろう。

「とりあえず、『時間停止』なんて凄そうな大技が消費3なんだが、知ってるか？」

【あー。それな。うむ。もちろん知っておるぞ。

二十秒間、術者の半径2メートルの空間の時間を停止させるのじや】

「すごい技だな。これが何で消費3なんだ？」

聞かれると、シロニヤはバツが悪そうに答えた。

【あー。まず、それを使うと周りが見えなくなるのじや？】
「は？」

【何しろ半径2メートルの光が止まっちゃうじやろ？ じゃから、周りがどうなってるのか分からなくなるのじや】

「な、なるほど……」

【ついでに空気も止まるので、呼吸もできなくなる】
「それ死ぬだろ！」

【あとこの辺りはよく分からのじやが、分子振動も止まっとるので、たぶん周りが絶対零度になるのでは、と言われてるのじや】

「さわったらアウトじやないか！」

【じゃのに地球で使うと時間停止した場所は地球の自転から全力で置き去りにされるので、慣性のついた術者の体は全力で時間停止した場所に押し付けられる】

「死亡確定だろそれ！」

【地球じゃなくてよかったのう？】

「絶対使わんわこんな地雷スキル！」
消費HP3の謎はあっさり解けた。

「じゃあもう一個の、ええと『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』は分かるか？」

こっちもどうせ無駄スキルなんだろうな、と半ばあきらめながら、鋼は尋ねた。

【んう？ あー。』てんまめつさつ、こくかいじん、げき？』じゃる。もちろん覚えておるのじゃ】

「『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』な」

【わ、ワシもそう言ったのじゃ！】

「うん。もうそういうことでいいから、さつさと効果を教えてほしいんだけど」

【ぬうう。おぬし、最近ワシへの敬意がどんどんなくなってきてはおらんか？

しかし、天魔……何とかは、ワシが選んだとおきの技じゃぞ！

この効果を聞けば、おぬしもワシを見直すはずじゃ！】

「え？ これそんなに強いのか？」

【超強力な技じゃぞ！ 何しろ、一億とんで二千発の攻撃を間断なく相手に食らわせる連続攻撃じゃからな！】

「攻撃回数尋常じゃなく多いな！」

【しかも、一撃一撃の威力が通常の三倍！】

「おおお！ でも、そんな連続攻撃だったら途中で敵に逃げられたりしたら悲しいことにならないか？」

【一発目が当たったら確実に相手はストップ、必ず残りの全攻撃が入るのじゃ！】

「本当に使えるじゃないか、それ！」

【しかも、技の最初にHPを消費するだけで、一億発以上攻撃しても疲労感なし！】

「おおおお！」

【それだけじゃないのじゃ！ 最後のー撃がまた強烈なんじゃ！】
「へえ。通常の十倍ダメージとか？」

その鋼の予感、無事に宿屋に着いて眠ろうとしたところで現実になった。

ちなみに宿屋への宿泊自体は問題なく進み、用心のため、なんとなく偽名でチエックイン。

その後金額を確認して宿屋の水晶版みたいなものにマナを振り込んだらすぐに終わった。

で、宿屋の食堂でご飯を食べて（何気に転生後初の食事だった。結構おいしかった）、部屋に戻ってさあ寝よう、というところで、シロニヤが声をかけてきたのだ。

【き、緊急事態なのじゃああああ！】

「な、どうしたんだよ！」

のんびり寝ようとしている所に急にオラクルで大声を出されて、鋼は飛び上がった。

【最後の石版のかけらが見つからないのじゃあ。ワシは、ワシはどうしたら……】

「寝ろ！」

【待つのじゃー。待つんじゃよー。本当に見つからないのじゃー】
「ネット見る！」

【見たんじゃ、見たんじゃけど、使ってたサイトに行ったら、『せるべる』のほうんど』って言われて……。

もしかして、ワシのパソコン壊れちゃったんじゃるか？】

「せるべ……あー。server not foundか。壊れてないから。ただ攻略ページが終わっちゃっただけだから。」

もう一回グー◯ル先生かヤ◯先輩に頼んで、生きてる攻略ページを見つければいいんだよ」

【そうすれば最後の石版、完成するかの？】
「するする」

【そうか！ そうかそうか！ すまんの、本当に不甲斐ない神様ですまんの。じゃけどワシ、三歳児じゃけえ】

「分かった。分かったから。とにかく寝かせ……」

【おぬしは本当に頼りになるのう！ うむ！ おぬしはやはりワシの最高の友じゃな！】

それを聞いた瞬間、鋼は何だか嫌な予感を覚えた。

ほぼ同時に、頭の中で『トゥツトゥル！』という感じのファンファーレが鳴り響く。

しろにゃ の なかよしど が 25 あがった。

しろにゃ との かんけい が ひよくれんりのもとも になった！

はがね は おらくる(てんぷふあいるつき) を おぼえた！

しろにゃ の さーびすしょつと が おがめるように なった

!!!!!!

「いらんわっ！」

鋼はまだ何かを言っているシロニヤを無視して布団をかぶった。

その夜。今度は【ボスがたおせないのじゃー】と泣きつかれた鋼が寝不足になったのは言うまでもない。

第十五章 覚醒の予兆

アステイエルは元騎士である。

先祖にも何人もの偉大な騎士を輩出してきた自らの家系にならない、アステイエルも迷うことなく騎士の道を選んだ。

幼少の頃より、かつて国一番の騎士と謳われた祖父の指導を受け、本人にも才があったことから、騎士としての技量はめきめきと上がって行き、12歳で騎士候補になった時には既に、その剣の冴えは最上位の騎士にも劣らぬほどだった。

だが、彼女にとつての不幸は、年を経るに従って成長したのが剣の腕だけではなかったことである。

幼い頃より、活発で可愛らしい子として男女問わずに人気のあった彼女だが、成長するに従い、その美貌もまた際立っていく。

生来の気の強さとは対照的な儂げな面差しは多くの男共を魅了し、どれだけ鍛えても少女そのものの肉の薄いその体は、ある種幻想的な、妖精のような美しさを醸し出す。

そしてその体を制御する、訓練と規律の行き届いた流麗ながら力強さにあふれる所作や身のこなし。

それは、非常にアンバランスな、それ故に人を引き付けてやまないガラス細工のような美を生み出した。

彼女の美しさを狙って、あるいは、彼女の美貌から来る影響力を利用しようと、有形無形のありとあらゆる策謀が彼女を取り囲んだ。幸い、彼女が持つ『不可侵の聖色』という、鋼が聞いたなら「厨二！ チート！」と叫びそうなタレントは邪な企みを持つ者の接近を許さなかったし、毒や睡眠薬などの直接的な手段による謀略を防いでくれた。しかしそれは隔絶した才能や美貌の生む羨望や嫉妬から身を守ってくれるものではなかったし、直接的ではない謀略には

全くの無力だった。

気付けば彼女は、誰よりも高い戦闘の腕と、比類なき名声と、やや独善のきらいはあるものの気高き心を持っていると誰しにも認められながら、騎士の座を追われることになった。

そして、

「その末路が、コレか」

思わず呟かすにはいられない、この惨状。

アステイエルは騎士の職を辞した後、すぐに隣の街に移り、冒険者ギルドに向かった。

自分を騎士の座から追い落としした者、それを黙認した者たちに目にも物見せてくれようと冒険者ギルドを訪れたまではよかったが、そこで妙な男におかしな言いがかりをつけられ、さらには勝負を持ちかけられる。

考えてみれば、いくら勝負とはいえ、街の物見という本来対価をもらって行っはすの仕事をしたでやることになっているのだが、まあそれはいい。

騎士時代の収入はほとんど使わずに残っているのでお金には余裕があるし、物見の仕事は街の人々のためになるので、騎士の精神にも合致する。

問題は、現在の勝負の相手であり、物見の仕事の相棒である。

名前はたしか……ハガネ、とか言っただろうか。

対立する過程でこの男も意外と気骨があるのかと考えたものの、次の日、実際に勝負が始まって、その評価は覆された。当然、悪い方に。

まず、動かない。まったくもって動かない。

たしかに前にギルド員に聞いた通り、魔物の数は普段に比べて激減しているものの、それでもスライム程度なら何度か現れた。

しかし、ハガネは、
「僕は大物専門だから」

と言つて、一瞥すらしない。

いくら小物とはいえ、街を脅かすモンスターであることには変わりない。放置することも出来ず、全てアステイエルが処理することになった。

それだけなら、まだ許せる。イライラはするがまだ許せる。

しかし、一番度し難いのが、アステイエルが横に立っていると
いうのに、それを全く無視し、ぶつぶつと独り言を言い続けている
ことだ。

アステイエルは、どこにいても、誰からでも注目される人間だ
った。

いくら本人が放つておいてほしいと思つても必ず誰かが寄つてく
る。たまにあえて無視をしてくる人間がいたにはいたが、その陰に
は何かの思惑が隠されており、相手が彼女の存在を強く意識してい
るのがはつきりと分かった。

だが、今彼女の横にいるハガネという少年は違つた。

アステイエルが何をしていても完全に意識の外、完全無視で楽
しそうに独り言を言いながら、時々やにやしたりしている。

これはアステイエルに失礼なだけでなく、仕事の効率という点
でも愚策としか言えない最悪の態度ではあるまいか。

そんな風にアステイエルは思う。

お互い時間をずらして一時間だけ休む（その間に倒したモンス
ターについては勝負に影響しない）のだが、それ以外の八時間を共に
過ごすのだ。

だったらお互いが退屈にならないよう、最低限の会話くらいはす
るのがマナー、エチケットなのではないか。

アステイエルは自分が鋼と勝負していることなど忘れて、そんな風にも思う。

「貴様は、独りでぶつぶつと、一体何をしているのだ？」

一度だけ、仕方なく会話をしてやるうと話を振ったこともあったのだが、

「エア友達と話してるんだよ！ 悪いか！」

「い、いや、悪くはないが……。しかし、寂しくないか？」

その、近くに生身の人間がいる場合はそちらに……」

「ともちゃんをバカにするな！ ともちゃんはかわいくて頭もいいんだぞ！」

「す、済まなかった……」

なぜか謝罪するはめになって黙るしかなかった。

『煌めく聖色』『不可侵の光姫』とまで言われたアステイエルの、完全敗北である。

ちなみに、彼女には知る由もないが、その裏ではこんな会話が繰り返されていた。

【か、神様を捕まえてエア友達とはなんじゃ！ エア友達とは！】

「ただごまかしたただけだろ。そんなに怒るなよ」

【じゃ、じゃって。ワシは、エアなんかじゃなく、ちゃんとおぬしの友達じゃろ？】

「え？ 何？ デレモード？」

【で、デレとか言うでないわ！】

それより、ゲームの続きをやるのじゃ！】

「ええと、じゃあもう一回しりとりやるか？」

【む。むうー。それは嫌じゃよ！ おぬしは『る』でばっかり攻めてきてズルいのじゃ！】

【ここは平和的に古今東西に決定なのじゃ】

「ヒマ潰しになれば何でもいいけど。お題は？」

【マンガとかゲームに出てきそうな地名や人名、でどうじゃ？】
「なんかマニアックだな！」

【じゃーワシから行くぞ。サラミス海戦！】

「いきなり地名でも人名でもないな！ えっと、カスケード山脈！」

【マゼラン海峡！】

「インノケンティウス三世！」

【アルビオン！】

「だんだん微妙になってきたな。マリク・シャー！」

【普通にかっこいい名前路線で来るとは！ おぬし、あなどれんな
！】

「おまえもなー！」

実に楽しそうである。

その間も隣から矢のような鋭い視線がガスガス突き刺さっていたのだが、鋼は古今東西に夢中で全く気付いていなかった。

やがて午後二時になり、あらかじめ決めておいた鋼の休憩時間となる。

「じゃあ、一時間後に」

なぜかすごい目つきで睨んでくるアステイエルとはできるだけ目を合わせないようにして、鋼は街に戻っていく。

「ふいー」

行きつけの店などないので、見かけた屋台で鳥の串焼き（のように見える何か）を買って、とりあえずギルドに行って休むことにする。

「あ、ギルド内は飲食物持ち込み禁止ですよ！」

「え？ あ、そうなんですか？」

「ま、いいです。どーせお客さんもいませんし。」

座ってください。お茶くらい出しますよ」

「はぁ。ありがとうございます?」

いいのかな、と思いつつ、鋼はその言葉に甘えさせてもらった。

お茶を片手に、二人で向かい合う。

「どうですかそっちは? 順調ですか?」

「はい。あの騎士の人がスライムを何匹か倒してたみたいですよ」

「他のモンスターは?」

「たぶん、まだ出てないんじゃないですか」

「はぁ。やっぱりそうですか。」

ハガネさんは、戦ったりしていないんですか?」

「全く戦ってませんよ。雑魚モンスターだって僕の手にはあまるでしょうし、たぶんLV30以上の敵とかが出てきたら即座に逃亡します」

大物狙いだとアステイエルには言ったし、LV30以上の敵を倒したら勝ち、などというルールにしているが、それは勝負を長引かせつつ自分の実力を見せないために言った方便であり、鋼としては内心ではLV30以上のモンスターなんて来るはずないと考えている。

「そっちはどうなんですか? 見たところ、人が全然いないみたいですけど」

鋼がキルリスの方に話を振ると、彼女は疲れたような仕種で首を振った。

「こちらは全然です。今日は昨日にもましてモンスターの姿がなくて。」

もしかして、そろって休眠期にでも入ったんですかねえ……」

「モンスターにそういうのってあるんですか?」

「今までに聞いたことはありませんけど」

「そうですか」

原因は不明らしい。

「面白い話を聞かせてあげましょうか」

「急になんです？」

鋼は不審そうに聞き返したものの、興味があることはその表情を見れば分かった。

キルリスは気にせず続ける。

「ハガネさんたちが物見をしている場所の正面に、大きな岩山があるのを覚えていますか？」

「……そういえば、そんなものもあったような」

最初の内はシロニヤと話もせず、多少真面目に周りを見ていたので、地形はよく覚えている。

街を背にして、左手に森、右手に平原があり、ちょうど森と平原の中間辺りに大きな苔むした岩山があったような覚えがある。

「その岩山、実は休眠したモンスターなんです」

「あんなに大きいのが、ですか？」

岩山は、遠くにあつて正確な大きさなど分からないが、目算でも30メートル以上の高さがあったように思えた。

キルリスは、

「そうですね、あんまり驚かないんですね」

と少し口をとがらせてから、

「ただ、あのモンスター、溶岩竜ラーバドラゴンっていうですけど、元は人間より小さいくらいの弱いモンスターだったんです」

詳しい話を聞かせてくれる。

「あのモンスターは、昔子供だった頃に人間の魔物使いの仲魔になつたんです。」

それから、その魔物使いと一緒に冒険をする内に5メートルほどの成体になって、強力な戦力になっていきました。

でも、問題はその後。主人だった魔物使いがモンスターに殺されて、暴走したんです」

「暴走？」

「はい。普通のモンスターは、モンスター同士で争うことはほとんどありません。」

けれど一度人間と一緒にモンスターを倒すことを覚えたそのドラゴンは、主人が死んで野生に戻った後も、モンスターを倒し続けました。

そして、人間が経験値を得て強くなっていくのと同様に、モンスターの霊子を奪って、そのドラゴンはどんどん成長を続けました。

体高は50メートルを超え、その口から吐く豪炎のプレスは一噴きで辺り一面を荒野に変えたとか。

ボスに匹敵するほど巨大なモンスターとなったそのドラゴンは、当然ながら人間とも衝突、激闘の末に封印され、できたのがあの岩山、という話です」

そうして、キルリスは長い語りを終えた。

「今の、本当の話なんですか？」

「さあ、どうでしょう。でも、夢がありませんか？」

人間よりも小さくて弱いモンスターが、最後には50メートルを超す、強大なドラゴンに成長する、なんて。

わたしは、冒険者も同じだと思っています」

「キルリスさん……」

そこで、鋼は彼女がこんな話をした意図を悟った。

冒険者ランクHからだって、頑張れば成長することができる。彼女は鋼を励まそうとしてくれていたのだ。

「それに、今の話、将来への布石、あるいは伏線、という言い方も

できるんですよ?。」

「伏線?。」

「百年後か、十年後か、あるいは明日か。あの巨竜は目覚めて、わたしたちの街を襲うかもしれない。」

そんな時、心構えがあるとないとでは、だいぶ違うでしょう?。」

「なる、ほど……。」

「何しろ、昨日だって、あの岩山が動いた気がするって報告が……。」
キルリスが何かを言いかけたその時、

「きゃっ!。」

「うわあ!。」

突然、地面が揺れた。

その後も、ズン、ズン、という鈍い振動が、地面を伝って鋼たちに伝わってくる。

「と、とりあえず、外に。」

「は、はい!。」

鋼に誘導され、キルリスも外に出た。

そこで、二人は地震の元凶を目の当たりにすることになる。

それは、苔に覆われた巨体を震わせながら、大地と同化しかけていた自らの体を揺する、まぎれもない竜の姿。

「巨竜、ラーバドラゴン…? そんな、まさかこのタイミングで…?。」

あまりの事態に、キルリスは呆けたように、その場に立ち尽くし

た。

そんなキルリスの肩に、手が乗せられる。

「伏線、無駄になりませんでしたね」

「え？」

「それが百年後でも、十年後でも、明日でもなく、今日だったってことです」

「ハガネ、さん？」

いまだに現実に戻ってこられていないキルリスに、鋼は叫んだ。

「とにかく、動きましようキルリスさん。」

住人の避難とか、たぶん必要ですよな？」

その鋼の言葉に、キルリスの目に正気の色が戻る。

「そ、そうですね！ 冒険者ギルドのわたしが、しっかりしないと！

魔物襲来時のガイドラインに従って、冒険者ギルドから正式な避難勧告を発令します」

自分のやるべきことを見定め、キルリスははっきりと自分を取り戻していた。

それを見届けて、鋼はキルリスに背を向ける。

「は、ハガネさん？ 一体どこへ……」

「向こうに、こういう時真っ先に突っ込んで行って死にそうな奴がいるんです。」

だから、ちよつと行って連れ戻してきます」

キルリスにはそれだけで全てが通じたようだった。

「気をつけて！」

そんな声を背に受けながら、敏捷0の低速で、けれど懸命に鋼は走り出す。

遠くに見えるまるでビルが立ち上がったような巨体をあらためて視界に収めながら、なぜか鋼は、自分が昂揚しているのを感じてい

た。

第十六章 死の淵で

休憩時間になって鋼が街の方へ歩いていくのを、アステイエルはずっと見守っていた。

（分かっていたが、一度も振り返らないとは。

本当に私の存在など、あの男の眼中にはないのだな）
そんな風にひとりごちる。

実はこの時に限っては鋼も後頭部に刺さる彼女の視線を意識していて、むしろ絶対に振り返らないように注意していた。

つまりかなりアステイエルのことを意識していたと言えるのだが、彼女がそれに気付くことはなかったし、それが彼女にとって慰めになるかは分からなかった。

自分は意外と他人に注目されたがる人間だったのだな、などと再認識をしながら、一人で見張りを続ける。

「今頃あの男は、冒険者ギルドにでも行って、あの美人のギルド員でも口説いていそうだな」

などと実はかなり正確に鋼の状況を見抜いたりしつつ、たまに湧き出してくるスライムなどを適当に切り刻んでマナに変えていた。

そんな風に十数分くらいは真面目にやっていたのだが、

「こちらが懸命に働いている時に、向こうが休んでいるというのも業腹だな……」

そう考えたアステイエルは、少し楽をさせてもらうことにした。

高レベルになるか大きな功績を上げると取得できるアビリティ『
風格』。

そして、それを覚えることによって使えるスキルに『威圧』というのがある。

自分の強さを誇示して弱い相手を近付けさせない特技だが、逆に

強い相手を刺激してしまうこともある上、冒険者が探しているモンスターまで逃げ出してしまふこともあるため、特に街の近くで使うのは自重していた。

だが、もともとの場所には魔物が少ないようだし、自分の近くだけならよいだろうと、アステイエルは『威圧』を発動させた。

空気に、自らの力をなじませていくような感覚。

自分の周りの空間に『ここは自分のものだ！』という意思を込め、縄張りを作っていくようなもの、と言えば分かりやすいだろうか。

街には被害がいかないように調節しながら、見通しの利かない森の方を中心に自分の気配を浸透させていく。

これでこの一帯にいるモンスターはここに近寄って来ないはずなのだが。

「……何だ、この妙な手応えは」

アステイエルは強烈な違和感に眉根を寄せた。

技がうまく発動しないのではない。むしろ逆。どれだけ『威圧』しても、簡単に浸透しすぎて反応に乏しいのだ。

まるで無人の荒野に力を通したような反応のなさ。それがアステイエルに強い違和感を残した。

「少し、範囲を広げて確かめてみるか」

アステイエルは一度『威圧』を引込み、力を充填、全身に力を横溢させる。

そして、体の中を荒れ狂うほど押し込めた力を、

「我が名はアステイエル！ 我が剣を恐れぬ者は前に出よ！」

あらかじめ決めたキーワード、名乗りと共に撃ち放つ。

全力で放った『威圧』はさきほどと比べ物にならない範囲を網羅し、森を、平原を駆け抜ける。

やはりスカスカの手応え。

これは無駄なことをしたと自戒しようと思った矢先、

「ッ！」

恐ろしく異質な感触を覚えたアステイエルは、反射的に自らの剣を抜いた。

だが、案に相違して何も起こらない。

強大な気配を感じたはずなのに、彼女の目に見える範囲で、そんな存在感を発揮しそうな生物は見当たらなかった。

「気のせいだったのか？ いや……」

すぐに変化は訪れた。地面が揺れる。

「くっ！」

うめき声を漏らすのが、おそらくパニックになっただろう街の人間と違い、彼女には事態の元凶が最初から見えていた。

ただの岩だとはかり思っていた山が、その身を起こそうとしている。

それは、見る間にその全体像を現し、巨大な、あまりに巨大な直立する竜の姿を取った。

「岩山と紛うほどの巨体。それに、覚醒した途端、ここまで押し寄せる火属性の圧力。」

あれが封印されし巨竜、ラーバドラゴンか」

アステイエルはこの街の伝承などに縁はなかったが、強い魔物の情報は騎士時代に嫌というほど叩き込まれていた。

一瞬で巨竜の正体を看破する。

「そういうことか……！」

同時にアステイエルは、自らの失策を悟った。

事前に気付くべきだった。

この場所は、あまりにも魔物が少なすぎた。

それは、目覚めかけていたあの巨竜に怯え、魔物たちが逃げ出していたからだっただけだ。

「騎士たらんとする者が、自らの軽拳で民を危険に晒すとは……未熟！」

だが、いつまでも後悔をしていられる状況でもない。

土に埋まった自分の体を掘り起こし、体にこびりついた土を振り払った巨竜は、体の自由を取り戻していた。

そしてその巨体をきしませ、大きさの割に機敏な動作でアステイエルの方へと押し寄せてくる。

「とても勝てるとも思えないが、私が立たねばならん、か」
気力には溢れている。隠し玉もあるにはある。

迫りくる巨竜を見つめ、アステイエルが戦う覚悟を固めようとした時、

「おーい！ 生きてるー？」

いかにも間の抜けた声を出しながら、自分に駆け寄ってくる少年の姿を彼女は見つけてしまった。

これが緊迫した場面でなく、アステイエルが元騎士でなければ、「足、おっそ！」と叫びたくなるような速度で駆け寄ってくる。

「どうした？」

アステイエルの下までたどりついて息を切らしている鋼に、アステイエルは端的に聞いた。

「物見をするって依頼はまだ終わってないだろ。だから戻ってきた」
「心配する必要はない。ああいう災害級の魔物が出た場合、特例が認められる」

「そっか。なあ、アステイエル」

「いきなり呼び捨てか。何だ？」

「避難しよう」

ハガネという男は、アステイエルが想像したよりもストレートだった。

それを好ましく思ったが、残念ながら彼女の返事は決まっていた。

「……それは、出来ない相談だ」

実は、鋼がそう提案してきた時、アステイエルはあまり驚かなかった。

このハガネという少年は、きっとそのために戻ってきたのだろうと分かっていたからだ。

「理由を聞いても？」

「私がまいた種だ。後始末くらいは自分でつけなければな」

「君が、あいつを？」

「復活間近だったのを刺激してしまった」

「どうせいつか復活したんだろ？ だったら君のせいじゃない」

「そうかもしれない。だが、もうそれは重要ではない」

アステイエルと鋼の視線が交錯して火花を散らす。だが、どちらも引かなかった。

「それより、ハガ……貴様はどうするつもりなんだ？」

感情を抑えてアステイエルは問いかけた。

鋼から無言で差し出されるカード。そこに表示された能力値を一瞥して、驚いた。

「赤子より弱いではないか！」

「あ、やっぱりそうなんだ……」

それを聞いて、軽く落ち込む仕種を見せる鋼に、アステイエルはこんな時なのに少なごんでしまった。

「これで私に勝負だと？ 勝てるはずがない」

「いや、勝負にかこつけて君に街を守ってもらって、僕はその分のお金をもらおうかと……」

「見下げ果てた計画だな。やはり貴様は最低の冒険者だ」
自分の義に従い、ハガネに辛辣な言葉を投げかけているつもりなのに、その語調は意図した十分の一もきつくはならなかった。

生死の境に立ち、剥き出しの自分の心と向き合ってみた時、なぜだろう。アステイエルは目の前の少年を嫌いになれない自分を感じていた。

「それでも、あんたでも、あいつに勝てるとは思えない」

「実力の決め付けは嫌いなものではなかったのか？」

「さっきあいつを見てたあんたの顔は、勝てるって顔じゃなかった。なあ、もう時間がない。一緒に避難を手伝ってほしい」

逃げる、ではなく、他人が逃げるのを手伝う、それはアステイエルを逃げやすくする方便だろう。

だが、それを彼女は一蹴した。

「時間、だと？ そんなもの初めからあるはずがない。

見れば分かるはずだ」

そこで、彼女は哀しげに笑った。

「あれだけの速度だ。ここまで来るのに二分もかかるまい。

ならば、ここからほとんど離れていない街までたどり着くのに、一体どれだけの猶予があると思う？」

「つまり、街の人の避難なんて、不可能だって言いたいのか？」

鋼の問いに、アステイエルはもううなづく労すら惜しみ、ただ轟音と共に近付いてくる巨体を、一心に見つめていた。

「あの巨体にあの強さだ。街の門番程度では、足止めすらできまい。

だが、私なら、いや、私の持っている分不相応なタレントなら、奴の気を引くことも出来よう」

「それがあんたの、騎士道なのか？」

「どうだろうな？ 死の淵に立って初めて分かった。

私にとって騎士道とは、単なる剣を振るうための大義名分だったのかもしれない」

「だったら……」

「だが、私は力を持っている。おそらくこの街で唯一、あの巨竜に比肩し得る力だ。

それを使わずに逃げるとするのは、ただ、どうにも……性に合わない」

「そんなことで、命を捨てるのか？」

「あんたが頑張ったって、誰も、見てないんだぞ？」

「名誉のためではない。それに……貴様が見ている」

アステイエルがその透明な視線を向けると、鋼は目に見えてたじろいだ。

「勝算は？」

鋼の問いに、アイテムボックスから三粒の丸薬を取り出してみせる。

「『無敵の丸薬』。ひねりのない名前だが、これを使えば20秒間、HPとMPが減少しなくなる。

私の『不可侵の聖色』は強力だが、最大威力で使用すると、私の体力では15秒と持たないからな。

残念ながら丸薬の連続使用は出来ないが、これで最低でも35秒、あいつを足止め出来る」

「僕は、勝算を聞いたんだよ！」

自分を心配して、本気で怒ってくれる鋼に、アステイエルは胸に温かいものがあふれるのを感じた。

丸薬を一粒、その手に押し付けた。

「離れていて欲しい。そして、出来るなら生き延びて欲しい」

「アステイエル！」

「別に、私のすることを誰かに伝えて欲しいと望んでいる訳ではないんだ。

ただ私がどうしてあれに立ち向かったか。その理由を知っている者がいる。

……それが、私にとっての救いになる」

それ以上の問答を、アステイエルは自分に許さなかった。

未練を切り裂くように剣を抜き放つと、鋼から距離を取るよう前方、巨竜へと駆ける。

そして走りざまに、全力の名乗りをあげる。

「我が名はアステイエル！ 我が剣を恐れぬ者は前に出よ！」

全力の『威圧』。しかし、それこそ岩壁に剣を叩き付けたような、堅い感触が返ってくるだけ。

だが、それで構わない。

巨竜の注意が、自分に向いたことを確信した。

その巨体が、十分に近付いていることを確認して、丸薬を口に含み、一気に飲み込む。

「ん、く……」

その体に、活力が充満する。今ならどんな相手でも倒せそうな気分になる。

「全力を出すのは、何年ぶりかな」

そんな風につぶやく。

アステイエルは、いつも本気で戦っている。だが、自分の技量や技能にレベル、つまりHPMPが追いついていないため、どうしてもセーブして技を使わざるを得ない。

だが今は、『無敵の丸薬』の力でHPMPを温存する必要がない。

気兼ねなく技を使い尽くせる。

即座に自己強化のエンチャントを二つ使用。

そして、本命、

「我が身に宿る聖色の加護よ！ 今、我が血肉を糧とし、その力を顕現せん！」

キーワードを口にして、アステイエールのタレント『不可侵の聖色』を全力で展開。

可視化された白いオーラがアステイエールの体を覆う。

その時点で、既に巨竜との距離は50メートル。

人間にとつては容易に縮められない距離でも、巨竜にとつては吹けば飛ぶような距離。

だが、もうアステイエールの間合いの中でもあった。

「最初から、とっておきで行かせてもらおう！」
体を巡る聖なる力を、利き手の剣へと集約させる。

「聖なる印をその身に刻め！ サザン・クロス！」

強化された肉体を駆って、アステイエールが力強い所作で十字に剣を振るう。

横と縦、時間差で放たれた強大な聖光の斬撃が、狙い過たず、巨竜の腹で交差する。

次の瞬間、けたたましい音と光が、アステイエールの知覚を覆い隠した。

「どつだ！？」

普段は重ねがけなど出来ない高性能エンチャントをかけた状態で、最大HPの七割を消費するため実戦では使い道のなかったアステイエール最強の攻撃技『サザン・クロス』を使う。

これが現在のアステイールが放てる掛け値なしの全力の攻撃。
「これで、終わってくれれば……」

期待を込めて、アステイールは巨竜を見上げた。しかし、
「無傷、か……」
噴煙をかき分けるように現れた巨竜には、傷を負った様子すらない。

だが、だからこそ気落ちしている暇などなかった。
せめて丸薬の効果が続いている内に、もう一撃だけでも入れておきたい。

「神の十字をその身に受ける！ ノーザン・クロ……」

「GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！」

巨竜の咆哮。

物理的な圧力すら持つ、音の壁がアステイールを襲った。
身の内に溜めたはずの力が、一瞬で吹き散らされた。

技に使うはずだった力は雲散霧消し、わずかに体が硬直する。

その隙を巨竜は見逃さなかった。

巨体ではありえない俊敏さで体を翻し、

「尻尾?!」

長大な、おそらく50メートル以上長さを誇るその尻尾を振り上げ、振り下ろす。

それはそれだけで、圧倒的な質量と速度を持った、強大無比なハンマーとなる。

「よ、け……!」

ギリギリで硬直から回復したアステイールは横っ飛びに避ける。

「ぐ、う……」

直撃は避けたものの、尻尾だけで人間の数十倍という高質量の攻撃を食らい、無傷という訳にはいかなかった。

尻尾が振り下ろされる瞬間、横に跳んだアステイールは、これなら避けられる、と思った。

だがそれでも傷を負ったのは、ギリギリで丸薬の効果が切れていたことが災いしたというのもあるが、アステイールが回避行動を取った瞬間、尻尾の軌道がわずかにアステイールを追いかけるように変わったせいだ。

巨竜は大きいだけでも強いだけでなく、熟達した戦士でもあった。

（聖色を使っていなければ、今の一撃で死んでいた！）

数秒遅れで、恐怖が寒気となってアステイールを襲う。

もっとやれると思っていた。

勝てるなどとは思っていないなくても、せめて手傷を負わせるか、数分くらいは時間を稼げるはずだと考えていた。

（甘かった。私は、無力だ…！）

せめてその無力な命を最大限に使おうと、アステイールは傷ついた体に鞭打って、森の中に逃げ込んだ。

森の中にいれば巨竜の攻撃の精度も下がるはずだ。

このまま『不可侵の聖色』を発動し続けていれば、あと数秒も経たない内にMPが尽きて死ぬだろう。

何とか森に隠れてMPを温存して……などというアステイールの目論見は、巨竜を見上げた瞬間、一瞬で崩れ去った。

巨竜はまっすぐにアステイールを見下ろしていた。

その口は大きく開かれ、空気を取り込んでいる。

それが何の予備動作であるか、アステイールにははっきりと分

かかってしまった。

『豪炎のプレス』

森を荒野に、平原を焦土へと変える灼熱のプレス。

かつて巨竜討伐に参加した騎士十数名を一撃で葬ったとも伝えられている。

今から走った所で避けられるような攻撃でないのはすぐに分かった。

「聖色よ！」

簡易キーワードで、『不可侵の聖色』を張り直すのが精一杯。

同時に巨竜の動きが一瞬止まり、次の瞬間、

世界が炎に包まれた。

森など、ただの木など、障害どころか目くらましにもならない。

「あ、あああああああ！！」

我知らず獣のように叫んで、暴虐なる炎の嵐に対抗する。

(何だこれは、何なんだこれは！)

数秒前は普通の森だった場所が、今は煉獄へと変わっている。

視界は一面、炎に覆われていた。

アステイエールの身を隠してくれるはずの木は焼けただけ、一秒と持たずに灰になって吹き散らされていく。

自らの剣を地面に突き立て、必死にその場に留まる。

防御姿勢が崩れれば、たとえ『不可侵の聖色』の上からでもHPを奪われて削り殺されるのは明白だった。

(ま、ずい……。MPが……)

アステイエルは『豪炎のプレス』の攻撃をかるうじて防いでいたが、『不可侵の聖色』はMPを大量に消費する。

MPが目に見えて減っていく。このペースではプレスが終わる前にアステイエルのMPがなくなるのは明白だった。

(このままでは、あと三秒、持たない……！)
必死に打開策を探す。

だが思いつかない。この状況で使えそうな技は何もない。使えそうな道具も思いつかないし、その前に、道具を使ったり技を使うための隙が全くない。

あと二秒。

(何か、何かあるはずだ……！ まだ、私は……)

MPだけでなくHPも削られているのが分かる。たとえ『不可侵の聖色』を使い続けられてもおそらく数秒持たない。

そんな絶望的な認識だけを残して、無為に時間が過ぎる。

あと一秒。

(終わる、終わるのか、私は……。まだ、何も成していないのに！)
最後の足掻きとばかりに巨竜をにらみつける。

視線がぶつかった。

巨竜は油断も緩みもない表情で、冷徹にこちらを見つめて、いや、観察していた。

(勝てない。私はこいつに、勝てない……)
アステイエルの心が、とうとう折れた。

あと……、

(駄目、か。父様、母様、申し訳ありません。私は、ここまでのようです。)

それに……)

昨日会ったばかりの少年の顔が、最後に頭をよぎった。

同時に、MPが切れる。

いつもアステイエルを守護し続けた聖色のオーラが、一度だけ炎に抵抗するように明滅し……消えた。

アステイエルは無言で目を閉じた。

遮るものが消え、全てを燃やし尽くす炎の舌にとつとつ少女の体が巻き込まれる、その寸前、

「え?」

アステイエルの体は、何かに引き倒された。

いや、抱きすくめられていた。

(……だ、れ?)

アステイエルの顔は『誰か』の胸に押し付けられていて、その正体は見えない。

だが、それでも分かることがある。

一つは、自分が今、守られているということ。

(ふしぎだ。ほのおが、まるでこの人をさけるみたいにながれていく……)

アステイエルの体を、その魂ごと焼き尽くすはずの豪炎は、『誰か』の背に当たって左右に流れていく。

そんなまるで夢のような光景を、アステイエルはただ『守られている』という実感と共にぼんやりと眺めていた。

そして、二つ目。

それは、朦朧とする意識の中、その『誰か』の胸の中にあることに、不思議な安らぎを覚えているということ。

(わたしは、この人を、知っている…?)

その奇妙な確信に後押しされ、アステイエルはその体を『誰か』の胸へとそっと寄せる。

生身で放り出されれば瞬時に命を落とす火炎の暴風の中にいるはずなのに、アステイエルの心は不思議と凪いでいた。

いったい、どれだけの時間が経ったのだろうか。

アステイエルにとってほんの刹那のようにも、あるいは永遠と等しいようにも感じた時が過ぎ、炎のブレスがやむ。

(私は、生きているのか…?)

自分が生き延びたことが信じられず、アステイエルは呆然と顔を上げる。

そこには、

「ハガ、ネ…?」

死を覚悟したその瞬間、彼女の頭に浮かんだ、最弱の冒険者の姿があったのだった。

第十七章 鋼の選択

「何だこのリアル邪気眼厨二病バトル……」

鋼は、アステイエルと巨竜の戦いを、少しだけ離れた場所から呆然と見ていた。

【怪獣対超人の一大スペクタクルじゃな！ かつこいいのじゃ！】
騒ぐシロニヤの台詞を笑い飛ばしてしまいたいが、鋼の眼前に広がっているのは、まさにそのくらいに非現実的な光景だった。

何かかつこいい台詞と共にアステイエールの体が白いオーラに包まれる。

さらに何か技名らしき物を叫んだ彼女の剣からレーザー光波みたいなものが飛んでいき、巨竜に当たって爆発した。

「あー。なんだこれ。僕は夢でも見てるのかな？」

【まあ、車にひかれてからここまでのくだりがおぬしにとっては悪夢みたいなもんじゃろ？】

「それシロニヤが言うの?!」

などと言っている間にも、戦いは進む。

アステイエルが剣からすごい光る何かを出したせいで怒ったのか、巨竜が吼える。

その声があまりに大きすぎたせいか、アステイエルは攻撃を止めてしまった。

戦士としてはどうかと思うが、まあビビっても仕方ないくらいの迫力だったからしょうがないな、と鋼はうなずいた。

さらに巨竜の反撃は続く。体よりも長い尻尾を思いきり振り上げてそのまま落とした。

「うわっつと！」

それが鋼の近くをかすめ、街壁を豪快に破壊していった、鋼は思わず変な声を上げてしまった。

さて、アステイエルは、と見ると、お前はバツタの改造人間かと言いたくなるくらいジャンプ力で横にぴよんと避けた。が、尻尾が追いかけてきて当たった。

その様は、まあアステイエルには悪いが、ハエ叩きにはたかれた虫に似ているかもしれない。

アステイエルはその攻防で形勢不利と見たのか、森の中に入り込んで行った。

【うむ。アレはまずいのではないか？】

「そうなのか？　というか、見えるのか？」

【うむ。オラクルがパワーアップしたからの。そちらの光景も見えるようになったのじゃ。

【まあ、残念ながら静止画限定じゃが】

なんか不便そうだな、というのが鋼の感想だが、それどころではない。

「まずいって、やっぱりアステイエルが？」

【そうじゃ。ほら見てみるのじゃ。あのドラゴン、大規模な炎のブレスを吐くために息を吸っておる。

どうやらあのツンツン騎士にはバリア的なものが見えるらしいが、それで防ぎきれんとは思えんの】

「防ぎきれないとどうなるんだ？」

【死ぬじゃろ、そりゃ】

「な…！」

あっさり言っただけのけるシロニヤに、鋼は絶句した。

【それで、どうするんじゃ？】

「どつするって、そりゃ……」

鋼の言葉が止まる。

今までなんとなく逃げず、物見遊山的に戦いを遠くから眺めていたが、これが命のやり取りだと鋼にだって分かっていた。

(このままじゃ、アステイエルが死ぬ?)

だが、そんなことを言われても鋼はどうしたらいいか分からない。

(じゃあ助けるのか? 僕が? どうやって?)

昔、小さな白い子猫を助けた時の記憶がよみがえる。

考えなしに突っ込んだ結果がアレだ。

動かない身体。どんどん失われていく体温。自分という存在が終わってしまう恐怖。

鋼は、もう二度とあんな思いを味わいたくはなかった。

「……無理だ」

結局鋼が口に出したのは、そんな言葉だった。

「僕に、何かができるとは思えない。それに……アステイエルは、ほんの少し話しただけの、他人だ」

【ほう? じゃあおぬしは、あの騎士を見捨てると言つのかの?】

「そんな言い方……」

【まあ、言い方も何も、こんな話、全くの無駄じゃと思うんじゃないかな】

シロニヤは声に呆れのニュアンスを含ませて、言った。

【じゃって、おぬしの足は、とっくにあの騎士を助けようと走り出しておるではないか】

「……………」

実は、そうなのだ。

鋼自身、色々と葛藤しているつもりでも、アステイエルが危な

いと聞いた辺りから、もう彼女を助けに走っていた。

走りながら、鋼は細切れに言葉を繰り出す。

「そりゃ、だって！　しょうがない、じゃないか！

ヒューマニズムとか叩き込まれた、現代の日本人がっ！

目の前で死にそうなり合いを、見殺しにするとか、絶対、無理
！」

【むう。自分の行動を社会や教育のせいにするのはよくないと思う
んじゃが】

シロニヤの言葉を聞き流しながら、鋼は敏捷0の体で一心に走る。

息を吸い込み終えた巨竜が、今度はその息を灼熱の吐息に変えて
吐き出していく。

アステイエルに向かって走っている鋼にも当然それは届くが、
鋼は全く気にしない。

【善行を積むのにも言い訳が必要とは、おぬしも難儀な性格じゃの
う】

「だから、そういうんじゃないんだって！」

だって、鋼にそんなものが効くはずがない。

鋼はゴッドブレス（神様が耳元に「ふーっ」て息吹きかける攻撃）
すら防ぐタレント『ブレス無効』があるのだから。

炎の海をかき分けるように、鋼は一直線にアステイエルを目指
して進む。

【お。まずいぞ、コウよ。そろそろあのツンツン騎士のバリアが消
えそうじゃー！】

「くそ！　こっちは足が遅いってのに！」

悪態をつく鋼からも、アステイエルの白いオーラが消えかけて
いるのが見えた。

それが、点滅し、消えた瞬間、

「こ、れでっ！」

間一髪、巨竜とアステイールの間に体を差し込むようにして、アステイールをかばうことができた。

ぐったりしているを抱きかかえ、自分の体を盾に、アステイールをプレスから守る。

【……おぬし、今、役得じゃとか思ってはおらんじゃろうな？】

「さすがにそんな余裕はないよ！」

何とか間に合ったと思ったのだが、それにしても腕の中にいる彼女はやけにぐったりしていた。

本来なら、急に誰かに抱きかかえられた彼女が暴れるというのが自然な反応なのだ。

それなのに彼女にはほとんど動きがなく、むしろ鋼に身をゆだねている様子なのが気になった。

「なあ！ MPがなくなると死ぬとかないよな！」

【MPを使いすぎるとぼうっとしたり気持ち悪くなったりすることはあっても死ぬことはないの。

というか、おぬしずっとMPOじゃったろ？】

「あ、そっか……」

驚きの説得力だった。

「これで、大丈夫なんだろうな……」

今はきちんと守れているつもりでいるが、右足だけはみ出している片足が灰になっちゃってました、なんてことになったら目も当てられない。

鋼は神経質に、何度もアステイールの位置を確認して抱え直す。腕の中にある生き物の命運を、自分が握っているという実感。

それは、鋼をひどく消耗させた。

(早く！ 早く終われ！)

鋼は必死でそう念じるが、炎のプレスはなかなか終わらない。

【まあ、こういう時はあわてずさわがず、のんびりしりとりでもするのが一番なんじゃよ】

「だからそんな余裕はないし、さりげなくさっきの古今東西の勝負流そうとしてるだろ！」

次、シロニヤからだって覚えてるからな！」

【何でこんな非常事態でもちゃんと覚えてるんじゃ……】

「非常事態って分かってるならそんなことで僕を騙そうとするなよ！」

マイペースなシロニヤに鋼は怒鳴るが、それが極限状態にある鋼の精神の均衡を支えていることもたしかだった。

(終わ、った……?)

肝を冷やすような数十秒が終わり、周りから炎の気配が消えた。

かつて森だったその場所は、今はもう焼け野原としか呼べない場所になっていて、巨竜のプレスの強大さを否応なしに思い知らされる。

鋼がアステイエルを解放すると、呆然とした顔のアステイエルが、鋼を見上げた。

「ハガ、ネ……」

信じられないといった目で、アステイエルは鋼を見る。

「どう、して……。私は、たず、かった？ まさか、ハガネ、が、私を……？」

自分が助かったことが、そして助けてもらえたことが、心底理解できない、といった顔をしていた。

それを見ていて、鋼は何だか無性にイラツときた。

「……理解できないって言いたいのは、こっちだ！」

力があるから戦うとか、何だよその理屈は！」

気が付けば、アステイエルに向かって本気で怒鳴っていた。

「じゃあ金持ちが破産するまで貧乏人に施しをし続けなけりゃいけないってのか？」

名譽ある騎士様は、街がピンチになるたびに飛び出してって自殺するってのか？

そんなバカな話があつてたまるか！」

「待って、待ってくれ。一体何の話をしている？」

さらに混乱するアステイエルに、何で僕が、と思いつながら、告げた。

「これから僕が、あのデカブツを倒しに行くって話だよ！」

「な、に……？」

アステイエルが驚きの声を上げたが、その時にはもう鋼は彼女を見ていない。

「武器、何か、剣の代わりになるもの……」

技を使うために必要な武器を探し、鋼の視線がさまよう。

「これで、いいか」

見つけたのは、三十センチほどの枯れかけた木の枝。

辺り一面の木が灰に変わる中で、鋼やアステイエルの陰にあつたのか、奇跡的に燃え残った一本だった。

「うわ、おつもい！」

それを、腕力0の非力で持ち上げる。

木の枝はもうボロボロで、今にも崩れそうだった。

だがそれで十分だ。武器はただ、武器であればいい。

威力はいらない。耐久力も。

あとは……。

「なあ、シロニヤ……」

【な、なんじゃ？】

「僕、この戦いが終わったら、故郷に帰って結婚するんだ」

【なぜこのタイミングでその台詞を言うのじゃ！】

「というかおぬしの故郷は日本じゃし、そもそも婚約者とかおらんじゃろー！】

「……うん。シロニヤが驚いた時に言う、そのちょっと腰が引けたツッコミ、僕は嫌いじゃなかったよ」

【死亡フラグ増量じゃと?!】

シロニヤのびっくりした声を聞いて、正直なごんだ。

狙い通り、熱くなっていた鋼の頭がクールダウン。平常運転に戻る。

すると、どうして自分がこんなに苛立っているのか分かった気がした。

（巨童なんてものが出てきたって聞いて、ワクワクしたし、目の前で人が死にそうになって、嫌な気持ちになった。

……たぶん、それだけなんだな）

自分の周りでは楽しいことばかり起こって欲しい。嫌なことや辛いことが起こって欲しくないというワガママ、それが今の鋼を動かす原動力だと自覚する。

「シロニヤ。これが終わったら、バカらしいことたくさんやるうか」

【それは、死亡フラグ的な意味で？】

「いや、非死亡フラグ的な意味で」

【……ふむ】

「僕はここがゲームの世界なら、この世界はもっとバカバカしくて、笑えるくらいでいいと思うんだよ」

【ふむ？ じゃから？】

「できるだけバカなことばかりやって、嫌なことは自分のできる範囲で減らしていきたい。」

「そうやっていって、世界がもうちょっと楽しくなればいいなって思うんだ。ダメか？」

【一種の世直しじゃな。まあ、好きにやればいいのじゃ。

まあ、なんじゃ。ワシは神様として、人に手を貸すことはできません……分かってる」

【ち、ちがう！ 分かってないのじゃ！ じゃから、そうじゃなくてじゃな。

神としては無理でも、その、友としてなら、ワシは最後までおぬしの傍におる。

……まあ、それだけじゃ】

【ん、ん。うおっほん】

念話なのにせき払い。

頭の中にシロニヤからの照れ照れとした空気が伝わってくる気がして、鋼まで照れくさくなった。

こんな時のシロニヤは、必ず話題を変えてくる。

【じゃ、じゃが、勝てるのか？ あいつは強いぞ。たぶん、銀竜の次くらいに】

「ゲームと現実をごっちゃにするなよ！ というか銀竜よりは強いだろ！」

【じゃ、じゃから、どうなのじゃと聞いておるのじゃ！】

「まあ、たぶん大丈夫。僕は、銀竜の振り向きに合わせて大剣溜め2を翼に当てるのがうまいんだ」

【それなら安心じゃ！】

適当な鋼の言葉に適当に納得してくれるシロニヤ。

「どういっつノリにもやっつと慣れてきたな、と思いつつ、ようやく巨竜に向き直る。」

シロニヤと話をしている間、巨竜は口から煙を吐くばかりで動こうとはしなかった。

もしかしてプレス硬直だったのだろうか。銀竜なら溜め1とかを喰らわすチャンスだ。

そう考えるともったいなかったと鋼は思わなくもなかったが、どのみちアステイエルから離れるワケにはいかなかったのだからと思いつく。

「まあでも、さすがにそろそろみたいだな」

口から出ていた煙の量が、だんだん少なくなっている。もうすぐ動き出すだろう。

とりあえず、戦闘に行く前にアステイエルからもらった、『無敵の丸薬』を取り出して口に放る。

「につが！」

最悪の味のそれを、何とか飲み下した。

これで、あと二十秒は好き勝手ができる。

(もしこれの時間切れを狙われたら厄介なんだけど……)

頭上の巨竜を眺めて、鋼はその懸念を安堵と共に振り捨てた。

ドラゴンは頭のいい魔物かと思っていたが、巨竜の瞳に知性の輝きは見られない。

せいぜいが、「こいつどうやって踏み潰してやるのかなあ」「くらのことしか考えていないことは明らかだった。

一応歴戦の勇士と言えるだろうし、普通の獣より頭がいいのかもしれないが、所詮動物ということだ。

巨竜はまた尻尾で攻撃するつもりなのか、尻尾を持ち上げるようなそぶりを見せる。

それなら一度軌道も見たし好都合。
後ろから、

「だ、駄目だ。逃げてくれ……」
なんていう声が聞こえた気もしたが、無視する。

(……問題はタイミング)

こちらの足は遅く、耐久力も低い。『無敵の丸薬』の効果がなければおそらく一瞬で殺されるので、相手の一撃目が勝負。

ここで決められなければ、死ぬとを考えてもいい。

(それに……)

ほんの一瞬だけ、後ろを振り返る。

まだ動けないでいるらしいアステイールの姿が見えた。

鋼が失敗すれば、丸薬で無敵になっている鋼はともかく彼女は無事では済まないだろう。

泣きそうな顔で何か言いたそうにしている彼女に、とりあえず意味ありげにうなずいておく。

別に何の意図もないが、勝手に深読みしてくれるだろう。

巨竜に目を戻すと、これみよがしに尻尾を振り上げようとしている。

もうあまり時間がないようだ。鋼は口早にささやく。

「天魔滅殺、黒龍灰燼、紅蓮

「GYOOOOOOO!!」

撃!

咆哮と共に繰り出される尻尾の一撃に合わせ、技名を言い終えると同時にゆっくりと枝を振り上げた。

「ハガネエ エエエエエエエ！」

アステイエールの悲痛な叫びが響く中、魔物と打ち合うにはあまりにも頼りない、か細い木の枝の先に、恐るべき速度と質量を持つ巨竜の尾が激突した。

第十八章 ただしそれには十日はかかる

絶叫と、激突の後、

「何が、起きたんだ……」

アステイエルは、目の前で起こった信じがたい光景に、絶句した。

そして事態は、誰一人想像もつかなかった方向へと収束していくことになる。

鋼にかばわれたアステイエルは、すぐには動けなかった。

自分で思っていたよりもHPMPの消耗が激しく、また、鋼に助けられ、よく分からないが怒られたらしいという状況に、彼女の頭はとっさについていけなかったのである。

また、それからの鋼の行動から、目が離せなかったというのもある。

鋼は巨竜を倒すことをアステイエルに宣言すると、近くに落ちていた枯れ枝を拾った。

すると、その枝が見る間に金色へと変わる。

（まさか、装備した物に特別な魔力を纏わせているのか？

私の聖色と同じ、特殊タレント持ち？）

アステイエルは自分が生きているから、鋼にかばわれたということは分かっていた。

しかし、『豪炎のブレス』の中、鋼が無事でいられた理由が分からなかった。

自分が渡した『無敵の丸薬』を使ったとしても、アステイエルでさえ吹き飛ばされそうになったブレスの圧力に、レベル2の鋼が

耐えられるはずがなかったのだ。

だが、特殊タレント持ちであるなら、それにも納得できる。

だが、鋼がアステイエルを前に仁王立ちになるに至って、彼女にそんな考察をする余裕はなくなった。

鋼がアステイエルを守るため、盾になろうとしていることに気付いたのだ。

「だ、駄目だ。逃げてくれ……」

自分でも驚くほどかすれた声が出る。

縁もゆかりもない自分を守ろうとしてくれていることは、正直に言えばアステイエルには嬉しかった。

自分に近付くため、あるいは自分を利用するため、彼女に助力する人間は数多くいたが、アステイエルにはそんな思惑は全て透けて見えていた。

だからこそ、鋼が何の下心もなく自分を助けようとしていることが分かったし、嬉しくもあるのだが、だからこそそれ以上に、こんな場所で自分のために彼に死んで欲しくなかった。

そんな彼女の不安を和らげるように、鋼はアステイエルに一瞬だけ振り向き、小さくうなずいた。

（自分に任せると、そう言っているのか？）

自分に都合のいい考えだとアステイエルは思ったが、それ以外の解釈が思い浮かばなかった。

だが次の瞬間、事態は急変する。

強力なブレスを吐いたことで体を休ませていた巨竜が、ふたたび動き出したのだ。

（ま、まずい……！）

案じたのは、自分ではなく鋼の身だった。

鋼が『無敵の丸薬』を飲んだのは見ていた。しかし、『無敵の丸

薬』が防げるのはダメージを負うことだけであり、攻撃が強ければ当然吹き飛ばされるし、容易にバランスを崩される。

連続で苛烈な攻撃を受け続ければ、反撃など出来ない内に20秒などあつという間に過ぎ、そのまま封殺されてしまうだろう。

焦燥に駆られ、巨竜の瞳を見る。

そこからアステイールは、ただの魔物とは違う、悪辣な知性を感じた。

そして警告する暇もなく、巨竜が動く。

小さく技名らしきものをつぶやき、頼りない木の枝を振りかざそうとしている鋼に、

「GYOOOOOOO!!」

狡猾な巨竜は、バインドボイスを放つと同時に尻尾の一撃を繰り出した。

鋼をかばおうと飛び出しかけていた体が、その咆哮に強制的に硬直させられる。

予想外にも、鋼は巨竜の咆哮などなかったように手にした金の枝を振り上げているが、そんな物では巨竜の一撃に一瞬たりとも耐えられないのはアステイールから見れば明白だった。

「ハガネエエエエエエエエ!!」

よぎる不吉な予感にアステイールは叫ぶが、そこで信じがたいことが起こった。

「……え？」

鋼の持つ金の枝と、巨竜の尻尾がぶつかった瞬間、巨竜がその動

きを止めた。

圧倒的な能力差、速度差、質量差。

どんな強化がなされていても、木の枝程度に受け止められるはずのない巨竜の一撃が、見事に止められていた。

鋼の使った技の名も知らないアスティエルには、だから知る由もない。

鋼の使った『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』には、『最初の一撃が当たった瞬間相手はストップし、残りの攻撃が全て当たる』などという性質があることなど。そもそも、そんな反則的な特殊効果を持つスキルが存在していることすら、想定の間にも登らない。

だから、

「何が、起きたんだ……」

それから起こったことは、アスティエルにとってはなおさら、完全に想像の埒外だった。

攻撃に使った尻尾だけではなく、完全に全身を硬直させた巨竜の速度を吸い取ったように、猛然と鋼が動き出す。

尻尾とぶつかった木の枝を振り抜き、まず一撃。

当然ながら木の枝が巨竜から離れても、まだ巨竜は石像のように固まったまま。

過日のように巨大なオブジェに成り下がった巨竜の体に、鋼は返す刃で二撃目を加える。

それから先は、まるで嵐のようだった。

三撃、四撃と鋼は縦横に木の枝を振るい、その速度がどんどん上がっていく。

鈍重としか言えなかった最初の一撃とは比べ物にならない速度で枝を振るい、際限なくその速さは上がる。

しかも、その体は一箇所に留まっていはいない。

尻尾から体方面に駆け抜け抜けながら、手にした金の枝で巨竜の体を打つ！ 打つ！

打ち込み、斬り上げて、ぶっ叩いて、打ち払って、斬り込んで、返して、痛打し、打撃、殴打、打擲、その連打、連打連打連打…！上がり続けたその速度は、既に人が目で追える限界を超えていた。

常人をはるかに凌駕したアステイエールの動体視力をもってしても、縦横に巨竜の体を駆ける鋼の姿を追いきれないでいた。

（なんて、速度だ。はつきりとは見えないが、おそらく一秒に百発以上を打ち込んでいる）

茫然と、アステイエールはつぶやく。

「これは、スキル、なのか？ しかしこれは……既に人間の業ではない」

鋼の動きはアステイエールが見たどんな英雄、豪傑よりも速かった。

アステイエールがそう漏らす間にも鋼のまるで豪雨のような攻撃は続いている。

残像が見えるほどの速度で移動しながら目に見えぬ速さで斬撃を加える。

剣士を、いや、戦いを生業とする者の理想形とでも言える形で、攻撃、攻撃、攻撃、その繰り返し、繰り返し、繰り返し……。

魅了されたかのように、その様をじっと眺めていたアステイエールは、ぽつりと言った。

「しかし、これはいつになったら終わるのだ？」

動きを止めた巨竜と、その上を目に留まらないほどの速さで動く少年とを見ながら、アステイエールは一人、首を横にかたむけた。

「なあ！ これ、一体いつまで続くんだ？」

同刻。似たような言葉を口にした人間がいた。

今もめまぐるしく動いて巨竜を攻撃し続けている鋼である。

ここまでの展開は、完全に鋼の思惑通りだった。

だがここに来て、ようやく気付いた、あるいは思い出したことがある。つまり、

（『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』は一億とんで二千発の連続攻撃って言ってたけど。

一億二千発って、もしかしてとんでもなく多いんじゃないか？）
ということ。

鋼の言葉を受けて、シロニヤが計算する。

【ええと、携帯の電卓機能使うからちょっと待つのじゃ。

一秒間にざっと120発攻撃しているとして、一日は60×60
×24で86400秒じゃから……。

……うむ、出たのじゃ！】

「どのくらいになった？」

【ざっと十日じゃな！】

聞いた瞬間、鋼の頭を春の風が駆け抜けた。

アハハハハ！春風さーん！待ってよー！ワタシハルカゼチガウ
ヨヨウセイヨー！妖精さーん！待ってよー！アハハハハ！ツカマエ
テゴランナサーイ！アハハハハ！待てこらアハハハ！アハハハハ
！たーのしーいねー！アハハハハ！待ってアハハハハ！ほらつか
まえアハハハちやうぞハハハハ！タダシソレニ八十日ハカカリマス！

けの対象にされたり、騎士団がやってきたり、

蒼髪の司祭が変なことを言ったり、金髪の元騎士がツンデレ発言を残したり、鋼のしりとリスキルがうなぎ登りだったり、

棒切れ一本で巨竜を制す偉業から『棒切れ勇者』という褒められるのかバカにされてるのか分からない二つ名がつけられたり、

功績よりもバカバカしさで人々の印象に残ったせいで、たぶん世界で一番イロモノなヒーローとして英雄の仲間入りを果たしたりするのだが、

それはまた、次の話である。

あ、ちなみに十日後、巨竜は無事に倒せましたとき。

第十九章 10 days

一日目。

初めの内はみな避難にてんやわんやだったが、巨竜が襲って来ないともみると、冒険者を中心に様子を見る人間が増える。

最初は恐々と巨竜とそれと戦い続ける少年を遠目で確認するだけだったが、しばらく危険がなさそうだと見るや、堂々と観戦する人間もぽつぽつと出てくる。

それでも夜には見張りの人間と、一人だけどうしてもその場を動こうとしなかった騎士風の格好をした少女をのぞき、みな家に戻る。

一方その頃。

オラクルしかやることのない鋼は、シロニヤとの古今東西で熱戦を繰り広げる。

それは鋼勝利に終わったものの、次のゲームとしてしりとりが選ばれ、鋼とシロニヤの間でしりとりブームが再燃。二人だけの徹夜のしりとり大会が開催される。

二日目。

さらに見物人が増える。

冒険者ギルドの職員が避難を呼びかけるが、効果はなし。何を思ったか、弁当持参で観戦に来る者まで現れ始める。

鋼、シロニヤにしりとりで百連勝。一時、二人の仲が険悪になる。

三日目。

「近所観光スポットとして定着。花見感覚で続々と人が集まる。冒険者ギルドも早々に説得をあきらめ、会場整理と酔った見物客によるトラブルの処理に回る。」

この時、「ハガネさん……」と気遣わしげに金色の少年を見る職員と、その隣で「これは、使えそうですね」と漏らすメガネの女性職員がいたという目撃証言もある。

鋼、シロニヤとの間でのしりとりを通算成績が、389勝0引き分け0敗になる。鋼はこの勝率に、『瞬間記憶復元』の効果で自分がしりとりで強くなったことに思い至る。

四日目。

この頃から噂を聞きつけ、街の外からも見物客がやってくるようになる。

その流れをいち早く見抜いた冒険者ギルドが、戦いの見れる場所をブロック単位で区切り、場所代を取り始める。屋台も入り、さらにぎやかに。

また、酒の入った見物客を中心にこの後の展開をああでもないこうでもないと予想するのが流行する。

どうしても勝てない状況に錯乱したシロニヤが、『サドンデス脱衣しりとり』なる狂気のゲームを提唱。当然のごとく却下される。

五日目。

冒険者ギルド主導による『巨竜と少年トトカルチヨ』開始。

賭けの項目は多岐に渡ったが、やはり目玉は巨竜と少年の戦いの結末であり、最終的なオッズは、少年の勝ち、巨竜の勝ち、引き分けが、それぞれ1.5:2:4という結果になった。やや少年びいきな結果と言えよう。

実際少年の熱烈なファンらしき人も見受けられ、嘘か真か、目つきがキツイがとびきりの美少女が「これが私の全財産だ」と少年の勝利に全額を賭けたという豪快なエピソードも残されている。

シロニヤのごり押しで強行された『サドンデス脱衣しりとり』によってシロニヤ五分で丸裸に。【ワシは常に全裸待機状態じゃ！】と強がる。

六日目。

トトカルチヨの大盛況を受け、あちこちに予想屋も現れ、議論も大いに活発化する。

『少年は強いよ巨竜も倒せるよ派』 『巨竜は負けないよ少年死んじゃうよ派』の二大派閥が激突、その隙を縫って『どっちも強いよ決着つかないよ派』 『少年は偉いよ命と引き換えに街を守るよ派』 『このまま永遠に戦い続けるよ派』が連立、三つ目の勢力として台頭し、三巨頭体制が築かれる。

そこに『少年と巨竜は仲直りするよ派』 『少年かつこいいよ結婚したいよ派』などがゲリラ的に活動を開始、議論は乱戦の様相を呈し、予想合戦は戦国時代に突入する。

『サドンデス脱衣しりとり』について、【よく考えたらおぬし手がふさがつとるから負けても脱衣できんじゃないか！】と物言いがつく。

「どうせ見えないから脱衣とかどうでもいい」という鋼の意見もあつたが無視され、シロニヤは全裸の代わりに水着のセクシーショートを見せることで手を打つことに。

七日目。

今更ながら、巨竜と渡り合う少年の正体についての詮索と推測が活発になる。

鋼のことを目撃した人間はほとんどいなかったため、『流れのS級ランカー説』『伝説の剣士の息子説』『神が遣わした黄金の闘士説』など様々な噂が好き勝手に流される。

そのくらいならまだよかつたのだが、『古代魔法文明時代からタイムスリップしてきた説』『全く別の世界から時空転移してきた勇者説』や、『オレ、一ヶ月くらい前にアイツがヤマダのこの農園で働いてるの見たぜ。間違いないよ』という『ヤマダ家の孫説』。さらには「実はあのゴワゴワしたさわり心地のいい服こそが本体であり、身体は見せかけである」という『ゴワゴワの人説』が出るに至って、議論は混迷を極めた。

最後まで結論は出なかつたが、まあとりあえず『ゴワゴワの人説』だけはないという方向で意見が一致し、最後まで強硬に『ゴワゴワの人説』を唱え続けた修道女が会議の場から強制退去させられたという。

丸一日裸で過ごしたせいでシロニヤが風邪をひく。ついでに延々続くひたすら徹夜で棒を振るう日々には耐えかね、鋼が心の風邪をひく。「ス〇リー、聞いてくれ、僕は……」「機関の妨害にあつている！」などの妄言を吐き始める。

八日目。

とうとう現場に騎士団が駆けつける。

巨竜なんて大物が復活していたとしたらもつと早くやってきてもおかしくないはずだが、巨竜復活の報と同時に、巨竜を金色の棒切れですつと殴り続けている少年がいる、という情報まで流れたためにイタズラだと判断され、初動が遅くなってしまったという事情があった。

騎士団は巨竜を殴り続ける少年にひとしきり驚いた後、とりあえず巨竜を包囲。出来るだけ少年のいない場所を狙って攻撃をしかけてみたりもしたのだが、全く効果が見られず、それどころか見物をしていた人々から「少年に攻撃が当たったらどうする」と抗議が殺到したため、それ以上の行動は起こせずに様子見をすることになった。

ちなみに、その騎士団の攻撃が止んだのは、「やめてくれ！ 彼はわた……街のために、今もまだ戦っているんだ！」と言って、単身騎士団の前に立ちはだかった金髪の美少女の必死の説得が功を奏したからだ、という情報もあるが、真偽のほどは定かではない。

鋼、とうとうしりとり奥義を極める。たった十七手で確実にシロニヤを敗北に追い込む『絶対運命方程式』を発見。同時に心の病も進行し、しりとり時以外の発言が「かゆ……」と「うま……」の二種類になる。

九日目。

危険度もよく分からず、解決策も見いだせなかった騎士団は三日間だけ滞在し、それで事態が動かなければ一部の団員を残して撤収することを決定する。

騎士団とは言っても、今回駆けつけたのは所詮辺境を守る自警団に毛が生えた程度の部隊だったので、周りの冒険者や観光客に交じって観戦を始める。

おかげで巨竜せんべいなどの土産物が売り上げを伸ばし、トトカ
ルチヨのチケツトも完売する。

鋼、精神崩壊。「あんぱん」以外の言葉を口にしなくなる。この隙にとシロニヤがしりとり勝負を挑むが返り討ち。ふたたび全裸に

十日目。

早朝。少年の最後の一撃を受け、巨竜がついに倒れる。

同時に無数の歓呼の声と、ただの紙切れになったチケツトが空に舞う。

そして……。

「僕、は、しりとり、キング……」

意味不明な言葉を漏らして、地面に倒れそうになる街を救った少年と、

「お疲れ様。……ありがとう」

それを優しく抱き止めた金髪の元騎士の姿は、多くの人の語り草になったという。

こうして、華々しくもバカバカしく、あるいはバカバカしくも華々しく、

人々から尊敬と、それと同量の呆れを込め、『棒切れ勇者』と呼ばれる英雄が、ここに誕生したのだった。

第二十章 世界にまつわるエトセトラ

(朝、か……)

ぼんやり覚醒する鋼の耳に、小鳥の鳴き声が飛び込んで来る。

(昨日は、いや、ここ十日間くらいは大変だったなあ……)

身体は自動で動いてくれるといっても休憩も睡眠もなしでぶっ続けだ。肉体的な疲労はなくても、精神的にはずいぶんと追い詰められていた。

特に最後の辺りはずっと悪夢を見ているような状態で記憶がほとんどなかったが、無事に巨竜を『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』の即死効果で倒した後、意識を失ったのは覚えている。

(あの後……誰かが宿屋に運んでくれたのか?)

体を感じるこの柔らかさはベッドの物だろう。

そこからここが宿屋であろうと鋼は当たりをつけた。

(いつまでもこうしていても仕方ない。そろそろ起きるか)

そう決心し、完全に目を覚ました鋼の視界に飛び込んできたのは、異世界物ではお決まりの見知らぬ天井、ではなく、

【お、おはようなのじゃ】

ようなしてないような……。

適当に流していたのではっきりとは思い出せなかったが、鋼も大体の事情は把握した。

【い、言うんじゃないのじゃ！ あ、あの時のワシは、ワシは……。うろうろ……。いったいワシは、どうしてあんなことを……。】

孔明の畏じゃよ。鋼というエロ猿にまんまと騙された結果じゃよ
「人聞きの悪いこと言うなよ！」

「黙れ今孔明め！」

悪口なんだかよく分からないことを言う

しかし、どうやら言葉にできないくらいに後悔しているらしい。

そこで、鋼はまた余計なことに気付く。

「あれ？ そういえば最後はまたはだ……。」

【せ、セクハラじゃ！ 今はちゃんと服を着ておるのじゃ！】

「あー。だよな」

正直鋼には見えないし興味もないのでどっちでもいいのだが、適当に相槌を打っておく。

「そういえば、さっきのもオラクルなのか？」

【う、うむ？ ああ、もちろんじゃ。正確には『オラクル（添付ファイル付き）』の効果じゃな。

通常のオラクルに加えて、映像イメージも見たり送ったりできるのじゃ。

……まあ、静止画限定じゃがな】

「ああ、そういや、あの水着シロニヤ、動いてなかったような気がするな」

いきなり頭の中に画像が送られてきてパニックになったせいで気付かなかったが、本物のシロニヤであれば鋼の視線を受けて何かしらの動きを見せただろう。

【も、もうその話はおしまいなのじゃ！】

それよりこれからどうするのか問題なのじゃ！】

露骨な話題逸らしたのだが、鋼もそれに乗る。

「そうだな。今は……大体朝の七時半くらいかな？」

【分かるのかの？】

「……何か、こっちに来てから時間の経過が秒単位で分かる気がするというか。」

最後に時計を見た時間から逆算するとそんな感じかな、と」

【ああ、『完全体内時計』のタレントじゃな。それならコンマ一秒以下の誤差で正確じゃろうな】

「もうそんな台詞を聞いても全く驚かない自分が怖いよ」

他のチートのタレントに比べれば、そのくらいは許容範囲だろうと思ってしまう。

鋼が運ばれてきた宿屋は、幸いにも初日に止まった所と同じだった。

とりあえず鋼は、体の汗を流してからギルドに向かうことにする。ちなみに、宿にはお風呂どころかシャワーまで完備されていた。

ガスも電気もないだろうにどうするのかと聞いたら、やはり魔法で完全に代用できるらしい。

しかも、一度設備を作ってしまったえば、後は少量の霊子、つまりマナを注ぐだけで使えるとか。

宿泊している人は無料で使えるらしいので、少なくとも50マナ以下で動くのだろう。

鋼もシャワーを使ってみたが、何の違和感もなかった。

他にも照明器具や風呂、洗濯機！？などを覗いてみたが、動力が霊子だということのをのぞけば、日本の電化製品と大差ない出来栄えだった。

(こりゃー本当に現代にあるものはほとんど魔法で再現されている気がするなあ……)

もちろん『再現されている』だけであり、原理は全く異なる。

というか、地球の技術者たちが歴史の中で工夫、研鑽し、数十年、数百年かけて作ったはずの装置を「魔法だから」の一言で完全再現してしまっているこちらの人たちはある意味チート極まりない。

なんて考えていると、シロニヤが割って入ってきた。

【まあ、この世界の魔法は神様の力と同じじゃからな。

たしかにチートと言えるかもしれんのじゃ】

「神様の力？ それに、この世界の魔法、って言ったのか？」

【うむ。その辺りの説明はしておらんかったのう。

魔法と言っても世界によって色々ちがうのじゃが、この世界の魔法の原理は神が使う力とほとんど同じなのじゃ】

「へえ。その原理って？」

【原理がないことじゃよ！】

「……は？」

【世界には火の神や水の神、芸能の神や学問の神、いろんな神様がおるじゃろ】

「トイレの神様もな」

【うるさいのじゃ！ とにかく、それぞれの神はそれぞれの分野についての力を持つ。

火の神だったら火を出せるし、芸能の神なら歌をうまくさせられるし、トイレの神は……、とにかくそういうことじゃ！】

「ごまかすなよ、父親の仕事だろ……」

【と、とにかくじゃな。神様が振るう力は色々あるんじゃが、その本質は一つなんじゃ】

「本質？」

【願いを叶える力じゃ、ということじゃよ】

【火を出したいと願えば火が出るし、歌をうまくしたいと願えば歌がうまくなる。

そこに理屈はなく、どうしてそうなるかは誰にも、神様にも分からないのじゃ】

「むちやくちやな存在だな、神様」

【それはそういうものだ、とあきらめるしかないの。

もちろん、神の振るう力には因果律とかいうものが関係してくるし、それはこの世界の成り立ちとも関わってくるのじゃが、それはおいおい、じゃな】

「じゃあこの世界でも、魔法ってのは理屈じゃないのか。

たとえば火の元素を集めると火が出る、とかじゃなくて、火を出したいと思うだけで火が出る？」

【もちろん、この世界での全ての源である霊子、マナは相応に必要なじゃがの。

強いて理屈を言うと、霊子という小さな神様をうまく使くと、願いが叶うのじゃ】

「はあー」

話が壮大かつ荒唐無稽すぎて、鋼としてはそんなリアクションを取るしかない。

身支度を整えている間に無駄に世界スケールな話を聞いてしまったが、鋼は気を取り直してギルドへ向かう。

が、その道中、

「お、棒切れ勇者じゃないか！ おはよう！」

「あー！ ぼーきれゆーしゃだ！ あははははははは！」

「勇者様、ありがたやありがたや」

見知らぬ人たちがあいさつしてきたり笑ってきたり拝まれたりするのには閉口した。

「い、いったい『棒切れ勇者』ってなんだよ」

【おぬしのことじゃろ？ 文脈的に】

「そりゃ分かってるけど！」

顔を隠すようにして道を走り抜けるのだが、金色の衣装を着ている人間が顔を隠しても全く意味はない。

棒切れ勇者、棒切れ勇者と叫ばれながら、鋼は飛び込むように冒険者ギルドに逃げ込んだ。

「あ、キルリスさん！」

そこでようやく顔見知りを見つけ、ほっと息をつく。

「ハガネさん?! もう、大丈夫なんですか？」

自分を心配してくれるキルリスに、ますますほっとする気持ちを感じながら鋼はカウンターに近付いて、

「貴方が、ハガネ・ユーキ様ですね」

鋭い目つきのメガネの女の人につかまった。

【ま、また女の新キャラじゃと?!】

頭の中でシロニヤが何かしら騒いでいるようだが、鋼には気にしている余裕はない。

目の前の女性からは、抗いがたい何かというか、命の危険とかとは異なる、妙な威圧感がにじんでいた。

「はい。あなたは……?」

「申し遅れました。私は冒険者ギルド職員のラトリスと申します」

「……リス縛り?」

「何か?」

「な、何でもありません！」

思わずくだらないことを言っただけにらまれた鋼は、あわてて首を振

った。

鋼がなんとなく職員室に呼び出された生徒のような気持ちでいると、

「まず、貴方にはお礼を言わせて貰います」

「は？」

「貴方のお蔭で大変儲けさせて頂きました。有難う御座います」いきなり、ラトリスに頭を下げられた。

あまり頭を下げられ慣れていない鋼は狼狽したが、それ以上に事情がつかめない。

「え？ あ、いえ……… どういうことですか？」

「その、わたしたち冒険者ギルドは、ハガネさんと巨竜の戦いで少し商売をさせていただいたんです」

「あー。なるほど」

まだ頭を下げ続けているラトリスに代わって、キルリスが説明してくれた。

そういえば、見物客がたくさん来ていた気がする。その関係で何かもつけたのだろう、と納得する。

まさか鋼も、自分の勝ち負けや生死が賭けの対象にされていたとは思ってもしなかった。

「そのお礼、という訳では御座いませんが、以後、将来有望なハガネ様の専属として、私、ラトリスが貴方のサポートを担当させていただきます」と存じます」

「え？ それって………」

ようやく顔を上げたラトリスの爆弾発言に、鋼は助けを求めてキルリスを見る。

「ええと、要は彼女がハガネさんの冒険者としての活動を手助けしてくれるというか、マネージングしてくれるというか………」

「具体的には、特別な依頼の斡旋や鍛錬メニューの考案、知名度の調整や英雄としてのプロデュースを担当します」

アイドルのプロデューサーみたいなものだろうか。鋼は突然の想像もしていなかった申し出に、困惑した。

「あ、でも、すごいんですよ、ラトリスは！」

この前担当した方なんて、なんと半年で冒険者ランクをD+からB-まで上げたんです！」

「へえ。それはたしかに……」

よくは分からないが、冒険者ランクの最高が実質Aだというなら、Bランクでもかなりの物だろう。

ゲーム感覚で考えるとそう大したことがないようにも思えるが、この世界の冒険者は一生、つまり年単位、十年単位で少しずつランクを上げていくはずだ。

それを半年で、となれば、それを可能にさせたラトリスはかなりの凄腕だと考えられる。

「そういえば、その人は今どうしてるんですか？」

ハガネが興味本位で口にした言葉に、キルリスは硬直し、ラトリスが硬い声で答える。

「……逃げました」

「え？」

「あの軟弱者は一月ほど前、私達の街を捨ててどこか遠くの街へ逃亡した、と申し上げているのです」

ラトリスの目には強い怒りが見えた。どうやら鋼は盛大に地雷を踏んだらしい。

「あ、ええと、それはその……」

「そんな事よりも。次の話をしましょう。」

「ここでは何なので、こちらへ」

ラトリスの迫力に、鋼がまさか逆らえるはずもなく、為す術もなく連行されていく。

「あ、わたしも行きます！」

キルリスがあわててついてくる。

仕事はいいのかと思わなくもなかったが、ラトリスと二人きりなんて怖すぎるので、鋼は何も言わなかった。

個室に連れて行かれた鋼は、革張りのソファに座らされた。

反対側に座るのはラトリスとキルリス。何かの面接みたいである。ラトリスが雑談などを振るはずもなく、いきなり本題に入る。

「まず、現状貴方がどのような状態なのか、把握させて下さい。

基本状態でいいので、ギルドカードを見せて頂けますか？」

「は、はい……」

ギルドカードを手渡す。それを見て、ラトリスは不機嫌そうに眉を上げた。

「レベル24ですか。思ったより上がりませんでしたね。

巨竜と言っても所詮雑魚モンスター上がりですか」

「え？ レベル24ですか?!」

むしろ、驚いたのは鋼だ。レベル2から24なんて、一足飛びにもほどがある。

「当然でしょう？ 災害級のモンスターを倒したのですから、この二倍は上がったもしい位です」

「そういうものですか……」

まだ理解しきれないと判断したのか、ラトリスが言葉を重ねる。

「ラーバドラゴン自体は、火山に多数生息するレベル55相当のモンスターです。」

巨竜は魔物を倒して成長する事でボス級以上の強さを持っていた

と推測されますが、経験値はせいぜい通常種の数倍止まりだったの
でしょうね」

「はあ……」

【あ、言い忘れておつたが、天魔滅殺、暗黒、か、怪人隠れの劇？
の技は……】

（『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』？）

【それじゃ！ その技の即死効果は耐性にかかわらず100%発動
じゃが、例外的にボス属性のある敵には効かないのじゃ。

ボスの即死無効はシステムの最上位じゃからな】

どこからか話を聞いていたのか、シロニヤが口をはさんでくる。

どうやら、どんな強敵も『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』なら一撃、
というワケにはいかないようだ。

……鋼としては、もう二度と使うつもりはないが。

「それに……職業は学生のままですか。

少しだけ、英雄に変化している事を期待したのですが、どうやら
貴方の学生属性は存外に強いようですね。

貴方は今も、どこかの学園に所属しているのですか？」

「え？ そろ……かもしれません」

鋼はあいまいにうなずいた。

日本の高校でどんな扱いになっているか分からないが、もしかす
ると鋼が学校への未練を捨てきれない限り、鋼の学生という職業は
塗り替えられないのかもしれない。

「そして、年齢は15ですか。これはキルリスに聞くのを忘れてい
ましたね。

……私の一つ下、ですか。英雄として売るには、ほんの少し、若
過ぎる気もしますが」

「え？」

自分の年齢が転生前より二つほど下がっているのにも驚いたが、それ以上に驚愕すべき事実には鋼は目を見張った。

「何ですか、その目は。まさかとは思いますが、私の年齢を疑っているとか？」

「い、いえ、まさか、そんな……」

実際、ラトリスはとっくに二十歳をすぎていると考えていた鋼は冷や汗をかく。

しかし慣れた反応なのか、ラトリスは表情も変えずに、

「自己紹介が不十分だったようですね。これを」

すつとカードを差し出してくる。

ラトリス・ブルレ

LV 38

職業 ギルド職人

年齢 16

二つ名 インスタント・ヒーロー・メイカー

(うわ！ これ…！)

年齢が本当に16だったり、二つ名がついていることも驚いたが、そのレベルにも驚いた。

38というのは、もしかすると冒険者で言えばベテランクラスのレベルではないだろうか。

(職業だけは予想通り、ギルド職い……いや違う！ ギルド職員じゃなくてギルド職人だ！

いったいなんだギルド職人って！)

ちら、とラトリスの顔をうかがうと、鋼はよっぽど顔色が読みやすいのか、

「言っておきますが、職業とはカードを司る審判の神がその人の生

き様から勝手に付ける物です。

私の関知する所ではありません」

何も言う前からしつかりと釘を刺された。さすが敏腕である。

「これで、理解して頂けましたか？」

「はい……」

むしろ謎は増えたが、これ以上藪を突いて大蛇が出て来ても対処できない。鋼は素直にうなずいた。

「そこで、当面の方針ですが、まず依頼云々の前に、身辺の整理から始めるべきかと思われます」

「身辺の整理？」

「貴方は今、この街一番の有名な有名人です。それは様々に利用可能なアドバンテージでもありますが、当然ながらデメリットも存在します。例を挙げると、これから貴方は巨竜を倒した事で大量の報奨金を受け取る事になるのですが」

「え？ あいつ、懸賞金とかかかってたんですか？」

鋼の記憶がたしかなら、復活してすぐに襲ってきたので、懸賞金なんてかけられる暇はなかったはずだった。

「数十年前にかけられた懸賞金が継続しているのです。

貨幣価値が変わっているので若干額は落ちますが、マナ換算で約65万。実に大金です」

「えええええ！！」

その額には、ラトリスの年齢よりもシャワーの存在よりも驚いた。何しろ50マナで宿屋に泊まれるのに、その一万倍だ。驚かないはずがない。

もっと具体的に言えばビキニのシロニヤを見た時の四分の一くらい驚きである。水着シロニヤさんパねえ。

「賞金は貴方のカードにマナとして溜め込まれます。もちろんカードは基本的に本人にしか使えませんが、強制的に使わせる事も出来なくはありません。」

この意味が分かりますか？」

「僕からお金を取るうとして、襲ってくる人がいるかもしれないってことですか？」

「その通りです」

ラトリスはあっさりとうなずいた。

その態度に、鋼の中で不安が広がる。

「もしかして、ここって治安が悪いんですか？」

道を少し外れたらスラムがあるとか、奴隷市場が開かれてるとか、街外れに盗賊の根城があるとか……」

その辺りはいかにもファンタジー世界の定番だ。

鋼としてはあまり血なまぐさいのは勘弁してほしいのだが。

「ハガネ様。それはどこのファンタジー世界の話ですか？」

だが、ラトリスには何この人、みたいな目で見られた。その後ろのキルリスまできょとんとしている。

しかし、ファンタジーな世界の人に何そのファンタジーって言われると思ったよりダメージでかい。

「この街にスラムなどありませんし、奴隷市場などという物は寡聞にして存じません。」

盗賊については、大きな街にはギルドが存在するという事は聞いた事がありますが……」

思った以上に、ここは平和な世界、ということでもいいのだろうか。モンスターとかいるのに？

などと鋼が首をかしげていると、困った時のシロニヤちゃんが出てきた。

【サニーが頑張っておるからの。この世界では犯罪行為はひかえめなのじゃ】

(サニー?)

【ワシとも知り合いの審判の神じゃよ。めずらしい人間上がりの神様で、本名は……ええと、さにわじゃったか、はにわじゃったか……】

(さにわじゃないか？ はにわだったらハニーだし)

【たぶんそれじゃ!】

知り合いのはずが名前を忘れた上に『それ』扱い。シロニヤに友達ができない理由が見えた気がした。

【神の目をもってすれば人間の悪事などお見通しじゃからな。

悪事を行うと冒険者カードなどに記載されてしまうし、割に合わないのじゃ】

(分かるような分からないような……)

【全盛期の夜〇月があるデス〇ート世界みたいな?】

(すごく分かりやすい!!!)

だが、その説明は色々と危険だ。

「よ、よく分かりました。それで?」

いい加減不審そうな目をしているラトリスに話の続きを促す。

「……あるいは、こちらの方が可能性としては高いのですが、有名になった『棒切れ勇者』と戦ってみたい、決闘して名を上げたい、などという人間が出る事はあるでしょう」

「あるんですか……」

「はい。間違いなく」

保証されてしまった。

「まあそれならそれで断ってしまえばいいのですが、それ以外にも

……」

「まだあるんですか?!」

「まだあります」

断言されてしまった。

「例えば、酒に酔った高レベル冒険者が、勇者である貴方を試してやろうと、自分の飲んだ空のジョッキを貴方に投げつけたとします。

どうなると思いますか？」

「すごく痛い、とか？」

「たぶん死にます」

「死の恐怖ふたたび!?!」

鋼は思わず叫んだ。

空ジョッキぶつけられただけで昇天とか、PKKなんて目じゃないくらいの恐ろしさだ。

「レベルは多少上がったようですが、まだ防御が0のままならその可能性もあるでしょう」

ラトリスが言うには何でもダメージ計算というのは状況によって面倒な計算式が適用されるそうだ。

特に総合的な防御力というのは生身の防御と装備の防御の加算ではなく加算と乗算の複合のため片方が0だと思わぬ大ダメージが…

…云々、ということらしい。

よく分からないが、すごく危険ということだけは鋼にも感じ取れた。

「そこで、護衛を雇う事を提案します」

「護衛、ですか？」

屈強な黒服SPを思い浮かべた。超VIP。

だが、余計目立ってしまいそうな気がする。

「幸い、貴方には65万マナという大金があります。その一部を護衛に回しても、身の安全を図るべきでしょう」

「なるほど。それは、必要かもしれませんね」

鋼にも当然、死の恐怖さんにはできるだけ遠くにいてほしいという気持ちはある。

「特に、有望な冒険者に護衛を頼めばクエストを手伝って貰う事も可能です」

「おお!？」

「そして将来的に、彼らと親しくなつて護衛ではなく仲間になれば、費用も掛かりません」

「な、なるほど……」

「実は、貴方が巨竜を倒す前からそういった方々にはもう目星はつけてあります」

「仕事はやっ!」

「お褒めに与り光栄です」

もはやラトリスの言葉にリアクションをするマシンと化した鋼に、彼女は少しだけ満足そうな顔をした。

「とはいえ、ずっと近くに置く人です。貴方にも何か希望や要望があるなら伺います」

「あ、そうかあ」

四六時中一緒にいる相手だと考えると、やはり気に入らない相手では落ち着かないだろう。

一日中ずっと筋トレしている汗臭いおっさんとか、毎日たばこを200本吸うヘビースモーカーとか地味に嫌かもしれない。

しかし、鋼も青少年、となると……。

「で、できれば、ですけど」

「はい」

「若い女性の方が、いいかな、というのは……」

鋼が言った瞬間、ラトリスの目がすうう、と細くなった。

「あ、いや、あくまでできれば、というくらいで……」

やばい欲望全開しすぎたか、と鋼は焦った。

（でも、ずっと一緒にいるならやっぱりかわいい女の子の方がいいよなあ……）

と考えるのは、元高校生男子としては正常な心の動きだろう。

しかし、事態は鋼の予想の斜め上に行く。

「色恋が絡むと色々面倒なのですが。仕方ありませんね。」

……そういう基準で選んだ訳ではありませんが、護衛候補は全員、若い女性です」

「え？」

「しかも美少女揃いです」

「なん……だと……」

鋼はあまりの幸運に、驚きを隠せない。

自分の脳内で、

【ぬう！？ これは、やはり……】

なんて思わせぶりなことをつぶやく神様もいたが、鋼は自らの幸運を神様に感謝するのに忙しく、それどころではなかった。

もちろんこの神様とあの神様は別である。念のため。

「貴方には直接彼女達に会って頂いて、護衛を頼むかを決めて貰いたいのですが、もちろん今すぐ、という訳には参りません」

「ああ、そうでしょうね」

「明日の朝、午前九時頃にここに来る事は可能ですか？」

「はい、大丈夫です」

特に予定はないし、お金がもらえるのならいそいで依頼を受ける必要もない。

「なら、そのように。」

今日一日は、護衛なしという事になってしまいましたが……」

「それも、大丈夫です。目立たないようにしますので」

心配させないように、はっきりと言い切ったはずなのだが、鋼に向けられたのは冷たい視線。

「だとするなら、せめてその格好は何とかするべきだと私は思いますが」

「……あ」

自分が今、某大尉よりも金づくめだと思い出して赤面する。

これでは目立たないも何もない。

「それに、その左手に持っているトレードマークも、捨てるとは言いませんが隠す事を推奨します」

「え？」

指摘されて自分の左手を見ると、そこには巨竜との戦いで使った木の枝があった。

あの時はその場限りの武器のつもりだったし、持ってきた覚えもなかったのだが、これは、

【言っておくが、そんなタレントは設定しておらんからの】

先にシロニヤに釘を刺されてしまった。

だとすると、純粹な自分のうっかりだということか。

鋼は自分の間抜けさにちょっとため息をつく。

「とりあえず、貴方に巨竜討伐の報奨金を渡します。

これで目立たない色の防具と、もう少しマシな武器を買ってください」

「は、はい……」

ラトリスにカードを渡すと、彼女は部屋を出ていき、二分ほどで

戻ってきた。

「確認して下さい」

と言われてカードのMana残高を見ると、確かに65万Manaが入っていた。

「何か他に聞きたい事はありますか？」

ラトリスの問いに首を横に振ると、

「では、明日の朝まで死なないよう注意して下さい」と物騒なあいさつを残し、ラトリスはあっという間にいなくなってしまった。

残ったキルリスと、なんとなく顔を見合わせる。

すると、キルリスが申し訳なさそうに言った。

「あの、今さらな話ですが……」

「うん？」

「あの人はわたしの知る限り、ミスレイの次に会っちゃいけない人なんです」

それは最初に言ってくれよ、と鋼は思った。

それから、

「ハガネさんがご無事でよかったです」

「いえいえこちらこそ」

などとゆるいトーンで世間話などをして、ギルドを出ることになった。

目的地は、武器屋と防具屋。

ラトリスからは怖くて聞けなかったが、ちゃんとキルリスに場所を教えてもらった。

その、別れ際のことだった。

「ハガネさん！」

キルリスが、急に鋼に頭を下げた。

「え？ キルリス、さん…？」

しかも、地面に平行に頭を九十度下げる最敬礼。

そして、

「街を救っていただいて、ありがとございました。

ハガネさんは、わたしにとって最高の英雄です」

その不意打ちに、鋼はくらっとくるものを覚えながら、

「また、来ますから」

かろうじてそれだけを言って、ギルドを飛び出した。

「いつてらっしやいませ！」

単なる客へのお愛想とは思えない、キルリスの丁寧な見送りのあいさつを背中で受けながら、鋼は赤くなった顔をうつむかせて隠した。

【しかしラトリスとかいうあのメガネ。態度はでかかったが胸は口ほどでもないの。

微乳というかなんというか、アレならワシの方が大きいのではないかな？】

「はいはい。いいから黙ろっね微生物胸は」

【な、なんじゃとお！ だれが頭微鏡なしじゃ観測できない胸じゃ

つてえ！

おぬしなんか、ワシの裸が見たくてしりとりを必死で訓練しとつたくせにい！！】

「え！？ そういう解釈してたの！？」

シロニヤと鋼、二人は仲良し！

第二十一章 ファルザスの工房

「道に迷った……」

鋼は、にぎわう街の雑踏から少し外れた裏路地をさまよっていた。
「ああもう、全く、防具屋までは順調だったのに……」
金ぴかの装いをやめ、すっかり普通の服装になった鋼は街をさまよいて歩く。

キルリスに紹介してもらった防具屋には難なく着いた。

「今着ている服の、色違いとかがあってありませんか？」

と聞いたらなんと、帽子と上着とズボンについてはデザインもサイズも全く同じものが見つかった。当然だが、聖王の法衣については同じものはないらしい。

これ、本当に防具つくくりでいいのかなー、とか思いつつ、上着とズボンを似たようなデザインのものを合わせて三着ずつ買い、その場で着替えさせてもらった。

首輪をもらう時すごく重かった覚えがあるので警戒していたが、特に重さを感じることなく、普通に服は受け取れたし着れた。

で、着替えたところで久しぶりに『黄金聖闘士化』を解除。普通人に戻る。

その上から完全に透明になってしまった聖王の法衣を羽織るが、全く着ている感覚がない。

「ふふ！ これぞインビジブルコート！」

テンションが上がってつい叫んでしまうと、

【そのセンスはないんじゃないよー】
という脳内からのダメ出し。シロニヤの存在をすっかり忘れていた。

「そ、そういえば、首輪はあんなに重かったのに服は重さを感じないのはどうしてだ？ 防具は特別なのか？」

あわててごまかす。

【いや、普通に重はずじゃぞ？ たぶんおぬしの筋力が常人レベルまで上がったのではないか？】

「え？ そうなの？」

そういえば、宿屋で目覚めてから首輪の重さを感じなくなっている気がした。

あわててカードを取り出して、能力値が見たい、と念じる。
すると、

LV	24	HP	6679	MP	2218
筋力	88	知力	0	魔力	0
敏捷	44	頑強	0	抵抗	0

「……うん？」

今、ずいぶんとバランス悪く魔改造されたステータスが見えたよ
うな…？

鋼は思わず目をこすって見間違いではないかと期待したのだが、

【うは。チート乙、なのじゃ】

その前に性悪猫神様が、それが事実だと態度で教えてくれた。

【ま、成長系のタレントは多いからそんなものじゃろ。

特にHPMPの上がり、レベルの数値と関連するものもあった

っの】

「マジか……」

うる覚えだが、最初のキルリスの説明に、能力値は50を超えたら一流で100を超えたら超一流、みたいな話があった気がする。たった十日で90近くも能力値が上がったと聞けば、いくら何でもみんな不審に思うだろう。

まあ赤ん坊以下の能力で15まで生きてきたという時点で不自然なことこの上ないのだが。

「っと、待てよ？ これて今の服を普通に着られる理由は分かったけど……」

それだけでは説明がつかないことがある。

「どうして初期装備は重いと感じなかったんだ？」

アステイエルいわく、赤子より弱い鋼が初期装備の重さを感じなかったのはどうしてなのか。

その答えはシロニヤがあっさり出してくれた。

【それはきつと、『初期装備超軽量化』の効果じゃな。『初期装備軽量化』の上位タレントじゃ】

「効果は……大体想像つくけど」

【うむ。超便利なタレントじゃぞ。初期装備がどんなに重い装備でも、最低値まで軽量化される】

「おー。久しぶりに役立ちそうなタレント」

【うむうむ。そうじゃろうそうじゃろう。

ただし、軽すぎて手を放すと空中に浮いたままになるので注意が必要じゃ。

あと洗濯物として干す時、洗濯ばさみを使わないと絶対風で飛んでいくのでこれも要注意じゃな】

「お前は何でほどほどということができないのか……」

そういえば、この透明聖王の法衣の着心地が全くないのは、重さ

がほとんどないからか。

そりゃあ重量1グラムとかの服だったら、抵抗も何も無いから着ていても邪魔にはならないはずだった。

鋼は半分呆れながらも納得した。

「あいかわらずめちやくちやだな……」

【そういえばじゃが、めちやくちやついでに、おぬしのタレント、もう一つ判明したぞ】

「ん？ どういうことだ？」

【正確に言えば、候補が見つかったただけじゃがな。

おぬし、この世界に来てから女性にやたらと縁があるとは思わんか】

「あー。考えてみればそうかも。

ミスレイさんにキルリスさん、一応アステイエルにラトリスさんまで……って、まさか?!」

【うむ。まず間違いなくタレントが関わっておるの。

ワシの知る限り、異性に関するタレントは三種類じゃ】

そう言って、シロニヤはその三つのタレントについて説明を始めた。

『ハーレム系主人公体質』

【まず、これは単純に女性、特にキャラが立っている女性と出会いやすくなるタレントじゃな。

特に出会い以上のイベントを起こすタレントではないから、マンガの主人公みたいにやつぎばやに厄介ごとに巻き込まれる効果はないので安心するのじゃ。

ただ、街角で何気なくぶつかった相手が亡国の姫君じゃったりするから、結果的にそこから難題が発生することはある。注意するのじゃぞ?」

「それ何に気を付ければいいんだよ!」

『ヤンデレの誘引』

【二つ目はこれじゃが、残念ながらこれは徹夜明けに作ったタレントでよく覚えてないのじゃ。

その時、学校での日々を赤裸々に描いたゲームをやっておったことは覚えてるんじゃないが。

まあたぶんヤンデレがわんさか出てくるか、周りの人がヤンデレになるタレントじゃる。

女性から頻繁に刺されるようになるので要注意じゃな】

「さらっと言つなよ! こんな持ってた時点でゲームオーバーじゃないか!」

『ニコポの手管』

【これはアレじゃな。笑顔を媒介とすることで、会った女性を一瞬でほれさせるタレントじゃ。

異性に限れば全方位、全年齢に使用可能じゃから、ロリでも熟女でもお婆さんでもり〇レイアでも赤ん坊でもゾンビレディでもどんどこいじゃ!

ただ一度ほれられちゃったらクーリングオフ不可なので、既婚者とかヤンデレとかを引き当てた場合、やっぱり高確率で刺されるので注意するのじゃ!】

「これを持っているなら、僕は一生笑わないと誓おう」

【まあ、今までの感じからすると、おぬしが持つておるのは十中八九『ハーレム系主人公体質』じゃる。

『ヤンデレの誘引』はまだ分からんが、『ニコポの手管』を持つていることはまずなさそうじゃしな】

そう言つてシロニヤは話を打ち切った。

「ということは、きっと明日会うことになる護衛候補の女の子たちもきつとキャラ立ちしてるってことで……。」
つまりはみんな、変わり者の可能性大、か。なんか、胃が痛くなってきた」

鋼は前途の多難さを思っつて、ちよつとため息をついた。

【ふむ。まあそれはいいのじゃが、「コウよ」
「ん？」

【おぬし、いったいどこに向かつておるのじゃ？】

「え？ あれ？ ここ、どこだ！？」

シロニヤとの会話に夢中になっていて、周りを見るのを忘れていた。

周りの光景は鋼の見知つた物ではなくなつていて、元の道に戻る方向さえも分からない。

「と、とにかく歩いてみよう。大きな通りに出られればなんとでもなるー！」

【……そううまく行けばいいがのう】

と漏らしたシロニヤの不吉な予言の通り、歩けば歩くほど深みにはまり、最終的に人気のない裏路地に。

で、冒頭に戻る、とこつというワケである。

【この付近、もしかすると方向感覚をかく乱する魔法でもかかつてるのかもしれないの】

「そんなの誰が何のために仕掛けたんだよ」

【そんなのは知らんのじゃ】

などと言い争いながら街をさまよう。

「あー。まさか道聞いてたのに迷うはめになるとはなあ」
思わず、ふらふらと近くの壁に手をつく。

しかしそれが間違いの素だった。

「ありやつ？」

手をついたはずの壁が、何の前触れもなく消え失せた。手が、壁のあったはずの場所をすり抜ける。

【コウ！？】

シロニヤの焦ったような声を聞きながら、鋼はどこも知れぬ建物の中に転がり込んだ。

鋼が入り込んだ先は、

「ここ、武器屋……？」

広々とした空間の壁一面に武器の立ち並ぶ、どう見ても武器屋の中とは思えない空間だった。

「テメエ！ 一体どうやって入ってきたやつだ！」

突然の罵声に鋼が顔を上げると、奥にはひげと筋肉の化け物みたいなおっさんがいた。

「え、と？ ここは、どこなんですか？」

「そんなことも知らずに入ってきたのかよ！」

ここは天下一の武器屋、『ファルザスの工房』よ！」

「はあ……」

対する鋼のリアクションは薄い。

実は『ファルザスの工房』と言えば知る人ぞ知る幻の店なのだが、そんなことをこの世界に来たばかりの鋼が知るはずもなかった。

そして、そんな反応は当然ながら店主にも伝わる。

「悪いがオレは気に入った相手以外には武器を売らねえことにしてるんだ。」

だから……ってお前！ なんてもん装備してやがんだ！？」

自分の店も知らないようなレベルなら大したことはないだろうと

追い返そうとしたのだが、鋼が身にまとっている『見えない服』を見て目を見開いた。

「え？ どれのことですか？」

「その服だよ！ それ、聖王の法衣じゃねえか！

しかも、最上級の透明化の魔法と軽量化の魔法がかかっている！

ああ、いや、違うか。魔法じゃねえな？ 神の祝福？」

「あー」

初期装備強化系タレントの効果って、祝福に分類されるのか、と変なところに納得する鋼。

だが当然店主のおっさんは、納得するどころかそれを知るとますます詰め寄ってくる。

「どこで手に入れたんだ、それ。

いや、ちよつと待て。それだけじゃねえな。

その腕輪！ もしかして複製の腕輪じゃねえか！？」

「え？ アイテムボックスじゃないんですか？」

「ば！？ おめえ何言ってるんだ！？」

それはランクで言えばSS級のレアアイテム『複製の腕輪』だろ！？」

「SS級?!」

アイテムにもランクあったのか、と思うと同時に、何でそんなものが、と驚く。

……まあ実際には、入手元なんて一つしかないのだが。

「うん。残念だがそいつにはもうアイテム入れちまってるらしいな。

しかしさすがのオレも、現物は初めて見たぜ」

「あの、複製の腕輪ってどんな効果なんですか？」

「あ？ 知らずにつけてたのか、もったいねえ。

まあ、ある意味使い捨ての便利アイテムだな。

簡単に言えば最初に入れたアイテムをひたすら複製するアイテムボックスだ」

「ど、どういうことですか？」

「例えば最初に薬草入れると、次に何を入れてもひたすら全部薬草に変わるんだよ。」

だから最初に金塊でも入れて、それから大量に石でもツツコめば簡単に金持ちになれるし、レアなアイテムもいくらでも量産出来る。ま、装備品は最初のアイテムに出来ないって縛りがあるが、それでも大層なもんだろ？」

「なん、て、こった……」

鋼は全てを悟って呆然とした。

【あー。そういえば初期装備のアイテムボックスを複製の腕輪に変えるタレントを作ったような作らなかつたような……】
能天気な神様の声が鋼の疑惑を確信に変えてくれる。

たくさんタレントを取ったはずなのに、『ちきゅうはかいばくだん』（という名の核爆弾）しかアイテムが入っていないなんて、鋼だっておかしいと思っていたのだ。

本来なら、おそらく『ちきゅうはかいばくだん』1個と他のアイテムがたくさん手に入るはずだった。

しかし、初期アイテムを入れるべきアイテムボックスが複製の腕輪に変わっていたため、『ちきゅうはかいばくだん』以降の998個のアイテムは全て複製の腕輪の効果で『ちきゅうはかいばくだん』に変わってしまったのだろう。

「は、はは……」

かわいた笑いが漏れる。いつもならシロニヤの考えなしさをなじっているところだが、今はそんな気力も湧かなかった。

あまりのショックに鋼は正しくorzのポーズを取り、しばらく

動けないでいた。と思いきや、

「ま、いつか」

鋼は自分でも驚くほど早く立ち直ってしまった。

どうせ中に入っていたのは、どれも『ちきゅうはかいばくだん』級の身の毛もよだつチートアイテムたちだろう。

振り回されるよりは、全部なくなってくれていた方が気持ちとしては楽だ。

一人百面相をする鋼を店主のおっさんは不気味そうに見ていたが、やがてその手に持った木の枝を見つけて目をむいた。

「お、おめえ、もしかしてその木の枝、お前の武器か？」

「え？ あ、はい。まあ、そうですね」

一応共に巨竜を倒した相棒であり、別に持つてくるつもりはなかったのだがなんとなく手に持つてしまっている。

現状、武器らしい武器が何もない以上、これが武器だと言えるだろう。

「な、なんだと！」

しかし鋼がそう答えると、店主のおっさんは驚愕の表情を浮かべた。

「え？ 何か、まずいですか？」

も、もしかしてこの木の枝、ものすごいレアアイテムとか？」

これは巨竜のプレスから燃え残ったのを取ってきただけだが、この一本がプレスを耐え抜いたのも実はこの木の枝が特別だったから、と考えれば合点がいく。

その鋼の態度をいらだたしげに見ると、店主のおっさんは鋼に真実を告げた。

すなわち、

「な！？ テメエ、そんなことも分からねえのか！」

おめえ、それは、それは正真正銘……」

「ただの木の枝だよ！！」

「ですよねー！！」

やっぱりただの木の枝だった。

うん。だってまあそこら辺から拾ってきたし、見た目からして木の枝だし。

鋼はちよつとがっかりする気持ちを抑えて自分を納得させた。

「つかおめえ、ホントなんなんだよ。駄目だろそりゃ！」

複製の腕輪とか聖王の法衣とか持つてるくせに、武器が木の枝つてどういふことだよ」

「いやあ。ははは」

笑つてごまかす鋼。笑つてごまかすのは得意だ。

「仕方ねえ。本当は一見さんお断りなんだが、特別サービスだ！」

ちよつと見ていきな、坊主！」

「はあ。ありがとうございます、店主のおっさんさん」

「いや何だそれオレのこと言ってるのか！？」

オレはファルザスだよファルザス！

ていうか店名に固有名詞入ってる段階で察してくれよ！」

ちよつとした冗談であったのだが、どうやら通じなかつたらしい。シロニヤとのやり取りに慣れすぎてキラークラスが多くなつてしまつているのかもしれない。

鋼は反省しつつ、店内を見渡す。

剣、槍、斧、弓矢、鎖鎌に十字手裏剣なんてものまである。

「えっと、じゃあ、ちょっと好きな物を見ても？」

「おう！ 自由にしてくれ！」

ただ、中にはやばいもんもあるから気をつけるんだぜ？」

意地の悪い視線を向けてくるおっさん改めファルザス。

その様子では、どれが危険なのかは教えてくれなさそうだった。

【ま、その辺りは大丈夫じゃろ。

聖王の法衣には呪い無効化がついとるんじゃないから】

「あ、いたんだ」

【うむ。ずっと】

若干ストーリーカーじみても聞こえるシロニヤと話しながら、鋼は店を見て回る。

「目移りするけど……。どうするかな」

今まで自分の戦闘スタイルなんてものを考えていなかったことに気付いた。

接近戦専門になるのか、それとも遠距離からの攻撃を修めるのか、はたまた魔法使いになるのか。

戦士としての展望が、鋼にはまったくなかった。

とりあえず初心者でも扱いやすそうな短剣にしようかとも思ったが、むしろ腕力が上がったのだからでかい武器を振り回して間合いを伸ばした方が素人でもケガをしにくいのではないか、なんて考え方もできる。

（うん。さっぱり分からん……）

それが正直な結論だった。

【別に武器の種類にこだわる必要はないじゃろ】

（え？ そうなの？）

【まあワシも門外漢じゃが、とりあえず武器習熟系のタレントもあるはずじゃから、何を使おうとすぐ慣れるじゃろ】

(あー……)

【行き当たりばったりじゃが、まずは一番自分がビビッと来たもの見た目とかで選んでしまってもよいのではないか？】

「うん。まああんまり考え込んでもしようがないか！」

シロニヤの言う通り、まずは使ってみて色々と変えていくことにして、鋼はとりあえず目についた剣を手にとった。

「これ、ちよつと試させてください」

そう言って鋼がファルザスを振り返ると、ファルザスは驚愕のまなざしでこちらを見ていた。

「なっ！ ぼ、坊主、どうしてそれを！」

声がつわするほど動揺している。

それを不思議に思ったが、鋼としては別に理由はない。

「いえ、別に。とりあえず剣にしようかと思った時、一番前の方にあっただけですけど」

「ぐ、偶然かよ。……ま、使えるものなら使ってみな。

ただ、物に当てないように注意してな」

ファルザスの言葉に疑問を持ちながら、剣を片手に持って振ってみる。

「わ、お、つとと？」

思わぬ重量に体がかしく。重心の変化に体がついていけなかった。「くつく。言い忘れてたが、そいつを扱うには相当な筋力と剣の腕が必要だぜ？」

ま、坊主には無理じゃねえかな？」

「……まだ、慣らしているだけですから」

ファルザスの言い方にちよつと反抗心が刺激され、鋼は意地にな

つてもう一度剣を振る。

やっぱり体は泳いでしまったが、さっきよりはマシになってきた気がした。

「もう一度！ こ、の！ この！ この！」

自分は剣など今まで一度も振ったことがないと思っていたが、実は経験があった。

『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』を使っていた時の斬撃のフォームを再現するつもりで必死で剣を振ることに慣れていこうとする。

「こん、な、感じか？」

あまりに感覚の違う獲物だったので、正直それが役に立ったのか分からないが、最初と比べると段々と滑らかに振るえるようになってきた。

だが、

「だっ、しまった！」

すっかり意識の外に追い出していた左手の木の枝に右手がぶつかって、つい右手から剣を放してしまった。

カランと乾いた音を立てて剣が地面に落ちる。

あわてて剣を拾ってファルザスに頭を下げる。

「す、すみません。ちょっと夢中になっちゃって……」

しかし、怒っているかと思われたファルザスは、筋肉に覆われた体を考え込むように縮めていた。

「驚いたな。剣の振り方はまだ素人としか言えねえが、その剣を振り回すとは……」。

そいつは筋力が最低90はないと扱えないはずなんだが、まさかおめえみたいな坊主が、なあ……」

「あはは」

実は筋力88です、とは口に出しにくい雰囲気だった。

ファルザスは、最初の侮るような態度でも、さっきまでの気安い態度でもなく、真摯に鋼に向かい合った。

「そいつはな、坊主。風の魔剣『グラン・ウィンド』。」

この店にある武器の中で一番の業物。いや……」

そこでファルザスは言いよどみ、口に出そうか口に出すまいか迷うようなそぶりを見せて、しかし、結局、

「おそらくこの大陸にある全ての武器の中でも、最強だと呼べる武器だ」

その言葉を、口にした。

第二十二章 刹那の魔剣『グラン・ウィンド』

「最強の、武器……」

さすがの鋼も、その言葉にはごくりとつばを飲み込んだ。

ゲーム好き、RPG好きとしては、最強の剣という響きには惹かれずにはいられない。

「そうだな。ちょっとこいつを見てみる」

「これは？」

「『鑑定』の効果のあるモノクルだ。これを使えば、この剣のすさまじさが分かる」

言われた通り、モノクルを使って剣を試してみる。

『暴風を制する』『選ばれし者の』『風の魔剣』『グラン・ウィンド』
+ 1 4 6

という文字が浮かび上がって見えた。

「これは？」

「最初に出てきたのが『武器称号』、真ん中に見えたのが『アイテム名』、最後の名前が『固有銘』、+ なんとかつてのが『強化値』だ」

「それって……」

戸惑う鋼に、ファルザスはため息をついた。

「なんでえ坊主。武器のこと、良く知らねえのか？」

「いいか。武器も人と同じ、レベルつてもんがあるんだ」

「レベル？ アイテム界にでも潜ると上がるんですか？」

「あ？ アイテム界？」

「いえ、何でもないです」

不機嫌そうな声に、鋼は急いで口をつぐんだ。

「武器のレベルってのは、使われると上がる。もちろん、素振り程度でも少しずつ上がっていく。

だがな。すげえ強敵を倒したり、すごい使い手にめぐりあってすごい技を使ってもらつとすんげえたくさん上がるんだ」

「はあー。なるほどー」

適当な相槌を打ちながら、この人すごいって言葉すごい好きだなー、と鋼は思っていた。

「真面目に聞け！ まあ中でも人間のレベルと違うのは、格上の相手とやり合った時のレベルアップが大きいつてことだ。

人間は経験値でレベルが上がるから、雑魚を大量に倒した方が能率よくレベルを上げられることが多い。

だけど武器はそうじゃねえ。まさに命を、刀身を削って手に入れた経験が、本当に強い武器を作るんだよ」

「じゃあ、弱い武器が強い武器を超える、なんてことも？」

「当然よ。この『グラン・ウィンド』だって、元は中級レベルの武器だ。

さつきも言ったが、『風の魔剣』ってのが元のアイテム名でな。

こいつも作られた当時は、ただの『風の魔剣』だった。

それが、後のSSランク剣士、ザックフォードの手に渡った時からこの剣の伝説は始まったのさ」

その言葉を聞いて、鋼は本能的に、

(あ、この話は長くなるな)

と感じていた。

真面目に聞く気ゼロである。

「優れた資質を持ちながら孤児という境遇から誰にも相手にされず、また誰も信用しなかったザックフォードには敵も多かった。そりゃあ直接命を狙う奴らが多いってことでもあれば、冒険は基本ソロだったってことでもある。分かるだろ？ たった一人で戦うんだ。その戦いは必然的に一対多の厳しい戦いになりやすい。だがそれは剣を成長させるにはもってこいの環境だった。ザックフォードは特別なタレントによる自分の驚異的な回復能力と自らの剣技だけを頼りにして全く魔法を使おうとはしなかったし、そんな彼にとっては魔法が使えなくても遠距離攻撃が可能なこの『風の魔剣』ってのは都合がよかった。使い続けて愛着が湧いたってことも、使い続けてこの剣自体が強くなっていったってことももちろんあったんだろう。とにかくザックフォードは通常の人間に倍する機会と年月、この剣を使い続け、彼自身がSランクの冒険者になる頃には、上等な造りとはいえ量産品に過ぎなかったこの剣は、どんなユニーク武器にも負けないほどの力を……。」

「って聞いてんのか坊主!？」

ファルザスは途中から明らかに上の空の鋼に気付き、顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「へっ?! あ、はい大丈夫ですよ!? まだ最後の二枚は脱がせてませんから!」

【お、おぬしは鬼じゃあ! しりとり鬼なのじゃあ!】
怒鳴られて言わなくてもいいことを答える鋼と、泣き叫ぶシロニヤ。

「てめえは一体オレの店で何してんだよ!」
何をしたかはまさに神のみぞ知る、である。ちなみにヒントは『サドンデス』。

しばらくファルザスは鋼をにらみつけていたが、やがて根負けして話を戻す。

「まあ、来歴についてはこれくらいにしとくか。

とにかく、だ。武器にはレベルがあつて、それは外から見えないが、強くなればそれが色んな所に表れる。

まず分かりやすいのは強化値だ」

「せいぎのそろばん+1、みたいな奴ですな」

「そ、そうだな。なんで算盤をわざわざ武器にするのかは分からないが、間違つてはいない。

お前も冒険者なら、強化値をつけるのがどれだけ大変か分かるだろ？」

+100がついた武器だつて破格なのに、+1000以上がついた武器なんて、オレはこれ以外に見たことがない」

「なるほど」

強化値をつける苦労は全く分からなかったが、とりあえずうなずいておく。

少なくとも『せいぎのそろばん+1』と『こんぼう+99』のどちらが強いかくらいは鋼にも分かるつもりだった。

「それだけじゃない。武器はレベルが上がると、アイテム名の前に武器称号がつき、特殊能力やボーナスがつく」

「それが、『暴風を制する』と『選ばれし者の』みたいな奴ですか？」

「そうだ。これは少なくとも、+20以上に鍛えた武器でしか見たことがない。

これが二つもついているとなると、その強さは分かるだろ？」

「はい」

「ここでも、鋼はとりあえずうなずいておく。

ごまかし笑いととりあえずうなずきは既にマスターしつつある。

「『暴風を制する』は風属性攻撃の威力や種類を大幅に増強するもので、『選ばれし者の』は使い手を選ぶ代わりに全体的な能力が飛

躍的に向上するもの。

「どちらもかなりレアで強力な武器称号だ」

「最後の『グラン・ウィンド』というのは、武器称号とは違うんですか？」

「それは『固有銘』。特別な武器につけられた名前……お前ら冒険者の二つ名みたいなものだな。」

その武器の性質に合ったような名前がつけられるし、固有銘のある武器は例外なく強い。

特殊能力やボーナスがつくのは同じだが、必ず一つの武器に一つずつしかつかない」

まあ一つの武器に色々な名前がつけられたら混乱してしまうだろう。

鋼はめずらしく納得してうなずいた。

「説明はまあ、こんなとこだな。で、だ。」

「……よければ坊主、お前がこの剣、試してみるか？」

「え？」

最初鋼には、ファルザスの言っていることの意味が分からなかった。

「だってさっき素振りはしましたよ？」

「そういうことじゃねえんだ」

鋼の当然の疑問に、ファルザスは首を振って答えた。

「手にして、振るところまでなら誰にでも、まあ相応の筋力さえあれば、できる。」

だが、何かを切れるかどうかでこの剣に認められたかどうか分かるんだ」

ファルザスの視線が、鋼の手にある魔剣『グラン・ウィンド』に向けられる。

そして、真実を告げる者だけが持つことのできる真摯さで、こう

言った。

「もし、お前が『選ばれし者』なら、この剣はこの世に存在する森羅万象を思うまま切断するだろう。」

だが、もしお前が『選ばれし者』でないなら、この剣は何も切る事ができない。何もだ。

扱える者以外の手に渡れば、なまくら以下。そういう風に、こいつは出来ている」

厳かにそう言い切ったファルザスに、鋼もまた静かに問いかけた。「何も、ということは、例え切るものがキャベツでも切れませんか？」

「ああ。もちろん、キャベツも切れないだろうな」

「千切りにしたくてもですか？」

「千切りにしたくても、だ」

「豆腐でも？」

「ああ、豆腐も切れないだろうな」

「寒天でも？」

「かつ……。まあ、寒天も切れないだろうな」

「水だったら？」

「水も切れないだろうな！」

「じゃあ濡れたらどうするんですか？」

「そういう意味じゃねえよ！ 拭けよ！ 布で！」

「つうか遊ぶな！ 真面目に聞けよ！」

ファルザスのツツコミに概ね満足し、鋼は話を進める。

「それで、もし僕がこの剣で何かを切ることができたら？」

「坊主にその剣をやる。もちろん無料だな」

その提案には、さすがに鋼も驚いた。

「いいんですか？」

「ハッ！ オレを舐めるなよ。武器つてのは使つてなんぼだ。ここで腐らせてるよりは、使える人間に使つてもらった方がいいんだよ。」

それに、この剣に選ばれた人間が、まさかその力をよからぬことに使うなんてことはありえねえしな」

「分かりました。じゃあちよつと試してみてもいいですか？」

鋼のその言葉を聞いて、ファルザスはにやりと笑った。

「そう来なくちゃな。もちろん構わないぜ。」

「……だが、やる分には自己責任で頼むぜ？」

「え。やっぱりこの剣を傷つけちゃったりしたら弁償ですか？」

「あん？ はっはっは！ そんなこたあ万に一つもありえねえが、心配しなくていいぜ！」

仮に魔剣が傷ついたり壊れたりしても、一切弁償はしなくていい」

「じゃあ自己責任っていうのは……？」

「選ばれなかった者が使つちまったら、何が起こるか分からねえからな」

その覚悟があるのか、とファルザスの目は問いかけていた。

鋼は少しだけ迷った。

(覚悟、覚悟か……。完全な興味本位なんだけどな)

失敗してしまう恐怖より、成功してしまった場合、自分みたいな人間があんなすごいそうな物を手に入れていいのか、という疑問はあった。

【コウ！ コウよー！】

(……何だよ？)

【迷うのはいい。じゃが、自分の可能性をあきらめるのはダメなのじゃ】

(シロニヤ……)

【よいか？ あきらめたらそこで試合終了じゃぞー！】

(お前はそれ言いたかっただけだろ！)

よけいな助言を聞いた気がするが、逆にそれで肩の力が抜け、決断することができた。

鋼はファルザスを見据え、無言でうなずいた。

「よし！ なら適当なもの切ってみる。」

うん、もうそれでいいんじゃないか？」

ファルザスが試し切りの標的として選んだのは、鋼の持っている木の枝だった。

鋼は顔をしかめる。

「コレ、それなりに気に入ってるんですけど」

「いいじゃねえか！ 魔剣が使えるなきゃ切れないんだし、切れたらどうせ魔剣使うことになるからそいつあお役御免だろ？」

「まあそうですね。何も切らなくなっただっていいじゃないですか」

何しろ、あの生涯で一番つらかった十日間を共に過ごした相棒ではあるのだ。

「めんどくせえなあ！ じゃあその先の方の二股に分かれています。」

「そこだけ切つちまえばいいじゃねえか！ かつこよくなるぜ！」

「……まあ、そのくらいなら」

内心で、どうせ切れないだろうし、という気持ちもやはりあった。

「ま、そんな枝つきれくらいじゃ、豆腐を切ったくらいの抵抗もないだろうから、すぐには切れたかも分からんかもしれないがな。」

……ま、それも魔剣に選ばれたら、の話だ」

なんてファルザスの軽口を聞きながら、鋼は武器を構える。

左手に枝を持って、右手にしっかりと魔剣『グラム・ウインド』を握る。

そして、大きく振りかぶり、

ファルザスと鋼の驚きの声が重なった。

もう一度魔剣を見る。完璧に折れている。というか切断されている。

床には半分になった刀身が転がっていた。

一方で、左手に持っていた枝には傷一つない。

むしろ心持ち誇らしげにしているようにすら見える。

「ええつと。コレ、どういうことでしょう？」

助けを求めてファルザスを見ると、ファルザスもハッと我に返った。

「ちょ、ちよつとそれ、貸してくれ！」

「え？ あ、ちよつと……」

止める暇もなかった。

ファルザスは鋼の左手の枝に手を伸ばし、

「ぎゃあああああああ！」

触れた途端に店の反対側まで吹っ飛んで行った。

「なにこれ？ ドツキリ？ コント？」

首をかしげる鋼に、身を起こしたファルザスがよろよろ、よろよろと寄ってきた。

相当足に来ている。ゾンビウオークだった。

「ち、きしょう。さっき鑑定した時はたしかにただの木の枝、だったのに……」。

まさか、オレの鑑定のレベルが足りなかったってのか？

ぶつぶつと言いながら、懐から高級そうなルーペを取り出して、鋼の持っている木の枝を覗き込んだ。

そして、

今度は鋼が興奮してまくしたてる。

「というか、殺戮好きで嫉妬深いのに博愛主義って矛盾してませんか?!」

名状しがたくて名を呼ぶことも恐れ多いのに思いつきり伝説になつてるし二つ名ついてるし!

おまけに世界創造なのに二つ名がワールドエンドって!!」

「いや、まあなんとというか落ち着け、坊主。

気持ちは分からなくもないが、ツツコミどころそこじゃないから、な?」

自分以上に興奮する鋼を見て落ち着いたのか、ファルザスが鋼を必死でなだめた。

「問題は、だ。武器称号が九つもついている上に、強化値が二万もあるってことだ。

これはもうどう考えても規格外というか、ありえないとか言うのも馬鹿らしいというか……。

一応聞くが、何か思い当たることは? これはどこで手に入れた? 特別なクエストか?」

「いや、普通に森に落ちてるのを拾いました」

「森で拾った……のか。敵と戦ったり、倒したりは?」

「ええと、一匹だけ」

「一匹だけ……か。どんな状況で? 相手は?」

そこで鋼は少しためらったが、正直に話すことにする。

「巨竜を、特別な技で一億発ほど殴って……」

「な、いや、一億……巨、竜……!?!」

そこでファルザスはたちくらみでも起こしたようにフラツと後ろによろめいた。

「そうか。外で『棒切れ勇者』がどうとか騒いでたが、それが坊主

か

「……はい」

「まあ、大体分かったような気もするが、その時の坊主のレベルは？」

「2、です」

「レベル2で巨竜なんぞ倒すなよおおおおおおお！！」

「え、ええー？」

いきなり怒られて、鋼も混乱した。

幸い、ファルザスはすぐに落ち着いた。

「わ、悪かった。今のは単なる八つ当たりだ」

「はあ」

そうやって謝ったファルザスは、鋼が店にやってきた当初より老け込んでしまっているように見えた。

具体的には、店主のおっさんだったのが、店主のおじさんぐらいになっていた。

「それにおそらく、だが、原因は分かった」

「本当ですか？」

「ああ……」

「武器つてのは、格上と戦うとレベルが上がるんだよ。」

で、その判定は武器の強さと持ち主のレベル、それからそれに対する敵の強さに大体依存する」

「はい」

「武器の強さは木の枝だからほぼ最弱、持ち主のレベルは2でびっくりするほど弱い、なのに戦ったのは巨竜。」

これはもう、これ以上ないくらいの格上と言っていい」

「でしょうね」

「それでも、その状態で普通に攻撃しただけなら木の枝自体が大幅にレベルアップして、その差は少しずつ埋まっていただろう。」

だが、坊主は技を使った。しかも、一度で一億発攻撃するとかいうアホみたいな数の連続攻撃だ。

基本的に、レベルアップするのはどんなに経験値が入っても一つの動作が終了するまで起こらない」

「つまり？」

「最弱の状態で格上相手に一億発攻撃した経験値が一気に入った」

「はああ……」

鋼はなんとなく感心して、自分でも色々想像してみた。

RPGに例えると、レベル1のキャラクターが一回の戦闘でLV100のボスを一億匹倒したようなものだろうか。

普通にボスを一億匹倒すより、レベル差ボーナスが大量についてめっちゃくちゃレベルアップ、という感じか。

……例えてもよく分からないが。

「まあ、いくつもの偶然が集まって、奇跡的にこんな終末武器が出来ちゃったってことだな。

こんな現象は二度と再現できないだろうし、そもそも木の枝一本で巨竜に立ち向かうとかオレにはそもそも意味が分からん」

少しだけ復活してきたファルザスがそう言って締めた。

話が一段落したのを察知したのか、すかさずシロニヤもくちばしを突っ込んでくる。

【つまりアレじゃな。最初っから強いダブルオークオンタより、必要経験値の低いマゼラoppの方がすぐに強くなる、みたいな？】

「またマニアにしか分からないようなネタを……」

しかも宇宙適正なしを育てるとかありえないだろ、とか鋼は思ったりもした。

「へへ。さらにそいつの攻撃力を見せてやろうか？」

びつくりして腰抜かすぜ？」

「あ、腰抜かすんなら別にいいです」

「いいのかよ!？」

萎れていたファルザスからの久しぶりにキレのあるツツコミ。

自分がツツコミを受けるのはほとんどないので、鋼はことのほか嬉しかった。

「大丈夫です。称号や二つ名を見ただけで強いってことは分かりました。

しばらくこれ一本で戦うつもりなんで、攻撃力は見なくても同じです」

あんまり現実を直視したくないとも言っ。

「そうか？ まあ、坊主がそう言うならそれでもいいんだが」

微妙に納得しているような感じではあったが、無理強いはしてこないらしい。

「まあ、お前さんにはそれがあれば他の武器なんていらんだろ。

はつきり言って神器レベル……いや、そんな規格外と一緒にされちゃ神器がかわいそうか。

やっぱり終末兵器って呼ぼう」

この木の枝どんだけだよ、と鋼は自分の左手を見た。
やっぱりただの木の枝にしか見えない。

「あ、そういえば魔剣、折っちゃいましたけど」

「んん？ ああ。いいさ。もう。」

弁償はしなくていいって約束だったし、もうそんな物を見ちまったらいるんなもんがどうでもよくなってきた」

「あははは……」

鋼は得意のごまかし笑いをした。

「そうだな。また、武器が壊れた時にでも来い。」

あ、つっても万が一その枝が壊れても持つてくるなよ？

絶対直せねえし、そんなもんが壊れた時はたぶん世界なんてとっくに滅んでるからな」

「あは、ははは……」

ごまかし笑いもストック切れが近い。

「ありがとうございます」

それでも鋼はきちんと礼を言って武器屋を出ようとすると、

「坊主！」

何かが鋼に投げつけられた。反射的に受け取る。

……あの、高級そうなルーペだった。

「それはまあ、すげえものを見せてくれたお前へのお礼と饞別だ。」

たぶん、その武器の鑑定が出来るのはこれくらいだろ。

持つていけ」

鋼は一瞬だけ戸惑ったが、ここで好意を無碍にするのも余計に悪いと思ひ、もう一度一礼してからその店を後にした。

外に出る。

夕方の少しだけ肌寒い風が、鋼とその手に持った枝に吹きつける。

「……うん」

当初予定していたような武器は手に入らなかったが、それ以上のものが手に入った。

「ま、よろしくな、相棒」

これから末永くお世話になる予定の左手の相棒に声をかける。

そういえば、とルーペできちんと鑑定ができるかどうか、木の枝を覗いてみた。

すぐに文字が浮かび上がる。

『伝説の』『名状しがたき』『殺戮好きの』『嫉妬深い』『博愛主義の』『名を呼ぶことも畏れ多い』『相棒と呼ばれて嬉しい』『ハガネ専用の』『成長する』『世界創造の』ただの木の枝『ワールドエンド・ブランチ』+23047

「……………ん？」

鋼は一瞬だけ眉をひそめたが、

【どうしたのじゃ？ もしや失敗したのかの？】

「あ、いや、何でもない。たぶん」

シロニヤに問われて、すぐに歩き始める。

その足取りは軽やかだ。

【しかし、ちょっとアレじゃな。可愛いそうじゃったな
「ん？」

【いや、あの魔剣。最強の武器とか鳴り物入りの登場の割に、出番、
一瞬じゃったなと思って】

「ああ……………うん」

長かった解説の割に、実際に使われたのはまさに一瞬、いわばほんの刹那の間だったと言える。

というか、完全に噛ませ犬ポジだったなと鋼は思った。

「たぶん、元の持ち主のザックフォードが死んだ時点で、あの剣の物語も終わっていたんだよ」

【そうかも、しれんの……………】

かわいそうなので鋼は何とか無理やりいい話にまとめてみた。

【ところでじゃな。あの店を出る前から、ずっと言おうかと思っ
つたんじゃが】

「うん？」

【ワシ、そろそろ服着てもよいかの？】

「……………」

しばらく、鋼は答えなかった。

【あ、あのじゃな。ワシ、このままじゃとまた風邪を……………】

「まあ、それはどうでもいいとして」

【え？ いや、全然どうでもよくはないのじゃよ!？】

「ここ、どこなんだろうな？」

鋼は周りを見渡した。見覚えのない風景が続いている。

「何だか用事が済んで全部解決した気がしてたけど、道に迷ってる
のは変わらないんだよな」

【いやいやいや！ それは後でもよいじゃろ！ それよりワシの…
…】

「とにかく歩いてみようか、大きな通りに出ればどうにでもなる」

【無視？ 無視する気なんじゃな!？ そうやってワシに意地悪を
するつもりで……………】

「はー。ここは一体どこなのかなー？」

【お、おぬしは鬼じゃあ！ しりとりの鬼なの……………へくちっ!】

その日、暮れ方。

冷たい世間の風は、人にも魔剣にも神様にも、等しく吹きつけた
とっつ。

断章 2

突然だが、私はイタい子である。

それはもうイタさに於いては人後に落ちないという自負、自尊がある。全く自慢にはならないが。

しかし、現在の私はこれでもかなり自制を利かせている部分があり、一年ほど前はそれはもう酷かった。もはや思い出すだけで赤面物。顔から火が出るとはこの事だという程度には酷かった。

そもそもこのイタさの根源を探ってみると、所謂中二病なんて言葉に行き着く。この時期の少年少女特有の肥大化した自意識と他人の認識との乖離が生み出す比較的一般的な病理、いやさ、通過儀礼のような物である。

恐らく中学二年生くらいの時期なら、誰もが奇矯な行動を取った経験があるはずだ。例えば急に自分自身の前世の設定を作ってそれをノートに書き溜めたり、ヘアピンでドアの鍵をピッキング出来ないかと練習を始めたり、あるいはインドア派な人間なら、主人公「自分が異世界に転生して敵をばっさばっさとやつついたり異性にモテモテになったりする小説を書くようなケースもあるかもしれない。しかしそんな物は社会に受け入れられるはずもなく、当然ながら叩かれる事になる。小説の例で言えば、やれ主人公チートだのご都合主義だのこんな事は現実にはありえないだの最低だのと言われて潰されていくのは世の常だ。だから人は段々と経験を重ねていくにつれ、実は転生する時にものすごく時間をかけたとか、実は転生のシステムにバグがあったとか、そういう回りくどい理由付け、実のところは言い訳、を考え、自らの幼兒的な英雄願望を巧妙に隠す防衛術を学んでいくのだ。

前置きが長くなってしまった。つまり高校一年生の当時の私は、そついった防衛術をまだ完全に会得していなかったものであり、極々

稀にはある物の、そのイタい行動や発言を外に漏らしてしまう傾向があつたのだ。……ちなみに私の防衛術は自らの妄想を己の内のみ留め、完全に外に漏らさないようにシャットアウトする事である。

さて、ところで再び突然だが、実は我が校の図書館には利用者が絶対遵守せねばならない鉄の掟がある。

すなわち、一度に貸出出来る図書は五冊まで、という不変にして不偏にして普遍の掟である。

そんな目で見ないで欲しい。私がイタい子だというのは既に前述したではないか、と抗議行動を行いたい。

はてさて、そんなイタい子の私であるが、当然図書館に入り浸っている。なぜ当然かと言えば、それはもう圧倒的に図書館とはファンタジーであり、文学少女とは憧れのステータスシンボルであるからだ。そしてまあ、当たり前だが本が好きだからでもある。

そんなイタい子で本好きの私が、六冊目の面白い本に出会ってしまったらどうするか。既に五冊は借りているので貸出は頼めない。かと言って、閉館時間が迫っているので読み切る事も出来ない。こういう状況であれば普通は諦めて次回に借りるなり読むなりするだろう。しかし私は普通ではない。遺憾の意を表明したくなる類の意味で普通ではなかった。では、どうしたか。……隠した。本を。

意味が分からない。そう思った方もおられるかもしれない。だが答えは単純である。次に来た時にその本が別の人に貸出されているかもしれない。あるいはちょうど読まれているかもしれない。その危険性を鑑みるに本を隠して次に私が手に取るまでの安全を確保するのが一番の上策だと……もちろん嘘だ。こんな見る限りドマイナーな推理小説をピンポイントにこの時期に借りていく人がいるはずがない。本音を言えば何か理由を付けて隠したかったのだ。本を。なぜか？ 単純だ。図書館がファンタジーで文学少女がステータスなら、本を隠すのはロマンである。

また意味が分からないだろうか。だが、この感覚が理解出来ない

人とは私は友達になれないだろう。

そして私は用心深い性格であるため、更なる布石を打つ。図書館の端、私の特等席に、暗号で本の隠し場所を記しておくのだ。

賢明なる読者諸兄なら、何も言わなくてももう分かってくれるはずである。本を隠すなんて変わった事をして、隠し場所を忘れるなんて事はあり得ない。学校帰りにキャトルミュージーテーションされでもしない限りあり得ない。だが、本を隠すのがロマンなら暗号を記すのはドリームなのだ。いや、果たして本当にドリームだろうか。正直よく分からない。だが、当時の彼女、一年前の私にとっては本を隠せば暗号を残すのはごく当然の帰結だったのだ。

暗号は非常に初歩的で単純な物。五十音表を座標と対応させ、二つの数字で一つのかなを表す独創性の欠片もないタイプだ。撥音や促音、それに濁点半濁点については例外的な処理をしているが、それだつて注意深く見れば分かるだろう。もちろん乱数対応をさせればもっと複雑な物だつて作れるのだが、頭を使っても初見で解けない暗号とはドリームではないという私のこだわりによって単純な物にならざるを得なくなったのだ。

私はその暗号で『だいにほんじてんうら』と記す。

我が図書館には、生徒が自由に出入り出来るが利用者がほとんどいない書庫があり、そこに大日本国語辞典とかいう無駄にでかい辞典がシリーズで揃えられている。中身は国語辞典の親玉のような物なのだが、私はこの本が利用されているのを一度も見なかった。この図書館の主とも冠される私だつて、正直こんな物鈍器以外の何に活用出来るか良く分からない。しかも、辞典の類は貸出不可なので、その点を見ても非常に安全だ。

大日本国語辞典の裏に本を隠し、暗号を私の席の前、大きな机の端に鉛筆でこつそり書き入れると私は五冊の本を抱え、正にご満悦の化身といった表情で図書館を後にした。ご満悦の化身というのがどのような生熊でどのような外見の生き物なのかについては黙秘権を行使する。とりあえず言えるのは主な移動手段がスキップだとい

う事だけである。

しかしその私のご満悦の化身への形態変化は、その翌日には敢えなく崩れ去る事になる。意気揚々とスキップで向かった書庫の中、辞典の裏に隠したはずの本が影も形もなかったのだ。私は混乱した。

だが、私は私の特等席に異変を見出す事により、事態を完全に把握する事に成功する。あれだけ隅にこっそり書いたはずの暗号が綺麗に消されていた。これは迂闊だったと言わざるを得ない。誰にでも読める場所に、簡素に過ぎる暗号を配してしまったという手抜きである。暗号を消した件の謎の人物は、恐らくそれを解読し、本を借り、そして証拠隠滅の為にご丁寧にも暗号を消去していったのだろう。私は自らの軽挙妄動に肩を落とし、新しい五冊の書物を抱えて図書館を後にした。

更にその翌日、私はスキップで図書館に向かった。これは良く考えればこのやり取りが実に非日常的で私の琴線を刺激していた訳であつたり、同志が増えるかもしれないという期待に胸を躍らせていた訳では断じてないので誤解のない様にして頂きたい。

だがそんな私のご満悦も、自分の席に着くまでだった。図書館の端、私の特等席の前の机には、暗号が刻まれていた。謎の人物からのメッセージだった。私は震える手でその座標の群れをなぞり、解読する。

「なんて、こと……」

それを読んだ私の口からそんな言葉が漏れたのは仕方のない事だと私は今でも思っている。実際には図書館の中だったので口の中でそう言ったただけだぶん誰にも聞こえていなかったのだが、だからといって私が受けた衝撃が軽かったとは誰にも言えないだろう。暗号で書かれていたのは、たった七文字。けれどそれは世界で最も罪深い七文字だった。

『まるがはんにん』

残念ながら、私はこの意味をすぐに理解出来てしまった。私が隠

した本は推理小説で、被害者の令嬢の呼び名がマルガリータ。つまりこれは、世界で最も許されざるべき犯罪。推理小説のネタばらしであった。

「これは、私に対する宣戦布告か」

自らの声が震えているのが分かった。後、やっぱり図書館で大声はいけないので誰にも聞こえないくらいの音量で言ったのだが、そんな事は関係ない。私は怒っていた。怒り心頭に発す。怒髪天を衝くとはこの事だ。本当は怒髪冠を衝くの方が玄人風な言い回しで私は気に入っていたのだが、この時ばかりはそうは思わなかった。私の怒髪は、天を衝いていたのである。

図書カードなる個人情報保護法に真っ向から喧嘩を売るような旧時代のシステムならいざ知らず、コンピューター管理された本の貸出情報を入力するのは非常に困難だ。普通であれば、私はここで泣き寝入りする所だった。

しかし、私には犯人に心当たりがあった。あの男だ。

かつて私が図書館にやって来てお気に入りの席に座ろうとした時、私の席に我が物顔で座る一人の男子生徒がいた。礼節を弁えた私は、当然彼に自らの席を譲る事を決め、私はその時他の席に座った。あの時私が大らかな気持ちと人見知り故に見逃したあの男が、私にととうとう牙を剥いたのだ。

私は彼への復讐を決め、犯人の分かった推理小説と四冊の本を抱え、図書館を後にした。

翌日、私は実に複雑な気分図書館に向かった。

実は私が以前隠した本、読んでみると犯人はマルガリータではなかったのだ。ではあの暗号が嘘だったかというところでもなく、小説最後の小ネタとして探偵が話すのだが、その事件には特別な読み方をすると丸と三角と四角と読み替えられる名前の人が揃っていて、犯人はその丸に当たる人だった。つまりあの暗号、『マルガ 犯人』だと思っていた、あるいは思わされていたのだが、実は『まる が

犯人』が正しい読みだったのだ。この機転には私も唸るしかなかった。つまり私はまんまと彼に騙され、からかわれたのである。完全なミスディレクションの下でその本を読まされてしまったので、正直に言えば純粹に読むよりも話を楽しめてしまったのが悔しい所だ。

そんな訳で私が前述の通り複雑な気持ちで図書館を訪れると、私の特等席には既に一人の人間が座っていた。黒髪黒瞳の、私と同じくらいの年齢の少年である。

……まあ私と同じ日本人で同じ高校の生徒なのだから黒髪黒目で同年代なのは当然だが。

接触するかしないか少しだけ迷って、用心深い私は距離を取ってじっくり観察する事にした。彼はいつもの私の席に座って、私も読んだ事のある有名な海外ファンタジーのシリーズを読んでいた。そんな彼のあまりに平和ボケした姿に、私の中で沸々と怒りが湧いてきた。

そう、彼は私のお尻が乗っていた席で、私が突っ伏した事もある机に、かつて私の手がページをめくった本を持って、悠然と座っているのだ。

突如生まれたあまりに強い敵愾心に、私の胸は早鐘を打ち、顔は火照り、視界には憎いその男の姿しか映らなくなった。そんな中で彼がふと顔を上げた時私と目が合った気がして、私は慌てて図書館から逃げ出し……戦略的撤退を敢行した。少しだけ急ぎ過ぎて、入口の段差でこけてドアに頭をぶつけた。

「あいつ、絶対許さない」

私は赤くなつた額と熱くなつた頬を冷ましながら、その強い決意を口にした。

今から思えば、それが私、真白 夕希と結城 鋼の初遭遇だった。それから、私は彼と闘争という名の独り相撲を繰り広げていく訳だが、それはまた機会があった時に語る事にしよう。

人生とは、それだけでは足りない物語のような物なのだから

「お待ちせ。お茶持ってきたよ、ってマキ何をしてるの!」

「ん? ちょっと宝探ししたら面白いそうなもの見つけちゃって」

「わ、駄目だつてそれ日記!」

「ますます興味あんじゃん、ちょい見せな!」

「駄目駄目マキほんとやめて返して私の黒歴史!」

断章3

「おはよ、ゆっきー。今日もしけた面してんねー」

いきなりご挨拶な挨拶をかましてくれたのは、クラスメイトの三枝 牧だ。

私とは、『ゆっきー』『マツキー』と呼び合う仲である。などと言っても私は基本、恥ずかしいから無難に『マキ』と呼んでいるけれど。

「しけた面なんてしてないよ。私はいつもこんな顔だよ」

「そーだねー。十日くらい前からは、そーかもねー」

やけに含みのある言い方だ。というより、意図する所は明白だった。

「別にそんなんじゃないし」

大人気なくも、つい拗ねたような言い方になってしまう。

「そんなんじゃないって、何がかなあ？ ちゃーんと自分で思い当たるところがあるんじゃないん」

「そんなのないよ」

これがこの友人の悪い所である。マキは追及が巧みであり、人を追い込んで面白がるような所があるのだ。

「そお？ じゃ、そんなゆっきーにここでクイズです」

意地の悪い笑みで指をぴんと立ててくるマキ。絶対に嫌な事を考えている。

「や、やだよそんなの。私やらないから」

と必死の抵抗も、マキにははてんで通用しない。手前勝手に問題文を読み上げ始める。

「朝は私をいやそーに避けて、誰もいない机を見つけて、はふうとため息。」

授業中はちらちらちらちら、誰か来ないか扉を見つめて、はふう

とため息。

昼休みはご飯も食べず、誰かを思っただけ空を眺めて、はふうとため息。

放課後は掃除にかこつけ、誰もいない机を撫でて、はふうとため息、だーれだ？」

にやにやとしか表現出来ない笑みで、マキが私の顔を覗き込んでくる。恥ずかしさと屈辱に、頭の中が真っ白になった。

そんな事していない。していないとは言えない。だけどそんなの認められない。抗弁しないと。

「ごちゃごちゃの混沌を抱え込んで、私は叫んだ。

「私じゃないもん！」

うわあ。うわあうわあうわあ。

言ってしまったから、自分の顔が真っ赤になっていくのが分かった。

やってしまった。

失敗した失敗した失敗した。

「〜もん」って。一体何歳だ、私。

教室の喧騒が遠くに聞こえる。いや、近くを回っている。教室中の人間が、私に注目している気がした。

いまだに脳味噌がぐるぐる回っている私に、少し罰が悪そうな顔でマキが近寄ってくる。

「あー。なんだ。そこまでとは思わなくて、ちょっとやりすぎたわ。ごめんね」

その、「わたしは分かっているんだけど」みたいな態度に、私の中

の何かがブチツと音を立てて切れた。

「分かってない！ マキはぜんっぜん、分かってない！」

「ちよ、ゆっきー？」

驚いたようなマキの顔、少しだけスッキリする。

なのに、

「ほ、ほら。その話は後でゆっくり聞くから、今は、ね？」

まるで、私何が隠しているみたいに話している。気に入らない。そんなんじゃない。

私は先程に倍する勢いでマキに食ってかかっていた。

「その話って何？ そんなの誤解だもん！ 私、私は別に、あんなの全然好きじゃないもん！」

ぶちまけた。何だか解放されていく気分。

そうだ！ 皆誤解してる。誤解は解かないといけない。

「クラスメイトだから！ 心配してるだけだもん！ 普通だもん！ 好きじゃないもん！」

「分かった。分かった分かったから。ほら、少し落ち着こう？」

「落ち着いてる！ 私は落ち着いてる！ あんなのいなくなっても全然いつも通り！ これっぽっちも気にしてないもん！」

「そういうことじゃなくて、ね？」

これだけ言ってもまだ分からないのだろうか。はっきりと言わなければ分からないのかもしれない。

なら、言ってしまうおう。

「別に私はあんなのどうとも思っていない。あんなの、もう二度と戻って来なければ、戻って、来なければ……」

あれ？ どうして？

『戻って来なければいいのに！』とはっきり言ってしまうおうと思っ
っているのに。

口だけがぱくぱく動いて、言葉が出てこないなんて。

「もど、もどって、もどって、こな……」

焦る。焦る焦る焦る焦る。

目元が熱くなってきた。言葉はやっぱり出ない。口が私の言う事を聞かなくなってしまった。

どうしてだろう。なんで、なんで私は……。

「こらこら、何泣いてるのよ。あんた、暴走しすぎ」

ぱこんとマキに頭を叩かれて、少しだけ我に返る。

泣いてないと叫ぼうとした所で、手に水滴が落ちてきた。なにこれ？

「ほんともう、あんたって奴は」

抗議する暇もない。私はマキにぎゅっと抱きしめられていた。なにこれ？

「溜めこみすぎなの、あんたは。ほら、とりあえず行くよ」

そのまま肩を抱かれて、どこかに連れて行かれる。クラスのみんなも私たちを呆然と見ている。なにこれ？

だけど、前にも経験した事のあるような、マキのいつにない優しい手つきに、私は逆らう気もなくして、

「お騒がせしましたー」

いつも通りの軽い調子で話すマキに連れられて、私は廊下に出る。

ああ。そうだ。

何となく覚えがあると思った。

マキのこの優しさは、病人を労わる看護師さんの優しさに似ているのだ、と気付いた。

「ちよつとは落ち着いた？」

ペットボトルのお茶をちびちびと飲みながら、マキの言葉に私は無言で頷いた。

数分前まで私を支配していた狂熱は既に覚めていた。今の私は明鏡止水の境地。諸行無常の只中にいた。

「マキちゃん」

「何？」

「私は、貝になりたい」

「……まあ、正直気持ちは分かる」

もう、死んでしまいたい。

そうして、全てのしがらみから楽になってしまえば、でも、

「コウくん、死んでたらどうしよう……」

「え、なに？　って、ちよつとあんたまた泣いてんの！？　やめてやめてやめて！　あんた今ちよつと情緒不安定すぎだから！」

慌てて寄ってきたマキのハンカチで、顔中拭われる。

荒っぽい手つきに抗議の気持ちも湧いたが、結局私は終始、されるがままだった。

そこから更に五分ほどの時間をかけて、私の精神もようやく安定期に入ったので、教室に戻る事にした。

マキはもうちよつと付き合う、と言ってくれたのだが、流石に授業までサボる訳にはいかない。やっぱりHRには間に合わなかったが、急に私の気分が悪くなったという事で誤魔化して、何とかクラスに復帰した。

クラスの皆は、表面上、いつも通りに接してくれた。

それどころか、時折顔を上げると、労わるような眼差しでこちらを見ている友達の姿が……。

ああ。優しさが痛い。

その日見つけた大発見。

今まで気付かなかったのだが、私は気付かない内にコウくんの席ばかり見ていた。おまけに気付いたらはふうはふうため息ばかりついていたのだが、やめようと思ってても気付かない内にため息をついているのでやめる事も出来ない。気付くとか気付かないとかややこしい。

「……はふう」

まただった。私はもう、はふう星人にでもなって、暗黒星雲の彼方に飛び立っていけばいいと思う。そうしたらもう皆の目を気にす

る必要もないし、もしかしたらそこにコウくんがいるかもしれない。いや、何だこの乙女チックは。コウくんは宇宙にはいない。地球にいる。たぶん、いる。きっと、いる。いるはずだ。見つけてみせる。

そんな決意を新たにしている間に、放課後がやってきた。

「や、ゆつきー。自覚、した？」

「うん、不本意ながら。完膚なきまでに」

これは、まあ、からかわれても仕方ないレベル。蒲田くんとか、実は鈍感だったんだなって思う。

「とうかね。さすがに今ほどじゃなけど、あんた、前からちらちらあいつ、コウくんだけ？ そいつのこと見てたのよねー」

「う、嘘！」

「いや、ここまで来てウソとつかないって。とうか、別にはじめっからウソとつかいてないし」

でも、それが本当だったら、

「わ、私、昔からコウくんのこと、気になっていたというか、す、好き、だったって事？」

その言葉を口に出すのは、私にとっては非常に勇気がいったのだけれど、

「んー。あんたがあいつのことを好きなのかどうか、ちょっとよく分からないのよねー」

「ええ！ 今更！」

私に気持ちを自覚させた張本人であるはずのマキの突然の裏切り。私はもう何を信じていいやら分からない。

「あんたって結構澄ましてるけど、その実中身は小学生レベルじゃない？ そりゃあもちろんあんたはコウくんのこと、気にはなってるんだろうけどさ。恋愛感情なんて高等なものがあんたの脳から生まれるか微妙というか、正直子供の言う『なんとかクン好き好きー』っていうのと大差ない気もするのよねー」

なんて事だろう。こういう事態になって初めて分かる、私の人物評価。かなり心外だが、今日の数々の私の奇行を踏まえれば、今の私には発言権がなかった。

「あんたのその想いはさ。もっともつと時間をかけるべきものだと思うんだよね。そうしたら……ちゃんとした恋になったか、それがストーリーになったか」

「ちよつと、マキ？」

「いや、ストーリーになってから恋になるって線も……」

すごい事を言ってくる。名誉毀損で訴えてもいいレベル。でも私は口を噤んでその暴言を甘んじて受けとめた。

実はその、ストーリーというほどではないけれど、一度だけコウくんの後をつけて家の場所を確かめたりはしてしまった事があったりして。思い返すだけに、若気の至りという言葉が浮かぶ今日この頃。

「ま、こうなったらそれももう、難しいだろうけどね」

「……………」

唇を噛み締める私を見て、マキははあ、とため息をつく。

「全くさあ。あいつがいなくなってショックなのは分かるけど、あんたまでぼろつといなくなったりしないですよ」

「私が？ 何で？」

「なんで、つーか。ほら、あいつ、行方不明なんですよ。何があったんだか知らないけど、それを追いかけてあんたまでいなくなったりしないよね、ってこと」

ああ。そういう事か。でも残念。それは杞憂もい所である。

「大丈夫だよ。コウくんの手がかりなんて何も見つかってないし、追いかけてようがないから」

「はあ。そういう言い回し選んでる時点で、会える方法があるならいなくなっただって構わない、って言ってるような気がするんだけど」

「そ、そうかな」

本当に、そういうつもりじゃ、なかったんだけど。

「そうだよ。というか、あんた鈍すぎ。人がどうとかってんじやな

くて、自分のこと」

「そんな事、ないよ。ない、はずだよ」

「あるの！」

そう強弁されてしまえば、私はそうなのかとしか言えなくなってしまうのである。

「たとえばね」

マキは突然、右手にある路地を指さした。

「この道は、あなたの愛しいコウくんへとつながっているとします。でも、一度行ったら戻れません。どうする？」

「え？ え？」

「ほら、5、4、3、2、1、はい時間切れー」

マキがカウントダウンする間、私は動けないでいた。

「おや、意外。てつきりゆつきーは飛び込んでいくと思ったのに」

「ちょ、ちよつと。マキは私の事、どれだけ猪突猛進だと思ってるの？ 戻れないとか言われたら、私だって行く訳ない」

朝にあんな醜態を見せておいて我ながら説得力がないけれど、本来の私は抑制の利いた人間なのである。

「だと、いいんだけどね」

全く信じていない口調だった。私はもう一言二言言ってやろうと口を開きかけたのだが、その時にマキの奥、ちょうどマキが示していた路地の奥に、見覚えのある姿を見つけた。

純白の子猫。シロニヤン。私の、青い鳥。

何でそんな事を思ったのかは、私にも分からない。けれど、私がいなくちゃいけない事だけは、不思議と飲み込めた。

「ごめん、マキ。私、ちよつと急用を思い出した」

決断は一瞬。いや、たぶん決めるとか迷うとか、そんな判断すらしなかった。

あの子猫を見ると、胸が苦しくなる。

そして、この甘い疼きの正体を、私は前から知っていた。

だから私は 行かねばならない。いや、ただ、行きたいんだ、

彼の下へ。

背中からマキの、

「まあつたく、言わんこつちやないよ」

という声が聞こえたが、私はもう、振り返らなかつた。

そうして子猫を追って駆け出してみて、しばらく。

何やってんだろ、私。

私は目下、激しい後悔に襲われ心の中において七転八倒していたりする訳である。

飛び出した瞬間はそれが何か意味がある事のように思えたが、やっている事はただの猫のストーカー。第一別れる口実が、『急用を思い出した』なんて、ベタ中のベタ。返す返すも赤面ものである。最前の自分の全ての行動が、私のイタさを保証する証左でしかないように思えた。

それを証明するように、子猫はただ優雅に散歩をするだけで、他の凡百の猫と明確な線引きが出来るような特別な行動は何もしていない。

これは完全なる無駄足！ 私が、そう思いかけた時だった。

あれ？ 今あの猫、周りを見回した？

気のせいではない。まるで尾行を気にする犯罪者のように、油断のない目でちらちらちらちら、後ろを確認している。

慌てて隠れながら、私は胸の高鳴りを抑え切れなかつた。

少し振り返る、くらいならともかく、あんな風に全方位を気にする仕種を猫が見せたのは、私は見た事がない。これは本当に、何かある、とか。

甘い見通しだと知りながらも、そんな期待から抜け出せない私。そして、シロニヤンの様子を向こうから見つからないよう鏡を使って確認する、用意の良すぎるイタい私。

鏡越しで見難かつたけれど、シロニヤンは路地に入り込んだらしかつた

「1、2、3、4、5……よし！」

逸る気持ちを抑え、心の中でカウントを刻んでから、路地に飛び込む。

間一髪のタイミング。更に角を曲がる、シロニヤンのしっぽの先が見えた。追いかける。

そこで私は、驚愕の映像を目にした。

「変身、した？」

細い路地に入り込んだシロニヤン。子猫だったその姿が、私の目の前で、一瞬にして十二、三歳くらいの子供に変わった。

「う、そ…？」

だが、私が何度目を凝らそうと、目の前にいるのはどこか人間離れた雰囲気を持つ、白い着物を着た少女だった。

何が起こったのか分からない。ただ喉がからからに渴いて、心臓が16ビートで鳴り響く。

目の前で起こった、あまりに非現実的な状況に、私が不整脈になりかけた時、

「……！」

それを倍する衝撃が、私の全てを塗り潰した。

少女は、誰もいない路地で、けれど誰かと話していた。

誰か？ 誰か、とは？

それは、もちろん……、

「コウか？ 何度も言っておるがな。ワシをそうポンポンと呼び出すのは……」

コウ。その単語。

見つけた。

ようやく、追いついた。

なら、私は。

「その話！」

その言葉を耳にした時には、私はもうその白い女の子の前に飛び出していた。

だって私は、肝心な時、考えるより先に動くタイプだから。

だから、叫ぶ。

身にこもる全ての想いを込めて、私は叫ぶ。

「その話、私にも聞かせてください！ あなたが話している相手は、コウくん。結城 鋼くんですか！？」

この道が、コウくんへと繋がる道だと、信じて。

第二十三章 魔獣の真実

翌朝、少し早めにギルドにやってくると、そこには先客がいた。

「君は！ アス、アス……ええと」

「アステイエールだ！」

「冗談だよ。ちゃんと覚えてるよ、アスレテイル」

「微妙に違う！」

といったコミュニケーションを交え、本題に。

「それで、何か用？」

まだ僕を恨んでいるのだろうか、と警戒しながら鋼が聞くと、アステイエールは目を逸らした。

「や、約束があつただろう」

「約束？」

鋼が本当に分からずに聞き返すと、なぜかアステイエールは激昂した。

「勝負のことだ！ 先にレベル30以上のモンスターを倒したら勝ちという勝負で、敗者は、勝者に……」

「メイド服で奉仕をする約束だったな」

「ち、違うー！」

打てば響くような反応で、アステイエールは否定した。

「貴様は、神聖な勝負を一体何だと思っているのだ！」

などとアステイエールは言うが、そもそも鋼はまともに勝負するつもりがなかったのだから今さらである。

それが本当に腹に据えかねるのか、アステイエールはしばらく怒りをこらえるようにじつとうつむいていたが、

「し、してほしいのか？」

「え？」

「め、メイド服で奉仕」

上目遣いで鋼をちらちらとうかがってきた。

「いや、特には」

「貴様は本当に碌でもない男だな！」

ふたたび激昂するアステイエル。全く意味が分からない。

「……まあ、いい。今日はその、貴様……いや、ハガネ殿に、感謝と謝罪を言いに来たのだ」

「は、ハガネ殿！？」

中世の騎士キャラなのに、人の呼び方は武士キャラだった。

「すまないな。本当はもつと早くに尋ねるのが筋であると思ったのだが、最近あまり寝ていなかったものでこんなに遅れてしまった」

心底から申し訳なさそうに言う。それを見て、鋼はただこの人几帳面そうだなと感想を持ったのだが、そこでキルリスが鋼に耳打ちしてきた。

「アステイエルさん。鋼さんのことを心配して十日間、一睡もせずと鋼さんのことを見守っていたらしいですよ」

それは感動エピソードな気がするのだが、人って十日も完徹して生きてけるものなの、って疑問が先に浮いて来て、鋼としては素直に感動できなかった。

というか、愛が重い。……いや、愛ではないだろうけど。

そこで、アステイエルは表情を改め、おそらく騎士式であろうピシツとした礼をする。

「ハガネ・ユーキ殿。先日私が貴方に対して働いた無礼な言動の全てを謝罪する。本当にすまなかった。

そして同時に、貴方の誇り高く尊き行動に精一杯の感謝を。私の

命は貴方に救われた。ありがとう」

「ああ。もういいよ。……で、キルリスさん、ラトリスさんいる？」

「あ、じゃあ呼んできますね」

パタパタとキルリスが奥に入っていく。

「え?! あれ、私それだけ?!」

後ろでアステイエルが何か驚いている風だったが、鋼は気付かないフリをした。

関わったら面倒なことになりそうな気配がした。

キルリスが奥の部屋に入ってから一秒ほどしてラトリスはやってきた。絶対待ち構えてただろというタイミングだった。

「お早う御座いますハガネ様。お命を拾われたようで何よりです」

「当然のように命の危険があったみたいと言いたい方しないでくれますか!?!」

昨日の話を聞くと、あまり洒落にならない。

「いえ、実はこっそりと配下の者をつけて護衛を頼んでおいたのですが……」

「ええ!?!」

「昨日一日だけで、ハガネ様に挑戦しようとする者が8名。もちろんこれは配下の者が直前に『説得』して諦めて頂きましたが」

「配下の人こわっ!」

「ハガネ様を闇討ちをしようとして私の配下の者に闇討ちをされ返された者が6名」

「ここ治安いいんじゃないのかよ!?!」

「空になったジヨツキを後頭部に投げつけようとした者が26名」

「この街の人、どれだけジヨツキ投げたいんだ?!」

「ケルベロスに騎乗してハガネ様に飛びつこうとしていた修道女が

1名」

「なぜだか知り合いの予感がする！」

「ちなみに首は合計4つ」

「片方ケルベロスだからな！」

「ケルベロスの名前はポチ」

「実は知ってたよ！」

きつと弟のようにかわいがってもらってるんだらうポチは。

「強面だけど実はメス」

「ポチって名前じゃかわいそうだろ！」

どんどん嫌な新事実が発覚する、パンドラのびっくり箱みたいな修道女だった。

「さて、次は……」

「まだあるんだ！」

「まだいきます」

宣言されてしまった。

「ハガネ様にサインをねだりに来た子供たちが18名」

「あれ？ 誰も来なかったけど」

「ハガネ様は三度の飯より子供嫌いだと説明して帰って頂きました」

「イメージダウンだそれ！」

鋼の英雄としてのプロデュースはどうしたのだろうか。

「いえ、三度の飯より子供が好きというのも問題があると思いまし
て」

「単に言い方の問題だよな、それは！」

「ハガネ様が道に迷っていた時間、約2時間」

「そこはいいよ！」

「ハガネ様が目に見えない何かに話しかけた回数、57回」

「それもいいよ！」

「ハガネ様が昨日一日で得た経験、プライスレス」

「それで才チたと思うなよ！」

「配下の者がむしゃくしゃしてハガネ様を刺そうとした回数、カウントレス」

「そんな才チはいらないし、実はそれが一番危険だったんじゃないの!？」

報告を終えると、ラトリスはふたたび冷徹なメガネの顔で鋼に向き直った。

「改めまして。お早う御座いますハガネ様。お命を拾われたようで何よりです」

「ああ。僕も今は心から何もなくてよかったって思えるよ」

あれだけ脅されればさすがの鋼も危機感くらい覚える。

ラトリスの作戦通りかもしれないが、一刻も早く護衛が雇いたくなってきた。

「実際に護衛候補に会う前に聞いておきますけど、どういう条件で護衛候補の人を集めてくれたんですか？」

鋼の質問にラトリスはメガネを光らせた。

「そうですね。ではその条件を先に話しておきましょうか」

「まず、第一の条件として、現在火急を要する依頼等を受けてはならず、他にも長期の依頼を妨げる要因を持っている者は除外、確実に長期間、護衛だけに専念出来る環境にある事を条件に挙げました」

「たしかに、それは大事ですね」

途中で依頼があるからと抜けられても困るし、何かのしがらみで街を離れられないとかでは困る。

その時ちょうど、

「うーむ。そういえば、私は最近騎士団を首になったせいで、日々

の糧を得る方法が何もないな。そろそろ長期の依頼を探さなければな」

などと後ろでアステイエルが愚痴を言い始めたが、鋼は特に気にしなかった。

「第二の条件は犯罪歴等がなく、性格が善良、誠実である事」

「自分の護衛に後ろからズドンとやられたらたまらないですもんね」

「それに、将来ハガネ様の仲間になるかもしれない事まで考慮すると、仕事はこなすけれども冷徹な人間や高圧的な人間は相応しくないと判断です。」

しかし残念ながら、こちらについては調査不足という他ありません。

申し訳ありませんが、護衛の選定についてはハガネ様の裁量で自分の信じられる方を慎重に選んでくれるようお願いします」

「し、しかし大丈夫だよな！ 私は元とはいえ騎士！

騎士とは清廉潔白、善良無比、誠実無双もい所だから、きっとすぐに色々な依頼のオフアールが来るはずだ！」

後ろでアステイエールの独り言が多少前向きに変わっていたが、鋼は特に気にしなかった。

「第三の条件はハガネ様の我儘により、若い女性であり見目麗しい容姿を持っている事」

「いや、だからできればって言ったし、ラトリスさんだってそういう条件で選んでないって言ったじゃないですか！」

抗議するが、その言葉はラトリスのメガネに跳ね返されるばかりで何の効果もない。

「そ、それに私はまだ年若い女性であるし、見た目も……うむ、まあ人の好みもそれぞれだが、美しいと言ってくれた人も多いし、う

ん！

ハガネ殿はあんまり眼中にないようだが、その、十分イケてる？、
という奴だよな、うん」

アステイエルが後ろでまた騒ぐ。何だか内容が微妙にシンクロ
している気がしたが、鋼は特に気にしなかった。

「第四の条件は、周囲に気を配る事が出来、可能なら護衛対象を目
立たずに守る能力がある事」

「美人だったら、それだけでどうしても目立つちゃうと思いますけ
どね」

「はい。残念ながら、第三の条件がある為にこれについてはあまり
適格な人間はおりませんでした」

ラトリスはさりげなくハガネに責任を押し付けてきた。

「わ、私は父様に『アステイエルはよく気の付く子だね』と言わ
れたことがあるぞ！

それに貴族の令嬢を護衛した時、

『蝶よ花よと育てられた温室の花も、真実の美を持つ天然の花の
前では霞んでしまうのですね』

『どういう事でしょうか』

『お分かりにはなられませんか？』

『申し訳ありません。非才の我が身を嘆くばかりです』

『ふふ。貴方がいると、わたくしが目立たなくなるので助かると
言っているのですわ』

『はっ。お褒めに預かり光栄至極です』

という感じに目立たない護衛法を褒められたこともある！」

後ろで鬼の首を取ったように騒ぎ立てるアステイエル。

そろそろ鋼も、こいつこっちの話聞いているんじゃないか、と感じ
始めてきたのだが、特には気にしなかった。

「第五の条件は、将来ハガネ様と共に歩むに足るような輝きを持っている事」

「輝き、ですか？」

「はい。私がハガネ様に見出したような、可能性の輝きです」

「はああああああ！ 煌めけ聖色！ 今、私を、輝かせろおおおおおおおお！！！」

後ろでまばゆい光が生まれて話に邪魔なことこの上なかったが、鋼は特に気にしていないフリをした。

「では、最後の、そしてもっとも重要な条件は」

「はい」

「戦闘能力です。どんな危地にあっても、必ず護衛対象を守り抜ける程の、卓抜した戦闘力」

「はああ、閃光斬！ 食らえ、稲妻、斬り！ そして、必殺必中、奥義、白夜の……」

「あの、ちよっと！」

後ろでブンブン剣が振り回されるにいたって、鋼も気にしないワケにはいかなかった。

アステイエルはなぜか期待にあふれた目で鋼を振り返った。

「な、何だ？ 何か用なのか？ 自慢ではないが、今の私はちよっと暇だぞ？」

「ほんと自慢になんないな！」

ええと、正直話の邪魔なんでもうちよっと静かにしてくれないかな？」

「え……？」

言った瞬間、アステイエルは裏切られたみたいな顔をした。

「いや、そんな顔されても……」

鋼としてはごくごく真つ当な要求をしたつもりだったのだが。

「はあ。ハガネさんはダメですね。そういうことじゃないでしょ」
それを見て、キルリスがため息をついて前に出た。

「アステイエルさん」

しっかりとしたまなざしで、アステイエールの前にキルリスが立つ。

自分を期待の目で見つめる彼女に、キルリスは言った。

「ストレス溜まってるのは分かりますけど、ギルド内では刃物は禁止ですよ」

「うわああああああん！！」

アステイエルは突然泣き出したと思ったら、部屋の隅に行つて体育座りを始めた。

いちいち挙動不審な人だなあと思いながら、鋼はラトリスの方に戻った。

今は彼女の奇行に付き合っている暇はないのだ。

「では、よろしいでしょうか。」

そろそろ時間ですので彼らに入って来て貰いたいのですが」

「は、はい！」

「分かりました。……どうぞ、入ってきてください」

その言葉と同時に、ラトリスが奥の扉を開ける。

いよいよ対面のときが近づいていると感じて、鋼はつばを飲み込んだ。

もしかするとこの奥に一生の仲間になる人間がいるかもしれないと思うと、鋼だって緊張する。

鋼がじっと見守る中、扉の奥で誰かが動く気配。

そして、次の瞬間、鋼の視界に入ってきたのは、

視界いっぱい広がる、メイド服を着て「ビシィ！」とでも擬音のつきそうなポーズを取った、十二、三歳くらいの少女の姿だった。

【ふわぁああ。おはようなのじゃぁ……】

「またこのパターンかぁ！ シロニヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それが、その日最初の鋼の絶叫だったという。

第二十四章 護衛のABC

今、鋼の前には三人の少女が、いや、三人の美少女が並んでいた。それを見たのか、シロニヤが感動の声を上げる。

【こ、これは伝説のアレじゃな？】

三人がシャツフルされて、その後『みぎ まんなか ひだり』の誰を雇うか決定するという……。

ワシは断然タマゴ持ちを推すのじゃ！】

(それ現実でやっても顔見ればすぐ分かるからシャツフルの意味ないぞ?)

【な、なんじゃと!?!】

驚くシロニヤは放っておいて、鋼はラトリスに紹介を頼んだ。

「はい。では僭越ながら私が紹介をさせていただきます」

ラトリスは三人の横に並ぶと、バスガイドのように解説を始めた。

「今日はハガネ様の護衛の候補としてA、B、C、それぞれのランクの冒険者に一人ずつ来て頂きました」

「では、左から順に紹介させていただきます。まず、この方がAランク代表のララナ様です」

「ボクがララナだよ！ よろしくコウくん！」

そうやって元気にあいさつしたララナは今の鋼とほぼ同じくらいの年だろうか。見るからに小柄で元気な少女という雰囲気で、それは非常に好感が持てるのだが、

(あの耳、なんだ?)

思わず鋼が言葉を失い、凝視してしまうほどに立派な猫耳が生えていた。

鋼が内心首をかしげていると、早速ラトリスが説明してくれた。「ララナ様はご覧になれば分かるように、猫耳族の女性です。特に素手での近接戦闘を得意とする格闘家になります」

（猫耳族：？）

しかし、鋼の疑問符は増えるばかりだ。

すると、こんな時ばかりは抜群に頼りになるシロニヤが口を出した。

【うむ。驚くのも分かるんじやが、猫耳族は母様がねじ込んだ種族でな】

（どういうことだ？）

【本当は猫系種族は猫人間的なフェルプルだけのはずじゃったんだが、そこで母様が激怒したんじや。顔が全部猫とか誰得だと。猫耳肉球な獣人こそが異世界のロマンである、とな。

そうしてできたのが、耳と尻尾と肉球だけが猫という猫耳族なんじやー】

（それ、本人たちが聞いたらショックだろうな……）

何だかそれだけで猫耳族に無条件で同情できてしまう鋼だった。

しかし、

「ふふふ。ちなみに君だけに教えるけれど、ララナというのは仮の名なんだ。

ボクの真名、つまりソウルネームは……」

「いえ、ララナという名前でカードには記載がありますが」

「だ、だから、ララナっていうのはカードとかに使っちゃう便利な仮の名で、真の名前は……」

「いえ、冒険者カードに虚偽の報告は出来ませんので、こちらが両親につけられた正式な名前だという事になるはずですが」

「う、うう。じ、実はボクの両親は今の両親とは別について……」

「いえ、事前に軽く周辺調査をさせて頂いた限り、ララナ様は両親と血のつながりがあるようですが」

「あ、う、うあああ……。で、でもボクはあ……。」「
どうやら変人であることは間違いないようだった。

鋼からの、

「あの、もう次の方行っちゃってください」
という要望に応え、

「ぼ、ボクのソウルネーム……」
肩をがっくり落とすララナを置いて次の人の紹介が始まった。

「彼女はミレイユ。ランクBの冒険者です」

「あたしはそこそこ高いよ。払えるんなら、ま、よろしく」

「ちなみに彼女が昨日一日、ハガネ様の護衛をしていた方です」

あ、むしゃくしゃして背中刺そうとした人だ、と鋼は思ったが、
必死で表情に出ないように押し殺した。

「実力については昨日の護衛でも理解して頂けると思います。

短剣の扱いと闇の魔法が得意で、各種状態異常攻撃の他、即死スキルのタナトスコールまで使えます」

「わ。ちよっと！ ラトリスさんあたしの情報勝手に漏らさないでよ。」

話すならせめて情報料払ってからにしてよね！」

変なところで食い下がるミレイユ。

どうやら彼女はお金にがめつい系のキャラなんだなと鋼は把握した。

「前々回の依頼、クエスト達成料が満額入ったのはどうしてでしょうね」

「う……。そ、そうやって部下の言論を封じよう……。」「この陰

「険メガネ！」

「そうですか。では、先月の依頼主に、依頼を期限内に終わらせるために守銭奴アサシンが何をしたかお話する他ないようですね」

「ウソだつてば！ それ洒落になってないから！ いいよ口八で！

口八大好き！」

どうもラトリスとは親しいらしい。やり取りにどこか手慣れた感じがするというか、ラトリスも他の人と接する時とは若干違う態度を取っているように鋼には見えた。

「少なくとも、彼女の身元と実力については私が保証致します。

金銭に対する過度の執着を除けば非常に優秀な冒険者と言えるでしょう」

さっきまでのやり取りの陰など微塵も残さず、ラトリスが綺麗にまとめた。

鋼としても、昨日鋼にも気付かせずに色々な問題を処理してくれたという実績があるので彼女の腕に対しては信頼してもいいのではないかと考えていた。

ただ、気になることがあるとすれば、一つ。

（なあ、シロニヤ。タナトスコールって？）

【うん？ 物理系の即死技じゃな。制限も多いんじゃが、暗殺にはもってこいの技じゃぞ。

技を使いながら相手を武器で傷をつけると、相手に死神を憑けられるんじゃ】

（死神か……。強そうだな）

【いや、タナトスコールで呼んだ死神は物理にも魔法にも極端に弱く、一撃でも攻撃を当てればまず倒せるのじゃ】

（それ、何の意味があるんだ？）

【じゃから、即死技じゃと言ったじゃろ。死神を憑けたまま三十秒

経てば即死の効果が発動するのじゃ。これが破格の確率で、耐性にもよるんじゃが成功率は八割程度じゃろうな】

(三十秒、ぼうつとしてたらアウトってことか)

【寝込みを襲われたり、麻痺している時に使われたらまず死んだと思っただ方がいいのじゃ】

(うわ。そう考えると強くてえげつない技だな)

【うむ。しかしこんな技を使えるとなると、あの吝嗇娘はかなり高レベルなアサシンと考えられるのじゃ】

りんしよくとか、難しい言葉を知ってる三歳児だな、と鋼は思ったとかもあるが、とりあえずミレイユへの評価と警戒心を上方修正した。

いい加減に待っているラトリスたちが怪訝そうな顔をしていたが、鋼はどうしてもシロニヤに聞いておきたいことを思いついてしまった。

(そういえば、大事なことを聞いてなかった。即死技があるのは分かったけど、その逆、蘇生とか復活の呪文とかってあるのか?)

【ぬ？ 当たり前じゃろ？ それならワシも今覚えとるところじゃぞ?】

(え？ そんな簡単なもんなの?)

驚く鋼に、シロニヤはあっさりと肯定する。

【じゃ、おぬしも覚えればいいのじゃ！ 読むからよく聞くのじゃぞ。

せもぼぬめ のもぶよを しはしたわ

うとがりあ くどいあご よへちばら】

(それは復活の呪文違いだよ！)

心の中で絶叫するが、これはこんなベッタベタな才子を見抜けなかった鋼の失態だったとも言える。

(そうじゃなくて、人を生き返らせる魔法とかないのかって話だよ！)

【なら最初からそう言うのじゃ！ まあ、なくはない、かの】
(ふくみのある言い方だな)

【高位の神聖魔法などにあることはあるのじゃが、習得できる人間がほとんどいない上に、死後数分が経ってしまうと復活不可能なのじゃ】

(つまり、死んだら仲間に復活魔法を唱えられる人がいないとゲームオーバーってことか?)

【そう思っておいた方がいいじゃろうな】

あらためて自らの置かれたシビアかつファンタジックな現実を再認識した鋼だったが、もつと認識すべきは現在の状況だった。

「何か、気になる事でも御座いますか？」

ラトリス、キルリス、護衛候補の三人、後ついでに部屋の隅から突き刺さる恨みがましい元騎士の視線が、鋼を貫いていた。

「あ、あははは。何でもありません」

お得意のごまかし笑いを出して、ラトリスに先を促す。

そして、最後の一人になったのだが、

「では、右のこの方が、Cランクの代表で、名前は……」

ここへ来て初めて、ラトリスの立て板に水解説が止まった。

「失礼しました。名前が思い出せないので、貴方の名前をもう一度教えて頂きますか？」

「わたし、の、名前、は……」

少女がたどたどしく話し出す。

彼女は黒いゴスロリ服に身を包んだ十二、三歳くらいの少女であり、服の黒さにさえ目をつぶればシロニヤと印象が被らなくもない。

しかし、

「わたしの、名前、なん、だっけ？」

と、天真爛漫に首をかしげる仕種は、シロニヤにはない純朴なかわいらしさにあふれていた。

とはいえ、見ていた全員が、あまりの肩すかし感にかわいらしさを感じるどころではなかったのだが。

ただ一人だけ、シロニヤのポケに鍛えられている鋼だけが、答えた。

「ええつと……クロニヤ、とか？」

「じゃ、あ。それ、で」

見守る全員が「それでいいのか？」と思う中、ここにクロニヤという名の冒険者が誕生した。らしい。

さすがと言うべきか、一番早く硬直から立ち直ったのはラトリスだった。

気を取り直して、続ける。

「では、Cランクの代表はこのクロニヤです。

彼女の得意なことは……よく分かりません。苦手なことも、どの程度の能力を持っているかも未知数です」

「いやいや！ だったら何で選んじやったんですか?!」

条件がどののと言っていたのは何だったのかと鋼は問いたい。まあ、Cランクの冒険者らしいから弱いということもないのだから、だからといって不安がぬぐえるワケでもない。

「輝きです」

「はあ……」

そういえば可能性の輝きがどうか言っていたというのは思い出したが、やはり鋼にはピンとこない。

「あとは勘です」

「勘なんですか!？」

「彼女の目を見た途端、分かりました。彼女は私が探している人材だと」

「はぁ……」

便利な話だなあとしか言えないが、ラトリスの判断ならある程度は信用できる。それに、雇ってから色々聞くことだってできるだろう。

「では、これで三人の紹介を終わらせて頂きます。

そして最後に、護衛の代金は、危険手当等の諸経費込みで、Aランクなら3000マナ、Bランクなら2000マナ、Cランクなら1000マナとなっています。

もちろんこれは、護衛候補のお三方にも既に了解頂いている金額です」

「……分かりました」

鋼が巨竜を倒した賞金として65万マナを持っているにしても、かなりの額だった。例えばAランクのララナを雇えば、十日ごとに3万マナが消えることになる。

鋼が受けた最初の依頼の報酬が一日2000マナだったことを考えると、やはり高額だ。しかし必要な出費だと感じた。

鋼はもう決断していた。

三人の話を聞いている途中から、もうこれでいくしかないと思っていたのだが、最後のお金のお話がある意味決め手になった。

「どなたか、雇ってもいいと思われる方はいましたか？」

ラトリスの言葉に、鋼は迷いなく、

「はい」

と答えた。

そして、

「僕は、一日3000マナを支払って……」

「おっ！ さっすがボクだね！ コウくんもやっぱりボクが一番だつて分かってくれたんだー！」

選ばれた喜びを全身で現しすぎて鋼に飛びついてくる猫耳のララナを、

「つて、あれえ？」

ひよいとかわし、宣言した。

「ミレイユさんとクロニヤさんの二人を、雇わせてもらいます！」

「え、ええええええええええ！」

色々な面で肩すかしを食らったララナの声が、ギルドに響き渡った。

第二十五章 辛口の現実

それから、鋼の護衛の契約はとんとん拍子に進み、正式な契約が結ばれた。

ちなみに唯一ごねそうだった猫耳ララナは、

「今日はこのくらいで勘弁してやんよ！」

でも、この二人じゃコウくんを十分に守れないと分かったらふんじばってでもついていくからね！」

と悪役みたいな台詞を吐いて帰って行った。護衛対象をふんじばってどうするつもりなんだろうか。

「それじゃあよろしくお願いします。ミレイユさん。クロニヤさん」

鋼が頭を下げると、ミレイユが嫌そうな顔をする。

「あーあー。敬語とかいいよ。あたしそういうの肩凝っちゃう性質だから」

「そうです……そうか？」

「ま、仕事はちゃんとやるよ。失敗したら依頼料減るし、何よりギルドの有望株潰しちゃったらラトリスの奴怖いからね」

「あはは……。クロニヤの方はどうか？」

敬語の方がいい？」

あまり深くは触れないようにして、クロニヤに話を振ってみる。

「……いい」

「ええと、それはどっちの意味で？」

「どっち、でも、いい」

「あ、そう」

クロニヤはクロニヤでめんどくさそうだ。

「なら、とりあえず敬語なしでいい？」

「……………」
無言を消極的な肯定と受け取って、二人にはため口上等で会話をすることにする。

「んで、今日はどうする予定なんだ？ 依頼とかやるの？」

「あ、ああ。特に予定はないんだよ。どうしようかな」

ミレイユに言われて、鋼は長期的にも短期的にも何の計画もないことに気付いた。我ながら行き当たりばったりすぎると反省する。

「あたしとしては、今日は色々試してみたいから、あんまり厳しい依頼とかは勘弁してほしいかな」

「試すって？」

「あんたがどれくらい危機管理能力あるか、とか。」

「……まあ昨日の感じじゃ望み薄だけど」

「あははは」

困った時には笑っておくのが鋼クオリティだ。

「あ、そういえば、ハガネさんにご指名で依頼が来てますよ」

そこで助け船を出してくれたのがキルリスだった。

「指名で、って。そういうシステムがあるんですか？」

「はい。どうしても縁のある冒険者さんに受けてもらいたいとか、どうしても有名なあの冒険者さんではないと任せられないとか、そんな風に考える依頼主さんもいますから」

それは鋼にとってもうなずける話だった。きっと有名になれば、名指しでの依頼もどんどん増えるのだろう。

「もちろん断ることもできますが、依頼の内容くらいは聞いておきますか？」

「はい。お願いします」

断るのが当然と言うようなキルリスの言い方に少し違和感を覚え

たものの、鋼は先を促した。

「まず最初に言っておきますが、依頼主は戦神の神官ミスレイさんです」

「それって……」

「はい。あいつです」

話題がミスレイのものになった途端急に口が悪くなるキルリス。

「依頼内容は手紙の配達。配達相手は戦神の神官ミスレイさんです」

「え？ でも、ミスレイさんからの依頼なんですよ？」

「はい。手紙もミスレイ……さんが持ってきました」

「……それ、何の意味があるんですか？」

自分で自分に手紙を渡す意味が分からない。

「たぶん、ヒマだから遊びに来いという意味かと。

実は、ミスレイさんから預かった手紙の内容を確認してみたのですが……」

「え？ それって無断にすることですよ？ いいんですか!？」

「いえ、当然ダメです。配達依頼の手紙を勝手に開ければ冒険者でもペナルティ、ギルド職員なら最悪の場合クビになります」

「で、ですよ。だったら……」

「それで、あいつから預かった手紙の内容を勝手に確認してみたのですが……」

「平然と言い直すんですね!？」

「どうやら覚悟の上らしい。鋼はもう関わらないことに決めて、続きを待つ。」

「手紙の内容もくだらないものだったので、特に意味はなさそうでした」

「また、『よろぴく』とかですか?」

あの推薦状の内容には本当に驚かされた。

鋼はまたそういうことが書かれていたのかと推測したのだが、しかしキルリスは首を振る。

「いえ。中にはこう書いてありました。

『哀しいですねキルリス。

貴方は自分の人生を賭けてでもわたしの手紙を読み、わたしの裏をかこうとした。

けれどわたしは、そんな手紙を読もうとする貴方の心を読んだのです。

だから今回もわたしの勝ちー！』」

「子供か！」

どうやらキルリスとミスレイは、こういう戦いをずっと前から繰り返していたようだ。そしておそらくだが、キルリスが全敗してそうだった。

「子供じゃありません！」

キルリスが涙目になって叫んだ。

さつきまでの冷静な態度は虚勢だったらしい。

「だいたい勝ち負けとか！ そういうことじゃないんです！」

ただ、わたしは少しでもミスレイの行動があらたまればいいって思っただけ、それでー！」

エキサイトしてくるキルリス。それを横目に、ラトリスまでが何だか非難のまなざしを向けてきた。

「ま、まあ、だったらその依頼受けます。こっから十分もあれば着けると思うので！」

さわらぬ神にたたりなし。鋼は雲行きが怪しくなってきたギルド内の空気を敏感に感じ取って、手紙を掴み取るとその場を逃げ出すことを決めた。

「じゃ、行くからついてきて!」

「りょーかい!」

「うむ!」

「分かつ、た……」

小気味よいテンポで返事が返ってきて、鋼たち四人はすばやくギルドを抜け出した。

「……………え、四人?」

で、そもそもそれがおかしいことに気付いたのは、ギルドを出て数歩歩いた時だった。

鋼、で、一人。

Bランク冒険者、護衛のミレイユ、で二人。

Cランク冒険者、もう一人の護衛のクロニヤ、で三人。

【ワシも忘れてもらっては困るのじゃ!】、で四人。

「何だ、別におかしくは……………っていやいや!」
自分にノリツッコミをした。

【なんじゃよ。最近ワシの出番がめっきり減ってしまっておるのじゃよ。】

新しい女ができたからなのかの?】

「何だその恋人気取り発言……………」

【こ、こいび…!?!? にゃあああああ!】
気配が去っていく。

「照れた、のか? 意外に純情路線だ」

しかしそれも気になるが、問題はもう一人の方だった。

「何で普通についてきてるんだよ、アステイェール!」

「む。自然に紛れ込んだつもりだったが、なかなかやるようだな、

八ガネ殿」

「いや普通にバレルよ!」

いつの間にか四人目として、アステイエルがついてきていた。

「別に構わないだろう? 冒険者とは自由なもの。

この国では自由にストーカーをする権利も憲法で保障されている」

「え、そうなの?!」

驚く鋼。ミレイユがあわてて訂正する。

「いやいや、そんなわけないから」

「だ、だよな! びっくりした」

元騎士が平然とありもしない法を語るのはやめてほしいと鋼は心底思った。

「というか、根本的な話として、この人だれ?」

「え? あ、そっか。ミレイユとは実は初対面か」

ギルドにいた時には既に体育座りして見ているとテンションを吸い取られるオブジェと化していたし。

「そっか。申し遅れた。私はアステイエル。

アステイエル・ベル・フォスラムという」

「名前なっが!」

今度はミレイユが驚いた。

「そっか?」

とアステイエルは首をかしげるが、確かに長いことは長い。

具体的に言うなら、『フィン・ファ○ネル・ビット』や『ハイパ

ー・メディア・クリエーター』をも凌駕する長さだ。

などと考えていると、脳内から横槍が入った。

【じゃがまだまだ三流。しよせん、

『裏切りは僕の○を知っている』や、

『俺の○がこんなにかわいいわけがない』におよぶものではない

のじゃ】

(何か伏字のせいで卑猥に聞こえるな、それ)
そしてそれはたぶん名前ではない。

「でも実際、長い付き合いになるんならもうちょっと短い方が言いやすいかもな」

何の気なしに口にした発言だったが、それがアステイールの過剰反応を引き起こした。

「つまり貴様は、騎士職を失い、自らの誇りを見失った私に、家名すら捨てるというのか!？」

「いや、そこまでは……」

「全てを捨て、アステイール・ユーキになれと言うのか!？」

「言ってるねえよ!!!」

なんでわざわざ自分の名字を名乗らせなきゃいけないのか、本当に最近のアステイールの思考には時々ついていけない。真面目な元騎士様ではなかったのか？

「家名云々より、そもそもアステイールっていうのが呼びにくいよね」

初対面の相手に容赦なくダメ出しをくらわすミレイユ。

「クロニヤ、には、数段、劣る……」

めずらしく発言したと思ったらいきなり追撃をしかけるクロニヤ。まあ実際、アステイールなんて長い名前、パソコンで打つのが面倒だからアスだけ打つたら一発変換できるようにしたくなるくらい面倒だとは思っただが、

「う、うむ。そう、なのか……」

度重なる口撃に、アステイエルはしゅんとしてしまった。

「なら、愛称をつければいいんじゃないか？」

鋼の言葉に、アステイエルの表情がパツと華やいだ。

「そ、そうだ！ そうしよう！」

「あれ、でも冒険者カードにニツクネームの欄、なかったっけ？」

アステイエルの表情がパツと曇った。

「い、今のニツクネームは……『光の聖騎士様』」

「それニツクネームなのか！？」

むしろ二つ名と変わりがない気がする。

「べつにぶつーに、アステイエルを短かくすればいいんじゃないの？」

というミレイユの意見を受け、

「ととのい、ました……」

いち早くクロニヤが前に出る。

「アステイエル。略して、イエール」

「すぐく呼びにくいぞ！？」

「なら、ば……ステル」

「すぐ置いてけぼりにされそうだ！」

クロニヤの名づけセンスはゼロだ！

そんな経緯を経て、元騎士のアステイ（ミレイユ命名）を加えた四人はいよいよ依頼を果たすべく街に行く、はずだったのだが、

「おなか、すい、た……」

クロニヤの鶴の一声によって、先に食事をする事になった。

しかも、これもクロニヤの要望により、ミスレイのいる教会とは

真逆の方向に歩いて十数分、どんどん依頼達成から遠ざかる。
そうやって着いたのは、定食屋だった。

店の雰囲気もだが、メニューを見て鋼は啞然とする。
そこに載っているのは、とんかつやそば、カレーなど、日本で売
られているメニューそのもの。

(ごはんとか豚、はともかく、カレーとか、スパイスなんかはどう
やって手に入れてるんだ?)

どうしても気になった鋼は、店の人をつかまえて聞いてみた。

が、

「あ、すみませんうちは市販のルーをそのまま使ってるんで」

「ルーあるのかよ！ つうか店なのに市販のルーそのまま使うのか
よ！」

……と店内で叫ぶワケにはいかないので、諸々の納得のいかない
気持ちを押し込め、仕方なくうなずいておいた。

「ちなみにプリンス・オブ・カレーの辛口です」

「ねえよそんなん！」

結局叫んでしまったという。

お冷を持ってきた店員さんに鋼は精神に打撃の少なそうなとんか
つ定食を頼み、渴いたのを潤そうともらったばかりの水のグラス
に手を伸ばしたのだが、

「ちよつとストップ！」

それが横からかつさらわれて、鋼は驚いてその犯人を見た。

「あのさ。気を付けないとダメだって言っただじゃん。

とりあえずこれ、毒見するから」

そう言って用心深くグラスの水を飲むと、しばらく眉根を寄せて
から、

「ん。飲んでよし」
とグラスを戻してくる。

(か、間接キ……)

と思春期的思考が頭をよぎるが、気合で打ち消して何食わぬ顔で
一気に水をあおった。

(ん？ カルキくさい？)

水の味に違和感を覚えたのも一瞬、

「う、うおおお！？」

体の中から活力が湧きあがるのを感じた。

「な、何か、水を飲んだ途端、急に力が湧いてきたんだけど……」
驚いた顔をしているみんなに、鋼はそう弁解する。

「さ、さつき飲んだ時は普通の水だったけど？」

一番びっくりした顔をしていたミレイユが、ようやく立ち直って
言った。

「あ、そう？ まあ、元気になったんだし、いいか」

どうせまたタレントのせいだろう。そう決めつけて、鋼は気にし
ないことにした。

やがて、メインの料理がやってくる。

鋼にはとんかつとキャベツの載った皿と、ごはんと味噌汁とハシ。
まさに日本の食事である。

「どつくみどくみい〜」

しかしそのメインであるとんかつが、さっと横から強奪される。
しかも二切れも！

犯人は当然ミレイユである。

「ちよつ、お前な……」

そう言って怒ろうとした鋼は、

「んー？　しょーがないっしょ。毒見なんだから」

ミレイユの笑みに、さっきの行動がこの時のための布石だと気付いた。

いきなりとんかつだけを毒見すると言えば、その下心は明白。鋼には拒否することもできただろう。

だが、あえて事前にミレイユにとってうまみのない水を毒見することによって、この行為に正当性を与えたのだ！

この女、デキる！

そのとき、鋼に電流走る…！

的な展開になってもよかつたのだが、

「って、だとしても毒見には二切れは絶対いらないだろ！」

やっぱり下心は見え見えだった。

そもそも、

「かつ、うまー」

護衛対象の話聞くのもそこそこに、二切れのかつを口いっぱいにはおぼっている時点で、もはや毒見とかいう建前はどっかに消えていた。

「え？　あんたそんな食べたかつたの？　しょうがないな。」

じゃ、魚一匹まるまるあげるから、それでチャラってことで

そう言っつてミレイユが超越したのは、ししやも、か何かだろうか。明らかにとんかつ一切れよりも小さい焼き魚だった。

「仕方ないな」

食べ物のものでこれ以上もめても大人げない。

鋼はミレイユに渡された焼き魚を口に入れて、

「うわっ！」

一瞬で吐き出した。

「なに？ 何か変な味でもした？」

にやにやしなから言ってくるミレイユ。

普通だったらいつが何かをしかけた場面だが、今回に限っては
おそらく関係ない。

「シロニヤ！」

オラクルを発動させ、鋼は小声で叫んだ。

【な、なんじゃよ。さっきは隙を見て出て行っただけで、ワシも今
ちよつと来客中で忙しいのじゃ。

おぬしはその黒いのと仲良く恋人気取りで銀竜にでも心中させ
てもらえばいいのじゃ】

「まだ銀竜引つ張ってたのか……。じゃなくて、料理を食べたら何
か変な味がしたんだよ。どうせまたタレントだろ？」

【なんじゃよもー。そんな時ばかり呼び出して。ワシはそんなに
都合のいい女じゃないのじゃ】

「いや、そう言わずに頼むって」

【……むう。ま、唯一の友の頼みでもあるしの。

で、料理じゃったっけ？ もしやおぬしが食べた料理というのは、
魚料理かの？】

「ああ」

【なら間違いないの。それは『シメサバとの蜜月』の効果じゃな】
「シメサバとの蜜月……」

聞いただけでうんざりする名前だと鋼は思った。

「どんな効果があるんだ？」

【魚料理が全部シメサバの味になるんじゃよ】
「おい」

【魚って全部生臭くてダメなんじゃけど、シメサバだけは不思議と
食べられたんじゃよねー】

「じゃよねー、じゃないだろ。どうして自分基準でしかアビリティ設定できないんだよ」

もっところ、魚料理を世のため人のために使うような……と考えたが思いつかなかった。

【じゃってそれ、ボーナスポイント150も使うんじゃよ？

まさか選ぶ奴がいるとか思わないじゃろう？】

「それは、いや、でもそれは……くろう！」

色々と反論したい所だったが、今更言っても何の意味もない。

それよりも、こんなしょうもないアビリティに150ポイントも使ってしまったことが口惜しくてならなかった。

【とにかく、ワシはもう行くのじゃ】

「あ、そついや来客中って言ってたっけ？ 誰か神様でも来てるの？」

【そりやおぬしの……何でもないので】

「そついう言い方されると気になるけど、まあいいか」

鋼にはシロニヤのプライベートに踏み込むつもりはないし、それがなくてもシロニヤとはいい関係が続けていられるだろうという信頼も実はあった。

【あ、そつじゃ】

「ん？」

【最近おぬしの周りに妙な気配を感じるのじゃ。

ワシはしばらくそつちを見られんかもしれんし、気を付けるんじやぞ？】

その言葉を最後に、シロニヤとの通信は切れた。

「なんだかなー」

言いながら、焼き魚……の仮面をかぶったシメサバ(?)を食べ

る。最初からシメサバだと思えば、それなりに食べられなくもなかった。

「というかそんなことよりも、シメサバ（焼き魚）を口にした途端、う、うおおおおー！」

体の中から素早さが湧きあがってきた。

「え？ なに？ 今度はなに？」

目を見張るミレイユの前で、勢い余って一人エグオイル。ぐるんぐるん回る。

はたして素早さが湧きあがるものかは知らないが、身体の奥からあふれる素早さによって、赤い塗装もしてないのにいつももの三倍くらいのスピードで動けそうだった。

（あ、しまった。これのこともシロニヤに聞いておけばよかったな）
と思うが後の祭り。忙しそうだったし、連続で話を聞くのはさすがに気が引けた。

そしてその横で、

「あー、意味分かんない……」
と頭を抱えるミレイユ。

ちなみにそんな二人の陰に、

「あ、毒見、わすれて、た」

鋼の皿に残ったとんかつに手を伸ばすクロニヤや、

「うむ。やはりこのタマゴは抜群だな。シャリも申し分ない」
なぜか定食屋で寿司を食べているアステイエル改めアステイがいたのだが、全員が全員、それぞれのやり方で食事を満喫しているようだった。

「あれ？ いつの間にか僕のとんかつがなくなっている！？」

「毒見、した。ぜんぶ……」

「クロニヤそれ、全く毒見の意味ないぞ!？」

「し、仕方ないな。どうしても言うならハガネ殿に私のガリを…」

…」

「何でガリ!?! 要らないよ?!」

それは、鋼にとってこの世界に来てから初めてのにぎやかな食事だった。だからこそ、鋼は自分の冒険者カードに表れた新しい文字に、最後まで気付くことはなかった。

第二十六章 機転、反転、急転直下

「無駄に、疲れた……」

すったもんだの食事が終わり、鋼はよろよろと店を出ようとするが、そこで、ちょうど同時に店を出ようとしていたクロニヤとがちあつた。

「満、腹……」

そうやってお腹をさするクロニヤは、無表情ながらどこか楽しげに見えた。

「楽しそうだな」

だから鋼は思わずそう声をかけてしまった。

おかずを全部奪われた腹いせに皮肉を言ったワケではなくて、単純に、何を考えているかよく分からなかったクロニヤの感情の変化に少しうれしくなったからだ。いや、本当に。

「たの、しい？ わた、し、が……？」

しかし、返ってきた反応は、鋼にとって意外なもの。

「クロニヤ……？」

想像すらしなかったことを言われたみたいで、驚いた顔。

それは、未知に遭遇した幼子のような表情に見えて、鋼は半ば条件反射的に、その手近にあった頭に自らの空いている手を伸ばしていた。

そのまま、ぐしゃぐしゃと頭を撫でる。

「?? ??!」

何が起こったか分からないという顔で、目を白黒させるクロニヤ。

そんなクロニヤの頭をさらにぐしゃぐしゃとかき回して、

「あ、え、うわ！ しまった！」

まんまるに見開かれたクロニヤの目と目があって、その時ようやく、鋼は自分が何をしてしまったのか、自分の行為がどういう意味を持っているのか、気付いた。

（あああああ！ やってしまった気がするー！！）

弁解をするならば、害意なんてこれっぽっちもなかったのだ。

ただ目の前に撫でやすそうな頭があって、そこにちょうどあつらえたように自分の左手があっただけなのだ。

しかし、そんなのは言い訳にもならないだろう。

「ご、ごめんクロニヤ！ ほんとごめん！」

謝りながら、鋼はクロニヤの頭に触れた手の感触を思い出す。

ぐしゃぐしゃとかなり激しく手を動かしてしまったし、楽観視はできない状況だろう。何より本人に、なんとなくなのだがやってしまった感覚があっただのだ。

おそろおそろ顔を上げると、

「……………う」

クロニヤがいつも通りの無表情で、しかしちよつと顔を赤らめて立っている。

（な、撫でられたこと気にしてるー！？）

心の中で絶叫する鋼。クロニヤの顔にはまだ鋼に対する非難の色は見えないが、それはそれで気まずいことこの上ない。

なぜだか二人とも視線を逸らせず、図らずもお見合い状態になっていると、後ろから威勢のいい声がかけられた。

「ちよつとお客さん！ うちではラブコメとナデポは禁止だよ！」
振り向くと、定食屋のおばちゃんか腰に手を当てて鋼たちをにら

んでいる。

おばちゃんの指が示す方向を見ると、たしかにそこには『ラブコメ、修羅場、ニコポ、ナデポお断り!!』の張り紙が。

どんな店だよ、とかニコポとかナデポって何だよ、とは思ったが、「す、すみません！ 今、出ます」

鋼はこれ幸いと店を出ることにした。

店を出たところで、

「というか、たかが頭さわったくらいで大げさなんじゃないの？」

ミレイユが真顔でそんなことを言ってくる。完全に事態を軽く見ている。

しかし、乙女の尊厳が云々、という話はしても理解できなさそうな顔をしているし、何よりこういうのを全部説明するのは鋼だって嫌だし、クロニヤだって迷惑に感じるかもしれない。

こうなったら一刻も早くギルドに戻って一時解散をしようしかない。

一時間ほど自由行動ということにしてほとぼりが冷めるまで全員バラければ、クロニヤが気まずい思いをすることもなくなるだろう。うん。これがこの逼迫した状況を打ち破る唯一の解答だ。

急いで走ればたぶん五分かからない。まあ少なくとも、後九分もあればギルドまでは帰りつけるだろう。

鋼は早速ギルドに戻る提案をしようと思ったのだが、「危ない！」

突然背後でミレイユの声と、カシャン、と何かが弾かれる音がした。

振り返って床に落ちた『何か』を見ると、

「……ジョッキ？」

親父さんがビールを飲む時に使うようなジヨッキ。明らかに中身は入っていない。しかし、誰かがこれを投げた？

やっぱりジヨッキを投げる文化でもこちらにはあるのか、と自分が襲われたという危機感も忘れて首をひねる鋼を、さらに困惑させる事態が起こる。

「底面に、『このジヨッキは安全な素材を使用しています』と書かれているな」

持ち上げたジヨッキの底を見て、アステイがそんなことを言ったのだ。

「安全な素材？」

子供が飲み込んで大丈夫とか？

疑問の尽きない鋼に、ミレイユが答えを教える。

「極力当たっても人にダメージを与えないように作られた、安全ジヨッキだよ」

「安全ジヨッキ？」

鋼が聞き返す間にも、ジヨッキが飛んでくる。

「おっと」

今度もやはり背後から、しかし今度はシャン、という短い音がした。

振り向いて確かめると、アステイがいつの間にか抜いた剣で、ジヨッキを真つ二つにしていた。

ちなみにその横にいたクロニヤはこちらもいつの間にか手にしているコップからジューズらしきものを飲んでいる。護衛の仕事をする気配は微塵もない。

（あーあ、またそんなもの飲んで。お腹壊しちゃうんだぞ？）

なんていう鋼の親心的な気遣いはともかくとして、

「わ、また来た」「ふむ」

を認識させる彼女の仕込みだったということだろう。鋼はラトリスの手の上で踊らされていたのだ。

頭に血が上った鋼は、何も考えずにギルドの方に駆け出した。

「あ、ちよつと待ってって！ 護衛！」

後ろでミレイユの声が聞こえたが、それくらいでは鋼は止まらない。

それどころか、今の鋼は異様に体が軽かった。

定食屋で食事をした時の素早さアップ効果がまだ続いている。

鋼は後続をぐんぐん引き離し、すさまじい速さで道を駆け抜けて、

「わっ！」「きゃっ！」

曲がり角から突然出て来た少女と正面衝突した。

「あいたたた。あ、すみません！ 大丈夫でしたか？

わたしだったら、いつもこんなんで……」

幸いお互いにケガはないようだった。

ぶつかった少女が平謝りに謝ってくる。

「いえ、こちらも急いでいたので……。あれ、これ」

鋼は目の前に落ちていたカードを拾った。

「冒険者カード？」

しかし、自分のカードはちゃんと保管している。

だとしたらこれは……、と思った時、目の前の少女が大声を上げた。

「わーっ！ それわたしのです！ す、すみません」

突然の少女の声に驚きながらも、鋼がカードを差し出すと、少女

は大事そうにカードを仕舞い込んだ。

「ありがとうございます。わたし、いつもカードなくして……。今日も依頼あるのに……。危なかったあ……」

口ぶりからすると、このくらいのこととは日常茶飯事らしい。

「でも、優秀なんですね。ちらつと見えちゃいました。冒険者ランク」

渡す時にランクの所だけ目についたのだが、少女のカードに記されていた冒険者ランクはB-だった。

ランクBと言えば、鋼に飛んできた安全ジョッキを簡単に撃ち落としたミレイユとほぼ同格の強さということになる。

「あ?! え、うわあ!?! は、はずかしい……。その、この前上がったばかりなんですよ」

鋼の言葉に、照れながらもどこか誇らしげに話す少女。

「わたしこんなんですけど、昔から魔法だけは得意で、今は『衆生一切焼き打ちのクリステイナ』なんて二つ名で呼ばれています」

「……衆生一切、焼き打ち?」

「あの、わたし、味方もろとも火炎系魔法で焼いちゃうことが多いて……」

てへへ、みたいな顔で笑う少女。

ファンタジーかつリアルなドジっ子だった。

ドジっ子はマンガとかではかわいいものだが、ランクBレベルの火炎魔法で誤射とかされたら笑いごとじゃ済まない気はした。

この子も関わったらまずい子だな、と一瞬で見切りをつけて、会話を打ち切る。

「ええと、それより急いでたんじゃ?」

「あ、そうです! ギルドに行かなきゃ!」

鋼が促すと、少女、たぶんクリステイナは勢いよく拳を握った。

「実は今日、新しい仕事ができるかもしれないんです。何でも英雄の人を護衛する仕事だとか」

「え？」

「集合、本当は九時だったんですけど寝坊しちゃって。」

とにかく行かなきゃ！ それじゃ！」

「あ、ちよつと……」

引き留める間もなく、少女は見えなくなってしまった。

残された鋼は首をひねった。

「英雄の護衛？ 九時？」

思い当たる要素がありすぎる。

あと遅刻の仕方が豪快すぎる。

「やっぱり一度、ギルドに行ってみるか」

疑問を解消しようと、冒険者ギルドに向かうことを決意し、そこからの連想か、鋼はなんとはなしに冒険者カードを取り出して、

「……そういつ、ことが」

鋼はある推論にたどり着いた。

「それで、こんなところまでやってきて、どうするっていうのだ？」

不思議そうな顔で、アステイが問いかける。

ここは街の中心部にある森林公園。

実は鋼が最初にこの世界にやって来た時、着いた場所でもある。

もう定食屋を出てから四分と二十二秒経っているのだからあまり時間がないのだが、鋼はどうしてもギルドに行く前に確認しておきたいことがあったので、追いついてきたみんなをここまで連れてきたの

だ。

鋼は即座に切り出した。

「うん。話っているのはほかでもない。」

実は、僕が誰かに毒を盛られていたことが分かったんだ」

「はあ?!」

アステイが間の抜けた声を出す。

それはそうだろう。自分が毒を盛られていたというには鋼の態度は落ち着きすぎているし、そもそもその本人がぴんぴんしているの
で説得力がない。

だが鋼はアステイの反応を無視して話を続ける。

「実は、確信ができたのは、これを見てからなんだけど」

そう言つて、鋼が差し出したのは、冒険者カード。

その一番下には、

『状態：毒・麻痺』

と書かれていた。

「ま、待て。待ってくれ。」

確かに冒険者カードには状態異常にかかっていると書かれている
ようだ。

しかし、見る限りハガネ殿は全く弱っている様子もないし、仮に
もこれだけの高レベル冒険者が護衛する中、一体誰がどうやって毒
を……?」

アステイの疑問に、鋼は丁寧に答える。

「僕がなぜ元気なのかは、とりあえずおいておくとして、毒を誰が
盛ったか、については簡単だよ。」

だって容疑者は、一人しかいない」

鋼の視線が、正しく一人を見据える。

「ミレイユ。犯人は、君だ！」

それはまるで、探偵のごとくに。

鋼の指が、まっすぐにミレイユを指し示す。

「な！？ ミレイユだと！？」

アステイの驚きの声にかぶせるようにして、

「うわ。あっちゃあ。バレちゃったのかあ……」

ミレイユはあっさりと、自白の言葉を吐いた。

自分の所業が見破られたというのに、全く動じる様子もなく、ミレイユは尋ねる。

「ちなみに、どうして分かったか、聞いていい？」

それに対して、鋼も全く表情を動かさず、あくまで冷静に答える。

「簡単だよ。僕の体調がおかしくなったのは、水を飲んだ時と、魚を食べた時。

水は君が毒見したものだし、魚は君から差し出されたものだった。

これで分からない方がどうかしてる」

「……だね」

ミレイユは苦笑いをした。

鋼の追及は、ここで終わらない。

「それに、さっきランクB - の冒険者に会ったんだ。

彼女は、九時に英雄を護衛する仕事を受ける予定だったと言って
いた。

つまりそれは、本来僕の護衛候補になるはずだったBランクの彼女が、誰かと入れ替わってるってことだ。

だから……」

「ちょよ、ちょいと待って！」

「……一体それ、何の話？」

今まで素直すぎるほど素直に自白をしていたミレイユが、ここで初めて口をはさんだ。

ふてぶてしいというよりは、裏表なく単純に訳が分からない、という顔で、ミレイユが話す。

「あたしはただ、護衛対象のあんたが危機意識ゼロでのんびりしてるから、ちょっと毒の怖さを教えてやろうと思って水に毒入れただけだよ？」

それが効かなかったから、今度は魚に麻痺毒仕込んでみたけど、あんたを殺すつもりなんてなかった」

「だ、だけど……」

思わぬ反撃に、名探偵鋼の仮面はもろくも崩れる。

だが、ミレイユは容赦しない。

「それに入れ替わったとか何の話？」

あたしは護衛の仕事を無事成功させてお金もらいたいだけだし、そもそもラトリスとは顔見知りだから、入れ替わるなんてできるはずないじゃん」

「う、うあ……」

鋼はぐうの音も出なかった。たしかに全てミレイユの言う通りだ。入れ替わりの話は、全部鋼の勘違いだったのだろうか。

「それよりあたしは何で毒食らって平気なのかって方が気になるよ。無効化されたのかと思ったら、ちゃんと状態異常自体はかかってるみたいだし。」

「どういうこと？」

「いや、これはたぶん僕のタレントで……。毒で元気になって、麻痺で素早くなっただから、きつと状態異

常の効果が反転する効果だと思っけど」

頭の半分でミレイユの質問に答えながら、もう半分ではさっきの少女のことを考える。

(だけど、英雄の護衛で九時にギルド集合、そんなのが偶然一致するか？

ありえない。そもそも僕と別口でそういう集団がいたなら、ギルドで僕は見ているはずだ)

だとしたらどんな可能性があるのか、鋼は思考する。

(あの少女が嘘をついていた？ いったい何のために…?)

考えながら、ミレイユとの話も続ける。

「……そんなタレント、聞いたこともない」

「あるものはしょうがないだろ。」

僕はそういうおかしなタレントをいくつか持ってて……」
そして話も続けながら、考える。

(いや、待てよ。あの子は言っていた。

ランクは、『この前上がったばかり』だって。

もしかすると、ラトリスが調べた時、彼女は前のランク、C+だった可能性もある。

だとしたら……)

鋼の思考がようやく一つの実を結びかけた、その直前に、

「規格外、の、タレント。しか、も、複数」

鋼の近くで、異質な気配が膨れ上がった。

「ちっ!」「何だ!?!」「…?」

ミレイユも、アステイも、鋼ですら身構える、あまりに不自然な何か。

それが今この瞬間まで、こんなに近くにいたことに気付かないなんてありえない。

誰にでもそう思わせる、異様すぎる気配、空気。

その中心にいたのは、

「クロニヤ?」

黒いゴスロリ風のファツションで、意外と食い意地が張っていて、頭を撫でられると顔を赤らめるような、そんな少女。

いや、そんな少女だったはずの何か、冷たい目で鋼を見ていた。

まるで道具を品定めするような、道端の石を眺めるような、感情の抜け落ちたその目。

戸惑う鋼の前に、いつも通りに小さな、けれどその場の誰にでも聞こえるほどのはっきりとした声で、

「やはり、危険、か。転生、者」

彼女はそうつぶやき、そして、

「え…?」

その瞬間、不可視の何か、鋼の胸の中心を貫いた。

「あ、れ……？」

クロニヤ以外の誰もが目を見張って身動き一つかなわない中、

「おか、しいな……」

ゆっくり、ゆっくりと、

「力、が、はいらな……」

鋼は、地に倒れ伏した。

第二十七章 激闘、異世界勇者！

アステイは、倒れ行く鋼を、何も出来ずにただ見つめていた。

「ハガネ殿……？」

倒れた鋼は、動かない。

代わりに安つばい絵の具のような赤がしみだしてくる。

「……これ、で、死なない？」

立ち尽くすアステイを我に返らせたのは、皮肉にも鋼を討った裏切り者のささやきだった。

「き、さまああ……！」

叫び、斬り付ける。自らの感情を制御出来なかった。

「よくも、よくもよくも、ハガネ殿を！ おおお、あああああああ
ああ……！」

そして、その必要もないと思った。

怒りに任せ、暴走に近い濃度で聖色を解放、渾身の力で切りかかる。

「すごい、気迫。でも……」

巨竜にこそ及ばなかったものの、数々のモンスターを一刀の下に切り捨ててきたアステイの剣が、

「……徒勞」

空中で、ぴたりと静止する。

まるでクロニヤの前で不可視の壁に受け止められたかのように、アステイがどんなに力をこめても全く押し込めない。

「何だ！？ 一体、何をした！」

叫ぶアステイに、クロニヤは答えない。

「やはり、いび、つ。」

その、細腕に、トン単位の力、が、こめられて、いる。

この世界、でなければ、物理的、に、ありえないこと」

実験動物を観察するような目で、アステイを見るともなしに見ている。

剣を止められた手段は分からなかったが、罅迫り合いでは分が悪
いと感じたアステイは、一度後ろへ跳び、

「出し惜しみは、しない！」

ワンステップで姿勢を修正、膝を曲げ、全身にばねをためて、

「必殺必中！ 白夜の静謐せいひつ！！」

瞬間、世界から音が消え、光が満ちた。

そして、知覚が奪われたその一瞬、まさにほんの瞬きの間、人が
人であるが故に生まれる絶対的な意識の空白に、アステイは空を駆
ける。

達人にとっては無に等しい距離を、一瞬のさらに数分の一の刹那
で駆け抜け、勢いに任せてクロニヤに痛烈な斬撃を浴びせ……られ
ない！

「な、に…？」

斬り付けようと近付いたアステイの身体自体が、正体不明の何かに阻まれて止められていた。

「徒勞と、言った」

気が付けば、アステイの身体は宙を舞っている。

防御の手段も、攻撃の手段も何もつかめなかった。

だが、訓練された肉体は己が役目を心得ている。空中で姿勢制御、きちんと両足から着地する。

正体不明の攻撃手段を持つ相手に、無策で突撃するのは下策の極み。

いつものアステイであれば、そのようなことを言っただ様子見をしたかもしれない。

だが、

「は、あああああああああああ！」

今のアステイは止まらない。そんなつもりは微塵もない。

ただ、たぎる怒りがアステイの胸にあって、それだけが今の彼女の原動力だった。

その怒りを、想いを、剣戟と言葉に変えて打ちつける。

「ハガネ殿が、あいつが、お前に何をした！」

一秒間に三撃入ると所属していた騎士団の間で恐れられた、アステイの神速の打ち込み。

「とくに、何も」

しかしそれは、クロニヤの前では何の意味もなさない。

何らかの魔法で相殺している訳ではない、とアステイは判断する。だってクロニヤは、アステイの剣を、斬撃を、厳密な意味では見えない。

どんなに速い一撃も、どんなに苛烈な打ち込みも、クロニヤは全く目で追わない。

「では、なぜだ！　なぜ、彼を?!」

ななめ下から足を狙ったアステイの剣は、

「この、世界、を、救わせない、ため」

やはり造作もなく防がれる。

だが、不可視の壁にぶつかっている、というのとも違つと今は分析できていた。

近くにやつてきた斬撃だけ、最小の力で受け止められている。

「世界を救わせないため、だと!？」

そんなことを望む貴様は、一体何者だ？

悪魔か？　あるいはこの世を滅ぼすと伝えられる、魔王とでも!

「？」

嘲笑と共に剣を振るう。息もつかせぬ連続攻撃。

「……勇者」

「な、に…?」

だが、その言葉に、アステイの動きはたしかに一瞬だけ止まった。それを気にも留めず、そもそもアステイの攻撃などないかのような無感動な仕種で、クロニヤはアステイを見ている。

淡々と、ただ事実だけを述べるように、告げる。

「わ、たし、は、異世界の、勇者。無数、の、世界、を渡り、正義、を、為す者」

「勇者？ それに、正義、だと！？」

クロニヤ！ 言うに事欠いて貴様は……いや、貴様の本当の名は？」

あまりに想定外の答えに、アステイは飲まれまいと必死に気を張る。

「名前、など、ない。世界を、渡る、間に、すりきれて、消え、た……」

「名前が、ない？」

それは、アステイにどこか不吉なものを感じさせた。

名前とは、自身を形作る大事な物で、他者に自分を認識させる重要な物でもある。それが存在しないというのは、どういふことなのか。

「本質的、に、『^{ネムレス}果て無き放浪者』である、わた、しに、きまぐれ、でも、思いつき、でも、名前をつけた、ことが、驚嘆すべ、き、事実。」

だがそんな例外事項、も、彼の死と、ともに、棄却、される「……っ！」

ただ立っているだけの少女から、アステイは圧倒的な威圧感を覚えた。

「くっ！」

アステイは後ろに跳んで、距離を取る。

このままでは埒が明かないという判断なのか、それともクロニヤを名乗る少女の異質さに気圧されたのか、それは自分でも分からなかった。

だが、彼女を赦してはならないという想いだけは、消え去りはしない。

勇者などという世迷言を聞いて、アステイは目の前の少女を神敵として討つことを決めた。

「悪いが、我欲のために人を殺めた者に正義を名乗られては、元騎士の名が廃る！」

数メートルほどの距離を置いて、精神を集中。力を溜める。この間に攻撃されては反撃のしようがないが、そんなことは起こらないだろうということをアステイは敏感に感じ取っていた。

そして、その力を一振りの剣に凝縮させ、放つ！

「神の十字をその身に刻め！ ノーザン・クロス！！」

圧倒的威力を持つ、十字の斬撃が飛ぶ。

『白夜の静謐』が最速最高の奥義なら、この『ノーザン・クロス』は最大最強の奥義。消費HPが莫大という欠点を持ち、また弾速と取り回しという点では同系の『サザン・クロス』に一步譲るものの、威力や貫通力という点では上回っている。

しかし、それも、

「これすら、効かないと言うのか…？」

クロニヤには、何の意味もなさなかった。

「距離でも、大きさ、でも、速度でも、ない」
「淡々と、クロニヤは告げる。」

「わたし、の、能力ちから『絶対的隔意』パーフェクト ロンリネスは、悪意、敵意、害意、それら

の感情を、その、発露、を、はばむ」

なぜなら、感情を荒立てる必要がないからだ。

「わたし、を、傷付けよ、うとする意志、それ、が、存在する、場所、すべて。そ、れが、わた、しの、絶対防御、領域」

アステイも、アステイの技も、クロニヤにとって何の脅威でもないから。

アステイにも、それが痛いほどに分かってしまう。
だがそれが分かっても、

「私は、剣を引く訳にはいかない！」

アステイは逃げたりしなかった。

その様子に、クロニヤは首をかしげる。

「……なぜ？」

「愚問だ。それよりも、お前は私の質問に答え切っていない」

「聞く、意味がない」

「ある。あいつを、いや、ハガネ殿を殺めた理由を聞き、私も貴様を殺す」

「理屈、に、あわない」

なおも首をかしげるクロニヤに、アステイは獰猛に笑ってみせた。

「理屈に合わない？ いや、それだけが唯一の解答だ。

なぜなら、私は、私は今、怒り狂っているからだ！」

「!？」

放たれる、神速の踏み出しからの抜き打ち。

それは、絶対の防御に守られているクロニヤを半歩後ずさりさせ

るほどの、気迫のこもった物だった。

だが当然のように、攻撃自体は全く届きもしない。容易に防がれる。

しかし、アステイはひるまない。

「もう一度、聞く！ 異世界の勇者などではない、ほんの数時間だけ私たちの仲間だったクロニヤに聞く！

なぜだ！ なぜ、あいつを、ハガネを殺した！？」

アステイは、いつの間にか鋼を呼び捨てていた。だが、激情の中、その呼び方は妙にしっくり胸の内に収まった。

その、強すぎて人を巻き込まずにはいられない想いに、クロニヤの表情が初めて揺れた。

そしてアステイは、カチリ、と、クロニヤの中で、何かのスイッチが切り替わった音が聞こえた気がした。

「わたし、だって……。彼が無害であれば、もう少しクロニヤを続けても構わなかった。けれど彼の力は常識外れに強力かつ無軌道で、だからわたしは放置する選択肢を取れなかった」

「く、う？」

突然流暢になったクロニヤは、防御にしか使っていなかった力を、わずかながら反撃に用いた。

不意打ちを受け、アステイは今度は受け身も取れずに地面に倒された。

「この世界、認識番号 34715地球型箱庭世界は、『新神類育成計画』という神様のもつとも危険で気まぐれな計画の中核であり、現存する世界の中で潜在的危険度がもつとも高い世界の一つ」

「いったい、何の……ぐっ！」

息つくヒマすらない。

聖色の加護を持っているはずのアステイが、クロニヤの不可視の攻撃を、まるで防ぎ切れていない。

「異界の神が送り込んだ彼の力は、近く滅亡するはずのこの世界を救う一縷の希望となる可能性がある。危険な世界が存続する危惧を看過するのは、わたしの性質上許容できない。救世主の芽を摘むのは、わたしの役目。それがひいては真神しんじんへと成長・進化する可能性があるのなら、なおのこと」

「く、そ、そうそう思い通りに、は……」

空中であれ、地上であれ、クロニヤの攻撃に制限はない。

そして、攻撃の瞬間だけ現れる圧力には、剣で対抗する術はない。

「この世界では、カモ命も軽すぎる。誰もが簡単に強い力を使い、その力で簡単に人や動物や魔物が死んでいく。こんな歪な世界を、わたしが見逃していいはずがない。そしてその歪さの頂点が、彼の在り方だと感じた」

「どう、いう……」

もうアステイは、クロニヤの攻撃に逆らうことをやめていた。

どうあっても防げず避けられないなら、甘んじてそれを受ける。

「わたしが他の世界で見てきた英雄と呼ばれる人間には、強大な自分の力に対する自覚と、それを制御する、あるいは行使する、強い意志と心があった。けれど、彼にはそれが全くない」

「それ、は……」

アステイは咄嗟には反駁出来なかった。その懸念は、アステイも心の奥底で感じていた。

「彼には強い力に見合う意思がない。彼には強い力に伴う責任がない。彼には強い力に殉じる覚悟がない。彼は無軌道で刹那的な、まるで無知で無邪気な子供。」

だから、彼は……」

彼は、害悪でしかない。

そう言い切って、クロニヤは、その長い語りを終わらせた。

同時に、これまで絶え間ない激しい攻撃にさらされたアステイの体が、どたり、と地面に落ちた。

「これ、で、話は、おわり。わたし、は、彼、を、殺す」

クロニヤの口調が元に戻る。

ボロ雑巾のように地面に転がるアステイを一瞥して、ふたたび鋼に視線を移そうとして、

「勝手に、話を、終わらせるな……」

ボロボロになりながらも立ち上がるアステイに、わずかに眉をひそめた。

「もう、そちらが勝つ、手段、など、ない。最初、から、徒労。

それと、も、わたしに、勝つ、手段が、あるいは、わたしに、勝る、大義、が、あるの、か？」

「大義なんて、ない。そして、そんなもの、必要ない」

アステイは鋼という人物に思いを馳せる。

彼女は鋼のことを尊敬し、敬愛し、あるいは恋慕しているという自覚はあるが、それがイコール彼が素晴らしい人間であることを意味しないのは理解している。

むしろ、感謝や憧憬、思慕の情というフィルターを抜きに彼を見れば、確かにクロニヤの言う通りの人物造形に行き着く。

それでもアステイは、剣を取る。

「あいつは、ハガネは、たしかに先のことなんて何も考えていないし、面倒なことは愛想笑いで全部受け流そうとして、楽をするためなら平気で人を騙す、最低な奴で……」

「なぜ、あきらめな、い？」

もうその剣にはさつきまでの勢いはなくて、すぐに弾き返されるのに。

「自分では一番常識人で気が回ると思っているけど、実際には人の気持ちなんで全然読み取れなくて、ツツコミを入れる時だけやたらと元気になる、おかしい男で……」

「なぜ、分からない、い？」

なのに諦め切れず、ふらふらと、それでもクロニヤをしつかり見据えて、起き上がる。

「おまけにあいつと一緒にいると、バカなことにはばかり巻き込まれる。この短い付き合いの中でも一体何度、こいつをぶん殴ってやりたいと思ったことが分からない。」

聖人の器もなければ英雄の気概もない。おちゃらけた男だ。

だが、だがしかし、貴様も……！」

「なぜ、お前は……」

その様子に、クロニヤも戸惑いを見せる。

そこにたたみかけるように、アステイは進む。

伝えるために、気付かせるために。

「貴様も、そんなあいつを見て、笑っていたではないか!!」
「笑って、ない」

アステイの剣はまたもや弾かれて、しかしクロニヤに先程までの
余裕も無関心もない。

そこには彼女がクロニヤとして過ごした時と同じような、消しきれない感情が、動揺と逡巡の色がある。

「あいつと共に過ごして、楽しんで、いたではないかあ!!」
「楽しんで、なんか、いない!」

今度の一撃に容赦はなかった。
アステイはあつけなく吹き飛んで、地面を転がる。

「そうだ。それで、いい」
だがそれは、クロニヤが感情を見せたということ。
アステイの剣が、言葉が、クロニヤにまで届いたという証でもある。

「だから少なくとも、徒労では、ない」

しかしクロニヤも、自身にわずかなりとも変化を起こしたアステイを、ただ座して見ている訳ではない。

「さすがに、頑丈」
初めて、かもしれない。クロニヤの視線が、きちんとアステイを『敵』として捉え始める。

それを敏感に感じ取ったアステイは、

「頭に血が上って、もう一つの切り札をすっかり忘れていた」
懐から丸薬を取り出して、即座に飲み下す。
「これで私は、『無敵』の戦士だ」

それは、かつて三個あった内の最後の一個。巨竜戦で使い切らな
かった『無敵の丸薬』だ。

これを使って二十秒の間は、いかなる手段を用いても、服用者の
HPやMPを減らすことはできない。

「関係、ない」

だが、クロニヤの攻撃はその『無敵』をも貫く。

不可視の打撃がアステイを襲い、彼女はよろけ、吹き飛ばされ、
呼吸を阻害され、地面に打ち倒される。

しかも、信じがたいことに、

「なぜ、痛みがある？ ダメージを、負う？」

二十秒間、決して傷つくことのないはずの肉体が、損傷を負って
いた。

「システム外能力^{スキル}」

「なに？」

「わたし、の、力は、異界の、もの。この世界の、理に依らない、
能力^{ちから}。」

それ、は、この世界の法^{しゅだん}、では、防げ、ない
アステイは、戦慄する。

その時、初めて本当に、このクロニヤと名付けられた少女が『こ
の世界のモノ』ではないことに気付かされた。

圧倒的に、異質。

(私、では、勝てないのか…?)
絶望が、アステイを襲う。

「そろ、そ、ろ。だまって、もら、う」

トドメを刺そうと言っのか、身動きできないアステイに、クロニヤはその手を向けて、

カチャン！

その瞬間、クロニヤの後ろから高速で飛来した何かが、クロニヤの能力によって弾かれた。

地面に落ちたのは、小型の投げナイフだった。

「あなた、まで、無益な、真似を？」

アステイもナイフを投げた人物を求めて顔を上げる。
そこにいたのは、

「ミレイユ！」

「んー。完全に裏を取ったと思っただけど」

ナイフを片手に、ぽりぽりと頬をかく暗殺者の少女の姿だった。

クロニヤは新たな襲撃者に向き直る。

アステイに背を向けたのは、アステイが何もできないと踏んだというより、自分の防御能力への絶対的な信頼からだろう。

「あなた、に、気付いては、なかつ、た。でも、無駄」

「ふうん？」

「わた、しの、防御、は、自動的。

体力気力が、十全な、ら、睡眠中でも、悪意を、はばむ」

「つまりその防御を破りたいなら、疲れさせるか、傷でも負わせて弱らせるってワケね。」

「分かりやすい攻略法ありがと」

絶望的とも言える情報に、ミレイユは不敵な笑みを返す。

「ミレイユ？ 一体、今まで何を？」

アステイの言葉に、ミレイユは渋い顔をした。

「何を、ってね。ま、護衛が仕事だし、こいつ何とかしたかったんだけど、アステイ強すぎて割って入る隙もないしさ。」

アステイが勝てないのに、あたし程度が正面切って戦っても勝てるはずないし」

「それは、確かにそうだが、しかし…！」

「それにまあ、すっかり手遅れってワケでもないみたいだし。」

ほら、あいつ、まだ生きてるみたいだよ」

悠然と構えつつ、クロニヤから視線は外さないまま、ミレイユは指で鋼を示した。

アステイの声かにわかに喜色を帯びる。

「ハガネが！？ あ、いや、ハガネ殿が？」

「うん。で、二人が戦っている間に一応こっさり回復とかしてみたけど、効かないんだよね。これがまた」

肩をすくめるミレイユに、クロニヤが回答する。

「攻撃、まだ、してい、る。」

むしろ、これだけ、やって、死なない、の、が、異常」

その言葉に、アステイはハツとして鋼を見た。

あの瞬間、鋼の胸を貫いた攻撃は、いまだに続いているのだ。

逆に言えば、胸を貫かれ続けてなお、鋼は生き永らえ続けている

ということだが。

そして、

「そう、いう、こと、だ……」

戦場に、少女たちが待ち望んだ声が響く。

「ハガネ！」

「あんた……」

「……………」

その少年、鋼は、はいつくばったまま、それでも自らの敵、クロニヤと名付けた異世界の勇者から目を逸らさず、その口を開く。

「ぼくが、寝てるのを、いいことに、ずいぶ、がふっ！」

やっぱりしゃべるのは無茶だったのか、言葉と一緒に血まで吐いた。

「ハガネ！」

アステイが叫ぶが、それでも鋼は話すのをやめない。

「ずいぶん、好き勝手、言ってくれた、な！ ……二人とも！」

まさに血と共に吐かれた言葉には、抑え切れない強い激情がこもっている、ように聞こえた。

だが、『二人とも』という言葉に、他二人より少し冷静なミレイ

ユが首をひねった。

鋼は血反吐を吐きながらも、それでもどうしても言わなければならない言葉を口にするように、顔を上げ、口を開く。

「異世界の勇者、地球型箱庭世界、絶対防御領域、白夜の静謐、
『新神類育成計画』、能力、異界の神、『絶対的隔意』、『無敵』の
戦士、徒勞、『果て無き放浪者』、世界滅亡、システム外能力、救
世主、真神。」

「こんな魅惑の厨二チームばかりじゃ……」

自らの体など取るに足りない問題だとばかりに、鋼は大きく息を
吸い、

「ツッコミが、追いつかないじゃないかああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああがぶうえほはあ！！！！！！！！」

大声を出しすぎて、最後に派手に吐血して倒れた。

まさに鋼が生命を削って放った魂の叫びに、
年齢も性格も、敵味方すら違う三人の少女の声が、この時ばかり
は重なった。

「「「……はあ？」「「」

こうして。敵味方双方の涙が出そうなくらい冷たい視線の中
で、結城 鋼の大逆転劇は始まったのだった。

第二十八章 その左手には神が宿る

(いったあああああいいいいいぞおおおおおおお！！)
胸を貫かれて地面に倒れ伏しながら、鋼はまだ生きていた。

胸の中心に、異物感がある。

きつと自分の様子を克明に描写したらR15指定は確定だろうと
いうくらいには重体だという確信がある。いや、この胸の傷は、致命傷、と言ってもいいかもしれない。

それなのに生きているのは、たぶん毒のせいだ。毒のステータス異常がHPを回復し続けてるせいで、何とか延命できているんだろう。

そう鋼は判断していた。

むしろ問題は、

(いたいたいいたいたいすぎるううううう！！！)

胸の辺りからビンビンに感じる痛みの波である。

テレビや漫画のヒーローとは違って、普通の特に訓練も受けてないような一般人は、銃で撃たれたり骨折の一つでもすれば痛みで悶絶して敵と戦うどころじゃなくなるし、盛大に血を吹き出したら失血のショック症状で気を失う。

そして今、大体その両方の状況を体験している鋼が、曲がりなりにも一応正気を保っているのは、これはもうすごいことなのではないかと自分で思っていた。

とにかくこの痛みから気を逸らさなければならぬ。

そして、そんな時のための特效薬が鋼にはあった。

【で、ではここで小話を一つ】

(どんとこいー)

満を持して、シロニヤ渾身のネタが鋼に炸裂する。

【と、となりの扉に、かきねが出来たんだってー。

へー、かっこいいー】

(……………)

【……………】

(お前には、ツッコミすらも生ぬるい！！)

【いまだかつてないダメ出しじゃと！？】

絶対にすべるだろうと予想はしていたが、鋼の予想すら軽くぶちぎるすべりっぷりだった。

だけど、おかげで、

(だいぶ、気がまぎれた。ありがとう)

【え？ こんなんでいいのの？】

シロニヤになごまされ、癒されたせいなのか、あるいは痛み慣れて来たのか、鋼はさっきほどの激痛を感じなくなっていた。

最後になるかもしれない機会だ。その気持ちを素直に伝える。

(ああ。シロニヤは最高の仕事してくれたよ)

【な、なんじゃよ急にほめたりして……。

いつぞやの死亡フラグみたいで気持ち悪いのじゃ！
別にこのくらいいつでも……】

明らかに照れた様子で、シロニヤが何か言おうとして（鋼の予想では明らかにデレ発言）、しかしその時、空耳だろうか、

【シロニヤーン！ つづきー！】

なんていうシロニヤじゃない女の子の声が聞こえた気がして、

【す、すまんのじゃ！ またのー！】

シロニヤの気配は遠ざかっていった。

（これ、なら、何とか、やれる……か？）

気がまぎれたせい、痛みは驚くほど気にならなくなっていた。

なんとなくイカサマのおいもしたが、まあ我が身に宿るタレントにいちいち嘆いたり驚いたりしてもキリがない。

脳内麻薬がばしゃばしゃ出まくってる可能性だって否定できないし、と自分をごまかし、鋼はあまり気にしないことにする。

（とにかく状況把握！）

と顔を上げた鋼の目に飛び込んできたのは、

「おろ？」

思わぬ至近距離で驚いたように目を見開いた、

（ミ、レイユ？）

アサシンの少女の顔だった。

「あの、さ。もしかしなくても、見えてる、よね」

先に我に返ったミレイユが、おそろおそろ、みたいに聞いてきた声を出そうとして、代わりに血が出そうになり、あわてる。

「あ、声出さなくていいよ。一応読唇術とか覚えてるからそれを察したのか、ミレイユがありがたい提案をしてくれる。鋼は無言でうなずいた。

『なんで、こっくに？』

「えーと、な・ん・で・こ・こ・に、だね？

まあ、そりゃあ仕事しに来たというか、あんたを助けようと思っ
てこっそりやってきたんだけど」

『こっそり？』

鋼は首をかしげる。

「やー。こっに見えて、隠形おんがたというかハイドというか、とにかく人に見つからないようにしてるからねえ。

というか、あんたに何でこっちが見えてるのか気になるところか
も」

『え？ いや、普通に見えてるんだけど？』

「普通、普通にかあ。あたしの十数年の修行も、普通に見られちゃ
浮かばれないね。しかも、別に『発見』してる訳じゃないみたいだ
し。

それもしかしてタレント？」

『……かも』

どうも、ミレイユは他二人が激しいバトルを繰り広げている隙を
ついて、鋼を助けに来てくれたらしい。

『あー、それはともかく、何だか胸の辺りに違和感あるんだけど…』

…

「ん？ まあ、聞かない方がいいんじゃないかな？

昼間のとんかつを戻したくなければ」

『……そう』

想像はしていたが、やつぱり『見せられないよ』状態のようだ。ただ、鋼はとんかつを一切れも食べられなかったので、戻す可能性はゼロだということだけは主張しておきたい。

「で、あたしとしてはさっさと回復して逃げちゃいたいんだけど」
『あ、たぶんそれ無駄だよ。ただのダメージなら、毒の効果で回復してるはずだし』

「なにそれ、継続ダメージってこと？ 厄介だなあ……」
念のためミレイユが応急処置を試してみたが、ほとんど効果はなかった。

「と、なると、あいつを何とかしなきゃいけないワケか」
『何とか、なるかな……？』

表面上のんきそうな二人の近くで、今もアステイとクロニヤは超人バトルを繰り広げている。

「こつち見えてないみたいだし、隙ついて一撃入れれば殺せるかも」
『いや、殺しちゃうのはまずいでしょ』
言いながら、鋼はアステイたちをあらためて見る。

あいかわらず、自分の正気を疑いたくなるような激戦が続いていた。

基本はアステイが叫びながら斬りかかって、クロニヤが弾く。その繰り返しだ。

ついでに、何か色々叫んだり動揺したりやつぱり叫んだりしているが、内容を簡潔に要約するならこんな感じだろうか。

アス「くそーきさまーなぜハガネをうらぎったー！」
クロ「ごめーんわたしだっただけどせいぎのためにはしかた

なかったのー！」

最高潮に盛り上がったテンションで、今にもどつちかが泣き出しそうな雰囲気だが、鋼は今一つ乗り切れないでいた。

アステイが自分の死に逆上するのはまだ分からなくもないのだが、クロニヤが自分を殺したことに強い罪悪感を持っていることにちよつと違和感なのだ。

（会ってたぶん二時間くらいしか経ってないんだし、裏切ったってほど親しくなかったと思うんだけどなあ……）

実際鋼は、ハメられたなとは思っても、裏切られたとは感じていない。

さすが異世界の勇者、ただ一回食事をしただけの人相手にものすごい感情移入度である。

『二人とも、いい人だよなー』

しみじみとそう思う。

「あんた、あんまりいい人って感じしないよね」

苦笑しながらつぶやかれた。

『そりゃ、悪かった』

「いや、そういう感じじゃないだけであんたはいい人だって。自分を殺しに来た相手を殺すのためらうくらいだし。ま、甘すぎるとは思うけど」

『失礼な、僕は微塵もためらってなんかいないぞ』

「へえ？」

『もうとつくに殺さないって決断してる』

「……ふうん？」

ミレイユの目が、鋭く細くなった。

たぶん、危険な兆候だった。

「でもさ。いいの？ あの子、この世界を滅ぼす、みたいなこと言ってるけど？」

「ここでその子を生かした甘さが、後でもっとたくさんの人を殺すかもしれないよ？」

「冗談めかしていても、ミレイユの目は本気の色をたたえていた。返答次第では殺される。そんなことを考えてしまうほどに。」

『いや、クロニヤは世界を救う人を殺そうとしているだけで、世界を滅ぼそうとはしてないし、そもそもそんなことはできない』

「できない？ どうして？」

「ここが一つの正念場、鋼は考えながら口を動かす。」

『あつちでアステイは頑張ってるけど、見るからに実力差がある。たぶん本気を出せばアステイなんて三秒でミンチにできるのに、殺したくないから今もあややってじゃれあって話まで聞いてるんだ。それに何より、僕が死んでないのは気付いてるみたいだし、後一押しで殺せるのにまだためらってる。』

「やっぱり勇者だしさ。たぶん大義のためでも他人にひどいことできななんだよ。」

断言する。あれは中盤辺りで「今回だけですよ」とか何とか言いながら共闘してなし崩しに仲間になって、魔王との最終決戦とかにはちゃっかり味方として隣にいる感じのキャラだね』

「……………ふうむ」

「ミレイユはしばらく悩むようなそぶりをみせたが、」

「ま、納得しとこっか」

うなずいて、明るい顔を見せた。

鋼もほっと息をつく。ついた拍子に喀血して、

「わっ！ きたなっ！」

飛び出した血を避けようとミレイユが飛びのいた。

……死にかけてる相手に対する遠慮とかないんだろつか、と鋼はちよっと思つた。

ミレイユは何食わぬ顔で戻ってくると、指を立てる。

「ま、向こうもあんまり時間はなさそうだし、ささっと補足。

今のあいつ、クロニヤは確かに情に流されそうな甘い奴だけど、あたしがギルドんの控室で会つた時は機械みたいな奴で、正義のため殺人し、とか平気でやりそうに見えた」

早口でそこまでしゃべつて、息継ぎをしてまたまくしたてる。

「それがあなたに会つて雰囲気が変わつて、食事の時には普通の子供くらいに見えた。あたしにもそこんとこよく分からないけど、名前つけられたり、あなたとかあのバカ騎士とかがアホやつたのが本当に楽しくて、『勇者』とかになる前の感情とか人らしさとか、そういうのが少し戻ってきたんじゃないかな？

だから……」

ミレイユの真摯な瞳が、鋼を射抜く。

「あんたがあいつを生かしたいなら、勇者としてではなく、クロニヤとしてのあいつを倒さなきゃならない。

……出来る？」

その質問に対する鋼の返答は、会話の前から決まっていた。

「らく、しょー」

そこだけは苦しくても肉声で答えて、親指を立てる。

殺伐とした殺し合いで浮かべるような表情ではなく、ただの等身大の人間の、滑った馬鹿野郎を見る呆れた視線が、心地よかったのだ。

……半分くらいは負け惜しみだけれども。

ちなみに適当にしか聞いていないクロニヤたちの厨二ワードを全てをきちんと言えたのは、『瞬間記憶復元』のタレントのおかげだ。役に立つじゃないか『瞬間記憶復元』。

そして、ようやく我に返ったクロニヤが、鋼に問いかける。

「なぜ…。なぜ、この、状況、で、そ、んなこと、が、言える？」

仲間はみんなクロニヤの能力に手も足も出なくて、鋼自身は瀕死の重傷。

だが、

「死に瀕してなお、ジョークを言えるのが真の粹人だ！」

……と僕は言ったという

「あんたが言ったのかよ……」

ミレイユが突っ込んでくれた。でも、

「嘘だった。言ったことない」

「言っていないのかよ！」

二段オチにしっかりついてくるミレイユ。心強い。

「ゆーき、はがね。あなたに、恨み、は、ない。

でも、あな、たの、無軌道さ、それ、に、見合わない、力、は、世界、のために、なら、ない。

あな、たに、英雄の、器は……」

「なら、いいじゃん」

クロニヤの言葉をさえぎる。

「ごふっ、と血を吐いて、のどから血抜きをしてから、告げる。

「世界救うから、殺す、ワケだろ？」

英雄の器じゃない、なら、世界滅びるんだから、いいじゃん」

鋼の言葉に、クロニヤがきよとん、とする。

アステイも、あ、そういうえば、みたいな顔をした。

「け、けれど、型に、はまらない、力は、世界を、ほろびから、救う可能性も……」

「世界を、救うようなら、それって、いいことじゃないか。

僕の力は、ほかの世界にも、きつと、こふっ！ プラスになる」
詭弁ではあるのだが、一定の説得力を持っていた。

アステイなどはその通りじゃないか、という顔で、鋼を尊敬のまなざしで見っていた。アホの子なのがバレるぞと忠告したくなった。

実際ここまでは、前座。

あんまり時間がないので鋼も迷ったが、相手を揺さぶれば上等と思っただけなので、よしとする。

「……ま、君がどう考えようが、関係ないんだけど、ね」
「な、に？」

その言葉に……。

鋼の敵意を読み取って、空気が変わる。クロニヤから、勇者へと。それは、本来であればまずいこと。

だが鋼は、そんなものをブツ飛ばすつもりでいた。

「僕はたしかに、『英雄』じゃ、ないし、そんなの、なりたくも、ない、けど……」

やはり胸に穴をあけたまましゃべるのは無理があったのか、だん

だん話すのがきつくなる。だが、ここでやめるワケにはいかない。
鋼はまさに死力を振り絞る。

「ただ、一つだけ、げふっげふっ！ 明らかかな、ことがごふっ！
ある」

鋼は、盛大に血をまき散らしながら、決定的な言葉を、告げる。

「予言、しよう」

それは、宣戦布告。そして、勝利の宣言。
鋼は、

「君はこれから、ぼくに負けぼっぱああ！」

「ぼくに負けぼっぱああ……って、なに？」

大事な台詞の途中で吐血したせいで、大変かつこ悪いことになっ
た。

「君は、僕に負けるって、言ったげばあ、んだよ！」

どうも吐血癖がついてしまったのを酷使して、鋼は何とかその
台詞を言い切った。

「しかも！！」

君を負か、ぐふっ、すのは、厨二病な名前がついた必殺技でも、
武器称号が2ヶタあるような超絶武器でも、超大規模、がふう！

魔法でも、ましてや謀略、でも、ない」
そう、ここからが重要なところ。

「食べ物を取り合いで、騒ぎ立てたり、頭を、なでられて、かおを、赤く、するような、かふ！ ただの、ふつつの、日常」
そしてもう一度、今度こそ鋼は高らかに、宣言する。

「ただの日常パートに、君はげっふう！！ ……負ける！！」

鋼の言葉を聞いても、クロニヤは揺らがなかった。

「ばかな、仮定。信じる、根拠が、ない」
だが、

「信じなくて、いい！」
それはもう、どうでもいいのだ。
だってそれはすぐ、後ほんの数秒で、実現するから。

「がふ、アステイ！」

今まで棒立ちだったアステイに、鋼は指示をする。

「六秒後、クロニヤに斬りかけろ！」

「…！？ ……承知！！」
アステイは、何も分かっていないはずなのに、うなずいてくれた。
そして、

「五、四、三…がぼえ！ 二、一、今だ！」

鋼のカウントがなくなると同時に、アステイがクロニヤへと飛び込んだ。

それは、戦闘の初めの頃と比べれば、明らかに精彩を欠く動きと斬撃。

しかし、

「当たっ、た？」

クロニヤがとっさに回避したため、服をかすっただけだが、その剣はクロニヤまで届いていた。

「あの瞬間、から、ジャスト十分！ 君、の、負けだ、クロニヤ！」

勝利を確信した、鋼の声。

確かに、誰がどう見ても、クロニヤには何かが起こっていた。

誰にも全く傷をつけられなかったはずのクロニヤが、脂汗をかき、自分の体を抱くようにして、潤んだ目で体を二つ折りにして、うずくまっている。

そして彼女は、あまりにも切実な表情で、彼女の敗北を決定づける、致命的な言葉を、言った。

「……おなか、いたい」

そうしてそれが、アステイが向こう数年に渡って鋼を責め続けることになる、英雄と勇者の対決の、最低最悪な幕切れの始まりだった。

効果なんて、ひどい、もんでね。僕は、こんなスキル、絶対役に立たない、と、思ってた、よ。

……今日、この瞬間、までは

「ひだり、て？ ……まさ、か!？」

あることに気付いて、クロニヤは汗の浮かぶ顔をさらに蒼白にした。

「勘が、いいね。そう、『神の左手』の効果は、『僕が左手の親指で頭頂部にさわると、十分後にお腹を壊す』ってものなんだ。

あの時さんざん、謝ったけど、もう一度、謝って、おくよ」

そして、鋼は、最高の笑顔でこう謝罪した。

「悪気は、なかったん、だけどさ。

あの時、つい『左手』で頭をなでちゃって、ごめんね」

その言葉に、クロニヤの顔からすうーっと血の気が引いていく。

「あなた、という、人は……!」

無表情だったはずのその顔には、たしかに怒りと、それから羞恥の感情が浮かんでいた。

ちなみに『その瞬間』から正確に十分が計れたのも、昨日の朝にシロニヤに教えられたタレントの効果だった。

世の中に無駄なものなんて何も無いんだ、とか声高に宣言したい気分になる。

「そ、そうだ!」

クロニヤが何か気付いたように言って、アイテムボックスから小

瓶を取り出して、すぐに飲む。

「効果、ない……」

その小瓶の中身は、全ての状態異常を治す万能薬であったが、腹痛という状態異常と無関係なものに対しては何の効果もなかった。

「無駄。いや、君風に言えば、徒労、だよ。」

君、にはもはや、二つの選択肢、しかない」

小瓶を手に呆然とするクロニヤに、鋼は現実を突きつける。

「おとなしく、僕らに、降伏、するか。あるいは……」

「あるいは、は？」

そこにあるかもしれない一縷の希望にすがって、クロニヤは鋼を見る。

そんなクロニヤに対して、鋼はあくまでもにこやかに、

「漏らしながら、戦うか」

死の宣告を、たたきつけた。

そんな無慈悲な現実に、

「や、だぁぁ！」

無表情無感動だったはずの異世界勇者は、かぼそい声で泣いたのだった。

「よし、アステイ、確保！」

「え？ あ、あぁ」

戸惑いながらも、アステイがクロニヤの腕をつかんで拘束した。

「こ、この、程度！」

クロニヤは能力を使って対抗しようとするが、ベストとは両極端にあるような今のクロニヤのコンディションでは、悲しいほどの威力しか出ない。

「は、はな、せ！ はな、して、トイレ、行けな……」

半泣きになりながらもがくが、能力なしにクロニヤがアステイの腕力に敵うはずがなかった。

ちよつとかわいそうになったのか、アステイが鋼をうかがうように見るが、

「ダメ、だ。トイレに行きたい、なら、もう僕たちを狙わない、と約束して、もらわないと、な」

鋼は頑として首を縦に振らない。

「なめ、る、な！ この、く、らいで、勇者、が……」

「アステイ。クロニヤは、お腹が、痛い、みたいだ。

ちよつと、さすってあげて

「なっ……！」

完全に余裕を失った顔をするクロニヤ。

まさか騎士様がそんなことしないよね、とほとんど媚びるような目でアステイを見るが、

「私としても、これは本意ではないのだが」

金髪の元騎士は、無慈悲にクロニヤのお腹に手を伸ばした。

「ひっつ！」

元騎士の手がふれた途端、弾かれたように震え、ついで彫像のように硬直するクロニヤ。

だが当然、さわるだけで終わりではなく、アステイの手は何かを

促すように、ゆっくりとそのお腹の上を這いまわる。

「だ、め、や、めえ……く！こ、こん、な、こと、で、わたし、
が、いう！く、屈する、と……」

「アステイ。効果ないみたいだ、から、ちょっと、強めに」

「やめっ……！」

「すまん」

瞬間、クロニヤとアステイの声が交差して、直後、アステイの手
が、クロニヤのお腹をぐつと押す。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ！！」

もはや普通の言葉を話すこともできないのか、壊れたスピーカー
のように断続的に声を出すしかできないクロニヤ。

だが結局、クロニヤはこれにすら耐え切った。

「ぐう、う……」

唇を強く噛み締め、きつく目を閉じて、襲いかかる『波』を堪え
る。

「クロニヤ……？」

鋼が呼びかけても聞こえないほど必死に、クロニヤはその絶望的
な戦いに没頭していた。

「仕方ないな。よく、聞こえてない、みたいだし、ちょっと、耳に

『ふっ』て息を吹きかけて、やってくれ」

「な、なあ。これ以上はさすがに……」

アステイはさすがにかわいそうになっただが、鋼はうなずかない。

「いや、正義の、ためだし」

それは絶対嘘だろう、とアステイでも思うような理由で、続行を
指示。

アステイは仕方なく、その秀麗な顔を目の前の小柄な少女の耳元に寄せ、ふっ、と息を吹き込んだ。

「あふっ！」

すると、ずっと力がこめられていたクロニヤの体が急速に弛緩し、何かから解放されたように、小さくふるる、と震え、

「…あ」

その場に居合わせた全員の脳裏に、やべ、やっちまったか、みたいな危惧が生まれた。

しかし、

「はっ、はっ、はっ！」

一瞬後、荒い息をつくクロニヤ。どつやらギリギリで思いとどまっていたらしい。

これには鋼もほっとした。

そして、

「……った」

「えっ？」

どつどつ、クロニヤの口が、小さく動く。

さらに鋼が待つと、今度ははつきりと鋼の耳に届く音量で、

「わかつ、た。あなた、の、ゆう、とおりに、する」

クロニヤはとうとう、降伏の申し入れをしたのだった。

「よし。じゃあ、もう僕らには、手を出さない、と、はっきり言うて、もらおうか」

「も、もう、手、ださな、い」

蚊の鳴くような声で、追従する。

「襲ってきて、ごめんなさいは？」

「ご、め、んなさい」

屈辱もあるだろうに、クロニヤは従順に頭を下げた。

「あと、とんかつ勝手に食べて、ごめんなさい、は？」

「あ、あれは、どくみ、で」

「アステイ、まだ足りないみたいだから、ちょっと彼女のお腹を…

…

「ご、ごめん、なさい。かってに、とんかつ、ごめ、なさい」

一部滑舌がおかしくなっているが、クロニヤはどこまでも素直だった。

本来なら、これくらいで開放するつもりだったのだが、

「うーん。それだけじゃ足りないな」

想像以上にいい反応なクロニヤに、続行を決定。

「ま、まだ…？」

絶望的な顔をするクロニヤに、

「お願いします、は？」

無慈悲な顔で、言い放つ鋼。

何か鋼の中で変なスイッチが入ってきて、痛みでたどたどしかっ

たしやべりまでなめらかになっていた。

「お、おねがい、します」

「おねがいます、ご主人様は？」

「ご、ごしゅじ…!？」

確実に悪乗りしていた。

「完全に悪役……いや、まさに外道の台詞な気がするけど……」
「ちやつかり傍観する姿勢のミレイユも、ちよつと引き気味だ。」

しかし、ここまで来てクロニヤに拒む選択肢はない。

「お、おねが、いします、ごしゅ、ごしゅ、じんさま……」
「言った。」

だが、さらに攻勢に出る鋼。

「我慢できないんです」

「が、がまん、できない、です」

「トイレにいかせてください」

「トイレ、いかせ、て……」

「もう一回」

「が、まん、できな、です。どう、か、はやく、いか、せて……」

もうクロニヤは苦痛と屈辱で顔色が白くなったり赤くなったり大
変である。

「まあ、そろそろ、いいか」

さすがにアステイの目が怖くなったので、鋼は切り上げることに
した。

「じゃ、これ、外してくれる？」

鋼が自分を指さすと、

「んっ」

クロニヤが何かをして、鋼は自分の胸を圧迫していた何かが消えたことを知る。

おそらく刺さったナイフとかを抜くと血が吹き出ちゃうのと同じ理屈だろう。

急にやばいくらい血が流れ始めた気がしたが、たぶん毒の回復効果で何とかなると見切りをつける。

「アステイ、放して、あけて」

流れる血のせいでふたたびたどしくなった言葉で、クロニヤを拘束していたアステイにそう頼んだ。

「しかし、いいのか？ 彼女が約束を守るという保証は……」

「勇者、だし、信じるよ」

「そこまで、言うなら……」

アステイが手を放す。

クロニヤはくたつとその場に崩れ落ちた。

解放されたクロニヤは、

「やく、そくは、まもる」

ゆっくりと、顔を上げて、鋼を見据え、

「でも、この、うら、みは、わすれ、ない!!」

最後の力で、苦し紛れに手に持った小瓶を投げつけると、

「あ!!」

っという間のスピードで、ピューンと空をすべるように移動して、見えなくなってしまった。

「ふう……」

全てが終わったという安堵感で、アステイは大きく息をつき、「だいぶ恨まれたようだが、あの様子ならすぐの再戦はなさそうだな。」

しかし、今回は肝を冷やした。八ガネ殿も……」
後ろを振り返って、愕然とした。

「が、ふ……」

鋼の顔色が、恐ろしいほど悪くなっていた。

「な！？　そうか、しまった、あの小瓶か」

クロニヤの持っていた小瓶には『状態異常を打ち消す』効果のある薬が入っていた。それがこぼれて、鋼を延命させていた『毒』の状態異常が打ち消されてしまったのだ。

あの状況のクロニヤにそんなことを考える余裕があったとも思えない。おそらくわざとではなかったのだろうが、起こった事態はまさに致命的だった。

「は、八ガネ殿、今、回復魔法を……！」

アステイが駆け寄ろうとするが、それはあまりにも遅すぎた。

鋼の顔は見る間に生気を失っていき、

「た、な……」

最後に鋼の口が動いて、仲間の少女に何かを伝えようとするが、その言葉すら、結局満足な音にならないまま、

「八ガネ、どの？　八ガ、ネ……」

いやあああああああああああああああああああ……！」

結城 鋼は、死んだ。

第二十九・五章 生と死のはじやまで

「おお はがねよ しんでしまうとは なさけない」

「なにやってんの？ シロニヤ」

綱が気が付くと目の前にシロニヤがいた。

だがその綱の淡白な反応にシロニヤは大変ご立腹した。

「な、なんじゃよもー。ひさしぶりの再会じゃろ？

こう、もつとあるじゃろ、なんか、こう！」

「え？ ああ、うん。……ひさしぶり？」

「そうじゃないじゃろ！ もつとこう、

お、シロニヤちゃん、だよな。やっぱかわいいねえ。

うん、写真でもかわいかったけど、実物はもつとかわいいよ。

え？ほんとほんと、オレお世辞とか言わないし。

あ、そうだ。この近くにオレの店あんだけど、寄ってかない？

いやいや、怖くないって、大丈夫。

シロニヤちゃんならすぐ人気者になれるよ。

ほら、友達だってできるし。行こうぜ！

的な何かがあるじゃろ！」

「ねえよ！ 何の勧誘だよ、それ！」

「いや、ほんと、何の勧誘じゃったんじゃろうな、あれ。

ただのオフ会のはずじゃったんじゃが、やっぱり姉様の顔写真を載せたのがまずかったんじゃろうか。

あの時はこわくなって急いで猫化して逃げたんじゃが……」

「ほんと何やってんの、お前!？」

綱は自分の状況も忘れて怒鳴った。

「じゃ、じゃが、ちょっとくらいほめてもバチはあたらんのじゃ。
むしろほめないでバチを当てるのじゃ」

「神様職権乱用だな」

「ただし太鼓の方なのじゃ」

「地味に痛そうだ！」

職権乱用ではなかった。

「ほめると言っても、ちょっと、その服どこで買ったの？ 渋谷？
とか言ってくれるだけでいいのじゃよ？」

「お前の中で渋谷が憧れの街だということは分かった」

「うむ！ ああ夢の街428。いつかあそこに行って、ニュー〇エ
本事件に巻き込まれたり事ある毎に倒壊する109（真ん中は伏字
です）を見るのが夢なんじゃ」

「行っても無理な気はするけど、夢があるっていいことだよな」

「それと、あえてツッコまずにいたんだけど、それ、服、パジャマ
だよな？」

シロニヤが着ていたのは、青い水玉模様の、ひたすらにファンシ
ーかつドリーミーかつ子供服丸出しなパジャマだった。

渋谷発かは知らないが、たぶん違うだろう。

「う、うむ……」

ここでなぜかシロニヤの表情が曇った。

「実は、今ワシの家にお客がいるという話はしたと思うのじゃが、
そいつがもうほんと、鬼なんじゃ」

「お前の近く、鬼多いな」

かくいう鋼も鬼の一人である。

たぶん鬼科鬼目のしりとりに鬼。

「とにかく、そいつから逃れるため、ワシはこれみよがしにパジャマに着替え、三歳児ということを盾にもう眠るのじゃ宣言をして、ようやくここに……」

「あはは。シロニヤが参るなんてめずらしいな」

あんなに鈍感力高いのに、とは鋼の心の中の感想である。

「笑いごとじゃないのじゃ！ あいつめ、ワシのことをシロニヤンシロニヤンと……あ！」

「ど、どうした？」

突然シロニヤが大声を出したので、鋼はビクツとして大声を出しそうになったが、その大声にシロニヤがビクツとして大声を出したらまた鋼がビクツとして大声を……。

とにかく鋼はビクツとしたが大声は出さなかった。

だがシロニヤには、鋼の葛藤も気にならないほどの懸案事項があるらしかった。

「そうじゃった。こんな話をしてる場合じゃないのじゃ！」

実はおぬしに、非常に驚くべき、残念なお知らせをしないではないのじゃ」

「な、なんだよ？」

いつにないシロニヤの鬼気迫る様子に、鋼は鼻白んだ。

「言おうか言うまいか悩んでおったのじゃが、この話をせずに、おぬしと和気藹々と語らうことなど、ワシにはできぬのじゃ。

よいか？ すぐには冷静に受け止められぬかもしれぬが、落ち着いて聞くのじゃぞ？」

「あ、ああ」

神妙な鋼の態度にシロニヤも腹を決め、重い口を開く。

「じ、じつは……実はワシの本当の名前は、シロニヤじゃない、シロナなのじゃー!」

「いや、最初から知ってたよ!」

「なんと!」

びっくりするあまり口を の字にするシロニヤ。昭和のマンガ的演出である。

「さ、さすがじゃな。まさか、見破っておったとは……」

「いや、その、……うん」

そういえばバれてないと思ってたのか、とうろ覚えの記憶を探る鋼である。

「もういつそ、シロニヤってことにすれば?」

「う、うむ?!」

「今さらシロナでもないしさ。いつそ改名するとか」

「それは、しかし、うーむ」

「あ、あのじゃな。おぬしら肉体に縛られる人間や獣と違って、次元を渡り歩く我ら神などの存在は観念に縛られるものじゃからして、誰かの影響で名前を変えるなどというのはその……うむう」

歯切れ悪くも饒舌なシロニヤに首をかしげる鋼。

「で? 結局?」

「……ワシは今日からシロニヤなのじゃ!」

「よし! 神族シロニヤ、コンゴトモヨロシク!」

「それはどっちかというワシの台詞なのじゃ!」

と、名前問題が一段落した後で、

「とうろで、こいごいご」

鋼がここに来てから真つ先に言うべきだった質問をすると、いつもの軽い調子で返事が返ってくる。

「あ、ここはアレじゃ。生と死のはざまの世界」

「そっちの方が重要じゃね!？」

と一応は鋼も驚いてみたが、実は結構想定内の範囲内だった。

(やっぱり僕、完全に死んでた感じあつたしなあ)

後はただ、最期の言葉がきちんと届いていることを祈るばかりである。

「で、シロニヤはいつたいどうしてここにいるんだ？」

とりあえず考えるのは後回しにすることにして、鋼はとりあえずシロニヤに向き直った。

「うむ。ここに呼びつけたのは他でもない。おぬしとの約束を、果たしに来たのじゃ」

「約束？」

首をひねる鋼に、大きな何かと、小さな何かが渡される。

「ほれ。メガドオイブとワンダースンカラーじゃ」

「まだ生きてたんだ!？ そんな地味な伏線!！」

「本当は墓に備えるつもりじゃったんじゃが、こっちの方がいいじゃろ?」

「ん、んん、まあ……」

「ま、メガド イブはもう壊れてるんじゃが」

「壊れてんのかよ!！」

「う、うむ。やっぱり百円市で買ったのはおかしかったのじゃ」

「そして百円だったのかよ!！」

「あ、税抜なので百五円じゃな」

「どうでもいいいわそんなこと! 何で五円で勝ち誇ってるんだよ!

「？」

「そして一方、ワンダース ンカラーじゃが」

「何事もなかったようにスルーかよ!」

「これは美品の名に恥じぬ保存状態じゃな。……百円にしては」

「こつちも百円市かあああああ!」

最後に鋼が一応叫んでオチがついたところで、ちよっとプレイしてみる流れになった。

「で、魔界塔士とロマンシング、どつちがいいのじゃ?」

「すでにS a ・ G 一択!」

「ふふ。それがワシの性さがなんじゃよ」

「だれうま!」

鋼はもはや完全に修学旅行の夜のテンションだった。

「冗談じゃよ。たしかに驚異の白鳥色には興味があるんじゃが、今日の目的は別にあるのじゃ!」

そう言ってシロニヤが出したのは、

「例の狩りゲーム!」

しかもテレビ画面HD画質のド迫力バージョンである。

「せつかくおぬしが死んでフリーになったみたいじゃし、銀竜倒すの手伝ってほしくての。」

ワシは涙を飲んで不慣れなテレビ画面でやるから、おぬしはそっちの携帯機を使うのじゃぞ?」

「いや、今さらつと死んだって言ったよな!」

と、それ自体も聞き捨てならなかったのだが、そう言っつてシロニヤが渡してきた携帯ゲーム機を見て、

「っつて、シヨッキングレット!」

鋼はショッキングした。
ちなみに実際にはラディアントというらしい。

だが、その直後、

「こ、コウ!?!」

なんと、鋼の体が透け始めたのだ。

「ごめん。もう、時間みたいだ……」

鋼は透き通って後ろが見えるようになった手で、ぽりぽりと頭をかく。

「な、なんじゃと!?! そんな……こんな、早く!」

狼狽するシロニヤ。だが、鋼の体の透過はどんどん進んでいく。もう時間がないのは、誰の目にも明らかだった。

「僕も、さ。ひさしぶりにシロニヤに会えて、うれしかったよ」

鋼の穏やかな、あまりに穏やかな言葉にシロニヤは涙を撒き散らしながら叫んだ。

「いやじゃ! いやなのじゃ! おぬしが、おぬしがいなくなったら……」

ワシは、ワシはどうやって……、
銀竜を倒せばいいのじゃあああああああ!」

「銀竜の頭の近くで大きなタルの爆弾使つと頭部を破壊できて便利らしいよ」

「OKなのじゃ！」

切り替えの早い神様だった。

こうして、鋼とシロニヤの久方ぶりの逢瀬？はあわたたしくもこうして幕を閉じた。

ただ、

「あ、連コン返してもらつたの忘れたのじゃ」

シロニヤの小さな胸に、小さなしこりを残して……。

第三十章 彼女の『最悪』の幕切れ

「ヒール！ ヒール！ ヒール！」

鋼にとりすがったアステイが必死で回復魔法を唱えるが、それは全て不発だった。魔法は結実するものの、それが効果を発揮しないのだ。

それはつまり、鋼がもう完全に死んでいることを示していた。

それでも鬼気迫る表情で必死にヒールを唱え続けるアステイだったが、その後ろから接近する人物がいた。

「あーはいはい。ちよつとどいて」

そんな調子でアステイを押しのとけると、近づいてきた人物、ミレイユは手早く鋼の首筋に手を当てる。

「うん。こりゃ完璧脈ないわ」

そうやって確認を済ませると、

「じゃ、いつちよやりますか」

そう言って、懐から短剣を取り出す。

「ま、待て！ 貴様、一体何を、」

「お仕事、だよ」

アステイの制止のかいもなく、ミレイユの短剣は、あっさりと鋼の体に吸い込まれていった。

「やめる！ まさか、貴様もそうだったのか？！

寄ってたかって、ハガネを殺そうと！」

「なに言ってるの？ もう、死んでるじゃん」

「貴、様ああああ！」

挑発的なミレイユの態度が、アステイの逆鱗に触れた。

だが、ミレイユはその焼け付くような視線を正面から受け止める。
「いいよ。三十秒だけ、付き合っただけよ」

「ふざけるな！ 貴様が三十を数える前に、斬り伏せる！」

次の瞬間、抜き放たれたアステイの剣と、ミレイユの短剣が、ぶつかった。

疲労で動きが鈍っているとはいえ、アステイの放つ苛烈な斬撃の嵐を、

「よっ、とっ、たっ！」

ミレイユは軽い掛け声でいなして、避けて、逸らして、躲して、一撃もかすらせない。

「この、ちよこ、まかとお！」

それに苛立ったアステイが大ぶりの一撃を見せて隙ができると、
「ほい！」

すかさず袖に仕込んだ投げナイフで反撃する。

「こんなもの！」

アステイはさすがの反射神経で回避。ナイフはかすかにアステイの足をかすっただけで地面に落ちるが、

「はい。おしまい。三十秒もかからなかったね」

それで充分だった。

「何を世迷言を！ ま、だ、わたし、は…？」

アステイの身体がくっつくぞおれる。

「麻痺毒。即効性。切れるのも早いけど」

面白くもなさそうに、ミレイユが種明かしをする。

「あなたは強いけど、それだけ。視野が狭いし、すぐ頭に血が昇る。」

今の一件だつて、あたしに斬りかかってくるのは最悪、ヒールを唱えるのだつて下策。本当に彼を救いたいと思うなら、せめて蘇生魔法の使い手を探しに教会に走るべきだった」

「!? いる、のか、この街に。蘇生魔法の使い手が……」

アステイが驚くのも無理はない。蘇生魔法は一部の人間にしか使えない魔法で、大きな街の大きな神殿に一人か二人、いるかないかといったところだからだ。

「いるよ。戦神の大司祭ミスレイ様は、十四歳の時に蘇生魔法を修められたつて話」

「だったら、今から……」

「もう遅い」

動かない体で浮足立つアステイを、ミレイユは冷徹な声で制する。

「ミスレイ様にはもう式神を飛ばしておいたけど、蘇生魔法が使えるのは死後数分だけ。クロニヤはそこまで考えてあたしたちをここまで誘導したみたいだし、もう間に合わない」

「そ、んな……」

「それに、もうそんな必要もないしね」

そう言い放つて、ミレイユが後ろを振り返ると、そこには、

「じほつ、ごほ、ごほ！ あー、死ぬかと思つたあ……」

せき込みながらも起き上がる、鋼の姿があった。

「は、ハガネ!? 一体、どういう……」

アステイは混乱するが、その顔にさっきまでの絶望はない。しかし鋼はアステイを手で制して、ミレイユに頼み込む。

「その前に、ミレイユ。ちょっと僕に毒かけて。まだ傷が完治してなくてさ」

「……そんなこと頼まれたの初めてだけど。はい」

「おお、元気になってきた!」

毒を受けた鋼の傷が、見る見るうちに回復していく。

「そ、それで、これはどういう!?!」

なおも状況がつかめないアステイに、ミレイユがため息交じりで説明する。

「アステイには見えてなかったみたいだけど、さっきまでの三十秒、彼には死神が憑いてたの。あの短剣を突きつけた時に、タナトスコールを使ったのよ」

「タナトスコール? あれはたしか、即死技では?」

「毒でHPが回復するなら、即死で蘇生くらいするんじゃないかってのが使った理由。実際生き返って、あたしもびっくりだけど」

ミレイユは肩をすくめた。

「指示したのは彼よ。死ぬ直前、彼が何か言ったでしょ。あれがそう」

「し、しかし、私には何も……」

「読唇術が使えるのよ、あたし。だから彼は、あたしに向かって口を動かした。たとえ声が出なくても、メッセージが伝わるように」

「そ、んなことが……」

アステイは呆然とつぶやいた。

「……まったく」

一方、ミレイユは不満を隠さなかった。

実際冷静にこの場を見ている第三者でもいれば、ここで死神が登場するだろうというのは気付けただろうとミレイユは踏んでいる。それだけに、アステイの察しの悪さは苛立たしくもあった。その苛立ちの半分が、護衛対象をみすみす死なせた自分のふがいなさにあると、分かつてはいても。

「まーまー。とりあえず無事だったからよかったなっただけで。僕もそんなことで本当に生き返るとは思ってたけど。何でもやってみるもんだな……」
そしてなぜか、一度死んだ当事者の鋼が、一番能天気だった。

しかしさすがに、鋼の表情も明るくはない。
「だけど、やっぱりあの勇者が言ってたことも一理あるかもな」
めずらしく沈痛な表情で、何かを思い知るように、ゆっくりと話す。

「こんなぼんぼんぼん死んだり生き返ったり、これじゃ、命が軽いなんて言われるのも少し分か……」

「ふざけるな!!」

だがその言葉を、アステイの声がさえぎった。

「命が、軽いなどと言うな!」
麻痺毒の抜けきらない体で、よろよると鋼の方へ歩いていく。

「あ、アステイ?」

驚く鋼に、今にもぶつかりかねないほど、近付いて、

「私が、私がお前が刺されたのを見て、どれだけ心配したか。お前が死んでしまったのを見て、どれだけ悲しかったか。なのに、お前は、お前はそんな……」

後はもう、言葉にならなかった。
アステイは体ごと鋼にぶつかっていき、その胸に顔をうずめる。
鋼の胸の中から、押し殺した嗚咽が聞こえた。

目線だけで鋼はミレイユに助けを求めたが、ミレイユはただ面白そうに二人を眺めてにやにや笑っているだけ。助けてくれるつもりは毛頭ないらしい。

「悪かったよ、アステイ」

鋼は観念して、アステイの小さい体をぎこちなく胸の中に抱き寄せる。

「馬鹿だ。貴様は、大馬鹿だ」

涙声のアステイは、まるで年相応の少女のように、甘えるように鋼をなじる。

「悪かった。もう、言わないから……」

「当たり前だ、馬鹿」

鋼は自分の胸の中ですねたようにしゃくりあげるアステイを優しく思いながら、その光り輝くようなアステイの髪を優しく撫でた。

……左手で。

「……あ」

「え？」

ちなみに鋼はこの件でこれから数年、アステイからねちねちと責められ続けることになるのだが、それはまあ先の話である。

第三十章 彼女の『最悪』の幕切れ（後書き）

都合により毎日の更新が困難になったので、これから更新ペースを落としたいと思います。

ここまでお付き合い頂き、ありがとうございました。

第三十一章 過去との再会

とりあえずアステイを先に帰すことにして（どのような理由でそうなったかは、本人の名誉のために伏せさせて頂く）、疲れた体を引きずって、よたよたと鋼たちがギルドの方に向けて歩いていると、

「GYA O O O O O O O O O O U ! ! !」

いきなりご機嫌な吼え声を響かせて、モンスターが鋼にとびかかってきた。

「うあああ！」

突然の大質量に押しつぶされ、鋼は抵抗する間もなく地面に引き倒された。

耳元で聞こえる、はっはっはという獣の荒い息。しかも、それが三つ分。鋼は生きた心地がしない。

「あれ？ このモンスターって……」

鋼を襲ったのは、三つ首の、まるで犬のようなモンスターだ。ということは、鋼だって知っているあの有名モンスターだろう。するともしかして……。

「コウ様！」

ボン、と鋼の上に、青と白の何かが降ってきた。

それは当然、

「ミスレイさん……じゃない!？」

旧知の人物かと思いきや、木の人形に修道服を着せた何かだった。

「ふふふ。まだまだ甘いですよ。金ぴかの人あらため、ゴワゴワの人」

「まだ名前覚えられてなかった!？」

あ、いや、違う! もう騙されませんからね!

さつき名前呼んでましたよね!？」

別方向から現れたミスレイは、あいさつ代わりに早速キツイボケを入れてきた。

かろうじてツッコミでしのぐ鋼。

「それはともかく回復!！」

「それはともかかないけどすごい回復力!」

傷はもとより、こびりついた血や泥などの汚れまできれいになっていく。

「そしてえい!」

一切の迷いもなく、間髪入れずに鋼に飛びついた。

ケルベロス以上の豪快ダイブである。

「ちよ、ちよっとミスレイさん?!」

「あああ。この頬ずりするだけでやすりで削られるような、決して肌にフィットしないゴワゴワ感。癒され……ふわあ」

「あ、あのですね……」

「神の信徒だけに、まさにへヴン状態!！」

「いいのかその発言!？」

鋼は大声でツッコんだ。鋼はツッコミ時にたまに敬語を忘れる。

「も、もうさすがにやめてくださいよ」

見えないはずの聖王の法衣の位置を正確に読み取り顔を寄せるミスレイに、鋼は閉口した。

そういう高能力はもつと重要な場面で発揮してほしいものだし、これはかなりの羞恥プレイである。

「ミスレイ様、あれが大司祭にして最強の……」

ミレイユはミレイユで、何か衝撃を受けているらしく、助けに入ってくれない。心持ち名前の構成要素が似ているせいだろうか。

しかしファンタジー世界の人名に於けるマ行とラ行とア行の使用率は異常だという鋼の持論からすると不思議でも何でもないのだが、そんなことはどうでもいい。

「やはりこの肌触りこそ、至高。

ハッ!? つまりこれこそが神の現身うつしみ？」

と何か頭のわいた感じのことを漏らしているシスターを何とかして欲しいのだ。

ちなみにファンタジー世界の悪役の名前に於けるガ行とダ行の使用率には目を見張るものがあつたりするがやっぱりどうでもいい。

「つて、うおあう!」

されるに任せて放置していると、何かミスレイの手が鋼の服の中をうにうにと動き回り始めた。こそばゆいが、かといって突き飛ばすこともできず、硬直する鋼の体。

そんな中、聖王の法衣に頼ずりをし続けたミスレイの顔は、とうとう鋼の顔の横までやってきて、

「……いけない方。本当に、心配したんですよ」

耳元に何かを囁いたかと思ったら、今までの苦勞が嘘のよう、ミスレイはさつと鋼から離れると立ち上がった。

「あら。やっぱりポロポロになっちゃってますね」

そうつぶやく彼女の手には、いつの間に抜き取ったのか、配達を依頼されたミスレイの手紙がある。

「あ、あの、すみません、それは……」

おふざけとはいえ一応正式な依頼の品だ。さすがに説明しないとマズイだろうと鋼は口を開きかけたが、ミスレイがそれを制する。

「いいえ。皆までおっしゃらなくても分かります。

きちんと役目を果たした道具を、責めたりなんて致しません。

だって、この懐に入れておいた手紙が、あなたの身を凶弾から守ってくれたのですよね？」

「いやいや！ なに一つ分かってないですから！」

あと、この世界にも銃とかあるんだろうか、と鋼は今はどうでもいいことが気にかかった。さっきからどうでもいいことが気にかかりすぎである。

「ふふ。たらららららー」

とか何とか言いながら、ミスレイはこれ見よがしに自分の胸元に手紙をしまい直すと、ケルベロスにまたがった。

「仕事ほっぽって来ちゃいましたから、今日はもう帰ります。

一応目的は果たしましたし」

「あ、ああ。はい」

嵐のような人である。

しかし少しだけ、鋼は名残惜しいとも感じた。

そんな感慨を知ってか知らずか、ミスレイはじつと鋼を見つめて、

言った。

「わたしはもう行きますけど……。これで貸し、百個ですよ」

「いや、一個ですよ!」

水増しが豪快にすぎてさすがに気付いた。

「じゃ、ポチ! 行きますよ!」

言うなりミスレイとケルベロス（ああ見えてメス）はすごい勢いで遠ざかっていき、すぐに見えなくなってしまった。

「ふはあ……」

ミスレイの姿が見えなくなると鋼は大きく息を吐き出してその場に座り込んだ。

鋼はこっちの世界に来てから色々な人だのモンスターだのと渡り合ってきたが、どうしてもミスレイだけは勝てない気がした。

「緊張、したあ……」

意外にも、それはミレイユも同じだったらしい。めずらしくこわばった顔を見せている。

「緊張するようなタイプの人でもなかったと思うけど」

「いやいやいやいや!」

鋼が首をかしげると、ミレイユは大げさに否定した。

「ミスレイ様と言えばかなりの有名人だし、あれだけ殺気を向けられてたら、ね」

「殺気?」

欲望のまなざし、というのなら分かるが、殺気なんて微塵も感じられなかった。

鋼はなおも首を傾げる。

しかし、ミレイユは頑強に主張した。

「いや、あれあたしに釘刺しに来たんだよ、たぶん。」

次に護衛をしくじったらどうなるか分かるな、って」

「そんなタイプじゃないと思うんだけどなあ……」

話は平行線だが、とにかく二人は疲れていた。

「まあ、何でもいいや。とりあえずどこかで休憩して、それから一度ギルドに報告に戻るうか」

「さん、せい……」

ずいぶんとおかしな形になってしまったが、配達の依頼を果たしたのはたしかなのだ。

ちなみにその前にどこかに寄ってから行く、というのは、まあつまり、十分以上時間を使ってアステイが気まずい思いをするのを回避しようという二人の気遣いであった。

「申し訳、御座いませんでした」

「焼き土下座だ!？」

喫茶店のな店でちょっと時間を潰し、ギルドに入った鋼を待ち受けていたのは、ペったりと地面に座り込んで土下座をする女の人の姿だった。あと焼き土下座と言ったがさすがに焼いてはいなかった。だが、それくらいの気迫を感じた。普通に顔を上げてと言ってもテコでも動きそうにない。

「ちょ、ちょっと、とにかくこんなところじゃアレなので奥の部屋

に行きましよう！」

鋼は大慌てで土下座をする女性、ラトリスを奥の部屋まで連れて行く。

ギルドでちよつとすねた顔で待っていたアステイも突然のラトリスの奇行に固まっているし、一緒に歩いてきたミレイユも、

「師匠……？」

と目を丸くして驚いている。

というか、師匠だったのかーい！、とか平時ならツッコミを入れたのだが、鋼にそんな余裕はなかった。

とにかくキルリスの許可をもらって、奥の部屋までラトリスを運んでいく。

そして、奥の部屋に着いた途端、

「申し訳、御座いませんでした」

「焼き土下座再び！」

やっぱりすぐに地面に土下座。

それだけ何かを申し訳なく思っているのだろうが、それでは鋼がいたたまれない。

「あの、とにかく話はうかがえますからそこに座ってください。

これじゃ、落ち着いて話もできません」

いつかのソファに座るようにラトリスに促す。

今の状況ではラトリスも鋼の言うことを聞いてくれるだろうと打算があつてのことだ。

「分かりました。ハガネ様がそう仰るなら」

そう言つてラトリスはおとなしくソファに向かつて、

「申し訳、御座いませんでした」

「焼き土下座リターンズ！」

まさかのソファ上土下座。

上なのか下なのか分かりにくいことになった。

ともあれ鋼はソファに座り、話を促す。

「まずは、話を聞かせてください。そうしないと、ラトリスさんの謝罪を受け入れていいのかも分かりません」

とは言いつつも、何にせよ焼き土下座リチャージとかリローデッドとかリインフォースだとかは免れたいところだった。

しばらくラトリスは戸惑っていたようだが、

「判りました。お話致します」

やがて観念したのか土下座を中断し、丁寧な口調で話し出した。

「なるほど、つまりラトリスさんは、クロニヤを僕の護衛にしてしまったことに責任を感じている、ということですね」

「……はい。あのような危険な目論見を持った人物を護衛に付けてしまう等、信じ難い程の手抜かりです。弁解のしようも御座いません」

険しい顔のままラトリスは言う。気を抜けば、すぐにでも土下座スタイルに戻ってしまいそうだった。

「とは言っても、あつちはかなりのチートキャラだったしなあ……」
思い返してみれば、この冷静で用心深いラトリスが、名前も知らず、適性もよく分からない人間を雇い入れようとした時点でおかしいと考えるべきだったのだ。

そもそも、自分の名前を知らない人間なんているはずないし、冒険者カードを見せてもらえるように頼めば色々一発だった気もするのだが、誰もそれに思い至らなかつた。

あるいは、それこそが彼女の能力だったのかもしれない。たとえば『ネバーノウンノリッジ完全認識阻害』とか、『アブソリュートザリルチドックス絶対絶対矛盾』とかそういう厨二臭い何かを使っていたとしても鋼は驚かない。

しかし、だとしてもラトリスの気は収まらないだろうというのは分かつた。

「事は命に関わる事。如何なる処罰も甘んじて受ける所存です。

あるいは罪滅ぼしになるのであれば、何でもご命令下さい」

しっかりと鋼の目を見据えて言ってくる。どうやらなかなか意志は固そうである。

「僕は気にしてないんですけど、謝罪も罪滅ぼしもいらない、とか言っても、聞いてはくれませんか？」

「いいえ。ハガネ様が重荷に思われるなら、私も無理強いは致しません。罪を償うのが目的で、私の罪悪感のためにハガネ様が不自由をされては本末転倒ですので」

ダメ元で聞いたのだが、案に相違して、ラトリスはうなずいてくれた。

鋼もほつと息をつく。

「よかつた。じゃあ、僕が必要ないって言ったら……」

「はい。私は人知れずどこかで腹を切るだけです」

「そののがよっぽど重荷だよ!？」

全然安心できる状況ではなかつた。

「な、なら、無理のない範囲で僕の手助けをしてくれるって言うのは……」

腰が引け気味になりつつ、そう提案する。

これなら実質、今までやってくれたサポートを続けてもらっただけで何とかこの場は収まるはずだ。そう判断してのことだったのだが、「了解しました」

そううなずいたラトリスの目の鋭さに、鋼はすぐに自分が何か間違ったことを言ったのではないかと瞬時に後悔した。

「キルリス。プランBになりました。そのように」

そして、横に控えていたキルリスに何か指示を出す。

「う、うん。ちよつと待つてて」

キルリスがぱたぱたと走り去っていくのを見て、鋼の不吉な予感
は昇り竜のごとく高まっている。

「あ、あの、何を……？」

「ハガネ様がお気に掛ける程の事でも御座いません。少々私の休職の
手続きを進めているだけです」

「きゅ、休職!？」

給食?!ここ学校なの?!とか言っけてボケる余裕もなかった。しかし、
ラトリスは当然のようにうなずいて、

「今のハガネ様に必要なサポートは、ギルド職員という立場ではこ
なせそうにありません」

あっさりと言っけてのける。

そうして、鋼が絶句している間に、キルリスが戻ってきた。

「有難う御座います」

そして、ラトリスは改めて鋼に向き直ると、

「まず、私の事をもう一度ご説明させて頂きたいと思ひます。
こちらをご覧ください」

かつて一度見せたことのある、自分のカードを見せた。

ラトリス・ブルレ

LV 38

職業 くノ一

年齢 16

二つ名 インスタント・コフィン・メイカー

冒険者ランク A -

「あ、あれ？ この前と違ってる？」

たしか以前鋼が目にしたラトリスの職業は『ギルド職人』だったはずだ。

それに、二つ名の『インスタント・コフィン・メイカー』。一体何を生産するのは、あまり想像したくない。

しかし、一番目に引くのはやはり最後の項目。

「冒険者ランク、A - ?」

「はい。恥ずかしながら、私はかつて冒険者をしていた時期があるのです。

齢が十を数える頃には自分の実力に見切りを付け、英雄をサポートする業務を目指してこのギルドの職員の道を選んだのですが、適うならば今一度、微力ながら私の力をハガネ様のお役に立てたいと思います」

「いやいや、どんだけだよ……」

ラトリスは謙遜しているが、ギルドの職員でレベルがそうそう上がるとは思えないので、ラトリスは十代になる前に冒険者として活動し、既にランクA -、レベル30程度までは成長していたという計算になる。

それを実力に見切りをつけたとか微力だとか、謙遜にもほどがあ

る。というか、今でもまだ16歳なのだ。未恐ろしいという表現しか見当たらない。

「これから、私がハガネ様に付かせて頂きます。ハガネ様の陰になり日陰になり、精一杯の努力を致しますので、どうかよろしくお願ひします」

「努力する割に表に出る気ゼロだな!!」

「では草葉の陰から……」

「それ死んでる上にやっぱり陰から出れてないから!!」

鋼はかなり激しくツツコミを入れたつもりだったが、それを見てラトリスがうれしそうに破顔した。

「そう、その感じですよ」

「え?」

「これからハガネ様は私を使う立場になるのですから、何時までも私に敬語を使っているはいけません。平時より、先程のような話し方で接して下さい」

「はあ……」

それをラトリスが指示してくるのは何か違う気がするのだが、鋼はその不満を飲み込んだ。こういうのは気が済むようにさせるに限る。

「それで、次は護衛の話です。まず、ミレイユは違約金を払って貰った上で解雇するとして……」

「え、ええ!? ちょっと聞いてな……」

あまりに急な決定にミレイユが文句を言いかけるが、

「これは師匠命令です。アステイエル様から事情は全て聞きました。」

護衛対象をみすみす死なせたのに、何のお咎めもないとも思っていたのですか?」

……もちろん、ハガネ殿が許可してくれば、ですが」
元騎士らしい、毅然とした態度でそう答えた。

「僕は、構わないけど。」

むしろ一緒に来てくれるっていうならこっちからお願ひしたい」

二人に無言で答えを促され、鋼は迷いなく答えた。

アステイが自分を気に入った経緯はいささか不透明だと思ったが、あれだけの好意を示されれば、鋼だって突き放す理由はない。

「それは有難い選択です。しかし、アステイエール様でも単独ではハガネ様の護衛が難しいというのも先の一件で証明されています。

私が常にハガネ様に付いていられるかも疑問ですので、ここはせめてもう一人、最低Aランク相当の、腕の立つ護衛を雇い入れたい所なのですが……」

そうして、居合わせた皆が首をひねった時、

「その必要はないよ！」

扉が音を立てて開かれ、そこから見覚えのある少女が入ってきた。

鋼が立ち上がって叫ぶ。

「お、お前は……この前の護衛候補の中に入っていたけど結局僕に選ばれず、捨て台詞を残して去って行ったAランク冒険者で猫耳族のララナ！」

「とっても説明くさい台詞をありがとうコウくん!!」

鋼に向かって威嚇するような笑顔を迎えてから、ララナは部屋中の人の視線が突き刺さる中、堂々と部屋の中央まで進み出た。

「話は全部聞かせてもらったよ！ 前にボクは言ったよね。」

『コウくんを十分に守れないと分かったらふんじばってでもついていく』って。

その約束を、果たさせてもらう！」

しかし、その言葉に反発したのはアステイだった。

「ま、待て！ 護衛は私とこのラトリス殿で充分だ！」

だが、ララナは悠然と首を横に振る。

「ダメだよ。ボクは話は『全部』聞かせてもらったって言ったよね。その忍者の人が護衛がもう一人欲しいって言ったことも聞いたし、アステイ、君の無様な敗北の報告も聞いてたんだよ」

その台詞を聞いて、アステイは鼻白み、ラトリスは目を細めた。
「その時から、ですか。私に気配を悟らせないとはいさすが現役アランク冒険者」

「猫耳ついてるからね。耳はいいんだ」

ラトリスにそれだけ言うと、やはり本命はアステイとばかりに向き直り、言った。

「聞いたよ。勝手にコウくんたちの後についていった拳句、裏切ったクロニヤに噛ませ犬っぽくやられて、結局コウくんの機転で助かったって」

「わ、私は、噛ませ犬では……」

「いいや。噛ませ犬だね。大体ラノベの二巻で急にライバルキャラとして出てきて、二巻の最後までで主人公を好きになる女の子キヤラと同じくらい噛ませだね」

「それは噛ませ犬すぎる！！」

あまりにむごい例えに思わず鋼が呻いた。噛ませ率100%だ。その瞬間鋼の脳裏にチワワや十字架やウサギなどが横切ったが、これらは本編とは何ら関係がない。

「ま、全く意味は分からないが、侮辱されたことくらいは分かるぞ
!！」

憤るアステイ。

正直鋼も今回ばかりはアステイに同情したい心地だった。
だが、

「いいでしょう」

先にラトリスが結論を出してしまった。

「聞き分けて下さい、アステイエール様。

Aランカーで長期の護衛を受けられるような奇特な方はそうそう居られませんし、私が事前に調べた以上、経歴にも問題はありませ
ん」

「しかし……」

「それにボクを仲間にしてくれるなら、当然お金はいらないよ！
やっぱりコウくんといると楽しそうだからね！
こんな好条件、めったにないと思うんだけどな」
実質、そのダメ押しが決め手になった。

アステイが渋々折れる。

「分かった。ただし、妙な真似をしたら……」

「心配しなくても、仲間に手はあげないよ。

……ま、コウくんに手を出さなければ、だけど」

「私がそんなことをするはずないだろう！」

「どうかね」。別の意味で手を出したりして」

「貴様つ!！」

ふたたび一触即発の雰囲気。

「お止め下さい、お二人共」

それをただの一言で散らすと、ラトリスはララナに手を差し出した。

「その前にララナ様。前例がありますので、冒険者カードを拝見させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「もちろん！ これから仲間になるんだもんね！」

ララナは迷いなく、その場にいる全員に自分の冒険者カードを見せた。

ララナ・ナナナン

LV 74

職業 拳闘士

年齢 10

二つ名 ゴッドネス・フィンガー

冒険者ランク A+

「じゅ、十歳!?!」

名前やレベルや二つ名にも驚いたが、一番驚いたのは年齢だった。鋼は改めてララナを見るが、どう見ても自分と同年代、十五歳程度にしか見えない。

「ああ。猫耳族は早熟だからね。ボクも最初はびっくりしたよ。

でも心配しなくても、そろそろ成長は止まって、人間族と同じようになるらしいよ」

「そ、そうなんだ……」

とはいえ、不思議な感じではある。

「む。言っとくけど、ボクの方が精神的には年上だからね！」

とおおを膨らませるララナは、たしかに十歳の少女と言っても通用する幼さがあつた。

「……まあ、そういうことでいいか。」

この前は断つたけど、やっぱり君に護衛を頼みたい」

鋼としても、今さらララナを雇う方針を変える意思はない。

手を差し伸べたが、ララナは少し不満そうな顔をした。

「ボクとしては、仲間として誘ってくれる方がうれしいんだけど」

「なら、仲間になってくれるとうれしい」

正直、鋼には仲間と護衛の違いがあまり明確ではなかった。

「そういうことなら、えへへ」

うれしそうに、ララナは鋼の手を握った。

「知ってると思うけど僕は結城 鋼。」

みんなは僕のことを……」

「前に聞いたよ。ハガネだからコウなんですよ。」

ボクは君のこと、コウくん、って呼ぶから、ボクのこと……」

「ララナ、って呼んでもいいか？」

「うん！」

「そうか。じゃ、これでララナも仲間だな」

「えへへ。……って、ちょっと待って」

ララナは鋼に迫られて思わずいい返事をしてしまったが、気付いた時は後の祭りだった。

「これで、護衛についてはとりあえず問題なしとしましょう。完璧であるかは分かりませんが、これ以上のメンバーはあまり望めませんから。」

それで、今後の展開ですが……」

もうララナの話は終わったものとして、次の話題に移っている。

「ちよ、ちよっと待ってって。」

あ、あのね、仲間であるみんなにだけ話すけど、ララナ・ナナナンというのは世を忍ぶ仮の名前。ボクには真の名前があつて……つてちよっと！ 聞いてよー！」

当然誰も聞いていない。

「少し、ここでは目立ちすぎた気がするんだよね」

「確かに。棒切れ勇者の名は、街中に響いていると言える」

「成程。何処かではとぼりを冷ますというのも手かもしれないね」
真剣な顔で話し合っている。

「ちよ、ちよっとボクを置いてけぼりにしないでよー！」

人一倍さびしがり屋で目立ちたがりでもあるララナは強引に輪の中に割って入る。

少しだけ迷惑そうな顔でラトリスが追い払おうとするが、

「……今は、今後の方針について、真面目な話をしていますので」
「だったら、ボクからも提案があるよ！」

逆にぐいぐい来るララナ。

「近く、キョートーの街で武闘大会があるんだ。そこに行くのはどうかな？」

「キョートーの街？」

まさか教頭の街とかじゃないよな、と不安になる鋼。

そついえば、まだこの街の名前もこの国の名前も聞いていないことに気付いた。

「ハガネ様。ここはジャッポン国のトーキョの街です」

「……ソウデスカ」

絶対に神様の介入があつたら、ここらの地名。

そつ思つて、鋼は一応軽くシロニヤを呼んでみたが反応がない。
たぶんまだ鬼につかまって何かされてるんだろう。

「昔の首都だったトーキョの街の人はどちらかというとはんなりしてて、今の首都でもあるキョートーの街の人はせかせかしてて喧嘩と火花が好きなんだよ」

「火花が好きなんだー。そりゃー武闘大会も開くわー」
鋼はもうあきらめモードだった。

色々とツツコミどころはあったが、とりあえず全スルーした。

「しかし、なぜ武闘大会に？ 今の段階でハガネ様が自立するのは極力避けたいのですが」

ラトリスでなくとも自然と出るだろう質問に、ララナは胸を張って答えた。

「定番だからだよー！」

「ならしょうがないなー！」

何の定番なのかは今一つ不明瞭だったが、鋼はその勢いに負けた。

「ハガネ様がそう仰るなら……」

つられてラトリスもうなずいた。

「やっぱりコウくん、自分のいる街や国の名前も知らなかったくらいだし、ここに来てから日が浅いんでしょ。」

そこへ行くとボクには十年もの経験があるからね。困った時には何でも聞いて、……って違うよー！」

自分も話し合いに参加できて、ついララナは満足しそうになっていたが、ようやくララナは自分の目的に気付いた。

「って、それはいいんだよ。そうじゃなくて、ボクにはソウルネームが……って、いないよー!？」

しかしその時には、ラトリスと鋼の二人はどこかに消えていた。

「二人共、ララナ殿が何かぶつぶつと独り言を言い始めた頃、旅の支度を整えると言って外に出て行ったぞ？」

それをさすがに哀れに思ったのか、アステイがそう教えた。

ララナがハツとして部屋を見回すと、誰も気付かない内にキルリスも自分の仕事に戻っていて、部屋にはララナと、なんとなく鋼たちについて行き損ねたアステイの二人になっていた。

「そ、んな、ボクの、ソウル、ネーム……」

ララナは相当にショックだったのか、そんなことをつぶやきながらその場に座り込んでしまった。

(根は悪い人間ではないのだな)

さつき激しく渡り合ったばかりだが、その相手が空気の抜けた風船のようにこつも激しく気落ちしては、根が善良なアステイとしてはいたたまれない気持ちになる。

「そ、それで、ララナ殿のソウルネームは何と言うのだ？」

私はとても興味があるなあ！」

気は回らないが意外と気を遣う性格ではあるアステイが、すごく気を遣ってそう言った。

「え？　ほんと？！」

あまりに不器用な話の振り方だったが、それだけでララナは復活した。

「ほ、ほんとならまっさきにコウくんに話すつもりだったんだけど、そんなに聞きたいって言うならボク、言っちゃおうかなー」

そして急に復活してもじもじし始めるララナをアステイは生温かい目で見守る。

いくら迷っても結局言いたいののは明白であり、数十秒の全くの無駄な時間ののち、やっぱり言うことになった。

「あ、でも、コウくんには自分で言いたいから、黙っておいてね。」

えっへへ。ボクの、ソウルネームはね」

そこでララナは、アステイに近付いた。

おや、と思うアステイの耳元に口を寄せ、イタズラが見つからないか怯える子供のように、あるいは自分の秘密を恥じらいながら打ち明ける乙女のように、本当に小さい声で、アステイに自分の名を告げる。

「アイリ・シノヅカ、って言うんだよ」

聞き慣れぬ名に戸惑うアステイに彼女は、地味な名前だよね、と言って、笑った。

第三十二章 終焉の魔窟

「大変な事が起こりました、ハガネ様」

「いや、今この部屋にラトリスがいることだって充分大変なことだと思っただけだ」

鋼はあれから宿に戻り、風呂に入って旅支度と一緒に買った、日本のジャージっぽい上下でくつろいでいる所に、突然の乱入者が来た。

忍ぶ感じの人らしいけど、いくら何でもノータイムで窓を開けて一秒後には自分の前で片膝つけて座られたら、鋼がいくら鈍感でも驚くというものだった。

「今はそんなお戯れを仰られている場合では御座いません」

「いや、戯れてないけど……どうしたの？」

「トーキョの街の西門から数十メートルの場所に、新しいダンジョンが出現しました」

ラトリスはすごく深刻そうな表情でそう報告してくれたのだが、鋼には正直何がなんだか分からない。

「ええと、それは大変なことなんですか？」

鋼がそう聞くと、ラトリスはかなり渋い顔をした。

もしかして、ものすごい非常識なことを言ってしまったのだろうか、と鋼は焦ったのだが、

「失礼なのですが、その口調」

「え？」

「敬語に戻っています」

まったく違ったらしい。

この人の怒りのツボも分からないと思っていると、はあとため息をつかれた。

「全く。これから私に敬語を使うのは、言葉責めの時だけにして下さい」

「じゃあもう一生使わないぞ!？」

鋼はすかさずツツコミを入れた。

額の汗をぬぐう。もしやこの人、プライベートではこういう感じなのか。

鋼は戦慄が隠し切れない。

素質はありそうなのですが、などと漏らすラトリスだったが、今は鋼をそっち方面に開拓するより本題の方が大事だと判断してくれたい。説明を続ける。

「ダンジョンが生まれる事自体は必ずしも悪い事ではありません。

ダンジョンからは無尽蔵の魔物と宝箱が生まれますから、冒険者の育成には非常に有利であり、またそこから生まれる魔物を倒す事で安定したマナの供給が見込めます。

実際、急速に栄えた都市の近くには必ずダンジョンの陰がある、と言っても過言ではありません」

ここまで聞く限りではダンジョンができることはいいことばかりみたいに見えるが、問題はあるのだろうか。

「必ずしも悪いことではない、ってことは、悪い場合もあるんだよね？」

「はい。無尽蔵に湧き出す魔物を倒し切れなければ、それはやがて地表に、街に押し寄せます。実際、唐突に滅びた都市の近くには必ずダンジョンの陰がある、と言っても過言ではありません。

ダンジョンが人里から離れた場所に存在して長い時間未発見だった場合、あるいは人里に近くてもそのダンジョンのレベルがその周辺の冒険者よりも高かった場合、そういうことが起こります」

今回、街の近くにダンジョンが現れたということだから、最初の条件は考えなくてもいい。

「ちなみに、今回出て来たダンジョンって、レベルは？」

「推定で60です」

「うわお……」

考えるまでもなく、アウトだろう。

A-のラトリスがレベル38、A+のララナだってレベル74なのだから、このダンジョンのレベルは冒険者ランクA相当ということになる。

「ダンジョンのレベルは、出現する魔物のレベルで決まります。よって、そのダンジョンを攻略するには、ダンジョンレベル+10レベル程度の能力が必要だと言われています」

「つまり、全員がA+ランクのララナレベルじゃないと、歯が立たない？」

「そういう事になります」

「もし、その魔物がダンジョンから出て来たら……？」

「早晚、トーキョの街は滅びるでしょうね」

あくまでクールに、ラトリスはそう言い放った。

「何か、方法は？」

いくら鋼でも、転生してから今までを過ごしたこの街が滅ぶと言われてはさすがに他人事ではいられない。

いつもより二割増しくらいに真剣な表情で聞いた。

「ダンジョンから魔物が湧きだすのを防ぐには、定期的に一定量、ダンジョン内の魔物を狩るか、ダンジョンを完全制覇するしかありません」

「完全制覇？」

「はい。一瞬でもボスを含めたダンジョン内のモンスターを全滅さ

せるか、ダンジョン最深部、ボスの奥にあるダンジョンクリスタルに触れれば、ダンジョンは完全制覇され、消滅します」

「どんどんモンスターが湧き出てくるようなダンジョンで、モンスターを全滅させるなんて現実的ではないだろう。」

「と、すると、最深部にあるというダンジョンクリスタルを目指すことになると思うのだが……。」

「レベル70のパーティなんて、集まるのか？」

「無理です」

「即答だった。」

「それに、レベル70はダンジョンを探索可能なレベルであって、完全制覇を目指すなら、最低でもレベル80は必要かと思われまます」

「レベル80……」

「鋼が出会った中で一番高レベルなララナですら、完全制覇は難しいということだ。」

「それで、ラトリスはどうすればいいと思うんだ？」

「こうして夜に宿を訪ねてきたのは、すぐに鋼に何か手を打って欲しいからだろう。鋼はその真意を尋ねた。」

「ラトリスは予想通りの無表情で、あまりに予想外なことを言った。」

「すぐに逃げて下さい」

「一瞬、何を言われたのかが分からなくても鋼に責任はないだろう。「え、と、どういう……」」

「言葉通りの意味です。ダンジョンが出来たばかりで敵の少ない今だけが、唯一の勝機です。明日にでも完全制覇を目指してギルドが決死隊を募るでしょう。」

「そしてなまじ知名度があるだけに、ダンジョンの探索者候補とし

て八ガネ様の名前が挙げられるのも早いと思われれます」

「それ、で？」

「はい。断れば名声に傷が付きまますし、参加すれば死にます。ですから、出来るだけ早い内に、出来れば今日中に逃げて下さい」

「その、決死隊、が成功する可能性は……」

「ありません」

「ぜ、全然？」

「私は、ギルド職員として、この近辺の冒険者の情報は網羅していません。近隣の街を含めて、全て、です」

「それでも？」

「それでも、です」

ラトリスが無表情の奥に押し込めた絶望が、ようやく鋼にも伝わってきた。

「騎士団等の援護も期待出来まますし、街の住人の避難は可能でしょう。けれどそれだけです」

「それだけ、つて？」

「確実にこの街は滅びます。あのダンジョンをうまく封じ込め出来なければ、国も滅ぶかもしれません」

「まさか!？」

「定期的にレベル60の魔物が湧いてきて、倒さなければどんどん増えていく。そんな地域に、人が住めると思いますか？」

「けど、どこかにいるもつと強い冒険者がダンジョンを制覇すれば

……」

「外に湧き出てくるほど魔物が溢れたレベル60のダンジョンを制覇するには、レベル100のパーティでもなければ無理でしょう。

そして私は、そんな高レベルパーティの存在を耳にした事はありません」

まさに降って湧いたようなこの状況のあまりの厳しさに、鋼は絶句してしまった。

「恐らく最善の、一番現実的な策としては、ダンジョン攻略は断念し、ダンジョンの入り口を包囲して出て来た魔物をその都度殲滅する『封じ込め』を行う事だと思えます。

魔物がダンジョンから溢れ出す前に、昼夜問わず間断なく現れるレベル60の魔物を倒し続けられる戦力を集められるかが問題になります。」

とにかく、ダンジョンに入っていくなんて自殺行為だと言いたいらしい。

それは、鋼にも分かる。ただ、もし『封じ込め』策を取ったら、もうダンジョンを制圧する機会も、この街が本当の意味で平和になる機会も、永遠に失われてしまうだろう。

それを聞いて貴方はどうしますか、という無言の問いかけ。

「その、もう少しダンジョンのことを教えてください」

それに、鋼はまだ答えることができなかった。

その意をくみ取ったのか、ラトリスは表向きは平然と、説明を続ける。

「今回のダンジョンは典型的な洞窟型。出入り口は次元連結型です」

「洞窟型、に、次元連結型？」

聞き慣れない言葉を聞き返すと、それを予期していたのだろう、ラトリスが解説を加える。

「洞窟型とは、ダンジョンの構造の分類です。具体的には、階層等がなく、転送魔法陣や仕掛け扉等もない、三次元構造の原始的な洞窟。蟻の巣穴を想像して頂ければ理解し易いかと思います」

想像してみる。かなり厄介そうだ。

「洞窟型の特徴は、道が狭く曲がりくねっている為、視界が利き難く、奇襲を受け易く集団戦が困難な事。ダンジョンの構造に法則性が乏しい為、マップピングが困難な事。それに、範囲攻撃魔法が効き過ぎる、事でしようか」

「効き過ぎる？」

「はい。基本的に何処も狭く細い道で、しかもダンジョンの壁は決して破壊出来ず加えられた攻撃を受け流す性質があります。ですので、例えば爆発系の魔法等を使えば、周りが密閉されている分、広い範囲に効力を発揮します。」

洞窟型ダンジョンで、百メートル先に撃ったファイアボールの余波で死んだ術者、というのはあまりに有名な笑い話ですが、あり得ない話ではありません」

「あー。そっか」

おそらくだが、ダンジョンの壁を壊してショートカット、というのを防ぐためにダンジョンの壁は攻撃を反射するようにできているのだろう。

鏡張りの部屋でフラッシュを焚くようなもの、だろうか。とにかく危険だというのは分かった。

「出入口が次元連結型というのは、ダンジョン入口の内と外、それぞれにオーブ型のスイッチがあり、それに触れている間だけダンジョンの扉が開くタイプを言います」

「それって普通の入り口と何が変わるんだ？」

「オーブに触れていない間は地上とダンジョンは次元的に断絶しているのです、中で何があっても外に影響はなく、中からダンジョン脱出の魔法を使っても脱出出来ません」

「それって、かなり厳しいだろ」

それはつまり、ピンチになってもすぐには脱出できず、来た道を

自力で戻らなければいけないということになる。

「ただ、他のタイプと比べると、スイッチがある分魔物が相当量増えるまでは外に出て来る事の少ない、比較的安全な入り口と言えます。実際、現在ダンジョンの入り口は、見張りの冒険者一人を残して全員がギルドに引き上げ、今後の対策を練っています」

そう言っつて、ラトリスは言葉を止めた。

まだ何か聞きたい事がありますか、と目で問いかけてくる。

「ありがとう。必要なことは、全部聞けた、と思う」

「それを踏まえた上で、ハガネ様はどういった結論をお出しになりますか？」

ラトリスの鋭い視線。鋼は、

「僕、は……」

口に出そうとして、ためらった。

はつきりと言ってしまうえば、鋼がどうするかはもう決まっていた。だが、それを口に出す勇気がなかった。

「……今すぐに、ここを発つつもりは、どうやらなさそうですね」
しかし、それでもラトリスは何かを読み取ったらしかった。
そしてそれは、別に間違っつてはいない。

「すみません。優柔不断に聞こえると思いますが、とりあえず明日、明日まで、待つてください」

誠意を込めて、鋼はラトリスに頭を下げた。

つもりだったのだが、

「残念ですが、看過出来ませんね」

「ダメ、ですか？」

「ええ。駄目駄目です」

ラトリスは、許してはくれなかった。

燃えるような目で詰問する。

「なぜ、敬語に戻ってしまわれたのですか？」

「ええ?! そこお!?!」

鋼は話し合いが始まってから一番びっくりした。

「当然です。敬語は私を責める時だけ、と何度も申し上げました」

「それについては何度も聞いてない!!」

「こうなったら、ハガネ様が敬語を使う度、鞭打ち一回、という事にしましょうか」

「ちよ、ちよつと罰が重すぎないか?!」

そうすればさすがに覚えるかもしれないが、敬語を使っただけのことではちいち鞭を喰らうのは鋼だって嫌だ。

「むしろご褒美かと思いますが、早速どうぞ」

「は?」

ラトリスが鋼に乗馬用の鞭のような物を渡してくる。

「ハガネ様はさつき二回敬語を使われたので、二回私を鞭打って下さい」

「あなたにかよ! つうかこの状況でとか変態かよ! ちよつとは自重しろよ!」

鋼、流れるような三段ツツコミ。

それを聞いて、ラトリスはなぜかうつとりしていた。

「ハガネ様には、やはり素質があります。将来が楽しみです」
などと言いながら、ラトリスは窓に向かった。

「今晚はこれで失礼します。……あ、そうでした」
窓を開けながら、彼女は言う。

「先程、決死隊等を結成しても成功する確率はゼロだと申し上げましたが……」。

前衛にララナ様とアステイール様。中衛に私。後衛にミスレイ様。そして一応数合わせに八ガネ様」

「え？ 数合わせなの！？」

「そんなパーティーが結成出来れば、あるいは、という思いもあります」

そこで、ラトリスは颯爽とその身を夜の闇に投げ出し、

「今夜一晩、ご存分にお考え下さい。私は、貴方に従います」
そんな言葉だけを残し、あっさりと去って行ってしまった。

「さ、て。大変なことになったなあ……………」

残された鋼は、ベッドにはたんと横になった。

巨竜の時はすぐに危険にさらされている人がいたせいで、鋼にはある意味考える時間がなかった。

だが、今回は……………。

【いやっほおうー！！ 今夜はパジャマでお邪魔なのじゃあああああああああああ！】

「お、前は……………」

今回は……………なんだったか忘れるほど、能天気で空気の読めない幼神の登場だった。

【ありゃ？ おぬしは何をしてるのじゃ？

なんじゃそれ？ ジャージ？ だっさいのう】

「ほっといてくれ」

言いながら、鋼は自らの姿を恥じるように横に置いてあった外套を着込んだ。

これも昼に買ったもので、体をすっぽり覆うほどの大きさがある。

「やっぱり衣服はかさばるよなあ。アイテムボックス欲しいなあ」

【だったら、買えばいいんじゃないよ！】

「そうだなー」

一応皮肉のつもりだったのだが、通用する相手でもなかった。

【もしかして、外に行くのか？ ガイシュツか？ 既出なんじゃない？】

「お前の意味不明な言動とそのハイテンションの源泉はなんなんだろうなー」

【ワシにも分からんのじゃ！】

そういう無益な会話に無意識にちよつと癒されながら、鋼は部屋の外に出る。

【ところでこんな夜に一体何の用なんじゃ？】

ま、さか、よ、夜這い？】

「しねえよ！ はあ。ま、強いて言えば……」

そこで鋼は人が悪そうにくっくと笑って、

「ちよつと、落し物をね」

と答えた。

翌日。

鋼が冒険者ギルドに顔を出すと、

「あ、ハガネさん！ 大ニユース！ 大ニユースですよ！」

パタパタと音を立ててキルリスが駆け寄ってくる。

なんかこの人見る度に子供っぽくなってくるなあとか失礼なこと

を思いつつ、鋼もキルリスに声をかける。

「あ、キルリスさん。お金は払うので薬草か何かを一つもらえませんか？」

「ちよつと実験というか、ボックスに入れてみたいので……」

「あ、はい。薬草なら……って、薬草一個くらいあげますよ！ それどころじゃないんです！」

「あ、どうも」

薬草を受け取って顔をほころばせる鋼に、キルリスはまくしたてるように説明する。

「じ、実はですね。昨日、街の近くでなんと、レベル60のダンジョンが見つかったんです！」

「へえー。お、ちゃんと入った！」

キルリスの話を適当に聞き流しつつ、腕輪に薬草を入れて歓声を上げている鋼をじれったく思いながら、キルリスが声を張り上げる。

「レベル60のダンジョンなんて、普通なら誰も攻略できません！ これは、もしかするとこの街も終わりなんじゃないかって、みんな悩んでたんです。」

「それが、なんと……」

リアクションに乏しい鋼の反応を引き出そうと、大げさな身振りで、ためにために、

「たった一人の冒険者が、昨夜一晩でそのダンジョンを完全制覇してしまっただんです！」

満を持して、そう言い放った。

しかし、

「まー。そういうこともあるんじゃないんですか？」

その報告を受けても、何の反応も見せない鋼。

「もうー！ これってすっごいことなんですってばあー！」

キルリスはさらに食い下がるが、やっぱり鋼は表情を変えることはない。

しかし、そんな鋼の頭の中では小柄な白い神様が、人が悪そうにくっくと笑っていた。

こうして。鋼とダンジョンを巡る物語は、一晩で終わりを迎えたのだった。

第三十三章 ある取材記録、もしくはバレバレな解決編

さて、今回の『突撃！ 英雄リポート！』は、『払暁の一角団』団長にして、『暁の奇蹟』ニコライ氏に突撃取材をさせて頂きます。どうぞ！

「よろしくお願いします」

(ここでニコライ氏、スタッフ一同に一礼。氏の礼儀正しい性格が伺える)

今日はお忙しい中、わざわざお越し頂きありがとうございます。

「いえ。最近ちょうど大きな仕事が終わったところで。休暇中だから、毎日時間をもてあましてるんですよ」

その大きな仕事というのは、やはりあの、群狼大量討伐作戦ですか。

「そんな大層なものじゃないですが、はい。狼退治ですね」

あの作戦によって、向こう十年間、狼被害は十分の一以下になると予想されていますが。

「難しい話はどうにも。それは仲間に任せているので。ただ、人のためになる仕事だというのは聞いていましたから、全力でやらせてもらいました」

その誠実さ、謙虚さが英雄になる秘訣ですか？

「あはは。参りましたね。これは地の性格で。そんなんじゃありません」

しかし、『払暁の一角団』のメンバーの方からのインタビューでは、戦いの時はいつも前に出て勇敢に仲間を守り、それでいて全く偉ぶることのない、最高のリーダーだという話をお聞きしましたが。

「あいつら、そんなことを言ってたんですか。参ったな……」

(氏、頭をかく。若干言葉を選ぶ様子)

「俺は元々、農家の二男坊だったんですよ。冒険者も片手間で、家計を助けるとかそんな意識でやってただけなんです。だからほんとに、偉い人間とかではないんですよ」

偉業を成した後でも最初の心を忘れない。それがあいつの一番すごい所だ、と仰っていた方もいらっしやいました。

「参りますね。何でもプラスに持ってこうとするんだから……」

(氏は困り顔で再び頭をかく)

ではズバリ、ご本人からすると、ご自身がここまで来れた最大の要因は何だったと思いますか？

「そうですね。こう言つと幻滅される方もいらっしやるかもしれま

せんが、やっぱり運ですね」

運。幸運、ということでしょうか。

「はい。まず半分は、最高の仲間巡り会えたという幸運。そして、残り半分は……これについては本当にただ幸運だったとしか言えませんが」

それはどういう意味でしょうか。

「実は、俺は昔トーキョの街で冒険者をしていた頃、ダンジョンを完全制覇したことがあるんです」

二つ名の由来にもなった、あの有名な『暁の奇蹟』事件ですね。何でもレベル60のダンジョンを、たった一日で制覇してしまったとか。

「はい。あれをやったのは俺ですけど、俺は何もしていないんです」

何もしていない、というのは。

「その時の俺はレベル10そこそこの弱小冒険者で、レベル60のダンジョンでなんて、戦えるはずなかったんですよ」

それは、あの奇跡の裏に何らかの不正があったという意味ですか。

(問題発言に、スタッフが湧き立つ。ただし責任者の判断で取材は続行)

「ああいえ。不正、と言うのかどうか。とにかく、納得して頂くには全部お話しするしかないでしょうね」

お願いします。

「あの日、レベル60のダンジョンが見つかったってことで大騒ぎになった現場に、俺はちょうど居合わせたんです。何せレベル60ですからね。本当は俺なんかが役に立つことはないはずだったんですけど、高レベルの連中が軒並み作戦会議って時に、誰か見張りが必要だって話になって、その時に俺が立候補したんですよ」

レベル差がかなりありますよね。それでも引き受けたんですか。

「怖かったですけど、報酬の高さに釣られたのが半分、あとはその場の空気と、とにかく何かやらなくちゃってという気持ちもあったんだと思います。とにかくその選択が、俺の人生を大きく変えることになりました」

その時、何があつたんですか。

「見張りを始めてしばらくは、何も起こりませんでした。とにかくダンジョンの入り口が開いたら全速力で逃げてギルドに走ると決めて、びくびくしながら見張りをしていると、そこに人が近付いてきたんです」

どんな人だったんですか。

「暗かったですし、相手はフードを目深に被ってましたので、顔は見えていません。でも、声の感じからするとまだ少年だったように思

います。その彼が、俺に不思議な頼みごとをしてきたんです」

頼みごと、ですか。

「はい。自分が持ってきたアイテムを、ダンジョンの中に置いて来て欲しい、というものでした」

引き受けたんですか。

「ギルドからの要請だと言われて、断れなかつたんです。今から考えればおかしな話ですし、後から聞いたらそんな事実はないって言われたんですけど、その時は普通の精神状態じゃなかつたんですね」

ちなみに、そのアイテムというのは。

「大きな楕円形の鉄の塊みたいなの……ちょっと説明しにくいものですね。とにかくそれを持ってダンジョンの中に入って、スイッチを入れてすぐに出て来ること。それが頼みごとの内容だつたんです」

そのアイテムの名前は覚えていませんか。

（ここで氏は何かを思い出そうとする仕種をして、やがて首を振つた）

「思い出せませんね。ずいぶんと変わった名前だつたんですが。何か壊すとか、そんな名前だつたような気はします。で、とにかく、それを持ってダンジョンの中に入ったんです」

中にはモンスターがいるんですよ。怖くはなかつたんですか。

「依頼を引き受けた時と同じですよ。めちゃくちゃ怖かったですけど、妙な使命感がありましたね。それに入ってすぐの場所に置いてスイッチを入れるだけでいいと聞いたので、とにかく入口にモンスターがいらないことだけを祈ってました」

入口近くにモンスターはいたんですか。

(そこで氏は苦い笑いを浮かべ、大げさに手を横に振った)

「いたら、俺はこの場にいませんよ。ただ、作業をしている間、入口の開閉は頼みごとをしてきた少年に任せてたんですけど、後悔しましたね。入った瞬間に、ダンジョンの中に閉じ込められたらどうしよう、とか。結局何もありませんでしたけど」

じゃあ、作業は無事に終わったんですね。

「そうですね。ドキドキはしましたが、あっけなくらい簡単に終わって、そうやって少し冷静になると俺もおかしいなと思いはじめたんですよ。だから、その怪しい少年に、さっきのは一体何なんだと迫りました」

その少年は、なんと答えたんですか。

「アイテムのことは、何も。ただ、冒険者カードを見ていた方がいい、と言いました。半信半疑というか、状況もよく分かりませんでしたけど、カードを取り出しました。すると、本当にとんでもないことが起こったんです」

何が起こったんですか。

「カードが爆音を上げたんです」

冒険者カードにはそんな機能がついているんですか。

「ああ、いえ。そうではなくて、一度に大量にレベルアップしたせいで、そう聞こえたんですね。音が鳴った後にカードを見ると、16だったはずの俺のレベルが、一気に94まで上がっていたんです」

まさか。

「その時の俺が一番そう思っていましたよ。しかも直後に『ダンジョンを完全制覇しました』なんてメッセージが頭に浮かんでくるし、後ろを振り返ればさっきまであったはずのダンジョンが影も形もなくなっているしで、パニックになりました。そうやって混乱している内に、フードの少年もいつの間にかいなくなっていましたしね」

その時、一体何が起こったんでしょうか。

「俺が運んだアイテムが、ダンジョンの敵を一掃するような超強力なマジックアイテムだった、としか考えられませんね。それ以外に80近くもレベルが上がる原因に思い至らないというのもそうですけど、ダンジョン内に誰もいないのはそのフードの少年にもつくつく聞かれて確認しましたし、そうなるとダンジョンが完全制覇された説明がつかないですから」

そんなことが本当にありえるんでしょうか。

「体験した俺でもまだ半信半疑ですよ。唯一の証拠になるはずのそのマジックアイテムはダンジョンごと消滅しちゃいましたしね」

その少年の正体に心当たりはなかったんですか。

「当時も今も、心当たりは全くありませんよ。たぶん俺の生涯を通して一番の謎の人物で、恩人です」

その少年を探そうと思ったことは。

「突然英雄に祭り上げられて忙しかったですからね。落ち着いてから少し探してみようと思いましたけど、手がかりが何もなくて。でも今は、俺のところに来たその少年の姿をした誰かは、近くに隠遁していた賢者なのではないかと考えたりしています。強力な力を持っているのに、人里には出て来ない、そういう類の。だけど街の危機に黙っていられなくて、自分が表に出ない形でそれを解決しようとした。……まあ、全部俺の妄想ですけどね」

そうですか……。『暁の奇蹟』が終わってからの偉業については、我々もよく知っている所ですが、そこからは英雄ニコライの伝説の通り、と考えてよろしいのでしょうか。

「英雄かどうかは知りませんが、きっとそうでしょうね。94なんて馬鹿げたレベルのおかげで、HPには事欠きませんでしたから、こんな自分を英雄なんて呼んでくれた恩返しに、と思って、積極的に前線に出て行くようになりました」

なるほど。英雄ニコライ誕生の秘密は、そんな所にもあったということですね。

「はい。だからもし英雄志望の人間がいるとしても、俺の真似をするのはちょっと無理だと思います。誰もが怪しいフードの男に会え

るわけじゃありませんから。それでも諦められない人は、仲間を信じることに、努力を続けることを大切にしてください。真摯に向き合えば、どちらもきつとあなたに伝えてくれると思います」

最後まで謙虚さを忘れない、『暁の奇蹟』ニコライ氏でした。本日は本当にありがとうございました。

「ありがとうございました」

(取材終了。挨拶と共にスタッフが撤収を始める)

「あ、ちょっと待ってください」

(焦った様子で席を立つニコライ氏)

何かありましたか。

「思い出しました。あの少年に渡されたマジックアイテムの名前。たしか、『何とか破壊爆弾』だったと思います。何を破壊するのは忘れましたが。……あ、今さら言っても、使えませんか」

いえ、わざわざありがとうございます。もし出来たら、編集で差し込んでおきます。

「すみません。ありがとうございました」

(氏が再び一礼。最後まで本当に礼儀正しい人である)

(追記：なお、この取材については対象者の発言内容の一部に、世間に不要な混乱をもたらす可能性があるとの判断からお蔵入りが決定。記事については差し替え措置を取ることとする)

第三十四章 空艇2万マイル

「え？ 移動？ そんなの飛空艇に決まってるでしょ！」
というララナの鶴の一声で、キョートーの街まで飛空艇で行くことになった。

さすがファンタジー、と鋼は戦慄と興奮を隠せなかった。

ちなみに、

「今なら『脳散らす号』『隠微ジブリ号』『Enterプリーズ号』があるけどどれにする？」

「ちよつとその名前考えた奴ここに呼んでこい！！！」

みたいな一幕もあたりするけれども、割愛。

結局は非常に物騒かつ潜水艦っぽい名前の飛空艇に乗り込んだ。

この世界の飛空艇は浮かび上がって数秒で最高速度が出る物理法則に喧嘩を売るファンタジー仕様で、魔法で空気抵抗とか慣性とかを打ち消す便利機能付き。船によって性能差はあるが、この船は平均時速は800キロくらいで、あつという間にキョートーの街までたどり着けるらしい。

しかもララナのよく分からないコネを使ってタダで乗り込めた。ちよつと怖いくらいの至れり尽くせり感である。

こつという時にはでっかい落とし穴が待ってるのではないか、と鋼は勘ぐってしまう。

「あー、大丈夫大丈夫。今回はボクが乗ってるしね。飛行機事故と一緒に、そうそう飛空艇なんて落ちないよ」
というララナの台詞までが何だか『前フリ』に思えてくる。

しかし、いつまでも疑っても仕方がない。

「それじゃ、僕は一人でやることがあるから」とあてがわれた部屋にこもる。
目的は、もちろん、

【コウよ。ワシは、自分の才能が恐ろしいのじゃ……】

このやっかいな神様と話をすることである。

「で？ 今日とはどんな与太話を聞かせてくれるんだ？」

【よ、与太話ではないのじゃ！ ワシは、ワシには未来が見えてしまったのじゃ……】

「へえー」

話十分の一くらいで聞く。シロニヤの場合、大抵こういう風に大げさな言い方をした時ほどしようもない話の時が多いのだ。

ただ、こいつの侮れない所は、口にした大言壮語を実際に叶えかねないくらいのスペックは持っていることだ。仮にも神様だし。

【おぬし、たしかこれから大会に向かうと言っておったな】

「ん？ ああ」

【やはりか。読めたぞ。

実はその大会、武道大会ではなく葡萄大会だったというのが今回のオチ……】

「ねえよ！」

やっぱりしようもない方だった。

「そもそも武道大会じゃなくて武闘大会だよ！」

根本的な所に誤りがある。

【な、なるほど。それなら安心……ハッ！ 実は武闘大会ではなく舞踏大か……】

「ねえよ！」

これからこの能天気神様と真面目な話をしなくてはいけないのだ。
鋼はちよつと憂鬱になった。

「ちよつと、真剣に聞いてくれ」

鋼は、なおも武芸大会かと思いきやぶげー大会、武技大会かと思いきやブギウギ大会、とか頭の悪いことを言っているシロニヤを、正気に返らせる。

ぶげー大会って一体何するんだよ……。

「クロニヤが言ったこと、そろそろ説明してもらおうと思ってさ」
【まあ、構わないのじゃが、『約束』は忘れてはならんのじゃぞ？】
「ああ」

シロニヤの念押しに、はつきりうなずいてみせる。……まあ向こうには見えないが、受話器に向かって礼をする日本人の気分だ。

久しぶりに聞く真面目声で、シロニヤはこんなことを語り始めた。
【まず、この世界の成り立ちについてじゃが……。】
いつかの神様会議で大体こんなことがあったそうなんじゃ】

「それじゃ、神様会議、はっじまーるよー！」
「yeah!」「huh!」「yes!」「kool!」「ほっほ
あああああー！」

「で、今日の議題なにー？」
「フリートークで！」
「oh!」「humm!」「yes!」「yes!」「kool!」
「ほっほあああああああー！」

「なんか俺、最近力使った時に因果律が腰にくんだよなー。もう年かなあ……」

「はー。たしかに儂ら、力使った時に因果律がどうとかでめんどいんじゃないよな」

「因果律、マジバないっすよねえ」

「異世界勇者とか使えば多少軽減できますけど、あれだつて制限つきますし」

「んじゃいつそ、人間使っちゃうとかどスか？」

「はあ？ お前それマジで言ってるの？ あんなん弱くて使えないじゃん！」

「いやいや、そこは人間を神様レベルに強くすればおk、ですよ」

「神様の力与えちゃったらそいつも因果律に引っかかるから同じじやーん！」

「あ、そつか。てへっ」

「いや。何とかできるかもしれんぞよ」

「な、なんだつてー！ k w s k !」

「人間にめっちゃ試練を与えて神くらい強くすればいいのじゃー！」

「ちよつ！ マジ頭いいんですけどー！」

「でもそんな試練とかよく知れん！ なんちて」

「あーそれならいいーのがあるよー」

「なん…だと…」

「人間界にあるげーむとかあーるぴーじーとか使えばいくなーい？」

「なんじゃその、解餌夢とかいうものは、それに、阿亜瑠非…？」

「対戦車口ケットランチャーの名前ですね、分かります」

「R P G 違いだよおおおおおおお！！ ほあああああああ！

！」

「とにかく、それ使えばおk！」

「……じゃ、それで!!」「」

【という感じで、この世界が作られたというワケなのじゃ!】

「それ実話?!」

事実を元にした限りなくフィクションに近い再現VTRとかであつて欲しいと切に願う鋼だが、とりあえず事情はなんとなく分かった。

【というワケでじゃな。『新神類育成計画』とかいう大仰な名前で世界を一個作つてまで行つたこの実験なんじゃが、これが始まつたのはだいぶ前のことだな。

えー、実は結局、神様を創れるほどの試練を設定してしまったせいで、この実験はほとんど失敗しておるんじゃ】

「どういうことだ?」

【つまり、そのう、……人にとっての試練、つまり魔物、を強くしすぎたせいで、じゃな……】

「うん?」

【……この世界、近いうちに魔物たちに滅ぼされるんじゃ、たぶん】

「おい?」

剣呑な響きを帯びた鋼の声に、シロニヤはあわあわと弁解する。

【ち、ちがうのじゃ! ちがうのじゃよ!?

そ、そもそもじゃな。神の力には因果律というものがあるからして、死んじやつたおぬしを安全な世界に転生させるなんてのはちよつと難しかったのじゃよ】

「ほおーう?」

【神の気まぐれ補正と生前の善行補正があつたとして、死んじやつ

た人間を転生なんてさせるにはちよつと色をつけて滅びゆく世界に送る程度がせいぜいで、じゃな、最初の話でもこっちにも事情があるとも……】

「つまり、僕をだましてたってワケか」

【そ、そんな、ち、ちがうのじゃ、それこそ、誤解なんじゃよ…？】
「何が、誤解だつて？」

【こ、この世界がたぶん滅びちゃうことをおぬしに伝えなかったのは、隠しとつたんじゃなくて、単に伝えるのをド忘れしてただけなのじゃー！】

「なお悪いわぁあああああああああああ！……！」

鋼、久方ぶりのシャウトだった。

「まあ、いいや、その話はもう。大体わかったし、考えてもしょうがない」

どう逆立ちしたって、世界を救うほどの力を自分が手にするとは思えない。とりあえず出来るだけモンスターを倒した方がいいということだけ覚えておくことにする。

「それで、そろそろ自分に何ができるのか知りたいんだけど……」
世界の現状が少しだけ分かったところで、今度は時間がある内に自分の特殊能力を把握しておきたいというのが鋼の考えだった。

【めんどくさいのう。そんなのせんでも、見つけたダンジョンに片っ端から『ちきゅうはかいばくだん』を投げ入れればいいのではないのか？】

「お前がそんなこと言うのかよ。アレだって、今回みたいなケースじゃなければとても使えないだろ」

今回のダンジョンの構造が『洞窟型』で、『次元連結型』の入り口があつたから偶然有効だっただけで、本来ならとても使えたものではない。

ダンジョンの全ての道が地続きになっている洞窟型でなければ、最深部まで爆弾の威力はいきわたらなかつただろう。例えば転送魔法陣などで進むタイプならそこで爆発は途切れるだろうし、隠し扉などの奥まで届くかも未知数だ。

あるいは、このダンジョンの入り口が次元連結型でなければ大惨事が起こっていたはずだ。スイッチを押さない限りは中で何が起ころうとも外に影響がない次元連結型の出入り口だからこそ、あんな物騒な物を使ったのだ。

それに、そもそもアレはダンジョン内に人がいたら使えないし、中にいるモンスターに熱とか火の耐性があれば効かないなんてこともありえるかもしれない。

「あと目立つのは嫌だし。また都合よく見張りの人が一人だけで、しかも協力的だとも限らないだろ」

一度使ったら終わったら十日かかる上、ボスには即死が効かない『天魔滅殺黒龍灰燼紅蓮撃』のように、『ちきゅうはかいばくだん』も強力だが制限の大きい武器なのだ。

【お、おぬし……。もしかして、ちゃんと脳みそ入ってるのではないか？】

「何だその僕が頭悪い前提での驚き!!」

しかもそれをシロニヤに言われるというのがひとしお業腹である。「とにかく、そういうワケで色々他のタレントとかも調べたいから協力してくれ」

それを抑えて、何とかシロニヤに協力をしてもらおうと思ったのだが、

【待つんじゃない！ 長くなりそうじゃから、その前にワシとの約束を果たしてほしいのじゃ】

そこに本人から待ったが入った。

「そういう交換条件だったな」

シロニヤは、自分が鋼の質問に答える代わりに、ある物を要求していた。

それは、

【そうなのじゃよ！ いい加減その連コン返すのじゃ！】

鋼が無意識に持ち出した、秒間360連射のできるコントローラーである。

「だけど、どうやって渡せばいいんだ？ 神様ってこっちの世界にも自由に来られるのか？」

【無理なのじゃ！ だから、オラクルを使うのじゃ】

「オラクル？」

【オラクルに小型ワームホール機能を付けて、物品の受け渡しを可能にするのじゃあー！】

「それもオラクルじゃねえよ!？」

と、怒鳴ったものの、それしか方法がないのならそれを試すしかないワケで、

「どうするんだ？ 神様の力でオラクルを改造でもするのか？」

【浅はかなり！ 簡単に言えば、このままではオラクルのレベルが

足りないのじゃ。逆に言えばオラクルのレベルアップをすればいいのじゃ】

「そんなのどうすればいいんだよ？」

【とにかくワシをほめるのじゃー！】

「ほ、ほめる？」

いきなり言われても、はっきり言ってシロニヤはほめるべきポイントより怒るべきポイントの方が圧倒的に多いだろう。

鋼は心底困惑しながらも、何とか文句をひねり出す。

「し、シロニヤはいつでも傍若無人ですごい……なあ？」

本当に文句みたいになっちゃった。

【アホじゃろ！ むしろ気を悪くしたわ！】

当然のダメ出し。

【この際真偽はどうでもいいのじゃ！ 嘘でもいいからワシを気分よくさせてみるのじゃー！】

「それでいいんだ……。」

ええと、シロニヤは三歳児の割に頭がよくて色々できてすごいなあ

「あ
ぴろりん

しろにゃ の なかよしど が 3 あがった。

「やつすいなお前！」

口に出した途端頭の中に出て来たメッセージに、鋼は思わずそう言ってしまうが、

【ち、違うのじゃ！ 方向性はまちがったらんが、まちがってるんじゃないよー！】

「え、ダメなのか……。」

前も仲良し度が上がったら新しいオラクルを覚えたからってっきり

成功かと思っただが、そうでもないらしい。

ではここはシンプルに行くか。

「し、シロニヤかわいいよシロニヤー！」

そのテンプレと化した褒め言葉を口にした瞬間、

ぴろりん

しろにゃ の こうかんど が 4 あがった。

頭の中に変なメッセージが流れた。

【そうじゃ！ その調子でどんどん来るのじゃ！】

「こんなのでいいのか……」

「と、時よ止まれ、お前は美しい……」

【ファーウストオオオオ！！】

ぴろりん

しろにゃ の こうかんど が 3 あがった。

「えーとえーと、シロニヤたんマジ天使！」

【失敬な！ ワシは神様じゃぞ！】

鋼は神様に怒られた。

ぴろりん

しろにゃ の こうかんど が 4 あがった。

「って、好感度がってるじゃないか！」

【乙女心は複雑怪奇なのじゃー！】

「結城鋼は神様シロニヤを愛しています。世界中の、誰よりも」
【……う。それはちょっと重すぎて正直ひくのじゃ】
「逆効果ッ!？」

びろびろりん

しろにゃ の こうかんど が 17 あがった。

「って、めっちゃくちゃ好感度がってるじゃないか！」

【乙女心は奇妙奇天烈摩訶不思議なのじゃ!】

そして、その一言が決め手になったのか。

しろにゃ との かんけい が きになる になった!

鋼の脳内に新しいメッセージが。

「あれ? 『気になる』って、前の『比翼連理の友』より下がってないか?」

「そ、それは……とにかく見ておくのじゃ!」

はがね は おらくる(わーむほーるつき)を おぼえた!
しろにゃ に みつぎものを おくれるようになった!

「う。あんまりうれしくない機能……」

「だが、おそらくこれでいいのだろう。」

【よしよし。じゃあ次は、『かわいいシロニヤ様に貢物を贈りたい』

と念じながらコントローラーを差し出すのじゃよ!】

シロニヤの弾んだ声の指令に従って、

(早くこのコントローラーをシロニヤのところに厄介払いしたい)
と念じながら手を突き出す。

すると、目の前にバスケットボールくらいのサイズの、明らかに平面な穴が開いた。

鋼はおそろおそろ、その穴にコントローラーを差し入れる。

【来た! 来たのじゃ!】

という声で、向こうに届いたことを知る。

渡し終わると、

【やった! やった! やったよ! Wow Woo!】

頭の中から喜んだような声が。

ちよつと喜び方がほとんど昭和な気がするが、まあいいだろう。

コントローラーを取り戻したシロニヤは、上機嫌で鋼に言った。

【これでワシの召喚獣はもっと強力になるのじゃ!】

「ほどほどにな」

色んな意味を込めて鋼が言う。秒間360連射なんてやったらゲームが壊れそうだ。

【それはそれとして、もう一つだけ質問してもいいかじゃ?】

「何で急にあざとい語尾を使い出したのかは分からないが、いいぞ」

【あ、これは、シロニヤに改名した効果じゃ。新たな特殊語尾を使えるようになったじゃ。

あえてパラメータ的に言うと、あざとさが3上がって代わりにS UN値が10くらい下がった感じじゃにゃ】

「……正気に戻れよ」

本当か嘘か分からなかったが、改名を勧めた鋼としてはあまり強くは出られなかった。

【それで、質問なんじゃが……】

「ああ。何だ？」

【うむ】

そこでシロニヤは言葉を切って、少し言いくそうに言う。

【さっきからずっと天井におるそれは、いったいなんなんじゃ？】
「え？」

シロニヤの言葉に、鋼は視線を上に向けると、

「ぎゃあああああああああああああああああああー！」

天井に張り付いた何かと、思いつ切り目が合ってしまったのだっ
た。

断章 4

「新しい、旅立ちか」

私は感慨深く呟く。今日から私は、この世界を捨て、何が待っているか分からない、全くの未知の次元に旅立つ事になっている。少しくらい感傷的にもなるうというものだ。

「何が未知の次元じゃよ！ 散々ワシを脅して向こうの世界の情報を引き出したくせに……」

どうやら考えている事を口に出してしまっていたらしい。言葉尻を捉えて後ろできゃんきゃん騒ぎ立てる白猫を睨み付けておとなしくさせる。猫の癖にきゃんきゃんとはこれ如何に。

でも、そういえば初めて会った時も、こんな感じだったかも。思い起こせば、遙か遠くに思えるあの日々。というほどの時間は経っていないけれど、シロニヤンとも初めて話をした時には大体このようなやり取りがあった。

「お、おおおぬし、どこから見とった！」

シロニヤン（もう猫ではないけど）は、私の姿を見て激しく動揺して、言わずもがなな事を口走った。

「どこからって、もちろんこの場所からですけど？」

「いやいや、そういう話じゃないんじゃないが」

シロニヤンはまだもごもごと言っていたが、そんな些末な事象にかまけている余裕は、少なくとも私の側にはなかった。

「それより聞かせてください。コウって、結城 鋼くんの事ですよね？」

「う……」

明らかに動揺する素振りを見せるシロニヤン。私の中で凶星率が100%ほど上がって、200%になった。一粒で二度凶星だ。

私もだいぶ動揺している。落ち着かなくては。

「ちゃ、ちやうよ?」

しかし、私の目の前に立つ少女は、あくまで白を切る。白猫だからって生意気な。

「ゆ、結城 鋼なんてワシ知らんのう。コウっていうのも鋼の音読みじゃなくて、足の甲という意味じゃよ?」

「馬鹿を言わないでください。足の甲と話をするはずがないでしょう!?!」

「し、してたんじゃもん! 腕の筋肉に話しかける感覚でちよつと話をしてたんじゃもん!」

「あなたは売れない芸人ですか!?!」

「と、とにかく知らないものは知らないのじゃ。た、たぶん、結城 鋼なんて人間は、もうこの世にはいないのじゃ」

「え? いま、なんて……」

「あ……」

しまったのじゃ、という顔をして、シロニャンが口を押さえるけれども、それはもう遅い。

今、凶星率が300%を超え、私の中に真実が舞い降りてきた。

けれどそれは 最悪の真実。

「こ、殺したんですね?! あなたが、コウくんを、殺したんだ!」

「え? ええつ!?! ワシがあ?!」

「しらばっくれようとする犯人。とぼけても無駄です。既に、既に状況証拠は全て揃っているんです!」

そして、それを追い詰める名探偵(私)。

「ちよつ! 状況証拠だけって、それアレじゃよ! 一番冤罪にな

りやすいパターンじゃよ！」

「真犯人はみんなそう言うんです」

「冤罪じゃよー！　というか、冤罪以下じゃよ！　コウは今も異世界でびんびんして……あ」

「あ」

冤罪は晴れた。

この事件に、加害者も被害者もいなかった。
そもそも事件じゃなかった。

いえ、分かってましたよ？

シロニヤンは人を殺すような顔してないですし、でも思いついたら何となくノツちゃうのがイタい子のイタい子たる所以なんです。
ご了承ください。

それはともかく、実に結果オーライ。

「やっぱりコウくんの事知っているじゃないですか。とにかく、お願いします。コウくんの居場所、教えてください」

「やじゃよー！　なんとなく理知的っぽい雰囲気で騙されそうになつたけどおぬし絶対天然系じゃもん！

ワシは天然とDQNには関わり合いになりたくないじゃよー！」

「天然？　今、私の事を天然と言いましたか？」

その言葉に、私の堪忍袋の緒の耐久力が加速度的に減少していくのを自覚した。

『天然』

たった二文字。されど二文字。その謂れのない誹謗中傷にさらされ、私が今までどれだけの精神的外傷を負ったことか。

この猫は、その報いを受けなければならぬ。

今、すぐに！

「どうしたんじゃ、天然娘？ 何をぼうつと……」

「私を、天然と、呼ぶな」

我に返った私が怒りを堪えてたしなめると、シロニヤンはブルブルと震えながら頷いた。相変わらず大袈裟な猫である。

初めて私が天然と呼ばれた時も、私の尋問一（という名のくすぐり）を行うと大袈裟に怖がり、すぐに全てを白状した。

それを聞いて、私は大いに逆上したのを覚えている。コウくんが死んだ原因がこのバカ猫にあり、そしてコウくんがもうすぐ滅びる世界へと生まれ変わらされたと知ってしまったからだ。しかもそれをコウくんに伝え忘れていたらしい。

その時点でシロニヤンに対して残っていた敬意や神に対する畏怖が猫殺ぎ、いや、根こそぎ吹き飛び、私は異世界に旅立つ事を決めた。一瞬、マキの顔が頭をよぎったが、マキだってこれくらいの非常事態であれば許してくれると思う。

だって、このままではコウくんは世界の滅びに巻き込まれてまた死んでしまうのだ。それを救えるのは私しかない！ ……多分。

そういった事情から、私はコウくんと同じ世界に転生をする事を決めた。

シロニヤンは「理由もなしに転生させられない」「おぬしはまだ生きてるから転生は無理」だのと色々ごねてきたが、「私もコウくんと同じようにお前の命を救ったのを忘れたのか」「じゃあ今ここでむごたらしく自殺してやる」と丁寧な理屈を説いたら素直に納得してくれた。最初からそう言えばいいのである。

更に転生マシンという何の捻りもない名前の機械だけを置いてどこかに行こうとしたので、捕獲して向こうの世界の情報を吐かせる事にした。

「な、何でワシがそんなこと……」とぐちぐち文句を言っていたが、やはり情報は力である。折角事情通が目の前にいるのに、全く未知の次元に前情報も何もなしで飛び込んでいく人間の方が私からすれば気が知れない。向こうの世界での地理や注意点、一般常識を

今の内に教えてもらおう事にする。

それと、たびたびコウくとオラクルとやらで通信するのが妙に苛ついた（友達が携帯で恋人との甘々トークをしてるのを隣で見ている気分）ので、私に教えている間はオラクル禁止にした。それに対してもしロニヤンはだいぶごねたが最終的には一応納得。たびたび、寝ると嘘をついてオラクルしに行っていたのは知っているが、それは見逃してやった。あまり締め付け過ぎてても仕方ない。

そうやって私はシロニヤンを生かさず殺さずのスタンスで調整しながら、出来る限りの知識を搾り取った。

「それではもう一度確認するのじゃが、これで『転生キャラエディター』のボーナスの割り振りは終了でいいんじゃない」

言われて、私はまた深く過去に囚われた意識を、何とか現代に戻した。

「もちろん」

言葉だけは平静を装って、シロニヤンに答える。

『転生キャラエディター』。この機械にも随分と悩まされた。まだ悩んでいないとは言い切れない。それでも熟慮に熟慮を重ねた上で能力は決めた。これ以上はないと私は信じてもいた。

シロニヤンからはシロニヤンを助けたボーナスで200ポイント、更にまだ現在生きていて年も若いという事で追加で100ポイント、合計300ポイントのボーナスをもらってキャラメイクを始めた。

こういう物には慣れていないので、やはりシロニヤンに解説を頼んだ。特に前世ボーナスなどの説明はやはり役に立った。

「たとえばこの社交力などは、生前の交友関係の広さによってボーナスが乗るのじゃ。」

ちなみに、ここに来た奴らの社交力の平均は8じゃから、7のおぬしは少しだけ低めということになるんじゃないが、3と比べ……いや、何でもないので「じゃ」

歯切れの悪さは気になるが、社交力についてはその通りだと思う。私はそんなには友達がいけないのだ。よく話す相手なんて、両手の指で数えられてしまうくらいである。

それはそれとして、試しに上がっている能力をポイントに戻してみる。……1ポイントずつしか増えない。どうやら増やす時と戻す時ではレートが違うらしい。悪徳商法である。

それを指摘すると、「も、もうバグはないんじゃないぞ！ あんな錬金術は二度とさせんのだよ！」とシロニヤンが息巻いていたが、何なのだろうか。

とにかく、前世ボーナスを全部ポイントに戻すと138ポイントになった。元のボーナスポイントと合わせて438ポイント。多いのか少ないのか分からない。

「57の倍以上じゃな。不憫な……」
とシロニヤンが目頭を押さえていたので、もしかするとあまりよくないのかもしれない。

一度初期化して、前世ボーナスから分かる自分の特性を考えてみた。筋力へのボーナスがたった11しかないのに対して、知力のボーナスが17、魔力に至っては29もある。意識した事はなかったが、もしかすると私には靈感でもあったのだろうか。

なにせよ、魔法メインで魔法使い系を目指すのが適性からすると正しいようだ。

魔法使い。あるいは魔術師。なんと魅惑の響き。燃えるじゃないか。

想像するだけで背筋をぞくぞくとした快感が登ってくる。

私の乏しいファンタジー知識の中で、魔法使いのイメージはトルキンの指輪物語よりルゥグウインのゲド戦記なのだが、向こうの世界ではどうなのだろうか。そういえば魔法のことについてはシロニヤンにあまり聞いていなかったなと思いつつ、私はアビリティとタレントの吟味に移った。

ざっと流して調べてみて、私は呆れた。どう考えても役に立たな

い物が多過ぎる。『完全体内時計』や『瞬間記憶復元』くらいならともかくとして、『黄金聖闘士化』や『シメサバとの蜜月』、『神の左手』なんてタレントを活用出来る人間がいるなら見てみたいものである。

仕方がないのでシロニヤンも巻き込んで、50ポイント消費の『インドア派宣言』筋力の必要経験値を10倍にする代わりに、知力の必要経験値を半分にする。のように、魔法使いに使えるようなタレントを精査していく。

などという経緯を経て、私とシロニヤンの知識を総動員して(させて)考えたキャラクター設定だ。

あくまで魔法主体のスタイルながら、不意打ちや毒などの搦め手にも対応出来るように、そして『少年期編スキップ』はポイントが割高で手が出なかつたので、その下位タレント『幼少期編スキップ』で12歳スタートでコウくんとの再会を果たす事にした。

うん。同年というのも惹かれるが、3歳差なら許容範囲内だろう。後ろで「ワシとは12歳差じゃな……ふう」という声が聞こえてきたが、当然無視した。

可能な限り隙がなく、完成されたボーナスの割り振り。向こうの世界の魔物や風土、特産物、地理、勢力、人々の気質などの様々な情報。携帯のメールのみとはいえ親しい人に別れは済ませ、異世界に向かう覚悟は決まっている。

これで私の転生はほとんど万全の状態だと言い切れる、はずなのだが、なぜだろう。これだけやってもコウくんが届く気がしない。しばらく会っていない間に彼を神格化し過ぎてしまったのだろうかでも、私のこういう勘はよく当たるのでちょっと不安だ。

「不安なのかな？ べつにやめてもいいのじゃぞ？」

すると、その不安を見透かしたようにシロニヤンが目の前に立っていた。目を見れば分かる。こいつ、私が怖気づいて逃げるのを期

待している。だが生憎と、そういうレベルの悩みはもうとっくの昔にどこかに放り捨ててあるのだった。

「このボタン、押せばいいんだよね？」

返事の代わりに、そう確認してやる。

私の前には『転生キャラエディター』の『決定』のボタン。こんなチープなボタン一つで私の今までの人生が終わって、新しい人生が始まってしまふなんて、とても信じられない。いや、信じたくない。けれど、シロニヤンはあっさり頷いた。

「そうじゃな。……それはそうと、別れの前に一つだけ、聞きたいんじゃが」

マキに質問される前に感じたのと同種の嫌な予感。まずいな、これ。これでヤな事が起こったら私の勘は本物かも。などという裏の思考とは独立して、私の口はシロニヤンに言葉を紡いでいる。

「なに？」

想像したより冷たい声。でも、シロニヤンは全くひるまずに言った。

「で、おぬしはコウのどこが好きなのじゃ？」

突然のキラーパスだ。その一撃は仲間すら打ち砕き、簡単にその綻びを露呈させる。

なんて。実はこういう事は、マキにやられて耐性がついている。悪い予感是不発だった。私は充分な心の余裕を持って、冷静に切り返した。

「あ、あいつの事なんて、全然しゅきじゃないから！」

……また、やってしまった。

しゅき？ しゅきってなんでしゅか？ 真白ちゃんは、一体なんちゃいでちゅか？

そんな幻聴が聞こえてくる。

「ふふ。分かったのじゃよ。おぬしはコウのことなど、全く『しゆき』ではないんじゃないの。納得したのじゃ」

最後の最後に反撃出来て満足した、そんな心の内が如実に表れているような顔でシロニヤンが頷いた。きっとその瞬間、私の何かは切れてしまったのだろう。後悔すると分かっているながらも、私の口が、無意識の内に動き出す。

「…………柔らかそうな黒髪」

ぼそぼそとした声だったので、シロニヤンには聞こえなかったのかも知れない。あるいは私が俯いていたので、声が届かなかったのかも知れない。

「ん？ 何か言ったかの？」

なんて言いながら、こちらに寄って来る。でも、大丈夫。まだまだある。まだまだまだ、いくらでもある。だから私の口は動く。「外を見る時の憂いを帯びた横顔、時々する抜けた言動、意外とよく通る声質…………」

今度はシロニヤンにも聞き取れたみたいだった。だが、その顔に浮かぶのは、

「おぬし、それはまさか…………」

戦慄の表情。どうやら理解したらしい。

そう、これは全て、わたしの見つけたコウくんの素敵な部分。そうだ。気になるのなら、答えてあげようじゃないか。

たとえこれから一日中でも、いや、この命尽き果てるまで！

「実はかなりお人好しな所、蒲田くんと話している時の楽しそうな顔、常識人ぶってるけど根は破天荒な所、制服の夏服からのぞく二の腕、かなりイタズラ好きな所、笑った時に見える歯並び、ツツコミの持ちよつと声を張り上げてしまった事を恥じ入る時の顔、繊細そうな指先、真白って呼ぶ時に一瞬ためらうあの感じ、黒板の小さ

な字を見る時の細められた目、弱ってる人という時の優しい態度、思わず飛び込みたくなる胸元、まどつてる空気感、キラキラした瞳、その目でたまにこつちを正面から見ってくる時なんてもうたまらない、校歌斉唱の時最初は適当にやろうとしてるのに最後は真面目に歌ってしまふ所、暑い日に襟元を緩める仕種、嫌いなパプリカに顔をしかめる表情、先生にユウキって呼ばれた時に一瞬こつちを見てくれた時の連帯感、本を読んでる時の無意識の仕種、頑張ろうと思った時の椅子の座り方、全力で運動した後に呼吸を整えながら空を見上げる癖、疲れてる時でも友達に笑顔を忘れない所、困ってる人を見かけて精一杯気にしてない振りをしながら声をかけるタイミングを計っている時の姿、英語でRの発音がうまく出来なくて何度もやり直している姿、水道で手を洗いたいのに下級生の女子が数人で占領していた時のわたわたした姿、運動靴から覗いたくるぶし、日常的ちよつとした事も素敵な出来事に変えてしまふ遊び心、状況適応能力が高い所、男の人なのに結構触り心地が良さそうな唇、手のあたたかさ、ふざけて他人のメガネをかけた時のあの……」

「も、もうやめるのじゃあ！ 分かったのじゃ！ 悪かったのじゃあ！ なんかかゆい！ すぐかゆいからほんともうやめて……許してくれなのじゃあ！」

そしてしばらくの後。

「あ、あのじゃな。その、元気出すのじゃ」

「……………」

「正直ちよつとマニアックじゃなと思ったりもしたが、それだけ人を好きになれるということは素晴らしいことではないか。よく知らんのじゃけど」

「……………」

「うむ。その……ワシも初めてストーカーというものを目の当たりにして、ずいぶん勉強になったのじゃよ？」
「……………」

私は、貝になっていた。

なぜだろうか。やったら後悔するのが分かっていて、どうしても突き進んでしまうのは。そしてなぜ、何度後悔しても人は同じ過ちを繰り返してしまうのか。若さ故の過ちとは、どうしてこのように青く苦いのか。

「……………なにかひみつ」

「え？」

「シロニヤンもなにかひみつゆって。それでちやら」

私は同じ所まで相手を落とす事で、精神の安定を図る事にする。

えげつないなどと言うなかれ。もはや私の尊厳は、そのくらいしなければ回復出来ない崖の淵にまで手が届いてしまっているのだ。

「な、なんでワシが……………」

「わたしのきいたから。だからひみつ。それでちやら」

「ごねるシロニヤンになおもたたみかける。シロニヤンは渋々口を開いて、

「う。さ、サドネスだつ……………やっぱりいいのじゃ」

また閉じた。

「おつじょうぎわるい。はやく」

シロニヤンはしばらく迷っていたようだったが、観念して話し出す。

「い、一瞬、ほんとに、一瞬だけなんじゃが……………」

何だか前とは違う話らしいけれども、それを指摘する気力すらない。

「こ、コウのシャワーシーンを見たことがある、のじゃ……………」

「へー。こづくんじゃわーし」

なんですと!?!?!?

「いつ!? どうやって!? どこまで!?!」

「な、なんじゃいきなり! ちょっと前じゃよ。オラクルで、その、コウ近辺の静止画が見えるんじゃ。どこまでというのは何がじゃ?」

「静止画!?!」

たぶんその時の私の顔は、かのムンクの叫びもかくやというほどに歪んでいたはずだ。その時の私に一切の理性はなかった。ただ、獣の如き欲望、謂わば獣欲とでも言うべき物を私の体に乗っ取り、我が物顔で私を動かしていたのであった。当然そこには私の意思は一欠片すらもなく、私はただ欲望のままに動かされる操り人形のよくな存在であったのだ。……もちろん、言い訳である。

「ゆ、ゆずつて!?!」

「え、ゆ、だ、ダメなのじゃ! というか、無理なのじゃよ!?!」
ドン引きするシロニヤンの腰に、私は恥も外聞もなく縋り付いた。それはもちろん欲望という名の悪魔が我と我が身を支配していたからであり、私の理性は自らの浅ましい行為に必死で抵抗するも、虚しく……まあそんな感じですよ。お察しください。

「わ、分かつ、いえ、分かりました。ならば、こちらも5ポイント払います。いえ、10ポイントまでなら出します!」

「いやいや! ポイントとかそういう使い方せんから! というかあの奇跡のバランスで築き上げたキャラメイク、崩れちゃうんじゃぞ?!」

「な、なら、100ポイント! 100ポイント出します!」

いえ、湯煙なしの映像なら、150まで出しても構わない!」

「こ、この女、駄目じゃあ! よく分からんが、全然ダメじゃあ!」

そうして、私の旅立ちは一瞬伸びた。

キャラクター紹介（前書き）

このキャラクター紹介は100%悪ノリで書かれています。
また、ご覧の有様な出来のため、予告なく削除する可能性もあります。
ご了承ください。

キャラクター紹介

エルフの男の人（第六章）

鋼が異世界に降り立って初めて見つけた異世界人で異種族人。エルフのくせに気さくでたぶんお人よしの稀有な人材。だが所詮男だったのでモブ止まり。森林公園に何の用があったのかは不明だが、たぶん森林浴。くつろぎに行ったら金ぴかの変な奴がいたのだから、きつと驚いただろう。

シスター（第六章）

鋼が道で出会ったシスター。真昼間から街中で光の魔法を使っていた変な人。もしや光フェチとかなのか。たまにミスレイに服を強奪されて勝手に着られるばかりか、「んー。この服なんか胸のところがきついですねえ」とか言われる不遇の人。それでもミスレイのことを尊敬、というか崇敬している。

蒲田くん（断章1）

鋼の日本での友達。大柄でマイペース、気は優しく力持ち。きつと剣道部か陸上部。彼がシロニヤを助けていたら、物語はずいぶん違った展開を見せて

いたはず。

鋼とはよくゲームの話題で盛り上がっていた。

実は鋼以外で初めて、名前のついた男性キャラである。

下の名前？ そんなのは知らん。

三枝 牧（断章1）

真白の親友。

そもそも真白が誰か分からない人は断章参照。

裏設定的には実はこの時点で一番鋼と恋愛に近い関係を築いた人。

高校一年の時に真白が気にしているという理由で鋼に探りを入れ、色々あつて何だか甘酸っぱいやりとりをした。

が、それを真白には悟らせないため、わざとらしく鋼の名前もよく知らないフリをしていたいじましい人。

クラスメイトでしかも親友の想い人の呼び名も知らないとか彼女の性格上ありえないと思うのだが、真白はころつと信じた。

常識人なので、真白などと違って鋼のために今の生活を捨てるなんて無理だと思っており、それを内心負い目を感じている。

もしこの話が60話くらいまで続けばヒロインとして登場する可能性もあるが、たぶん回想含めもう二度と出て来ない。ご愁傷様です。

ファルザス（第二十一章）

地味に異世界における唯一の名前あり男性キャラ。

店の名前が『ファルザスの工房』のくせに、自分で作ってない武器とか売っている節操なし。

鋼によって折られた『グラン・ウィンド』は『折れた魔剣』として店内に飾っている。

閉店後、それを肴に酒を飲むのが最近の日課。
当然、涙酒。

ポチ（第三十一章）

首が三つある犬。

たぶんミスレイがヤンチャしてた頃に捕まえた。

弟のように可愛がられているモンスター。

おイタをするとミスレイに「この雌犬がっ！」って言われるのが悩み
みのタネ。

キャラクター紹介（後書き）

以上、再登場の予定のないキャラクター紹介、でした

第三十五章 羽化

「あの、そのように素で驚かれても……」

天井に張り付き、こちらをじつとつかがっていた『何か』。
それは、

「そんな素直な反応をされては、私が嬉しくなってしまうのですが」
「嬉しいがるのかよ!？」

鋼の同行者の一人、ラトリスだった。

「ミレイユから隠行を見破るのが得意と聞いていたので、お邪魔にならないよう昔ながらの方法を試してみたのですが」

と、話すラトリスは鋼と同じ目線。つまり床に普通に立っている状態だ。ちよつと精神衛生上悪いので降りてもらったのだ。

というか実際、さつきは恥も外聞もなく叫び声を上げてしまったのだが、鋼としてはしょうがないだろうと思っている。

顔を上げると知り合いが天井に張り付いていたとか、マジで怖い。冷静になっても、何か平然と当たり前のように天井に張り付いていたラトリスの精神構造がマジ怖い。

むべなるかな、むべなるかな、とか、そう言ってまわりたい気持ちだ。

「夜間、あるいは部屋での護衛は私が担当する物だと思っていたのですが」

天井に張り付いていた理由を聞くと、あっさりとそう答えてくる。
「だったら普通に部屋に入ればいいだろ!」

「ですが、それではハガネ様が気になさるのではないかと」

「天井に張り付かれた方がよっぽど気になるわ！」

鋼は手加減抜きで怒鳴った。

今回はシロニヤが気付いたからいいが、仮にもし気付かずにベツドに横になって天井を見上げた時に気付いたりしたら、確実にトラウマ確定である。

「いえ、宿等では流石にお部屋にお邪魔はせず、天井裏や外に潜んでいるのですが、何分特別な環境でしたので」

「そりゃ飛空艇は特別……いやちよつと待て！」

お前もしかして、宿屋の時点でこっちを護衛してたのか？」

鋼がそう口にした途端、だった。

「ハガネ、様……」

ラトリスの雰囲気、変わった。

何が、とは言えない。

だがいつもの冷静沈着な仮面が剥ぎ取られ、その地金が一瞬だけだが顔を出した。鋼にはそんな風を感じ取れた。

「な、何だ？」

それでも、鋼は平静を装って、聞き返し、

「先程の『お前』という言い方にはゾクゾクしました。

もう一度仰って頂けませんか」

「だ・ま・れ！！　こんの、変態がああああああああああああああああ！！！」

恒例となった絶叫ツツコミをお見舞いしたのだった。

「確かに、昨夜も立ち去った振りだけをして、屋根裏から護衛をさせて頂きました。」

勿論、ハガネ様がダンジョンに向かわれるのも後ろからこっそりと見守らせて頂きました」

鋼の絶叫ツツコミをもとせせず、というより言われた瞬間プルプル体を震わせ、大変美味しゅう御座いました、みたいな感じで一礼した後、普通に話の続きに入る。

ここは藪をつつくと八岐大蛇でも出そうだと鋼も追及はあきらめ、話を戻す。

「ということは、その、色々、見てたんだよな」

それは例えば、鋼が『ちきゅうはかいばくだん』を見張りの冒険者に渡す所を、ということだ。

「はい。ハガネ様がニコライ様にアイテムを渡す瞬間も見ておりましたし、加えて言えば、さっき一人で色々と呟いていた内容も、全て聞いておりました」

「あー。その、それについては……」

「他言無用、という事で宜しいでしょうか？」

「あ、ああ。うん。頼む」

あっさりうなずかれたことに多少の違和感を持ちながらも頼んだ。その心配を見透かしたように、ラトリスはメガネを光らせる。

「心配なさらなくても、私はハガネ様を裏切りません。ええ、私には多少の鞭と蔑みの視線があればそれで充分です」

「お前本当に真性だな!!!」

鋼はびっくりして叫んだ。

しかし、どうやらHEN TAIである所のラトリスにはこういう台詞は単なるご馳走でしかないと鋼も気付いた。だから、
「あんまりしつこいと、もう何にもツツコまないからな？」

と、一応釘を刺したのだが、

「放置プレイとか寧ろご褒美ですが何か？」

「お前は無敵か!？」

打開策なし。

鋼も変態の前には形無しだった。

この変態どうしてくれようと鋼は思ったのだが、その変態が口を開いて、鋼は思考を凍りつかせることになる。

「お話の相手は異界の神様ですか？」

「……何で、そんなことを？」

自然と声が硬くなる。

シロニヤ、異世界の神とオラクルをしているというのは、誰にも話したことがない、鋼の秘密の、いわば根幹だ。

「ハガネ様の声だけとは言え、先程の会話は聞かせて頂きました。今更です。」

それに、ハガネ様が手に入れたフィートはキルリスを通して伺っております」

「そう、か」

鋼は少なくとも、口に出して神という単語を出した覚えはない。だが、このラトリスならそれくらいやすく見破りそうだという思いもあった。

「……だってメガネキャラだし。」

「これも、内密という事で宜しいですね」

「まあ、そりゃあ、ね」

「心配されなくとも、ハガネ様には大きな借りがあります。」

これがある以上、ハガネ様に期待を裏切り、失望されるような行

為は……………失望、軽蔑、叱責、罰、お仕置き……………ふ、
ふふ

「そこで笑うなよ!」

鋼の秘密は風前の灯だった。

「と、とにかく、そういうことで、ラトリスは護衛をするにしたって僕の声が聞こえないくらいの場合にいてくれ。落ち着かないし」
何がそういうことかは自分でも分からないし、秘密を守ってくれるかについて不安はあったが、それよりラトリスを追い出すことが先決と鋼は決断をした。

「分かりました」

それにあっさりと素直にうなずいて、ラトリスは普通にドアから出て行くこうとする。

しかし、

「あ、待った。最後に一つだけ、いいか?」

鋼には、やっぱり確かめておきたいことがあった。

ラトリスがうなずいたのを認め、問う。

「ラトリスって、昔からそんななのか?」

それはつまり、昔からHENTAIなのかということなのだが、ラトリスはすぐにその意味を正確に読み取った。

「そうですね。確かに昔から、見つければ絶対に生還出来ないような敵地に単独潜入する任務を好む傾向はありました」

「そ、そうか」

「今思えば、忍びの修練は一つ残らず苛酷でしたので、その中で痛みに悦びを見出す資質を育てていたのかもしれない」

「そ、そうか……………」

やっぱり昔からの一本筋の通った変態さんだったらしい。

「しかし、人からの罵声が癖になったのは至極最近です。」

護衛を決める日の朝、前日の報告をしている時に開花しました」

「何だその後付けくせえ!？」

「ハガネ様に激しいツツコミを頂いて、私の中に眠っていた資質が目覚めたのです」

「聞きたくなかったそんな最悪な覚醒!！」

しかしそうになると、いわばラトリスという変態のさなぎを更なる変態に変態させたのは鋼ということになるのだろうか。

鋼は胸の内でそう独白したが、明らかにただ『変態に変態』というフレーズを使用したかっただけだった。

だがさすがのラトリスは鋼の葛藤も何のその、

「これで、良いでしょうか。では……」

変態のくせに無駄に颯爽ときびすを返し、ドアを開き、

「ああ。そうでした」

そこで、ドラマの刑事がするような仕種で振り返る。

「私は、SとM、両方行けますので」

「何のタイミングアウトだよおおおおおおおおおおおおおお!」

本日何度目かになる鋼の絶叫は、飛空艇のドアに阻まれ、ラトリスまでは届かなかった。

【お、恐ろしい敵だったのじゃ……。】

まさにヘンティカンヘンタイじゃな】

「お前は何もしてないだろ……」
いつの間にか舞い戻ってきてまたどこかで聞きかじったようなことを言うシロニヤに、鋼は冷たい声をかけた。

「というか、何かのタレントでこうなってるんじゃないだろうな」
あまりにも出会う人出会う人変人すぎると比較的鈍感な鋼でも思う。

実はタレント『変態製造なんたら』の効果、とか、ありそうである。

【いやいや、前にも言ったじゃろ。
ワシ的に邪道じゃから、恋愛感情含め、人の内面に干渉するようなタレントはほとんどないのじゃ。

心配するでない。これは純粹に、おぬし自身の能力ちからじゃよ】
「いや僕が望んだみたいない方するなよ!? つうか変なルビ振るな!」
あやうく鋼に不名誉な能力が付きそうになった。

【そうじゃな。そんなに気になるなら、調べればよいのじゃ!】
「調べる? タレントをか?」

しかし、『技能完全隠蔽』の効果でタレントがそれこそ完全に分からなくなっていると言っていたのはシロニヤだったはずだ。

【ふふ。その考えは甘いのじゃよ。
例えて言うなら、コーヒーとシュガーを0対100でブレンドしたコーヒーより甘々なのじゃ!】

「それももうコーヒーじゃなくてただの砂糖だぞ!?!」
加えて言うなら何もブレンドしていない。

【実はさっき完成したのじゃよ! ちょっと待つのが……】
「おい……?」

鋼が訝しげな声を上げたのとほぼ同時、鋼の前の空間に、見覚え

のある渦巻きのような物が出現する。

「ワームホール?」

最初の時はすぐに閉じてしまったため、よく観察できなかったワームホールである。

どこでも行けるドアのように完全に平面で、奥に何かあるのが見えないのは旅に不可欠なワープできる扉のようにも見える。

「おおっ?」

そこから、黒い手帳のような物が出現した。

どうやらシロニヤが送ってきたらしい。

おっかなびつくりで、拾ってみる。

「何だ、これ」

【ふふ。それこそが我が秘密兵器が一つ、『タレント感知クン』じやよ!」

その手帳は、身に着けた者の発動したタレントを感知し、勝手に記録してくれるのじゃ】

「おお?! 何かうさんくさい発明品みたいな名前の割にすごい効果!?」

「だけどそれ、『技能完全隠蔽』を持つても使えるのか?」

【たしかに『技能完全隠蔽』は技能が存在することを完璧に隠してしまう。】

「じゃが、実際効力が存在する以上、その発動までは隠すことができんのじゃよ。」

「これはそのシステムの穴をついた『完全技能感知アイテム』なのじゃー!」

「す、すごいな。何か登場以来一番頭良さそうだぞ、今のお前……」
毎回こんな感じなら尊敬もできるのに、と鋼は思った。

「ここが攻め時と思ったのか、さらにシロニヤはアピールを始めた。【ふふん。これはワシが毎晩夜なべして作ったオリジナルのアイテ

ムなんじゃ。

おかげでしばらく、昼寝の時間が八時間とかになってしまったのじゃぞ】

「びっくりするほどありがたみないな!？」

それは夜なべではなくて、単に昼夜逆転しているだけだ。

「しかし、本当にすごいな。こんなのどうやって作ったんだ？」

神様の物体を作る能力は謎に包まれている。

夜なべということは、まさか手帳の紙を一枚一枚糊付けとかしたのだろうか。

その神秘への答えは……。

【え？ 念じたら一瞬でパツと出て来たんじゃが……】

「夜なべどこ行っただよ!」

その時点からして嘘だった。

まあ、有用そうなアイテムをわざわざ作ってくれたのだから、文句を言う筋合いはないのだが。

「と、とにかく、これを使って当初の予定通り僕の能力を色々調べてみようか?」

せっかくのシロニヤの功績が台無し感あふれるものになった所で、鋼はあわてて提案した。

【う、うむ。そうじゃなそうじゃな! それがいいのじゃ!】

シロニヤも雰囲気微妙になったのは分かっていたのか、すぐに賛同する。

が、その時、

「ハガネ様、宜しいでしょうか?」

ノックの音と共に、さっき別れたはずのラトリスの声。

「な、何?」

作業を中断して鋼が扉を開けると、ラトリスは慇懃に一礼し、
「申し訳ありません。先程はお伝えするのを忘れてしまったのです
が」

「うん？」

「後五分ほどで、この船はキョートーの街に到着致します」

短い空の旅の終わりを、鋼に告げたのだった。

「がんばりすぎでしょ、脳散らすクン」

第三十六章 遙か遠き武闘大会

「ふむ。キョートーの街か。」

何度か訪れたことはあるが、やはり活気のある街だな」

「キョートーよ！ ボクは帰ってきた！ ああ、何もかもが懐かしい……」

「飛空艇だとあつという間ですね。でも、ここに来るのも久しぶりです」

「皆様、あまりバラバラにならないようにお願いします。」

特にララナ様、武闘大会が近く気が立っている者も多くなります。

一人で勝手な行動を取られないよう」

という新しい街に来た時のテンプレ的会話を繰り返している一行を余所に、

「よおし、シロニヤ！ 実験だ、他人の迷惑にならない広い場所を探すぞ！」

【合点承知なのじゃあああああ！】

これからという時に中断されたせいですっかりテンションが上がっている二人組が、ドドドドド！と砂煙でも上げそうな勢いで、駆け抜けていく。

「……勝手な行動云々、と言っていたが、アレはいいのか？」

「ハガネ様の行動を私が制限する訳には参りません。」

それにハガネ様なら糸はつけておりま……今、切れました」

「あはは！ コウくんはなんだかんだで自由人だからね！」

「はい、あの方も伊達に聖王に見初められてはいませんかからね。」

でも、万一はぐれてしまっても、ラトリスなら同じ街にいる人を見つかる程度、造作もないでしょう？」

早速一人はぐれても、あくまでのんびりマイペースなご一行たち。

「ところで、その、似たような前科のある私が言うのも何なのだが、最前より私は一つ、どうしても気になっていることがあるのだが…

…」

「奇遇ですね。実は私も同様なのですが、どうか自重なさって下さい。

一度ツツコミを入れれば最後、30個のポケで返してくる方です」

「え、みんな何かあるの？ ポケは全然分かんないんだけど」

「え？ 何の話ですか？ わたしも混ぜてくださいいよお。」

あ、ちなみにケロちゃん髪の毛型のことなら、三つともソフトモヒカンっていうのにしてますよ？」

（（誰も聞いてねえよ！））

という思いを、その時残された三人は仲良く共有したという。

「ここならよさそうだな」

その頃鋼は、首尾よく公園らしき場所を見つけていた。

武闘大会が近いからか、何人かが魔法の練習をしているようだから、少しくらい無茶な実験なんかをしても許されるだろう。

場所に満足して、鋼は切り出した。

「これから僕のタレントとスキルを調べていくワケだけど、そのためにはまずノートの使い方を知りたいたいところなんだよね」

【そうじゃの！ ……あ、そ、それはともかく、あれなんじゃったかなあ？

こう、商売の方法で、本部が傘下の店舗にマニュアルとか店名を

渡してチエーン展開とかするアレなんじゃが、ほら、ふ、ふら、ふら何とかという……】

「話題転換下手過ぎだろ。」

……フランチャイズ、とかじゃないか？」

【よし今じゃ！ 手帳を見るのじゃ！】

「え？ ああ」

シロニヤの声に押され、手帳を開いてみる。すると、

『瞬間記憶復元』

1997.9.30 13:20

たしかにそこには、今まで見た覚えのない文字が書かれていた。

【ふっふっふ。これが、手帳の力じゃ。

発動したタレント名と、その日時が表示されるのじゃ。

分かるとは思っつのが、一応数字は、年、月、日、時間の順じゃな】

自慢げに話すシロニヤ。どうやらさっきの言葉は、鋼に思い出しにくい言葉を考えさせて『瞬間記憶復元』を使わせるシロニヤの策略だったらしい。

これで手帳の力は証明されたのだが、鋼としては俄然気になることができた。

「1997、って西暦じゃないよな？」

考えてみれば、こちらに来てからはその日暮らした生活をし過ぎて暦を確認するのを忘れていた。

元の世界で鋼がいなくなったのが9月の20日くらいだったはずなので、リンクしているような気はするのだが。

「聖王歴じゃな。年は違うが、月と日は基本的に地球と同じじゃ。

そついう世界にしたのじゃからな」

鋼もたまに忘れるが、ここは地球とは全く違う法則が根付く異世界。

大地はそもそも球ではなく平面であり、星という概念が通用しない以上、自転周期や公転周期とかいうものは存在しない。

なのに一日の周期が24時間で、一年が365日というのはあまりにおかしな話だが、これは神様がそういう風に作ったのだから仕方がないとしか言いようがない。

他にも重力とか潮力とかコリオリの力とかは存在するのかどうなってるんだとか言い出せばキリがないので、鋼はもう思考を放棄していた。

神様ってというのは、少なくとも衰退した世界の妖精さんくらいには理不尽な存在なのである。

神様の理屈無視のチートっぷりを再認識しつつ、次に確認しなければいけないのは鋼の現在の能力だ。

LV	24	HP	6679	MP	2218
筋力	92	知力	0	魔力	0
敏捷	45	頑強	0	抵抗	0

「心なしか、筋力と敏捷がまた少しだけ上がってるような……」

【筋力は素振りで上がるんじゃないし、あの……ええと、名前を忘れたんじゃないが、あの剣……】

「魔剣グラン・ウインド？」

鋼が正解を教える。ちなみにその瞬間、手帳に二つ目の『瞬間記憶復元』の文字が浮かび上がったのは内緒である。

【それじゃな！ それを振ったせいかもしれんし、敏捷なんて最悪ちょっと速く歩くだけでも上がるのじゃよ】

「その割に、他が全然上がってないよな」

【知力は本を読めば上がるのじゃ。魔力は魔法を使えば。

頑強と抵抗はそれぞれ物理攻撃、魔法攻撃を受ければ上がるはずじゃー！】

「あれ？ でも、僕はクロニヤに思いつきり殺されかけたはずだぞ？」

【あれはあれじゃよ。システム外スキルじゃったから、体が攻撃と認識できてなかったんじゃな】

「よく分からないけど、すごいな異世界勇者」

今思えば、よく撃退できたものだと思う。

【じゃが、あいつはこの世界に手の内を見せすぎたのじゃ。

あの攻撃はもうこの世界に組み込まれ、新種のスキルとして登録されとるはずじゃよ】

「ふーん」

何かあと一つか二つくらいなら奥の手を隠してそうだが、おそろくそれも使って行く内にこの世界に認知され、新たな技としてこの血肉になっていくのだろう。

この世界のシステムというのもなかなかにしたたかだ。

【ともあれ、これだけのHPとMPがあれば、昔は使えなかったスキルが色々使えるはずなのじゃ！

今回は覚えている限り、スキルの解説もしていくのじゃぞー！】

今日は最初から元気いっぱいなシロニヤ。

聞いてはいないが、もしかすると例の鬼とやらがなくなったのかも知れない。

「なら、とりあえず使えそうなスキルから調べていくか」

幸いなことに覚えている技の中には露骨なパクりっぽいものはふくまれておらず、それは鋼を大いに安堵させた。が、

【なぜじゃよ！ なぜ『亀亀波』とか『邪蛇闇拳』とか『てんじょうりゅうせん』とか『回転丸』とかがないんじゃ！

こんなのってないのじゃ！ こんなのってないんじゃよ！】

シロニヤがネタ動画で投稿されそうなくらい本気で悔しがっていた。

【おぬしもおぬしじゃよ！ なぜそんな冷静な顔をしておるのじゃ！

おぬしも中学二年生の頃は、『オツス！ オラ海賊になるってばよ！』とか口癖のように言ってたじゃろ！？】

「変な黒歴史を捏造するなよ！？

僕の中学二年生はもつと落ち着いてたよ」

【ふん！ 灰色の青春じゃな！】

負け惜しみのように言うシロニヤの言葉を聞きながら、鋼は内心で考えていた。

（まあ、それより前、小学生低学年くらいの頃なら、そのくらい言ってたかもしれないけど）

少し年上の友達なんかと、毎日バカみたいなことばかりを話していた時期だ。

その当時なら、たしかに口癖のように「オレ、大きくなったらヒーローになるんだ」とか言っていたかもしれないし、最悪、「勇者王に、オレはなる！！」くらい言っていたような気もする。

色んな意味で、鋼は多少早熟だったのだ。

そして、ようやく能力の検証である。

その検証内容は多岐に渡り、ついでに言えばノートに出てきたりスキル欄にあったりしてもシロニヤが効果を忘れているものなどがあつたりして色々と大変だったのだが、二人は騒ぎながらも楽しそ

うに検証作業を続けた。

代表的な物を挙げるなら、こんな感じである。

タレント名『正確に不正確なる打鍵』

【ちょっとワシの名前を呼んでみるのじゃ……おお！ 発動したのじゃー！】

「どんな効果なんだ？」

【うむ。名前を呼ばれた相手は十秒間、確率と確立、自身と自信、以外と意外の変換を確実に間違えるのじゃ】

「みみっちい上にこの世界じゃ全く意味ねえよ！」

タレント名『ゾロ目キーパー』

【例えばコウがこれから体を鍛え続け、筋力777になったとする。すぐく縁起がいいじゃ。じゃが鍛えたらすぐ778になってしまっ。

「さあどうする？」

「鍛えるのをやめて寝る」

【はい残念この人間のクズー！ 正解は、このゾロ目キーパー！ これを使った能力値は、なんとどれだけ鍛えても全く上がりません。

一家に一台、ゾロ目キーパー、さあご感想は？」

「何で後半ノリがテレビショッピングなんだ？」

【もはやタレント自体に興味なしじゃよ！？】

タレント名『ワン・ウェイスカイウォーカー
天空への階段』

「おお！ 本当に空に階段があるみたいに見えるぞ！

ルビを見た時嫌な予感がしたけど、これは当たり前なんじゃないか
！」

【そうじゃろそうじゃろ！ 『天空への階段』はすごいのじゃ！

ワシも上つたら最後、下りる方法が分からないという欠点がないければ、自分で試したいくらいじゃよ！】

「……なあ。もう僕、二十メートルくらい上っちゃったんだが」

スキル名『被造物瞬間消去』

消費MP 45

【なんとなんと、ゴーレムやホムンクルスなどの人工的に作られた相手なら、その一部に触れながらキーワードを唱えるだけで消滅させられる、超絶スキルなのじゃ！】

「超絶……。まあ、それなら確かに一撃必殺つぽいけど。

ちなみにキーワードって？」

【神様お勧め早口言葉百選じゃ！】

「悠長すぎるわ！ どこか瞬間なんだよ！」

【むう。消滅自体は、一瞬なんじゃがなあ……】

スキル名『フラッシュ・カウンター』

消費MP 15

【たったの消費MP15で使える高性能カウンターじゃぞ！

発動している間のダメージを無力化し、その予測ダメージを次のこっちの攻撃力に加算できるのじゃ！】

「ダメージをただ返すだけじゃなくて、攻撃力に加算っていうのが

新しいな！」

【そして気になる発動時間はなんと、絶対時間にして約0・017秒の刹那、そこからズレた攻撃のダメージは百倍になるという胸熱仕様じゃ！】

「バグだよそれ！ それ明らかに一つの攻撃終わらないじゃん！ 攻撃食らってる最中に時間切れじゃん！ 何考えてんだよ、お前は！」

【え？ 1フレームカウンターとかめっちゃ燃えるじゃろ？】
「格ゲー感覚か……！」

「ずいぶんと、調べたな……」

【そう、じゃな。ワシもちよっと、疲れて来たのじゃ……】
検証を始めたのは昼過ぎからだ、今はそれから既に二時間以上が経っている。

「まだ、何か調べられるのあったっけ？」

【属性系、がたぶんいくつかあるはずなんじゃがな】
「属性系？」

聞き慣れない言葉に聞き返す。

シロニヤは簡潔に答えた。

【特定の属性の魔法が強力になったり、特定の属性の魔法を防いだり、とかじゃな】

ゲーム的に言えば、『火属性耐性』とか、『火属性魔法強化』とか、だろう。鋼は簡単にそう見当をつける。

【じゃが、それには魔法を使えるか、魔法を使う人に協力してもらわんと……】

シロニヤはそう言うが、だとしたら問題はもう半分は解決してい

る。

「だったらさ。協力してもらえばいいんじゃないか？」

【むう？】

「周り、見れば分かるだろ。僕たち以外、この人たちみんな、何しにここに来てるかってことだよ」

【おお！】

武闘大会前にぎわう公園。そこには、魔法の練習をする数多くの人たちがいた。

そして、

「こんなもので、いいかな？」

【そう、じゃな。属性は一通り、試したような気は、するのう】

さらに疲労困憊しながらも、鋼たちは属性系の検証を一応終わらせることができた。

まだ発動したのに効果が思い出せないタレントや不明瞭な効果のタレントはあるが、これで八割方出尽くしただろう。

「別に体力使った感じはしないけど、何だか疲れたよ」

【おぬしのは、アレじゃ。ツッコミ疲れじゃろ】

「そうかも。だったらシロニヤのはボケ疲れだな」

【ふふっ】

「あはは…」

なんとなく河原で殴り合ったライバル同士のノリで、スポーツをしたあとの心地よい疲労感的なものを感じながら、力なく二人して笑い合う。

ほどよい脱力感の中、鋼は、

(いつかこいつに、恩返しをするってのもいいかもしれないな)
なんてことを思っていた。

「あ、やっと見つけたあ！」

その時、タイミングのいいことに別行動だったララナが鋼の姿を見つけて、駆け寄ってきた。

「探しちゃったよ！ 見つかってよかったあ！」

コウくんも武闘大会、出たいんだよね？」

「え？ ああ、そうだな。あんまり真剣に考えてなかったけど……とりあえずノリと勢いと流れだけでここまで来てしまっただけだ。しかし、意識はしていなかったが、こうして自分の能力を確かめているということは、もしかすると柄にもなくやる気になっているのかもしれない。」

そんな鋼の様子を見て、深くうなづくララナ。

「あ、やっぱりそっかー。実はね。武闘大会って、明日からなんだ」「え？」

「いやー。だいたいこの時期だって分かってたんだけど、まさかもう明日とは思わなくてさー。」

あ、それでね。大会の受付って、前日の日没までなんだってさ」「え？」

まったくラトリスも知ってたなら言ってくればいいのにねー、なんて呑気に話すララナを見て、それから鋼はゆっくりと空を仰ぐ。見上げた空は、既に赤く染まり始めていた。

「え？」

日没は、近い。

第三十七章 鋼の理由、鋼の覚悟

「どけどけえ！ 邪魔だ邪魔だあ！ どけどけえ！」

容姿と年齢にそぐわない乱暴な言葉で先頭を走るのはララナ。

その後を、アステイ、鋼、ラトリスの順で続く。

「んー。このちょーしならギリギリ日没までに闘技場につくかなあ……」

さすがにA＋ランク冒険者のララナは、走りながらも全く息を切らさず、あくまでマイペースに見通しを口にする。

「そっじゃなきゃ、困るって！」

そこに怒鳴り返すのは、当然我がツッコミ王、鋼である。

日没までに登録しないと武闘大会に参加できないという驚愕の事実が発覚してからすぐに鋼は一行と合流。

全員で闘技場に向け、全速力で進軍することになった。

途中、なぜか見覚えのある修道服の人物も見えたのだが、

「じゃ、コウ様、頑張ってきてくださいねー。」

もし間に合ったら、ぎゅっとして、ごわっとしてあげますから

何か意味の分からないことを言って、にこやかに手を振って鋼たちを送り出しただけだった。

たぶん走るのが面倒くさかったのだと思われる。

「あそこを曲がれば、闘技場正面です」

最後尾からのラトリスの言葉に力を得て、鋼は速度を落とさずに角を曲がり、

「うわっ！」

歩いていた人物に、思い切り正面衝突をした。

「す、すみません」

顔を上げると、ぶつかった相手は食パンを加えた美少女転校生、ではなく、

「ああ！？ なんだあ、テメエ！ やんのか、オラア！」

見るからに柄の悪い、顔に傷のあるスキンヘッドのあんちゃんだった。

（最悪だあ……）

やはり後期デスオート的平和世界でも、このくらいの荒くれさんはいらっしゃるらしい。

「あんじゃあワレエ！ ワビイ入れるゆうならさっさと兄貴に金出して土下座せんかい！」

ナマ言いよるならドタマかち割ってタマとつたるでえ！」
その心の声を聞き咎めたというワケではないだろうが、隣にいたバリバリのモヒカンの世紀末ファッションのお方が詰め寄ってくる。それにしても脅し文句のクオリティが色々ひどい。

【おおー！ す、すごいのじゃコウ！

これはそっちの世界ではすでに絶滅したと伝えられる伝説の人種、893さんではないか！？

まだ実在しておったとは……】

（はしゃいでる場合かよ）

脳内でシロニヤは一人喜んでいるが、少なくともここで時間を取られるワケにはいかないハガネとしてはピンチではあった。

困り果てた鋼の耳に、シャン、シャン、という涼しげな音が二回聞こえた。

すると、

「あ、何だあ！ 急にオレのスボンが……」

「うあ！ ワイの荷物が……」

急にわたたと焦り出す二人組。

「ごめんねおっさきー」

「申し訳ありませんが、先を急ぎますので」

「心配するな、峰打ちだ」

「何かほんと、すんません」

その際に全員でその横を駆け抜ける。

「って、待て。思わず流したけど、峰打ちって絶対嘘だろ！

両方とも思いつ切り切れてたぞ」

「いや、峰を使って斬ったのだ。

こちらに非があったとはいえ、あのような恫喝、元騎士としては見過ごせん」

「峰打ちの意味ねえな！」

などと、速度を落とさないうまま鋼とアステイが言い合っているとそこにララナまで入ってきた。

「あの札見た？ あの二人も大会参加者みたいだね」

「ふだ？」

そういえば、スキンヘッドもモヒカンも、首から下げるヒモのついた木の札を持っていた気もする。

「武闘大会参加者には参加証として木札が配られるのです。」

簡単ですが個人認証機能を持っていて、なくすと失格になるので注意して下さい」

やはり走りながら、ラトリスが補足する。

「ま、アステイの剣閃も見切れないとか、雑魚だよなー」

「あの程度の連中に、我が覇道を阻ませはせん！」

あくまでにこやかなララナと、何だかテンションがおかしくなっているアステイと並走し、走り続ける。

そして、

「見えました。あちらです」

ラトリスの声に顔を上げる。

闘技場が、見えてくる。

そこには、

「う、わぁ……」

壮観としか言えないような光景が、鋼の前に広がっていた。

そう、それは、

「ものつすごい、並んでるねえ……」

闘技場参加受付の前に、長蛇の列がある風景だった。

列の最後尾に並び、鋼はようやく一息つくことができた。

「この列見たときは、もう終わったと思ったけどね」

どうもこういう場合、大抵は日没までに列に並んでさえいれば、受付はしてもらえるらしい。

「参加料で5000マナも取られるし、そういう意味じゃ客商売だからねー」

大会運営側としては、参加を断るメリットがあまりないのだ。

「それにしても、すごい建物だな……」

差し迫った問題が半ば片付いて、ようやく周りに目を配る余裕もできる。

武闘大会の会場であり受付でもあるその円形闘技場は、ローマのコロッセオもかくや、と思うほどの巨大な建物だった。

【実際に大きさを言ってもそれ以上なはずじゃよ。

少なくとも東京ドームよりもでっかいのじゃ！】

(へえー。すごいんだな)

観光に便利なシロニヤの解説を聞きながら、鋼はおのぼりさん気分で見回す。

さすがに大会前日、闘技場前の熱気もかなりのものだった。

「武闘大会開催記念、キョートー名物武闘大会クッキーはいりませんかあ!？」

「券、あるよー。券、買うよー」

「さあさ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい!

安心の専門家による勝敗予想、たったの50マナだよ!」

「色んな商売あるなあ……」

武闘大会に便乗した商品や、ダフ屋や予想屋までが出張って来ているらしい。

しかし、中でも目を引いた、というか、

【う、うおおおおおおおおお!】

なんじゃあ、あれはあ!?!】

シロニヤの琴線に触れたのは、
「……ほんと、何なんだ、あれ」
近くの子供に無差別に風船？を配ろうとしては泣かせている、謎の昆虫？集団だった。

【あ、あの優美さと力強さを兼ねそろえたフォーム！
そして光沢と力強さを共にそなたあの肌つや。
さらに雄々しさと力強さをこれでもかと前面に押し出したあの角。かっこかわいいんじゃよー！】

(……そうかあ？)
なんて言いながら、めずらしく素直に子供のような興味を發揮するシロニヤを、鋼はほほえましく思っていた。

「アレは、大会マスコットのヘラクラーですね」
鋼の独り言を聞きつけたのか、もう一人の解説キャラ、ラトリスがそう教えてくれた。

「ヘラクラー？」
言われてから見ると、たしかに日本で言うところのヘラクレスオオカブト、つまりカブトムシに似ているような気がした。

「ええと、こつちにもカブトムシとかがっているのか？」
「はい。小さいものでは体長10センチ、大きいものでは5メートル程度の個体が確認されているようです」

「そ、そうか……」
さすがファンタジー世界。しかし、子供の自由研究にはそぐわない巨大さだ。

「比較的捕獲が簡単なため、一部好事家の間では人気の高い生物ですが、正直マスコットとしては……」

言葉を濁すラトリス。

というか、近寄った傍から子供を泣かせたり親にいらまれている姿を見れば、一目瞭然である。

ただ、

【行け！ 行くのじゃへラクラー！

人類なんてブツ飛ばすのじゃー！】

と大興奮のお子様もいるので、もしかすると一部の人には大受け、だったりするのかもしれないが。

「あ、ねえねえ、アレ！ 大会の賞品一覧が出てるよ！」

ララナに腕を引っ張られ、鋼は強制的にへラクラーから視線を外した。

仕方なくララナが示す方に目を移すと、たしかにそこには『武闘大会賞品目録』と大書された掲示があった。

さらに特筆すべきこととして、

『本選出場者全員に、大会から豪華賞品を進呈！』

と威勢よく書かれているのだが、

「なんか、格差がひどいな……」

その内容に、鋼はちよつと言葉を失った。

一位、つまり優勝賞品は、優勝賞金百万マナとトロフィー、それに副賞の『金剛力奥義書』だ。

奥義書の価値は正直鋼にはよく分からないが、

「金剛力、奥義、だど。こんな場所……」

などと分かりやすくつぶやきながら奥義書の文字を見つめる、アスティのうずつとした瞳を見れば、相当に貴重な物だと分かる。

二位の商品は賞金十万円と秘宝『シューティング・スター・リング』。なんとつけているだけで敏捷性が大幅に上がるという、戦いを生業にする者ならのどから手が出るほど欲しい腕輪だ。

ちなみに三位になると、賞金はがくつと下がって二万円。それと記念のブロンズメダル。

四位は賞金額かろうじて一万、賞品は希少回復薬一式。ここまできがギリギリ豪華賞品と言えそうなところだ。

五位から十六位になるともう一括りで、賞金は驚きの五千円（参加費用が返ってくるだけ）で賞品が大会オリジナルキャラの記念マスコット。

十七位から三十二位なんてさらにひどく、賞金はなしで、賞品は大会のロゴが入った羽ペン。まさに誰得な内容である。

(……ん?)

その時、鋼は意識の端にふと、何か引っかかりのような物を感じて、

「うぎゃあああああああああああああああああああああ！」

次の瞬間、どこかから聞こえたまさに魂消るような悲鳴に、意識の全てを持っていかれた。

「ッ！ どこだ？」

思索を中断された不愉快さからか、あるいは何か予感を感じたのか、鋼はいてもたってもいられず、反射的に列から飛び出して駆け

出していた。

幸いにも、騒ぎの発生源は一目瞭然だった。

そこから悲鳴が起きたと思しき場所から火の手が上がっていて、そこから断続的な悲鳴や怒号が響き渡っている。

人の流れに逆らい、その中心に向けて走っていると、

「護衛、置いてっちゃダメだよ」

「捨て置けんな。私もご一緒しよう」

「自分から厄介事に首を突っ込むその気性、案外同類ですか？」

ララナが、アステイが、ラトリスが、鋼の横に並んでくれる。

騒動の現場にたどり着いて、鋼はその異様な光景に絶句した。

「だずげ、たずげでくれえああ！！」

火の手が上がっている、と見たが、燃えているのは人だった。

二人の男が、炎にまかれて苦しみに踊り狂っていた。

あまりの光景に呆然としていた鋼に代わり、素早くラトリスが動く。

「水遁！ 水剋火！」

その叫びが終わらない内に、燃えている二人の男に水が押し寄せ

る。炎は一瞬、抵抗のそぶりを見せたが、やがて水に吞まれて消えた。燃えていた二人の男は、同時に地面に倒れた。

「誰か回復魔法を！」

「私がやるう」

鋭い叫びには、アステイが応じる。

さすがの冷静さで男たちに駆け寄り、両手を使って二人に同時に回復魔法をかける。

「大丈夫、なのか？」

ようやく我に返った鋼が近寄って聞く。

たしか、人体の二割だか三割だかを火傷すれば助からない、と聞いた覚えがある。

「確かに派手な炎だったが、ダメージ自体はさほどでもない。

きちんと処置すれば、後遺症も残らないはずだ」

アステイは軽く請け負った。

ラトリスが補足する。

「先程の炎は魔法の火です。二人共それなりの魔法耐性を持っていたおかげで、一命は取り留めたようです。しかし……」

そこでラトリスは、二人の横に落ちていた、黒焦げになった物体をつまみあげた。

「これでは、仮に傷が治っても武闘大会の参加は絶望的ですね」

それは、焼け焦げて原型を留めなくなった木札だった。

「あれ、もしかして、この二人って、さっきの……？」

そこでようやく鋼は気付いた。

倒れていたのはスキンヘッドとモヒカン。

鋼が闘技場に向かう途中ぶつかつた二人組だった。

「これで大丈夫だろう。回復魔法は私の得手とする所ではないが、応急処置としてはこれで充分なはずだ」

処置を終え、アステイが立ち上がる。

すると、

「う、あ……」

二人組の内、スキンヘッドの方がうめいて、目を開いた。

「目が覚めたのか？」

アステイが声をかけるが、まずスキンヘッドの男がまず気にしたのは、目の前に立つアステイでも、自分の身でも仲間の身でもなく、黒焦げになった木札だった。

「そ、れは、オレの……？」

茫然とした様子でラトリスの手に握られたそれを見る男に、ラトリスはいつもの調子で話しかける。

「私達が魔法の炎にまかれ、燃えている貴方方を助けました。

一体誰にこんな事を？」

「わから、ねえ。ぶつかって、声をかけたら、やろう、いきなり、オレたちに……」

そこで男は、屈辱のせい恐怖のせい、ブルブルと震えだした。

「顔は？ 見ていないのですか？」

「魔法使いが着るような黒いローブを着て、顔も、隠してやがった。見えたのは、オレたちに向けられた手と、大会参加者用の、木札だけだ。」

くそ！ 燃えちまった。オレ、の、札が！

ちくしょうが、オレは、この大会こそ、ちきしょう……！

ちきしょおお……！

そこからは、もう会話にならなかった。

スキンヘッドの男はラトリスの手から奪うように燃えカスになった木札をもぎ取って握りしめると、しきりに悪態の言葉を吐きながら涙を流していた。

もう自分たちにできることは何もない。

そう判断して、鋼たちは男たちの下を離れた。

「あんな男だが、大会には人一倍、思い入れがあったようだな」

「さすがにアレ見ると、ちょっとかわいそうになるよね」

「それより問題なのは、大会参加者の中に、あのような事を平然と行う輩がいるという事です」

ラトリスの表情は険しい。

「持続性のある火属性魔法を相手に使うというのは、明白な犯罪行為です。」

それを堂々と人目のある往来で行うとは、とても正気の沙汰とは思えません」

「うーん。放っておくと、もしかするとまた被害が出るかもしれないね」

「だが、犯人の目星などつかないだろう。ただでさえ大会時期で人の出入りが激しい。」

ヒントは、一つだけ。となれば、持ち得る手段は……」

そこでアステイが、ちらりと鋼を見た。

だが、鋼は全く気付いていなかった。

いや、そもそも、闘技場への帰り道、鋼はずっと無言だった。

衝撃的な光景に頭が一瞬空っぽになって、それが一応収まって、頭の中がリセットされて。

なのにそれでも、まだ振り払えないものが残った。いや、何もなくなっただからこそ、自分が気にしている物が何か、鮮明に分かったとも言える。

あの、声。

闘技場でのんびりと並んでいる時に聞いた、今まで一度も聞いたことのなかったようなあの声。それが、いつまでも耳から離れない。同時に、そんな声を上げさせた存在に、想いを馳せる。

鋼の脳裏に浮かぶのは、黒い異形のイメージ。人なのか魔物なのかも判然としない、幻じみた存在。

あんな風に人を怖がらせて何がしたいのか、その目的もよく分からない。

だが鋼はそいつに、不思議なシンパシーと憎悪を感じていた。

正体は分からないし、どうでもいい。

だがそいつは、大会を勝ち抜いた先に、必ずいる。

地面がでこぼこした石畳で、足元もよく見えないため、何度か転びかけたが、それでも鋼は、一心に、ただ一つのことだけを考えていた。

そうだ。こんなの、柄ではないと分かっている。

それでも自分にできることがあると、知ってしまったから。

だったら、

「僕は、武闘大会に、出たい」

気が付けば、鋼は自然とそう口にしていた。

驚くみんなの顔を見ながら、鋼は語り出す。

「できれば、とか、流されて、じゃなくて、自分の意志で、本当に出場したいと思ってる。

もちろん出るだけじゃダメだ。予選を勝ち抜いて、本選に出て、それで……」

ほとばしる想いのままに、つたない言葉を紡いだ。
ありあまる感情と、もつれる口、それを、聞いていられないとばかりに、

「ハガネ！」

誰よりも美しく凛々しい元騎士が、彼の名を呼んでそれを制する。

「ハガネ、あ、いや、その、ハガネ…殿」

「もう、呼び捨てでいいよ」

「う、うむ。その、ハガネ」

照れたように頬を赤らめ、わざとらしく咳払いをする。

「貴方の心意気を、私は立派だと思う。

かつて、貴方をその精神の在り方から害悪と断じた者がいたが、それは違う。

他人のために動こうとするその輝くような心こそが、貴方の最も優れた資質と私は断じよう」

「そんな……」

鋼は首を振る。

たしかに他人のためであっても、鋼がやろうとしているのはほんのちっぽけなことで、しかもただの自己満足だ。

むしろ、そんなことを口にするアステイこそが、この世の光そのもののように鋼は感じた。

大袈裟な言い方をするなら、美しいその立ち姿は、薄暗い街に現れた、夕闇に輝く月のようにも見えた。

「しかし……」

そこでアステイはその輝くばかりの美貌を憂いに染めて、

「残念だが今年は無理だ。諦める」

鋼の希望を、断ち切った。

「どういうことだ？」

言いながら、呆然とアステイの顔を見る。その姿はやはり、薄暗い街に現れた、夕闇に輝く月のようで……。
と、ここで気付いた。

『薄暗い』街に現れた、『夕闇』に輝く月？

「……あ」

気付いて、空を見上げる。

日は完全に西の空に没し、気付けば街はやわらかい闇に包まれていた。

「時間、切れ…？」

ぼんやりと空を見上げるしかない鋼に、

「あつはは！ こういうこともあるって、ドンマイドンマイ！」
ララナの軽快な笑い声が、やけに胸にずしんと響く。

「え？ほんとに、これで、終わり…？」

あんまりにもあんまりな終わり方に、がっくりと肩を落とす鋼。

ポン、とその肩をたたかれる。

「ハガネ、その、今回は残念な結果に終わったが、そんなに気を落とすな。」

私でよければ、まあ、愚痴くらいなら聞いてやれる」

「アステイ……」

ポン、と鞭を手に乗せられる。

「そうですね。辛い事があるのなら、全て私にぶつけて下さい。

その苛立ちも、憤りも、全て私が受け止めてみせましょう」

「ラトリス……」

こうして、仲間たちの優しさに包まれながら、鋼の武闘大会にまつわる物語は、幕を閉じたのだった……。

と、いつもならここで終わってしまうところなのだが。

「しょうがないな！。ほかならぬコウくんの願いだし、ここはボクが一肌脱ぎますか！」

そこで鋼を救うべく行動を起こしたのが、さきほど無神経な台詞で鋼を失意のどん底まで叩き落としたララナであった。

闘技場まで戻ると、

「ちよつとズルっこい感じがするから、あんまりやりたくないんだけどねー」

なんて言いながら、すっかり人気もなくなってきた受付に歩いて行き、受付のやたらいかつい係員に話しかけた。

「すみませーん。武闘大会の参加登録をお願いしたいんですけど」「申し訳ありませんが、今年度の大会受付は終了しました」「即座に返される、にべもない返事。」

しかしララナはへこたれなかった。

「そうですか。でも、こういう大会なら、推薦枠、つてありますよね。」

これを持って、責任者の方に相談してもらえますか？」

と言って、受付の人に何かを手渡す。

「それは……？」

といぶかしげだった受付の人の表情が、それを目にした途端、変わった。

それはララナのギルドカードだった。

「ララナ、ナナン、様？」

目の前にいる人物がこんな所にいるのが信じられない、という風に手をわなわな震わせ、目を見開いている。

「あれ？ ボクを知ってるの？」

「と、当然であります！ この業界で、ララナ様を知らない者などおりません！」

それを聞いて当然鋼はどの業界だよ、と思ったが、そこは自重する。

しかし、その叫びを耳にして、隣にいたもう一人の受付の人も同

じように目を見開いた。

「ら、ララナ様？ ま、まさか、昨年に行われた大陸統一総合闘技大会で『覇刃の滅姫』様と壮絶な死闘を演じられた、あのララナ様ですか？」

本当にララナはこの業界？では、有名人らしい。

それを聞いて、ララナはめずらしくもはじらうような姿を見せた。「はずかしいな。結局負けちゃったからね、あれ」

「いえ、とんでもありません！ 勝負は紙一重でしたし、アレは大会一の激戦でした。」

結局ララナ様との戦いで疲労なされた滅姫様は決勝で負けてしまわれましたが、実力的にはお二人が最強であったと自分は信じております」

「あー。あのバトルフィールド、傷は治すくせに疲れ取ってくんないもんねー」

という感じで、その場はすっかりララナペースである。

「も、もしかして、今大会、ララナ様も出場したい、いえ、出場なさってくれると...？」

期待半分、疑い半分みたいな複雑な目で、受付の人がララナをうかがう。

しかし、

「あはは。ボクはもう大陸統一大会に出ちゃったからね。いくらボクでもさすがにそういう横紙破りはしないよ」

ララナはあっさり否定。

「さ、左様で御座いますか」

すごく不自然に堅苦しくなっている受付の人だが、どうやらララナが参加しないと知って残念に思っていることだけはうかがえた。

鋼としても、てっきりララナは参加するものばかり思っていた

ので、少し意外である。

「参加基準の厳しい上位の大会で結果を残した者は、通例として下位に当たる地方の大会には出場しないという不文律があるので」と何につけても事情通なラトリスが、こっそり耳打ちをしてくれた。

「今日はボクの仲間を出場させてもらいたくてね。

ええと……」

ララナの視線がこちらを向く。

それにつられるように、受付二人の視線もこっちに動いた。

「すみません、お願いします！」

僕にはどうしてもこの大会に出たい理由があるんです」

「私も、是非ともお願いしたい。このような大会に出場した経験はないが、一度自分の力を思い切り試してみたい」

即座に答えた鋼とアステイに続き、

「私は遠慮しておきます。余人に手の内を晒す危険は冒せません」
ラトリスだけが不参加を表明する。

「というワケ。

……二人ともこういう大会の経験はないみたいだけど、実はここだけの話、トーキョの街で巨竜と戦ったのがこの二人なんだよ」

「え？ 巨竜は本当に復活していたのですか？ てつきりよくある噂話の類かと……。」

しかし、もし、それが本当なら、さぞや……」

受付二人の視線が、にわかに熱を帯びる。

倒した手段が手段だけに、鋼は少し居心地の悪さを感じた。

脈ありと見たララナが勢い任せに頼み込む。

「推薦って言っても、別にシードとかじゃなくて、普通に予選から

の参加でいいんだ。できないかな？」

「それは……いえ、ララナ様の頼みとあれば！」

「できるの？」

「もちろんですー!!」

胸を張る受付の男性。隣のもう一人も、調子のいい相方に苦笑しているが、反対ではないようだった。

何かを調べていたその相方の受付の人が言う。

「幸運なことに、ついさつき木札の破損が確認され、欠場者が二名出たところなんです。」

予選から出場の普通の枠ですが、これでよければすぐにでも手続きできますよ」

それ自体は幸運な申し出ではあったが、一行は渋い顔をした。

「欠場者、か。それって……」

男泣きに泣いていたスキンヘッドの姿が脳裏に浮かぶ。

鋼自身、もうあの一件は割り切っているつもりでいるが、あまりいい気分はしなかった。それでも、

「それで、お願いします」

鋼は、怯まなかった。

自分の目的がちっぽけで独善的であることを自覚している以上、その罪悪感すら呑み込んで進むつもりだった。

「……そうだな。私もそれをお願いしたい」

続くように、アステイも名乗りをあげる。

「はい。これよりお二人の大会登録を致します。」

では、二人のお名前をお伺いします」

「ハガネ。ハガネ・ユーキです」

「アステイ。アステイエール・ベル・フォスラムだ」

こうして、大会史に長くその名を残すことになる、いまだ無名の冒険者のエントリーは無事に成立し、鋼の武闘大会にまつわる物語が、ここに幕を開ける。

大会へのエントリーは何事もなく終わって、鋼は待っていたララナたちの下に戻ってきた。

「その、ありがとう、ララナ」

「んう？ あ、あはは。何だよ、まじめな顔してさあ。

もう、照れるよ、この女たらしい！」

「さりげなく悪口混ぜるなよ！ 全然たらしめてないぞ！」

どうしたってシリアスにならないララナとの会話を楽しみながら、しかし鋼の心はもう翌日、大会当日まで飛んでいた。

「ハガネ。色々あったが、これで私たちも……」

「ああ。明日はいよいよ、武闘大会だ！」

第三十八章 無双

「さーて。いよいよだね！」

翌日。ラトリスが事前に手配していたという宿でぐっすりと眠って英気を養った鋼たちは、ふたたび闘技場の前に訪れていた。

【今日はワシも観戦モードじゃ！】
シロニヤもオラクルで覗き見る気満々らしい。

【ふふ、今日は存分にヘラクラーの勇姿を目に焼き付けるのじゃ！】
しかも何か試合とは全然別な物を期待していた。
ヘラクラーは公式マスコットキャラとはいえ圧倒的に不人気らしいのでそんなイベントは一切ないとは断言できるが、シロニヤにはこのくらいでいてもらった方が鋼としては燃えるので、むしろ好都合だった。

気になるのは、むしろ、

「ハガネ、今日は互いにベストを尽くそう」

「コウくんならやれると思うよ。うん。イケる、イケる！」

「サポートは私にお任せ下さい」

「大変ですコウ様！ このままではお召し物が汚れてしまってもしれません！

さあその聖王の法衣をこちらへ！ さあ！ さあ！」

なぜか普通にメンツに交じってこちらに詰め寄ってくる最後の一人、

「ミスレイさん。何でここにいるんですか？」

鋼が聞いた瞬間、なぜか空気が固まった。

「聞いちゃいますか!? それを聞いちゃいますか!?」
ミスレイはやたらとうれしそうだった。
対照的に、ラトリスとアステイは渋い顔で額を押さえている。
ララナはいつも通り楽しそうだった。

「これには聞くも涙、語るも涙のワケがあるんです」
「うん。いいから事情を話すなら早くしてくださいね」
一応義務としてツツコんでみたものの、しょうもない理由というのは半ば確定しているのだ。

それに対してミスレイは、ひどい、と言いたげな顔をしたが、今さら本気には取れない。

案の定、すぐに立ち直って話し始める。

「ある朝のことです。私が仕事を中座して一休みをしていると、なんとということでしょう。」

神の家たる教会に、『仕事しろオニ!』と叫ぶ悪鬼羅刹が現れ、わたしを追い掛け回して来たのです」

「それ、たぶん普通に教会の人……」

「かよわいわたしは恐怖に震えながらも一計を案じ、自室に監禁された振りをして外に脱出したのですが……」

「え!? 逃げちゃったんだ!?」

何度も言うが、綱はツツコミ時、たまに敬語が外れる。

「気を取り直して何か面白いことないかなーと歩いていたら、コウ様たちが飛空艇に乗り込んで、どこかに出かけようとしているではありませんか。」

わたしはその後、たくさんの方が乗り込む飛空艇を見て、一人の聖職者として、思ったのです」

「……なんて？」

「これだけたくさんいるんだから、わたし一人くらい余計に載つても、ばれないよね神様、と」

「それ、密航だよおおおおおおおおお！！」

一人の聖職者として、思いつ切り犯罪行為に手を染めていた。

「やー。飛空艇では密航者として追い掛け回されてコウ様には全然会えませんでしたし、さつき遠話で教会に連絡を取ったら、もうカンに怒ってたり心配したとか号泣されたり、ほんと大変でした」

「あんたの頭が大変だよ！？」

ちなみに密航した飛空艇の料金はラトリスが建て替えました。

もはや全員からの呆れを隠そうともしない視線に、ミスレイは神妙な顔で言った。

「まあアレですよ。主も仰ってました。

『生きてるだけで、百点満点』、と」

「ミスレイさん。本当にいつか天罰くだりますよ……」

やりたい放題であった。

いざ決戦へ、という雰囲気だったはずが、誰かさんのせいでもう武闘大会とかいうテンションではなくなってしまうていた。

ちなみにその張本人であるミスレイは、

「それじゃあわたしは色々見て回りたいたところがあるので、失礼しますね。」

あ、コウ様の試合は必ず見に行きますから！」

と、場を引つ掻き回すだけ引つ掻き回しておいて、どこかへ歩いていってしまった。

あとには微妙な空気だけが残る。

そんな心の機微を敏感に察知し、ラトリスが進言した。

「焦らなくとも、まだ、時間はあります。」

ルール等の確認はお済みですか？

不安なようでしたら僭越ながら私がおもう一度説明致しますが」

「何か見落としてるかもしれないし、お願いしようかな」

鋼の言葉にうなずいて、ラトリスの解説が始まる。

「基本的に、大会におけるルールは単純です。魔法のかかった石舞台を戦いのリングとし、最後までリングに残った者が勝ち。」

物理的にリングの外に押し出される他、死亡、降参の宣言、倒れてからの10カウント、のいずれかの条件を満たすと自動的にリングから排除されます」

こういうところがファンタジー世界のすごい所だ。

これは言ってみれば審判は魔法だか神様だかが自動でやってくれるということ、このシステムなら判定でもめることはなさそうだ。

「ええと、一応確認するけど、この闘技場で人が死んでも……」

「はい。この闘技場のリング内には特別な魔法がかかっていて、先程の敗北条件のどれかを満たすと自動的にリングの外に転移させられますが、その際、体の状態はリングに入った時の状態まで戻されず。」

ただし、例外として、体力や魔力の消費による疲労、消費したアイテム、戦闘の記憶等は戻されません」

「まーそんな難しく考えなくてもさ。外に出たら傷は治る、って覚えとけばいいんだよ」

ラトリスの堅い説明に、ララナが口をはさんだ。

「大会は、二日に分けて行われます。初日には予選と一回戦のみを行い、二回戦、準々決勝、準決勝、三位決定戦、決勝は全て二日目

になります」

「今日勝たないと、明日はないってことだね」

「その通りです。そして、午前中に行われる予選ですが、実は武闘大会中、最も番狂わせが起こりやすいと言われていています」

「ええと、予選はバトルロイヤルなんだっけ？」

簡単に言えば、闘技場のリングに数十人を一気に押し込めて、最後まで立っていた者が勝ち、という超原始的な試合形式だ。

たしかにこれなら、どんなに強い人間だって負ける可能性はあるし、組み合わせによっては同じ組に強い人間が固まってしまって、普通なら本選に出られるはずの人間が負けることもあるだろう。

「そして、対戦の組み合わせですが、事前に分かってしまっただけは対戦者同士が共謀する可能性もあるので、当日に発表されます。木札を見て下さい」

鋼は自分の木札を見た。

そこには、昨日はなかった物が書かれていた。

「H、って文字が書いてあるな」

「私はD、だな」

アステイも自分の札に視線を落とし、報告する。

「それがお二人のブロック番号です。」

アステイ様が予選のD組。

鋼様は予選のH組でそれぞれ戦う事になります」

それを聞いて、鋼はほっと息を吐き出した。

少なくとも、予選からアステイと当たるという事態は避けられたワケだ。

【しかし、つくづくHに縁がある男じゃのう。

やっぱりおぬしがエロ……】

(うるさいな。それ以上言っと、しりとり始めるぞ?)

【ひいひい！ やっぱりワシの幼い肢体に興味津々なんじゃよおおお！】

と言つて逃げる気配。

しかし、そういえば冒険者ランクもHからだったなど、鋼はあらためて感慨深い物を覚える。

が、よく考えればあれから特に依頼もこなしていないので、まだランクHかもしれない。感慨深く思うのは早かった。

「予選のAからZまでの26組からそれぞれ一名ずつ。

それに、前回大会の成績優秀者等のシード選手が六名。

この計三十二名が本選を争う事になります」

ラトリスの声に、ふたたび気を引き締める。

最終日の受付が長蛇の列になるほどの人数がいて、本選に進めるのは実質たったの26名。狭き門だ。

その時、人の流れに動きがあつた。

「そろそろ予選A組の試合が始まるようですね。見ていきますか？」

「当然！」「是非に！」

鋼とアステイの返事が重なる。

「では」

と言つて、ラトリスがララナに何かを渡した。

「それは？」

「闘技場のフリーパスです。

ちなみに参加者用の木札があれば不要です」

「そ、そうなんだ……」

ラトリスの手回しのよさは異常だ、と鋼は思ったという。

「これは、凄いな……」

隣のアステイから思わず、といったように感嘆の声が漏れた。

その気持ちは鋼にもよく理解できた。

眼下の、闘技場の石舞台。

そこに、百人以上はいるだろうか。大会出場者だろうと思いきいの装備をつけた者たちが、今や遅しとばかりに逸る気持ちを抑え、互いに牽制しながら待機していた。

そう広くもないリングに、武器防具をつけた選手たちがひしめき合っているのは壮観だった。

「ん？ ラトリス、あれは？」

ふと気になって、リングの横を指さす。

リングとなつてゐる大きな石舞台の近くに小さな舞台が作られていて、そこには長い机といくつかのイスが設けられ、とても選手には見えない男が座つてゐる。

「ああ。あれは実況、解説席ですね」

「やっぱりそういうのがいるんだ」

「これも、客商売ですから」

そつけなく答えるラトリス。

出場を辞退した件といい、もしかするとラトリスの忍者的な感性からすると、戦いを見世物にすることに抵抗があるのかもしれない。

しばらくすると、その実況席に動きがあつた。そこにいた中でも一番派手な男が、立ち上がつて前に立つ。

「……始まりますよ」

耳打ちされるラトリスの押し殺した声につなずきを返しながら、鋼は知らず知らずの内に興奮をたぎらせている自分に気付いた。

スポットライトを当てられた実況らしき男が声を張り上げる。

「いよいよやってきました、第三十四回キョートー武闘大会！

今大会も実に三千人以上の猛者たちが最強の称号を求めて、この闘技場へと集まってくれました！」

きつと魔法でも使っているのだろう。

マイクを使っている様子もないのに、男の声はよく響く。

「さて、三千人の武芸者の頂点に立つのは一体誰なのか。私たちはこれから、歴史の証人になります！

おっと、自己紹介が遅れました。わたしはこの大会の前半戦、実況と審判を務める……」

延々と続く実況の男のあいさつを適当に聞き流しながら、リングの中を見やる。

はち切れんばかりに緊張が高まり、今にも暴発しそうな雰囲気は肌で感じられそうだった。

ラトリスいわく、午後の本選からが大会の本番なので、観客の少ない予選では実況なんかもこれでも控えめだそうだ。

それでも鋼には長々しいと感じられた説明が終わり、

「では、予選A組、試合スタートです！」

戦いの火蓋が、切って落とされた。

予選の第一組、Aブロックの試合は、最初から混戦、乱戦、大乱闘だった。

技巧も何もない。何しろ初めから、武器を振り回せば届く距離に

敵がいるのだ。

そこから中から戦いが始まる。ただ、力と力、武器と武器、肉体と肉体がぶつかり、弱い方が弾き出されていく。それが延々と繰り返され、

「うおおおおおおおおおおお！！」

最終的に残ったのは、筋骨隆々、全身筋肉と言つような大柄な男だった。

ワアアアアアアアアア！！

沸き起こる歓声に脳を揺らされながら、鋼は知らず知らずに詰めていた息を吐き出した。

初めて見る戦いに、鋼は圧倒されていた。これが武闘大会か、と思ひ知らされた。

さて、仲間たちの様子はどうだろうと振り返ると、

「いやー。時間の無駄だったね」

「ええ。酷い試合でした」

「腑抜けた戦いは見えて不愉快になるな」

ケロツとした顔で、試合を酷評していた。

さらに、シロニヤにいたっては、

【なーなー。ヘラクラーはいつになったら出て来るのじゃ？】
完璧に興味ゼロだった。

まあ、いつものことである。

それから先程の試合がいかにもひどかったかを話していると、

『予選Cブロック、およびDブロックの選手は……』

まるで運動会のような招集のアナウンスがかかった。

「では、行くか」

アステイは気負った様子もなく立ち上がる。

「おーえんしてるよー」

「手早く終わらせて来て下さい」

「まあ、油断だけはしないようにね」

鋼たちの声援に応え、

「見ていてくれ」

片手だけを上げると、会場に向かって行った。

それを見届けて、鋼たちもDブロックの試合が見れる位置にまで移動した。

「それで、二人の見立てではアステイはどうなんだ？」

場所を確保してから、鋼が問う。

「どう、とは？」

「その、勝ち抜けるのか、ってこと」

アステイの強さは知っているが、それが実際この世界でどの程度の物なのかは鋼にはよく分からなかった。

それに対して、

「んー。どうかなー」

「私もこの大会の出場メンバーを十分に精査してはいないので」

二人から、何とも渋い答えが返ってくる。

鋼の不安そうな様子を感じ取ったのか、
「いや、いい所までは行くんじゃない？」

ボクが戦うことを考えても、なかなか厄介だし」

「アステイエル様の戦闘能力は、全てが高い水準で安定しています。」

特に小細工なしの接近戦であれば、かなりのレベルと断言していいでしょう」

二人はフォローするようなことを言って、

「まあ、それでも百回やって百回ともボクが勝つだろうけどね」

「一方で搦め手で来られれば、対処出来ないかもしれないかもしれませんが」

すぐさまひっくり返した。

「つまり、アステイが勝ち残るのは難しいって結論でいいのかわ？」

鋼はもうぼかすのが面倒になって、直接聞いてしまった。
すると、

「そうだね。さっきも言ったけど、たぶんボクが負ける要素はない。
戦う相手としては、正直コウくんのが嫌なくらいだよ」

「戦い方が真正直過ぎ、精神面にも不安定な面が見られます。」

正面切つての対決に持ち込まないようになれば、私でも充分やれるでしょう」

そんな風に、齒切れの悪いことを言った後で、

「ただ、ま、リングをざっと見渡した雰囲気からすると」

「しかし、この予選に限って言えば」

「楽勝だね」「楽勝ですね」

二人の声が、重なった。

予選Dブロック。

石舞台の上の混戦は、収束しようとしていた。

遠くの観客からは全員がばらばらに戦っていると思われていたが、その中の四人がこっそり連携していた。

他の全員がリング上の選手全てを相手にしている中で、警戒しなくいい相手がいるというだけでその効果は大きい。

その四人は連携がバレないよう巧妙に動き、彼らがグルだということに他の出場者が気付いた時、もうその四人に対抗できるような人数はいなくなっていた。

残された者は苦し紛れに協力をして四人組に対抗しようとしたが、にわか仕込みの連携で倒せるほど、その四人は甘くなかった。

逆に動きが制限されたところを一人ずつ倒され、ついには全員が地面に倒れ伏し、リングから弾き出される結果となった。

もはや残ったのはその四人と、事ここに至っても周りと協調しようとせず、他の出場者が倒れるのを傍観していた、一人の少女だけ。

「さあて、もうお嬢さんだけだぜ？ どうする？」

痛い目に遭うのが嫌なら降参くらいは認めてやってもいいぜ？」

認めるも何も、降参の言葉を口にすれば瞬時にリングアウトして戦闘は終了するのだが、男に思わずそんな余計な言葉を吐かせるほ

どに、目の前に立つ少女は美しかった。

煌めかんばかりの金髪に控えめに整った顔立ち、細身な体を覆う白銀のプレートすら神々しく見える。

だが、それと選手としての実力は別だ。

男たちは最後に自分たちの前に立ちふさがった少女が、なにがしかの脅威になるだろうとは思わなかった。

その魅力の一つである妖精のように細い体は、彼女自身の非力さを露呈しているように見え、美しくはあるが頼りない細身の剣に、まさか自分たちの鎧を傷付ける力があるようにはとても見えなかった。

しかし、彼らは考えるべきだった。

この乱戦の中、少女が一人、美しいまま、傷一つないままでここに立っていられた意味を……。

少女が何も言わないのをよいことに、男たちが少女を半円状に囲んだ時、ようやく少女はその可憐な唇を動かした。

「……多過ぎるな」

「ああ？」

鈴を転がすような声に気を取られ、男たちには肝心の言葉が聞き取れなかった。

それで反射的に威圧するような声が出たのは、彼らの本質によるものだったのだろう。

だが少女は凜然した態度を崩さず、もう一度言葉を紡いだ。

「このリングに、五人は多過ぎると言ったんだ。

ここに立つのは、一人だけでいい。」

……そう思わないか？」

その言葉が男たちにしみこむまで、いくばくかの時間を要した。

そして、

「て、めえ……！」

いきり立った男たちが、少女に殺到する前に、

「白夜、一閃」

少女がぼそつと何かを呟き、闘技場に閃光が走る。

唐突に視界を奪われ、四人の男たちは一瞬足元をふらつかせた。しかし、男たちもいくら徒党を組んでいたとはいえ、百人を超える他の出場者を蹴散らした剛の者。

棒立ちになったのも一瞬、すぐに立ち直る。

「へ、へへ。驚かせやがって！」

こんな小細工が通用するようなオレたちじゃねえぜ！

まだ、抵抗するかい、お嬢さん？」

今のが少女の最後の苦し紛れの反撃だと考え、下品な笑みを浮かべてにじりよる四人組。

「いや、そのつもりはない」

だが、少女は静かに首を振った。

「もう、終わっている」

「あ？」

少女の言葉に違和感を覚え、自分の体を見た男たちは、驚愕に包まれる。

男たちは一人残らず、『もう斬られて』いた。

血が流れるほどの暇もなかった。男たちが自分の体を真一文字に横断する斬線に気付いた瞬間、全員がリングの外に転移させられていた。

「審判、コールを」

あっけに取られる実況、兼審判役の男に向けて、少女は淡々と言葉かけた。

「あ、よ、予選Dブロック、決着！ 勝ったのは、アステイエル選手！

アステイエル選手、本選出場決定です！」

我に返った実況が、少女の勝利を高らかに謳い上げる。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

その言葉とほぼ同時に、最初の試合などと比べ物にならないほどの歓声が闘技場を揺るがせる。

その歓声に、片手を上げて応えながら、

「本選で、待っている」

少女の瞳は、ただ一人の少年を見つめていた。

第三十九章 吸引力の変わらない、ただ一つの……

無事に予選を勝ち抜いたアステイは、

「さつすがアステイ！ 雑魚には滅法強いね！」

「目眩ましからの斬撃。所詮小細工ではありますが有効な手法です」

「……お前らはどうして素直に人を褒められんのだ？」

鋼たちとふたたび合流。仲間たちからの熱い声援に顔をしかめていた。

一方で鋼はというと、アステイの出迎えにも参加せず、

「ああー。おなかいたいー。試合でたくないー」

【おぬし、意外とプレッシャーに弱いタイプだったんじゃない……】
闘技場の隅で一人、おなかを抱えてうずくまっていた。

「いや、だって考えてもみろって！ 剣とか槍とか持って戦うんだぞ？」

ほんとそんなの文明人がやることじゃないよ！」

【すごく今さらじゃのう……】
おぬし、瀕死になりながらも異世界勇者とかに勝ったじゃろうが。それに比べれば、今回は命の危険がないんじゃないから……】

「いいや！ よく考えてみるんだシロニヤ！

あいつら死なないのをいいことに、平気で人に武器向けるんだぞ？」

【む？ う、うん？ そりゃそうじゃろ？】

「剣と槍なんて言うから分りにくいけど、要は刃の長い包丁と、柄の長い包丁だよ。それを使って周り中から襲いかかってくるんだ

ぞ？」

【う。それは、ちょっと……】
身近な物に例えられたことで想像がリアルになったのか、わずかにシロニヤは言いよどむ。

「想像してみよよ。」

『ゲツヘツへ。シロニヤちゃん、ちょっと腕もらうよー』

とか言いながら、自分の腕に少しずつ一剣、もとい刃の長い包丁が入り込んでくるんだぞ」

【う、うああああ！

や、やめ、やめるのじゃ！

ワシ、そういう痛い系の話ダメなんじゃあ！】

「あるいは、

『だいじょーぶだいじょーぶ。どうせ死んでも平気だから』

なんて笑いながら、槍、もとい刃の長い包丁が、少しずつ喉に食い込んで……」

【びぎやあああああああああああ……！！！！】

かくして恐怖は伝染する。

絶叫が鋼の脳内を埋め尽くした。

【そ、それはダメなのじゃ！ 武闘大会超恐ろしいんじゃないよ！

むしろそんなの拷問大会なのじゃ！】

「だろ！ それが正常な反応だよな！」

声を弾ませて喜ぶ鋼。

同志が増えてうれしかったのだが、

「……なあ。ハガネはあそこで何をやっているのだ？」

声が聞こえてきた。

「誰だ、あれ？」

この世界に詳しくない鋼は首をかしげるが、彼女が何かする度に、わあああああ、と歓声上がる、中には興奮しすぎて、ほっほああああああ、とか叫んでいる人もいた。

【い、今は……】

反応を示したのは、シロニヤも同じだった。

「あれ？ やっぱシロニヤもあの子、知ってるのか？」

【ぬ？ いや、それは知らんが、今一瞬、サニーの声が聞こえたよ
うな……】

サニーとはたしか、この世界にいる審判の神だったはずだ。その
声が今、聞こえたとなると……。

不愉快な想像が頭をよぎったので、鋼はあわてて考えるのをやめ
た。

それよりシロニヤに気を取られていたせいで、壇上の少女の自己
紹介を聞き逃してしまっていた。

隣にいるラトリスに小声で聞く。

「ごめん、ラトリス。ちょっと自己紹介聞き逃しちゃったんだけど、
あの子、誰？」

すると、ラトリスがめずらしく驚いたような顔をした。

「ご存知、ないのでですか？ 彼女こそ超学院生アイドル、リリーア
ちゃんですよ」

「いや、彼女こそ、とか言われても」

この世界に来て十日と少ししか経っていない人間に、そんなもの
が分かるはずもない。

そもそも、こちらの世界にアイドルという概念があること自体が
初耳である。

あと、さりげにラトリスがちゃん付けしているのも気になったが、ここはツツコンではいけない場面と鋼は正しく認識した。

「そういえばハガネ様は世知に疎い所がありましたね。」

彼女、リリア・マリルリールは国の最高の魔法教育機関であるラーナ魔法学院に在籍しながらアイドルをしている、現在世界に一人しかいない現役の魔法学院生アイドルです」

「はあ……」

そもそもその魔法学院とやらがよく分からないので、気のない返事にしかない。

「ラーナ魔法学院は正真正銘魔法のエリート校で、最先端の魔法の行使や研究が行われる魔法技術の粋が集まる場所です。」

基本的に入学資格は15歳から与えられ、研究職に進まなければ18歳で卒業します」

「なるほど……」

魔法学校と言われると、鋼には魔法を使えない初心者が魔法を学ぶみたいないメージがあつたが、ラーナ魔法学院は違つようだ。

一通り魔法を知っている者がさらに専門的な魔法を学ぶ場所。現代日本で言えば大学とかに近いのかもしれない。

年齢的に考えれば高校みたいな場所とも言えるかもしれないが。

【じゃつたらそこで落ちこぼれたらアレじゃな。

リアル魔法科高校のれっ】

「それで、その学校の生徒がアイドルをやるっていうのはすごいのか？」

思い出したように現れて、余計なことを言おうとするシロニヤをさえぎって聞く。

アイドルが名門校に入るのも、名門校の生徒がアイドルになるのも、すごいと言えはすごいが、どちらもありえないことではないと

思ったからだ。

「あそこは歴史がある反面、堅い校風と厳格さで知られています。何でも入学したら最後、鬼のような教師陣が生徒を無理矢理にでも卒業まで持つていくとか。」

嘘か真か、授業放棄をした生徒を追いかけて大陸を渡った教師の逸話も残っています」

「そりゃ、追う方も追う方だけど、逃げる方も逃げる方だな」

日本にいた時、鋼だってそんなに授業が好きではなかったが、さすがにそれで海外にまで逃亡しようとする気にはなれない。

「そんな学院からアイドルが出たとなれば、彼女は特例が許される程に優秀か、余程のコネでも持っているのでしょう。どちらにせよ、前例はない事です」

「そりゃ、そうだろうなあ……」

むしろそんな学院に入ったのにわざわざアイドルをやるうとする彼女の気持ちがよく分からないが、きつとまあ事情があるのだろう。

「ところで……」

そこで、少しラトリスの声の調子が変わった。

「うん？」

「さつきから、Hブロックの選手が呼ばれています、行かなくて宜しいのですか？」

「先に言つてよ、それ！」

鋼はあわてて駆け出した。

幸い、試合には余裕で間に合った。

そして、案内に従い、闘技場の石舞台までスムーズに行くことは

できたのだが……。

(こわい。超こわい)

殺気立ったみなさんの熱気の中であられて、鋼は試合が始まる前から若干グロッキー状態だった。

しかし、ここまで来てしまえば開き直って来るのも鋼の特徴で、

(よし、とにかく最初は逃げまくる。で、逃げ切れないのは枝で払う。)

大丈夫。ラトリスさんからもらった薬もあるし、斬られて痛くても我慢する。

それで残った奴を相手にする。これしかない)

もはや作戦でも何でもない作戦を立てて、じっとその時を待つ。

「はい。では、次の試合は、予選Hブロックです！」

実況席から声が聞こえ、顔を上げる。

それは、つい先ほど聞いたのと同じ声。偶然にも、鋼の試合の実況担当は、あの学院生アイドル、リリーアだった。

「おおっと、ここでみなさんに耳寄り情報です。

なんとこのHブロックには、前回大会準優勝、今大会の優勝候補の一角の『暴風竜』マークレイ選手がいるみたいです。

マークレイさん、がんばってくださいさーい！」

とても武闘大会で聞こえるとは思えないような、血なまぐさいやり取りとは無縁そうな、能天気で明るい声が闘技場に響く。

しかし、観客はそれで盛り上がるのだから、リリーアというアイ

ドルの人気はたしかに本物なのだろう。

さらに、それに応えて、

「全く。予選くらいは目立たずに勝利を頂こうと思ったが、ままならないね。」

これも有名税ということか」

なんて声が、鋼のすぐ『隣』から聞こえてきた。

「あいつが、マークレイ」

「たしかに前回大会にいた…」

「暴風竜……」

「最初に潰すか…」

石舞台の選手たちはあたかも人垣が割れるような勢いでさっとマークレイから距離を取る。しかし、それに乗り遅れた少年が一人。

あ、やばいと鋼が思った時にはもう遅かった。

「なんだ、あいつは……」

「マークレイの仲間？」

「とりあえず、潰すか」

気付けば、周囲から向けられる敵意の輪。

「いや、あの、僕は……」

などと一応弁解しようと思つたものの、果たせるはずもなかった。

【おぬしもなかなか難儀じゃのー】

なんて完全に他人事と思つてのたまうシロニヤに、

(うるさいな。こうなったらこっぴどくやられて、お前にグロ映像見せつけてやるからな)

【ぴぎゃああああ！ グロは勘弁なのじゃよー！】
ささやかな復讐をして気を晴らしても、状況が好転するはずもなく。

極めつけは、

「君も、私の近くにいたばかりに災難だったね」

「は、はあ……」

当のマークレイからの同情の視線。

「だが、君は何も気にしなくていい」

「はい？」

その時が鋼が、何だこの人、頭沸いてんじゃないか、と思ったのも、無理からぬことだろう。

しかしマークレイは止まらない。

「暴風はね。全てを吹き飛ばすんだ」

鋼に、というよりは、彼の前にいる目に見えない観衆にでも聞かせるように、言葉を紡ぎ続ける。

「そこに例外はない。敵も味方も、奴らも君も、何もかもね」

その様子に鋼が病的な何かを感じて思わず距離を取ろうとした時、

「それでは！ 予選Hブロック、試合スタート、です！」

リリアの声が、試合開始を告げた。

緩やかに静止していた時が急激に動き出す感覚。

試合開始という合図を境に、武器防具を携えた選手たちが、まさに暴徒と化して獲物に襲い掛かる。目標はもちろん、『暴風竜』マークレイ……と、その隣に立つ少年。

試合がスタートした瞬間、鋼は反射的に、一斉にこちらに向かってくる武器を持った者たちに目を向け……ずに、隣にいるマークレ

イを見ていた。

一斉に襲い掛かってくる周りの選手たちを、軽視したワケではない。しかしそれ以上に、マークレイの様子に、何か看過できない物を感じたのだ。

そしてその予感、現実になる。

「排斥の暴風・サイクロン」

軽くつぶやいて、マークレイが指を鳴らした、瞬間だった。マークレイを中心に『暴風』が吹き荒れた。

「あ？」

最初はただの風だった。マークレイに向かって武器を振り上げようとした男は、その顔を風が撫でるのを感じた。

「なんだ？」

次に感じたのは、壁だった。マークレイに向かって駆け寄ろうとした男は、自分の体がまるで何かに当たっているかのように、前に進めなくなっていることに気付いた。

「これ、まさか、ぼつ、ふ……」

そして、その正体に思い至った時、全てが手遅れだった。

マークレイのいる方から不可視の、しかし圧倒的な圧力が迫り、男の体を浮かす。踏ん張って耐えようにも、既に男の足元に地面はなかった。

自分の意思とは無関係に、体が浮き上がる。巻き上げられる。

そしてそれは、男にだけ起こった現象ではなかった。

マークレイに殺到した者たち全員、いや、闘技場の端で、マークレイと選手たちの戦いを傍観する腹積もりだった者たちにすら、暴風は襲い掛かる。

それはまさに、『暴風』。

圧倒的なまでに暴力的な、支配者の風だった。

武器も、防具も、人も、それどころか、魔法さえも飲み込んで、大きな渦に巻き込んでいく。

巻き込まれた者は、一切の自由意思を無視され、その暴虐に甘んじるしかない。

例外は、術者であるマークレイと……その隣、もつとも暴風の影響を受けるはずの、一人の少年だけ。

それ以外の全ては、暴風にさらされ、巻き上げられ、飛ばされ、翻弄されて、次々とリングの外に飛ばされていく。苦し紛れに暴れる者、いちかばちかと魔法を使う者、対抗呪文を唱える者などがいたが、関係なかった。

術者以外でただ一人、風の渦巻く中で平時のように立ち尽くす鋼は、巻き上げられ、飛ばされていく選手たちを見て、呆然とつぶやいた。

「人がゴミのようだ……」

キョートー武闘大会、予選Hブロック。
その戦いは、予選大会でも類を見ない、波乱の展開から始まった。

第四十章 大いなる風の悪戯

たった二人しかいないリングの上、

「君には、どうして私の『暴風』が効かない？」

怪訝な顔で鋼を見下ろしてくるマークレイに、

「さて、どうしてでしょうね」

なんて余裕がある振りをして答えてはいたが、

(いやー。昨日シロニヤと属性関係のタレント、調べといてよかったあ……)

内心、鋼は冷や汗ダラダラだった。

数ある属性の中でも、風はとびつきりにまずいのだ。

【コウ！？ 分かっておるじゃろうな？】

(ああ、もちろん分かってるよ)

頭の中に響いた声に、うなずいて、鋼はマークレイから距離を取る。

風の魔法はただでさえ速い。

近くには、避けられるはずがなかった。

「おおーっと、なんということでしょうか！

試合開始、たったの十秒で、百人以上の選手が強制リングアウト！

本選出場の栄誉を手にするのは、この時点でこの二人へとしぼられましたあー！」

そんな様子をよそに、リリアとかいうアイドルが、無責任に観客を煽る。

「一人は当然、我らが優勝候補、『暴風竜』マークレイ選手。そして……おおつと、これは意外も意外！」

残ったもう一人は今大会初出場、ハガネ・ユーキ選手です。

あ、さらに情報が、これは……なんとハガネ選手、トーキョの街で活動する冒険者で、ランクは驚きのH！

もし彼が本選に出場したとしたら、これは前代未聞です！

……というか、冒険者ランクってHまであったんですねえ」

さらにきやいきやいと鋼の情報を暴露していくリリア。

鋼としては余計なお世話だ黙ってるつもりでも言いたいが、マークレイから目を逸らすワケにもいかなかった。

「君は随分と、変わった人間のようなだね」

自分の一番の技を防がれたはずなのに、マークレイは余裕たっぷりの態度で鋼に対する。

「ふむ。まあ、もう一度試してみようか」

軽い口調で言うと、

「蹂躪の暴風・トルネイド」

マークレイの手から、直径三メートル、高さ五メートルほどの竜巻が現れる。しかもその数、三つ。

「行け！」

それが、鋼へと一斉に殺到してきて、

「くっ！」

鋼は一瞬、逃げようかと足を動かしかけて……すぐにあきらめる。それよりも、と、鋼は正面から竜巻を迎え撃った。

「ほう……」

マークレイの、感心したような声。

先ほどと、全く同じ。

全てを蹂躪するはずの竜巻は、鋼の体を何事もなくすり抜けた。
鋼は、全くの無傷だった。

……そう、鋼自身は。

「私の魔法が効かないのは、おそらく祝福の類。

君のフィートか、タレントの効果かな？」

「…っ!？」

表情を動かさないようにしたつもりだが、肩がびくっと動いて反応してしまふ。

やはり、実戦経験の差はくつがえせない。

そして、

「それなのに、君はどうやら、私の風魔法を恐れているようだ」

マークレイは、さらに鋼の本質を突いてきた。

目の前の少年は、無傷ではあっても、無事ではない。

マークレイはそれを、持ち前の鋭敏な感性で見抜いていた。

「回数制限があるのか、あるいは代償を払う必要があるのか。

いずれにせよ、数を撃てば、分かること、か」

「なっ!」

言いながら、マークレイが取った行動に、鋼は思わず声を上げた。

マークレイは背中に回した手から、武器を取り出してきたのだ。

しかもそれは、明らかに、

「じゅ、うっ?」

科学が生み出すはずの兵器、マシンガン。

「よく知っているね。これは、魔銃シルフィード。

本当は本選用の切り札だったんだが、仕方ない」

マークレイは魔銃にマガジンを装着する。

「さあ、行くよ。第一の弾丸『衝撃』。

毎秒30発のこの連射を、君は防ぎきれるかな？」

「いや、ちよつとまつ……」

「それで待つと思うかい？」

マークレイの持つシルフィードが火を噴いた。

そこから大量の、風属性の弾丸が鋼に襲い掛かる。

「こんなの、冗談じゃ……」

鋼はリングの外周を回るようにして避けるが、

「そんなことで逃れられるとでも？」

毎秒30発もの攻撃を、それで避け切れるはずがない。

何発、いや、何十発も、避け切れなかった弾を喰らってしまう。

鋼は逃げながら、ちらりと観客席に目を向けた。

特に何か起こっている様子はないが、所々で騒いでいるような…

…。

「さあ、どうする？」

「待つて！ 待つてください！」

鋼は止まつて、両手を上げた。

「その、僕の風属性無効化の力は、たしかにタレントの効果です。

だけど、その詳細を知れば、あなただつてたぶん、攻撃をやめてくれるはずですよ！」

「へえ？ 興味深いね。話してみてくれよ。

私が、君への攻撃を止める理由とやらを」

仕方がない、と鋼は覚悟を決める。

本当は話したくなかつたが、これ以上食らい続ければどうなってしまうか分からない。

だから、

「僕のタレント『選択的な風の悪戯』は、風属性の攻撃を、無効化する代わりに……」

鋼は、真実を叫んだ。

「近くにいる女の人のスカートを、めくってしまっんです!!!!」

「あ、あれ？」

時が、凍りついた気がした。

そんな中、向かい合うマークレイだけが、ゆっくりと動く。

その手にするのは、本来は決勝用のまさに隠し弾。

威力重視の第三の弾丸『抹殺』。

「そんな、くだらない言い逃れを……」

マークレイはそれを、ためらいなく魔銃に込め、

「信じると思うかあああああああ!!!!」

叫びと共に、発射する。

「うわっ!?!」

狙い過たず、超高速の弾丸が鋼を襲い、すぐに無効化されると、
ほぼ、時を同じくして、

「おおっと、あまりのセクハラ発言に、わたしも思わず実況を忘れてしまいましたあ！」

マークレイ選手の必殺の弾丸が、って、え？」

実況を続ける、リリーアのスカートが、ふわっと、

「わ、ちょ、キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！」

めくれ上がった！

ワアアアアアアアアアア！！

ウオオオオオオオオオオ！！

ホアアアアアアアアアア！！

キャアアアアアアアアア！！

一斉に響き渡る絶叫と悲鳴と快哉と阿鼻叫喚。

男性のほとんどはめくれ上がったリリーアのスカート（そしてあわよくばその中（を）をのぞこうと身を乗り出し、女性は恐怖に顔をゆがめて自らのスカートをぎゅっと握りしめ、人によっては逃げ出すとす。

観客席はもう、パニック状態だった。

そんな祭りのようにも、地獄のようにも思える興奮が過ぎ去ったあと、一人の男性が、ぼつりと言葉をこぼした。

「…ぜ、…っほう」

そのつぶやきを拾ったまた別の男が、同じ言葉をつぶやく。

「…ぜま、…ほ…」

それはさらに隣に、前後に、左右に、伝播していき、やがて闘技場全体を席卷する。

そして数秒後には、闘技場全てを揺るがす、大きなコールとなっていた。

すなわち、

「……………かつぜまつほう！ かつぜまつほう！……………」

下心満載の、男性陣からのアンコールである。

「は、はは……」

こんなことになりそうだから嫌だったのに、と鋼は苦笑するしかない。

鋼のタレント、『選択的な風の悪戯』の効果は、正確に言えば風属性攻撃を受けた時、その力を利用して指定した女の子のスカートをめくれる というもので、厄介なことに特にターゲット指定をしていなくても風属性攻撃を受けると自動発動、勝手に誰かのスカートをめくる。

属性系タレントの検証に付き合ってくれたエルフの女の子のスカートをめくってしまったい、泣き出された時は本当に困った。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そんな鋼の葛藤や苦悩とは無関係に、場内の風魔法コールは鳴り止みそうにない。

マークレイはしばらく、そのコールに頭が痛そうな顔をしていたが、やがて渋々といった風に鋼に声をかける。

「どうやら、君は嘘をついてはいないようだね」

「はあ。どうも、信じていただいて……」

お礼を言うのも何か違うとは思ったが、とりあえず生来の日本人気質から頭を下げる鋼。

「しかし！ それと勝負は別だ！」

マークレイは既に最初に見た時の自信を取り戻していた。

「『暴風竜』なんて呼ばれる私だが、使えるのが風魔法だけだなんてことは、まさか思っていないよな？」

「いえ、別にどちらとも。興味ないです」

鋼の返答に、マークレイはひく、と顔をひきつらせた。

「君は、なかなか言うね。だが、その気質こそが自らの寿命を縮める物だと知るがいい」

言い終わると同時、マークレイは素早く銃を背中にししまい直す、代わりに小型のワンドを取り出して、構えた。

「凍てつく世界・コキュートス!!」

ワンドを鋼に向け、叫ぶ。
すると、

「こ、これって……」

鋼の足元から、氷が這い登るように侵食してくる。

「氷の絶対牢獄、コキュートスだ。」

その氷に囚われた者は、あらゆる生命活動、魔法を封じられ、氷のオブジェと化す」

「氷!? それは、まずっ!」

鋼がそれを聞いてあわてて逃げ出そうとするが、氷の浸食は速い。あつという間に鋼は等身大の氷の彫像になってしまった。

「審判、行動不能だ。カウントを頼む」

「あ、は、はい! ワン、ツー……」

マークレイに言われて、鋼ではないが、すっかりフリーズしていた実況席のリリィアがカウントを取り始めた。

基本的にリングを強制退去させる以外の決着はないが、石化や麻痺などで一方の選手の動きが止まった場合、特別ルールで審判が30カウントを取るまでに動けなければ負けになる。

しかし、そのカウントが三を数えることはなかった。

その前に、

「うわぁ。やっぱり服がベトベトだよ……」

鋼を覆っていた氷が砕け、細かい破片となってその場に山となったからだ。

しかも、なぜかその氷の欠片は赤く染まっている。

「どづいつ、ことだ？ 私のコキュートスは、絶対の……」
信じられないのはマークレイだ。

絶対の信頼をもって臨んだコキュートスを破れる人間がいるはずがない。

その顔には驚愕が張り付いていた。

だが、その混乱を断ち切るように、鋼は種明かしをする。

「悪いですが、あなたのコキュートスは全て、僕のタレントの力でかき氷にさせていただきました」

だが、その答えはマークレイにとって、悪夢のような物だった。

「かき、ごおり、だと……？」

「はい。しかもイチゴ練乳がけです」

「ふざ、けるなあ！」

マークレイは激昂した。

自分の得意な風属性ばかりではなく、必死に修練してやっと使えるようになった氷魔法の奥義までも、くだらないタレントで打ち消したという。

しかも、かき氷？ イチゴ練乳？

そんなふざけた結果が、許されるはずがない。

「アイス・アロー！ アイス・ニードル！ アイス・ランス！」

知る限りの高速氷魔法を鋼に見舞う。

しかし、

「無駄です。……あ、かき氷食べたいなら、無駄じゃないですけど」
勢いも威力もあるはずの氷の魔法は、鋼の手に当たる度、赤い小さな氷の破片となって、さらさらと地面に落ちる。

いや、マークレイとて理性では分かっている。

その赤い氷の破片が、イチゴ練乳をかけられたかき氷だということ

とは。

だが、だからこそ、余計にやるせなかった。

「ふざけるな！ ふざけるなよ！」

だが、どんなに悔しくても、マークレイは認めないワケにはいかなかった。

このハガネという男には、風属性も氷属性も全く効果がない、と凡百の魔法使いなら、この時点で勝利をあきらめていただろう。

だが、彼は、幸か不幸か、非凡な魔法使いだった。

威力は数段劣るとはいえ、まだ無効化されていない属性、地属性と水属性の魔法を使うことができた。

（残りの魔力を全て使っても魔法の威力を最大まで練り上げ、強化した土と水属性の魔法を放つしかない）

そう判断したマークレイは、ぼそぼそとした声で、魔力を高める呪文を練り上げる。

この間に攻撃されれば危なかったのだが、

「あの、どうかしました？ 大丈夫ですか？」

対戦相手たる鋼は、なぜか場違いにもマークレイの身を案じていた。

そして、長い長い呪文詠唱が終わった。

「これ、で、終わりだあ！」

魔力拡大最大強化！

アース・グレイブ！ ウォータ・スプラッシュュー！」

刹那、地面からは土の槍が、そしてマークレイの手のひらからは、水の奔流が生まれ、鋼を襲う。

鋼は土の槍に串刺しにされ、水の奔流に押し流される……はずだ

った。

しかし、

「うわ、今度はびしょ濡れだよ」

「なん、だ、と…?」

マークレイの前に姿を見せた鋼は、無傷。

服は土に汚れ、水に濡れているものの、全くダメージはなさそうだった。

「無駄、です。風属性と同じで、僕は属性に効果のあるタレントを持っているんです。」

その効果で、土属性の魔法を食らうと、使われた魔法の威力分、体が硬化する。

そして、水属性の魔法を食らうと……」

「く、食らうと…?」

「濡れるッ!!」

「『それは普通だ!』」

観客席から総ツッコミが入った。

「は、はは……」

カラン、とマークレイはワンドを取り落とした。
もう、マークレイに鋼を倒す術はなかった。
得意の風も、氷も、土属性の魔法ですら、鋼には全く効果がない。
水属性だけは例外なのかもしれないが、水魔法はあまり得意ではない上に、もう魔力の残量がほとんどなかった。

「降参、してもらえますか？」

それを見た鋼が、マークレイに問う。

しかし、

「……私が降参？ それは、出来ない相談だ」

マークレイはそれを聞いて、一度は取り落としたワンドをふたたび握った。

勝ち目はほとんどないと分かっていたが、それでも自ら降参することを、この男はよしとしなかったのだ。

それに対して、

「いくら僕でも、魔法使いのあなたを気絶させるくらいはできますよ。」

それに、僕の相棒のこの武器を、あまり舐めない方がいい」

鋼が、枝を振りかぶって、宣言する。

「僕の手でも、こうやって叩き付ければ、あなたを気絶させるくら

「……」

ドウオーン……！

「……あれ？」

いわく言い難い轟音がして、鋼が枝を振り下ろした場所に、大きなクレーターができていた。

人を気絶させるどころではない。木端微塵にするくらいの威力ならありそうだった。

「ええと……」

蒼白になっているマークレイと顔を見合わせ、

「ま、まあこの枝を使うと大変なことになりそうなので、ちょっと置いて」

鋼は一度、自分が手に持っていた木の枝を置いた。

そういえばこの武器は、かつてファルザスとかいう武器屋のおっちゃんに『終末兵器』だの言われた超強力アイテムなのである。

これは明らかなオーバーキルだ。

「じゃ、じゃあこれで……」

おそらく出場者の誰かのだろう、近くに落ちていた手ごろな剣を取る。

人の身に着けていた武器などの無生物は、人と一緒になければリングの境界を抜けられないため、そこら中に剣だの斧だのといった武器が転がっていたのだ。

「あ、あらためて、こいつであなたの頭を殴れば……」

言って、武器を振りかぶった瞬間だ。

ばびゅーん！

擬音にするとバカみみたいなその音が鋼の耳に届くのと、右手にちよつとした衝撃を感じたのとは、同時だった。

「えっ？」

さつきまで剣を持っていたはずの右手を見ると、そこにはいつの間にか枝が握られていた。

さて剣は、と見ると、なぜかガシャン、とリングの結界に当たり、地面に落ちている。

「あ、あれ？ ええと、もう一回……」

もう一度枝をしっかりと置いて、他の剣を手取る。
そしてもう一度振りかぶると、

ばびゅーん！

今度こそ、鋼は見た。地面に置いたはずの木の枝が、超高速で飛んできて鋼が手に持った剣を弾き飛ばし、自らがその位置に収まるのを。

「あ、まさか……」

ある予感に駆られて、鋼はループを取り出した。

（僕の記憶が正しければ、この枝には『嫉妬深い』って特性がついてたような……）

自分の考えをたしかめるため、ループを使って、自分の持つ木の枝を久しぶりに見る。

『伝説の』『名状しがたき』『殺戮好きの』『凄く嫉妬深い』『博愛主義の』『名を呼ぶことも畏れ多い』『また相棒と呼ばれて嬉しい』『ハガネ様専用の』『成長する』『世界創造の』ただの木の枝
『ワールドエンド・ブランチ』 + 2 3 9 3 7

（凄く嫉妬深くなってるー！）

鋼は心の中で絶叫した。

考えてみれば、昔ファルザスの工房で魔剣を手にした時も、色々不自然なことがあった。

思い返せば魔剣での素振りが中断されたのはあの時持っていた枝のせいだし、魔剣が折れてしまったのも、武器の威力だけではなく嫉妬故のことだったのかもしれない。

嫉妬する武器ってどんなだよとは思うが、実際にここにあるのだからしょうがない。

しかも原因はよく分からないが、嫉妬深さがエスカレートしているらしい。

とにかく、鋼はこの枝を持っている限り、他の武器を一切扱えないということになる。

「……はあ」

受け入れがたい事実だが、そういうのを受け入れるのは慣れていく。

覚悟を決めた鋼は、右手に木の枝を持ったまま、呆然としているマークレイの近くまで歩いて行った。

そして……頭を下げる。

「あなたがぐしゃぐしゃのトマトみたいになるの、僕は見たくないんです。

絶対トラウマになりますし、寝覚め悪いし！

だから、だからどうかお願いします！

降参してください！！」

かつてここまで傲慢で、低姿勢で、そして残虐な降伏勧告がはたしてあっただろうか。

その異様さと迫力に、ついにはマークレイも折れた。

「分かった。……降参しよう」

こうして、予選Hブロックは大方の予想を裏切り、無名のHラン
ク冒険者、ハガネ・ユーキが制することになったのだった。

だが、鋼は知らない。

この時観客席から、鋼の様子を熱を込めて眺める、一對の目があ
ったことを。

その人物、黒いローブに身を包んだ女性が、

「すごい。風も、氷も、土も、水も、全て呑み込んでしまうのね。

……でも、だったら、ワタシの炎はどうかしら」

と呟き、笑っていたことを。

鋼は知らない。

そう。最後まで、知ることはなかった。

第四十一章 集う視線

予選Hブロック。

マークレイという強敵に勝利し、それなりに意気揚々と引き上げる鋼であったが、

【まったく。おぬしの危なっかしい戦いを見ていたら、こっちの肝までキンキンの冷え冷えなのじゃ。

ちよっとネットでリアルヘラクラー君でも見て癒されてくるのじやよー！】

シロニヤはずいぶん心配してくれていたようで、ぷりぷりと怒りながらそんなことを言っただけで消えていった。

鋼としては思うところもないこともないが、まあ仕方がない。

そういえば、ちよっと悪いことをしたな、と実況のリリーアを振り向くと、

「~~~~~!!」

何とも言語化できない声と共に、すごい目付きで鋼をにらみつけてきていた。

それは特別な業界の人にとってはご褒美かもしれないが、鋼にそれほどの度量はない。

「あ、あはは」

お得意の愛想笑いを浮かべて手を振ると、

「ッ！」

何をされると思ったのか、弾かれたように動いて、自分のスカートを押さえた。

「あは、はは……」

さすがにそこまで警戒されると鋼も傷つく。愛想笑いも枯れ気味になった。

しかし案外、観客の受けは悪くなかった。

鋼なんかより見た目はずいぶん強そうなガタイのいいおっちゃん
が、

「その生き様、惚れたぜ、ちきしょう！」

とか叫んでくるし、最前列にいた巫女服の女性などはこちらに向
けて親指を立てて、

「グッジョブ！」

と言ってくれた。

照れくさいが、少し誇らしい気分だった。

……何をほめられたのかは、深く考えないことにした。

建物の中に戻ると、仲間たちが出迎えてくれた。

「お疲れー、コウくん」

「あ、ララナか。うん」

「もう、うっすい反応だなあ。」

「ああ！ さては……」

「な、なんだよ」

「ボクがスカートじゃないから機嫌損ねてるんでしょ、エッチ！」

「別に僕がめくりたかったワケじゃないからな!？」

鋼はしばらく、あらぬ疑惑に悩まされることになりそうだ。

そこに、アステイがやってくる。

「全く、お前の戦いを見てみると格の違いを思い知らされる」

「え？ いやいや、アステイの方こそ、あんなに俺 T U E E E E E !

！して無双してたじゃん!？」

「……お前の言っている意味は分からないが、あれを見る」

アステイは観客席を指さした。

試合の直後だからか、いつにもまして、騒然としている気がする。

「お前は、ああやって見ている人間まで笑顔にしてしまう。それは私には出来ないことだ」

「いやいや！ 僕だつてやってないから！」

観客が騒いでいるのは、おそらくスカートめくりの下りのせいで、誇れるようなことではない。

意味の分らないところで評価されても困る。

「いや、お前や、お前と共にいる人間を見ていると思うのだ。」

私とお前たちの間には、越えがたい隔たりがあるのでないか、とな

「それってアステイが疎外感を感じてるってことか？」

「いや、そうではなく、もっと、人として超えるべき壁を感じるのだ。」

そう、なんとというか、こう、変態の壁というか……」

「頼むからアステイだけはそれ超えないでくれよ!？」

鋼は一行最後の良心にそう懇願した。

「はあ。アステイも、変なところまで真面目で困る」

と、頭を抱えた鋼のところ寄ってきたのは、見覚えのある修道服だった。

「コウ様。よく、わたしの下に帰ってきてくださいましたね」

「というか、ほんとに来てたんですね、ミスレイさん」

「失礼な！ わたしは約束を曲げたことはあっても破ったことはありませんよ！」

「……それ、どう違うんですか？」

「わたしの気の持ちようです！」

「胸三寸!？」

この人相手に敬語を使わなくなる日も近いのではないかと鋼は思ったとか何とか。

で、図らずも順繰りに仲間と話しかけ、最後にラトリスの姿を探すと、彼女はなぜかお色気くノ一っぽい装束を身に付けて鋼の横に立っていた。

「ハガネ様」

「え、と、何？」

「着替えて参りました」

「え？ ああ、うん」

だからどうしたというのか。

ラトリスにしてはめずらしく意図が不明瞭だ。

似合うとも言えはいいのだろうか、と鋼が首をかしげていると、
「あの……この服ならスカートではなくともめくれると思うのです
が」

「だからそういうんじゃないからな!？」

鋼への疑惑は、既に取り返しのつかないレベルまで進行していた
ことが発覚した。

「ふう……」

一通りあいさつとツツコミを済ませ、息をついたところに、狙い
澄ましたかのように声がかかった。

【うう、コウ〜】

「シロニヤか。どうしたんだ？」

【へラクレスオオカブトって、リアルで見たら羽とか黄色じゃし、
お腹とかメツチャグロいんじゃないよー】

「知るか!！」

結局いつまで経ってもシロニヤのツツコミ役という役柄からは自
由になれないのだな、と鋼が肩を落とすと、

【ん？ コウの頭、なんか変なのがあるんじゃないぞ?】

シロニヤの方から鋼に指摘が入る。

「そつえば、頭に何か変な感じが……」

たしかに髪の毛の間に変な物がはさまっている感触がする。

違和感の正体を手探りで探し、ゴミでもついたかとおかしな感触の何かを引っ張ってみると、

ブチッ！

という嫌な音がして、鋼の手に一輪の花が残った。

「え？ なにこれ、どういうことだ？」

鋼が花を手に、混乱していると、突然シロニヤが大声を上げた。

【あ、思い出したのじゃ！

昨日、発動したけど分からなかったタレント、『頭花くん育成記』の効果じゃがな？

水属性攻撃を喰らうと、頭の花が成長するタレントだったのじゃ！」

「……そっか」

水魔法を喰らってノーダメージだった謎が解けたはいいが、さらなるビックリ人間への道を歩み始めた鋼。

僕の人生はこれで大丈夫なんだろうかと悩み始める鋼をよそに、アナウンスが予選の全試合が終了したことを告げる。

第三十四回キョートー武闘大会。

その本選が、いよいよ始まるうとしていた。

そして始まった。

「時間経つのやたら速いな！」

思わず鋼がそう叫んでしまうほど、本選までの時間は短かった。

それは実際の時間の短さの他にも、鋼が仲間たちの対応にてんやわんやだったこともあるし、どうやって調べたのだが、次の対戦相手の特徴などをラトリスに叩き込まれていたこともあるだろう。

一回戦目は試合の間隔も短いため、アステイの戦いを観戦する暇もなかった。

本選の最初の戦いが始まったと思ったら、すぐに鋼の出番である。

アステイは自分の試合、ララナは観客席の場所取り、ラトリスは鋼の頼みごとでそれぞれその場を外しており、鋼の見送りをするのはどこから湧いてきていたミスレイ一人だけだった。

「それじゃあまあ、面倒ですけど行ってきますね」

口ではそう言いながらも、鋼の目には押さえ切れない闘志が宿っている。

そうやって決意も新たにリングに向かおうとする鋼に、ミスレイは飛びついた。

「うわ、ちよっ?! ミスレイさん!?!」

悲鳴のような鋼の言葉を無視し、

「コウ様あ、んちゅー」

抱きついたまま、その頬に唇を寄せる。

「や、あわわ……」

ミスレイに抱き着かれた瞬間から彫像と化した鋼に抗う術などなく、ミスレイの唇が鋼に接触する……と思われたのだが、

「あら？」

その時、ミスレイの唇と鋼の顔の間に、割り込んできた物があつた。

ミスレイの暴拳を間一髪で止めた物。

それは、いつの間にか鋼の下まで戻って来ていたラトリスが突き出した、短剣の鞘だった。

「ハガネ様。ご所望されていた短剣です」

「え？ ああ」

「それなりに良く出来た造りであるとは思いますが、所詮は既製品。実力者からの攻撃をまともに受ければ、折れてしまう可能性もあります。」

あまり過信なされないように」

「分かった。その、色々助かったよ」

呆然としていたのもつかの間、これが好機と短剣を受け取ると、

「それじゃ、試合あるから！」

鋼は大急ぎで会場に向かった。

鋼が去って行ったあとで、ラトリスはミスレイに冷たい瞳を向けた。

「ミスレイ様。試合前の選手に強化魔法を掛ける事は、大会のルールで禁じられています」

常人なら折れてしまうような圧力。

しかしミスレイは、そんなラトリスのまなざしに真っ向からぶつかっていった。

「けれどわたしなら！ わたしの祝福なら、能力値だけを上げられます！

だから誰かがステータス画面を見ても気付かないはずですし、最

悪コウ様自身が無自覚であれば、いくらでも……！」

しかし、その激昂したミスレイの言葉をすら、ラトリスは冷たい言葉でさえぎる。

「ミスレイ様。審神者は、全てを見ておられます。

八ガネ様を失格にさせるおつもりですか？」

数瞬の、沈黙。

「……ごめんなさい。冷静では、ありませんでした」

そして、あのミスレイが、深々と頭を下げた。

しかしそれでも、ラトリスは眉一つ動かさない。

「ただ待つばかりの身の上というのも、なかなか辛いものですね
そうして自嘲するようにミスレイが笑っても、ラトリスの視線の
鋭さは和らがない。

逆に、どうしても看過できぬことがあるとばかりに、ラトリスは
ミスレイの前に、あらためて立ち塞がった。

「この際なので、伺わせて下さい。

ミスレイ様。貴方はどうして、あんな下らない嘘を吐いてまでこ
の街にいらしたのですか？」

いえ、貴方程の方が、どうして八ガネ様をそこまで気に掛けてい
らっしゃるのですか？」

返答次第では、いくら貴方と雖も……」

聞きようによっては詰問するようなその言葉に、ミスレイはやわ
らかく微笑んだ。

「ではあなたは、どうしてそこに立って、わたしほどの人間にそん
な質問を投げかけているのですか？」

「……仰っている意味が、分かり兼ねます。

理由を問われるなら、私は自らのミスから八ガネ様のお命を危険
に晒しました。

ですから……」

「ですからあなたのその言い訳は、わたしの下らない嘘よりもそんなに上等なのかと聞いています」

「ッ！ ミスレイ様！」

ミスレイの言葉の意味は全く分からなかったにもかかわらず、その言葉はラトリスの顔を怒りと羞恥で瞬時に赤く染めた。

「どうやらまた、口が過ぎてしまったようです。」

いけませんね。どうも最近、ゴワゴワ分が足りないみたいで」

「ミスレイ様、まだ、話は……」

「心配なさらなくてください。」

わたしはただ、コウ様を面白おかしく見守っていただけです。

……ですから、そんな無益なことに労力を使うのは、やめてくだ

さいね」

「ッ……！」

ミスレイが一瞬だけ意味深に視線をかたむける。

それだけで、ラトリスは身動き一つできなくなってしまった。

「それでは」

ミスレイはまるで無警戒に、ラトリスに背を向けて歩き出し、すくに見えなくなってしまう。

それを、見届けて、

「……ハアッ」

ラトリスは、ようやく詰めていた息を吐き出した。

後ろ手に回した、武器を握った手には、じつとりと汗がにじんでいた。

ミスレイが観客席に行くと、ララナはきちんと二人分余計に席を

取っていてくれたいた。

「あれ？ ミスレイ様は？」

「途中で別れました。別の場所で観戦なさるつもりでしょう」

そう答えるラトリスの口調は、すっかりいつもの調子に戻っていた。

「ふーん。まあミスレイ様がいたらボクたちも緊張しちゃうしね。気を遣ってくれたのかな？」

ま、アステイが来るかもしれないし、ちょうどいいか」

「ララナ様でも、勝てませんか？」

しかし、もしかすると先ほどの熱がどこかに残っていたのだろうか。

ラトリスは、普段なら口にしないような疑問をララナにぶつけていた。

対してララナは、いつもの能天気な顔のまま、答える。

「んー、どうだろ。」

たぶんあの人、神様関連のワンオフタレント持ちだね。

あの類は基本チート性能だからなあ……」

「そうですね」

ラトリスにはララナの言葉の意味はよく分からなかったが、言いたいことの概要は伝わった。

「それよりさ」

そこでララナが、ぐっと身を乗り出してきた。

「コウくん、勝てるかな？」

いつも明るいララナが、めずらしく気弱な声で聞く。

「相手は魔法も属性攻撃も全く使わない格闘家。

アステイエール様ほどの戦闘能力はないでしょうが、アステイエール様より数段、油断も容赦もない方です。

正直に申し上げて、今のハガネ様では勝つのは難しいでしょうね」

「そつ、か…」

ラトリスのいつも通り冷静な返答に、ララナは気落ちした声を返した。

「ボクはさ。はっきり言っちゃうと、あのちんぴら二人を襲った口
ーブの怪人とか、正直どうでもいいんだよね」

ここに来て、ララナは今までの流れを真っ向から否定するようなことを平然と口にした。

「このせか…国は、いい人ばかりいるからあんなのが目立つけどさ。」

絡まれた奴に反撃しただけで、しかも魔法まで使ったのに殺さな
かったなんて、危険度はずいぶん低いと思う。

ボクはただ、コウくんが大会に参加したら楽しそうだなって思っ
て、手助けなんかもしちゃったけどさ」

「ハガネ様が危険に晒されるのは我慢出来ませんか？」

「……危険に、っていうか。コウくん、ボクが思ったよりずっと、
本気だからさ。」

あんまり負けたりは、してほしくないな、っていうか」

それは、めずらしくララナが見せた少女らしさだと言えた。

「私は逆に、少しだけ楽しみでもあります」

そしてそれは、ラトリスだって同じだ。

いつでも冷静で無感情に見えるラトリスにだって、個人的興味を
持つ事柄がないワケでもない。

今の興味の対象は、当然、自らが仕える相手のこと。

アステイを心服させ、ララナを仲間とし、ミスレイにあれほどの
ことをさせる鋼の、その真価。

それをラトリスは、次の戦いで確かめることができるのではない
かと考えていた。

「人は極限の状況の中でこそ、その本性を明らかにします。

ハガネ様が身の内に飼っているのは、臆病なネズミか、獰猛な虎か、はたまた狡猾な狐か」

そう口にしたラトリスは無自覚に、見る者を凍りつかせるような冷徹な、しかし蠱惑的な笑みを浮かべていた。

それを目にした者は、異性にせよ、同性にせよ、その魂を縛られ、金縛りにかかってしまいそうな笑顔。

だったのだが、

「ぶはっ！ やだなー、ラトリスちゃん。

そんなんじゃないぜんぜんおもしろくないよ」

ララナはそれを一笑に付した。

「面白くない、ですか？」

「なんとというか、当たり前すぎ。

そうだなー。百歩譲って、せめて狡猾なネズミとか、臆病な虎くらいじゃないとね」

「……ララナ様の感性には、少々ついていけません」

「あはは！ 感性じゃなくて、ただ見てないだけだよ、それは」

「ララナ様？」

突然のララナの変わり様に、ラトリスはもう一度ララナの顔を見た。

さっきまで不安そうにラトリスを見ていた目は、どこかここではない遠くを眺めていて、震えていたはずの口元には、うっすらと笑みすら浮かんでいる。

「うん。思い出してきたよ。

最初に会った時、ボクはコウくんのこと、コウちゃんって呼んだんだ。

だって四つも年が離れてたしさ。

「ただど今は、ボクはコウくんのことをコウくんって呼んでる」

「何の話をされているのか、私には理解出来ません」

ラトリスには、分からない。

ララナより先に鋼を見つけて、鋼より先にララナに出会ったはずのラトリスが、何も分からない。

それが、ラトリスの知らない鋼の話だということ以外、何も分からない。

「分からないならさ。見てればいいよ」

いつの間にか、二人の立場は逆転していた。

最初、ララナが尋ねたことにラトリスが答え、ララナはある意味、その言葉に踊らされていたはずだ。

しかし今は、ララナがその迫力でラトリスを圧倒し、その言動を縛ってすらいた。

「何を、ですか？」

ラトリスが盗み見たララナの顔に、既に先ほどまでの弱気は微塵もない。

そして、それを裏付けるかのように、

「ボクのコウくんが、勝つところをさ！」

雄々しくもそう言い切ったララナの目に存在するのは、鋼に対する絶対の信頼と、おどけた口調でも隠し切れないわずかな狂熱。

「……そうですね」

だがそれを、『危うい』と感じる前に、『疎ましい』と考えた自分に、ラトリスは内心、首をかしげるのだった。

同時刻。

「急がなくては、このままでは試合が始まってしまおう！」
そんなことを口走りながら、闘技場の回廊を走る騎士姿の少女がいた。

本選第一回戦をほんの十秒、たったの一太刀で終えた、アステイ
エールその人である。

「おっと！」

角を曲がった所で近くを歩いていた通行人を避けきれず、肩をぶ
つけてしまう。

アステイは幸い少しバランスを崩すだけで済んだが、ぶつかった
相手はそのまま転んでしまった。

「すまないな。私の不注意で。」

ちよつと気になる試合があつて……」

そう言いながら、ぶつかつた相手に手を伸ばす。

アステイが衝突してしまつた相手は見る限り女性で、全身を覆う
『真つ白い』ローブを着けていた。

アステイの手につかまつて起き上がりながら、女性が言う。

「いいえ。大丈夫です。」

こちらに向かつていたということは、お目当てはハガネ・ユーキ
様の試合ですか？」

「そうなのだ！ と、いうことは、もしかや貴女も？」

「はい。ようやく用事が終わったので、見に行こうかと」

同志を見つけた喜びに、アステイの顔がほころんだ。

立ち上がり、会場に向かいながら、ローブの女性が尋ねる。

「あの、ハガネ・ユーキ様とは親しいのですか？」

アステイはその不躰とも言える質問にも、全く嫌がる素振りもな
く答えた。

「そうだな。ハガネは友人であり、目標であり、恩人であり、ライ

バルであり……。

とにかく、私の……一番大切な人だ」

「そう、ですか……」

ローブの少女は顔を隠すようにうつむいた。

そして、

「どうぞ、先に行ってください。」

ワタシはもう少しのんびり歩いていくつもりですし、この人の入りでは、どうせ二人掛けの席なんて望むべくもありませんから」

アステイに一人で先に進むように促す。

「そうか？ すまんな。では！」

元より気が急いでいたアステイは、それを聞くとすぐに会場の方
向に走り出した。

「ハガネ・ユーキの、友人……」

だからアステイは見逃してしまった。

そうつぶやいた少女のローブの裾が、まるでその感情の高ぶりに
同調するかのように、白から黒へと明滅し、その色を変えようとす
るさまを。

「ワタシの、炎は……」

その後、闇色のローブに身を包んだ彼女が何を口にしたのか、耳
にした者はいない。

その頃、鋼は試合会場となる第三闘技場前に着いていた。

予選よりも観客の数も熱気も増量されていて、それだけで萎縮し
てしまいそうになる。

「そういえば、みんなは見に来てくれてるかな？」

雰囲気には飲まれないよう、知り合いの姿を探すと、

「あ、ミスレイさん」

こちらに向かって笑顔を向けてくれる能天気シスターを発見。周りに気付かれない程度にこちらに投げキッスなんてかましてくる。

「うあ……」

ふざけて頬にキスをされそうになったことを思い出し、鋼は赤くなる。

あわててミスレイから視線を外し、さらに仲間の姿を探す。

比較的目立つ集団だから簡単に見つかると思っただが、巫女服や真っ黒なローブを着た人なんかもいたりするせいで、思ったほどは目立っていないようだ。

「あ、いた」

それでも、鋼はララナたちを発見した。よく見ると、ちょうど騎士服の少女、アステイと合流した所のようだ。

試合はもう終わったのだろうか。

鋼が仲間の試合に想いを馳せていると、ララナがこちらの視線に気付き、持ち前の元気な笑顔で手を振ってきた。

「あ、あはは」

無視するワケにもいかず、小さく手を振り返す。

「……ん？」

その時、視線を感じてふと顔を上げると、

「会場のみなさーん！」

今回特別に、ここ第三闘技場で行われる、本選第一回戦、第四試合を实况させてもらう、リリーアです！」

実況席から、あの学院生アイドルだとかいう、リリーアがいらん
でいた。
みなさんとか言いながら、明らかにこっちをガンガンにらみつ
けていた。

（あんだ女の子に手を振ってデレデレしてないで、さっさとリング
に上がりなさいよ！）

みたいな心の声が聞こえてきた気がして、鋼はため息をついた。
たしかリリーアは、前の試合まではずっと別の会場で実況をして
いたはずだ。

何も偶然こっちの会場に移った時に当たらなくてもいいのに、と
は鋼の心からの声だ。

この会場の観客はまた別の意見を持っていそうだが。

それにしても、

「みんな、のんきでいいよなあ……」

なんてことを、鋼は思ってしまう。

投げキッスをしてくるミスレイ、手を振ってくるララナ、いつも
通り無表情なラトリス、目を輝かせているアステイ、ついでにこっ
ちをにらんでいるリリーア。

全員、いかにも自然体で楽しそうだ。

彼女たちは、鋼が緊張と恐怖で今にも震え出しそうなくらいだと
いうことを、想像もしていないのだろう。

命のやり取りをするワケではないのだし、武闘大会なんて彼女た
ちにとっては遊びのような物なのかもしれない。

日本の現代人である鋼としては、いくら死なないとはいえ、実際

に殴られたり斬られたりと想像するだけで恐くて仕方がないというのに。

しかし、そんな鋼の頭の中に、

【こ、コウ？　あまり無理はするんじゃないんじゃないぞ？

い、いくら死ななくても、殴られたり斬られたりすると、痛いんじゃないかな？】

シロニヤの声が響く。

あまりにタイミングのいいその激励に、思わず笑いそうになってしまう。

(もちろん、分かってるよ)

そうシロニヤに返しながら、さっきまで感じていた不安が小さくなって、闘志に変わっていくのを感じていた。

やっぱりシロニヤには恩返ししないと、と決意を新たにしながら、鋼はリングにその足を踏み出していく。

多くの視線が集まる中、鋼の真価を問う試合が、今始まった。

第四十二章 その最奥に見えるモノ

「…え？」

リリアアが、試合開始を宣言した、直後だった。

鋼の手から、最強の武器である木の枝が、吹き飛ばされる。気が付けば、目の前には対戦相手であるマツシの顔。

一秒にも満たない間に距離を詰められ、鋼は攻撃を受けていた。

マツシがやったことは単純、縮地というスキルを使って鋼に一瞬で接近、自らの得意武器である棒で鋼の右腕を強打、反射で手が開いたところをもう一度攻撃して、枝を手放させる。

この時、マツシやその武器が少しでも枝に触れていたら、また違った結果になっただろう。だが、仲間からの情報提供で、その木の枝が驚異的な武器であると知っていたマツシは、その愚を犯さなかった。

そこからは、一方的な展開だった。

マツシの使う棒術には、相手の懐に入って連撃を浴びせる技もあった。

「う、が、げ、ぐ…！」

状況に対応し切れていないコウに、容赦なく攻撃を浴びせかける。

武器を封じたマツシは、次に鋼のあごを狙い、頭を揺らした。

こちらの世界と違い、それで脳震盪を起こすかどうかは能力値次第だが、それでも視界が揺れば状況判断が必ず遅れる。ろくに喧嘩の経験もない鋼であれば、それはなおさらだった。

その隙について、腹、腕、足と、ほとんど当たるを幸いとばかり

に容赦なく攻撃をし続ける。

もしこれがアステイであれば、比類ない攻撃力と、本人の実直で駆け引きを好まない性格から、一撃で鋼を吹き飛ばしてしまい、こゝも連続で攻撃を決めることはできなかったかもしれない。

だが、マツシにそんな甘さや緩みはなかった。

自分の最大の攻撃を繰り出すことよりも、いかにして攻撃をし続けていられるか、を考え、行動する。鋼が右に倒れそうになれば右から、後ろに崩れそうになるなら後ろから、まるでバランスを取るかのように打撃を加え、安易な大技に流れることもなかった。

第三闘技場に、ただ棒が人の肉を打つ音だけが、延々と響く。

あまりに凄惨な光景に、最初は騒いでいた観客も、やがて声を失ってしまっていた。

「……………」

その様子を伝えることが仕事なはずのリリーアも、ただ声もなく立ち尽くすだけだった。

みんな、もう気付いていた。

目の前で繰り広げられているのは、試合などではないことを。

それはどうあがいてもショーにはなりえない、一方的な暴力。

処刑、だった。

【コウ！ コウ！ しっかりするのじゃ！ コウ！】

鋼の頭にひっきりなしに誰かの声が届いたが、鋼にはそれを判別することすらできなかった。

【やめるのじゃよ！ 今すぐやめるのじゃ！

見えておるじゃろ！？ コウはもう戦えんのじゃ！

じゃから、じゃから、もう……おねがいじゃあ……】

声は途切れない。

だが鋼には意識がない。

右左前後ろ、上下左右全てから、衝撃と痛みが襲ってくる。

逃げられない。逃げるといふ意識が浮かぶほど、鋼は自分の体を制御できていなかった。

そして、

「これで、終いだ」

初めて聞く、男の肉声と共に、その処刑は終わりを告げる。

ふらふらと、焦点を失った鋼の瞳。

そこに、無情にも武器を振り上げる、男の姿が映って、

ガス！

と鋼の頭蓋骨が音を立てると共に、鋼は『気絶』した。

対戦相手の少年を、一方的に打ちのめして、打ちのめして、打ちのめし切った男、マッシは、最後に少年の脳天に自身の放てる最強

の一撃を入れて、彼に背を向けた。

少年が攻撃の最中に消えなかったということは、少なくとも最後の
一撃を受けるまでは生きていたということだが、マッシには関係
がなかった。

殴った感触から対戦相手の少年の防御力はすいぶん低いはずで、
その割にはHPが高かったのかなか死ななかったが、最後の脳
天への打撃で気絶はさせた。30カウントでマッシの勝利は決まる。
もし仮に、何らかの方法で気絶から目覚めたとしても、一連の攻
撃で確実に少年の心を折ったという確信がある。少なくとも、この
戦いの中で立ち直るのは無理だろう。

そう、思っていたからこそ、

「まったく。ラトリス、から、薬をもらってて、よかったよ」

背後から、そんな弱々しくも不敵な声が聞こえた時は、本当に驚
いた。

そして男は振り向いて、さらに驚愕することになる。

少年は、地面にはいつくばったまま、

「待て！ それは……」

小瓶に入った、見るからに毒々しい液体を、一気にあおつたのだ。
少年の口からこぼれた液体が、地面に落ちて、ジュッ、と音を立
てる。

考えるまでもない。それは、明らかに毒薬だった。
なのに、

「体力気力、モリウキー！」

意味不明な奇声を上げ、少年は、まるでそれで力を得たとでも言うように、体を起こした。

この武闘大会では、アイテムボックスの使用はできない代わりに、選手が直接薬を携帯したり使用することは許可されている。だが、過去にも、自分で毒薬をあおって回復した選手なんて当然いない。

ゆったりと体を起こし、こちらを見る少年。マツシにはその姿が、何か得体の知れない化け物のように見えた。

が、タネを明かせば、実のところ鋼が飲んだのは、マツシが思うような普通の毒薬ではなかったのである。

では何かと言えば、何を隠そうラトリスが調合した、ハイブリッドでハイエンドな、最悪かつ極悪な毒薬である。

その名も『ドーピングフィッシュスープ』。

ちなみに作り方は簡単だ。

ラトリスさんに各種毒薬を用意してもらう 混ぜる（その際混ぜるのに使用したスプーンが溶けたり煙が出たりすることがありますが、品質には問題ありません）そこに魚の汁（遺伝子組み換えでない）を入れる 混ぜる 匂いを嗅ぐ 刺激臭に悶絶する 覚悟を決めて飲む シメサバの味がする もうゴールしてもいいよね？

まあ、すごく単純に言えば、色々な毒の詰め合わせである。

刃先に塗って使ったり、粉末にして空気と一緒に吸ったり、あるいは水で薄めたり、ではなく、原液を口から直接摂取するため、強く長い効果が望めるのが特徴だ。

もちろんひどい味と効果なため、とてもではないが人類が飲める物ではない。

どんな食物でも魚が入っていれば魚料理と認識してしまう『シメサバとの蜜月』の効果を逆手に取り、魚の汁を加えてシメサバ味飲料にすることで、鋼だけが飲むことのできる史上最強の毒薬である。というか、こんな物を飲むとか、はつきり言って色々な意味で正気の沙汰ではない。

だがしかし、その分効果は激甚だった。

毒（HP自動回復）
無気力（MP自動回復・知力アップ）
麻痺（敏捷アップ）
石化（敏捷・頑強アップ）
沈黙（詠唱短縮）
衰弱（筋力・頑強アップ）
忘却（魔力・抵抗アップ）
腕封印（行動速度アップ）
足封印（移動速度アップ）

九つもの継続状態異常が『状態異常反転』のタレント効果によって鋼に力を与え、

「体力気力、モリウキー!!!」

思わず叫んでしまうほど、『気絶』の反転効果によってスッキリした頭に、さらに活力がしみ込んでくる。

【コウ!? おぬし、大丈夫なのか? コウ?!】
と必死で呼びかけてくれるシロニヤの言葉を見捨てるのは忍びないが、まずは勝利への道筋を立てなければならぬ。

起き上がった鋼は横目で自分の相棒、木の枝の位置を確認する。

（この位置じゃ、無理か）

即座に判断すると、

「だっ！」

さっきまで半死半生の怪我を負っていたとは思えない速度で、枝に向かつて飛び込む……

「させん！」

……振りをした。

マツシがふたたび武器が鋼の手に渡るのを阻止しようと移動した瞬間、鋼は反転、自分の方に迫っていたマツシの足を目掛けて、タツクルをしかける。

完全な奇襲。しかし、

「甘い！」

鋼の突撃は空を切り、それどころか、すれ違いざまにマツシの棒が鋼の背中を打ちつける。

鋼は不恰好に前方に転がって追撃こそ避けたが、追加のダメージを受け、最強の武器である木の枝とは分断された形になった。

「確かに先程の奇襲は見事だった。

俺がお前の阻止に動くことも読んでいたし、身のこなしもなかなかに機敏だ。

だが、その動きは所詮戦いの素人の物でしかない」

多少速度があっても、読みやすく無駄の多い鋼の攻撃に、マツシは脅威を感じなかった。

鋼は薬の効果で多少回復しているものの、やはりダメージがあることはごまかせない。

今も地面に倒れたまま、なかなか起き上がれないでいるのがその

証拠だ。

よく見れば突っ張った腕もプルプルと震えているし、目の焦点もすっかりとれているとは言えない状態だった。

そんな鋼をマツシは上から見下ろし、こつ締めくくる。

「予選を観戦していた仲間から、お前の情報は手に入れている。

魔法の効かない、強い武器を持っているだけの素人。

それが、彼の見立てだ。

そして俺は、もう二度とお前の手にあの武器を持たせるつもりはない」

それは事実上の勝利宣言であり、マツシからの降伏勧告だった。

【コウ、もう、いいじゃろ?】

(シロニヤ…?)

鋼の頭の中に、弱々しいシロニヤの声が響く。

【もう、もう降参するのじゃよ！

悔しいが、あいつの言うことは正しいのじゃ。

あの武器がなければ、今のコウがあいつに勝つのは無理じゃ！

あんなちよつとぶつかつただけの赤の他人のために、おぬしがここまでする理由はないじゃろ！

もういいんじゃない！ こんな痛い思いをしてまで、がんばらなくて
も……】

最後はほとんど、涙声だった。

その声に、鋼は自分が本当に心配されていることが分かって、場違いにも胸が熱くなった。

しかし、

(シロニヤ、悪い)

【わ、悪いとはなんなのじゃよ！ そう思うなら……】

(ちよっと正直、何言ってるのか分からない)

【ええー？】

ええーとか言いたいのは鋼の方だ。

鋼には、最初から、赤の他人のために頑張るつもりなんてさらさらない。

鋼が戦っているのは身近な相手の笑顔のためであり、さらに言うなら鋼自身のワガママのためだ。

そして、それ以上に……。

「こんな、勝ち試合を捨てるとか、意味分かんないんだよ……！」

そう口にして、鋼は立ち上がった。

「まだ、立つのか……」

マツシは立ち上がる少年、鋼を見て、わずかに表情を変えた。

もう目の前の少年に負ける要素があるとは思えないし、油断をするつもりもない。

だが、ここまで絶望的な状況で、なお立ち上がるその姿に、マツシはわずかな焦燥感を抱かずにはいられなかった。

ふらふらな体で、それでもその少年は、はっきりとマツシへの敵対の意志を示していた。

「危険なのは、魔法の無効化と木の枝だけで、それ以外に戦闘力はない。」

あなたが魔法使いでない以上、あの武器がない僕は、脅威になりえない。

そう、あんたは言うのか？

……僕の剣技を、一度も見たことがなくせに？」

「お前は……」

そう言っつて鋼が取り出したのは、鞘に入った短剣だった。

仲間の情報にはない武器だった。警戒する。

しかしマツシの警戒は、杞憂に終わる。

「心配しなくても、これは普通の短剣だよ。

何の魔法もかかっていなければ、特に切れ味が鋭いワケでもない」

たしかに、その短剣からはあの木の枝から感じたような圧迫感や

迫力を感じなかった。

なのに、マツシは動けなかった。

「どうした？ かかってこないのか？

僕はあの武器がなければ、脅威では、ないんだろ？」

相手が話している間に、跳び込んで殴るべきだと、彼の理性は告げている。

しかし、動けない。

ありえないことのはずなのに、自分が目の前に立つ少年を破るビジョンが、どうしても見えてこなかった。

一回り以上も年の若い、冒険者としても駆け出しのはずの小僧に、完全に圧倒されていた。

しかし、目の前にいる少年は、試合を始めた時と今では、存在の持つ迫力が全く違っていた。

まるで、羊だと思っていた獣が、実はその皮の下に獰猛な虎のとき本性を隠し持っていたとも言つように。

そしてその逡巡が、少年、鋼に、機会を与えてしまう。

「お前は僕が、強い武器を持っているだけの、ただの素人だと、言

「たな！」

鋼は息を切らしているが、その眼光は衰えていなかった。

今にも獲物に襲い掛かるとする獣のように鋭い目付きで、自らの前に立つ、棒使いの男を睨み付ける。

そして、

「なら、見てろ！ この、ただの短剣で、僕が、どう戦うか！」

叫びと共に鋼は、空に掲げるように、その短剣を抜き放った。

会場にいる鋼以外の全ての人間の視線が、鋼の抜いた短剣に集まり、同時にその全員が、対戦相手であるマッシをふくめ、すっかり確信してしまっていた。

鋼が、これからあの短剣を使って、とうとう反撃を開始すると……。

その予想は半分だけ正解であり、残り半分は

「なーんてね」

「は？」

でっかい勘違いだった。

全ての人間の意識が、鞘から抜き出された鋼の短剣に集中した瞬間、

ばびゅーん！

笑ってしまうような間抜けな音を立てて、嫉妬に駆られたとある木の枝が、鋼の手まで飛んでいく。

そいつは当然、途中にある邪魔な障害物^{マッシ}などを気にするはずもなく、

「はい、ホームライン」

枝の進路上にいたマッシは背中から跳ね飛ばされ、綺麗な放物線を描いて場外までスッ飛んで行った。

「ご苦労様。それとお帰り、相棒」

鋼が右手に収まった枝にねぎらいの言葉をかけると、枝はうれしそうにふるふると震える。

「……え？」

と漏らしたのは、リリーアか、マッシか、それとも観客席の誰か

だったのか。

誰かは分からなくても、それは会場にいる全ての人間の気持ちを代弁していた。

一方で、

「さつてと、お片付けお片付け」

会場の誰もが状況の整理ができず絶句する中、鋼は結界に跳ね返って地面に落ちたナイフをいかにものんきに拾いに行き、それを鞘に収めた。

そして、いまだに自分の身に何が起こったか分からず、呆然とリングを見上げる元・対戦相手に、鋼はにこやかに笑いかける。

「強い武器ってほんと、いいもんですね」

それは邪気は一切ない、純真で純粹な、悪魔の笑顔だった。

「あ……」

そしてそれが彼の心を折る、最後の一押しとなる。

ぼろりと、マッシは己の武器を取り落とした。

勝敗は、ここに決した。

ワアアアアアアアアアア！！

一拍遅れて、歓声が沸き起こる。

我に返ったリリアも、実況席から唾を飛ばす。

「き、決まったあ！　だ、騙し討ち、見事な騙し討ちです！

武器に頼らず戦うと宣言しておいて、後ろに捨てた武器でマッシ選手の背中を強襲、一気にリングアウトに追い込みました！

しかしさすが汚い！　忍者より汚い騙し討ちで、ハガネ選手、一回戦突破だあ！」

もしかすると予選でスカートをめくられた腹いせなのか、鋼をほめているのかけなしているのか分からないような実況を背に、鋼は悠々とリングを後にした。

「お疲れ様です」

リングを降りると、いつの間に観客席から移動したのやら、ラトリスがやってきていて出迎えてくれた。

しかし、忍者をバカにされたせいか、心なしか気が立っている雰囲気とする。

鋼はちよつと思いついて聞いてみた。

「忍法旋風、とか鎌鼬かまいたちとか、使えたりする？」

「はい。あの阿呆面の男をやってしまえばいいのですか？

それともあの小娘の方を？」

平然と返すラトリスに肌が粟立つ心地を覚えながらも、首を振る。

「いや、僕に使ってくれればいいから」

それだけで、ラトリスはすぐに理解してくれたようだった。

「分かりました。では、存分に」

そう言うなり、ラトリスは素早く手で印を結んだ。

鋼たちがリングを離れても、リリアはまだ実況をしていた。

「それにしても姑息！　あまりに姑息な作戦でした！

この大会でも類を見ないような最悪の…キヤ！　ちよっと、スカートが！

あ、コレまたあの野郎か！　クソ、殺してや…あ、ちよ、ダメ、ダメだってばあああ！！」

突然始まったアイドルの思わぬショーに、観客は大盛り上がりだったという。

その喧騒を背に、ラトリスは不思議そうな顔をしていた。

「ハガネ様。さっきから顔が緩んでおられますが」

「うん？」

「もしか、マゾなのですか？」

「何でそうなるっ!?!？」

一緒にしないでくれ、と言いたい。

「僕だって勝ったらうれいし、顔が緩みもするって」

当たり前のことを、なぜ不思議に思われなくてはいけないのか。

「いえ。ですが、かなり苦戦されていたようでしたので」

「ええ？　そりゃ最初の攻撃はびっくりしたし、めっちゃくちゃ痛かったけど。」

「けどそのあとはずっと、余裕だったじゃないか」

「余裕、ですか？」

ラトリスが、鋼の目をじっと覗き込んできた。

至近距離で見つめられて、普段の堅い姿に隠された、十六歳相応の美しさと可愛らしさをラトリスの中に見つけてしまい、鋼はつい目を逸らした。

ついでに、しなくてもいい言い訳までしてしまっ。

「さ、最初に攻撃され続けてたら、たしかに負けてたけどさ。

あそこで攻撃を止めちゃった時点で、もう向こうの勝ちはなかっただろ？」

そんな風に言ってみても、ラトリスからの返答はない。

鋼がいぶかしげに思った頃、

「申し訳ありません」

ラトリスは、いきなり鋼に向かって頭を下げていた。

「は？ いや、何で謝るんだ？」

「私はハガネ様を見誤っていました。」

ハガネ様の限界を勝手に早合点していた、私の不明をお叱り下さい」

「嫌だよ。ラトリスって叱ると喜ぶじゃないか」

「いえ、寧ろ喜びますが」

「ニュアンスの違いが読み取れちゃう自分が悲しいよ！」

「なら、せめてこれからも貴方を見守らせて下さい」

一転、真面目な雰囲気ですう話すラトリスの声には、いつも以上に真摯な響きがこもっているように、鋼には聞こえた。

だが、そういうのはちょっと、困る。

「普通そついうのは、たぶんこつちが頼む物だと思っただけど……」
「護衛に諜報、短い間だが、ラトリスにはずいぶん役に立ってもらっている。」

しかもミス帳消しかいう理由で、無償で。

「まあ、何だ。その気があるなら、これからは仲間としてよろしく頼むよ」

「いえ、私としては別に仲間でなくても、いつそ奴隷とかでも全く構わないのですが」

「僕が構うからな!？」

これが必要ならば完璧な人なのに、と鋼は思わなくもない。

説得のため、と割り切って、鋼は少しだけ、本音を漏らすことにする。

「あー、その、ラトリスは、いつも通り、で充分だと思うよ。

今日も、その、リングから降りた時、ラトリスが一番に出迎えてくれて、ちょっと、うれしかったというか」

一言で言えば、グツと来たというか、ああ、こういうのいいな、と思ったというか。

この気持ち、君に届け！とばかりにラトリスを見つめると、なんとラトリスは、その場で主君に対するかのように膝を折った。

「分かりました。ではこれからも私は、ハガネ様の近くでお仕えさせて頂きます。

アステイ様より、ミスレイ様より……ララナ様よりも、近くで」

台詞まで、まるで理想の従者が口にするような物だった。

そこでハツと気付く。

「あ、言っておくけど、物理的にはそんなに近くにいらなくていいからな!？」

ラトリスの言い方に何かを感じた鋼は、あわててラトリスストーカーフラグだけは全力でぶち折りにかった。

飛空艇の一件でも感じたが、忍者でMでストーカーとか、そんな無敵すぎる存在が生まれるのだけは阻止したい一心だった。

しかし、

「ハガネ様はいつも可笑しな事を仰いますね。大丈夫ですよ」

そんな鋼に対して、ラトリスはそう答え、やわらかく微笑んだ…

…気がした。

「ラトリス、今、笑っ……」
それを鋼が指摘しようかと思った時、

「コーウくん!!」

「ハガネ！」

「ゴワゴワ様ー！」

後ろから声が聞こえて、時間切れを告げる。

「というか、ゴワゴワ様って何だよ」

ぶつくさと言いながら、それでも鋼はうれしそうに、仲間の下に向かう。

その、鋼の背中を、ラトリスはじつと見つめ、

「狡猾なハムスターか、はたまた臆病なドラゴンか」

そんなことをつぶやいて、しかしすぐに、一瞬たりとも遅れてなるかとはかりに、急いで鋼の後に続いたのだった。

キョートー武闘大会一日目。

鋼にとっては辛い戦いの一日が、ようやく終わろうとしていた。

第四十三章 ファンです！

「朝からひどい目にあった……」

武闘大会二日目。

鋼の朝は、波乱から幕を開けた。

【おぬしは！ いい加減に自分の体をいたわるということを覚えるのじゃ！】

というのは、昨日、本選一回戦が終わった後に言われたシロニヤからのお叱りの言葉だ。

試合が終わって鋼が闘技場を後にしても、シロニヤからの小言は延々と続いた。

深夜三時を回り、なぜか話題が鋼の怪我と最後のファンタジーとゲームハードの歴史の関連性にまでおよんだところで、シロニヤの電池が切れた。その辺り神様とか言っても所詮三歳児である。

そこからようやく眠ることができたと思ったら、午前五時にララナにたたき起こされた。ララナは何をしていたのだから、明らかに徹夜っぽいテンションで鋼に絡んでいき、ようやくララナを追い返した時には、鋼はすっかり目が覚めてしまっていた。

それでもせめてあと一、二時間くらいは二度寝しようと思った時、ベッドの下で何かが光ったのに気付いてしまった。

「ま、さか……」

そのまさかだった。光つたのはメガネの照り返しで、ベッドの下にはなんとというか、予想通りの人物が潜んでいたのだ。

「お早う御座います。昨夜はお楽しみでしたね」

「何をだよ！」

M系最強ストーカー忍者の登場である。

そこで説教と説得と懇願と逃亡に二時間を費やし、そこで鋼は完全に二度寝をあきらめた。

仕方がないので、多少時間は早めだが一足先に会場に向かうことを決める。

「いやしかし、ホントひどい目にあつた……」

というワケで、鋼は今、トボトボと一人、会場に向かって歩いているという次第だった。

ちなみにシロニヤは昨日叱り疲れたのか、まだ一度も声をかけてこない。本当の一人ぼっちである。

そして一人ということは厄介事が持ち上がっても鋼だけで解決しなくてはならないということだ。武闘大会に出たことで鋼の顔も知られている可能性があるし、少し警戒しなくちゃな、と鋼が思った時だった。

「み、見つけましたあ！」

巫女服の女性に、なぜかロツクオンされていた。

駆け寄ってくるどこか見覚えのあるその姿を見ながら、鋼はぼんやりと、昔身内で流行っていたマーフィーの第一法則を思い出す。

いわく、洋画での彼の声の吹き替えには最近では必ず山寺……とか、そんなことを回想している場合ではなくて、「ありがとうございます！　ありがとうございます！」なぜか鋼の手を取って、感謝の言葉を言い募る女性という名の厄介事を、鋼は何とかしなくてはいけなくなったのだった。

「そ、そ、その……試合！　試合見てたんです！」
という言葉に、この巫女服の女性が以前、鋼の試合を見ていた観客の一人だったことを思い出す。

最前列にいたし、変わった服装だったので、鋼も覚えていたのだ。しかし、この反応は何なのだろうか。

大会で見ていた選手を偶然見かけた観客の反応、と考えても、いささか熱狂的すぎる。ぐいぐい来すぎて怖いくらいだ。

これではまるで……、と思ったところで、巫女服の人はさらにぐいっと鋼に詰め寄って来た。

そして、口早に告げる。

「わたし、ほんとに、ほんとにほんとにファン、いえ、大ファンなんです！」

「あ、ああ。ありが……」

「リリーアちゃんの……」

「うえ？！」

結城鋼の驚愕。

こういう場合は普通鋼のファンだと言うのではないか、じゃあ何で話しかけてきたんだ、と鋼は戸惑ったが、彼女はまだ止まらない。「試合中、わたし最前列の、一番下の段で、ずっと、一瞬たりとも目を離さずに見てたんです！」

「あ、ああ。ありが……」

「リリースちゃんのスカートを！」

「HENTAI!？」

結城鋼の驚愕、ふたたび。

鋼は驚愕を通り越して分裂とかしそうになったが、幸いそれはさらなる驚愕発言によって先延ばしにされた。

「リリースちゃん、ほんとガード堅くて、グラビアとかでも全然水着にならないし、スカートも何か魔法でもかかってんじゃないかってくらい鉄壁で、階段下で三日間出待ちしてた時も全然パンチラとかしなくて！」

「ああ、うん。そうなんだ」

適当に相槌を打ちながら、鋼は事情がようやく飲み込めてきたと考えていた。

「だからあの予選のあの時はもう何が何だかって感じで、けど少なくともスカート押さえて恥じらう姿が見えてよかったみたいなのを思ってたんですけど、もしかすると本選でもまたああいうことが起きるんじゃないかなーとか期待して、なのに試合中、一回もそんなイベント起こらなくて、試合が終わってもう帰ろうかと思った瞬間に、こう！　こう！　純白ですね！　花がですね！　満開で！　わたしもう思わず、ほあ……ああ、いえ、ほあんとくに、感動して、だからあなたにはすっごく感謝してるんです」

うん、つまり、こういうことか。

（この人、アイドルのスカートめくりに感謝して、僕にお礼言いに来たんだな……）

筋金入りの変態が、鋼の目の前にいた。

「そーですか。あなたはすぐりリアさんのことがすきなんですね」

「はい！ わたし、昔から偶像崇拜とか得意なんで！」

「ではかのじよのゆうしがみれてとてもよかったですね」

「ふひひ。あの純白を勇姿だなんて、鋼さんやっぱり紳士レベル高いですね」

「おほめにあずかりこうえいです」

ひどく残念な気分になった鋼が、それからもしばらくノーガード戦法で巫女服の変態さんの話を聞いていると、突然、彼女が手を打った。

「そうだ！ 鋼さんにはこんなによくしてもらいましたから、何かお返しをしましょうか！」

「おかえし、ですか…？」

機械のようになっていた鋼の目に、ほんの少しだけ光が灯る。それは大体、ザ○？」型のモノアイ程度の光量だったが、反応ありと見たその人は攻めてくる。

「あ、そうだ！ わたし、この大会の審判もやってるので、もし鋼さんが望むなら……」

ニヤリ、と邪悪な笑みを見せる女性。これには鋼もあわてて正気に戻った。

「いやいやいいです！ そんな不正をしてまで勝ちたいとは全然思っていないで！」

「というか、余計なことをされても困るといなのが本音だ。」

これはさすがに言いすぎたと気付いたのか、巫女服の女性も頭を下げた。

「うあ、なんというか、サーセン。」

考えてみればわたし神の代理人って立場があるんで、そういうこ

「とやっっちゃいけないんです」

「はあ……」

何か思い込みが激しいと思ったら、宗教関係の方だったのか、と納得する鋼。しかも大会の審判を任されているのなら、リリース並みの知名度があることだって考えられる。

これは早々に退却を、と思ったのだが、

「あ！ そうです！ ならせめて、祈らせてください」

「え？ いや……」

両手をガツとつかまれて、

「あなたとあなたの道行きに、幸福と幸運の天秤が傾きますように。そしてあなたの魂が、迷うことなく我が身許に召されますように」
変な台詞みたいな物を聞かされたと思ったら、

チユツ。

トドメとばかりに手にキスをされた。

「うあああ！」

こっちの世界にやってきて色々な経験をしたが、いまだに女性に免疫のない鋼はあわてて飛びのいた。

「祝福が終わりました。これできつと、また会えますね」

一方、巫女姿の女性は、一仕事終えたような満足そうな顔をしている。

「じゃ、また次の試合もアレ、期待してます！」

「次は絶対そんなことしないでですから！」

そんなやり取りの果てに、巫女姿の女性は、結局名乗りもせずに行ってしまった。

「今の一体、何だったんだ……?」
首をかしげる鋼の下に、

【浮気者の匂いがするのじゃあ!】

さらなる厄介事の芽が届く。

朝から、いや、昨日からの厄介事の連続。

「いい加減に勘弁してくれよ……」

と鋼が漏らしたのも、無理からぬことだろう。

【だが断るのじゃ!】

しかしシロニヤが勘弁するはずがないこともまた、鋼にははっきり分かってしまっていたのだった。

「それで、浮気者とかどういうことだよ」

さっきの巫女服姿の人と恋愛的な何かを勘ぐっているのなら見当違いだぞ、と思ったが、違った。

【まさかとは思つのが、またどこぞの巫女なんぞに唾つけられて、そこらのビッチ女神の祝福をつけられたりしたらんじゃろうな?!】

「ビッチ女神……!?!」

初めて聞いたフレーズだった。あと何で男神に祝福されたという選択肢が最初からないのかも気にかかる。が、まあ問題はそういうことではなかった。

どうやら神様であるシロニヤにとって、鋼が他の神様の加護だの祝福だのを受けるのは許せないことらしい。

たしかに鋼はミスレイを通じて戦女神とやらの祝福を受けたことがあるので前科はありと言えるが、その時は特に気にしていなかった

たはずである。何か信教の……ではなかった、心境の変化でもあったのだろうか。

「というか、シロニヤは今までずっと寝てたのか？

もうすぐ、僕の試合が始まるっていうのに」

なーんてことを考えながら、鋼の口は動く動く。

もしかして何か特別なタレントでも持ってるんじゃないのかって勢いで、鋼の口はシロニヤをごまかしにかかっていた。

【う。仕方ないのじゃよ！

一昨日ちよつとある知的遊戯を、そう、有識者の間でピーチマントレインと呼ばれる電腦遊戯を一人で99年プレイして徹夜したせいで、昨夜はちよつと眠かったんじゃないから！】

「仕方がない要素が一つもないだろ、それ！」

しかも遊び方が寂しすぎた。

だがとりあえず話を逸らすことには成功したようだ。

【そ、それより、次の試合じゃよ！

おぬし、もう無理はせんのだじゃろうな！？】

シロニヤまで話を逸らしにかかってくる。

だが、そこには隠し切れない心の底からの心配や、不安が伝わってきた。

「……しないよ。絶対にしない」

【約束、できるんじゃない？】

その質問に答えるのに、鋼はちよつとだけためらった。

「ああ。考えが、あるんだ。傷一つ負わない内に、終わらせてみせる」

だが結局、はっきりとそう答えた。

その言葉に安心したのか、

【すごい自信じゃなー。戦場では増長してる奴からどんどんやられていくんじゃないぞー】

シロニヤはようやくくわばった口調を砕けさせ、冗談を言うてくる。

それに鋼も安心して、軽口を返す。

「いやいや。今回に限ってはそんなことありえないね。

そもそも、僕は無理に戦うヒツ!？」

最後、声がおかしいことになったのには理由があった。

それはもちろん、

「どうした？　まるで、昼日中に幽霊を見たような顔をして……」

昼日中に出た幽霊、アステイールさんのせいである。

「昨夜、ララナが私の部屋に訪ねて来てな……」

ザンバラバラバラ状態の髪。隈の浮き出た目元。青くなった唇。まるで覇気のない幽鬼のような表情。

見る影もなくなったアステイに事情を聞くと、ぽつぽつと話し始めた。

「何だか良くは分からないが、『があるずとおく』とかいう物をしようと言つので、部屋に上げたのだ。そうしたら……」

「まさか、午前五時くらいになるまでずっとしゃべり倒されて、全く眠れなかったとか？」

そうだとすると、鋼への今朝のララナの襲撃も、つじつまが合う。

「ふふ。そうだ。流石ハガネ。よくも分かる物だ。」

しかも、請われて騎士団時代の話をしてやったというのに、最後には『ばーかばーか！ 美人チートのリア充ばくはつしろ！』と意味不明な言を残して逃亡されたのだぞ？」

「それは……災難だったなとしか言えないな」

推測はできるが、お互いにとって不幸な出来事だったのだろう。

「このままでは試合にも差し支えそうだ。」

だから早めに来て、この闘技場で適当な薬でも飲んで回復しよう
と思つてな」

「薬かあ。ドーピングフィッシュスープならあるけど」

そう言つて鋼が小瓶を取り出すと、アステイは顔をしかめた。

「やめてくれ。死ぬ」

「……だよね」

鋼はあっさり和小瓶を引つ込めた。

「今日は確か、お前の方が先に試合をするのだったな。」

残念ながら、私は見に行けないが……」

申し訳なさそうに言うアステイを、鋼は手で制した。

「ああ、来なくていいよ。見応えのない試合になるだろうからね」

「そう、か？ なら、いいが……」

鋼の言いように少しだけ眉をひそめながら、アステイはうなずいた。

「それじゃあ僕はもう行くよ」

「ああ。……がんばれよ」

そんなアステイの別れの言葉に、

「それは、僕の対戦相手にこそ言つべき台詞だね」

鋼は不敵に手を振つて、応えた。

「……………」
闘技場の方向を見て、じっと何かを憂うような顔で立ち尽くすアステイ。

「おい！ アステイ！」

そこに、やけにツヤツヤした顔で元気一杯なララナが話しかけてきた。

「ララナか。お前はいつも元気そうだな」

「んー？ そりゃ元気だよ。アステイの方はなんか元気なさそうだね？」

「何か、だと？ それをお前が……いや、いい」

アステイはララナの罪悪感の欠片もない顔を見て、追及をあきらめた。

それよりも、アステイには気にかかることがあった。

「ララナは、ハガネの次の対戦相手を知っているか？」

「んー？ たしか、ランクC+の短剣使い、だったかな？」

大して強くないんだけど、反撃をうまく決めてここまで来たみたい。

言っちゃ悪いけど、あんなの相手に負ける方が難しいと思うな」

あくまで能天気にごぼすララナに、アステイは、

「……………だと、いいのだけどな」

どこか陰のある口調で、そうつぶやいたのだった。

「……………ラトリス」

鋼は闘技場に向かう最後の廊下で、待ち構えるラトリスの姿を見つけた。

「お待ちしていました。」

朝は慌ただしくしてお伝え出来なかった対戦相手の情報を、お伝えに上がりました」

「いや、慌ただしかったのはラトリスのせいだからね!？」

この鉄面皮が忍者の業か、と鋼は戦慄したという。

それを無視し、鋼の横に並んで話し出す。

「では時間もありませんので、早速。」

まず、これは昨日も話しましたが、今回の対戦相手はランクC+の短剣使いサミラス。

彼は基本的に守りを固めて相手の隙を見つけて反撃することを好

み……」

「もう、いいよ」

しかし鋼はそのラトリスの言葉をさえぎった。

「もういい、とは?」

「そりゃ、ラトリスが念のため、対戦相手の情報をこんなに集めてくれたのはうれしいけどさ。」

「必要ないよ」

「……そう、でしょうか」

めずらしく、不服の言葉を漏らすラトリス。

それに対して、鋼は軽い調子で言った。

「他の人ならともかく、ラトリスは、僕の目的も知ってるんだろ?」

「……はい」

「だったらさ。いくら僕でもここでドジを踏んでつまずいたりしないって、分かってくれるよね?」

「……はい」

ラトリスは、うなずいた。
他ならぬ鋼にそう言われれば、彼女にはうなずくしかなかったのだ。

「じゃ、僕は行ってくるから」

そうして、鋼は闘技場へと足を踏み入れる。

対戦相手の情報も、自らが傷つく覚悟も、持たないままで。

鋼が闘技場に入ると、

「さーて、第二闘技場、本選二回戦第二試合の実況は、わたし、リ
リーアが担当します。

みんな、よろしくー！」

聞き覚えのある呼びかけに応えて、観客が大きな歓声を上げる。

「また、あの子か……」

鋼は思うものの、今回はもう気にしない。

どうせすぐ終わらせるんだ、という気持ちがあったからだ。

鋼は闘技場に向かうが、対戦相手もろくに見ない。

ただ自信にあふれた足取りで、リングの上上がった。

そして、とうとう、

「それでは！ 本選二回戦、第二試合、スタートオ！」

試合が、始まる。

決着は、一瞬でついた。

開始から、たったの一秒。

なんと大方の予想に反し、今までカウンター専門の戦法しか取っていなかったはずの対戦相手、サミラスが、鋼に向けて一直線に飛び掛かる……その前に、

「参りましたあ！」

鋼は、さわやかな、あまりにさわやかな顔で、そう言い切ったのだった。

第四十四章 本当の勝利者

「……いない、かあ」

リングを降りたところで少し探してみたが、近くにラトリスの姿はなかった。

もしかすると試合が始まる前に観客席の方に律儀にも移動したのかもしれない。

仕方なく一人で戻ろうとすると、

「待ちなさいよ！」

後ろ、つまり今まで鋼がいた闘技場の方向から、声をかけられた。

振り返るとそこには、闘技場の上でよく見た顔。

たしか、名前は……。

「リーリアさん？」

「リーリアよ！」

『瞬間記憶復元』が発動しないと、鋼の記憶力なんてこんなもんである。

「アイドルの名前間違えるとか信じらんない。

ホント、信じられない！」

気の強そうな顔で何か言っている。

どうやら人前に出ている時はでっかい猫をかぶっているらしい。

スカートめくりの辺りで既に、いくらかメッキが剥がれていたよ
うな気もするが。

「それで、何か用ですか？」

鋼が聞くと、その一言で冷静になっただけらしい。

今度は感情を押し殺したような声で、鋼をにらみつけながら、話し始める。

「わたしね。無理言っつてさっきの試合、あなたのこの担当になるように代わってもらったの。」

「あなたが無様に負けるところを見るためにね」

「それは……ご苦労様です？」

やっぱりアイドルをやっている時と違って、ずいぶんと乱暴な言葉遣いだった。

おそらくこっちが素なのだろう。

鋼としてはとりあえず当たり障りのない対応を心掛けたつもりだったのだが、

「ふざけないで！」

「ええ？」

いきなりキレられてしまった。

鋼としては、ふざけていたつもりはないが、しかしアイドル様にはお気に召さない態度だったようだ。

「一回戦を見た時、あなたの目には何かがあった。」

強い目的意識。戦おうとする意志。そんなものが。

だからわたしは、あなたの試合を担当しようと思った！

なのに、あのザマは何？」

それは、さっきの試合のことを言っているのだろうか。

「二回戦にやってきたあなたの目には、気負いも怖れも何もなかった。おかしいなと思っていたら、いきなりの敗北宣言。」

……ふざけるな！

こんな結末、わたしは許さない」

「いや、許さないって言われても……」

実際終わってしまったっているワケで、今さらどうしようもないので

はないだろうか。

そこで、リリアは急にトーンダウンした。

「わたしが、すごく理不尽なことを言ってるのは分かってる。

勝手な期待をかけてただけってことも。

だけどわたしは、あんたの最初の試合を見た時、こいつは何か違う、って思ったの。

きつと、この退屈な大会で、何かをしでかしてくれる奴だって。

そう思ったから、気の進まなかったこんな仕事も、楽しくやることができた。

なのに……」

そこで、彼女はキツとまなじりを上げた。

「あんたは、ううん、あなたは本当に、あんな終わりでよかったの！？」

あなたは何のためにこの大会に出場したのよ?!」

「……はあ」

鋼には、結局彼女がどうして怒っているのか、よく分からない。

だが彼女には、鋼が参加した裏の事情を話さなければならぬらしい。

仕方ないな、と鋼は内心で嘆息し、

(突然ですが、ここで怖い話をします。

リカちゃんはある夜、こっそり学校に忘れ物を取りに行きました。

誰もいない教室に入って、リコーダーを……)

【びぎや ああああああああ！

怖い話はダメなんじゃよおおおおおお!!】

(……………よし)

ややこしいことになりそうなシロニヤを追い出して、あらためてリリアに事情を話すことにする。

「僕の、目的は……」

本当は、闘技場の前で並んでいた時のことや、そのあとの流れも話さなければ、はつきりとは理解されないかもしれない。

そう思いながらも、鋼は端的に、自分が大会に参加した理由だけを告げた。

鋼の参加理由を聞くと、リリーアは一瞬目を丸くして、

「っは、あは、あははははははは！！」

その後、お腹を抱えて笑い出した。

「そんなに笑うことないだろ」

たしかに自己満足でちっぽけかもしれないが、ここに来て初めて状況に流されて、ではなく、鋼本人が望んで起こした行動なのだ。

あまり笑われたくはない。

さすがに笑いすぎたと思ったのか、リリーアも涙をふきながら謝った。

「あっはは、ごめんごめん。」

いやあ。今時、そんなことに体張るようなバカがいるとは思わなかった。

でも、まあ、うん。そういう探し物なら、たしかにここに来るしかないね」

「……まあ、ね」

探し物、というのとは少し違う気がしたが、鋼はうなずいた。

実際、昨日と一昨日の夜は街をそれとなく見渡して、それらしい奴を探してみたりはしていたのだ。結局、収穫はゼロだったが。

「時間取らせて悪かったわね。
わたしはもう行くわ。」

仕事、放り投げとくワケにもいかないし」

そう告げるリリーアには、さっきまでの険しい雰囲気はない。

かといって仕事モードの時とも違って、何だかフランクな印象だった。

「ああ、うん」

思わずうなずいてしまってから、そういえば途中から思いっきりため口で話していたことに遅ればせながら気付く。

アイドルにこの態度はまずいのでは、と今さらながらに鋼は思った。

しかしリリーアは、そんなことを気にしなかったようだ。

「なーにしょぼくれた顔してんのよ。」

これからご対面なんですよ。

シャキっとしなさい。シャキっと」

「え、あー。がんばるよ」

よく分からない激励の言葉を受けて、よく分からないなりにうなずいておく。

その態度にリリーアはふうとため息をつくと、

「あんたの目的、人によつては不純だとか言うかもしれないけど、わたしは応援する。」

あ、でも……」

「ん？」

「スカートめくりの件は、一生根に持つから！」

「なっ!?!?」

思わず狼狽する鋼を愉快そうに見て、

「じゃねー!」

リリーアは嵐のように去って行った。

「一生根に持たれるのは、ちょっとなあ……」
不可抗力なのに、と鋼は一瞬思ったが、二回目はめちゃくちゃわざとだったことも思い出して、弁解する材料を失った。

まあ、もう一生会うこともないだろうと思いつき直し、
「行くか。あーでもそっぴや、あんな負け方して、ララナとかアステイはなんて言うかな……」

鋼は心なしが重くなった足を動かす。

リリーアの言った通り、本番は、ある意味ここからなのだ。

それから鋼は、ふたたび闘技場の受付を訪れた。

一応賞金と、それから賞品が出るため、申告しに行かなくてはいけないのだ。

「残念でしたね」

と心底残念そうに言って袋を渡してくる受付の人に苦笑を浮かべた時、

「コーウくん！」

鋼は背中にどえらい衝撃を受けた。息が詰まる。

「負けちゃったね、コウくん」

ララナはあっけからんと言う。

なんで降参をしたのか、とか、どうして相談してくれなかったのか、とか、そういう詮索じみたことは一切言わない。

その気遣いが、少し身に染みた。

そんなララナの前では気丈にしていたかつたし、何より受付の人の前だ。

「まあ、いいんだよ。」

対戦相手は僕と違って実力であそこまで来てたワケだし、あのまま戦っても勝てなかったと思う。

だから、いいんだ」

できるだけ何とも思っていない風に、そう笑い飛ばす。

それを、どう取ったのか。

「…うん。よし、コウくん」

「んん？」

「飲もうー!!」

「……はい？」

ララナの口から、とても十歳とは思えないような提案がなされた。
さらに、

「偶には羽目を外すのも良いかもしれませんね」

「わたし、宴会って好きですよ？」

いつの間にか駆けつけていた女性陣からも賛成多数で可決。

「え？ いや、ちょっと……」

こうして、なぜか、宴会が始まった。

それは、普通の高校生だった鋼は経験したことのないような、それはもう激しいどんちゃん騒ぎだった。

「それではー！　これから『コウくんぶとーたいかい本選しゅつじよーおめでとう&二回戦敗退しちゃったね。残念だったね会』を開催しまーす！」

という、ララナの既に酔っぱらってるような音頭と共に幕を開けた大宴会。

それは、闘技場の近くの食堂兼酒場のような店を半ば貸切にして、ララナやラトリス、ミスレイのみならず、そこら辺にいた全く関係ないお客まで巻き込んで盛大に行われた。

「うわははははあ！　酒持ってこいやあー！」

十歳のはずのララナは飲むわ飲むわ。

酒は飲んでも飲まれるな、という格言はあるが、ララナは酒に飲まれた自分を楽しんでいるようで、いつも着ている防具を脱ぎ散らかして周りを巻き込んで大騒ぎしながらも、一応なにがしかの一線は守りつつ、楽しんでいるようだった。

「ハガネ様。グラスが空になっていきますよ」

「私が飲ませて差し上げましょうか？」

「いえ、お酒と言ったら鼻から飲む物でしょう？」

「大丈夫です。ハガネ様のその蔑みの視線があれば、私は充分以上に酔えますから」

ラトリスはこんな時なのに鋼にべったり張り付いて、鋼の世話だ

の余計なお世話だのを焼こうとしていた。

この宴会中、鋼にとって一番手がかったのがラトリスだったと言える。

手がかかるといふのは違つたものの、間違いなく鋼が一番手を焼いたのは、また別の人物だった。

もちろんそれは、言わずと知れたあの人である。

他二名と違つて、意外にも完全に正体もなく酔っぱらつてしまつたのがそのミスレイだった。

「あふ。ふにゃーん。ごわごわ〜」

最初は本選一回戦での無謀な戦いについて、何やら説教をしようとしていたらしいが、だんだんとその視線が鋼の顔ではなく体の方に移つて行き、説教を受けるのもめんどくさいなと思つた鋼が、

「今日は無礼講ですし、いくらでもさわつてもいいですよ」と言つたら、あとはもう猫まつしぐらだった。

その時既に鋼の近くにいたラトリスからそこはかとなく鬱陶しそうな視線を受けながらも、鋼の背中に飛びつき、頬ずりし、甘噛みし、全身をこすりつけ、それから片時も離れようとはしなかった。

今はもう完全に出来上がつていて、

「もう、コウさまはあ、わたしをこんなによわして、どうするつもりなんですかあ〜」

とか思い出したように言ってくるが、これで一滴も酒を飲んでないのだから恐れ入る。もしかするとゴワゴワにはミスレイを酩酊させる成分でも入っているのかもしれない。

結局鋼は、とにかく愛想笑いを切らさないようにしながら、背中に当たる種々のやわらかい感触に正気を持っていかれないように、意識を逸らし続けるしかなかったのだつた。

「いい風だな……」

宴会開始から既に数時間以上。

すっかり酔っぱらいの巣窟と化した宴会場から抜け出し、鋼は一人、夜の街を歩いていった。

前方のラトリス、そして後方のミスレイを引き離すのは至難の業かと思われたが、鋼が逆襲に転じ、「俺の酒が飲めないのか」的にお酒を飲ませながら、同時に懐柔策にと「ラトリスのいいところ百選」を切々と語っていたら、ラトリスは顔を真っ赤にして倒れてしまった。

意外にお酒に弱いんだなと驚いたが、さすがにそのまま放置しておくワケにもいかない。だが、鋼が上着代わりの聖王の法衣をかぶせてミスレイに後をお願いしたら、すごくいい顔で請け負ってくれたので、ラトリスはきつと大丈夫だろう。

……まあ、正直に言うなら、さすがにミスレイの絶え間ない精神攻撃に鋼の心は限界を迎えていたので、ラトリスに押し付けたという側面はもちろんある。

ミスレイの異様に輝いた目を鑑みるに、翌朝気が付いたら百合ツプル（意味はお察してください）ができている可能性とかはゼロではないが、鋼はあえて考えないようにした。

だが、それは全て、ついで、でしかない。
鋼の目的は、もっと別のところにあった。

誰よりも騒ぐのが好きなはずなのに、宴会が始まってから一言も話していない、鋼の大切な、もう一人の仲間のことだ。

「シロニヤ。さっきから、何も言わないじゃないか。
どうかしたのか？」

【……コウ】

頭の中に、シロニヤの今にも泣きだしそうな声が響く。
これは弱ったな、と鋼は思う。

鋼は何も、シロニヤをこんな風にするために、武闘大会に出たワケではないのだ。

【ワシの、ワシのせいなのか？】

「え？」

シロニヤの、いつになく弱々しい声が、脳を揺らす。

【おぬしが、二回戦であんなことをしたのは、もしかして、ワシが、
ワシが無理をするななどと言ったから……】

「それは違う！」

シロニヤがそんなことを思っているなんて、鋼は全く考えていなかった。

だから、それは誤解だ、と強く否定する。

【ウソじゃ。ウソじゃよ……】。

じゃあどうして、おぬしはあんなところで降参したのじゃ！？
ワシにでも分かる。二回戦の相手はその前の男より弱かった。
普通に戦えば、おぬしは負けなかったはずじゃ。

なにおぬしが二回戦で負けたのは、ワシのせいなのではないの

か？】

「それは……」

いけないと思うのに、鋼はつい、口ごもってしまった。

【正直に言えば、ワシはおぬしがまたケガなぞをしなくて、うれしいのじゃ。

じゃが、身勝手じゃが、ワシが言ったことがおぬしのジヤマになつてしまったとすれば、ワシは、ワシは……】

「大丈夫だよ。そもそも武闘大会には、気まぐれで参加したようなものだったんだ。

それに、大会に出た目的なら、ちゃんと……」

興奮するシロニヤを落ち着かせようと、鋼が懇々と、諭すように話しかける。

だが、それは逆効果だった。

シロニヤは堪え切れず、感情を爆発させる。

【ウソじゃ！ ワシじゃって、ちゃんと聞いたったんじゃ！

おぬしたちが、あの二人組の木札を焼いた犯人を探そうと話しておるのも！

その犯人のヒントが黒いロープと武闘大会参加者の木札以外になら、武闘大会に出て探そうと話しているのも、全部じゃ！

二回戦を勝ち抜けば、おぬしはその犯人にもたどり着けたかもしれないのに、ワシが、ワシが……】

「シロ、ニヤ……」

その言葉を聞いて、鋼はとうとう凍りつく。

そして、

「ええと、黒ローブ？とか、犯人？とか、そんな話、完全に初耳な
んだけど……」

【な、なんじゃとお！？】

シロニヤを仰天させる言葉を吐いたのだった。

「んー。ちよつと整理してみようか。
それで、僕が何だつて？」

【そ、その、闘技場に行く途中、おぬしがぶつかったスキンヘッド
とモヒカンの二人組がいたじゃろ？】

「ええつと、いたっけ？」

【いたのじゃよ！】

その二人組が謎の黒いローブの人物に襲われて、大会参加用の木
札が燃えてしまったのじゃ】

「ああ。そういえばそんなこともあったな。それで？」

【じゃ、じゃから、その犯人をつかまえるために武闘大会に参加す
ることにしたんじゃろ？】

「え？ 何で？」

【な、何で、と言われても……】

それは鋼側の理由であつて、シロニヤに聞かれても分からない。

「よく覚えてないけど、たぶんあの二人組が絡んだから相手が反撃
したんだろ。」

過剰防衛だとは思うけど、死人も出なかつたんだし、わざわざ僕

らが犯人捜しするほどのことじゃないと思うんだけど」

【いや、うむ、その、そう、思うのじゃが……。】

そこはほら、おぬしのありあまる正義感で】

「え？ そんなの全然持つてないけど？」

【そこは少しでも持つてゐるって言ってほしいのじゃよ!?!】

どうして鋼が転生できたのかとかをちょっと思い出してほしいシロニヤだった。

が、しかし、それはともかく、

【じゃ、じゃったら、おぬしが武闘大会に出たのは……】

「その件とは全く無関係。」

そもそもその時考え事してたから、犯人が武闘大会参加者だったところも聞き流してたよ」

【な、なんと……】

シロニヤ、大勘違いの巻、であった。

「あー。やっぱりアステイたちと微妙に話がかみあわないと思ったら、そういう勘違いしてたのか」

犯人の話をしている時に、鋼が偶然武闘大会に出ると言ったために、関連付けされてしまったのだらう。

【ちょ、ちょっと待つんじゃ!】

じゃ、じゃったら、コウが武闘大会に出た理由というのは……】

その言葉に、鋼はしばし黙り込む。

そして、

「出でよ、ワームホール!」

【な、なんじゃ?】

シロニヤの下へと通じる例のワームホールを作り出し、手にしていた包みをその中に押し込んだ。

【い、いきなりなんなのじゃ?】

「この包みはいい……」
急に自分のところに何かを送り込まれて焦るシロニヤに、鋼は照れくさそうに言った。

「その、シロニヤへの、プレゼントだよ」

【ワシ、への…?】

驚くシロニヤに、鋼が急かす。

「いいいから、とにかく開けてみてくれて」

【う、うむ…】

戸惑いながらも、シロニヤが包みを開くと、中から出て来たのは、

【これは……ヘラクラー?】

武闘大会オリジナルキャラの特製マスコットだった。

【もしや、ワシがこれを好きじゃと覚えとったのか?】

それで、わざわざワシのために、これを?】

感動に声を震わせるシロニヤに、

「ああ。それと、ついでに言つとそれが理由」

【む? 理由、じゃと?】

「そう。僕が、大会に出た理由だよ」

鋼は、さらなる真実を突きつける。

【なん、じゃと…?】

驚くシロニヤに、鋼は最初から説明した。

「あの時、武闘大会の受付に並んでいた時、シロニヤはこのヘラクラーを見て、歓声を上げてたさる。」

考えてみれば、シロニヤがゲーム以外にあんなに何かに興味を持つなんて初めてだったから、ちよつと気になってたんだ」

某ムー〇ン谷に生息しているカバ的生物のように、魔物なんだか人なんだか分からないような得体の知れない生き物だし、子供たちを怖がらせてばかりで一体何のためのキャラクターなんだ、とは思ったが、シロニヤを喜ばせたことについては、感謝と共感と、それにちよつとだけ嫉妬を覚えていた。

「そしたら、ちよつと武闘大会の賞品に大会オリジナルキャラの記念マスコット、なんて書いてあったからさ。」

恩返しをかねて、シロニヤにこれをプレゼントできたらな、って思ってたんだ」

いくら神様で三歳児とはいえ、女の子にプレゼントなんて、柄ではないと分かっていた。

だけどヘラクラーを見ていた時のシロニヤの楽しそうな声が忘れられなくて、それがもう一度聞けるなら、自分にもそれができるなら、と思った。

念のため街中でも同じようなマスコットが売っていないか探したが、不人気なせいかどこにも売っていなかった。

だから鋼は、大会に出て、あそこまで戦い抜いたのだ。

「街中で人を焼いた犯人をつかまえてやろうとか、この大会で優勝してやろうとか、僕はそんな大それた立派なこと、初めから考えてなかったよ。」

いつも僕によくしてくれるシロニヤに、そのマスコットをプレゼントしてあげたい。

それだけのために、僕は大会に出て戦ったんだ。

だから……」

だからシロニヤが気に病む必要なんてまったくない。

鋼は、そう続けようと思ったのだが、

【本当、なのか？】

おぬしは、本当に、これのために、たったこれだけのために、大会に？】

「ま、まあね」

シロニヤが、震える声で問いかける。

【ワシに、ワシにただ、これを渡すだけのために、そんなことのために、あんな……】

「そ、そんなことなんて言うなよ。結構苦労したんだぞ、取って来るの」

ヘラクラーのマスコットは、大会九位から十六位までの選手に渡される賞品。

つまり、本選の一回戦を勝ち抜き、二回戦を『負けなければ』もらえない賞品だ。

そのためには一回戦ではかなり痛い思いをしたし、優勝もあきらめて、二回戦で降参をした。

それは全て、シロニヤの笑顔のためで、

【バカじゃよ……】

しかし、シロニヤは、それを否定する言葉を吐いた。

「ば、バカって……」

必死の努力を否定されて、さすがに動揺する鋼。

だがシロニヤは、涙ににじんだ声で叫ぶ。

【バカなものバカなのじゃ！】

こんなもののために、あんな苦勞をして、大ケガをして、おぬしは、おぬしはバカじゃ！

本当に、本物の大バカじゃ！

じゃが……】

たしかに、鋼は自分でもバカだとは思う。けれど、

【ありがとう】

その、たった五文字の言葉は、どんな勝利も、どんな賞賛も、どんな名誉もおよばない、たった一人、鋼のためだけの、最高の栄冠で、

きっと僕は、その言葉を一生、誇りに思う。

そんな風に、思ったのだった。

二人の気持ち、通い合った瞬間、

パパパパーパーパツパー！

まるでそれを祝福するみたいに、勇ましいファンファーレが鳴り響いた。

そして、鋼の頭の中にメッセージが……。

しろにや の こうかんど が 1046 あがった。
しろにや との かんけい が きみしかみえない になった！

「上がりすぎだろ！ 好感度！」
鋼が安定のツッコミを見せる。
そしてさらに、

はがね は おらくる（てれびでんわつき） を おぼえた！
はがね は おらくる（しろねこつき） を おぼえた！
しろにや を おもちかえり できるように なった！！！！

「だから何なんだこのコメントは！！！」
鋼、吼える。

あっという間に、ちょっとしたいい雰囲気が出無しになっていた。

「はあー。まったく」

浮かび上がったメッセージにすっかり照れてしまったシロニヤは、
オラクルで呼びかけても返事をしなくなってしまった。

こうなるともう戻るしかないのだが、今からあの魑魅魍魎渦巻く
場所に戻るのとはなんか嫌だった。

何かないかと辺りを見渡すと、闘技場が魔法の光で綺麗にライトアップされているのが見えた。

「そういえば、もう武闘大会決着ついたかな？」

自分は途中でリタイアしたとはいえ、その結果が全く気にならないワケでもない。

さらに闘技場の方を見てみると、幸いなことに、武闘大会の掲示板らしいものがすぐに見つかった。

ここからでは見えないな、と鋼がそちらに向かって歩き出した瞬間、

「コーウくん！」

という甘い声と共に、背中にのしかかってくる温かい感触。

「ら、ララナ……」

声思わず震えてしまった理由は単純。

いつもと違い、防具というくびきから解放された『これで本当に十歳！？（仮名）』が二つ、背中にぐにぐにむにむにと押し付けられているからであった。

それでも鋼はミスレイの精神攻撃にすら耐え切った男である。

何でもないフリで、武闘大会の掲示板を指さした。

「ララナ。あの掲示板、なんて書いてあるか分かるか？」

「あははは。そんなのらくしゅう！ ボクの視力は五十三万だよ？」

えーと……あはは。文字が五重に見える」

「この酔っぱらいが」

役には立たないようだった。

「あははは。コーウくん、コーくんが五人ー。あははははー」

と笑うララナを背中に垂らしたままでよたよた進み、

「おっ」

よつやく近くまで行って見てみると、既に大会は終わり、当然な

がら全ての結果がもう発表されているようだった。

掲示によると、何でも優勝したのは、アステイエル・ベル・フォスラムとかいうやつたら長い名前の人らしい。

「……………あれ？」

ひどい既視感に、「ごしごしと目をこする鋼。

そんな鋼の首にかじりつきながら、能天気にはラナが言った。

「そーいえげんつげんアステイ見ないよねー。はくじょーだなー。どーこであぶら売ってんだろ？」

その言葉に、鋼はもう一度掲示板の名前を見上げる。

「……………あれー？」

肌寒い、夜の街で。

立ち尽くす鋼の顔を、ひとすじの汗が流れていく。

第三十四回キョートー武闘大会。

その覇者であるアステイエル・ベル・フォスラムの優勝者コメント、「いいさ。どうせ私はぼっちなんだ」は本人の美貌と、優勝者とは思えない哀愁漂う姿ともあいまって、あまりに有名な台詞と

なつたという。

キャラデータ（前書き）

タイミング的に今しか出来そうにないので、暇潰しに書いていた四十三章終了時点でのキャラデータの設定を公開します

注意点として、

- ・まだ本編では明かされていない情報が多数存在していること
- ・以降の本編の流れによっては、ここで書かれた内容が変更、削除される可能性があること
- ・あくまで作者の妄想用のデータなので、これを本編に反映させるような仕掛けは現時点では特に考えていないこと

以上の三点を理解頂いた上で、それでも構わないという方だけご覧下さい

キャラデータ

【データの見方】

名前

レベル

職業

年齢

素の能力値（アビリティ・タレント・装備アイテム補正後の概算能力値）

取得二つ名一覧

アステイエル・ベル・フォスラム

LV42

自由騎士

18歳

HP 471（471）

MP 148（148）

筋力 88（108）

知力 28（48）

魔力 5 1 (7 1)
敏捷 6 9 (8 9)
頑強 5 1 (1 0 1)
抵抗 7 1 (1 2 1)

『哀切の優勝者』 New!

『不可侵の光姫』

『煌めく聖色』

『祝福されし子』

キルリス・ブルレ

LV 1 2

ギルド職員

17歳

HP 4 1 (4 1)
MP 1 2 (1 2)
筋力 8 (8)
知力 1 9 (2 1)
魔力 2 (2)
敏捷 6 (6)
頑強 7 (7)
抵抗 1 1 (1 1)

『お姉さんぶりっ子』 New!

『トーキョギルドの華』

クロニヤ (『絶対的隔意』実装後)

LV1

勇者

0歳

HP	13	(13)
MP	14	213
	(14)	213
筋力	5	(5)
知力	6	(6)
魔力	4	(1204)
敏捷	6	(6)
頑強	5	(505)
抵抗	6	(506)

『忘れ得ぬ想い』 New!
『不名誉な敗北』 New!
『刻まれた名前』 New!
『次元の管理者』
『異世界の勇者』

サミラス・ゴート

L V 3 6
短剣使い
2 2 歳

H P 2 2 6 (2 2 6)
M P 1 8 (1 8)
筋力 2 8 (2 8)
知力 1 3 (1 3)
魔力 3 (3)
敏捷 3 3 (3 3)
頑強 3 7 (3 7)
抵抗 2 1 (2 1)

『鈍亀ゴート』

篠塚 藍理 (ララナ・ナナナン)

L V 7 4
拳闘士
1 0 歳

H P 1 2 0 1 (1 3 5 1)
M P 4 4 4 (4 4 4)
筋力 1 3 3 (1 6 3)
知力 1 0 1 (1 0 1)
魔力 8 1 (8 1)
敏捷 1 4 5 (1 7 5)

頑強 115 (145)
抵抗 110 (110)

- 『時空を超えた大恋愛』New!
- 『ゴッドネス・フィンガー』
- 『無邪気なる破壊者』
- 『的当てチャンプ』
- 『四鵬流拳術免許皆伝』
- 『アルティメットDQNバスター』
- 『ラターニアの救世主』
- 『ララナナナン』
- 『絢爛なる歌姫』
- 『破軍の拳』
- 『猫耳世界』
- 『恐怖の化身』
- 『一騎当千』
- 『早口言葉クイーン』
- 『チートな幼女』
- 『心清き転生者』

マークレイ・フル・グライト

LV53

魔術師

26歳

頑強	敏捷	魔力	知力	筋力	M P	H P
5 1 (5 1)	5 3 (5 3)	6 (6)	4 4 (4 4)	5 7 (5 7)	3 1 (3 1)	3 5 4 (3 5 4)

L V 4 8
 格闘家
 3 4 歳

マツシ・シュタット

『暴風竜』
 『突風のマークレイ』
 『風に愛されし子』

抵抗	頑強	敏捷	魔力	知力	筋力	M P	H P
5 5 (5 5)	2 9 (2 9)	3 2 (3 2)	7 3 (7 8)	6 1 (6 6)	3 3 (3 3)	3 8 1 (3 8 1)	2 3 7 (2 3 7)

抵抗 48(48)

『冷徹無杖のマツシ』
『堅固なる拳』

ミスレイ・『ルウィーニア』・ハート

LV21

ゴワゴワ教開祖
17歳

HP	82(82)
MP	628(628)
筋力	21(121)
知力	46(146)
魔力	224(324)
敏捷	18(118)
頑強	14(114)
抵抗	44(144)

『ゴワゴワのシモベ(自称)』『New!』

『解き放たれた雛鳥』

『女神の現身』

『光の体現者』

『駕籠の中の聖女』

『祈らずの神子』

『奇蹟の少女』

結城 鋼 (ハガネ・ユーキ)

LV 24

学生

15歳

HP	6679 (???)
MP	2218 (???)
筋力	93 (???)
知力	0 (???)
魔力	0 (???)
敏捷	47 (???)
頑強	0 (???)
抵抗	0 (???)

補正後の能力は状況によって変動するため計測不能

『神落とし神』New!

『しりとりにキング』

『棒切れ勇者』

『世界最弱』

ラトリス・ブルレ

LV38

超級ストーカー

16歳

HP	221(111)
MP	58(58)
筋力	43(43)
知力	74(74)
魔力	28(28)
敏捷	91(182)
頑強	34(17)
抵抗	39(39)

『あなたの後ろに這い寄る忍者』New!

『忠義一筋』New!

『主君を見つけた忍び』New!

『裏切られた忠誠』

『インスタント・ヒーロー・メイカー』

『ギルドの救い主』

『守銭奴眼鏡』

『スパルタ師匠』

『紙装甲愛好家』

『インスタント・コフィン・メイカー』

『最速の陰陽師』

『風神の申し子』

『最強の下忍』

オマケ

なぜか大人気(?)の木の枝さん

現在のステータス

『伝説の』『名状しがたき』『殺戮好きの』『凄く嫉妬深い』『博
愛主義の』『名を呼ぶことも畏れ多い』『相棒と呼ばれたら嬉しい』
『ハガネ様専用の』『成長する』『世界創造の』『ヒロインの座を
狙っている』ただの木の枝『ワールドエンド・ブランチ』+240
21

キャラクター（後書き）

重ねて言いますが、参考程度の物なので、

「これならダンジョン攻略できるんじゃない？」

「鋼普通に大会で勝てるんじゃないかね？」

などというツッコミはなしの方向で

第四十五章 初めての再会

「アステイ、悪かったって。」

「ほら、この店は僕がおごるからさ」

武闘大会の翌日。

鋼たちはふたたび、昨日宴会をした食堂兼酒場（現在は食堂として営業中）で、食事をしていた。

「当たり前だ！

ハガネも、一人だけの表彰台の寂しさを感じてみるがいい。

私が決勝で破った準優勝の男は、敗北に涙し、しかしそれを仲間たちに慰められていたのだぞ。

身勝手だとは思ったが、あの時ほど他人を羨んだことはなかった
！」

アステイエール、ご立腹中である。

「だから、悪かったって、あむ。」

ひかしアステイはすごいな。んぐ。

すごいとは思ってたけど、本当に優勝までしちゃうな……ちょっとラトリス今はいいつて！」

ご機嫌取りに奔走するのは当然鋼だ。

ララナはこんな時でも全く空気を読まずに追加注文とか頼んでしまっているし、ミスレイは不可視の鋼の服の裾をしっかりとつかまえて、すっかりはにゃーんしている。

ラトリスに至っては運ばれてきた料理を一口大に切って鋼の口に運ぶ作業に夢中で、結果的にアステイとの話を妨害する始末だ。

普段なら無理矢理にでもやめさせるところなのだが、昨夜倒れたラトリスをミスレイに差し出してしまった手前、あまり強くは言いづらい。……ちなみに幸いなことに、百合ップルは成立していな

った。

「大体何だそれは！」

アレか？　これが俗に言うハーレムという奴か？

全くけしからんな！」

「実はこれ、ココミコマンドによる追加オプションで……いやいや、冗談だつて！」

だからその抜きかけた剣を元に戻してくれよ！」

「で？」

剣呑な視線が鋼と、鋼の横に侍る二人の美女へと突き刺さる。

「で、って言われても、僕だって何がどうなつてこうなつたのやら

……」

アステイの糾弾はある意味もつともだと思ふのだが、どうやら二人とも、まだ宴会から心が戻ってきてない様子が見受けられる。

（二人ともかなり酔っぱらつてたからなあ……）

まあミスレイは一滴も飲んでいなかったところが逆に脅威ではあるが。

ちなみに鋼もアルコールは飲まなかった。

こちらの世界では未成年の飲酒は認められているようなのだが、日本の小市民的感覚が抜けなかったのだ。

じつと見つめ合っていると、先にアステイが目を逸らした。

「……ふん。まあ、いい。」

しかし道中で不埒な真似をしているようなら、問答無用で叩き斬るからな！」

「しないつて！」

あ、これおいし……」

そんなことするはずなのにどこまで信用がないんだ、と懔然としながら差し出された料理に口をつける鋼。

それを呆れたように見ながら、アステイが愚痴を再開する。
「お前たちは来てくれなかったが、三回戦の相手なんて凄く怖かったのだぞ!？」

普通の相手なら身動きできなくなるくらいの打撃を与えても、『ワタシの、炎……』とかぼそぼそつぶやきながら立ち上がって炎魔法を繰り出してきてな。

不死者のごとく立ち回る相手と戦いながら、こういう時に仲間が応援してくれれば、と思わずにはいられなかった。

結局その相手、邪炎のローブとかいう禁制品を使っていたらしくて、試合のあと騎士団にしょっ引かれていったがな!」

実はそれが件の人間火付け犯で、鋼を見て「だったら、ワタシの炎ならどうかしら」とか言って笑っていた人物だったりするのだが、それに鋼たちが気付くことはなかった。

というか本当に最後まで、全く勘付くことすらなかった。

「それからも、本当に苦労したのだぞ!？」

運よく優勝出来たものの、途中、何度心が折れそうになったか……

……

「あ……」

その言葉を聞いて、鋼は何かに気付いたように声を出した。
そして、

「そういえば、ちゃんと言ってなかったな。

……アステイ、優勝、おめでとう。それと、お疲れ様」

「う、うむ」

二人でカン、とグラスをぶつけ合わせる。

「……何だかようやく、私が優勝出来たのときちゃんと実感出来た

気がする」

「えっ？」

「な、何でもない！」

ぼそつとつぶやいた言葉に鋼が聞き返すと、アステイはあわてて首を振った。

そして照れ隠しのように立ち上がると、鋼以外の三人にあらためて文句をつける。

「そ、それにしてもお前たちは本当に薄情だな！」

分かっているのだぞ！

お前たちにとっては、どうせ私の優勝より八ガネの二回戦敗退の方が重大事なのだろう？」

すっかりすねてしまったアステイがそんなことを言うと、そんなことないと鋼がフォローに入る前に、ララナが出て来てぼんぼんと肩をたたいた。

「アステイ。そんな当然のことを言って、わざわざ自分を傷付けなくてもいいんだよ？」

「~~~~ツ！」

何も言えずにその場に潰れるアステイ。

「お前、鬼だろ」

あまりに鮮やかな追撃に鋼は戦慄したが、

「え？ 何のこと？」

ララナはそんなところばかりは年相応だった。

「一日目で既に全選手の分析は終わっていました。

あのメンバーでアステイエール様が八ガネ様以外に負けたとしたら、その方が余程問題でしょう」

「わたし、そもそもこの中でコウ様以外が出場してたなんて知りませんでしたよ？」

ふわぁ……ごわごわ……」

ラトリスとミスレイからもフォロー？が入り、

「ううう……」

アステイはさらに沈み込んだ。

そんなアステイを鋼が励ましにかかり、

「アステイ、そう気を落とさず……アステイ？

どうしたんだよ、返事をしろって。

そんな、嘘、だろ？

返事をしろよ？ なぁ……。

アステイエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

「申し訳ありませんお客様、今日は他のお客様もいらっしやいますので」

「あ、すみません」

店の人に怒られたという。

「考えてみるとさー」

アステイが復活し、鋼がミスレイを服から引きはがし、ラトリスには自分の食事をするように言いつけたところで、ララナが愉快そうな顔をして言った。

「この五人って、みんな相当なもんだよねー。」

よくもまあこんなメンバーが集まったな、ってぐらいの」

ララナの言葉に、全員がそれぞれの顔を見渡した。

「そういえば、ここにいる人みんな、色々やってそうですね！。だからコウ様あ、もっとごわごわー」

「何がだからですか。もういい加減にしてください。」

……たしかに、みんながすごい人生過ごしてそうだったのは同意できますけど」

「そうだな。私は皆の過去を知らないが、少なくとも平凡だったという事だけは想像出来ない」

「私はある程度存じ上げておりますが、皆様、信じ難い経歴の持ち主ですね」

集まったみんながみんな、口々にそんなことを言い出した。

「ただ……」

そこでラトリスの視線が鋼を射抜く。

「え？ 僕？」

この中では少なくとも一番平凡な人生を送っていると自信を持っていた鋼は、その視線に目をしばたたかせる。

「ハガネ様の経歴だけが、すっぽりと抜け落ちています。」

本気で探った訳でもないのですが、これは不自然です。

ハガネ様は常識知らずですが、無教養ではありません。

少なくともどこかしらの教育機関に属しているのではないかと疑ったのですが……」

「いや、その……」

目を逸らす。

じつとこちらに向けられ続けるラトリスのメガネに、鋼はいたたまれなくなった。鋼には眼鏡属性はあまりないのだ。……つまり、ちよつとはあるということである。

「たしかに、ボクもちょっと不思議には思ってたんだよね。年齢的にさ、いろいろ計算合わないなって」

そこに、ララナまで加わる。

「ごわごわー」

「よ、よく分からないが、仲間外れはもうごめんだぞ?」

なぜかミスレイとアステイまで仲間に加わった。

「う……」

四人分の視線の圧力に、鋼はもうタジタジである。

「貴族の子女として、家庭教師に教わっていらっしやるのか。」

あるいは王立騎士学校やラーナ魔法学院のような、情報の漏洩の少ない学校に属していらっしやるのか」

「待った待った!

どうしてそんなことになるんだよ!」

鋼は焦るが、まさか日本の高校に通ってました、なんて言えない。

困った鋼は、

(シロニヤ! シロニヤ! 聞いているか!?)

いつも通り、我らが知恵袋に助言を頼むことにした。

のだが、

【にゃ、にゃんじゃ? な、何か用なんじゃよ?】

(何でいきなり動揺してるんだ?)

鋼の呼びかけに応えたシロニヤの様子は、明らかに不審だった。

【べ、べつにワシはぜんぜんドキドキなんてしとらんじゃ!」

ホントもうぜんぜん、これっぽっちも意識なんてしとらんし、

へラクラーをずっと抱きしめておったりせんのかなー！】

(いや、別にへラクラー抱いても構わないんだけど、何でそんな……)

あー。ま、いいか)

突然のツンデレ調の台詞に戸惑ったものの、シロニヤが変なのは今に始まったことではないと無理矢理自分を納得させる。

【そ、それで、何の用なんじゃ？

で、でえとのお誘いなら、とりあえず今日と明日と明後日と、今日の日付をxとし、aを自然数とした場合に、 $x + a + 2$ で表すことのできる日だけなら空いてるのじゃよ？】

(シロニヤお前、本当に大丈夫か？)

本格的なシロニヤの乱心に、鋼もさすがに心配になった。

(と、とにかく聞きたいのは、僕の過去のことだよ！)

【過去？ おぬし、べつに記憶喪失キャラじゃないじゃろ？】

ようやく戻ってきたいつものシロニヤの調子にホツとしながらも、鋼は言葉をつぐ。

(そうじゃなくて、この世界での過去だよ。

『少年期編スキップ』の効果で省略しちゃった僕の人生は、対外的にはどういうことになってるんだ？)

【あー。『少年期編スキップ』。そういえばそうじゃった、かの？】
人の半生を豪快に省略したくせに、そもそも覚えてすらいなかったらしい。

【それはアレじゃな。前に神の力については話したじゃろ？】

(なんとというか、原理も理屈も何もない、とかだっけ？)

【それじゃ！ つまり、神の力に過程はないんじゃないよ。

例えば神にとある電気ネズミをレベル50にして下さい、と祈って叶えられたとしよう。

そうすると手元にレベル50の電気ネズミが来るのはまちがいないのじゃが、それ以外はどうなっとなるか分からんのじゃ】
(どういう意味だ?)

【うむ】

と前置きしてから、シロニヤは話し出した。

【神の力に過程はない。じゃができたモノに過程がなければおかしい。

じゃから、その電気ネズミはひたすら洞窟で蝙蝠を倒し続けてレベルを上げたせいで素早さの努力値が最大になっとなるかもしれんし、ひたすら不可思議な飴を舐めさせてレベルを上げたせいで努力値が何も上がつたらんかもしれん。

あるいはこっそり名前の同じ電気ネズミをどこから引っ張ってきたせいで、なぜかなみのりを覚えているかもしれんし、完全な神様のインチキのせいで、レベルは50あるものの能力値は全く上がってないということも考えられる。

それは、実際にやってきた電気ネズミを見なければ誰にも分からんのじゃ】

例え話は理解できなくもないが、それを鋼の過去に置き換えるとどうなるか分からない。

(つまり?)

【おぬしの過去がどうなっとなるかは神のみぞ知る、じゃな】

(むしろ神様知らないんだろ!)

どんな時でもツッコミを忘れないのが鋼のいいところである。

「ハガネ様？ どうされたのですか？」

長い間シロニヤと話し続けて他を放置していたせいで、ラトリスの視線がすっかり険しくなっていた。

「ああ、いやその……」

しかも、シロニヤとの脳内密談で得られた有益な情報はゼロ。鋼は窮地に陥っていた。

ラトリスのメガネが光る。

「私達にはお話し出来ない事なのでしょうが。しかし、ハガネ様の現在のしよ……」

「もう、やめようよ！」

だがそこで、ララナが立ち上がった。

「そりゃ、みんな昔は色々あったと思うけどさ。

それは、今大事なことじゃないでしょ」

そこでララナは、ぐるっと他の四人を見渡す。

「ボクたち、仲間じゃないか。

ボクはここにいる全員の過去なんて知らない。

でも、なんだかんだでみんなといるの、楽しいよ？

みんなは、そうじゃないの？」

ララナのその言葉に、

「ララナ様……」
「ララナ……」

ラトリスと鋼が、感心したようにララナを見上げた。

鋼としては、お前も思いつ切り追及側に加わっていたくせに、いけしゃあしゃあとよくまあ、と感心していた部分もあるのだが。

それでも、理屈としてはララナの言うことに共感できた。

そして、もう一人、

「申し訳ありません、ハガネ様、皆様」

当事者であるラトリスが頭を下げ、そして鋼に手を差し出した。

「ハガネ様、私が間違っていました」

「ラトリス……」

「こういう話は、お部屋でじっくりと二人きりで尋問すべきでした。」

申し訳ありません」

「微塵もあきらめてないっ!?!」

鋼が驚きの声を上げる。

日常パートの鋼はリアクション要員である。

だが、鋼としても、この場を収めることには否やはない。

「こっちも、説明できなくてごめん」

ラトリスの手を握る。

そして、

「僕も、みんなといると楽しいよ。」

これからも、このメンバーで色々できるといいと思ってる」

鋼がそう言つと、

「ふふ。私もお前たちといると退屈しない」

まずアステイが、その手を二人の手の上に重ね、

「わたしも、ゴワゴワを抜きにしてもみなさんのこと、好きですよ」と包むように手を乗せて、

「もちろんボクも！ チーム鋼は永遠に不滅だね！」

最後にララナが勢いよく手を重ねて、図らずも全員が手を重ね、円陣でも組むような態勢になっていた。

至近距離から顔を見合わせて、誰からともなく、みんなで笑い出す。

そんな和やかな雰囲気の中に、

「やっと、見つけたよ！！ コウくん！！！！！」

突然の乱入者は、現れた。

十二歳くらいだろうか、魔法使い風の格好をした黒髪黒目の少女が、そこに立っていた。

「君は……？」

鋼は目を細める。

この世界の、しかもこんな年齢の少女に知り合いなんていないはずなのに、鋼はなぜか、目の前の少女に見覚えがあるような気がしたのだ。

「コウ、くん。ほんものの……」

その鋼の姿を見て少女は、探し続けていた物を、ようやく見出したばかりに、満面の笑みを浮かべて優雅に一礼、そして、

「この姿では、初めまして。私は、真白……」

「やああああっっと見つけたぞ、こおんのジャリガキイイイイイイイイイイ！」

「だ、だれ……？」

背後から現れた別の乱入者に、思いつ切り台詞を被せられた。

新たな乱入者は、二メートルに届かんばかりの長身の女性。

魔術師の物らしきローブを着ているが、一般の冒険者とはその装飾が違う。

「彼女は、魔法学院の『爆炎の獄卒』レメデス教師!?!」
ラトリスが突然の事態に立ち上がる。

その反応すらも無視して、

「あ、え？　ちょ、ちよっと……」

邪魔な少女を脇に除け、レメデスという名らしい偉丈夫ならぬ偉丈婦は、まっすぐ鋼たちの前に歩いてくる。

そして彼女は、

「覚えているか？　いや、お前は覚えてなんかいないだろうな。

しかし、わたしは覚えているぞ。

一度顔を合わせた、しかも自分が担当する生徒の顔を、わたしは
忘れてたりしない」

他の誰でもない、はっきりと鋼の前で、立ち止まったのだった。

「ええと、人違い、では？」

プレッシャーに圧されながらも、鋼は何とかそれだけ言った。

鋼としては本当に心当たりがないのだ。

「まだとぼけるとは、いい度胸だなあ、ハガネ・ユーキ！」

いや、ハガネ・『ベルアード』・ユーキと言った方がいいのか！
？」

それに対して、怒りが収まらない、といった様子でそう漏らすレ
メデス。

鋼には全く訳が分からない。

しかし、レメデスの言葉を聞いて、無関係なはずのラトリスが驚
きの声を上げた。

「ベルアード…？ ユーキ…？」

そうか、私とした事が見逃していた！

聖ベルアード王の末裔と言われる、ユーキ公爵家！

しかしあそこは、先の魔物の大襲撃を受けて全滅、その血筋は傍
流を含めて全て断絶していたはず！」

「その公爵家の人間、しかも直系の男児が生き残っていたんだよ。

そしてもちろん、その男児ってのが……」

全員の視線が、鋼に集中する。

「いや、僕は知らないぞ？」

鋼はあわてて首を横に振るが、

【あー。これはたぶんアレじゃな。

タレント名『高貴な生まれ』か『英雄の血筋』の効果じゃな。

「まあ、両方がもしれんが……」

「……」
何だか頭の内側からの声に、外堀を埋められたような気がした。

「まさか、そんな事が……？」

ラトリスがめずらしく表情を変え、目を開き切るほどに驚いているが、レメデスはその事実に対しては興味がないようだった。

「しかしねえ。まあその辺りはわたしにとってはどうでもいいんだ。この話にはまだ、続きがあつてね。」

公爵家の唯一の生き残りである少年。

そいつは父の遺言に従って、自分が十五になった年に魔法学院の扉を叩いた訳だ。

「うん。そこまではいい。立派なことさ」

レメデスは穏やかに話しているのに、鋼は真綿で首を絞められているような圧迫感を感じていた。

できれば弁解するか逃げ出したいところだが、どちらも不可能だった。

しかしそこで突然、レメデスは一見鋼と何の関係もないことを話し始めた。

「今年のわたしの担当の生徒は、どいつもこいつも活きのいいばかりだね。」

入学後三か月で数々の課題をこなし、その時に出来た空白を使って学院を脱走して好き勝手やっているマリルリール。

火炎魔法の実習で現地に行ったら道に迷って失踪、気付いたらなぜか冒険者として大成していたラズベル。

二人とも言語道断な事をしでかしてくれたし、散々手を焼かせてくれたが、もう一人の問題児ほどじゃない。

「……お前もそう思うだろ。なあ、ユーキ？」

「え、ええと……。も、もう一人の問題児、って、何ですか？」

ものすごく嫌な予感がしたが、プレッシャーに耐え兼ねて鋼が尋ねると、レメデスは心底楽しそうにやありと笑った。
めっちゃ怖かった。

「さすがに前例もないんだけどな。」

わたしの担当の生徒に一人、入学したのに、入学式どころか、その後の授業にも一度も出席しない剛毅な男がいてなあ。

もちろんこの半年、探して探して探し尽くしたんだが、どうしても見つからない。

もしかすると何かやむにやまれぬ事情があるのか、なんて思い始めた時だ」

レメデスが懐から白紙のカードを取り出した。

「その生徒の、学院の生徒証が白紙になった。」

これがどういいうことが、分かるか？」

「ええと…？」

鋼が困惑していると横からラトリスが解説してくれた。

「冒険者カードや魔法学院の生徒証等は身分証明カードになります。既に身分証明カードがある時、それを申告せずに完全新規で別の身分証明カードを作ると、前の身分証明カードの機能は停止する事になります」

「逆に言えば、冒険者カードを作る時、一言でも申告すればそんなことは起きないってことだ。」

あの火の魔法以外に脳みそを一ミリたりとも使わないラズベルだつて、さすがにそこまではしなかったのに、なあ」

レメデスのプレッシャーが増す。

ここに来て、さすがに鋼は事態が飲み込めてきた。

(これって、もしかしてまずい…？)

冒険者ギルドに初めて行った時にその辺りの説明を聞いたかもしれないが、シロニヤの話に夢中になって全く聞いていなかった。まあ、自分が既にカードを持っているなんて想像もしていなかった。結果は同じだったかもしれないが。

内心の怒りを押し隠すようにして、レメデスは話を続ける。

「それを知ったわたしは、その申請が行われたギルドを何とか探し出し、急いでそこに駆け込んだよ。」

しかし既におま……その生徒はどこかに行つたと言うし、仕方なくそこで偶然見つけた問題児を一人捕獲。

ついでだからもう一人の問題児もつかまえてやろうとこの街に来たら……くくく。何だか見覚えのある名前があるじゃないか？

なあ？ 武闘大会本選出場選手、ハガネ・ユーキさんよお？」

もはや鋭いという形容ではとても足りないほどの眼光が、鋼を貫いた。

「あー、えっと、そのー、やっぱり誤解というか、人違いというか、そういうのが……」

非常に矛盾する表現だが、生きながら殺されそうなレメデスの迫力に、鋼はしどろもどろで最後の抵抗を試みる。

だが、それを断ち切るように、

「冒険者カード、持ってるんだろ？ 出しな？」

「え？」

「出しなつて言ってるんだよ！」

「は、はい」

レメデスが鋼の冒険者カードを取り上げた。

そして、そこに書かれた文字を見て、にんまりとした笑みを浮かべた。

「ほづれ見ろ、これだ。これだよ。」

お前の魔法学院の生徒証に上書きされて冒険者カードが作られたと聞いた時は、本当にはらわたが煮えくり返るかと思ったが、これこそが動かぬ証拠だ。

そうだ。これこそがお前に刻まれた刻印。

お前が魔法学院に所属しているという、隠し切れない烙印の紋章だよー！」

そう言って、レメデスが示した場所に記されていたのは、一点。

職業 学生

「なんだその伏線！？ ロングパス過ぎるだろー！」

鋼は思わず叫んだ。

最初に冒険者カードを見た時からこちら、たまりに冒険者カードを覗いた時に職業欄を見ることはあったが、もともと高校生だったからと思って完全にスルーしていた。

そしてひとしきり驚いた後、

「というか、それは紋章ではないのでは…？」

と引き気味ながら律儀にツッコミを入れる鋼は本当に偉い。

だが、そんな偉さは当然レメデスには通用せず、

「さあて。これでもう言い逃れなんて出来ないって分かっただろ？」

「あ、いやその……」

「公爵家の生き残りだろうが何だろうが、一度学院に入った以上、いや、わたしの担当になった以上、手心を加えられるなどと思うなよ？」

今までサボりにサボった半年分のツケ、払ってもらおうぞ？」

言うなり、レメデスは鋼の体をいとも簡単に抱え上げ、

「ちよつと待つ……」

「テレポート!!」

懐から取り出した石を掲げ、鋼ともども一瞬にして姿を消してしまつた。

あとには、

「あー。ボクが永遠に不滅だなんて言っちゃつたのが離散フラグになつちやつたのかなあ……」

事態の推移についていけず、呆然とする鋼の仲間たちと、

「わたし、ましろ、ゆうき……」

戸口に立ち尽くし、名前の通り真っ白に燃え尽きる魔法使いの少女だけが残つたのだった。

結城 鋼の転生譚。

まさかの魔法学院編が、その幕を開ける。

第四十六章 ピンクタイフーン

転移が終わった後、

「ふん！ わたしはちよつと用事がある。

その間、しばらくここで頭冷やしとくんだね！

脱走仲間と一緒に、な！」

「どわぁ！？」

そう言われて鋼は、レメデスにとある部屋に叩き込まれた。

「いててて。転生直後なら死んでるところだぞ」

と言いながら、鋼が顔を上げると、

「あ、あなた……」

「あ、あなたは……」

そこには、見覚えのある二人が立っていた。

まず、

「あんたとこんな所で再会するとは思わなかったけど……。

ま、とりあえずようこそ、このクソツタレな独房に」

そう毒舌を吐いて男前に笑ってみせたのは、

「リリアア！？」

「だからリリアアだって言ってるんでしょ何回間違えれば気が済むのよこのスカートめくり魔があー！！」

あの武闘大会で実況を務めたリリアアで、

「す、スカートめくり魔？」

そう怯えを含んだ声で言っ、じりつと身を乗り出して震えたのが、

「ええと、そつちは『衆生一切焼き打ちのクリステイナ』さん、だつたっけ？」

「あ、やっぱり、あの時の人なんですね!？」

昔、クロニヤとの対決の前に路上でぶつかったランクB - の冒険者の女の子だった。

思いがけない対面の驚きが終わると、

「なあんかみんな顔見知りらしいけど、一応自己紹介しときましようか」

委員長気質なのか、リリアアが仕切りだした。

「顔見知りって言っても、本当に顔を知ってるだけだし。

その方が僕もありがたいかな」

「わ、わたしも構いません！」

残る二人も特に異存はなく、すぐに賛成。

それを受けて、

「そ、じゃあまずわたしからね」

さすがは現役アイドル、ビシッとポーズを決めてリリアアが宣言する。

「わたしはリリア・マリルリール！」

やがて世界の全てを魅了する、超学院生アイドルよ！」

傲慢で傲岸ながら、見ている者が思わず見惚れ、聞く者全てが聞き惚れるようなその宣言は、しかし、

「あれ？ リリアさんの職業って、アイドルじゃなくてバードじやありませんでしたっけ？」

隣から発せられた一言に寄って凍りついた。

ちなみにバードとは歌を使って味方を補助する職業で、別名は吟遊詩人である。

「今、なんてった？」

ギギギ、と音がしそうな動きで、リリーアがクリステイナを振り返る。

同時に恐ろしいまでのプレッシャーがクリステイナに向けられるのだが、当の本人はそれに気付かず得意げに、

「えへへ。リリーアさんて意外とそっかしいところあるんですね。あのですね。勘違いして覚えちゃってるみたいですけど、リリーアさんの職業、アイドルじゃなくてバード……はわっ!？」

「か・ん・ち・が・い・な・ん・て・し・て・な・い・わ・よ!!」「ひえっ! ご、ごめ、ごめんなさい……?」

訂正しようとして、リリーアに修正された。

「ほら、あんたも早く自己紹介!」

散々耳を引つ張られた後、ようやく満足したリリーアにクリステイナは背中を押され、自己紹介を始める。

「う、うう。わたし、クリステイナ・ラズベルです。

得意な魔法系統は火で、特技は火の魔法。趣味は火の魔法で、休みの日によくやるのは火の魔法。戦闘の時よく使うのは火の魔法で、日常生活で活用するのは火の魔法。明日世界が滅ぶとしたら最後の日にやりたいのは火の魔法で、死ぬまでに一度食べておきたい食べ物に女体盛りです!」

「いやそこは火の魔法で統一しとこうよ!!」

「え、ええ? 何でわたし、怒られてるんですかあ?」

まさか自己紹介にケチをつけられるとは思わなかったのか、クリステイナが涙目で怯えた顔をするが、どうでもいい。

鋼のツツコミ役としての魂は、どうしても彼女の暴挙を見過ごせなかったのだ。

さすがに見かねたのか、リリーアが割って入ってくる。

「あー、聞いての通り、こいつは火の魔法マニアの火の魔法バカで、外では『衆生一切焼き打ちのクリステイナ』なんて呼ばれてる、んだけど、それはあんたも知ってるのよね。」

ちなみに、ここでは『学院の最終兵器』なんて呼ばれてたわ」

「そんなにすごいのか？」

鋼が聞くと、リリーアは神妙な顔でうなずいた。

「わたしは今まで、色々な人間を見てきた。」

一目会っただけで魅了されるほどのカリスマを持った人や、頼りなさそうに見えてハーレムを作ってる奴、こっちの頭がおかしくなるほど変な奴にも会ったし、この人だけは絶対に敵に回したくないと思った人も何人かはいた。

「けど、こいつは絶対味方にも回したくないと思ったのは、後にも先にも一人だけよ。」

「……なるほど」

とにかく、すごいらしい。

もっと詳しく言うと、たぶんすごい迷惑らしい。

さっきまでのやり取りを見ると、納得できてしまるのが恐ろしい。

「それで、僕の番だけど……。」

僕はあるまり話すこともないかな。

名前はハガネ・ユーキ、冒険者をしてる。

えっと、よろしく」

鋼はそれだけで簡単に自己紹介を収めようとしたのだが、

「はあ！？ 話すことないとか、適当言ってるんじゃないわよ！

『暴風竜』の魔法を防いだタレントは話すまでもないっての！？
というかあんたがここの生徒だったのも初耳なんだけど！」

「あ、あの、わたし知ってますよ。ハガネさん、英雄さんなんです

よね！

あの後三時間くらいかけてギルドに行つてハガネさんのことを受付の人に話したら、『バカモン！ そいつが英雄だ！』みたいなこと言われたので、間違いないと思います！」

二人からの猛バッシングを受けるはめになった。

あらためて説明。

「あー。まず、僕がこの生徒だつて知られてないのは、僕が入学してから一度も学校に来たことないから、かな？」

「え、じゃああの一度も学校来てない男子生徒つてあんただつたの？！」

心当たりがあつたのか、大声を上げるリリア。

「もしかして、噂になつてたりする？」

そこに悪い予感を覚えて、鋼が問いかけると、

「あつたり前ですよ。」

一度も姿を見たことがない、『幻の転校生』つて言ったら生徒たちの間でも有名よ！」

「ええ！？ 別に転校してきたワケでもないのに！？」

なぜか普通に入学したはずなのに、転校あつかいになっていた。昔から、あだ名というのは謎が多い。

「そ、それより、英雄の話です！

あの、ハガネさんはトーキョの街の英雄なんですよね？」

クリステイナまで好奇心が抑えられない様子で鋼に迫ってくる。

「そう、だつたかな…？」

解決策が微妙だつたこともあり、適当にぼやかす鋼。

「もう、ごまかさないでくださいよう！」

さらに迫るクリステイナから逃れようと、

「あー。のど渇いちやったな」

なんてわざとらしく言いながら、手近なグラスを取って、水道から水をそそぐ。

「……ねえ。ほんとにこいつ、英雄なの？」

それを不審に思ったのか、リリーアがクリステイナに問いかける。しかしどうせクリステイナならうまく説明できずにうやむやになるだろう。

そう思っただけ水を飲みながら静観していたのだが、それがよくなかった。

「え、ええと、ハガネさんはその、すっごい、すっごいのを退治して、それでなんかすっごい英雄になったんです！」

「具体的に言いなさいよ……」

リリーアに疑われたクリステイナは、信じてもらおうと必死に記憶をたどった。

そして、

「ちや、ちゃんと、覚えてますよ！」

ハガネさんは、復活したきよ、きよ、きよ、きよにゆーを倒して、それでええと、ぼ、ぼき、ぼつき……あ、『ぼつきで勇者』って名前をもらったんです……！」

「ゴブハア……！」

鋼は飲もうとしていた水を全部吹き出した。

「や、やっぱりHENTAI!？」

リリーアはスカートを押さえ、思い切り鋼と距離を取ろうとするし、

「すっごいですハガネさん！」

お仲間もみんな美人で強い女の人ばかりだし、わたし、ホント尊敬します！」

クリステイナは目をキラキラさせて近づいてくるし、本当にもう勘弁して欲しかった。

「それで、本題なんだけど」

苦労して誤解を解くと、ふたたびリリアが詰め寄って来た。

「あなたのタレントはどうなってるの？」

「どうやらリリアは、鋼のタレントに興味津々らしい。

「ええと、それはその……」

鋼は口ごもった。

事情を説明するには複雑すぎるし、まさか「神様転生のチート能力をバグ増殖しました」とか、「エディット画面でやけを起こした上に完全隠蔽タレントのせいで自分でも分かりません」とか、自分でも何言ってるのか分からないような説明をするワケにもいかない。

鋼がまごついていると、

「分かった。なら、冒険者カード見せて」

リリアはそんな要求をしてきた。

「……はい」

仕方なく、カードを手渡す。

アビリティとタレント欄は見られなくなっているのだから、見せても問題ないだろうという判断の上だ。

「ふーん、どれどれ」

とリリアがカードを覗き込んだ、直後だった。

「……なにこれ」

一秒も経たずにリリーアの眉間にしわが寄る。

「え？ なんですかなんですか？」

面白いものを見つけたとも思ったのか、クリステイナまで寄って覗き込む。

「何でハガネなのに、ニツクネームがコウなの？」

「……というのは、置いておくとして、名前、ハガネ・『ベルアー
ド』・ユーキになってるんだけど」

「え？ 嘘だろ!？」

しかし、鋼があわててたしかめてみると、本当だった。

この前そう呼ばれたせいで、カードの情報が変化してしまったらしい。

「『ベルアード』ってあれでしょ。」

光の女神様とも肩を並べたっていう、大昔の聖王の名前でしょ？」

「せ、せいおう……!？」

鋼とクリステイナの驚きの声が重なった。

鋼が思わずクリステイナを見ると、クリステイナは赤くなって目を逸らした。

「いや、授業出てないハガネはともかく、何であんたまで驚くのよ。」

「すぐく有名な人でしょ、あれ」

「そ、そんな人が出てきたら、絶対覚えてると思うんですけど」

などと不服を漏らしているが、たぶんリリーアの反応の方が正しいのだろう。

やはり、この世界での鋼の先祖は有名な人、ということになっているらしい。

事態の推移についていけない鋼に対して、クリステイナは異様な好奇心でぐいぐいリリーアに迫っていた。

「そ、その、王、なんて呼ばれるってことは、やっぱりその人、すごかったんですか？」

「ん？ そうね。わたしもあんまり詳しくないけど、すごかったらしいわよ。」

二刀流の使い手で、一対複数の戦いも自由自在。

どんな屈強な男も、あるいはどんなに美人の刺客も、まさに鎧袖一触。

百人斬りもやったことがあるとか」

「ま、まさかの両刀使い……！？ それに、百人斬りとか……。」

ほかには！？ ほかにはないんですか？」

クリステイナの食いつきがやばかった。

そしてそれを見る鋼の脳裏に、一つの疑惑が浮かぶ。

「ええ？ うーんと、最初にも言ったけど、伝承によると女神や魔神とも肩を並べたとか……まあ、肩唾だと思っけど」

「女神や魔神と朝チユンとか！ すごい！ すごすぎます……！」

困惑するリリアに、大興奮するクリステイナ。

一方鋼は、疑惑を確信に変えていた。

(クリステイナ。たぶんそれ『せいおう』違いだよ……)

しかし、そう分かっていても微妙な話題すぎてツッコめなかった。ツッコミ王鋼。まさかの敗北である。

「ま、まあハガネもよく分からないって言ってるし、クリステイナが怖いからこの話題は終わりにするとして……。」

問題はこっちよ……！」

「まだ何かあるの!？」

鋼は悲鳴を上げた。

「あるんだからしょうがないでしょ！」

問題があるのは、能力値よ！」

そう言っつてリリーアは、全員に見えるように能力値画面を呼び出し、かざしてみせた。

「まずHPとMPがバカみたいに高い！」

……のは、問い詰めたいけどいいとして

「いいんだ……」

「よくないわよ！」

よくないけど……いいのよ!」

「どっちだよ」

と言いつつ、鋼にもなんとなく気持ちは分かった。

「問題なのはこっち。

筋力と敏捷が異様に高いのに頑強と抵抗はゼロ、なのも、よくないけど、いいとして……!」

「すごい葛藤だな」

「他人事みたいに言うな！」

それより問題は、これなのよ!」

そう言っつてリリーアが指差したのは……。

魔力 0

それを聞いて、鋼は首をかしげる。

「いや、それは普通だろ？」

だって僕は、一度も魔法とか使ってないし……!」

しかしそれを聞いて、リリーアどころかクリステイナまで呆れた顔をした。

「あのね。ここがどこだか分かってるの？」

魔法学院よ。そこで、魔法が使えないとなったら……」

「あ……」

ようやく鋼にも事の重大さが分かってきた。

「もしかして、退学とか？」

おそろおそろそう聞きながら、それはそれでありかも、と思ったのだが、

「まさか！？ ここはラーナ魔法学院よ！」

退学なんてできるワケないでしょ！

もし、魔法が使えないとなれば……」

「なれば？」

「一生、ここから出られないかもね？」

「マジ……？」

鋼がそう言った瞬間だった。

バン！と爆発音のような音がして、扉が吹き飛ぶように開いた。そしてそこから、見覚えのある長身の偉丈婦が現れる。

「さあて待たせたねえ、子猫ちゃんたちいいいいいい！」

楽しい楽しい、お勉強の時間だよおおおおおおおおおおおお
おお……！！」

かくして地獄の窯は開かれた。
鋼は、生き残ることができるか？

第四十七章 逆転の秘策

実は、懸念していた鋼魔法使えない疑惑だが、すぐに解決した。

レメデス先生は、普通の人間だったら爆死するくらいの魔力を注ぎ込み、強制的に体内に眠っている魔力を覚醒させる、とか何とか少年漫画にしか存在しない方法を提案したのだが、生徒三人の猛反対にあつてさすがに却下。

魔力がゼロでは自力で魔法は使えないが、MPがあるのなら魔法の素質はあるかもしれない、だったら魔道具を使って魔法を使ってみたらいつか魔力が上がるかもしれない、とリリーアが提案。

だったら適当な魔道具を、となつたところで、突如ブルブルと鋼の腰で木の枝が震えた。もしやと鋼がループを使って見てみると、

『伝説の』『名状しがたき』『殺戮好きの』『凄く嫉妬深い』『鋼愛主義の』『名を呼ぶことも畏れ多い』『相棒と呼ばれたら嬉しい』『ハガネ様専用の』『どんどん成長する』『世界創造の』『ヒロ
いる』『もちろん魔道具としても使える』ただの木
の枝『ワールドエンド・ブランチ』+24121

とのことで、また嫉妬されても困るといふ事情もあり、相棒の木の枝を魔道具に採用。

加えて、鋼も最初から薄々と勘付いてはいたのだが、どうもこの木の枝、見る度に変化しているとうとう確信。

前回見た時は魔道具関連の物はなかったはずだし、その前に書かれている、真ん中をあわてて消したような謎の文字列もなかったはずだった、きつとこれは『成長する』の効果に違いない、というのが鋼の考察だ。

何はともあれ鋼が嬉々として木の枝を振り回すと、そこから極太レーザーが出現。

対魔術措置は完璧なはずの部屋の壁をぶち抜いてレメデスに叱られ、場所を移動。貸切の魔法練習場で一時間ほど鋼が調子に乗ってレーザーをぶっ放し続けていると、

HP	6679	MP	818
筋力	93	知力	0
魔力	21		
敏捷	47	頑強	0
		抵抗	0

「なんだこいつ、反則か…！」

あ、今22に上がったし！」

鋼のカードを手にとってモニターしていたリリアが、ファンには絶対聞かせられない口調で悪態をつくほどの成長を見せ、あつという間に他の同級生たちとほとんど遜色ない水準まで達するに至ったのだった。

だが地獄はここから始まった。

魔法に関しては素質ありとレメデスにも認められた鋼だが、魔力面で落ちこぼれる可能性がなさそうだと分かると、レメデスの指導も容赦がなくなったのだ。

その後、鋼の知識不足、というより魔法や歴史、神学に関する知識が皆無だということが露見したため、座学全般が苦手なクリステイナと一緒に地獄のスパルタ講義が始まった。

ちょうどその話をしていたらしいので、という理由でこの世界の神様について、から特別講義スタート。最初の内は、さつきも話に出て来た、戦の神でもある光の女神『ルウィーニア』や、謎の魔神

『ラビティータ』、悪戯好きでとにかく余計なことしかしかないという闇の神『リリアア』（ちなみにリリアアという名前はこの辺りから来たらしい）、神の声が聞けるだけの人間だったはずが、成り行きで神の力を得て神に昇格してしまった審判の神『審神者』、天界屈指のスピード狂で、神様っぽいことは全くしない風の神『ストライト』、などなど、色々と興味深い話が多かったのだが、それでも一時間以上も自分が全く聞いたこともない知識ばかりを詰め込まれれば、集中力も途切れてくる。

だがそれを許さないのがレメデスだった。鋼やクリステイナの意識が講義から逸れた瞬間、レメデスから狙い澄ましたように質問が飛び、答えられないと容赦なく罵声かチヨークか魔法が飛んでくる。幸いなことに鋼には『瞬間記憶復元』があり、出来事の流れや人物の詳しい説明などは無理だったが、人物名や著作などの固有名詞、それに有名な言葉などは、一度見たり聞いたりすれば忘れることはない。

いや、まあ実際には忘れるのだが、瞬時に思い出せた。

あとチヨークはともかく魔法は当たった瞬間何かしらのタレントで無効化したりするので、被害はむしろ周りの人に行くことになった。

そして、一方のリリアアを襲ったのは、アイドル活動中サボりにサボった実技課題の数々。見かけや言動に寄らず、実に頭脳明晰だったリリアアは、一年生が前期でやるべき座学の課題を前もってほとんど片づけていたのだが、実技についてはそうもいかなかったらしい。

「くうう。アイドルの下積み比べればあ……！」

と踏ん張ってはいたが、こちらはこちらで色々と過酷そうだった。

そんなリリアアの苦闘ぶりを見てみると、

「もちろんあなたにも、後であれのフルコースを堪能させてやるよ」
なんてレメデスに宣言されたのは、鋼にとってさらなる過酷な事
実だったのだが。

しばらくしてようやく、

「仕方ない。わたしも他の授業があるからね。

今日はとりあえずここまでにしてやるか」

とレメデスが言っただけで部屋を出て行った時、鋼たち三人が一人残らず地面にへたり込んだと言えば、その特別授業とやらがどれだけ大変だったか分かるだろう。

レメデスが出て行った後、疲労困憊し、最後の一滴まで体力を使い果たした鋼たちは、その独房のような部屋ですぐさま泥のような眠りについた……りはしなかった。

「これで、あなたにも、分かったでしょ。

この、魔法学院の、恐ろしさって、奴が……」

魔力の使いすぎでフラフラになりながらも、リリーアが言うと、

「たしかに、連日でこれはきつそうだなあ」

「つらかったとはいえ、途中から意外と無理なくこなせていて余裕があった鋼と、

「わたしい、こんな生活が続いたら、きつといつかレメデス先生を焼き殺しにかかると思えますう……」

それとは対照的に、よろよらになつて、やけにギラギラと危ない目をしてそんなことをたまうクリスティナ。

「けど、やっぱり追い付くまで部屋に缶詰とかは困るな。みんな心配しているだろうし……」

考えてしまうのは、やっぱり仲間のことだ。

もちろん身の安全とかそんな物は心配するだけ無駄なメンバーではあるが、真面目なアステイ辺りは本気で困っている可能性もある。できるだけ早く連絡、もしできれば合流、したかった。

そんな愚痴を漏らす二人を見て、リリアはなぜか笑みをこぼした。

「そう。そうよね。よかったわ。二人がそういう意見で」

それはあまりに薄情な態度にも見える。

しかし鋼は、その奥に何かの思惑を見て取った。

「何か、考えがあるのか？」

鋼の問いに、

「……三か月よ」

リリアは、答えにならない答えを返した。

当然鋼には、何の話だか分からない。

「三か月って、何がだ？」

その鋼の困惑を、楽しむように、

「あと三か月で、ここを出られる計画があるって言ったら、あなたはどつする？」

リリアは優雅とも言える微笑を浮かべ、そんな風に鋼を誘ったのだった。

「この部屋の唯一のいいところは、脱走防止の色々な術式のおかげで、盗聴の心配がないってことね」

とうそぶくりりーアを中心に、鋼たちは疲れた体に鞭打って三人で車座になって集まった。

それを見届けて、リリーアがまず口を開く。

「それでは、わたしたちの計画を説明するわね」

「わたしたち？」

「そう、わたしと、クリステイナ。それと、もしかするとあなたの計画よ」

その言葉に鋼がクリステイナを見ると、

「はい！ わたしとリリーアさんは、仲間なんです！」

何ともうれしそうな言葉が返ってきた。

「わたしはアイドルを続けるため、クリステイナは外で冒険者を続けるため。」

協力してこの学院を出ようと前から話し合っていたの」

「そんなにアイドルやりたいなら、どうしてこの学院に来たんだ？」

鋼がつい我慢し切れずに尋ねると、リリーアは渋い顔をした。

「父親との約束なのよ。魔法学院に入らないと、アイドル活動は認めないって。」

どうせ両立なんてできっこないと思ってたんでしょうけど、お生憎様。

世界初の魔法学院生アイドルって箔がついて、仕事もグンと増えたわ」

「それはまた……」

鋼は思わず言葉を失った。

「ただ、さすがに学院に在籍しながらだと限界があるしね。
出られるものなら、すぐに出たいってワケ」
「なるほどね。」

あ、そういうえば、学院の生徒たちもリリーアがアイドルだって知
ってるのか？」

アイドルが同級生で、しかもこんな気の強い人間だと分かったら
驚きそうなものだ。

「当たり前でしょ。隣にいて気付かれないとか、そんなしょっぱい
知名度してないわよ。」

……ま、ごく一部の失礼な奴には名前を間違えられたりもするけ
どね」

「あはは」

ギリリ、と刺すような視線が飛んできて、鋼は苦笑いした。

「あ、言うておくけど、学院の中でもわたしはちゃんとアイドルや
ってるから、部屋の外ではわたしに気安く話しかけないでね」

「……まあ、努力するよ」

初対面からこちら、どんどんアイドルのメツキが剥がれてきてい
る気がする。

アイドルというのは本当に幻想の世界の存在なのだと、身をもっ
て感じる今日この頃であった。

「それで、具体的にはどうするんだ？」

また脱走するとか？」

鋼としては、外には出たいものの、あまり荒っぽい方法は取りた
くはなかった。

彼女たちの計画の内容次第では、決別するかもしれないな、と思
っていたのだが……。

「そんなことしないわよ。」

「そりゃ、わたしも隙を見て一度外に出たけど、そんなの所詮一時のき。」

「すぐに連れ戻されるって分かったし、そんなんじゃ逃げるみたいでおもしろくないじゃない」

「リリーアの目が好戦的に光る。」

「あふ。わたしは、冒険者さえできればあ、何でもいいんですけどねー」

「この期に及んで眠そうな目をしてあくび交じりにそんなことを言うクリステイナとは対照的だった。」

「わたしはあくまで、合法的に、完全に誰からも文句を言われない形で、この学校を颯爽と出ていきたいの。」

「そこで目をつけたのがこれ、一級魔術師認定制度よ！」

「そう言っってリリーアが出してきたのは、小さなパンフレットだった。」

「基本的に卒業っていうのは魔術師の資格を得ることなんだけど、この学院でもらえる可能性のある魔術師の資格は三種類。」

「簡単に言うと、ここで三年勉強すれば二級魔術師の資格が、そこからさらにがんばって研究をして、それが認められると一級魔術師の資格が手に入るの。」

「さらにものすごい功績を上げた人には特級魔術師なんて資格も授与されるらしいけど、まあこれはとりあえず関係ないわね」

「へえ。なんか本当に大学みたいな……あ、いや、それで？」

「カリキュラムの関係上、どんなに優秀でも、どうしても三年間かけないと二級魔術師の資格は取れない。」

「だけど、その上の資格、一級魔術師の資格なら、実は二級魔術師の資格がなくても、自分の研究が認められるだけで取得することが

できるって分かったの」

「じゃあ、もしかして……」

ここまで言われれば、鈍い鋼にでも分かる。

それを読み取って、リリーアは心底愉快そうに破顔した。

「そう。どうしても時間のかかる二級魔術師をすつ飛ばして、一足飛びに一級魔術師になって卒業してしまおうっていうのが、わたしの計画よ！」

鋼の度肝を抜く、それは大胆な計画だった。

「いい？ 一級魔術師になるには、自分の研究成果を先生に見せてそこで優秀な物だと認められる必要があるの。」

そこで認められる研究は大きく分けて四つ」

リリーアの説明は続く。

「一つが魔法理論。魔法はこうやってできているとか、こういう風に魔法を使えば効率がよくなるとか、魔法全般に対する画期的な理論を確立できれば、必ず認められるそうよ。」

ただ、これはもう開拓され尽くした分野で、ここ五十年ほど、新しい魔法の理論は見つかっていない。絶望的ね」

「ならそれはパスだね」

能力はともかく、知識面で鋼が何かできるはずもない。

「二つ目は古い魔道書の解読。魔術師なんてひねくれ者が多いし、

特に千年以上前に書かれた魔道書なんかはそもその魔法言語を使って書かれたりしているから、強力な代わりに難解で、今も解読されていない物は多くあるわ。

魔法理論よりは有望かなと思って、わたしもちよつとは期待してただけど」

そこでリリーアに、はいこれ、と本を渡された。

ぱらぱらとめくってみるが、正直さっぱりだった。

所々読める単語はあるものの、全体としては何を書いているのか意味不明だ。

「これを読めばいい、ってこと？」

鋼が尋ねると、リリーアは乾いた笑いを返してきた。

「なら、いいんだけどね。それ、学院で解読の方法を習うのに使う、

一番簡単なテキスト」

「ええっ!？」

「モノは五百年くらい前の偏屈な魔法使いが書いたものらしくてね。五百年でこれだから、千年以上だったらどうなるか、あんたにも分かるでしょ」

「うわぁ……」

想像するだに恐ろしい、という奴だった。

「ま、二千年前の本とかでも、神聖文字だったら今でも神聖魔法に使ってたりするから、高位の神官様とかなら読めるんだけどね。」

神聖文字で書かれた本だけは古くても全部解読されちゃってるし、そもそも高位神官なんて身近にいないし、これも断念したわ」

というリリーアの言葉には、鋼はあいまいに笑っておいた。

そういえば身近にそんな人がいたような気がするが、今回に限っては役に立たないようだ。

「で、三つ目は有用な新魔法の開発。あるいは有用な古代魔法の復

活。

わたしはそんなに魔法のセンスがないから、こっちは半分あきらめてるんだけど……」

そこで、しばらく静かだったクリステイナにリリーアの目が向く。「ふわあ？ あふ。あ、新魔法、ですかあ？」

はい。考えてますよ？ まほうは、ばくはつですからあ……」
だが眠気が勝っているせいで、どうやら使い物になりそうにない。

「まあこんなけど、クリステイナの魔法の才能は本物よ。

こっちはクリステイナに任せてるけど、アイテムボックスに使われている、何でも収納できる魔法、みたいなのを開発しているんですよ。」

……できるかできないかもわたしにはよく分からないし、どっちみちわたしがこれで卒業するつもりはないんだけど」

「どうして？」

「だって、そんなのわたしの力じゃないじゃない。」

クリステイナは共同で開発したことにしてもいいって言ってるけど、わたしはそんなの認めない。

クリステイナには言ってるけど、こいつには自分のために魔法を開発してほしいの」

「そっか……」

きつい性格の裏にあるリリーアの優しい思いを、鋼はたしかにその言葉の中に感じた。

「ふう。ずいぶんと話が長くなっちゃったけど、次が最後。

次の四つ目が最後の研究分野、そして、わたしたちの完全な本命よ」

「魔法理論、魔道書、新魔法……それ以外に、何か研究することなんてあったっけ？」

鋼が言うと、リリーアはにこりとした。

それは今日何度か見せた、獰猛で好戦的な、アイドルではない笑い方だった。

「最後の一つは、単純よ。魔法の運用」

「魔法の運用？」

便利な魔法の使い方とかだろうか、と鋼は見当をつけたが、全然違った。

「そう、もっとも実践的な魔法の運用法を見せるの。」

「……つまり、戦闘よ」

「せ、戦闘?!」

話がいきなり物騒な方に転がってきて、鋼は声を上げた。

「びつくりした？ でも、それがわたしがあんたを仲間にする理由」

その動揺すら、自分の手のひらの上でもてあそぶように、リリーアは笑みを見せて、言った。

「ハガネ。あなたには、学院長を倒してほしいの」

鋼の学院脱出計画の、それが始まりの言葉だった。

間章 あるアンフェアな少年の夢

交通事故だった。死体は見つかっていないが、生きてる見込みはないらしい。

くすんだ視界の中で、父親がそんな意味のことを口にした瞬間、

ああ、これは夢だな、と確信した。

そこには何の不思議もない。

以前にも、何度も何度も繰り返し、同じ夢を見ているからだ。

だから過去を再現しているはずのその光景も、どこかよく出来た映画を見ているような、こなれ過ぎて、完璧過ぎて、どこか現実味が無いように映る。

676

(最近あいつの姿を見ないな。

借りてたゲーム、オレはもうクリアしちゃったんだけどな)

『あいつ』が事故にあって数日は、間抜けにも『オレ』はそんな風に呑気に構え、その裏にある残酷な真実なんて想像することもなく生きていた。

当時の『オレ』が『あいつ』に起こったことを知ったのは、『あいつ』からの音沙汰がなくなって二週間も経った頃。

そしてたぶん、『あいつ』が死んでから十三日が過ぎた後だった。

その日、いつもより少し遅く仕事から帰ってきた父親は、『オレ』に淡々と『あいつ』にまつわる事実を告げた。

そこで『オレ』は、初めて『あいつ』を襲った悲劇の存在を知る。

『あいつ』がこつちに何の連絡も寄越さないのは、『あいつ』の意思ではなく、事故に遭ったから。

事故の原因は、車道に飛び出していた動物を『あいつ』が助けようとしたせいらしい。

事故の現場を見ていた目撃者の証言では、轢かれそうになっていたのは白がちな三毛猫に見えたが、猫は事故後すぐに逃げ出してしまうたそうなので、はっきりとは分からないそうだ。

だが、そんなことは『オレ』には関係がなかった。

『あいつ』は猫が好きだったが、それ以上に底抜けに優しい奴だった。

車道にいた動物が犬だろうがハムスターだろうが狐だろうが、何だって助けに飛び出しただろう。たとえそれがカエルだったとしても助けたかもしれない。

目撃者が言うには、車道に飛び出してしまった猫がいて、それを『あいつ』が助けに入って、そこをスピード無視をしたトラックが通りかかり、いや、もしかすると逆で、トラックが通りかかったところに猫を見かけたから助けたのかもしれないが、その辺りはどうでもいい。

結果として猫は助かり、『あいつ』はトラックに轢かれて宙を舞

い、地面に投げ出されたい。

そこからの証言は、途端に曖昧になる。

トラックは、人を轢いたことに恐怖したのか、その先の山道に向かつて更に加速して逃走。

地面に倒れた『あいつ』の体は人形のようにピクリとも動かず、何かで切ったのか、あるいはよつぽど当たり所が悪かったのか、明らかに致死量ではないかと思われるほどの出血をしていたそうだ。

その一部始終を見ていたその人はハツと我に返って警察に電話、その後慌てて現場に駆けつけてみると、もう『あいつ』の死体はなく、ただ地面に血の痕だけが残されていたとか。

都会の真ん中なら死体が消えるなんてありえないのだけれど、残念ながらそこは『あいつ』の家族が旅行で訪れた山の中で、ガードレールの向こうは崖だった。

轢かれた『あいつ』が錯乱し、最後の力で山に落ちたかと考えられ、連絡を受けた警察と、それから『あいつ』の両親がやってきてほとんど半狂乱になって捜索をしたようだけれど、『あいつ』の姿はどこにも見当たらず、ただ地面に残された血の量と、複数の目撃者の証言から、生存は絶望的だという事実だけが残った。

その事故から約二週間。山道で結構なスピードを出していたというのに『あいつ』を轢いた車はそれ以上事故を起こしたりせずうまく逃げおおせたらしく、轢き逃げの犯人はつかまらず、『あいつ』の死体もやはり見つからなかったそうだ。

それでも進展がなかったワケではない。ごねる『あいつ』の両親を、その親である祖父母、つまり結城家のおじいちゃんとおばあちゃんやんが「何事にも区切りは必要だ。お前たちも自分の生活をしなくてはならない」と説得して、とうとう『あいつ』の葬式を出すことになったらしい。

父親の話はまるで夢の中の話のようで、夢を見ていないはずの過去の『オレ』は、今と同じようにまるで夢を見ているようだと考えていた。

けれどこの話の最大の悲劇は、『オレ』が体験しているこれが全て現実にあつたことだという一点に絞られるのであって、父親の話聞いたその三日後には、『オレ』は学校を休んで『あいつ』の葬式に参列していた。

おかしな匂いのする見慣れない建物の中に、やはり慣れない格好をしたたくさんの人が詰まっている光景には、子供心に違和感しか覚えなかった。お坊さんの上げるお経が耳障りで、お焼香の仕方もよく分からなくて、正面に飾られた『あいつ』の楽しそうな笑顔が、やけに癪に障った。

その場違いな笑顔を見てみると、一緒にいた時の楽しい思い出ばかりが浮かんで、胸が苦しくなる。『あいつ』はいつも楽しそうに、『オレ』に無理矢理に自分の好きなゲームを押し付けたり、『オレ』を無理矢理外に連れ出して一緒に冒険ごっこをしたり、『オレ』をさんざん振り回しては喜んでた。歌がやけにうまくて、なのにわざわざ調子つばずれな声で、「ぼーくはうまれかわったらねーこになるー！」なんて歌っていたのも覚えている。

今にして思えば、『オレ』も『あいつ』も年に似合わない厨二病だったのかもしれない。それでも二人でバカなことを言い合うのが楽しくて、『オレ』たちはずっと、夕方になるまで遊んでいた。

空っぽのお棺を睨み付けながら、『オレ』はふと、『あいつ』は

猫に生まれ変わったかな、なんてことを考えて、考えてしまつて、そうしたらもうダメだった。こんな場所で泣かないと決めたはずなのに、こんなところに『あいつ』はいないのだと分かつていたはずなのに、両目から熱い物があふれてきて止まらなかつた。

立ち竦んだまま、ぬぐいもせずにはたばたと地面に滴を落とす『オレ』の耳に、どこからか猫の鳴き声が聞こえた気がした。

家に帰つた『オレ』がまずやつたのは、泣くことでも悲しむことでも悔やむことでもなく、荷物の整理だった。

『オレ』の家に残っているゲームやマンガのほとんどは、『あいつ』が置いて行つた物だ。本来の持ち主がいなくなつたその荷物と一緒に日々を過ごすことは、その時の『オレ』にはとても耐えられないことだった。

どれ一つとつても『あいつ』との思い出が詰まっていない物はない。それらを全部まとめ、どこかに捨ててしまつつもりだった。

内容を出るだけ見ないようにしながら、大きな袋の中にどんどん詰め込んでいく。機械的に、追い立てられるように、どんどんと詰め込んでいく。

そして最後の一つを手を取つた時、思わず『オレ』の手が止まつた。それは、『あいつ』が最後に貸してくれたゲームソフトだった。

ゲームの内容は単純で、剣と魔法のファンタジー世界の冒険者になつて、魔物と戦つたり住民からの依頼をこなしたりする、典型的なRPGだ。『あいつ』のセーブデータも一緒に受け取っていたが、飽きつぽい『あいつ』のデータなんてすぐに抜かして、『オレ』の方がすぐにクリアしてしまつた。

『あいつ』が生きていたなら特に思い入れを感じることもなかつ

たはずの、何の変哲もないゲームソフト。なのに、これを貸してくれた時の『あいつ』の笑顔が脳裏をかすめて、じわりと視界がにじんでくる。

それでも未練を振り切って『オレ』がそのソフトを袋に放り込もうとした時、

「じゃあ……」

まるで、それを引き留めるように、猫の鳴き声が聞こえた。

「お前、なのか…?」

自分でも、その時なんでそんなことを言ったのか分からない。

けれど、いつの間にか現れたその猫は、ゲームソフトを捨てようとする『オレ』の手を押し留め、『オレ』の問いを肯定するように、もう一度、にゃあ、と鳴いた。

その猫は『オレ』の前に来ると、人のように器用に、自分の右前足を差し出した。差し出されたそこには、見覚えのある紙が結ばれていた。

「お前、それ……」

忘れもしない。その手に巻き付けられていた紙は、『あいつ』と二人、ゲームの攻略で大事な情報をメモするのに使っていた、クマの絵が描かれたメモ帳だった。

『オレ』は震える手でその紙を開くと、そこには平仮名だらけで、まるで利き腕じゃない手で書いたような、ふにゃふにゃな字で、こう書いてあった。

『ぼくの でー た れべる 99ま であげとい て』

それを読んだ瞬間、『オレ』は叫んでいた。

「もつとほかになかったのかよ!!」

いくら何でも、こんな最後の言葉にしてはひどすぎる、と思った。

こんな時に書く言葉じゃないし、こんなことしたって何の意味もない。

本当に心の底から自分の死を悼んでいる人間にやることじゃない。その時の『オレ』は子供過ぎて、本当はそんなにきちんと自分の想いを言葉にできなかったが、大体そんなことを思った。

なのにその猫は、楽しそうににやあ、にやあと鳴いて、まるで喜んでみるみたいだった。

「鳴いてるんじゃないよ！ そもそもこのゲーム、レベル50でおわりだよ！」

『オレ』もそれに叫び返ししながら、本当はもう分かっていた。

大事な場面だろうが何だろうが、こんな軽くてバカみたいなノリこそが、いつもの『オレ』たちの雰囲気で、姿は変わっても、『あいつ』は『あいつ』として、『オレ』に会いに来てくれたんだってことが。

『……………ネ』

そして、『オレ』は、ついさっきまで一緒に騒いでいたはずの猫が、なぜかこつちをじっと見て、止まっているのに気付く。

『…ガネ』

見ると、その猫の小さな口が動いている。

なのに、その声は遠すぎて『オレ』には聞こえなかった。

『オレ』はその声を聞こうと、必死で耳を澄ます。

『ハガネ！』

耳元で呼ばれた自分の名前に、慌てて飛び起きた。

「あ、やっと起きた」

目を覚ました時、目の前にいたのは、『あいつ』とも、もちろん猫とも似ても似つかない少女だった。

「あれ、オレ、は……」

言いかけて、頭を振る。

自分のことを『オレ』なんて言っていたのは遙か昔。

小学生のくせに厨二病全開で、それこそ「勇者王に、オレはなる！」なんて息巻いていた十年以上前の話だ。

だから、

「ぼく、は、僕は、どうしてたんだっけ？」

だから、これが正解だ。

だというのに、なぜかしっくりこない気もしていた。

たぶん、まだ頭が体についていけない。

状況の把握が出来ていなかった。

それを見た目の前の少女、ほんの数日前に知り合ったりリア・

マリルリールが、僕に呆れたような目を向ける。

「まだ寝ぼけてるの？ やっぱり疲れてるんじゃない？」

さっきもうなされてみたいだし、なんかひどい夢、見てたんでしょ？」

「そう、だっただっけ？」

よく分からない。

夢の記憶はまだ残っているけれど、胸に迫るあの情動は、僕の胸

を焼いた渴望と寂寥の想いは、現実への覚醒と共にどこかへ行ってしまうたように思う。

想いの芯をなくした僕は、それでも自分に問いかける。

さっきの夢は、僕にとって、本当にひどい夢だったのだろうか、と。

たしかに、悲しさばかりが詰まった夢だったようには思う。

でも、懐かしい人のことを思い出せたのだから、僕にとってはいい夢だったようにも思えるのだけれど。

「あんたさ。もしかして、何か大きなトラウマでも持っていたりするワケ？」

突然、リリーアがそんなことを聞いてくる。

「何で？　そういうの、全くないけど？」

僕を見て、そういう発想が生まれるということ自体が理解不能だった。

自分で言うのも何だけど、そういう物とは一番縁遠い人間だと自覚しているのに。

「そ、ならいいけど」

単なる思いつきだったのだろうか。

彼女は軽く流すと、

「あ、ちよっと待って」

起き上がるうとした僕を、両手で押し留めた。

彼女の手のひらの熱が胸に染み込んでいくような気がして、なぜだかむずがゆかった。アイドルなんて物をやっている彼女が、絶世の美少女だということを、どうしてかこんな時ばかり意識してしまう。

「な、何を……」

僕の動揺になんて微塵も気付かないまま、彼女の顔がぐつと近付いてくる。

僕は身も世もなく悲鳴を上げそうになって、必死でそれを押し殺した。

「動かないで」

むずがる僕を押さえつけるみたいに、僕の心臓の上に置いた彼女の手に力がこもる。

そして伸ばされた反対側の手にハンカチを掴んで、彼女は僕の目の元に押し付ける。ほんの数瞬、彼女の長いまつ毛が、二、三度、瞬くくらいの時間を置いて、

「もう、いいわよ」

彼女は何もなかったみたいに僕から離れていった。

それから、僕を一瞬、何か哀しい物でも見るかのように一瞥して、
「……別に、何でもないわよ。ただ、ゴミが、ついてたから」
弁解するみたいにそう言って、僕とは反対側の部屋の隅へ。
そして、

「顔、洗って来たら？」

そっけなく言って、自分の定位置に座り込んだ。

レメデス先生の用意したこの独房のような部屋にも、一応別室で風呂とトイレ、それから洗面台くらいはついている。

リリーアの勧め通りに、洗面台の蛇口をひねって水を出し、荒っぽく顔に水をかける。冷たい水を浴びて、ようやく頭がはっきりとしてきた気がした。

鏡に映る自分の顔を見る。

ちよつと目元が赤くなっている気はするものの、それはやっぱり

いつもの自分の顔。17、いや、こつちに来て少し若くなった15歳の、いつもの結城 鋼の顔だった。

「もう、あれから十年も経つんだよなあ……」

そうして、僕はもう一度さっきの夢のことを思い出す。

十年前に死んだ仲の良かった従兄弟の夢で、それから一年くらいは何度も何度も繰り返し見ていたから、もうおなじみとも言える、そんな夢だった。

基本的には僕の過去をベースにしているので、多少の記憶違いはあるかもしれないが、今朝の夢で起こったことは、最後の場面で猫が僕の名前を呼んだこと以外は本当にあったことだ。

最後の場面については……『あいつ』が僕のことを『ハガネ』なんて呼んだことはなかったから、きつと現実でリリーアが僕の名前を呼んでいたのとこつちやになったのだろうと思う。

あの後、つまりあの夢の場面より後の話をすると、それからの僕は、前と比べて少し性格が変わったとよく言われる。

昔の僕は、ませていたけれどどちらかというと活発な子供だったが、『あいつ』が死んでからは、外に出て遊ぶよりも家でゲームをしたり、本を読んだりするのを好むようになった。

変化はそれだけではない。もしかすると『あいつ』のしゃべり方が移ったのだろうか。自分のことを『オレ』ではなく『僕』と呼ぶようになったのも、たしかこの時期からだっただけだと思う。

ちなみに、僕の部屋を訪ねてきたあの猫は、僕とひとしきり騒いで、僕がちよつと目を離れた隙にいらなくなっていた。

下手な字で書かれたメモは残っていたから、それが夢だったということはないと思う。でも、あの猫が僕を訪れることは、あれから二度となかった。

「まったく、さあ……」

思わず口から、ため息が漏れる。

「どうして、いなくなっちゃったり、したんだかね……」

恨み言でも口にしていないと、よみがえってしまった情動が、目の奥からこぼれ落ちてしまいそうだった。

「こっちはもう一度、お前と話したいって、言うのに……」

そう言って、結局は堪え切れない涙を、その目にあふれさせた時、

「じゃあ……」

それはまるで、あの時、あの瞬間の、焼き直しのように。

僕の視線の先、水で濡れて歪んだ鏡の中。その、情けなく泣きじやくる僕の顔の横には、小さな猫の姿があった。

「お前、なのか……?」

恐る恐る、けれど確信をもって僕が問いかけると、鏡の中の猫は、照れたようにもう一度、にゃあ、と鳴いた。

「あ、はは……」

信じられなくて、夢みたいで、でも夢ではないことがうれしくて、自然と口からかすれた笑いが漏れる。

「また、さ。たくさん話をしようよ」

振り返ったら消えてしまいそうで、僕は、僕たちは、鏡越しに見つめ合ったまま話をする。

「ゲームの話とか、マンガの話とか、何でもいいんだ」

目の前がどんどんぼやけていく。視界が涙でにじんで、鏡の中の猫の姿が、水で歪んでいるのか涙で歪んでいるのか、分からなくなる。

「お前がどんな存在かとか、どんな姿をしてるかとか、そんなの関係ないんだ。

ただ僕は、お前が傍にいらなくなったのが、悲しくて、寂しくて、だから……」

涙で、喉が詰まる。

たくさん話したいことがあるはずなのに、口はうまく動いてくれない。

すると、鏡の中の猫が顔を上げ、

「わ、ワシものじゃよ！」「ウー！」

しゃべった。

「……え？ いや、え？」

猫が、しゃべった？

いや、というか、

これ、ちがくね？

そんな僕の不安を、加速させるように、

「そ、その、本当はあのあといつでもこの姿で会いに行けたのじやが、あのときはほら、アレじゃろ、あんなことがあったものじやからちよっと気まずくて、昨日魔法学院とやらに連れていかれてからは忙しそうじゃったのでジヤマしちや悪いじゃろうと思っておとなしくしておったのじやが、まさかおぬしがワシのことをそんな風に思っていてくれたとは露ほども思っておらず、今日もおぬしが一人になったからチャンスじゃと思ったのじやがこんな姿で会いに行つて歓迎されるかどうか不安で、もしおぬしが顔を洗ったあとすぐに部屋にもどってしまったら今日会うのはやめようと思っていたのじやがやっぱり決断してよかったのじやとワシはちよっと前のワシをほめて……」

立て板にシャワーくらいの勢いで、ものすごい饒舌に鏡の中の猫はしゃべり倒していた。

「ちよ、ちよっと待って」

もはや演説レベルのそのおしゃべりを中断させ、僕は声の主をた

しかめようとあわてて振り返って、

「うあ、あああ！」

声にならない声が口から這いずり出た。

鏡越しではぼやけていて分からなかったが、そこにいたのは明らかに見覚えのある白い猫。僕が車に轢かれて死んだ日に見た猫で、つまりとある神様がお猫様トラップだとか言っただけで変身していた猫に寸分変わらずそっくりで。

というかそもそも、十年前に見た猫は白猫じゃなかったことを今さら思い出す。

どうしたのじゃ、とばかりにつぶらな瞳で見つめられて、僕はようやく、認めがたい事実を認めようと口を開いた。

「ええと……シロニヤ？」

返事は当然、

「そつなのじゃよ！ 猫になって、おぬしに会いに来たのじゃ！」

とつても元気のいい肯定でした。

発覚したとんでもない勘違いに、頭がくらくらした。

そりゃあ今までの十年間、まったく出て来なかった『あいつ』が、偶然夢に見たからってこんな異世界まで出張してくるはずなんてない。

ちよつと考えれば、分かったことなんだけど……。

目の前が暗くなるような思いをしながら、僕が視線を前にもどす

と、

「ん？」

白猫、というかシロニヤが、何かを期待するみたいにこちらを見上げて、くいつ、くいつ、と、前足を動かしていた。

しばらく考え込んでしまったが、

「ああ、そうか。ほら、おいで」

シロニヤが望んでいるものを読み取ると、僕はシロニヤを迎え入れるように両手を開いた。

……うん。だって基本、僕は猫が好きだし。

「コウー！」

それを見たシロニヤが、たっぷり助走をつけて、僕の胸に飛び込んでくる。

飛びついてくるシロニヤを、胸の中に受け止めながら、僕は、

「ごめん、アイちゃん」

十年前に死んだ僕の従姉、篠塚 藍理に、小さく謝ったのだった。

第四十八章 彼女の戦い方

「つまり、この媚び媚びな生き物は神の眷属ってワケね」

白猫形態のシロニヤをいやそーに見ながら、リリーアが言った。

「いや、媚び媚びってさ……」

「だってそうでしょうが！　なんだこの生きてるだけで可愛さ全開な不思議生物！

ああ！　アイドルとしては妬ましいのににらんでる姿すら可愛い……！」

そんな台詞を吐かれているシロニヤがどこにいるかというところ、リリーアの膝の上だった。

いくら神とはいえ無力な猫の身。

洗面所から出て来たところをあっさりリリーアに捕獲され、ぐちぐちと文句をつけられながらも、ぐしぐしと撫でまわされまくっているという次第である。

その後ろではクリステイナが、

「わたしにも！　わたしにもさわらせてくださいー！！」
と騒いでいる。

神の眷属、と言われた通り、この白猫はシロニヤ本体ではないらしい。

まあ眷属ではなく単なる分身で、もう一つの肉体を遠隔操作していると考えの方が近いらしいが、面倒なので二人とも特に訂正しようとはしなかった。

むしろ鋼が気になっていたのは別のこと。

「でも、シロニヤって不器用そうなのに、二つの体を動かすとか、よくそんな器用な真似ができるな？」

「なっ！　なめるのではないのじゃぞ、コウ！」

ワシはかつて、左右の手に金銀を二刀流し、レック○ザをゲット

せしめた女じゃぞー！」

「ハートゴードとソウルシ〇バーのことかああああああー!!!」
毎度おなじみではあるが、鋼はツツコミになるとテンションが上がる。

急に叫びだした鋼に引き気味になりながらも、

「まあそれはそれとして、クリステイナも起きたみたいだし、昨日の話の続きをしてもいい？」

リリーアは本題を切り出した。

「ああ。頼むよ」

「ふむ。ワシもその計画とやらに乗ってやろう」

「あ、わたしも聞きたいです」

即座に返ってくる賛同の返事。

「いや、クリステイナには一度話してるんだけど……まあいいわ」

三人＋一匹は、狭い部屋でふたたび車座になる。

「昨日はあんたに学院長を倒して欲しい、って言ったけど、もちろん一対一で勝てなんて無茶は言わない。

幸い、学院長は何人でかかってきてもいいって明言しているわ。

ついでに勝った時、その場に立っていられた全員に魔術師資格を与える、とも」

「つまり、僕とリリーアとクリステイナの三人で一斉にかかるってことか？」

鋼がそう聞くと、リリーアはまさか、と首を振った。

「この前の武闘大会を見てあらためて感じたわ。学院長の力は、はつきり言って隔絶してる。

少なくともわたしが見た人の中では、一対一で学院長に敵うような人間なんていなかった。

だからわたしは、数の力を頼る」

「もしかして、一對十くらいで、学院長をボコるつもりだったり？
それはちよつと卑怯っぽいなと思いながら鋼が問いかけると、リ
リアはもう一度、まさかと言つて首を振った。

「その程度だったら過去に何組かが試したわ。結果は惨敗。という
より、今まで学院長に挑んで勝った人間はいないそうよ」

「じゃあ、どうするんだ？」

「だから、数の力に頼るつて言つたでしょ。十人でダメなら二十人、
二十人でダメなら三十人……なんて、みみっちいことは言わないわ
そこでリリアは、まるで獰猛な肉食獣が牙を見せびらかすよう
に笑つて、言つた。

「三百人よ！ 一對三百の状況を作つて、数の力で圧殺してみせる
わ！」

その言葉に、さすがの鋼もしばし言葉を忘れた。

「卑怯もここまで来るといつそ豪快だね」

という精一杯の皮肉も、

「でしょ？」

という一言で軽く流された。

武闘大会の一回戦ではあんなに卑怯だとか言つてたくせに、と鋼
は思わなくもない。

「でも、そもそも人がそんなに集まるかな？」

という当然の疑問には、

「あのねえ。わたしが誰か忘れたの？ 超学院生アイドル、リリ

ア・マリルリールよ。」

わたしには学院長の魔法に耐えるほどのタレントもないし、クリステイナほどの魔法の才能もない。

でも、わたしには人を惹きつける才能がある。だからこれはわたしの戦いよ。

このわたしの名にかけて、これからの三か月で、最低でもそれだけの数は集めてみせる。

だからあんたは、大船に乗った気でいなさい」

非常に男前の台詞で返された。

ここまではいいのだが、

「ええと、それじゃあ僕は、ただその三百人に交じって戦えばいいのかな？」

肝心の鋼の役割が見えてこなかった。

集団に交じって戦うだけなら楽そうだなとは思ったのだが、やはりそうでもないらしい。

「いくら三百人がいたって、学院長が自由に魔法を使えば、あっさりやられかねないわ。だから、前に立って学院長の魔法に耐えながら、学院長の詠唱の妨害をする人材がどうしても必要なのよ。

おまけにその人が、間違って味方の魔法を受けても無事な人間なら、言うことないわね」

そう言って、ちらりと鋼を見るリリーア。

「なるほどね」

ここに来てようやく、リリーアが鋼のタレントを過剰とも思えるほど気にしていた理由が分かった。

「ま、そういうことよ。あんたには学院長に張り付いて戦ってほしいんだけど……」。

ちなみにあんた、無効化できない苦手な属性とかある？」

「ええと……少なくとも調べた限りでは大体防げると思うけど、条件によって発動するタレントが違うから、苦手な属性ってのもなく

はないかな」

「たとえば？」

リリーアの顔が真剣味を帯びる。

「火属性の攻撃を頭に食らうとやばいかも」

「もしかして、弱点だったりする？」

「弱点というか……頭に火の攻撃を喰らうとその強さに応じた時間、ドラゴンに変身する、から」

「……………は？」

目を点にしているリリーアに鋼は説明をする。

「いや、火の属性のタレントって異様に多いからさ。当たった場所によって発動するタレントが変わってきちゃって、左手だったら普通に吸収するんだけど、右手に当たったら威力を二倍にして跳ね返すし、同じ右手でも指先の方なら花火が出せるようになるし、足に当たったらロケット的な……………」

「分かった！ もういいわ！」

「いや、苦手なのはまだあるんだけど……………」

「いいから！ ちょっと黙って！」

渋々と、鋼は口を閉じた。

本当に、色々大変だったのだ。魔法を跳ね返した時は実験に協力してくれたエルフの女の子に当たりそうになって危なかったし、ドラゴンになった時はエルフの女の子は逃げてしまっただけで実験中止になりかけたし。

まあ幸い、思いつきり巨大化したにもかかわらず、戻った時に服がそのままだったので二次災害は起こらなかったのだが。

あれで全裸にでもなっていたら、協力してくれたエルフの子には二度と話をしてもらえなかったかもしれない。

そんな鋼の感慨などに構わず、とうかむしろ目障りだとも言いだしそうな口調で、リリーアが強引に話をまとめる。

「あなたには前衛をやってもらっわ。どんな魔法が来ても平気そうだし。」

ただ、風魔法だけは禁止ね！」

怒っているように見えても、その辺りリリーアは抜かりない。

そして、鋼はあっさりと同前衛に決定されてしまったようだった。

「ただ、前衛を務める人間には、どうしても防げなくちゃいけない学院長の得意魔法があるの。」

あの魔法だけは属性もよく分からないから、ちょっと試してみなくちゃいけないんだけど、そのためには学院図書館に行かなきゃ」

「学院図書館？」

「あんたそれも知らないの？」

ラーナ魔法学院の魔法の図書館って言えば、有名だと思うけど。

まあ、半分以上は悪名だけどね」

「ふうん」

そう言われると、鋼も少し興味が湧いてきた。

やはり、魔法の学校と言えば図書館だろう。おまけに秘密の図書館でもあれば、なお良し、である。

「ずっとここに缶詰だと、いつまで経っても仲間を増やせないし、それを考えてもそろそろ……」

そこまでリリーアが話した時、

「こおねえこちゃんたちいいいいいいいい！

おつべんきょうのおお、時間だよゴリアアアアアアア！！」

扉を蹴倒しながら、レメデスが部屋にやってきた。

なぜ毎回毎回ホラーかつバイオレンスな登場をしないと気が済まないのか理解できない。趣味なのだろうか。

「あれ？ 今朝は本当に子猫がいるねええ？」

入ってきたレメデスは、すぐにシロニヤをロックオン。

やばいシロニヤが狙い撃たれるぜ、と鋼は焦ったのだが、

「何だ神様か。じゃあ生徒じゃないね」

と言つて、それきり見向きもしなくなった辺り、彼女は体格以上に大物なのかもしれない。

しかしなんにせよ、レメデスの勢いの止まったこの機を逃す鋼ではなかった。

他の二人が迫力に吞まれて動けない中、鋼だけが機敏に行動する。

「レメデス先生！ お願いがあります！」

「あん？」

柄の悪い感じに眉を上げるレメデスの前に素早く飛び出していき、深々と頭を下げた。

「昨日レメデス先生に色々のご教授頂き、僕は自分の至らなさを知りました！」

自らの不明を恥じ、これからもご指導ご鞭撻を賜りたい所ですが、それでは先生のご負担になります！」

つきましては、この学院の知が集まる場所と名高い、学院図書館へ向かう許可を頂けないでしょうか！ 僕は、浅学な自分を少しでも成長させるため、可能性のあることは全部試してみたいんです！」
頭を下げたまま、口早にそう言い切った。

まあとりあえず口から出まかせだが、実際レメデスがいくら補習の必要があるとはいえ、三人ぼっちの生徒にかかりきりになっているワケにはいかないというのはたしかだろう。

だとすれば、自習する態度を見せれば図書館に行けるかもしれない、というのが鋼の目論見だった。

そして、それに対するレメデスの返答は、

「お前、何か変な物でも食ったか？」

の一言であった。

「あ、あのですね……」

ちょっとは生徒の向学心を信用しろよ、と言いたい鋼だが、その前にハツとなって飛び出してきて、要らない告げ口をするおバカが一名。

「あの、た、食べてました！　というか、飲んでました！　今まで見たことないような、ものっすごい変な物！」

「なにに？」

これには、レメデスだけでなく鋼まで目を剥いた。

泣きそうになりながら、おバカ……もといクリステイナは話す。

「あ、あの、何かごぼごぼ泡立ってどろっとした紫色の溶岩みたいな危ない薬を、ごくごくおいしそうに飲んでたんです！」

どうしよう、あれのせいで、ハガネさんが真面目な人に……」

「あれはスープだよ!？」

小腹が空いたので、ちよつとシメサバ味のスープを飲んでいただけなのに、ひどい言われようである。

ついでに真面目な人じゃないと思われていたことにもちよつとシヨックを受ける鋼だった。

まあ、その後もなんやかやとあったのだが、最終的にはレメデスも鋼の図書館行き自体は認めてくれた。

「向学心云々はともかく、自習するというのならわたしが止める理由はないねえ。」

ただ、学院図書館には『アレ』があるからね。

さすがに一人で行かせるってワケにも……」

そこでレメデスが言いよどむと、

「だったらわたしがついていきます!」

リリーアがすかさず立候補した。

「ふうむ。マリルリールか。」

お前を外に出すのも不安だが、まあ、しょうがないねえ」

レメデスも不承不承ながら認めると、絶え間ないリリーアの撫でまわしにグロツキーになっていたシロニヤも、抜かりなく鋼の肩に飛び乗ってくる。

「あ、ええとわたしも……」

出遅れたのは、レメデスが入って来てからこちら、一度だけ余計な口をはさんだ以外ぼけつとしていたクリスティナで、

「じゃ、あんたはここで補習の続きだね。」

まだまだ課題はたあつぷりあるからねええ!」

一人居残りが決まったのだった。

「これでようやく、計画を始められるわね」

「お手柔らかに頼むよ」

「うにゃー!!」

こうして三人は、新たな舞台に向け、意気揚々と歩いていく。

「ほうら、補習再開だよおおお！」

まずは昨日の復習からあああああああー!!」

「ひえええええええええん!!」

生贄の羊の悲鳴を、背中に感じながら……。

第四十九章 魔法図書館戦争

「ここが、学院図書館……」

久しぶりに外に出た鋼は魔法学院をそれとなくリリーアに案内され、すれ違う学院生や先生に見事な外面のよさを見せるリリーアに呆れながらも色々な物に興味を示し、ならせつかくだからと食堂に寄ってご飯まで食べてその後そこで出会ったリリーアの友人たちにうわーリリーアちゃんその男だれーこいびとーとかうわーその猫なにー超らぶりーなんですけどーきゃーわいーとか騒がれた拳句に実は彼こそは幻の転校生ですえーぎゃーまさかーははーっそれにこっちは実はかみさまですえーぎゃーまさかーへへーっみたいなやり取りを経てすっかり意気投合して騒ぎまくって食堂のおばちゃんに追い出されて散り散りになりまた二人と一匹にもどったところまで我に返ってそれじゃあ当初の目的通り図書館行くかということになった……くらいで特に変わったこともなく、鋼たちは図書館の前までやって来ていた。

学院の校舎の一番奥。そこに、四階まである天井をぶち抜いて、巨大な部屋が作られている。それが、学院図書館である。

大きな両開きの扉の上にはやはり大きなプレートが掲げられていて、そこには、

『この門をくぐるものは、一切の邪念を捨てよ』
と書かれている。

「なんか、すごく物騒な雰囲気だだよってる気がするんだけど、すっかり怖気づいた鋼がリリーアに振り向くが、

「単なる警告でしょ。大丈夫、たぶん死にはしないわよ」

リリーアは取り合わない。

さっさと扉を開けてしまっ。

「あたかもフォローのような発言でありながら、よく聞くと実は何にも否定してないよね」

「いいから、行くわよ」

さっさと中に入っていくリリアにくっついて、鋼もあわてて中に入った。

「うわあ……」

思わず鋼が声を上げてしまうほど、そこにはたくさんの本があった。

視界の全てを本が覆い尽くして、目をくらませてしまうほどだ。

日本で広い図書館と言うと鋼には国会図書館が思いつくが、ここはおそらくそれ以上だった。

入る前も、ずいぶんと広いスペースを取ってるなと思っていたが、それどころではない。高さが明らかに元の校舎よりも高く、広さもまた規格外だった。

そしてそのスペース全てを使って、これでもかとはかりに本が詰め込まれているのだ。

「詳しくは知らないけど、少しだけ時空を歪めてるらしくてね。外より中の方が大きいらしいわよ、ここ」

「ふえー」

鋼の口から間抜けな声が漏れる。

そんな青狸みたいな真似をリアルでやってしまう建物に自分が入ることになるとは思わなかったのだ。

しかし一時の驚きが過ぎ去ると、不自然な点にも気付いてくる。

「あのさ。魔法学院の生徒って本読まなかったりする？」

「なに言ってるの？ そんなワケないでしょ」

「だよなあ。もしかして、魔法以外の勉強って自分でしなかったりとかは……」

「ありえないわよ。わたしみたいなのはむしろ少数派。

授業以外でも常に勤勉に学んでいるのが魔法学院生の基本姿勢よ」
やはりそうだったのか、と鋼はリリーアの言葉に納得すると同時に、非常に納得しがたい事実気付いてしまった。

「じゃあさ、どうしてかな？」

「何が？」

「僕の目が正しければ、こんんなに広い図書館でイスも机もたくさんあるのに、誰も利用者がいないんだけど?!」

その言葉にリリーアはあーやっぱりそこに気付いちゃったか、というような表情を垣間見せ、

「とりあえず、それも含めて話したいからこっちに来て」
と鋼を奥に引っ張っていった。

引かれて歩いていく鋼に、

【コウ。気をつけるんじゃぞ】

シロニヤの声が届く。

「シロニヤ？」

不審に思っ肩を見ると、白猫は鋼と同じくらいきょとんとして鋼を見返してきた。

(猫の方、じゃない?)

鋼が首をかしげると、さらなる声が響く。

今度ははつきりと分かった。

【残念ながらそっちのワシは、今ちょっとその、会話できなくなっておる。

今話しているのは本体の方じゃ】

声は、鋼の耳ではなく、頭に直接響いていた。

(どういことだ?)

鋼もリリアに聞こえないようにオラクルに切り替える。

【この図書館、どうも魔法を阻害するような仕掛けがしてあるらしいのじゃ。

オラクルなどの神様のな力は普通に使えるんじゃが、その白猫を動かす仕掛けには戯れに半分くらい人間の魔法を取り入れとるワケでじゃな。

なんとというか、体自体は魔法ではなくてワシの分身じゃから消えないのじゃが、分身するに当たってワシの本性というか、根源的な部分を織り込んで作ったものであるからして、あたかも本当に動物的な欲求を優先する傾向もあってじゃな……】

(つまり?)

長つたらしい説明をぶつた切るように鋼が聞くと、

【ワシと感覚がつながるとる以外、ぶつちやけ普通の猫になつとるんじゃ】

シロニヤはあっさりと答えた。

【って、そうじゃなくてじゃな！

ワシの分身がそんなになつちやうような仕掛けがあるのじゃから、おぬしも気を付けると……。

おい、コウ!? 聞いておるのか?】

(そうか……。そう、なのか……)

もちろん聞いてはいなかった。

ただ鋼は、シロニヤの言葉に重々しくうなずくと、

「ほーら、喉^{ノド}じ^ーろ^じろ^ー！」

器用に引つ張られて歩いたまま、肩の上の白猫をいじり回し始めた。

【ば、バツカ、ちょ、やめるんじゃよ！

そんなとこ撫でられたら、気持ちよいではな……うにゃー！】

頭の中でシロニヤが騒ぐが、鋼は止まらない。

実は鋼も撫でたかったのだが、通常状態でやると釣られてシロニヤが変な声を出すので、どうしても犯罪チックな光景になってしまい、自粛していたのだ。

「みーけんにのっどくら、ひっげのよこー！」

【だからダメじゃって、あ、うにゃ、う、う、うなー！】

めずらしくノリノリで、鼻歌まで歌いながら白猫をいじり倒す鋼の手管にシロニヤは危うくユニバーズしそうになったが、

「……あんだ、何やってんの？」

スカートめくりの時よりマツシの時よりも冷ややかな目をしたりリーアによって、救われることになった。

一方で窮地に陥ったのは鋼だった。

声は漏れていないはずなのになぜ、と思ったのだが、

「なあに、どうしてバレた、みたいな顔してんのよ！

あんたの変態っぷりなんて、その子の表情見れば一目瞭然でしようが！」

猫に、表情だと…と鋼が肩口を見ると、件の白猫は前足で器用に顔を隠しながら顔を心持ちつつむかせ、

「…にゃん」

はじらいの仕種を見せていた。

普通の猫だなんてとんでもない。なかなか芸達者な猫である。

こうなればもう、鋼に取れる手段は一つしかない。

「あ、あははは……」

「笑うんじゃないわよ、変態」

「……ええと、今のは」

「しゃべるな変態」

「……」

「息するなHENTAI」

「いやいや、それはさすがに死んじゃうから！」

「分かったわ。じゃあ、皮膚呼吸までなら許す」

「よかつ……って、よくないだろ！」

「結局死ぬだろ、それ……！」

「だから？」

「……」

「……」

この結果。

一人の少年が、無言で息を止めながら腕を引かれて歩くという奇妙な光景を生み出すことになったのだが、自業自得である。

それから息を止めすぎて顔色がやばくなった辺りで、ようやく自主呼吸権を返還された鋼は、リリース監視の下、特に何事もなく目

的地に向かい、

「あんたに見せたいのは、これよ」

やってきたその広大な学院図書館の中心に、それはあった。

「これって……本？」

裏側からなのでよく分からないが、まるで吹奏楽の時に楽譜を置く譜面台を一回り大きく立派にしたような台座の上に、本が一冊、置かれているようだった。

「もう一度だけ聞くけど、あんた変なトラウマとか、現在進行形のものすごく悩んでることとか、そんなのないわよね？」

「またその話？ 僕には何もないよ、そういうのは」

二度もそういう話をするということは何か意味があるのだと考えられたが、鋼にはその理由が見当もつかない。

ただ、素直に思ったところを答えた。

「なら最悪の場合でも大丈夫ね。

ちょっとその本、見て来てくれる？」

少しだけでいいわ」

「……分かった」

流れるにこれから見ようとしている本が危ないものだというのは鋼にも想像できたが、ここは素直にうなずいた。

はつきり言えば、好奇心の方が勝ったのだ。

「あ、念のためにこの子はこっちで預かってくから」

そして、安全のためと称して鋼の肩から白猫を引き取っていく。

しかしその手つきを見る限り、目的がそれだけではないのは明白だった。

【刻の涙が見えるのじゃ……】

ドナドナされていくシロニヤが何か言っていたが、今はリリーアに逆らうとか鋼にはちょっと考えられないことだった。

素直にシロニヤを預け、台座に向かう。

【にゃー！そこはさわっちゃダメなのじゃよー！】

脳裏に反響するシロニヤの悲鳴をとりあえず無視して、

「根性見せなさいよ。期待、してるんだからね」

小声でつぶやかれたその激励の言葉にプレッシャーを感じながらも、台座の正面に回り、ひとつ、大きく息を吸って覚悟を決める。

意を決して顔を上げ、台座に鎮座している本を見て、

「な、そん、な……」

鋼は思わず絶望の声を上げた。

「ッ！ どうしたの!？」

あわてて駆け寄ってくるリリアに、鋼は虚ろな目を向け、告げた。

「これ、難しすぎてじえんじえん読めないんだけど……」

「当ったり前でしょうがバカア!!!!」

叫ぶなり、リリアは鋼の腕をつかんだまま、ぐったりとその場

に崩れ落ちた。

「はああ。もう、驚かせないでよね。」

何かあったのかと思って、本当に心配しちゃったじゃない」

「ご、ごめん…?」

鋼は一瞬リリーアの本気の心配に感謝しそうになってしまったが、考えてみればリリーアはそのくらい危険なことをさせた張本人でもあるワケで、あまり素直に喜べないところだった。

「それで、この本は？」

複雑な思いを振り切るように、鋼は尋ねる。

リリーアもすぐに立ち直って答えてくれた。

「これは、『せいじゃこんめつ聖邪魂滅の書』と呼ばれる最古の魔道書のひとつで、今はもう失われてしまったもともち力ある言語『ロゴス』によって書かれているとされているわ」

「聖邪、魂滅の書……」

おののくように、鋼はその名を繰り返す。

リリーアはその声を聞いて、さすがのハガネもこの本には畏怖を感じたのか、と考えたが、実は久しぶりに厨二の匂いのする名前にわくわくを抑え切れなかっただけだったりした。

「念のためもう一度聞くけど、あんたはこの本、ちゃんと見れたの？」

「いやだから！ さっきも言ったけど、難しすぎて……」

「ふうん。見たはいいけど、難しすぎてまったく分からなかった？」

「だから、そう言ってるだろ！ こんな……」

何度も確認するリリーアに、鋼が少し苛立つと、

「さっすがハガネね！ あんた、文句なしだわー！」

リリーアから、まったく予想外の賞賛の言葉を受けた。

「え？ あれ？ でも、全然分らないって……」
混乱する鋼に、リリーアは答えた。

「わたしは『見て来い』って言ったのよ。

一言も、『読んで来い』なんて言っていないでしょ？」

「そっいえばそうだったかも……」

リリーアの言動を思い返すと、たしかに『見る』ことにこだわっていた気がする。

「と、いうことは？」

「さっきも言ったでしょ。合格よ、それも文句なしのね」

合格したら面倒な役回りをやらされるだけだと分かってはいても、リリーアの言葉に、鋼は少しだけうれしくなる。

「そもそも現代に『ロゴス』で書かれた本を読める人間なんていないし、読めちゃったらずいいわよ」

「まずい、って？」

「あまりにも内容がすごいらしくてね。」

部分的にでも、この本を読んで無事だったのは一人だけ。

ほかの何人、何十人も魔術師が、この本を理解しようとして発狂したり廃人になったりしたらしいわ」

あっさりとそんなことを言っただけ。

「廃人……！」

この女なんてことさなんだよ、と鋼は思わず絶句してしまった。

(つまりアレか。暗記用の単語帳程度の大きさでも、魔道書の原典はそれだけ大きな力を持つとか、そういう理屈か?)

鋼が思わずそんなバカなことを考えると、

【ばかもの。原書の力とはそのくらい大きいものなのじゃ】

何かこういうことに関しては絶対に機を逃さないシロニヤまでも話に加わってきた。

とりあえず面倒なので黙殺する。

読めなくてよかった、というところは理解できた。

だが鋼には、それで、はいそうですか、と納得するわけにはいかなかった。

「でも、僕はこういうのをしてるんだけど……」

と、自分の『翻訳の首輪』を見せると、

「わ、すごい！ それ『翻訳の首輪』じゃない！

……魔物用みたいだけど」

やっぱり魔物用であることが発覚した。

「『翻訳の首輪』って言うくらいだから、これさえあれば『ロゴス』とかいうのも翻訳してくれるんじゃないかと思っただけど？」

鋼はおずおずと、それでもそれなりに自信を持って尋ねたのだが、

「まさか！」

リリーアには一笑に付された。

「わたしは専門じゃないから詳しくはないけどね。

この『翻訳の首輪』ってのは着けている間、この首輪の製作者の言語的知識を自分の物にできるアイテム、みたいなものなのよ。

ほとんど自動発動してるから、あんまり本人は意識しないみたいだけどね。

ええと、だから性能差はあるけど、少なくともこれを着けたって『ロゴス』だの『神聖文字』だの『元素魔法言語』だのを読めるよ

うになるはずなのよ」

「な、なるほど……」

そういえば『瞬間記憶復元』が使えないためうる覚えだが、ミスレイにこれを渡された時、大陸共通語だけしか翻訳できないと聞いた気がする。

「そもそもあんた、昨日の本読めなかったじゃない」

「…あ」

そうだった。

前回気付くべきだった。

完全な鋼の勘違いだった。

実はさつき、ほんの少しだけ、

「この首輪使えばどんな本でも解読余裕じゃね？」

みたいなことを思っていたことは、鋼だけの秘密である。

しかし、それで思いついてしまったことがひとつ。

脱線と分かっていてもリリーアに聞いてみる。

「じゃ、じゃあ、仮に『ロゴス』……はさすがにアレだとしても、

例えば『神聖文字』なんかを完全に読める人はいるよね。

その人が、『翻訳の首輪』を作ったとしたら、めちゃくちゃ売れる？」

鋼としては会心のアイデアかと思ったのだが、なぜかリリーアには呆れたようなため息をつかれた。

「あのね。『ロゴス』はもつての他としても、『神聖文字』にしたって完全に読めるとか、そんな人間いるはずないでしょ。

仮に『神聖文字』、つまり『神聖魔法言語』を完全に使いこなせ

たら、それは話す言葉全てを『神聖魔法』として使うことができる
ってことなのよ」

「え……」

予想外の返答に固まる鋼。

「それができるとしたら、それは光の女神様本人か、いるとは思えないけど古代から生き続けてる魔法使いの生き残りか、あるいは唯一現実的なところで……十数年前に生まれ たつていう、光の女神の生まれ変わりとかわられてる神子様ならもしかすると可能かもしれないけど」

「あ、いや、もういい。分かったよ」

想像していたよりもずっと、『神聖魔法言語』とやらは難しいらしい。

そうすると、会った時に『神聖魔法言語』で会話をしてみせたミスレイって意外とすごい人なのかもしれない、と鋼は思った。

そして同時に、とあるタレントの効果でそれと同じ、もしくはもっとすごいことができる自分は……と考えて、鋼はぶると体を震わせた。

厄介事は勘弁してほしい。これはますますリアには本当のことを言えなくなった。

なんて鋼の思考を、まるでトレーヌしてみたみたいに、

【ふふん。ようやくワシのすごさが分かったようじゃな！

ポイント2000のタレントは伊達じゃないのじゃ！】

どこからともなく、声が聞こえた。

いや、犯人は丸分かりなのだが。そして別にすごいのはシロニヤではないのだが。

【じゃ、じゃからその、べ、べつにワシに惚れ直したりしてもよいのじゃぞ？ ん？】

さすがのリリアも、これには表情を変えた。

「やああっぱりさぼってるねええ！ こおねこちゃんたちいいいいー！」

図書館中に響くような声で言うと、レメデスがこちらに駆け出してくる。

まだ遠すぎてレメデスの姿は豆粒くらいの大きさにしか見えないが、それがどんどん大きくなっている。ものすごいスピードだった。

「逃げるわよ！」

固まる鋼の手を引いて、リリアが動き出す。

「で、でも、転移魔法とか使われたら……」

鋼の懸念には、

「ここは魔法禁止空間だから、ある一つの魔法を除いて魔法系のスキルは全部使えないわ」

と冷静に返してくる。

しかしだとすると、レメデスのあの速度は魔法を使っていない素のスピードということになる。

「化け物じゃん……」

思わずこぼしてしまいが、

「その化け物につかまらないようにしっかり走る！」

と逆に喝を入れられた。

しかし、そんなことを言う割には、最初鋼の手を引いていたリリアの方が少しずつ遅れ始めている。

「というか、逃げ続けて何とかなるものなのか？」

「大丈夫！ あいつ、頭に血が昇って今の時間も把握してないわ！

とりあえず時間を稼げば……」

なんて言うが、リリーアの走る速度はそんなに速くない。せいぜい高校の陸上部レベルだ。

いや、それだって十分以上に速いのだが、後ろから迫るレメデスは完全に人間離れた速度で追いかけてくるのだ。

このままでは確実につかまってしまう。

「こういうマンガのキャラみたいなのは、できるだけやりたくないけど」

鋼は生存のために葛藤を振り切って、

「え？ あ、ちよつと！」

両腕でリリーアを抱え上げた。

もちろん俗に言うお姫様だっこスタイルである。

「わ！ ちよつと！ ダメだつて！」

リリーアがもがく。

やっぱりいきなり男に抱えあげられたらリリーアだつて驚くのか、と鋼は思ったが、

「アイドルに男は厳禁なんだつてば！」

噂が立つだけでもずいぶんマイナスなんだからあ！」

怒っているポイントはさすがリリーアだった。

だがそのおかげでずいぶんスピードが上がる。

抱えたリリーアの体もまったく苦にならない。

チート成長した筋力と敏捷は伊達ではないのだ。

「これなら？」

と思つて後ろを振り返ると、

「にいがあさあなあいよおおおおおおお！！」

思ったよりもずっと近くにレメデスがいた。

このままでは追い付かれるのは時間の問題だ。

「どうする？ このままじゃ……」

「もうすぐ時間が来るわ。」

それに備えて、今から『勇気の詩』を歌う！

大丈夫だと思っけど、よく聞いて」

鋼の質問をさえぎって、リリーアが一方的に告げる。

「時間？ 勇気の詩？ なにそれ？」

「『勇気の詩』はバードのスキルよ！

魔法系じゃないから、ここでも使えるの！

いいから聞きなさい！

タダでわたしが歌うなんて、滅多にないんだからね！」

「何でもいいから早くしてくれ！」

鋼は悲鳴を上げる。

もうレメデスがすぐ近くまで迫っていた。

「~~~~~」

リリーアが、歌う。

鋼は初めてリリーアの歌声を聞いたが、それはたしかに、まぎれもない歌手の歌声だった。

とても切羽詰まった状況で歌われたとは思えない、悠然としたその歌は、とても綺麗で鮮やかで、まるで鋼の体に染みわたっていくようだった。

鋼の従姉だった監理も歌がうまかった記憶があるが、リリーアはそれ以上かもしれないと思わせるほどだ。

歌詞も感動的で、がんばっていつも一人で歩いていく女の子が主

役の詩みたいだったが、なんとなく懐かしい気分になった。

だが、そんな感慨にふけっている暇もなかった。

鋼にしがみついていたリリアの手が、何かを知らせるように急に鋼を強く抱きしめ、

【コウ！ 何か、何か来るのじゃ！】

頭の中に、めずらしく切迫したシロニヤの声が響き、次の瞬間、

「…………え？」

図書館を、たぶん何かが駆け抜けた。

胸の中のリリアが歌を止めて強くうめき、肩にしがみついていた白猫がびくと飛び起き、手に握っていた枝すらわずかにぶると震えた。

鋼たちを追っていたレメデスにいたっては、

「う、うあああああ！ あんたは！ あんたたちはあ！！」

頭を押さえて地面を転げまわっている。

しかし、唯一、

「ええと、今、何かあった？」

鋼だけは、何の影響も受けてはいなかった。

それに答えてくれたのは、立ち直ったリリーアだった。

「これが、あんたに見せたかった『敵』の力よ」

「『敵』の力？」

その質問に答える前に、リリーアはちよつと顔を赤くして、

「そ、それより、もういいから下ろして。」

やっぱりちよつと、はずかしい」

「あ、ああ。ごめん」

いそいそと鋼から飛び降りると、鋼から少し距離を取って、服を直す。

「それで、さっきのことだけど……」

鋼の質問に、リリーアはいまだに何かに苦しんで悶えるレメデスを一瞥し、

「これが、わたしたちが破らなくちゃいけない力。

この図書館で唯一機能する魔法にして、『聖邪魂滅の書』から読み取られた唯一の魔法。

学院長の最強魔法『リグレット・フィールド悔恨の波動』よ」

そう、はつきりと答えたのだった。

「ちょっと待って、リリーア」

リリーアの台詞をいったん棚上げして、倒れたレメデスも気にせず、鋼は真剣な表情でリリーアに向き直る。

そして、

「その前に、ひとつだけ、どうしても言っておかなくちゃいけないことがあるんだ」

「……なによ？」

「これは、逃げてる時に気付いたんだけどさ」

鋼はそう前置きしてから、大きく息を吸って、自らの不満を声高にぶちまけることにした。

つまり、

「あまりの大きさにごまかされそうになったけど、ここ実は図書館じゃなくて図書室だよね!？」

「どつでもいいわよそんなこと!?!」

どつしたってツッコミをやめられない鋼の性分なのであった。

第五十章 失われた魔法の使い手

「『悔恨の波動』っていうのは、地味だけど相手を傷付けずに無力化するには最適な魔法よ」

リリアは、一応倒れたレメデスを介抱しながら、そう解説する。「僕には効かなかったみたいだけど、一体どんな効果なんだ？」

鋼が尋ねると、少しだけ考えてから答える。

「簡単に言えば、相手の持つトラウマや罪悪感を増幅させる魔法、かな。」

だから、壮絶な過去を送ってきた人や、心に何かやましいことがある人には効果が強いのだ。

何でも、相手をすくませる竜の咆哮と同じ性質のものらしいわ。

だから、戦意高揚の効果がある『勇氣の詩』で多少軽減できるのよ」それに、わたしには後悔するような過去なんてないしね、と胸を張るリリア。

自信過剰もここまでくれば賞賛に値するかもしれない。

「それより、やっぱりあんたには効かなかったみたいだけど、やっぱりタレントの効果？」

「ああ、それは……」

そうだろうと答えたかったが、今のところ思い当たるタレントがない。

こんな時のための手帳かと思って久しぶりに手帳を開き、最新の発動を探して、

『超高級耳栓』

一瞬で閉じた。

竜の咆哮と同じとは聞いたけど、いくらなんでも耳栓はちょっと違うだろ、というのが鋼の感想だ。

「どうしたの？」

とリリーアが聞いてくるが、鋼はあくまで何でもないと押し通した。

「それより、レメデス先生はどうするんだ？」

目覚めてまた襲ってきてても、対抗手段はないだろ」

「ん。もちろん誠心誠意、『お話』させてもらうつもりよ」

そう言つと、リリーアは小さな声で歌を口ずさむ。

すると、悪夢にうなされていた様子のレメデスに変化があった。

「こ、こは……。んん？ わたし、は…？」

目を覚まして呆然とするレメデスに、

「レメデス先生、少し、お時間を頂けますか？」

リリーアはそう言つて、まるで淑女のように小さく膝を折つたのだつた。

その後、レメデスとリリーアの話し合いは、意外にも本当に丁寧かつ厳かに、そして穏当に進んだ。

リリーアが最高級の猫をかぶっていたこともそうだが、弱つていたせいかレメデスから常時バーサークみたいな雰囲気は抜け落ち、ある程度普通の教師みtainな態度を取っていたのが大きな理由だろう。また、レメデスがしきりに時計を気にして、話を早くまとめようとしたこともその一助になって、話し合いはリリーアたちにとって有利な方にまとまった。

その結果、リリーアが勝ち取つたものは二つ。

一つは、明日からあの監禁部屋を出て、寮での生活を再開すること。
と。

もう一つは、とりあえずレメデスによる特別補習は終わりにして、通常の授業に復帰すること。

そのための条件として、絶対に学院を脱走しないこと、別途レメデスの出す課題を必ず完遂することが義務づけられたが、なかなかの好条件だと言えよう。

その後、話し合いの終わりくらいにはそれなりに回復していたレメデスは、一足先に図書館を出て言ったが、鋼たちはもう一度、『聖邪の魂滅』の前に戻っていた。

そこで、リリアから今回の件の種明かしがあった。

「昔は本の盗難とか借りたまま返さないとか、色々トラブルが多くて苦情が出てたらしいわ。」

それで学院長は、この本を図書館の盗難避けに使うことを決めたそうよ」

「盗難避け？」

「そう。この本を見て、何か気付かない？」

リリアにうながされ、鋼はもう一度本を眺めた。

「あれ？もしかして、ページが変わってる？」

「あ、やっぱり本当に見えてたんだ」

「だからそう言ってただろ」

信じていなかったのか、と鋼は少し呆れた。

「そういうワケじゃないけど……。」

実はこの本にも常時『悔恨の波動』がかけられてるのよ。

だから、普通なら直視したら気分が悪くなるか、ひどい時は増幅されたトラウマや罪悪感に押しつぶされて幻覚や悪夢を見ることになる」

「あ、もしかして……」

リリーアの言った症状が、レメデスの苦しみ方と重なった。

「そういうこと。」

この本は学院長の魔法によって、三十分に一度めくられるの。

そして、この本に宿った魔力を利用して、ページがめくられるごとに『悔恨の波動』が図書館全域に広がるようになってる。

しかも、図書館の入り口にかけられている特別な魔法によって、この本は貸出処理をしないと絶対に外に出せないし、その申請には絶対に三十分かかる」

「じゃあ泥棒なんかがいいたら……」

「盗みを働こうとした罪悪感に押しつぶされて、動けなくなるってこと」

よく考えられているシステム、なんだろうか。

綱は思わず納得しかけてしまったのだが、

「ただまあ、致命的な欠陥があってね」

そう言って、リリーアは図書館を見回した。

「まさか……」

綱があることに思い至ると、リリーアはそれを肯定するようにつなずいた。

「そ。この図書館、そのせいで利用者が激減しちゃったらしいわ」
本末転倒すぎた。

「あと、この本、たしか四百ページ弱、見開きで言うと二百ページくらいあるんだけど、その最後のページまで行くと一気に最初のペ

ージに戻るのよ。

そうするといつもとは比べ物にならないくらいの『悔恨の波動』が図書館中に広がってね……」

「どう、なったの？」

「過去に生徒が一人、廃人になりかけて、学院長の責任問題になっただわね。」

それからページが巻き戻る前にはアラームが鳴るから逃げ遅れる人はいなくなったみたい。あ、あと、図書館の前にあの警告が付け足されたのもそのせいよ」

「それで廃止にされないってのが逆にすごいね」

リリアはそれにはうなずいたが、

「でも、わたしたちにとっては好都合だわ」

目をらんらんと光らせて、鋼を見た。

「……何が？」

嫌な予感をびんびんに感じながら鋼が聞くと、

「学院長ね。基本的に神出鬼没で学院長室以外のどこに出て来るか分からないんだけど、自分のこの仕掛けが相当気に入っているらしくて、唯一、図書館のこの場所にだけは足しげく通っているそうよ。普通だったら、この本の前で待機するなんて、自殺行為なんだけど……」

「ええと、もしかして…？」

「ええ、そうよ！」

あなたには、この図書館に常駐して『敵』の偵察をする任務を申し渡すわ！」

やはり、と言うべきか、リリアはノリノリで鋼に厄介事を押し付けてきた。

ともあれ、さすがのリリーアも今日からずっとここにいなさい、とかそういう無体なことを言うほどワガママでもなく、鋼たちは一度あの監禁部屋に戻るようになった。

ちなみにもう部屋の鍵は受け取っているので、今日からでも自由に外出はできるそうだ。

「それにしても、レメデス先生も結構あっさり僕らを解放したよね。もうちょっとあの部屋で生活するハメになるかと思ってたけど」
道中、鋼がそう漏らすと、リリーアはあっさり答えた。

「まあアレは引き締めというか、罰ゲームというか、お仕置きというか、生徒を反省させて真面目にさせるためのものだからね。」

あとは底辺の場合は学力の底上げとかには効果あるだろうけど、わたしたちはそれぞれ真面目にやればある意味優秀だから、向こうも引き際を考えてたんじゃない？」

「そ、そうなんだ……」

この世界は魔法のおかげで技術レベルだけは現代日本に比肩しているけれど、教育制度とかは結構遅れてそうだなあと鋼は感じた。

しかし逆に言えば、そういう制度がいらなほど真面目で善良な人が多いのかもしれない。

その後、

「もしかしてわたしと同じ部屋で暮らす生活が名残り惜しいなんて思ってる？」

あ、アイドルのわたしと一緒に暮らしてたって自慢したい気持ち分かるけど、他の奴らに漏らさないようにね」

「思ってるし誰かに話したりしないよ……」

なんて疲れるやり取りを経て、監禁部屋へ。

「それじゃわたし、汗かいたからお風呂入って来るわ。
ついでにシロニヤも洗ってあげるから」

「な、にゃー！」

なんて言ってリリーアがシロニヤの首根っこをつかんでお風呂へ向かってしまったために、鋼は補習でぐったりしたクリステイナと二人きりになってしまった。

「ひどいです。わたしが先生と二人きりで勉強している間、お二人は図書館で遊んでたって……」

クリステイナの恨めし気な視線が鋼に突き刺さる。

「い、いや、今後の作戦を話し合ってたんだよ。」

あー、それより、ちよつと聞きたいことがあるんだけど……」

早急に話題の変更の必要性を感じた鋼は、図書館でリリーアにした、『翻訳の首輪』に関する話をもう一度クリステイナに話してみた。

「それ、おもしろいですね！」

ハガネさん、『神聖魔法言語』を話せるんですか!？」

「え？ あ、いや……」

そういう意味で言ったワケでもないのだが、話せてしまうのは事実。

キラキラした視線の圧力に負けて、

「ああ、まあ……」

鋼は小さくうなずいた。

「だったら、昔試していた魔法をやってみましょうか」

クリステイナは意気込んで言った。

「昔試してた魔法？」

「はい！ 実は『翻訳』系アイテムの効果を魔法で再現しようとし

て、相手の使っている言語を習得する試作魔法みたいなを作り出した気がするんです」

「すごいじゃないか！」

それはもう十分新作魔法と言えるんじゃないだろうか。

「いえいえ。それが大陸共通語以外を話す人が周りにいないので、一度も試す機会がなくて……」

「あー」

それで、作り出した『気がする』、なのか、と鋼は納得した。

「えへへ。創作は爆発ですからね。色々やってるんです」

どこか照れたように話すクリステイナ。

ちなみにそんな風に二人が話している間も時折、

【だ、ダメなのじゃ！ 猫形態にそんなことされたら溺れちゃうのじゃ！
やめ、にゃ、がぼがぼ……】

みたいな断末魔が頭に響いたので、鋼は無言で合掌しておいた。

そんな鋼の不審な動作にもまったく頓着せず、

「た、試してみて、いいですか？」

そう話して鋼ににじり寄ってくるクリステイナは、完全にマッドサイエンティストの顔になっていて怖かったが、鋼が振った話題のために無碍に断るのも気が引ける。

「ま、まあ、ちょっとなら……」

しかたなくうなづく鋼にクリステイナが人を不安にさせるような満面の笑みを見せる。

「じゃ、行きますー！」

そう言つと、クリステイナは一転、真剣な顔で集中を始め、

「あの、ちょっと変な感じがすると思いますけど、動かないでくだ

さいね」

「え、いや、ちょっとそういうの聞いてないけど!」
あわてる鋼の頭に、ゆっくりとその手を近付けていく。

そして、

「うあっ!?!」

脳の中をいじくられるような、何とも言えない不快感の後、
「やった! 成功しましたっ!」
クリステイナが歓声を上げた。

「本当に?」

いぶかしげな鋼の視線にもめげずに、
「こうして話せているのがその証拠ですよ!」
へへへ。見ててくださいいね。

光よ!」

クリステイナは高らかに叫び、……何も起こらなかった。

首をひねったのは、当然クリステイナ。

「あれ!。ハガネさん。わたし、ちゃんとしゃべれてますよね?」
と言ってくるが、鋼には何とも言えない。

クリステイナのしゃべりはいつも通り自然というか、いつもより自然というか、何の違和感もない。

もしかすると鋼の大陸共通語の知識をさらに吸収したとかならうか、と鋼は考えるが、答えは出なかった。

「うーん。手応えあったのになあ。

やっぱり、失敗だったんですかねえ……」

落ち込むクリステイナ。

そこに、

「あんたたち、一体何話しているの?」

いぶかしげな顔をしたりリリーアが風呂場から上がってきた。手には、ぐったりしたシロニヤを抱えている。

「今ちよつと新作魔法が爆発で、成功したのに魔法が失敗して……」
「何を言ってるのか、ひとつことも分からないわよ！」

クリステイナの必死の解説をばつさり切つて、リリーアが部屋の中に入って来ると、

「そんなことより、今日は祝杯よ！」

このメンバーで過ごすのも今日が最後だから、お別れ会をかねてね」

ララナに続く、宴会好きの性質をそこで露わにした。

用意周到にも、リリーアは食堂で会った友達に色々頼んでいたらしい。

この展開を読んでいたとも思えないが、ともあれ続々やってくる食料や飲み物を受け取り、すぐに夕食兼酒盛りが始まった。

宴会が始まってからしばらくは何だか違和感があったのだが、それもすぐになくなって、三人と一匹は大いに盛り上がった。

まあ結局、鋼はお酒は遠慮して、ジューズの類ばかりを飲んでいたので、他の二人と一匹はガンガンとお酒を飲みまくった。

リリーアは意外にも酒に弱く、一番先に酔いつぶれてしまった。なぜかシロニヤも猫の姿のままお酒を飲み、今は完全に猫化して鋼の手にじゃれついたり甘噛みしたりして楽しんでいる。

必然的に、まったく飲まなかった鋼と、これまた意外にもお酒に強かったクリステイナが後片付けをすることになる。

後片付けも大体終わったところで、

「僕はもう寝るけど、クリステイナは？」

と聞くと、クリステイナは申し訳なさそうに答えた。

「あ、あの。さっきの実験で、失敗だったんですけど、何だか意欲がわいちゃって……」。

もうちょっと、今やってる魔法の方、色々試してから寝ます」

今やっていると、前に話したアイテムボックスを魔法で再現するという奴だろう、と鋼は当たりをつける。

「ああ、うん。無理しないようにね」

と鋼が最後にそう声をかけて眠ろうとすると、

「ありがとうございます！」

でも、わたしもリリーアさんや、ハガネさんのお役に立ちたいですから」

なんて健気なことを言ってきた。

「クリステイナ！」

「は、はい!？」

もうここで会話を切り上げようと思っていたにもかかわらず、鋼は思わず、声をかけてしまっていた。

そして、普段あまり言わないことを口にする。

「あの、さ。今日で二人とは別の場所に行くけど、でも……」

「はい! わたしたちは離れても同志ですし、その、も、もうお友達、ですよね?」

上目づかいでおずおずと尋ねてくるクリステイナに、
「もちろん!」

鋼は今日最高の笑顔で答えたのだった。

で、その翌日。

いつの間にか、クリステイナは部屋から姿を消していた。

そもそも昨夜は鍵を閉めて寝たし、その鍵は鋼のポケットにある。

「一体、何があつたんだ？」

途方に暮れる鋼に対して、そこに落ちていたクリステイナの冒険者カードを取り上げて、リリーアは言った。

「んー。ま、カードがここにあるってことは、生きてるってことだし、これで大体見当はついたかも」

そう言っつてリリーアが見せた冒険者カードの二つ名欄、そこには、

『偶然だけど時空魔術師』

と書かれていた。

啞然とする鋼に、

「ま、大丈夫よ。所詮クリステイナだから」

と軽く言っつてのけるリリーアの言葉を聞いて、鋼はなんとなく、

(クリステイナとは何か忘れた頃にぼろっと再会することになりそうだなあ……)

とぼんやりと考えていた。

第五十一章 新たな仲間との関係

「キンググリ○ゾン！」

「のわっ！」

鋼は自らの肩で急に大声を出されて、大きくのけぞった。

「な、何だよシロニヤ。急にどうした？」

「にゃ？ あ、うむ。あれからだいぶ過ぎたなと思ったのじゃ……」

「あれからって僕たちがこの学校に入ってからか？」

まあ、もう一ヶ月近くになるからな、たしかになじんできたとは思う。

しかし、それと急な絶叫に何の関係が？」

「細けえこたあいいのじゃよ！」

などと二人が話す通り、鋼たちはずいぶんとこの学校にも慣れた。

最初はおっかなびっくりだった授業にも、最近ではあまりおどおどせずに参加できるようになった。

たかが学校の授業にビビるなんて何をバカな、と思う人もいるかもしれない。

しかしさすが魔法エリートが集まる魔法学院。

現代人の鋼の感覚からすれば、その授業内容は過酷の一言に尽きる。

今日の授業、しかも鋼が見ている中だけでも、その厳しさについてこれず、魔術戦に対する忌避感を覚える者、自らが修めんとする言語の秘める力に戦慄する者、魔法の暴走を恐怖する者などが、次々と現れた。

もし、そこにとある教師のフォローがなければ、実際に魔術師を志すことをあきらめてしまった者もいるかもしれない。

ラーナ魔法学院の授業は、それほどまでに厳しいものであった。

例えば、一時間目に行われた魔法実技の授業では、二人一組での変則的な魔法組手が行われた。

「これから貴方方には攻撃側、防御側に分かれ、一対一の魔法戦を行ってもらいます。」

ルールは簡単です。制限時間の五分間で、攻撃側は自らの魔法で防御側を倒してください。ただし、条件として攻撃側の移動、魔法以外の攻撃、は禁止とします。

防御側は魔法、非魔法等の手段は問いません。とにかく攻撃側の仕掛ける魔法から身を守り、制限時間が過ぎるまで生き残ってください。ただし、攻撃側に対しての攻撃行為は禁止、例外として相手の魔法を跳ね返す行為のみを許可します」

監督として前に出たその女教師の言葉を聞いて、生徒の顔色が変わる。

制限時間の五分の間、攻撃側に回った人間は相手を一方的に魔法で攻撃することができ、防御側はひたすらそれから逃げ回るようになるのだ。

自らの魔法に自信のある者はにやりと唇を歪め、そうではない者は顔を青くした。

それでもその程度の覚悟ができていない者はいない。

すぐに組み合わせが決まり、二人ずつ舞台上が上がっていく。

ちなみにその舞台は闘技場ほどではないが安全対策が取られており、舞台上でHPがゼロになった者はHP1の状態で舞台の外に投げ出されるようになっていく。

それでも痛みや死の恐怖が軽減されるワケではない。
舞台上に上がる者、特に今回防御側に当たった者のほとんどが、
顔から血の気をなくしていた。

「では、始め！」

女教師の合図で、あちこちで魔法の詠唱が始まり、一方的な魔法
戦が始まった。

「くそ！ くそ！ くそ！」

オレはやれる！ オレはやれるんだ！」

そしてとある舞台の上、蒼白になり、だらだらと脂汗を流しながら、
必死で魔法の詠唱をする生徒がいた。

程度の差はあれ、どこの舞台でも同様の表情をしている者はいる。
いくら防御魔法を使えるからと言って、相手の魔法を完全に防げる
保証があるワケでもなく、魔法がぶつかれば当然痛い。

しかし、顔を青くするその男子生徒が特別だったのは、彼が『攻
撃側』の生徒だったことだ。

彼が別に魔法が全く使えない人間であるとか、自分の技量に自信
がないというワケでは決してない。

「くそおおおお！ サンダーボルトオ！」

現に、今彼が放った雷魔法も同学年の生徒の基準で言えばかなりの
威力であり、さらに彼は火の魔法と地の魔法も使いこなす、優秀
な魔法学生なのだった。

あるいは彼の実力なら、制限時間の半分も過ぎない内に防御側の
魔法をかいくぐり、相手を戦闘不能にすることもできたかもしれな
い。

対戦相手が、能天気な顔をしたこの黒髪の少年でさえなかったら
……。

彼はにらみつけるように自分と向かい合う対戦相手を見る、というのは正確ではない。いや、対戦相手というのは間違っているが、そもそも相手と向かい合っているわけではない。

彼の対戦相手は、自分に向けて高威力の魔法が飛来する中、横を向いて舞台の外にいる猫と話をしているのだ。

「おお！　すごいじゃぞ、コウ！

さっきの雷魔法で、ワシのPOPが電池一本から一気に三本まで充電されたのじゃ！」

「いや、電池切れて泣くのはシロニヤなんだから、こまめに充電しとけよ」

「じゃってあの電源ケーブル、ワシに反抗的なんじゃぞ。

この前寝ながらプレイしとったら、首に絡まって死ぬかと思ったのじゃぞ！」

「最低の死因だなー、それ」

「そもそも、ワシのPOPはすぐくてエ〇アより長く動くのじゃから大丈夫なのじゃ！」

「比較対象おかしいだろ……」

魔法の嵐の中、のんきに雑談をする彼らを見て、男子生徒は泣きそうになった。

それでも一縷の望みをかけて、彼は魔法を紡ぐ。

「オレはやれる！　オレはやれるんだ！

ストーンバレット・フルスピード！！」

現れたのは石の飛礫^{ついで}。それも、彼のオリジナルの術式で、速度を限界まで速め、威力を増大させた物だ。

練習での成功率は今一つだったが、今回は会心の出来。

これなら、と思って撃った石の弾丸は、狙い過たず対戦相手の少

年の側頭部に命中する。

「どう、だ……?」

相手は人並み外れた魔法抵抗力を持っている。

この一撃だけで倒せるなんて甘いことは考えていない。

だがせめて、自分がここにいることを示したかった。自分がやっているのは独り相撲などではなく、相手に何らかの痛痒を与えていると、せめてそう感じたかった。

彼のまんじりもしない視線が見つめる中、対戦が開始されてから初めて、その少年が彼の方を向いた。

そして、

「あのーすみませーん!

こいつが今度は30Sも充電したいそうなんで、もう一回、雷魔法お願いできますかあ?」

その言葉に、精一杯地面に立っていた彼の足が、とうとう折れた。

「オレは、べつにお前らのために魔法撃ってるんじゃないよ…

…」

そして膝と一緒に完全に心も折れていた。

「どうかしましたか?」

その時、異変を察知して舞台に近づいてきた監督の女教師に彼は思わず弱音を吐く。

「先生、もう無理です。

あいつ、オレがどんな魔法を撃ってもけろっとしてるんです。

それどころか、充電がどうとか言っていて喜ぶんです。

しかも何を血迷ったのか、もっと撃ってくれとかリクエストしてくるんです。

オレ、あいつと戦うの、もう嫌です。

いや、もう魔法戦闘なんて、二度とやりたくない！」

しかしその女教師は、彼の言葉を一言も口をはさまずに全て聞く
と、

「だから、どうしたと言っているのですか？」

そんな言葉をかけた。

「え？ でも、だって……」

「考え方を変えてみるのです。」

彼はどんなに魔法を撃つても全く文句を言わない、いわば壊れな
い天然のサンドバッグです。

彼相手になら、どんなに強力な魔法もえぐい魔法も打ち放題です。
生身の的に魔法を撃つ機会なんて、そうそうある物ではありません
よ。これを幸運と思って、自らの限界にチャレンジしなさい」

そう教師にさとされ、その男子生徒はハツとした。

「そうか。オレは、目先のことにはかり気を取られて、この大きな
チャンスを見逃すところだったのか……」

次に顔を上げた彼の目からは、もう迷いの色が消えていた。

「ありがとうございます、先生！」

オレ、全力でやってみます！」

そうして、彼は自らの対戦相手、いや、的に目を定める。

手加減なんていらぬ。

普段魔法を使う時、無意識の内にかけている枷を取り外す。
体内に横溢する魔力を、一つの形に練り上げる。

「極熱！ フレアボール！！」

さっき自分の限界だと思っていた石の飛礫など比較にならない、
驚異的な威力の魔法が完成した。

そしてそれを、

「これが、限界を超えたオレの力だあああああああああ！
！」

渾身の叫びと共に、投擲する。

そうして生まれた炎熱の火球は、

「あ、すみません、ちょっと待つてください。

シロニヤがまだノートパソコン出してないので」

と言つて、対戦相手の少年が突き出した右手に当たり、

「え？」

威力を倍加されて跳ね返り、少年のところに戻ってきた。

「あ、ノートパソコン、用意できたみたいです。

雷魔法を……あれ？」

きよとんとする対戦相手の少年の向かい、HP1になって舞台の外に転がる本日初めての攻撃側の死傷者を見て女教師は、

「良く頑張りましたね」

とうなずいたという。

次の時間は、魔法言語の授業だった。

しかしそこでも、魔法学院の苛酷さは顔を出す。

今はただの音読の時間だというのに、教室は異様な雰囲気にかま
れていた。

例えるなら桃髪絶壁の少女が錬金をする時みたいな異様な緊張感に包まれていた。

教卓の上の教師が、次に音読をする人間を指名する。

「あー。」

ではこの続きを次の……………ユークくん、読みなさい」

ちなみに途中の三点リーダーは担当教師の葛藤の時間である。

教室中が戦々恐々とする中、指名された生徒は立ち上がり、教科書を読み始める。

「そこで『炎の巨人』と『氷の巨人』を退けるため、彼は『地響き』の二つ名を持つ……………」

彼がそこまで読んだ時だった。

その朗読に合わせて、炎が踊り、窓が凍り付き、地面が揺れた。

「ちょ、ちょっとユークくん！

もうちょつと魔法言語の発音を不正確にしてください！

さつきから魔法が発動してしまっています！」

「いえ、でも英語でも何でも、発音は正確にしろと昔……………」

ともめだす教師と、指名を受けた男子生徒。

問題が起こると分かっているのに真面目なため彼を飛ばせなかった教師と、適当に読めばいいのに変に真面目なため手を抜けない男子生徒の奇妙なぶつかり合いだった。

そしてそれを見て、教科書をそつと閉じた一人の女子生徒がいた。それは、普段ならそんな行動を取るはずのない、非常に真面目で勤勉な、信心深い生徒だった。

「どうしたのですか？」

そんな彼女に、補助として教室の後ろにっていた女教師が声をかけた。

「わたし、怖くなってしまったんです。

わたしは今まで、何も考えず、この言葉を学んできました。

けれど、最近の授業を見ていて、思ってしまったんです。

ただ口にするだけで、火を呼び。物を凍らせ、大地を揺るがせる。

これは、悪魔の言語なのではないでしょうか？」

それは信心深い彼女だからこそその悩み、そして葛藤だった。

その女教師は、メガネの奥の醒めた、しかし冷たいばかりではないまなざしを彼女に向け、じつくりとさとす。

「考え方を変えてみるのです。

確かに魔法言語には大きな力があります。

今の炎も氷も地震も、将来貴方が起こすかもしれない災厄と言えます」

「だったら！」

興奮する女生徒の言葉をさえぎって続ける。

「貴方は彼が何を口にした時に何が起き、何を口にした時に何も起きなかったか、覚えていますか？」

そうでなければ、彼の朗読を良く聞きなさい。

そして、何が起こったか、あるいは起こらなかったかを見極めなさい。

彼が口にして何かが起こったのなら、それは貴女が口にしても何かが起こる可能性がある言葉です。

そして、彼が口にして何も起こらなかったなら、それは貴女が口にしても必ず何も起こらない言葉なのです」

その言葉を聞いて、その生徒はハツとした。

「危険な言葉だからこそ、その危険性を知らなくてはいけないんですね。

そして、それはきつと、神の御心にも適う」

女教師は何も語らなかつた。

だが、その怜悯なまなざしは、女生徒の考えを認めてくれたように思えた。

「わたし、頑張ります！」

頑張つて、魔法言語を覚えます！」

とその女生徒が声を張り上げた、その瞬間、

「ええと、『風起こしの儀』によって……」

結局続きを読み始めた生徒の音読によって風が巻き起こり、女生徒たちがみなスカートを守る中、彼女だけは教科書を死守したという。

その結果、彼女には『いちごの守護者』という二つ名がつくことになるのだが、その詳しい理由については本人と、その隣で鼻血を出して倒れた初心な男子生徒の名誉のため、語るのは控えることとする。

危険かつ過酷な魔法の授業は続く。

次は、魔法創作の授業だつた。

特別に魔法で保護された魔法実験室で各々が好きな魔法を試す中、一人だけ、何もしていない女子生徒がいた。

そこに、メガネを光らせてとある女教師が近づいていく。

「どうしたのですか？」

「そ、その、大丈夫なんでしょうか？」

わ、わたしが試そうとしているのは、威力も高くて制御が難しい魔法です……。」

もし、魔力が暴走してしまつたら……。」

その言葉に、メガネの女教師は優しげな笑顔を浮かべて彼女を安心させたりすることはない。

しかし、冷静な言葉で彼女をさとす。

「最初に説明したように、この特別な魔法がかかった実験室では、魔法の威力は実に千分の一に抑えられます。」

ここでは焚き火程度の火を起こす事すら困難で……。」
と言っている女教師の後ろで、

ちゅどーん！

という感じの爆発が起こった。

当然たき火などというレベルの火力ではない。

幸い爆心地にいた爆発を起こした張本人以外はケガはしなかったが、近くにいた何人かが爆風にあおられて倒れ、それ以上に突然の事態に恐慌状態になっていた。

続いて、爆発の中心に二人の、いや、一人と一匹の姿が見えるようになる。

そこからは、

「まあた爆発したではないか！

おぬし、火魔法の調節を間違つたのじゃな!？」

「そんなはずないって！

だって今日は水の曜日だろ！

『日替わり強化』のタレント効果で火の魔法は弱くなるはずじゃないか！」

「おぬし、もしやここが密閉された空間じゃということをお忘れおるのじゃあるまいな！」

『疑似粉塵爆発』の強化倍率は大きいのじゃぞ?!」

「ちゃんと計算に入れたよ！」

火属性系の七種類の基本タレントの効果は計算したし、それどころかちゃんと条件タレントの『上級初級魔法使い』の二倍効果も『無詠唱の達人』の五割増し効果も入れたし、『夕日の魔術師』の三割増しまで計算したんだぞ!？」

「むむ。あ、いや、待つのがじゃ! ちょっと消費MPを見てみるのじゃ!」

もしかするとその威力なら『高威力廃ブースト』が付加されてさらに三倍になっておるかもしれんぞ!」

「ええ! まさかたかがファイアーボールで……」

などというロゲンカというか痴話ゲンカのような言い合いが聞こえたが、大部分の生徒はそれどころではなく、安全なはずの魔法実験室でいきなり起こった爆発に怯えていた。

それは当然、最初にメガネの教師に話しかけた女生徒も同じ、いや、もっと怯えていた。

「わ、わたし、やっぱり無理です。」

もし、もしわたしの魔法も暴走して、あ、あんなことが起こったら……」

そう言って実験を投げ出そうとするその女子生徒に、相談を受けていた女教師は冷静に告げる。

「考え方を変えてみるのです。」

あの彼でも、あの、ちょっとした手違いでドラゴンに変身し、運動場を泥濘の沼に変え、ほんの一秒足らずの間に全女子生徒のスカートをめくり、昼間に夜を作り出し、雨乞いをしては流星群を降らせる、『あの』彼でも、ここでは精々この程度の爆発しか起こせないのです」

その言葉を聞いて、その女生徒はハツとなった。

「そ、そうですね。彼でもあの程度なら、わたしなんか失敗しても……」。

なんだか、今まで怖がってたのがバカみたいです。

わたし、チャレンジしてみます！」

そう言って彼女は果敢に実験に取り組み、制御の困難な魔法を見事にやってのけたのだった。

全てを終えたその生徒は、

「先生……」

熱っぽい目で、無表情な、けれど暖かい心を持った女教師を見上げる。

ちなみにその後ろではまだ、

「そうじゃよ！」

この前、おぬしの魔力が123に上がったじゃろ！

もしさっきの音読の時に124になっておったとしたら、ギリギリ可能性があるのじゃ！」

「それは考えてなかった！」

あ、やっぱりMP消費三倍になってる！」

「これで原因は分かったのじゃ！」

ふふん。ワシのおかげじゃな！」

「う、まあ、助かったよ。」

ま、こんなの手帳があればすぐ分かったんだけどね」

「あれはおぬしがここに来て一週間で使い切っちゃったじゃろ！

そもそもアレじゃってワシが作ったものじゃし……」

「なあんだよもうこの、猫のくせにー」

「にゃ、やめるのじゃよコウー！」

ひ、卑怯じゃぞ、そんなとこばかり……」

「ほーれほれほれ！」

「にゃーにゃー！」

などと猫と少年が戯れていたが、少女の瞳には目の前の美人教師しか映っていないかった。

「良く頑張りましたね」

メガネの教師が言つと、

「ブルレ先生！」

ひしつ、とその女生徒は彼女に抱き着いたのだった。

そして、その後の休み時間である。

教室を抜け出した鋼が、突然「キンググリ ゾン」とか叫び出したシロニヤをなだめ、思い出話に花を咲かせている時だ。

「あれ？ ブルレ先生？」

鋼のいる授業に常に顔を出していたある女教師が、鋼たちの前に立っていた。

「ハガネ様。何度も申し上げておりますが、私に敬語や敬称は不要です」

すると教師、ラトリス・ブルレ特別講師は、ほんのわずかに顔をしかめてみせた。

それに応じて、鋼もいつもの口調に切り替える。

「いや、でも一応先生だしさ。」

「というか、何度も思うけど、よくこんなにすぐ、学校に潜入できたよね？」

「もともと、こちらの学院で陰陽術の講師をやってみてはどうか、という打診はたびたび受けていたのです。」

ハガネ様がこちらに来なければ、一生お受けする機会はなかったのでしょうか

「そういえば、ラトリスは陰陽術とか使ってたな……」

なんて言いながら、鋼は一月前を思い出す。

鋼も初めてラトリスを学院で、しかも教師として見た時は少なからず驚いたものだった。

しかし、今ではそれをふくめて多少学院に慣れたと言えるだろう。

「それにしても、ラトリスもすっかりこの学院に慣れてるよね。」

僕なんていまだに授業とかあるとドキドキなのに……」

鋼が羨望混じりの言葉を投げると、

「潜入も忍びの職務の内ですので」

答えにならない答えを彼女は返した。

そして、常と変わらぬ硬質な態度で、

「今日の放課後、ハガネ様のお部屋にお邪魔致します。」

少し、話がありますので」

それだけを伝えると、流れるような動きでどこかへ歩き去ってしまった。

それを見届けて、鋼がはあ、と嘆息する。

「ラトリスの考えることばっかりは、僕にはよく分からないよ」

「たしかに、あまりしゃべらんのだじゃよな。」

まあ口数だけじゃなくて胸もリトルじゃしの！」

「まだこだわってたのか、それ……」

楽しげに笑う一人と一匹。

彼らが、ラトリスの陰の尽力を知ることはないのであった。

第五十二章 雪辱戦

ラトリスが去っていった時、すでに時刻は十二時五分前。ついでに言えば、四時間目開始まで残り五分と迫っていた。

「コウ。四時間目からはどうするのじゃ？」

「あ、もうすぐ十二時か。」

「んー。次、何ページくらいだっけ？」

「そうじゃなあ……。」

昨日の六限の初めてでたしか115ページじゃったから……そろそろ200ページくらいからじゃと思うぞ？」

「もうそこまで行っちゃってるかあ。」

「やっぱペース早いよなー」

などと話し合いながら歩くのは、もちろんご存知、鋼とシロニヤ。魔法学院生と白猫の異色コンビである。

「あー。その辺りはまだ飛び飛びでしかやってないなー」

「ほう。なら、どうするのじゃ？」

本人としてはポーカーフェイスで尋ねたつもりなのだろうが、その顔を裏切るように後ろでぶんぶんと振れるシッポで、鋼にはシロニヤがどういふ答えを望んでいるか分かってしまった。

鋼は内心苦笑して、期待通りの言葉を返す。

「それじゃ、今日はもう授業サボって図書館行くか」

「応、なのじゃー！」

ちよっぴり学生っぽい会話をして、鋼とシロニヤは昼以降の授業はサボって図書館に行くことにした。

授業をサボるのは根が真面目な鋼としてはあまり気が進まないのだが、もともと普通に卒業するつもりはないし、普通に魔術師になるつもりはもったない。

それに、鋼が図書館に行くのは、鋼たちの『計画』にとっては欠かせない要素なのだ。

クリステイナが突如としてどこかに消えてしまった時、リリーアは少しだけ困った顔をして、

「あの子の心配は、そんなにしなくていいと思う。」

あいつああ見えて、どこでだって生きてけるから。

……でも、こっちの計画はちよつとだけ狂っちゃったかも。

理想を言えば、クリステイナが魔法を開発してあの子の卒業を確定させた上で、それを理由にわたしたちが学院長と戦うっていうのが一番いいと思ってたんだけど」

めずらしくも、そんな弱音を吐いた。

これがどういう意味なのかというと、さすがに学院長でも、資格欲しさにやってくる生徒全員とたびたび戦っていたら身が持たないというか面倒くさい。

そのため、『学業においてある程度の成果を上げた生徒』に対して、ほとんど記念という形で学院長に挑むことが許されているのである。

実際に学院長と戦う人間のほとんどは、一級魔術師に上がった時に『ついで』として高名な学院長との戦闘を望んでいるだけであり、学院長を倒して一級魔術師になろうなどと思う輩の方が圧倒的に少数らしい。

つまりこれは裏を返せば、一級魔術師に認められる程度の研究でも持っていないと学院長と戦えるかどうかは分からない、ということ、それができるなら学院長となんて戦わないだろ、という実

に本末転倒な事態と言える。

ただ、集団で挑む場合は最悪その内の一人が相応の功績を上げていればいいワケで、リリーアがそれだけの人材を引き込めばいいのではと鋼は提案したのだが、

「ただどこの計画の中心人物として、せめてそのくらいはわたしたちの手でやりたいじゃない？」

というのがリリーアの答えだった。

その後も、

「学期末の筆記でわたしがトップを取れば……でも、それじゃ弱いかなあ」

なんて悩む、隠れエリートにイラツとした気持ちを抱かなくもなかったのだが、

（僕がクリステイナの代わりになれないかな？）

という考えはこの時に生まれた。

そのチャンスは意外なところから来た。

監禁部屋から解放される条件として言い渡されたレメデスからの特別課題なのだが、リリーアから以前、

「あなたはできるだけ図書館のあの場所において、学院長の情報を探るか、できれば試合が申し込みやすいように渡りをつけて」

と言われていたため、『図書館で一人でやれるような課題』を希望したところ、

「大陸共通語の書き取り、ですか!？」

何だかえらく幼稚な課題が来てしまった。

大陸共通言語の書き取り、とは、要はアレである。現代日本の小学生とかが、覚えなくてはいけない漢字をひたすら何回もノートに書いていく、アレのことだ。

「魔法言語とかなら分かりますけど、今さらなんでこんな……」
と鋼が聞くと、

「あんた、聞くところによると翻訳の首輪がなけりゃああ、読み書きもできないそうだねえ？」

「うぐ……」

「笑わせるんじゃないよ！」

勉強するなら、魔法言語より先に、日常の言葉だろう？」「
そう言われてしまえば、鋼としてもさすがに反論しにくい。

すっかり顔をうつむかせてしまった鋼だったが、
「いつまでかかってもいいし、どんなやり方でやってもいい。

大陸共通語を書き取りしたノートを、最低でも一冊分、多い分なら何冊でもいい、自分が十分だと思っただやって、わたしに提出するんだ。」

この課題で、あんなりの学業に対する誠意って奴を見せな！」「
という言葉に、鋼の目に光が灯った。

その時、鋼の頭には『学業においてある程度の成果を上げた生徒』の言葉が踊っていた。

念押しのために、鋼は尋ねる。

「こんな課題でも、もし僕が頑張れば、それはきちんと評価してくれるってことですか？」

対してレメデスは、

「お前は何を当たり前のことを言ってるんだい？
わたしはねえ、努力に貴賤なんてないと思ってる。」

だからもちろんこの課題だって、わたしは正當に評価してやるよ」
そんな風に答えたのだった。

その言葉を聞いて、

「分かりました、それでいいです。約束ですからね」

レメデスの手前、表面上は不満そうな顔をしながらも、どうやらこれで、懸案だった『舞台に上がる手段』は確保できたようだ、と鋼は内心安堵したのだった。

それから鋼が行ったのは、リリーアに案内してもらって文房具を購入することだった。

売っているのが羊皮紙と羽ペンとかだったらどうしようかと思っただが、それはそれでどうかと思うくらい、現代日本で使われているような筆記用具がそこには並んでいた。

鋼は『ラーナ』のロゴのついたシャープペンとボールペンを数本ずつと、『キャンバス』とかいうパクリっぽいネームのついた、魔法学院生御用達、横罫線付き三十枚のA4サイズノートを十五冊まとめ買いたした。

座学の六科目にそれぞれ一冊ずつ、二冊を予備にして、残り全てを『書き取り用』とタイトル部分に書き殴って、図書館に持ち込むことにする。

課題は最低一冊で上限なしなのだから、さすがにこの量を書けば受け取ってくれないということはないだろう。

後は図書館にこもってノートを埋めるだけである。

ちよっと試しに取りかかってみただが、翻訳の首輪をつけたま

ま書き写すだけなら意外とすらすらやれた。

翻訳の首輪をつけたままだとそもそも大陸共通語の勉強にならないのではないか、とも思ったのだが、基本的に手段は問われていないし、何よりなしでやると非常に面倒くさい。まあ『恐怖の波動』が致命的なレメデスは図書館に来ないだろう、という判断の下、鋼は首輪ありでの作業を開始することにする。

リリーアと足並みをそろえなくてはいけないのであまり早く終わっても意味がないのだが、これならせいぜい三週間足らずで終わるだろう、と思われたこの課題。

しかし予想外の障害があり、書き取り作業開始から一ヶ月が過ぎてもまだ終わっていない、というのが鋼の現状であった。

そんな事情もあり、

「楽しみじゃな！　楽しみじゃな！」

すっかり定位置と化した鋼の肩の上で、楽しそうに踊る白猫を、鋼はたしなめた。

「あのな。言っとくけど、図書館には書き取りのために行くんだからな。」

わざわざ四時間目の授業をサボってまで行くんだから、そんな遊んだりしないぞ？」

「もちろん分かっつるのじゃよ！」

いつだってシロニヤは返事だけはいい。

「本当に分かっつてるんだらうな？」

今日は真面目に書き取り。

余計な遊びは……まあ、途中の休みの時だけだぞ」

厳しいのか緩いのか分からない鋼の台詞に、
「もちろんなのじゃ!!」

やっぱり元気だけはよく返事をして、手を上げる白猫。
ある意味シユールな光景だった。

もつとも、その白猫がその後、小声で、

「ふふ。今日はあやつが来るじゃろうからな。

熱いバトルの予感じゃよう!!」

とつぶやいたのは、もつとシユールだったのだが。

そして、そのシロニヤの予感は、鋼にとって最悪の形で現実
となった。

(くそ! くそ! どうしてこうなった…!)

鋼は毒づいて、眼前の強敵をにらみつける。

そいつは、あまりに強大な敵だった。

ハガネの体格は十人並みで、少なくとも他の人より小さいという
ことはない。

なのに奴は、そんなハガネの数倍はあるように見えた。

ハガネはそいつと己が相棒たる武器を手に、一対一で向かい合っ
ていた。

(ダメだ。今の僕の状態で、こいつと一対一で立ち向かうのはつら
い。

シロニヤと別れて行動してしまったのが痛かった。

おまけに最初に動揺して食らった一撃、あれさえなければ……)

しかし、今さら後悔しても何も変わらなかった。

出会い頭にハガネが食らったのは、バインドボイスだ。

鋼に図書館の『恐怖の波動』なんて目ではないと思わせるほどのすさまじい迫力が押し寄せ、ハガネは一切の行動の自由を奪われ、棒立ちになったところを痛烈な攻撃を受けた。

そしてハガネは、そのダメージを回復させる暇もないまま、逃げ回るハメになったのだった。

追い詰められ、このままでは逃げることもできない。

ハガネは一か八か、接近してそいつに攻撃をしかける。

だが、

「弾かれたっ!?!」

渾身の力でもって放った攻撃も、そいつの堅い頭部の骨にぶつかって、跳ね返されてしまった。

その隙をそいつが見逃すはずがない。

(これまでか!)

まさに絶体絶命。

鋼が次に訪れる運命を悟って目をつぶった瞬間、

【助けに来たのじゃよ! 「ウー!」】

「シロニャー!」

頼もしい声が鋼の脳を揺らす。

待ちに待った援軍に、鋼は目を見開き、その救い主の姿を見て、

「どうして双剣なんだよおおおおおおおおおおおおお!

!?!」

絶叫した。

【え？ じゃってワシ、ハ○ヲとか好きじゃから……】

「いや、さっきまでお前、ハンマー使ってただろ！」

なんて言っている暇があるはずもなく、ハガネを一噛みして転ばせると、次はおっかなびっくりで尻尾を攻撃したシロニヤに目標を変更し、突進していく。

すると、

【うわ！ や、やっぱりこいつは怖いのじゃよお……】

さっきまでの勢いは一転、シロニヤが逃げる。

「いいから戦ってくれよ！」

【じゃ、じゃけど、双剣じゃ高いところは狙えんし、頭に当たると跳ね返るし……】

「だから、何で双剣にしたんだよ、お前は……」

【じゃって、ハ○ヲとか好きじゃから……】

「話題がループした!？」

これはやっぱり絶体絶命、いや、むしろ絶対絶命か、と自らの運命を嘆きかけた時、

「まだじゃ！ まだ終わらんよ！ G I G I フラアアアアアアッ
シュー!!」

戦場にスタングレネード的な物が投げ込まれ、目の前が真っ白になる。

その閃光と声に、新たな援軍が到着したことに気付く。

「やっと来てくれたのか！ って……」
鋼は一瞬だけ、その表情を緩めたのだが、

「何であんたは防具装備してないんだよおおおおおおおおお
おおおお！！」

そこへ現れたもう一人の援軍、G I G Iは、なぜか上半身裸、半裸だった。

その後、敵にまともにターゲットにされたシロニヤは慣れない武器のせいがあっさり死亡。

防具をつけていないG I G Iは、
「説明しよう！ G I G IフラッシュとはG I G Iの体内の魔力を爆発的に爆発させることにより爆発したような爆発力を生み出す爆発技である。

その範囲は半径数百メートルに及び、その範囲内にいる者は全員あっという間に昏倒する。

G I G Iの百八の技の一つ、S Sランクの超必殺技である！！」
「これにそんな技はないし、そんなだったら僕たちも昏倒しちゃうだろ！」

と話している間に一発で葬られ、最後に残ったハガネも健闘虚しくプレス攻撃をまともに食らって死んだ。

残ったのはのしのと画面上を歩く銀の竜と、クエスト失敗の文字だけだった。

P Pの画面から顔を離し、鋼は怒鳴った。

「お前らのせいで負けただろ！
というか何でさつきと装備が違うんだよ！」
しかし、それに対して二人は動じない。

【一人だけいい子ぶって自分の準備をした後に勉強なんてしとるか
らこうなるのじゃ！】

「ほむほむほむ。そうじゃそうじゃ。しかもわしには何を勉強しと
るのかまだ見せてくれんしのう」

盗人猛々しいとしか言えないような態度で平気で鋼を非難し返す
二人。

ちなみに口調が似ているため同一人物と思われるかもしれないが、
実は違う。

一人は当然、『シロニヤ』というキャラを動かしていたシロニヤ。
そしてもう一人、ほむほむほむ、と関係各所から苦情が来そうな
声で笑う、『G I G I』というキャラを動かしていたこの爺さん、
実は、

「学院長、子供じゃないんですから、がんばってる生徒の足を引っ
張ろうとするのはやめてくださいよ」

この魔法学院の学院長だった。

「遊ぶ時は遊ぶ。勉強しなければならぬ時はサボって遊ぶ。大切
なのはメリハリじゃよ」

「遊んでばかりじゃないですか！」

そして、親しげに話す彼らの手にはラディアントレッドに輝くP
Pがある。

鋼が魔法学院にやってきて、はや一ヶ月。
鋼はなぜか、ラーナ魔法学院の学院長とゲーム友達になっていた。

第五十三章 首に縄

今でこそ何だか和気藹々と学院長と話している鋼たちだが、もちろん最初からこんなに親しかったワケではない。

それは、鋼が最初に図書館にこもって書き取りの課題を始めた時のこと。

【あーきーたー！ 飽きたのじゃよ！

コウ、何かもつと面白いことをやるのじゃ！】

シロニヤはたちまち退屈し、文句を言い始めた。

ちなみに図書館ではシロニヤの制御を離れスタンドアローンになっている白猫は、もうすっかり椅子の上で丸くなってお昼寝中であつた。

「無茶言つなよ。このページまでやったら休憩するから、その時まで待て」

【なんじゃとう！ そんなことを言つんじやったら、ワシー一人でゲームでもやつて……ゲーム？ 一人？】

だがそこで、さらにエキサイトして文句を言っていたシロニヤが止まった。

そして、

【た、大変なことに気付いてしまったのじゃ……】

毎度おなじみになった感のある言葉を吐く。

「そう言つて大変なことだった例がないけど……」。

まあいいや、で、なんだつて？」

鋼に急かされ、シロニヤははやる気持ちを抑えるように、意図し

て冷静な口調で話し始める。

【この図書館、ワシの分身は動かせなんだが、オラクルやワームホールは普通に使えるのじゃ。

それで、ワームホールには生き物を通すことができるんじやが、電波なんかは無生物じゃから通すことができるんじや】

「えっと、それで何が言いたいんだ？」

要領の得ない言葉に鋼がそう聞くと、シロニヤはおずおずと答えた。

【じゃ、じゃから、おぬしにワシのPOPを貸せば、ワームホール越しに二人で通信プレイができるのではないかと思うのじやが……】
それを聞いた後の鋼の行動は迅速だった。

肩に乗っていた白猫を即座に抱き上げると、

「神 猫 降 臨!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

何だか優勝球団の監督みたいにわっしょいわっしょいやり始めた。

抱き上げられてもみくちやにされてワシヨーイまでされ、

【わ、ちよ、なんなんじゃよ！

ちよっとほんとなんなんじゃよ！】

とたまらず叫ぶシロニヤに、

「今までバカにしてて悪かったよシロニヤ……！

お前って本当に神様だったんだな……！」

ものすごいテンションで語りかけてくる鋼。

【こんなことでまさかの神認定じゃと!?!?】

突然別の意味でも持ち上げられ、動揺するシロニヤ。

などという一幕をあっという間にやり終え、

「よしやるう! すぐやるう!」

と、今まで誰も見たことのないテンションで鋼が急がす。

【じゃ、じゃけど、書き取りはしなくてよいのかの?】

「あつはつは! 久しぶりのゲームの前には、どんな障害だってライクアペーパーだよ!

ああ、今までシロニヤにゲームを借りるという発想ができなかった数秒前までの僕を撲殺してやりたい気分だ!」

【お、おぬし、ちょっとテンション高すぎて怖いのじゃよ?】

と言いながら、自分のラディアントレッドのPOPをワームホール越しに鋼に渡す。

「おお、このフォルム、この光沢! これこそが夢にまで見たPOP!
P!

よくぞ我がもとに帰ってきた!」

【ちがうのじゃぞ! おぬしのじゃないのじゃぞ! 貸しとるだけじゃからな!】

シロニヤが思わずビビるほどのテンションで久しぶりのPOPを
拝み始める鋼。

そして、そんなところに現れたのが、

「ほむほむほむ。お主、面白そうな物を持っておるな」

立派なひげをたくわえ、ほむほむと笑う学院長だった。

学院長のひげはあまりに立派すぎて、鋼は最初、この人は人間というより何だかダンブルな扉のようだなと思った。……ダンブルってどういう意味だとか、何で扉なんだとか、深く考えてはいけない。絶対にだ。

鋼はこっちの世界の人間にこういうの説明しちゃっていいんだろ
うかと思いつつ、POPについてざっと説明した。

そして、解説を聞いてさらに興味を引かれた様子の学院長へ、

【狩りゲームは大勢の方が楽しいのじゃ！】

との理由で、ワームホールからも一つのPOPが飛び出してくる。

ちなみにPOPを二つも持っている理由については、

【べ、べつにもう一つのPOPで新キャラをたくさん作ってギルド
カードを交換して、まるで友達がたくさんいるみたいに工作したワ
ケじゃないのじゃからな！】

そういうことらしい。

鋼の想像以上に切ない理由だった。

しばらくは文化の壁もあり、言葉の壁もありでなかなか学院長は
苦戦していたのだが、初心者で学院長とセーブデータがないため最
初から始めた鋼に合わせ、シロニヤもメインキャラの『シロナ』で
はなく、新しく『シロニヤ』というサブキャラを作ってやり始めた
こと、学院長が驚きの言語能力を見せてあっという間に日本語の説

明の意味を理解し始めたことで、ほどなくスムーズにゲームができるようになった。

ちなみに、

「ほむほむほむほむほむ！」

このような言語、『ロゴス』に比べればちよろいわい！」

というのが、鋼にはおそらくどう頑張っても一生共感できない、学院長の当時の台詞であった。

その後三人がゲーム友達になるまで、そう長い時間を要さなかったことは想像に難くないだろう。

リリースに頼まれた通り学院長と接触したこと自体はよかったのだが、やはり課題をこなすという意味ではこのゲームと学院長という要因はマイナスになった。

たとえば根が真面目な鋼は基本、ゲームは書き取りを一段落させたインターバルの時にやり始めるのだが、ひとたび狩りに熱中してしまうと簡単に三十分以上没頭してやり込んでしまうので、課題に差し支えること甚だしかった。

また、学院長がいるとやはり課題が進められない。

いくら鉄の心臓を持つとアステイ辺りにまことしやかに語られている鋼でも、学院長が隣にいる時に平然と書き取りはできなかつた。なんとというかプライド的な問題もあり、さすがにこの人には自分がこんなもんを書いているとバレたくない気持ちがあったのだ。

そこで鋼はリリースからの頼まれ事を心の言い訳に、学院長が傍にいる間は書き取りノートを閉じて、会話を優先することにした。

この日もほとんど課題が進むことはなく、昼に休憩を取って食事をした以外はひたすらゲームと雑談で時間が過ぎていった。そして六時間目が終わる時間、ラトリスとの約束のため鋼たちは図書館を後にした。

「ラトリス、いるー？」

魔法学院寮の自分の部屋にもどった鋼はそう声をかけてみたが、返答はなかった。

「ラトリスはまだ来ていないようじゃな」

そう白猫が言って、鋼の肩からベッドに降りた。

「じゃあ、少し待っていようか」

「うむ。そうじゃ、おぬしの能力をもう一度確認しておきたいから、カードを見せてくれるかの？」

シロニヤの要望に、特に迷うことなく鋼はカードを猫の下まで運んだ。

「ふうむ。やっぱり全体的に伸びてきたのう」

「そうだなー」

鋼はベッドに寝転がりながらそう返事をする。

鋼の記憶が正しければ、今の鋼の能力値は、

筋力98 知力67 魔力125

敏捷71 頑強0 抵抗0

といったところだったはずだ。

あんなに本を読んだのに知力の伸びがいまいちなのは、たぶん『脳筋の誓い』のせいだろうと鋼はひそかに思っている。

カードを覗き込んだシロニヤは、感心したような声を出した。
「しかし、ここに来た当時の能力を思い返すと、ずいぶん伸びたものじゃな。」

能力値は上に行くほど上がりにくくなるとはいえ、このままのペ
ースで行けばこの学院で一年も過ごせば魔力は300越えるので
はないか？」

「どうかনা」

鋼の気のない返事を、シロニヤは聞き咎める。

「何だか他人事じゃのう。」

普通の人間で、能力値が300まで上がる者なんてそうそうおら
んのじゃぞ？」

「ん」

そのシロニヤの言葉にも、鋼は煮え切らない返事を返す。

「なんとなくかさ。能力値が少しくらい高くても、あんまり意味な
いかなって思えてきてさ」

「……どういう意味じゃ？」

「ほら、シロニヤは見えてないだろうけど、この前クロニヤってのが
襲ってきたんだけどな」

「ああ、異世界勇者じゃな？」

「あー、そうそう」

シロニヤの合いの手にさらに相槌を返し、鋼は話を続ける。

「能力値がたとえ全部300越えても、ああいうのに勝てる気がし
ないんだよな」

「まあ、異世界勇者ならそのくらいは強いじゃろつな」

「だということはず」

そこで、鋼は体を起こして、シロニヤを見た。

「この世界は近い内に魔物に滅ぼされるって言ってたけど、その魔物たちっていうのはきつと勇者が必要になるくらいは強いんだろ？」
「……そうじゃな。ある程度以上、魔物の勢力が強まった時に現れる『魔王』という存在は、おそらく異世界勇者の数倍か数十倍か数百倍程度は強いと言われておるな」

アバウトだなー、と言いながら、鋼はもう一度、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。

それを呆れたように見ながら、今度はシロニヤから口を開く。
「おぬしはおかしな奴じゃな。」

目先のことばかり考えているかと思えば意外と先まで考えていたり、大きなもののために戦っていると思えば実はちつぽけなもののために体を張ったりもする。

じゃが、たしか世界を救うような勇者は目指さないのではなかったのかの？」

「そりゃ、今でもそんなつもりは全くないけどさ。」

でも、もしもの時のために何か考えてなきゃ不安だろ？」

そう思ったら、能力値がちょっとくらい高いより……」

「0の方がまだ使い道がある、じゃろ？」

口に出すつもりはなかった言葉を先回りされて、鋼がふたたび、がばつと体を起こした。

「なんじゃよ。凶星じゃったのか？」

「いや、別に……」

言葉をにごそつとする鋼に、シロニヤは追撃をかける。

「ずっとおかしいと思っておったんじゃ。」

まあ、抵抗が上がらないのは納得できる。魔法攻撃は全部無効化してきたからの。

じゃが、武闘大会であれだけマツシの攻撃を受けたのに、どうして頑強が0のままなのじゃ？」

シロニヤの追及に、鋼はグッと詰まった後、

「それは、闘技場でのことで、命の危険のない戦いだっただけだからじゃないか？」

武闘大会では能力値が成長しないシステムになっているとか……」

「ほう？　じゃがおぬし、それからもリリーアに叩かれたり階段ですっころんだり、この前も足の小指をタンスの角にぶつけて悶絶したりしたよな？」

おぬしほどの成長力があれば、その程度でも一つや二つは上がっておらんとおかしいのではないか？」

「いや、だから、それはだな……」

ふたたび言葉に詰まる鋼。

しかしそこで、白猫はふっと笑って追及の手を緩めた。

「なーんてにや」

「へ？」

「ワシの考えすぎじゃったかもしれん。

それよりももっと楽しい話をするのじゃよ！」

「あ、ああ！　そうだよな！　な、何の話をする？」

シロニヤの提案に、鋼は一も二もなく飛びついた。

それを確認して、シロニヤは楽しみに話題を振る。

「そうじゃな、たとえば……『サイコロ』の話なんてどうじゃ？」

サイコロ、という単語を聞いた途端、鋼が分かりやすくビクツとしました。

「な、なんでいきなりサイコロの話なんてするんだよ」

「あれ？　ダメじゃったか？」

なら、そうじゃなあ……『サッカー』について話すのもおもしろそうじゃのう」

「さ、サッカー……は、おもしろそうだなあ」

サッカー、という言葉にやはり過剰反応する鋼。

「おぬし、時々すぐく分かりやすいんじゃないか……」
そんな鋼に、白猫は少し呆れ気味だった。

「ま、これでだいたい分かったからいいんじゃないよ。

まったく、あの時は興味が無い素振りをしよったくせに、結局使
つとるじゃないか」

とシロニヤが憤激するように言うと、鋼はがっくりと肩を落と
した。

「まったく、僕の周りには目ざとい奴が多くて困るよ」

「どういうことじゃ？」

「同じようなこと、リリーアとラトリスにも聞かれたんだよ。

ま、そっちは僕のタレントを見てないからね。

何とかごまかしたんだけど……」

「む。あの二人もか……！」

鋼が二人の名前を口に出した途端、シロニヤの顔が不機嫌そうに
歪んだのだが、鋼には見えていなかった。

はあ、とため息をつく。

「まだ思いつきにもなっていないような段階で、本当はこんな時点で
話すつもりなんてなかったんだよ。

だからシロニヤ、このことは他の人には秘密にしといてくれよ？」

「ふ、二人だけの秘密、じゃな？」

「ああ。漏らしてもらったら困る」

微妙にかみ合わない会話をするシロニヤと鋼。

しかしそれでも、シロニヤはうれしそうだった。

「そういえば、今の話で思い出したけど、あのタレントの実験に協

力してくれたエルフの女の子、どうしてるかな？」

「ああ、あの赤面エルフじゃな？」

あいかわらず変なあだ名つけるなあと思いつつ、鋼は話を進める。
「あの子たしか、魔法学院に入りたいとか言ってただろ？」

もしかして、ここに転入してきたりとか……」

「あー、それはないじゃる。」

あやつ、年はたしか11とか言っておったじゃる？

そりゃああの年にしてはうまく魔法を使っておったと思うのじゃが、この魔法学院の最年少入学記録は13歳。

あやつが入学しては、記録を更新してしまうのじゃ。

それに……」

「それに？」

「あやつはワシより胸が大きいから好かんじゃ！」

鋼はしばらく、何のコメントも言えなかった。

「正直、普通のまな板と、薄紙が一枚張り付いたまな板くらいの差しかなかったと思うんだけど……」

目視での判別は困難だった。

「そんな慰めの言葉はいらんのじゃ。」

ワシとあやつの間には、薄紙一枚どころではない、三枚ほどの差がたしかに……って誰がまな板絶壁胸じゃああ!!」

「もう何を言っているいいやら……」

鋼にもツッコめない時はある。

「もういいのじゃ！　ワシは一人でおぬしのカードをめんこにでもして遊ぶのじゃ」

とすっかりへそを曲げてしまったシロニヤだったが、

「……「ウ？」」

なぜかすぐに、非常に温度の低い声で、鋼を呼んだ。

「どうかしたか？」

無警戒に近づく鋼に、シロニヤは怒気を込めて尋ねる。

「お前の二つ名が、『神落とし神』なんてふざけたものになってるんじやが、これはどういうことじやろうな？」

「え？ あ、ああ。シロニヤと仲良くなったからじゃないか？」

なんとなくドキツとしたが、鋼にはそれ以外に思い当たることがなかった。

しかしシロニヤの怒気は収まらない。

「ほほう？ じゃが、今説明を見たら、『三柱の神の寵愛を受ける者』とあるんじやが？」

「え、嘘だろ！？」

あわててカードを取り上げる。

というか、二つ名の詳しい説明が見れる機能がついているなんて知らなかった。

「だれじゃ！ だれがおぬしをたぶらかしたんじゃ！」

「ご乱神、もとい乱心するシロニヤ。」

「ええいおぬし、そこに直れ！ 正座じゃ正座！」

「あ、ああ。うん……」

そしてベッドの上に正座させられる鋼。

どうするのかわかれば、シロニヤはすかさずその上に乗って丸くなる。

「説教にこの体勢はないと思うんだけど……」

「ええい、ごまかすでないのじゃ！」

「ええ！？　ここで僕が怒られるのか！？」

「理屈の通じない猫だった。」

「さあ！　キリキリ吐くのじゃよ！」

「さもなければこのひざでワシの爪を研ぐ！」

「それは痛い！」

膝の上で丸くなった猫に恫喝される鋼。

その光景は情けないを通り越してほとんどシュールだったが、当事者はどちらも真剣だ。

「でも、僕には本当に心当たりないんだけど……」

「ウソをつくんじゃないのじゃ！」

「ウソつきはみんなそう言うのじゃよ！」

しかし本当に、鋼には思い当たる節がない。

強いて言うなら、ミスレイを通じて戦神の加護を受けたのだから、三つの内の一つは戦神かもしれない。

だが、これでシロニヤと合わせても二柱。

あと一柱には全く思い当たる神がない。

「う、うなー！　浮気者は脳天にでっかい風穴じゃと昔から法律で決まっとるんじゃないぞ！」

「それじゃ、素直に話しても結局死ぬじゃないか……」

「うわーんやっぱり浮気なんじゃワシは裏切られたんじゃないかああ！」

「いや、そういうことじゃなくて……」

錯乱してあらぬことを口走り出すシロニヤ。

これではどうあっても収まりそうにない。

「ここで鋼は最終手段に打って出た。」

「この手だけは使いたくなかったけど……ごめんシロニヤ！」

鋼の手が、シロニヤのなめらかな毛並みに伸びる。

「き、きさま、にやにをする!？」

あ、ズルいぞコウ、こんなことでワシは……………ふにゃああ
鋼はシロニヤを撫でて撫でて撫でてまくった。

なんだかんだでこの一か月間、猫好きな鋼はブラッシングと称して、コミュニケーションと称して、ゴミがついているとか言い訳して、あるいは会話をしながら、勉強しながら、食事を取りながら、ゲームをしながら、とにかくずっとシロニヤを撫でながら過ごしてきた。

たぶん一日の三分の一くらいは無意識にでもシロニヤを撫でながら過ごしている鋼にとって、シロニヤの弱点などすっかりお見通しだった。

シロニヤがうにゃーんごろごろー、状態になったところで鋼はようやく手を止めた。

というか、鋼としてもちよつとやりすぎた感がないワケでもない。

「ええと……………少し頭は冷えたか、シロニヤ?」

「うにゃー、もっとお……………ハッ!」

正気にもどったシロニヤは、あわてて居住まいを直す。

「にゃ、にゃんじゃ? ワシは最初から冷静じゃぞ!？」

「まあ、それならいいんだけどね……………」

しかし、少し時間を置いて冷静になったのはたしかなようだった。
「その、本当におぬしには心当たりがないんじゃないかな?」

「ああ」

「その言葉、ヘラクラーに誓えるか?」

「ヘラク……………ああ、誓うよ」

「なら信じるのじゃ！」

さっきまでの狂態が嘘のように、あっさりと納得するシロニヤ。

「ふふふ。しかしコウに横恋慕するなどバカな神たちじゃよ。

コウはもう、こんなにもワシにメロメロじゃというのにな！」

しかもその数秒後には立ち直ってこんなことまで言っていた。

鋼も別にメロメロになった覚えはないのだが、たしかに白猫バー
ジョンのシロニヤの撫で心地にはメロメロなので、とりあえず口は
はさまなかった。

「と、ところで、なのじゃが……」

「ん？」

膝の上のシロニヤが、今度はさっきまでとはまた違う、照れたよ
うな雰囲気で鋼を見上げてきた。

そして、

「そろそろ、おぬしとワシの付き合いも長いじゃろ？」

これから危険なこともあるじゃろうし、おぬしさえよければ、正
式にワシの祝福を……」

おずおずと何かを提案しようとしたその時、

「ラトリスです。入っても宜しいでしょうか？」

待ち人、来たる。

「あ、ちょっと待つのじゃ……」

というシロニヤの制止も虚しく、

「ああ。入って」

と鋼はすぐに答えてしまっていた。

「失礼します」

メガネを光らせ、ギルドの職員をしていた時と同じようなピシッとした服装のラトリスが部屋に入ってくる。

「うう！ これからじゃったのにい……！」

とシロニヤがひそかに憤慨していたが、小声すぎて鋼には聞こえなかった。

「申し訳ありません、ハガネ様。

内密の話がしたいので、どうか人払いを」

人払いを、と言いつつ、ラトリスの視線は一直線に猫を向いていた。

それに対して、

「わ、ワシはコウのパートナーじゃぞ！」

とシロニヤが叫ぶと、コウの腰の横で何かがブルルと振動した。

しかし、これから始まるのは真面目な話のようだ。

「シロニヤ。悪いけど、ちょっとこいつを持って外で遊んでおいてくれ」

「にゃんじゃとお……むぐ！」

そう言って、シロニヤに腰の木の枝をくわえさせて部屋の外に出した。

それでもオラクルで会話を聞いている可能性は大だが、そこまで禁じるつもりはなかった。

「それで、話っているのは？」

シロニヤを外に出してもどってきた鋼がそう聞くと、ラトリスはメガネの奥の目をすっと細めた。

「はい。ハガネ様がここに連れて来られた時のことを覚えておられますか？」

「ああ、あれは強烈だったな……」

食事の途中に突然レメデスがやってきて、色々と衝撃的な事実をぶちまけた後、鋼をここまで転移させてきた。

あんな体験は、忘れようもない。

「あの時、ハガネ様は単独でレメデス教師に転移をさせられました。彼女に敵意はなかった為問題は起こりませんでした。敵対している者に同様の事をされた場合、転移先に敵が待ち構えている可能性も考えられます」

「あー。そうだなあ」

これがゲーム基準の能力の弱いところだ。

鋼は攻撃魔法には強いが、ゲームにおいて攻撃に使われるはずのない移動魔法などを使った策には意外ともろいかもしれない。

「そこで、それに対抗する手段を提案しに参りました。

『血縄の絆』と言います」

「なんだか、すごく物騒な名前だけど……」

ラトリスは首を横に振った。

「いえ、名前はそうかもしれませんが、単に契約するのに血を使うだけで無害な術式です。

効果としては、転移の魔法等を受けた場合に、これで結ばれた相手も同時に転移するという物となります」

「つまり、転移の罠にかかったりしても、単独で敵を相手にする危険がなくなる、ってこと？」

それが本当なら、*おおっと！ テレポーター*、となっても安心ではある。

「はい。それに、転移しなければいけない対象が増える事で、転移自体を阻害する事も可能になるかもしれません」

「なるほど……」

転移魔法は高度な魔法だと聞く。

ギリギリ一人を飛ばせるだけの術師なら、二人になったら魔法自体が使えなくなる、ということもあるだろう。

「その術式を、私に使わせて頂きたいのです」

そう言って、ラトリスは頭を下げた。

だが、頭が下がるのは鋼の方だった。

ラトリスには有形無形の色々な手助けを受けている。

感謝をするとすればこちらの方だ、と鋼は思った。

「その、いつもありがとう。

何度も言っけど、それはこっちが頼む方だよ」

そう鋼は言うが、

「いえ」

ラトリスは頑なに首を振るだけだ。

しかし、ここで時間を取ってもお互いにとって無駄な時間にしかならないだろう。

鋼はあえて頭を切り替える。

「それって、ここですぐにできる？」

「はい。契約自体は単純です。

ただ、二度と解除出来ないというだけで……」

「え、いや、ちょっと？」

不穏な単語に、鋼が焦る間にもラトリスはてきぱきと動き、

「ハガネ様、左手の薬指を出して下さい」

「え、あ、ああ」

有無を言わせぬ口調に、つい左手を差し出してしまふ。

「失礼します」

するとその指に、ラトリスは素早く顔を近付け、

「つつ！」

小さく歯を立てた。

わずかながら指からしたたる血。

ラトリスがそれに口早に何かを唱えると、

「……糸？」

それは真つ赤な糸となつて、ラトリスの指に絡め取られた。

「これが、『血縄の絆』の名前の由来です。

後は、これを私の体のどこかに巻きつければ完成です。

「……構いませんね？」

ラトリスのメガネの奥に、わずかな不安が揺れているのを見て取
つて、

「……ああ、構わない。

いや、じゃなくて、ラトリスにやって欲しい」

鋼は結局、そう答えた。

するとラトリスは、無表情な顔にわずかに喜色をたたえて、

「お任せ下さい！」

とめずらしく澁刺とした声で応じる。

しかし、薬指から垂れる赤い糸なんていうのは、まるで女の子の
好きな迷信のようだ、と鋼は思う。

もしラトリスがこれを自分の薬指に巻きつけたりなんかしたら照
れるな、と鋼が思っていると、早速ラトリスが赤い糸をつまんで、
くるりと器用に巻きつけた。……自分の首に。

「ちょっと待った！ その場所はおかしい！」

鋼がたまらず叫ぶが、

「はい？」

ラトリスはもう、首に血の糸を巻いた後だった。

役目を果たしたせいかわ、赤い糸は見えなくなり、表面上は鋼たち

は元にもどった。

しかし何だか鋼は、取り返しのつかないことをしてしまった気がしていた。

そして、それを裏付けるように、ラトリスがその場で三つ指を置いて、大きく頭を下げた。

「私を一人前にして下さい、有り難う御座います」

「い、一人前、って何が？」

「この『血縄の絆』の術式は、私のお世話になった里では互いに一生を添い遂げるといふ意志を示す為に行われ、主に婚姻の儀や主従の契約を結ぶ時に使われるのです。

もちろん軽々しく結べる物ではありませんし、無理矢理に出来る物でもありません。そこで忍びの間では、この術を使う事が出来たら一人前、とする習わしがあるのです」

その言葉を聞いた鋼の顔から血の気が引いていく。

(重い！ この忠誠心は重すぎる！)

正直鋼としては、もうちょっと軽々しく結べる物を使って欲しかった。

また、ラトリスの言葉が終わるか終わらないかの内に、部屋の外からガリガリガリガリと猫がドアをひっかくような音と、ドンドンドンドンと枝がドアをたたくような音が響いてきて、鋼の混乱をおる。

そんな混迷する事態の中、ラトリスだけは平静に、

「これから、末永く宜しくお願い致します」

まるで嫁入りのあいさつのような口上と共に、もう一度深々と頭を下げたのだった。

そこから一拍遅れて、ドアが内側に弾け飛ぶ。

木の枝がびゅーんと鋼目がけて飛んでいき、猫が鋼のみぞおち目がけてダイブする。

鋼の右手に収まった木の枝はまるでチェーンソーのようなけたたましい音を出し、

「もうこうなつては遠慮などしてられないのじゃ！」

コウ！　すぐにワシの祝福を……」

白猫は鋼の胸元に爪を立てながら何やらまくしたてる。

そして、その混乱をさらに助長させるかのように、開け放たれた扉を新たな影が潜り抜け、

「ハガネ、朗報よ！　メンバーがとりあえず二百五十人集まったから、十日後に第一回の作戦会議を開くわよ！　……って」

突然現れたアイドルの少女は、部屋の惨状　鋼にしがみついて叫ぶ白猫、鋼の手の中で激しく振動する木の枝、極めつけとして床で土下座している女教師　を見渡し、もう一度鋼を見て、

「……あんだ、何やってんの？」

いつぞやと同じ台詞を、以前よりももっと冷え切った声で放ったのだった。

第五十四章 連合の思惑

「おわ、つたあ……」

抜けていた最後の白紙のページを埋め、鋼はぐったりと書き取りノートの上に倒れ込んだ。

【やったではないか！】

これで心置きなく作戦会議とやらに出られるのう！】

それを我が事のように喜んでくれたのは猫神（脳内）である。現在地が図書館のいつもの席であるので、白猫は普通の猫になっている。

「まあ、苦勞したからなあ……」

鋼はラトリスとリリアが部屋を訪ねてきてからの十日間、鋼は学院長につれなく接し、ゲームの誘惑を極力退け、寄って来る学院長をしつしと追い払い、書き取り中はシロニヤを撫でることすら我慢し、それでも寄って来る学院長をちぎっては投げちぎっては投げの大活躍。

結果、作戦会議の当日にはあるが、レメデスに提出する課題をようやく完成させることができたのだ。

「悪い。とりあえず、寝る」

【うむ。そうじゃな。昨夜はほとんど徹夜じゃったし、作戦会議までゆっくり休むとよいのじゃ】

「ああ、おやすみ……」

そう言って、書き取り用のノートをまとめると、鋼はそのまま机に突っ伏して昼寝の態勢になってしまった。

鋼がこうやってこの場で寝てしまったのには理由がある。

書き取りを終わらせるためにはどうしても昨夜は夜中に頑張らな

くてはいけなくて寝不足だったというのが一つ。そしてそれ以上に、実は作戦会議を行う場所というのがこの図書館だということが理由としては大きい。

一応秘密の集会なので、人の寄りつかない割に広さのある図書館を選ぶというのは合理的だし、他にも理由はある。

そしてそれが、今回の作戦会議のキモだと言える。

(今回の作戦会議、頑張っていたリリーアのためにも、うまく行ってほしいな)

そんなことを考えながら、鋼の意識はゆっくりと闇に閉ざされていく。

その最後の瞬間、

【コウ。おぬしは本当にがんばったのじゃよ。

本当に……すごい奴なのじゃ】

どこからか、神々しくも優しい声が聞こえてきた気がした。

「あつっ!」

わき腹に燃えるような痛みを感じて鋼が飛び起きると、いつも閑散としているはずの図書館が、どこかせわしないような、人のざわめきに満ちていた。

「え? え?」

混乱して鋼がきよろきよろとしていると、ふたたびわき腹に痛み。

「あたっ! 何するんだよ、リリーア」

鋼は隣に立つ犯人を軽くにらみつけた。まあ、一回目ほど痛くは

なかったので、今回は手加減してくれたのだろうが、それはそれだ。

しかし彼女は悪びれもせず、

「あのね。どうしてこんなところで悠々と寝こけてるか知らないけど、リリーア・鋼連合がうまく行くかは今日のこの時にかかってるって言っても過言じゃないのよ。」

しっかりとささいよね、副リーダー！」

そう言っただけに発破をかけられた。

いや、それはいいのだが、

「ちょ、ちょっと待って？ 副リーダー？」

それに、リリーア・鋼連合と違って……」

あまりに初耳な情報に、鋼は目を白黒させる。

「当たり前でしょ。クリステイナがいないんだから、これはわたしとあなたの計画。」

ということは、わたしがリーダーであんたが副リーダーになるのは当然。」

それともまさか、あんた自分がリーダーをやりたいとか……」

「いや、言わねえよ！」

大声を出した瞬間、周りの視線が一齐に鋼に集まる。

「あ、あはははは……」

鋼はとりあえず乾いた笑いでごまかし、周りを観察した。

さっきの一瞬ほどの露骨な物ではないが、やはり自分に視線が集まっているのを感じた。

考えてみれば自分たちのリーダーであり、アイドルでもあるリリーアに怒鳴るような人間は、きつとここにはいないのだろう。

鋼だってツツコミ時以外にはそんなことをしないのだが、それは言い訳にもなるまい。

「とにかく、ここで内部分裂とか空中分解とかは避けたいの。だから、うまくやってよね！」

リリーアはもう一度、鋼の耳元に口を近づけてそれだけをささやくと、ためらいなく図書館の机の上に乗ると、堂々とその場に仁王立ちして、宣言した。

「それじゃ、寝坊助も起きたことだし、そろそろ時間にもなりまして。みんな、今日は集まってくれてありがとう。」

これから第一回、リリーア・鋼連合作戦会議を始めます！」

「今日集まってもらったのは、わたしたちの計画に賛同してくれた二百五十人の内の五十人、全体の約五分の一ですが、わたしはここに集まったあなた方に、この作戦の中核を担ってもらおうと考えています。」

皆さん、どうかわたしに力を貸してください。そして、みんなで勝利をつかみましょう！」

リリーアがそう口にするると、呼応するように周り中から賛同の聲が上がる。

「すごい人気だなあ……」

もしかしてリリーアにはアイドルだけじゃなくて扇動者とか独裁者の才能とかもあるんじゃないかなろうか、なんて考えていると、

「よう。ハガネ・ユーキ君。……で、いいんだよな？」

いかにも体育会系イケメン、みたいな生徒が話しかけてきた。

「鋼はたしかに僕だけど、ええつと？」

「ああ。俺はライル。ライル・マグティスだ。

学院の三回生であんたと同じ前衛。よろしく」

「あ、ああ、よろしく」

流れるようなあいさつに、思わず鋼も握手に応じてしまう。

「それで、そのライルさんが何の用ですか？」

鋼は敬語で尋ねた。

三回生ということは当然上級生、おそらく17歳くらいだということになる。

しかし、ライルは鋼の言葉に首を振った。

「敬語はやめてくれ。少なくとも今はあんたが俺たちの副リーダーで、たぶん前衛チームのリーダーになるんだぜ。

……というかな。俺の背中がかゆくなるから、タメ口で行こうや」
「なるほど、了解」

背中がかゆくなる云々が本当なのかは分からないが、鋼としてもその方が気楽でいい。

それに、鋼は実年齢からすると17なので、精神年齢的には大差がないはずではある。

「それにしても、どうして僕が副リーダーだと？」

さっきの口ぶりからすると、顔は把握していなかったように見える。

リリアに親しげに話しかけられていたことで特定されたのだろうか。

そう考えて鋼は尋ねたのだが、ライルには呆れたような顔をされた。

「あんた、自分がどんだけ有名か、自覚してないだろ。

『魔法使い泣かせ』 『猫の王様』 『異次元生物』 『図書館の主』
『破壊の朗読』 エトセトラエトセトラ、ってね。

他にもあんたにつけられた二つ名は星の数ほどある。

下手すりゃリリーアさんより有名かもしれないぜ？」

「そう、なんだ……」

知らない間に、厨二的な存在になってしまったようで、鋼は複雑な気分だった。

「とうかな。それがなくってもこの本、『聖邪魂滅の書』の前で昼寝が出来るような奴はこの学院にはあんたと学院長しかないだろ」

「ああ、そうか……」

あの本の前にいるのが当たり前になりすぎていたせいで、そんな意識もまったくなくなっていた。

今日ここで集まった理由とも関係するということのに、うかつだった。

「聞いてたよりもずっと危なっかしい奴だな、あんたは。」

一応忠告しとくが、あんたの山ほどある二つ名の一つに『アイドルの恋人』って奴があるんだが、これは結構厄介だぜ？」

「厄介？」

「リリーアさんの恋人だつて噂が立って、あんたはそれなりに恨まれてるってことさ」

「まさか!？」

鋼はそう言ったものの、信じられない話ではない。

たしかにリリーアとはよく話すし、熱狂的なファンから見ればそれは許しがたい暴挙だとも考えられる。

「リリーアさんはあんたの前では素で話してるだろ？」

それが、連中にはうらやましいらしいぞ」

「え？」

鋼は思わず固まった。ライルの話しぶりから、リリーアのアイドルっぷりが演技だと見抜いていることに気付いたからだ。

「あれ？ リリーアが猫被ってるの知ってたのか？」

「いや、猫かぶってるって言い方は……あー、まあ、いい。リリーアさんが親しい相手にはいつもよりくだけた態度を取るってのはここでは有名な話だ」
なるほど、と鋼は思う。

しかし、くだけた態度というのはどの程度のことなのか判然としない。

いつぞやのように勝手に他人のハシを奪って昼食の唐揚げを取っていく程度のことを言うのか、それとも部屋に入って数秒でスカート全開にしてドロップキックをかましたりするところまで行って、ようやくくだけていると判断するのだろうか。

鋼は首をひねった。

それをどう取ったのか、

「言っとくけどな。自分で言うのも何だが、ラーナ魔法学院は変わり者ぞろいだ。

アイドルでかわいいってだけじゃ、こんだけの数の人間を味方にできやしねえよ。

あの人のいつも前に進もうとする意志の強さ、彼女なら何かやってくれそうだと期待させる雰囲気、面倒見のよさとカリスマ、そしてそれを活かす努力。

そんなのが集まって出来たのがこの集会だ。

ま、そんなこと、リリーアさんの一番の協力者で一番の変人に言っても今さらだろうけどな」

「いやいや、何だよその勝手な称号」

鋼は変なフォローを入れられていた。

「あー、話がそれちまったな。そうじゃねえんだよ。

いいか、振り返ったりせずに、静かに確認しろよ？」

「ん？」

「まず、今リリーアの横で話をしているメガネの生徒だ。見えるな？」

「あ、ああ……」
作戦会議は小声で話す二人をよそに進行しており、今はいかにもやり手そうなメガネをかけた女子生徒が話をしている。

「学院長は勝負を了承した瞬間、対戦する生徒と自分の特設されたバトルフィールドに飛ばすそうです。

つまり、待ち伏せ、罠の類は一切使えないと考えていいでしょう
どうやら話は具体的な対戦の話に入ったようだった。

よく見るとその隣にいるリリーアがたびたびこっちをにらんでいるし、鋼も聞いておきたいのだが……。

「あの女が学院のリリーアファンクラブの会長で、リリーアグッズに年間百万マナを費やす猛者でもあり、この学院でたぶん一番あんなを排除したがつてる人間だ」

「はあ!？」

ライルの言葉に、思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「だから、反応するなよ!」

「わ、悪い」

あわてて声をひそめる。

「続けるぞ？ 俺の右後ろ、髪の毛をピンク色に染めている男がいるな？」

「あ、ああ」

ちらりと横目で見ると、全体的に学院に似合わない世紀末ファッションの男がいた。今は心なしか、うつとりとした目で説明をしているメガネの女子生徒、ではなく、隣のリリーアを見ている。

「あいつはファンクラブ会員番号4。」

つまりシングルナンバーを背負う狂信的なリリーアファンで、こ

の前も食堂で堂々とお前を叩きのめす計画を練っていたそうだ」

「なんだそりゃ……」

嫉妬で殺される人間というのは探したらいるそうだが、いざ自分の身に降りかかるとなると現実感がない。しかも、それが誤解に基づいたものだというならなおさらだ。

「まだいるぜ。俺の左後ろ、黒髪を床まで伸ばした女だ」

「まだいるのかよ……」

鋼としてはもう十分お腹いっぱいである。

「そう言うなって。」

いいか。あの女はリリーアさんが学院にもどってきてからのファンで、ファンクラブの会員にもなったばかりだが、この中で一番本気度が高い。

しかも魔法使いのくせに暗器使いで、闇討ちが得意だ。

さっきのバカみたいに計画を漏らすことはしないが、おそらく学院長との対戦を好機と思って、どさくさでお前をどうにかしようと考えてる」

「この学校はそんな奴ばかりか！」

鋼は思わず叫んだ。

で、リリーアににらまれた。

仕方なく小さくなって首をすくめていると、隣からおかしな視線が送られていた。

「……何か言いたげだけど？」

「ん？ ああ。単なる噂かと思ってたんだが、あんた、本当にリリーアさんと仲がいいんだなって思ってたな」

そう言っただけでライルは笑ったが、よく見るとその唇の端はひきつっているように見えた。

「そっぴや、ライルはどうしてそんなにリリーアのファンに詳しい

んだ？

他人のファンクラブの会員番号なんて、普通は知らないだろ？」

鋼がふと思いついてそう聞いてみると、

「いや、俺は自分で言うのもなんだが事情通だからな。

今回の計画がうまく行くように、色々調べてお前に事前に注意しておきたかったんだよ」

「ふうん」

ライルはそんな風に答えた。

鋼はなんとなく引つかかる物を覚えたが、それ以上は追及しなかった。

ライルとの会話が途切れる。

なんとなく今さら真面目に話を聞く気にもなれなくて、今さらながらに寝ている内に持ち物がなくなっていないか確認する。

まあ持ち物と言っても、ポケットに入れている冒険者カードと、書き取りノートと筆記用具、それに木の枝と白猫くらいである。確認はすぐに済んだ。

「それでは、これからは前衛チームと後衛チームに分かれ、それぞれのリーダーの下で具体的な話し合いをしてもらいます。

前衛のリーダーは副リーダーのハガネ・ユーキさんが、後衛のリーダーは不肖ながら私が務めます」

なんてことをしていると、話し合いは次の段階に進んだらしい。

鋼はやはり前衛部隊のリーダーを押し付けられていて、内心ため息をつきながら前に出る。

鋼は多少まごついたが、同じ前衛で実力もたしからしいライルの助けもあり、それなりに話し合いは順調に進んだ。

今回の話し合いで一番のポイントとなったのは、当然戦い方だ。前衛はそれぞれ魔法や特定の属性に強い人間で構成されているのだが、これがひどかった。

ある者は火と風に強い代わりに水と土に弱く、またある者は水と風に強い代わりに雷に弱く、という感じで全属性に強いという者がまるでない。

どの属性に耐性がある者をメインで使うかで議論は紛糾した。

結局は鋼の提案で、互いの弱点属性を補うような三人組を作り、相手の使う魔法によって前に出る人を変える、というところに落ち着いた。

うまいこと耐性パズルを考えるのが大変だったが、一応苦手属性がほとんど出ないように七組十九人を組み合わせた。ちなみに人数が合わないのは、鋼だけ単独の組になったからだ。

実戦でそうそう簡単に入れ替わったりできるかは知らないが、そこは訓練次第だろうとライルは言っていた。

もちろん前衛の目的は、学院長の魔法詠唱の妨害。

囷として機能すればそれで充分なのだが、強いてこのメンバーの中で切り札を上げるとすれば、三人ほどが鋼を感嘆させるような実力を持っていた。

まずは、ライル。

火と風、雷に光という四属性の耐性持ちで、使う魔法も耐性とはとんどかぶっている。

鋼が彼を切り札とする理由は、彼が接近戦に特化した魔法を行使できるからだ。自分の手足に属性魔法をまとわせる戦い方を得意として、その威力は魔法が収束している分放出系の魔法より強力らしい。

次は四回生、すでに二級魔術師資格を持っている研究家肌のレイス。

彼はライルとは対照的に地に氷、闇属性などに耐性を持ち、連発はできないものの、それぞれの属性の魔法を防ぐ障壁を張ることができるらしい。

前衛向きではない魔法とも思えるが、この力を有効に使えば援護のバリエーションは増えるはずだ。

そして、もう一人。

一応前衛の話し合いが一段落して、まだ話し合いが終わっていない後衛の様子に一時休憩を言い渡した時だ。

誰かの落し物なのか、地面にペンが落ちているのを鋼がかがんで拾おうとした瞬間だった。

「動くな」

首筋に、何か鋭い物を押し当てられた。

「ハガネ・ユーキ。貴様のようなゴミ虫がリリーア様に近付いているのを見るのは大変不愉快だ。

何度貴様を闇討ちしてやろうと思ったか知れない」

横目で襲撃者を見る。

それは、ライルが注意をしろと促した、暗器使いの髪の長い少女だった。

鋼の額を冷や汗が伝う。

しかし、

「だが、さっきの一件で多少は見直した。ある程度の将才はあるら

しいな。

私は今回の計画で手柄を立て、リリーア様に近付きたい。

そのために、貴様を生かしておいてやる」

その話は意外な展開を見せた。

「私の針の有効射程は二メートルほどだが、命中すれば十秒ほど、特定属性の攻撃を封じる特殊効果を持っている。うまく使え」

その言葉を最後に、首の後ろの圧迫感がなくなる。

鋼がゆっくりと顔を上げた時、周りにはすでに誰の姿もなかった。

「サーシア・ナイト、か……」

その黒髪の少女の名を、鋼は口の中でつぶやいた。

彼女が来る戦いでどういう役割を果たすか、それはまだ、誰も知らない。

しばらくして……。

思い思いに休憩をしていた多くの前衛部隊の生徒も、おもむろに中央に集まってくる。

作戦会議が始まって、そろそろ三十分が経つ。

今回企画されていたメインイベントの時がやってきたのだ。

「そろそろ時間、ね……」

その雰囲気を感じ取り取って、リリーアが前に出る。

まだ作戦を話し合っていた後衛部隊の人たちも、口を閉じ、この時ばかりはリリーアの姿を見つめた。

そして、リリーアの隣には学院長の魔法がこめられた『聖邪魂滅の書』がある。

作戦会議が始まったのが、三十分ほど前。

正確には二十九分ほど前、三十分ごとに放たれる『悔恨の波動』

が図書館に放たれた直後を見計らってリリーアたちは会議を始めたのである。

では、今から行われるイベントとは何か。

それは、『悔恨の波動』を乗り越えるという、学院長攻略には絶対に欠かせない要素の、いわば予行演習なのだ。

迫るカウントダウンの中、リリーアは勇ましく呼びかける。

「わたしたちの先人たちは、みな学院長の『悔恨の波動』を受け、十分な実力も発揮できずに倒れてきました。

彼らとわたしたちが違うということを、今から証明しましょう！」

「「「「「おおーっ！！」「」「」」」」

リリーアの声に応えて、四十八人分の賛同の声上がる。ちなみに声を出さなかったのはリリーア本人と、高いテンションにすっかり乗り遅れた鋼である。

またこれが、なぜこの日集まったのが限界の二百五十人ではなく、五十人だったのかという答えでもある。

リリーアの計画に参加した中でも『悔恨の波動』に対して抵抗力を持つ者を厳選し、ここに集めたのである。

『悔恨の波動』を使われてもある程度自由に動ける彼らは、当然ながら実際の戦いでの主戦力になる。一方で、二百五十人を超える人間が一気に集まってもまともな話し合いは望めない。

だから、まず彼らとの連携を取っておこうというリリーアの計算だった。

「では、これから『勲の詩』を歌います！

耳を澄ませて聞いていてください！」

それでも無強化で『悔恨の波動』に耐えるのは困難だ。そこで出

て来るのが、大人数を一気に強化できる、リリーアの『歌』である。

「~~~~~」

『勲の詩』は『勇氣の詩』の強化版だそうで、たしかに聞いているだけで勇氣があふれてくるような歌だった。これなら『悔恨の波動』もいくらか中和できるだろう。

ちなみに歌詞としては『勇氣の詩』の続きのようで、強さの証明のために少女が孤独に戦うという、聞いているだけで天使の鼓動が聞こえてくるような素晴らしい物だったが、まあそれはどうでもいい。

問題なのは、

「やった！」「オレ、正気だぜ？」「何が『悔恨の波動』だ！なんともないぜ！」「わたしはトラウマを乗り越えた！」「オレ、もう*いしのなかにいる*なんて怖くないぜ！」「リリーア様の歌の力をもつてすれば当然」「これなら勝てる！俺たちは勝てるぞお！」

時刻はもう『悔恨の波動』が放出される時間を過ぎたというのに、周り中から口々に喜びの言葉が聞こえるということだった。

「みんな大丈夫ですか？ 誰か、気分が悪くなった人は？」

その声を聞いて、歌をやめたリリーアが辺りを見回すが、少しづつらそうにしている人はいるが、全員が無事だった。倒れたり、叫んだりといった奇行をしている者もない。

予行演習は、大成功だった。

今回のメインイベントの成功に、誰もが、鋼すらも肩をなで下ろ

した瞬間だった。

「わあるういいいこおたあちいはああああ！！
いねがああああああああああああ！！！！」

やたら既視感のある登場台詞と共に、図書館の扉が開く。
そこには、大柄な影と小柄な影。

泣く子も黙るレメデス教師と学院長の登場だった。

第五十五章 連合の崩壊

「どうということなんですか?!」

鋼は交渉をリリーアに任せ、同じく交渉役をレメデスに任せてこちらの方にのんびり歩いてきた学院長に、小声で詰問した。

「いや、わしはなーんも知らんのじゃよ。」

レメデスの奴が話があるって言うもんじゃから、てっきりこの前最年少で転入試験に通った美少女転入生の話かとのこのこついてきたら、ご覧のありさまじゃよ。」

「最年少の、転入生?」

一瞬、頭の隅を耳のどがった少女の幻影が駆け抜けて、ハッと我に返る。

その話は気になるが、今は追及している場合ではない。

学院長が何も知らないとなると、事情を知っているのはレメデス一人ということになる。

鋼はリリーアとレメデスの話し合いを見守った。

「わたしたちは図書館でよからぬ計画をしてる者たちがいるって善意のタレ込みでここにいるだけだよ。」

それで、マリルリール。

お前たちは一体、ここで何をしてるのかねえ?」

「それは……」

リリーアが言葉に詰まる。

図書館で集会をすること自体は別に問題のあることではないし、学院長を倒して卒業資格を得る、というのも搦め手ではあるものの正当な手段だ。

だが、レメデスが『図書館でよからぬ計画』をしているという報

告を受けた以上、リリアは自分たちが集まった理由を話さなくてはならない。

かといって、素直に学院長を倒す計画を練っていました、と言えば、最低でもこちらは手の内をさらすことになり、数の利で学院長を攻めようとしたことが露見する。

最悪の場合ではルールが変更され、学院長との戦闘さえ難しくなってしまうだろう。

一体この窮地をどう乗り切るのか、みな視線がリーダーであるリリアに集まる。

高まるプレッシャーに、リリアは一度顔を伏せ、しかしすぐに顔を上げる。

「分かりました」

そう言っつてレメデスを見返すその目には、覚悟が宿っていた。

「わたしたちは……」

認めるのか、それとも……？

そんな風にみなが固唾を飲んで見守る中、リリアははっきりと言った。

「わたしたちは今この瞬間をもって、学院長に挑戦します！」

「え？」

誰もが、リリーアの言葉に呆気に取られた。

弁解するとか、正直に告白するとか、そんな選択肢はリリーアが全てぶつとばした。

レメデスや学院長はもちろん、味方ふくめ全員がその言葉に呆然とした。

「お、おい！ リリーア!？」

いち早く我に返った鋼は焦ってリリーアに駆け寄るが、一方のリリーアは楽しそうに唇を歪めていた。

緊張した様子で、しかし心底愉快そうに小声で鋼に返答する。

「大丈夫。今この場には五十人しか集まっていないけど、彼らは精鋭よ。」

わたしが当初考えていた三百人体制よりも、きっと今のメンバーの方が強い」

「そんなに、か……」

それはつまり、ここに集まった人間は少なくとも普通の魔術師六人分の實力を持っているということだ。

しかし少なくとも、全員が『悔恨の波動』に対する抵抗を持っている。これが大きな強みであることは鋼にも分かった。

「十分に連携が取れるほどの時間が取れなかったのは残念だけど、作戦は一応決まっている。」

今はそれよりも、事が露見して相手に対策を取られる方がつらいわ」

「なる、ほど……」

リリーアもきつと鋼と同じようなことを考えたのだろう。そして考えた結果、第三の道としてこの場で勝負を挑むことを選んだ。

ならばそれを尊重してやろう。鋼はそう考えた。

だが、

「なあるほど。だから図書館での秘密の悪巧み、ねえ。あんたらの考えてたことはなんとなく分かったよ。けどねえ、忘れたのかい？」

学院長に挑戦するなら、『学業の成果』って奴が必要だってことをさあ！」

その流れを、レメデスが断ち切る。リリーアが悔しそうに唇をかんだ。

それでもあきらめ切れずに、

「誰か、この中に……」

仲間の五十人を振り返って、何かを言おうとするが、

「ここは任せて」

鋼はそれを制して、前に出る。

「は、ハガネ？ あんた……」

背中にかけられるリリーアの声を無視して、レメデスの前に立つ。一度部屋にもどったりしなくてよかった、と鋼は思った。

もしもどっていたら、『これ』は置いてきてしまったかもしれない。

万感の想いを込め、

「レメデス先生。『これ』が僕の、僕たちの『学業の成果』です」

そう言って、連日図書館に持ち込んでいた『ある物』をレメデスに手渡す。

「こ、これは……」

渡された『それ』を開いて見た瞬間、レメデスの表情が変わる。

「そのノートは、一体なんなんじゃ？」

代わりに尋ねてきた学院長に、鋼は胸を張って答える。

「これは、レメデス先生が僕に出した課題です」

「なるほどのう。もしかして、わしにどうしても見せなかった勉強というのは……」

「これです！ 完成させるのに、四十日もかかりました！」

学院長は鋼の顔と、レメデスの手にある鋼の努力の結晶、書き取りノート？？？を見ると、うなずいた。

「ほむ、よろしい。わしはハガネが図書館で、必死にそれを書いているところを見ておるしな。

わしへの挑戦を許可しよう！」

その言葉に反応して、そこら中から歓声上がる。

振り返るとリリアアも、やるじゃない、みたいな視線を送ってくれた。

しかしその中で、一人だけ違う反応を示した者がいた。

予想外の物を出されて、さきほどまで呆けていたレメデスだ。

「待つてくださいい学院長！ これは……」

学院長の言葉に反応し、色をなくしたレメデスが、学院長につきみかからん勢いで制止の言葉を投げかける。

(まずい！)

学院長がノートを見たら、勝負が中止になる恐れがある。

鋼は焦ったが、

「くどいぞレメデス。生徒の努力に貴賤はない。

それにわし自身、この気概ある若者たちと戦いたくてたまらんのじゃよ」

幸いにも学院長は鋼の予想以上に勝負に乗り気だった。

レメデスにそう一方的に言い捨てるど、

「転移！」

その一言で、レメデスを除く、生徒五十人を全員レポートさせてしまった。

図書館の魔法無効化もおかまいなしである。

転移先は、学院の魔法演習場だった。

無人のそこに、学院長と、鋼たち学院生五十人、そして、

「なるほど。これが『血縄の絆』ですか」

『血縄の絆』の効果によって転移させられてきた、ラトリスが降り立った。

それを見て、鋼が唇を三日月形に押し上げる。

「ふふふ。学院長、あんたは大きなミスを犯した。

歩く労をいとい、安易に転移魔法を使ったおかげで、ラトリスという最強の……」

「ハガネ様。私は教師ですので挑戦資格が御座いませぬ。

外で戦いが終わるのを待っております」

「ですよー！」

最強の援軍は一瞬にして最強の傍観者に変わった。

そんな一幕はともかく、

「ほむほむ。数が多いのう。五十人ほどおるかの。

こんなに大人数での挑戦を受けるのは久しぶりじゃわい」
すっかりやる気になっている学院長が、腕を一振りする。

「……っ！」

すると時を置かず、魔法練習場がドーム状の青い膜に覆われた。

「結果、ね。たぶん性質は闘技場とほとんど同じ。

あの一瞬で、たった一人でこんな結界を張るなんて……」
リリーアが気圧されたようにつぶやく。

「ほむほむほむ！ この結界は、HPが0になるか気を失った者をHP1で外に出す仕組みになつとる。

じゃから、この結界の中からお主らが全員いなくなつたらわしの勝ち、ということだよいかな？」

「それで結構よ。わたしたちが、学院長を倒した場合は？」

「わしが倒ればこの結界が解除される。そうしたらお主らの勝ちじゃな。シンプルじゃろ？」

「そうね。とても、とても素敵だわ。

この青い鳥かごを壊して、わたしたちは自由を手に入れる！」

学院長の、好々爺然としていながらも獰猛な笑みを、リリーアは同じく好戦的な笑みで返す。

少なくとも戦闘前の舌戦では、リリーアは学院長に少しも負けてはいなかった。

「お二方とも、宜しいでしょうか。

では、僭越ながら、私が開始の合図を上げさせて頂きます。

一分後に勝負を始めますので、各自準備をお願いします」

一人だけ中立な立場にいるラトリスが、試合の審判を務めることになった。

結界の外から透明なまなざしで、中にいる鋼や学院長を見つめている。

学院長は準備運動を始め、リリーアは全体に号令を出した。

しかし目の前に対戦相手がいるため、おおっぴらに作戦内容には出せない。

三十秒ほどで指示は終わり、リリーアは最前列、鋼の方に歩いて

きた。

リリーアが鋼の背中辺りにぴたりと寄りそう。

「いい、ハガネ。」

戦闘開始の合図と共に、わたしは『勲の詩』を歌う。

あなたはとにかく、学院長に突っ込んで」

「指揮……とかしなくていいのか？」

鋼の疑問は当然だが、リリーアは首を横に振った。

「後衛は、付け焼刃の連携でもそれなりの効果を上げられるように作戦は立てたつもり。」

前衛に関しては不確定要素ばかりだし、作戦なんて元々通用するか分からないでしょ。」

同士討ちにだけ気を付けて、あとは各自の判断で攻撃でいい。」

それよりも、あんたは絶対倒れちゃダメよ」

「何でだよ」

それは鋼だつてそうやすやすとやられるつもりはないが、学院長の実力のほどは分からない。

あっさりやられることだつて考えられた。

それに対して、リリーアは鋼の想像よりもずっと真剣な声で答えた。

「この中でわたしは一番あんたの実力を信用してるし、あんた自身を信頼してる。」

前衛が何人やられても、あんたさえ立っていればきつとみんな勇氣を出して戦える。」

何よりわたしが、戦える。」

だから、たとえば他のみんなが全員倒れたとしても……あんなだけは絶対、倒れないで」

言葉の端々から、リリーアの信頼が伝わってきた。

自分の何を買われたのか鋼には分からないが、この信頼に応えなければならぬということだけは分かった。

だから、

「……分かった。約束するよ」

鋼はあえてそう口にした。

それが、とても困難な願いだということが、理解できていても。

「ありがとう……」

一瞬だけ、鋼の手がキュッとやわらかいものに包まれた。
しかし、それはすぐに離れる。

そして、

「一分が経ちました。準備は宜しいですか？」

……それでは、始めて下さい」

試合が、始まる。

学院長を中心に、半円状になった学院生たちは一斉に身構え、鋼は学院長に突撃するために足を蹴り出し、リリースは歌を奏でるために口を開く。

だが、その出鼻をくじくように、

「G I G I フラアアアアアッシュー！」

演習場に、圧倒的な閃光が走った。

「くそ、出足をつぶされた！」

目くらまし系にも耐性があつたのか、ちょっとまぶしいなと思つた程度の鋼だつたが、やはり攻撃のタイミングは逃してしまった。それでもすぐさま学院長に突撃しようとして、

「なに、これ。こんなの、ありえない……」

真後ろからの声で周りの惨状に気付き、動きを止めた。

「とつさに人を盾にするリリーアも、それなりにありえないとは思
うけど」

なんて減らず口をたたくものの、さすがに鋼もこれを異常事態だと理解していた。

「あれ、一発ネタじゃ、なかったのか……」

常ならぬ弱々しい声のツッコミが口からこぼれる。

頭の中に学院長、いや、G I G I の声がよみがえる。

『説明しよう！ G I G I フラッシュとは G I G I の体内の魔力を爆発的に爆発させることにより爆発したような爆発力を生み出す爆発技である。』

その範囲は半径数百メートルに及び、その範囲内にいる者は全員あつという間に昏倒する。

G I G I の百八の技の一つ、S S ランクの超必殺技である！！』

つまり、学院長に挑んだ五十人の精鋭たちは、

「いやー、しっかし……」

唯一閃光の影響を受けなかった鋼と、偶然その後ろにいたリリア以外、

「まさか本当に一瞬で……」

あの親切ぶっていたが裏のありそうなライルも、リリアの横にいたファンクラブ会長の女子生徒も、ピンク髪の狂信的リリアファンの男も、属性障壁を張れる研究家肌のレイスも、鋼の首に凶器を突きつけた暗器使いの少女サーシアも、例外なく、

「全滅、しちゃうとはね……」

全員が昏倒し、リングアウトさせられていた。

「こんな、こんなことって……」

リリアが、まるで抜け殻になったように呆然とその場に座り込

第五十六章 長い戦いの終わり

「しっかし参ったな……」

鋼としては、今回は足止めをするだけのつもりでいたため、学院長とガチバトルなんて想定すらしていなかった。

だが、後ろのリリーアは完全に使い物にならないし、なのにリリーアのために勝ってあげたいという気持ちはある。

「仕方ない。とりあえず枝レーザー！」

今一つ覇気に欠ける掛け声と共に、鋼の持つ枝から極太レーザーが出て学院長を襲う。極太レーザーの正体は、たぶんレーザーとは名ばかりの光魔法的な何か。

しかし、

「ふん！」

監禁部屋の壁すら壊した極太レーザーは、学院長のデコピン一発であらぬ方向に弾き飛ばされてしまった。

「おでこに当たってないのにデコピンとはこれいかに……」

鋼は早々に現実逃避の台詞を口走りながら、そこそこに焦っていた。

内心では、

（あれ？ これ、無理ゲーじゃない？）

みたいなことを考えていたのだが、リリーアの手前、弱音も吐けない。

「もういっちょ頼むぞ、相棒！」

鋼はそう叫ぶと、学院長の方目がけて木の枝を投擲した。

「ほむ？」

それは、学院長のはるか上を弧を描いて飛んでいき、その向こうに落ちた。

だが、それは鋼の計算通りだった。

「今だ、木の枝ブーメラン！」

適当な技名がつけられているが、単に木の枝を敵の奥に投げてもどる時にぶつかってもらうだけの非常に他力本願な技だ。

ばびゅーん！

忠実な鋼の相棒は、すさまじい勢いで鋼の手に向かって飛び、途中にいる学院長の背中に激突して、

「ふんぬらば！」

学院長の背中の筋肉に弾かれた。

「うそおー！！」

と鋼は声を漏らす、嘘ではなかった。

弾かれた木の枝は学院長に当たらないルートで鋼の手にもどってくるが、当然ながら学院長にダメージはない。

本職の前衛職であるマツシを倒した一撃は、学院長には全く通用しなかった。

むしろ余裕の表情で、

「ほむほむほむ。お主の力はこんなものか？」

なんて挑発してきている。

そして鋼の力はこんな物だ。というか、さっきまでの攻撃だって九割が木の枝パワーなのだ。

こんな怪物じみた相手と戦って、勝てるはずがない。

「下手すりゃ勇者級じゃないか、アレ」

それでもこの世界は滅ぶって言うんだから、魔王つてのは相当強いんだろーな、なんて現実逃避をしながら、打つ手を探す。

まあそうは言っても、全てを捨てる覚悟で挑んでも全く勝てる見込みがない、とまでは鋼も思わない。

とっさに思いつくのは、巨竜をぶっ潰したアレと、ダンジョンをぶっ潰したアレだ。

巨竜をぶっ潰したアレの欠点は、消費HPが100%なことと、終わるのに十日かかることだ。

消費HPのことは、もしかしたらリリアの歌スキルでHPを増やすなりして解決できるかもしれないが、もしそれを乗り越えても、そこから十日間、あの学院長にひたすらここで木の枝を振り続けるような生活が待っている。それは正直御免こうむりたい。

それにもっと現実的な問題として、たぶん十日間もリリアが我慢できないというのもある。リングアウトしたら負けのこの状況で、十日もここで過ごせるとは思えない。眠ったら気絶扱いになってリングアウトとか、必死に我慢してリングに留まった結果餓死、なんて結末はあまりに悲しい。

この勝負、鋼の勝利条件はリリアを守りながら勝つことだけであって、鋼だけが勝っても何の意味もないのだ。

となるともう一つの、ダンジョンをぶっ潰したアレ、ということになるのだが。

(結界あるし、意外と行ける、か?)

鋼がちよっとだけそんな風に思った時だった。

【だ、ダメじゃぞ、そんな物を使つては！
それではよしんば学院長を倒せても、学院は人が住めない場所になる！

核の冬が来るぞー！】

「あ、やっぱり？ 結界に阻まれるなら何とかなるかとも思ったんだけど」

【エゴじゃよ、それは！】

「ノリノリだな、シロニヤ」

神様からのストップがかかった。

それにしても、と思う。

シロニヤも昔は人間なんてどうでもいい、みたいなスタンスだったのに、変われば変わるものだな、と感慨深くなった。

もちろんこんなことを考えているのも鋼一流の現実逃避の賜物である。

しかし学院長は、鋼が種切れになったのを目ざとく見抜いたようだった。

「ほむほむほむ。そっちが来ないのなら、こっちから行っちゃうぞい」

宣言すると、なぜか学院長は着ているローブをはだけ、上半身を露出させた。

「ふんぬ！」

そして、気合の一声。

学院長の体が一回り大きくなる。

「いやいやいや……」

鋼は首を振った。

ローブの下の体は、毎日感謝の正拳突きとかしてそうなくらいムキムキだった。

「お主は魔法に抵抗力があるそうじゃからのう。

久しぶりに、肉弾戦などというものを楽しんでみちゃうかの。ほーむほむほむほむ！」

そう言っつて、鋼にすさまじい殺気を叩き付けてくる。

「では、楽しませてくれよ、若人！」

言っつなり表情を消し、攻撃姿勢を取る。

それを、鋼は何の動揺もなく見ていた。

その様は、さながら明鏡止水の境地。

なぜなら、鋼はすでに二つの結論に至っていたからだ。つまり、

(それ、無理)

こんな奴に絶対勝てるワケねー、という結論である。

魔法だけでも恐ろしいのに、こっちの攻撃は効かないし、おまけに肉弾戦とか言っつてくるし、明らかに歴戦の勇士みたいな雰囲気醸し出しているし、勝てる要素がまるでない。

(あー、でも倒れないっつて約束しちゃったし、せめて弁慶的に仁王立ちのまま気絶か死亡してリングアウトするか)

そんな風に鋼が悲壮な、けれど非常にせこい決意を固めた時だった。

「があくういいいんちよおおおおおおおおおおお
お！！」

空の彼方から赤い彗星がドップラー効果で青方偏移で真つ赤に叫びながら青い結界をぶち抜いた。

何を言っているか分からないだろうが、鋼もよく分からなかった。

一方、突然の乱入者の姿を見て、学院長は興が削がれた、とばかりに嘆息した。

「しつこいぞ、レメデス。見て分からんか？」

この仕合、今が良いところ……」

「そんなことは、どうでもいいのです！……」

「な……」

さしもの学院長も、レメデスの剣幕に一瞬たじろぐ。

いつも小言を言うレメデスも、さすがに学院長を怒鳴りつけるようなことはしない。

だが、レメデスはそれこそそんなことは些末なことだと言つように、学院長に迫った。

「とにかく、これをご覧になってください！

あなたならすぐに分かるはずですよ！！」

「し、仕方ないの。そこまで言うなら……」

学院長は渋々、レメデスが大切そうに抱えてきた物に手を伸ばす。そして、

「じ、れは……」

一目見て、絶句。

その後、何かに取り憑かれたようにページを手繰り、

「わし、の、五十年……」

目をぐるんと回転させて、その場で卒倒した。

「が、学院長？ 学院長おおおおお！！」

レメデスの絶叫が閑散とした演習場に響き渡り、同時に結界が解除される。

昏倒から目覚め、結界の外から戦いを眺めていたみなが呆気に取られる中、

「勝者、リリア・鋼連合」

ラトリスの静かな声が、戦いの終わりを告げた。

戦いは終わった。

しかし、結界の外で戦いを見守っていた人間は狐にままれたような顔をしているし、それは内側にいる人間も同じだった。

いや、当事者である分だけ、その混乱はなお深かったと言える。

「わたしたちの、勝ち？」

勝ったって、なに？

ぜんぜん、ワケがわかんない！

どう、なってるのよ？

一体、何が起こったのよ！！」

事態の推移についていけず、いつになく取り乱すリリアに、鋼はのんびりとした口調で告げる。

「まあ勝敗についてはともかく、とりあえず僕の卒業は確定したんじゃないかな？」

しばらく、その言葉の意味はリリアの頭に染み込んで行かなかった。

数秒経って、ようやく理解して、

「なに、言ってるの？」

信じられない物を見る目で鋼を見上げるリリアに、鋼は辛抱強く説明する。

「ほらアレ、見えるだろ？」

完成させるのに、思ったよりずいぶん長くかかったけどさ。僕の『学業の成果』が正当に評価されるなら、そういうことになると思うんだ」

そうしてリリーアがあわてて追った鋼の視線の先には、学院長が取り落とし、レメデスが必死で拾い集めるノートの束。

一冊30枚（＝60ページ）×7冊で、つまりは『400ページの本に匹敵する情報量』を持つ、書き取りのために『大陸共通語に訳された』とある文章があった。

そして、その一冊目。

表紙に『書き取りノート？』と書かれたノートの最初のページをめくると、そこには元になった本の書名が記されている。

すなわち、『聖邪魂滅の書』と。

第五十七章 概ねメロンの話

学院長に挑戦した次の日だった。

「で？ 説明はしてくれるんでしょうね？」

鋼の前に、仁王立ちになったリリーアが立ち塞がる。

学院長との戦いではあれだけ呆然としていたくせに、立ち直るとすぐこれだった。

「何を説明すればいいんだ？」

ちよつと面倒くさそうに聞く鋼に、

「全部よ、全部！」

と言い放つてから、全部って何をだよ、みたいな鋼の表情に気付いたのか、リリーアは仕方なく言い直した。

「そうね。まずは、あんたがどうして『聖邪魂滅の書』を読めたか
つてところからかしらね。」

あんた最初に本を見た時、ロゴスは読めないって言ってたじゃない！」

「いや、そんなこと言ってないって。」

ただ、あの本は『難しくて読めない』って言ったんだよ」

鋼は『聖邪魂滅の書』を見た時、そこに書かれている言語、ロゴスについては完全に理解できていたのだが、それが記している内容特に魔法の専門用語らしきものが全く理解できなかった。

だからこそ、この本を読めないのはまずいのかと思って焦ったのだ。

そもそも、全く知らない言語を見せられた時、普通は『難しい』なんて言葉は出て来ない。言葉が全く分からなければ、難しいも易

しいもない。単純に『分からない』である。

「待って。そもそも何であんたがロゴスを読めるワケ？」

「最初は翻訳の首輪の効果かと勘違いしてたんだけど、タレントの効果で、かな。」

神聖魔法言語とか、ロゴスとか、そういう古代の魔法言語が読めるみたいだ」

鋼は最初、『古代魔法言語習得』のタレントは神聖魔法言語を読めるようになる物かと思っただが、昔の魔法言語全てを習得していたらしい。

さすがの2000ポイントタレントである。

「でもあんた、最初の教本読めなかったじゃない！」

リリーアが叫ぶ。

実はその理由については鋼もしばらく思いつかなかったのだが……

「うーん。あれ、五百年前の奴なんだよな。」

たぶん新しすぎて無理だったんじゃないかと……」

「普通逆でしょ、それは！」

リリーアが憤慨する。

「……まあ、考えてみればおかしいとは思ったのよ。」

あんた、書き取りの課題をやってる時、筆記用具とノートしか持っていないかったものね。

だったら何を書き取ってるのかって、少しは疑うべきだったわ。

あんたが読めないとか言うからすっかり騙されたわよ」

「あははは。ま、僕にはよく理解できなかった『聖邪魂滅の書』が、大陸共通語に訳すだけならスムーズにできたのは僕にも予想外だったからね」

そこはもう翻訳の首輪の不思議なメカニズム、としか言うしかない

い。

「わたしとしては、数ある魔道書の中で、どうしてよりもよってあれを解読しようと思ったのか、そこもすぐ疑問だけど？」

なんて言ってくるが、そこは別におかしなところではないと鋼は思う。

「いや、自然の流れだと思うけど。」

ほら、よく知らないけど、未解読の魔道書なんてどこにあるか分からないし、そういうの探して変に目立ったり目をつけられるのも嫌だろ？

だからとりあえず学院長を待つついでに、目の前にあって訳し放題なあの本をやるのが無難かなって……」

「無難！？ 今無難って言った？！」

第一級の封印指定を受けていて、掛けられている魔術があまりに強力過ぎて閲覧なんて事実上不可能だからかるうじてあそこに置くことを許されている超危険図書を無難！？

あーあー、おかしいわね！

わたしっいたら急に大陸共通語が分からなくなっちゃったのかしら！」

「あ、翻訳の首輪貸そうか？」

「皮肉よ！！」

怒鳴られた。

「冗談なんだけど……」

鋼は少ししゅんとする。

やはりツツコミ役がたまにボケるとマジボケだと思われてしまう法則、のせいだろう。鋼はそうやって自分を無理矢理納得させた。

というかなぜだろうか。説明すれば説明するだけ、リリースが怒り狂ってきている気がした。

「いや、そんな風に言うけど、大変だったんだぞ、色々！」

下手にさわって壊したら大変だから、自分でページをめくれなくて、次のページを写すためには三十分待たなくちゃいけなかったり
し！」

『聖邪魂滅の書』は『悔恨の波動』の発動のため、三十分に一度ページがめくられる。

これは次を待つには長いし、別のことをするには短い微妙な時間である。

だからついゲームに集中して『三十分以上』狩りに没頭してしま
うと、その間のページがすっかり抜け落ちてしまうことになるのだ。

また逆に、三十分に二ページ（見開きで一ページ）進むというの
は、一時間に四ページ進むということ。一日は二十四時間なので、
計算すると一日に大体百ページくらい進んでしまうことになる。

具体的には、昨日の夕方には115ページぐらいでも、翌日の昼
には200ページ辺りまで進んでいたりする。だから、狙ったペー
ジを書き写すためには常にどのくらいまでページが進んでいるか把
握しておく必要がある。

そして、現在のページ次第では、授業をサボったり、作戦会議の
前日のように深夜まで起きている必要まであったりするのだ。

「あと、さすがにこんなの書いてるところを学院長に見せられない
し！」

最終的には見せることになってしまったが、何でも学院長は『聖
邪魂滅の書』を一部解読するのに五十年をかけたらしい。

プライド的な問題もあるだろうし、学院長がいるところでは鋼は
自分の作業の内容を見せないように苦労していた。解読作業が遅れ
た原因の一つである。

なんてことを、鋼は必死でリリアに訴えたのだが、
「あのね。もう何か、しゃべらないでくれる？ 頼むから」
「自分で事情を説明しろって言っというて!？」
「すごく理不尽に言論の自由を封じられた。」

その様子を見て、さすがに気の毒だと思ったのか、リリアは鋼を眺めながら、けだるそうに話し始めた。

「そうね。ちよつと想像してみて？」

あんたは友達と、八百屋の店先に並んだ超高級メロンを見て、いつかこのメロンを食べれるようにお互い頑張ろうね、って話すワケ」
「何の話？」

というか、この世界にもあるんだメロン、と鋼は思った。

「いいから聞きなさい。」

で、あんたは必死に努力しながらお金をためてくのよ。たまにはその友達と会ったりして、苦勞をぐちったり、でも同じ目標に向かって努力している人間がいるって分かって、元氣を分けてもらったりしてね」

いい話じゃないか、と鋼はうなずく。

「で、一ヶ月ちよつとがんばって、あんたはようやくメロンが買えそうなくらいお金をためて八百屋に行くんだけど、実はこの前のメロンはセール品で半額になってたのよ。」

つまり、お金が全然足りなくて結局買えなかったのね」

「悲劇だ!」

鋼はがっくりとした。

きつと見切り品だったのだらう。超高級なのに……。

「当然あんたは今のあんたみたいに、いえ、それ以上がっくりとなっつうなだれるでしょ。」

そしたら隣にいた友達が言うのよ。

『うーん。一緒にここの八百屋のメロン食べたかったね。でも念のためメロン農園を買ったから同じメロンなら食べられるよ。』

あはははっ

ってね。

で、あまりのスケールの違いにぽかんとしてるあんに、そいつはいかに自分が苦労して農園を手に入れたかとか話し始めるの。

……どう思う?」

試すような、うかがうような視線で尋ねてくる。

鋼だつてみんなのツッコミ役として、こつという時何を言えばいいかくらい弁えているつもりだ。

自信を持ってこつ答えた。

「無神経な奴だなー、そいつ」

「あんたのことよ!」
殴られた。

その瞬間鋼の腰についている木の枝が抗議するよつにぶると震えるが、

「ああん!」

リリーアがにらみつけると沈黙した。

ちなみに鋼の肩に乗っていた白猫は、とつくの昔に逃げ出して、ベッドの下で震えていた。

キャラが変わるほど恐ろしいオーラを醸し出しているリリーアを前に、鋼は必死で説得をする。

「ちょ、ちよつと待とう、リリーア！」

お前はアイドルだろ！ みんなの天使だろ！？」

今のリリーアではよくて撲殺天使くらいにしかなれないだろう。

しかし、そこでリリーアが顔をうつむかせているのを見て、鋼はさらに動揺した。

「あ、あの、リリーア？」

おそろおそろ鋼が呼びかけると、

「……だって、バカみたいじゃない。

わたしは、同じ目的に向かって頑張ってるって思ってたのに、あんたは……」

言葉と一緒に、怒っていたはずのリリーアの足元に、ぽたり、ぽたりと滴が落ちる。

鋼は必死になって言葉を紡いだ。

「いやいや！ 頑張ってただろ、同じ目標に向かって！」

僕が解読を頑張ったのだって、抜け駆けとかじゃなくて、ただクリステイナの代わりをやるうと思っただけだぞ！？」

「クリステイナの、代わり？」

「そうだよ！ クリステイナの新魔法を理由に学院長に挑戦するつもりだったんだろ？」

だから僕が、本を解読してその代役を務めようと思っただけで、抜け駆けとかそういうつもりじゃ……」

鋼の必死さが伝わったのか、リリーアは少し笑ってくれた。

「……分かってるわよ、バカ。

あんたは手段が壊滅的に破天荒で常識皆無なだけで、本当は人助けが好きないい奴だってことくらい」

「いや、分かってないだろ、それ……」
必死さ以外は伝わってない気はしたが、鋼はほっと胸を撫で下ろす。

「……ハガネ様」

すると、まるでタイミングを計ったようにラトリスが現れる。
ラトリスは鋼にいくつかの紙の束を渡してきた。

「これは……？」

鋼が尋ねると、

「はい。ハガネ様の卒業証明書と特級魔術師の認定証です」
ラトリスはあっさり答えた。

「と、特級!？」

リリーアが後ろで大声を上げていたが、卒業してこの学院を出られるなら、鋼としては特級だろうが一級だろうが二級だろうが関係ない。

それはとりあえずスルーして、

「それで、学院長は？ あれから、大丈夫だったのか？」

「はい。肉体的には問題ないそうです。」

ただ、精神的なショックを理由に現在は療養中、レメデス様も付き添っています」

「そうか」

一番心配をしていたことが聞けて、鋼は少し安心した。

「証明書をもらえたってことは、これでもう出ていけるんだよね？」

「はい。私も先程職を辞して参りました」

「……よく簡単に許可が出たな」

鋼が呆れながら言うと、

「もともとそういう契約でしたし。相手は弱っていたのでちよろい物です」

「ちよろいって……」

ラトリスはしれつと答えた。

『血縄の絆』のことといい、何だか最近、シロニヤだけじゃなくてラトリスまでちょっと変わってきている気がする鋼である。

と、鋼はそこで大事なことに気付いた。

「そういえば、リリーアは？」

そう言っつてリリーアを見ると、彼女はツンと顔を横に向けた。

「わたしはもうしばらく、この学院でやっていくわ」

「あれ？ 一応あの勝負、勝ったことになったんじゃ……」

条件は、学院長に勝った時にその場に立っている者、だったので、該当者は鋼とリリーアだけなのだが、少なくともリリーアは望めば一級の資格をもらえたはずだ。

しかし、リリーアは傲然と胸を張った。

「わたしは他人のメロンなんかに興味はないわ。

時間はかかるかもしれないけど、わたしは自分の力でここを卒業する」

「……そつ、か」

そうなると少なくとも、リリーアとはここで別れることになる。

もちろん一緒に冒険者をやるつもりでもなかったのだが、急にお別れとなると、鋼としてもやはり込み上げてくる物があった。

「そんな顔するんじゃないわよ。

……ほら、これ」

鋼は小さい紙を渡された。

なんだろうと顔を上げると、

「それ、わたしのクリスマス公演のチケット。もう二度と会えなくなるってワケでもないでしょ。

……イブの夜、またここに来なさいよ。最高の歌、聞かせてあげるから」

そう口にしたリリーアの顔は、ほんのりと赤らんでいた。

「……ああ。ありがたく、受け取っておくよ」

鋼はそれを大切な宝物でもあるかのように、そっと押し頂いた。

それを確認すると、

「それではハガネ様。早速出発しましょう」

ラトリスが出立を急かす。

「え？ もう行くのか？

別に今日じゃなくても……」

あまりの展開の速さに洩る鋼。

しかし、ラトリスの次の一言が、鋼の決断を促した。

「いえ、門の外で、待っている者がおりますから」

「あんたがいなくなってせいせいするわ！

せいぜいまた来なさいよね！」

なんて涙ぐみながらよく分からないあいさつをするリリーアに別れを告げ、

「んー！ 久しぶりに学院の建物を出た気がする！」

鋼は久方ぶりの自由を満喫していた。

が、そこに、

「お言葉ですがハガネ様。まだここは学院の敷地内です」

「え？ そうなの！？」
いつでも冷静なラトリスが水を差す。

「学院の敷地を外れるのは、あの門を抜けてからです。
ほら、見えますでしょう？」

あの、門ですよ？」

ラトリスが念を押すように言うが、鋼には当然見えていた。

「ハガネ！」 「コウくん！」 「コウ様！」

門の前で鋼の名を呼ぶ、懐かしい仲間の姿が。

「アステイ！ ララナ！ ミスレイさん！」

矢も楯もたまらず、鋼は門に向かって駆け出していった。

「久しぶりだな、ハガネ。」

ええと……十年ぶり、くらいだったか？」

「まだ四十日ぐらいしか経ってないよ、アステイ。」

……十年ってさ、けっこう長いんだから」

「夢にまで見た生ゴワ……コウ様！」

さ、さわっても、さわってもいいですか！？」

まだ門をくぐらない内からの熱烈歓迎ぶりだ。

一人若干方向性に疑問を覚えたが、まあ気にしない。

鋼が門を出ると、三人は我先にと駆け寄って来てくれた。

「すまないな。私は入学して潜り込もうかとも思ったが、学業は…

…つむ、ちよっと相性がな」

アステイがすまなそうにそう言えば、

「あっははは。ボクは魔法だけはあんまり得意じゃなくなってるね。魔

力低いしき。

ま、すぐにお務めを終えてくれて助かったよ！」

とララナ（魔力81）が笑って、

「わたしは、（ゴワゴワ教の）布教活動が忙しくて……」
と態度だけは申し訳なさそうにミスレイが言う。

いつものメンバーになった五人は、夕日に向かって歩き出す。
先頭のララナが振り返って叫ぶ。

「さあ行こう！ ボクたちの冒険は、まだまだ始まったばかりだよ

！」
「それむしろ終わりの台詞だから……！」

ララナの確信犯的な台詞にツツコミを入れながら、

（やっぱり、僕の居場所はここなんだな……）

なんてことを、鋼は噛み締めたのだった。

とまあ、それで終わればよかったのだが、

「あら？ コウ様、その猫……！？」

肩に乗っていたシロニヤを見咎め、ミスレイが大声を上げた。

「にゃっ！」

それですっかり怯え癖のついたシロニヤは、大慌てで鋼の肩を蹴
って地面に降り、

「おわ！」

ミスレイの言葉にちょうど振り返ろうとしていた鋼は、後ろのミスレイ目がけて思いつ切りバランスを崩してしまつて、

むによん！

その途端、顔に当たる、何かやわらかい感触。

「こ、コウさ…！」

めずらしく焦つたようなミスレイの声。

そして、

「お、っと?!」

鋼はさらにバランスが崩れるのを必死で止めようとして、

むにゃん！

何やらやわらかい物をわしづかみしてしまつた。

「あれ？ これ……」

むに、もにゃん！

というかあまつさえ、もみしだいてしまつた。

「はじめて見た！ これが伝説の『ラッキースケベ』か！」

「不埒な！ ……とはいえ私にはあまり、幸運とも思えないが」

そこで、鋼はハツとした。

『幸せの青い鳥』の童話を思い出す。

（そうか。わざわざ探しに行かなくてもよかったんだ。

苦労してお金をためたり、八百屋に行ったり、農園を買わなくてよかった。

本当の幸せは身近な場所に、仲間のところにあっただい！）

という感じで、綺麗に収まらないかなあ、と、

「コウ様、さようなら。来世でまたお会いしましょうね？」

目の前で腕を振り上げる戦神の化身を見ながら、鋼は思ったのだ。
った。

ちなみに、その翌日。

「コウくん。やっと、やっと追いついたよ。
わたしが、今、会いに行くからね……」

最年少、たったの12歳で転入試験に受かった黒髪黒目の少女が
魔法学院に足を踏み入れるのだが、それは全くの余談である。

第五十八章 枝猫、相搏つ！！

ある朝、結城鋼が目を覚ますと枝になっていた。

「それはともかく、とりあえず顔を洗うか……」

鋼あらため枝は起きて顔を洗おうとするが、

「洗えない……！！」

顔を洗うどころか、そもそも起き上がることが困難だった。

「しかも、顔がどこか分からない……！！」

洗顔の困難さが一層高まった。

「……まあ、ついでにシャワー浴びると思って全身洗えばいいか」
寝起きの鋼はアバウトだった。

鋼はコロコロと転がり、とりあえずベッドから降りようとするものの、その前に、コツン。何かにぶつかった。

「あれ？ 僕、何かベッドの上に置いてたっけ？」

そう思って、鋼が自分の顔？をそちらに向けてみると、

そこには、女神がいた。

そこにいたのは、まさに美の化身。

痩せ型の体型ながら、理想的な凹凸、つまり出るべきところは出て、くびれるべきところはくびれ、特に体の先の方、小股のキュツとしたたずまいが艶美とも言えるセクシーなラインを作っている。しかしそこから足先にかけてはまるで若木のように青々しく、彼女がいまだ発展途上であり、これからさらに躍動するための伸び代を残していることを感じさせる。

美しいのはスタイルだけではない。その肌の質感も完璧で、他のものように乾ききってカサカサになっているワケでも、あるいは雨で火もつかないほどにびしょびしょになっているワケでもない。何もしなくても完璧に手入れされたような、そのしつとりと手になじむ理想的な肌は、おそらくさわるだけでその者を楽しませることがだろう。

その姿は、まさに『傾城』。いや、『傾国』。

いやいや、その美は城でも国でもまだ収まらない。

彼女なら、世界すら傾けることができるだろうと、鋼は思う。

なればこそ。

その姿は、さながら『傾世』、すなわち『ワールドエンド』。

それだけの圧倒的な美を、鋼は彼女に感じたのだった。

自然と、鋼は感嘆と酸素交じりの吐息を漏らす。

「綺麗、だ……」

女神を目にして、ほんの数秒。

しかしそのほんの数秒で鋼はその美貌に魅了され、そして強烈に思った。

「彼女を握ってみたい」と。

その邪念を見透かしたように、鋼の目の前で彼女が動く。

鋼とは比べ物にならないような、滑らかな動き。

「あつ……」

鋼の体は彼女に一瞬で絡み取られる。

木肌と木肌、節と節が絡み合い、まるで口づけを交わすように、体の中心が一瞬だけ交わって、

「え？」

鋼は彼女が何かを言ったような気がして……。

鋼は、ハッと目を覚ました。

「ええと……？」

何が起こったかと自分の体を見ると、そこには当然人間の体。

ただし鋼がよく見ると、木の枝が自分の体の上によりかかるように乗り上げていた。

「夢の原因は、これか……」

鋼は苦笑した。

同時に、普段とは違うことが起こったためにあんな夢を見てしまったのだろう、と納得する。

ちなみに、鋼は寝る時に木の枝を手元に置かない、というワケではない。

むしろ自衛のための武器として必要だし、枝自身もなんとなく鋼に身に付けられているのを好んでいるような気がするので、よくベッドの上に載せておいたりするのだが、朝が来るといつの間にか寝

ぼけたシロニヤによって下に落とされているのだ。

その後、枝がいたはずの鋼の横のスペースで鋼にぴったりくっついて眠っていることもふくめ、神様でもやっぱり猫なんだなあ。鋼は見る度にほほえましい気持ちになる。

しかし、そのシロニヤも今はいない。

何でも、

「ちょっと大技を使いたいから、五ターンほど力をためてからまた来るのじゃ！」

ということらしく、昨夜くらいからオラクルにも応じなくなった。五ターンって意外と長いんだな、と思いつつ、口うるさい白猫のいない時間を、鋼はそれなりに楽しんでいた。

「コーウ、くーん！ あつそつぽー！」

さらに、扉の外からララナの能天気な声が聞こえてきた。

「ああ、そういえば今日は、冒険に出るんだったな」

昨日、みんなが再集結した記念に適当な依頼をこなしてみようという話になったのだ。

依頼主はミスレイで、ランクフリーのクエストだと言うから、どうせろくなものにはならないと思うが、フルメンバーで依頼をこなすなんて初めてなので、鋼は結構わくわくしていた。

「今日も頼むぞ、相棒！」

そうやって、鋼は自分の相棒である木の枝、つまり、『伝説の』

『名状しがたき』『殺戮好きの』『もの凄く嫉妬深い』『鋼愛主義』

の『名を呼ぶことも恐れ多い』『最近相棒の呼び名が定着して嬉しい』『綺麗って言われて狂喜乱舞している』『ハガネ様専用の』

『どんどん成長しすぎて背まで伸びてきた』『世界創造の』『最近猫が天敵な』『もちろん魔道具としても使える』『正直やりすぎた』

と今は反省している』『変化の』ただの木の枝『ワールドエンド・ブランチ』 + 33699を手に、外に飛び出していくのだった。

「ええと、今日の目的地、もう一度言ってもらえますか？」

「はい。わたしたちの神様、『光の女神ルウィーニア』様が建てたと言われる、『ドール・ア・ガーの塔』が今回の目的地です。

あら？ どうかされましたか？」

「あの、なんかちょっと既視感が……」

鋼はそう言って、ちよつと頭を抱えてへたりこんだ。

鋼が宿屋から出るとすでに鋼以外の仲間全員がそろっていて、すぐに門を出てから出発、ということになったのだが、ミスレイから目的地を聞いた途端、鋼は頭の痛い思いを味わった。

ついでに言っておくと、昨日あんなことがあった割にミスレイの態度は、普段通りだった。

というか冷静に考えてみると、鋼に毎回「あててんのよ」的な迫り方しておきながら、今さらあのくらいでうるたえるはずがない。おそらくノリというか、一応怒っておくかというポーズだったのだろう。

「あの……」

それより今は質問を、と鋼が教室でやるように軽く手を上げると、

「きゃっ！」

ミスレイがかわいらしい声で悲鳴を上げて、鋼から飛びのいて距離を取った。

「え？ あれ？ まさか……」

鋼が目を丸くしてミスレイを見ると、ミスレイは胸をかばうように両手で自分の体を抱き、こわごわと鋼を見つめている。

どうやら気にしていないかのように見えたのは表面だけで、あの事件は実は結構根深くあとを引いているらしかった。

「え、えーと……」

しかし、ここで謝るのもさすがにおかしいし、と鋼が困ったところ、そこはミスレイが察してくれた。

「あ、コウ様、何か質問ですか？ ど、どうぞ」

「は、はい。すみません」

何だか会話が上滑りしているが、これはもうしょうがない。

「あの、ルウィーニア様を作ったって言いましたけど、その時に何を参考にしたとか……」

鋼が尋ねると、さすがは神官、ミスレイがすらすらと答えてくれた。

「それはよく分かっていません。

けれどこの世界の神の多くは元々は外来の神。

というより、かつてはどこか別の世界に存在していた神様がこの世界を創り、その後こちらに根付いた、というのが神学者たちの意見です。

もしかすると、神々が元々住んでいた世界にあった何かを参考にしたのかもしれませんがね」

間違いなくそれだった。

しかしそうすると一つ疑問が……。

「でも、魔法学院の神話の授業では神様の誕生譚とか聞きましたけど……」

鋼がそれをぶつけると、ミスレイはあっさりと答えた。

「ああ。それは神本人が神学者や歴史家に教えたり、自伝を書いたりして伝わった物です。」

だからやけに美談だったり神がかっこよく書かれすぎてたりするんです。ほんとあの人らにも困ったものですよ」

「そ、そうなんですか……」

かなりのレベルの暴露話に、鋼としては固まる他なかった。

神を信じている人にとっては相当ギリギリな話題が続いたような気がするが、だが逆に、それでミスレイの雰囲気はほぐれた。

「それで、件の『ドル・ア・ガーの塔』とはどんな場所なのだ？」
それを感じたアステイが、ミスレイに質問する。

「まるで遊園地のような場所ですよ。」

中にはたくさんのスタッフ（モンスター）がいて、盛大にお出迎えしてくれます。

しかも各階趣向を凝らしたアトラクション（罠）があつて、お客様を飽きさせないんです。

さらにさらに、謎解き要素があつて、それを解くとなんと金や銀の宝箱からアイテムがもらえたり、下の階でちゃんとアイテムを手に入れとかないと上の階で詰まったりと攻略要素たっぷりです。

とにかく、楽しいところですね」

「そうか。謎解きは、苦手なのだな……」

ツッコミどころ満載の会話をする二人。

そこで元気よくララナが手を上げる。

「はい、先生しつもん！ その塔ってやっぱり六十階まであるんですか？」

「昔は六十階建てだったんですが、女神様が増築されて今は百二十回建て。その最上階にはなんと、かの英雄ベルアード様に女神様が

贈ろうとして断られた伝説級のアイテムが眠っているとか！」

それを聞いて鋼は、今何か嫌なフラグが立ったな、とか思ったのだが、ララナは微塵もくじけない。

「じゃあもう一個しつもん。入るのに何か資格とかは必要ないんですか？」

「それはこちらで考えているので大丈夫です。

とりあえずこの、BCR、正式名称ブルークリス……」

「ストップ！」

鋼は大慌てで手に持った何かを説明しようとするミスレイを制した。

塔だけでももうギリギリアウトぐらいのネーミングなのに、ミスレイの手に握られている細長い何かは見るからにそのまんまだった。そういえばさりげなく初登場時にも持っていた気がしたが、そういう伏線の回収はいらんのである。

「それでは他に質問がある方はいらっしやいませんね。

それなら一つだけこちらから確認して、それで終わりにすることとしましょう。

「……コウ様」

「え、僕？」

予想外なところで話を振られて、鋼はうろたえた。

いや、しかし昨日の件とは関係ないのだから毅然としていれればいいはず、とミスレイに向き直って、

「あ、あの、男の方というのはその、あのように荒々しい行為を好むんですか？」

「一体何を確認しようとしてんの!?!」

ほおを真っ赤にしながら聞いてくるミスレイに、全力でそうツッコんだ。

「というか赤くなるくらいなら聞かなきゃいいのに」と鋼は切に思った。

「いえ、やっぱり神のシモベとして、そして何よりもゴワゴワのシモベとして、コウ様の胸への偏愛も受け入れるつもりはあるんですよ?」

「でも、毎回ああも激しいとやっぱり」

「あれ、事故ですからね!?! 単なるラッキースケベですから!」
鋼は必死で火消しに回るが、

「あ、やっぱり胸にさわられてラッキーって思ってたんだ」

「余計なこと言うなよおおおおおおお!?!」

ララナに言葉尻を捉えられ、混ぜっ返される。

そして、ミスレイからのさらなる追撃。

「あ、それと、あのあとわたしの二つ名が『メロンちゃん』になっていたんですけど、これって……」

「行くう! すぐ行くう! 即座に行くう! いぎ! 『ドール・ア・ガールの塔』へ!?!」

すぐ行くことになったらしい。

こうして、鋼たちはふたたびトーキョの街から出発、一路『ドル・ア・ガーの塔』へと向かった。

ちなみになぜ出発地点がトーキョの街かというと、ラーナ魔法学院とトーキョの街はひどく近かったのだ。

例えるなら、修学旅行中に生徒がバスで移動できるくらいの距離しかなかったのである。

名前の音から来るイメージって、真実をくもらせるなど鋼は思ったくらいだ。

最初の話し合いからは想像もできないほど、旅は順調に進んだ。

疲れたから、と鋼が近くで見つけた『回復の泉』に入っていたり、

「ふうー。極楽、極楽。疲れた体に染みわたるう！」

「コウくん。さすがのボクでも、毒の沼に入ってその台詞はひくよ？」

「これはいいドーピングフィッシュスープの材料になりそうですね」

途中遭遇したモンスターにアステイが千切りとかいう新技をしかけたり、

「ふっ。言っただろう？ 私の千の斬撃が、今からお前を千枚に下ろしてやるよ」

「斬撃千回なら、最低でもモンスターは千一枚になってると思うけど」

「なにっ!?!?」

対抗心を燃やしたララナがモンスターに技をかけて一瞬で灰に変えたり、

「食らえ！ 我が必殺の、殺・劇……ああっ！ 弱すぎてコンボが続かない！」

「私が言えた義理でもないが、お前はモンスターに謝った方がいい」「というか、コンボ続かなくてよかった。版的に」

ならわたしも本気を見せます、とミスレイがやけに張り切ってみたり、

「見て下さい！ いつもよりたくさん光っております！」

「な、なんと神々しい光！ これがワンオフトラレント『神がかり』か!?!」

「いやこれ、昨日コウくんしばくのに使ってた奴だよね…?」

触発されて、普段冷静なはずのラトリスまでがあらぬ方向に張り切りだしたり、

「ちょ、何でおもむろに服を脱ぎ出すんだよ！ ストップストップ！」

「ご存知ないのですか？ 忍者の本気＝全裸です。それに八ガネ様の呆れの視線が、何だか私の力になるような……」

「アーマークラスと一緒にSAN値まで下がってるよ!!!」

とにかくにぎやかに行軍をしていた。

そして、何回目かの休憩の時だった。

【コウ！ おぬしの近くに、聖なる泉があるはずじゃ。

「ちょっとそこまで、一人で来てほしいのじゃ！」

突然、今まで音信不通だったシロニヤからのオラクルが入る。

「いきなりどうしたんだよ、今は旅の途中で……」

【あまり説明しとる時間がないのじゃ！

できれば枝の奴も誰かに預けて、一人で泉の方まで来るのじゃ！

「仕方ないな……」

何か切迫しているのはたしかなようだ。

鋼はシロニヤの言う通りに枝を預け、一人で泉があるという方向に向かった。

怪しまれるかとも思ったのだが、

「皆様。男が一人で森の中で用事を済ませると言うのです。

察して上げて下さい」

ラトリスの一言で追及は収まった。

ちなみに、

「ふむ。秘密の鍛錬か？」

まったく分かっていないのが一人。

「あー、そうだよね。ごゆっくり」

苦もなく察したのが一人。

「ま、まさかわたしの胸が魅力的すぎたばかりに？」

脳内ピンク色なのが一人。

まあ実はどれも違うのだが、鋼としては好都合だった。

シロニヤの指示に従って、聖なる泉に着くと、そこには、

「そ、その、この姿ではひさしぶりなのじゃ。

あ、会いたかったぞ、コウ」

完全な形で顕現した、シロニヤの姿があった。

ひさしぶりに見た十二、三歳の少女の姿のシロニヤに鋼は近付きながら聞く。

「どうしたんだ、その格好？

というか、こっちの世界に出て来れるのか、お前」

鋼の質問に、シロニヤはちよっともじもじしながら答えた。

「う、うむ。本当はなかなかこっちに来るのは難しいのじゃ。

だから力をためて、短い間だけ、しかもこの聖なる泉で顕現したのじゃ」

「なんでまた？」

どうやら少女の姿でこちらに来るのは負担のようだ。

よっぽどの理由があると鋼にも察せられた。

「た、単刀直入に言うのじゃ！

こ、コウよ！ ワシの使徒となってくれ！！」

「……は？」

シロニヤの突然の言葉に、鋼は口を半開きにした。

「し、使徒と言っても、そう大したものじゃないのじゃ！

特別な仕事とかは頼むつもりはないし、とりあえずワシの祝福を受けてみんか、という話なのじゃ！」

「祝福？」

シロニヤは何かに怯えるみたいに早口で説明した。

「初めに会った時、言ったじゃろ？ 神様は、気に入った者の魂を自分の元に連れてくる、とか、そんな話じゃ。」

祝福とはそれと似たものなのじゃ。神からの祝福を受け使徒となった者は、死後祝福を受けた神の下にやってくる。そこでその神に仕えたり、転生してべつの世界に送り込まれたりするのじゃ」

「……デメリツトは？」

それは、人にとっていいこと尽くめにしか聞こえない。
だから鋼はあえて、それを聞いた。

「一度くらいならば大丈夫なのじゃが、何度も転生を繰り返したりすれば、その性質は人から外れ、神に近くなる。」

因果律の影響を受けるようになるし、普通の死に方ができなくなる場合もある。

異世界勇者などが、この典型じゃな」

「クロニヤ……」

鋼の頭に、一人の少女の姿が浮かぶ。

彼女は喜怒哀楽をほとんど示さず、名前すらなくしたと言っていた。

使徒となった場合、それが鋼の未来になるかもしれないのだ。

「し、心配せんでも、神の祝福は一度きり。もし二度目の転生をした場合、そのあとまたワシの使徒となるかはおぬしの自由意思に任せるのじゃ！」

「それは、ありがたいけど……」

そんなに鋼に都合のよい条件でいいのか、とは思ってしまふ。

「こ、これがワシのワガママじゃと分かってはいるのじゃ。」

じゃが、おぬしはこれまでも、ギリギリの戦いをしてきた。

どんな苦境も笑いながら乗り越えて来たのは知っておるが、命を

落としてもおかしくないような場面はいくつもあった。

ワシは、おぬしがいなくなってしまうのがこわいのじゃ。

だから……」

シロニヤがすぎるように鋼を見る。

元より条件に文句はないのだ。

ここで動かない理由は、鋼にはなかった。

「分かった。頼むよ」

「コウー！」

シロニヤの顔が、ぱっと明るくなった。

「ちなみにじゃが、使徒化 死亡 転生というこの一連のプロセスを、ワシらは使徒新生と呼んでおる」

「嘘つけー！」

どんな時でもツツコミを忘れない鋼も偉いが、どんな時にもオチを忘れないシロニヤも結構偉いかもしれなかった。

シロニヤに言われて泉の正面までやってくる。鋼は、泉の中のシロニヤと向き合うような配置になった。

「それなりの至近距離で鋼と見つめ合ったシロニヤは、顔を真っ赤にして、

「そ、その、祝福を行うには呪文詠唱が必要なのじゃ。

一度しか言わないから、よく聞くのじゃぞ！」

そして、たぶん鋼が見た中では一番真剣な顔で、呪文を唱え始め

た。

「イサ・ダーク・テイーニーヨ・シツイトツ・ズモラ・カレコ・ス・デキース・イダガ・トコノタ・ナアド・ケイナーエイ・テツヤチーレ・テモ・ツイー!!」

鋼が現代で見ていたアニメにも、ノモブヨ……なんちゃらとか長い呪文を唱えている物があったが、ああいうのはどうやって思いつくのだろうか。

それっぽい言葉をつなぎあわせているのか、実は暗号にでもなっているのか、それとも何か出典があるのか、なんてことを徒然なるままに考えていると、どうやら詠唱は終わったようだ。

「さ、最後にちょっとした儀式をせねばならん！」

だから、そこにひざまずいて少しの間目をつぶるのじゃー！」

「はいはい」

鋼はもちろん最後まで付き合うつもりでいた。

何が起ころうかは分からなかったが、素直に泉の前でひざまずいて目をつぶる。

すると、泉の水がかき分けられる気配。

続いて、鋼のほおに、シロニヤの小さくて冷たい手が当てられて、

「コウよ。おぬしは死んでも、必ずワシのところにもどってくるの

「じゃぞー！」

「…んっ?!」

言葉と共に、唇にやわらかい何かが触れた。

鋼があわてて目を開けた時、シロニヤはすでに大慌てで鋼から離れて、

ばしゃーん！

盛大にどこかのポケオンみたいな音を立てて、泉の中に転んだところだった。

鋼の手によって何とか泉から生還したあと、半泣きになって服から水を絞りながら、シロニヤは言った。

「ちょ、ちょっとこっちの世界に干渉しすぎたせいで、しばらくこちらにはもどって来られそうにないのじゃ。

たぶん、オラクルも使えないじゃろうと思う。

じゃからコウ、その前に一つだけ言っておかなくてはならないことがある」

「……何だ？」

「浮気は、ぜーったいダメなんじゃぞー!」

「はっ？」

予想の斜め下の台詞に呆然とする鋼に、シロニヤはまくしたてる。「神の祝福は多重にかけられるのじゃが、死んだ時に引き寄せられるのは、最後に祝福をかけた神様の物が優先されるのじゃ！」

「じゃから、この後でワシ以外の神から祝福を受けたりすれば……」
その台詞つてむしろ、僕がこれから他の神様に寝取られるフラグなんじゃないか、とか鋼は思ったりしたのだが、さすがに口には出さない。

「コウ！ 大事なことじゃぞ！ ちゃんと聞いておるのか！？」

「あ、ああ。分かった、分かったよ！」

変な神様には引つかからない、大丈夫！」

これ以上小言を言われてはたまらない。

鋼はいそいでそう返事をした。

「不安じゃのう。」

おぬし、女性関係にはフラフラしておるのを乗り越して色々引き寄せとるふしがあるし……。

『ハーレム系主人公体質』なんてタレント、作るのではなかったのじゃ……」

なんて最後まで言いながらも、今日は木曜日じゃし、ゲーム屋でものぞいていくかの、と結構余裕なコメントを残してシロニヤは消えていった。

「シロニヤも心配性だよな。」

神様となんて、そうそう出会うはずなのに……」

鋼はそうこぼしながら、仲間のところへ歩き始める。

女神ルウィーニアの作った塔、『ドール・ア・ガーの塔』はもう
すぐだ！

第五十九章 辿り着いた先は

「これが、『ドール・ア・ガアの塔』か。

……って、何もないんだけど？」

ミスレイが案内した、『ドール・ア・ガアの塔』の場所には、何もなかった。

それに、周りを見渡してもどこにも百二十階建ての塔なんて見当たらない。

これはどういうことか、と鋼がミスレイを振り向くと、ミスレイはなぜかドヤ顔でこっちを見ていた。

「ふふふ。コウ様、何か困っているようですね」

「主にミスレイさんが困らせてるんですけどね?!」

この人絶対理由知ってるな、と鋼は確信した。

「それではコウ様。ちょっと金ぴかになって頂けますか？」

「え？ 藪から棒に?!」

ミスレイの奇行には慣れていている鋼だが、この要求は意味が分からなかった。

「実はこの『ドール・ア・ガアの塔』、他の神様から、『でかくてウザイ』『なんか成金趣味、ほあああああ!』『男にふられたからってこんな高い塔を建てちゃう女の神ってwww』などと散々言われて以来、条件が整わないと現れない仕組みになっているんです」「神様社会でもイジメってあるんだ……」

そして光の女神で戦の神が標的にされるっていうのもちょっとびっくりだった。

「いえ、イジメというより単なるじゃれ合いみたいな物ですけど、

だからこそルウィーニア様も意地になっちゃって、じゃあ邪魔にならないようにしてあげるわよ、とか何とか、条件がそろわないと塔の入り口は現れず、塔を一階クリアすることに次の階が現れる仕組みになったんです」

「その条件って？」

「BCRを持った神官と、金ぴかの男がそろっていることです！」

「……そうですか」

「あ、でも、最上階がどこにあるかだけは分かりますよ。

あそこ、上の方に小さな箱があるの、見えますか？」

鋼は目を凝らしてみたが、何も見えなかった。

「んー、見えないですね。ミスレイさんには見えるんですか？」

「いやですね、コウ様。そんな遠くの物、見えるはずないじゃないですか」

「……………」

こいつまた胸もんでやろうか、と鋼はちらっと思ったという。

いけない、発想が性犯罪者だ、と反省した鋼は、ミスレイに真意を尋ねようとしたが、

「あー、ボク見えるよ。赤と金色の装飾が入った小さな宝箱があるね」

その前にララナがそんな声を上げる。

「お前、そんなの見えるのか？」

「あつはは！ ボクの視力は53万だよ？」

酔っぱらいの戯言じゃなかったのか、いや、いくらなんでも……と鋼は葛藤したが、本題はもちろんそこではない。

「確かに、本当に宝箱がありますね。

しかも、長い年月野ざらしになっていたはずなのに、装飾が錆び付いていません。」

おそらく、何らかの魔法の箱でしょう」

「ラトリスも目、いいんだ」

「忍者ですから」

忍者って便利。

とりあえず視力云々はともかく、ララナとラトリスには本当に何か見えるらしい。

「それが、『ドール・ア・ガーの塔』の最上階の宝物です。

わたしも中身は知りませんが、この世に二つしかない物、だそうですよ？」

ミスレイはそんな風に自慢げに話しているが、鋼は思いついてしまっていた。

「あのさ。お宝見えてるなら、空飛んで取ってくればいいんじゃないのか？」

これは我ながら名案、と鋼は思ったのだが、

「無理です」

ミスレイにあっさり否定された。

「気付いてませんでしたか？　ここは魔法無効化空間。

しかも、魔法以外でも飛行系スキルは全て禁じられています」

「なら、ボクがハイジャンプするとか……」

そこでララナが手を上げてそんなことを言う。

お前何百メートル跳ぶ気だよ、と鋼は思ったが、意外とやれちゃいそうところが怖い。

「残念ですけど、それも無理です。

金ぴかの人でないと、宝箱を開けられません」

「やけに金ぴかにこだわるんだな」

鋼がそう言うと、ミスレイはまたも解説をしてくれた。

「これ、一般にはあまり知られていない話ですから内緒にしてくださいね」

と前置きして、

「そもそも金ぴか装備をしたベルアード様を見て、ルウィーニア様が『ギル様みたい、素敵！』って一目ぼれしちゃったのが二人の関係の始まりだったそうなんです。

それ以来、『オレ様口調でしゃべって！ 宝具出して！』とか色々と付きまとうことになっただらしくて……」

「ギル様違いだろ！ それ！」

あ、いや、ネタ元同じだから同じでいいのか？」

とんでもない暴露話を聞いて鋼は頭を抱えた。

なににせよ、女神のイメージ大崩壊である。

あと時系列が明らかにおかしい。

数百年前のエピソードに21世紀のゲーム知識が出て来るとかマジありえない。

なんて思うものの、この世界は地球のRPG知識を元に作られたはずなのに、少なくとも数千年以上の歴史を持っている。それを考えると今さらな話だった。

アレだ。『リアル世界五分前仮説』とか、そんなので説明できるかもしれない。

神様の力は何でもありである。鋼は考えることを放棄した。

「それで、もともとは自分とベルアード様との絆強化のためにこの塔を建て始めたんですけど、その頃にはベルアード様は魔神ユノス様とすっかりくっついちゃってて、完全に無駄になっちゃいました、という寸法ですね」

「だったら万人向けに塔のルール変えといってくれよ！」

それが誰かグラサン大尉でも呼んできてくれと言いたい。

「とにかく、お宝が欲しいなら地道に登って取ってくるしかないんです。

だからコウ様。金ぴかになって前衛に入ってください。

わたしはそのコウ様の服の裾を握りながら、一緒に進みます！」

さりげに変な要求を混ぜながらミスレイがそう締めくくった。

なるほど、そういうことなら……。

「それじゃ、地道に歩いて登ることにしようか」

ということになったのだった。

「しっかしこれ、きついなー」

何もない場所で階段を登りながら、鋼は息をつく。

ミスレイたちと別れて数分、鋼は一人で延々と空の階段を登り続けている。

この世界に来る前の鋼なら、とっくの昔にダウンしているくらいの距離だ。

「うわ、高っ！」

鋼が下を見ると、すでに百メートル以上登っただろうか。

仲間たちの姿が小さく見えた。

『ワンウェイ スカイウォーカー
天空への階段』

鋼の持つ欠陥タレントの一つ。

何も無い場所を、まるで階段のように登って行けるといいうタレントだ。

欠点は下りる時には使えないということだが、ちよつと落ちる空の階段　ちよつと落ちる　空の階段、みたいになれば何とか生還できる、といいなと鋼は思っている。

ちなみにこのタレントの効果聞いたミスレイは、

「さすがコウ様。ずるっこさにかけては三国一ですね！」
と絶賛してくれた。

かなりのトゲを感じたが、正直百二十階もある塔なんて攻略本なしには登ってられないというのが鋼の本音だ。

「これで、いいのか？」

それからさらに数分後、鋼はようやく宝箱の前に辿り着いた。

『ドール・ア・ガールの塔』は百二十階建て。一階三メートルとしても三百六十メートル。三百三十メートルの東京タワーよりも高い。そこに何の支えもなく立っているのだから、相当な恐怖である。

『黄金聖闘士化』を使って金色になりながら、宝箱のふたを開く。
「お………」

すると宝箱は、あっさりと開き、
「何だろ、宝石？」

鋼はちよつと大きめの飴玉くらいの大きさの、二つの小さな石を手に入れた。

あっさり手に入れられてしまったことに拍子抜けしながら、
「おい、終わったぞー！」
鋼は下にいる仲間に合図を送った。

一方下にいるララナたちである。

「あ、手を振ってる」

「終わったと仰っていますね」

鋼の合図を受けて、仲間たちも動き出す。

もし鋼が首尾よくお宝を手に入れたら、鋼がもどるのを補助する、と約束をしていたのだった。

「しかし、どうするのだ？」

補助も何も、ここでは魔法は使えないのだろうか？

アステイがもつともな疑問を口にする。

そこで前に出たのはラトリスだった。

「私のタナトスコールなら、この空間でも使えます。

ただし私ではハガネ様の所まで届かないので、ララナ様、お願い
出来ますか？」

「ん？ その短剣をコウくんのところまで投げればいいの？」

分かった、やってみる」

ララナはラトリスからタナトスコールを付与された短剣を受け取る。

「んー。投擲のアビリティは持つてるけど、ちよいと飛距離は不安
かな。

命中補正スキル三つと威力アップ系のスキル五つ使って……これ
なら行けるかな？」

そしてララナは短剣を大きく振りかぶり、

「行け、短剣！ 忌まわしき記憶と共に！」
投げた。

「お前は一体短剣に何のトラウマがあるのだ？」
というアステイの呆れ声も何のその、短剣は鋼の下へと一直線に
飛んでいき、狙い違わず、

グサ！

鋼の胸の中心に突き刺さった。

「あ、れー？」
ちよつと失敗しちゃったかな、とかわいげに小首をかしげるララ
ナ。

見る間に鋼の体がかしぎ、バランスを崩した鋼の体が上空三百メ
ートルから落下してくる。

「おいララナ！ 何をした！？
落ちているではないか！」
アステイの焦った声。

「ちよ、ちよつと力加減が、ね？」
これはさすがに想定外なのか、顔を青ざめさせるララナ。

「幸いうつ伏せに落ちているので、今の所死神は無事のようなですね
あくまで冷静なラトリス。」

「まさか……フォールダウン墮天!?!」
適当なことを言うミスレイ。

しかし、結局誰にも為す術がなく、

ドグシャ!

ちょっと生身の人^がたててはいけない音をたてて、鋼が地上にも
どつてきた。

落下地点をみんながのぞきこむと、そこには奇蹟的に背中^の死神
は無事だけれども本体はちょっと見せられないよ状態になった鋼の
姿が……。

「あ、あのさ。タナトスコールでの復活って体がグチャグチャとか
バラバラになっても大丈夫なの?」

ララナがおそるおそる聞くと、ラトリスが答える。

「基本的に復活と同じ原理だと考えれば、体の構成要素さえ近くに
集まっていれば問題ないはずです。」

今回の場合は死神が無事ですから、す
しかしその言葉は、急に途切れてしまった。

「ら、ラトリス?!」

ララナがあわてて振り返ると、そこに女忍者の姿はない。

「ど、どうして?」

突然の異常事態に、ララナが呆然としていると、

「ララナ！」

アステイの鋭い呼びかけが耳を打ち、ララナはあわてて正面に視線をもどす。

さっきまで無残な姿になった鋼が倒れ伏していたはずの場所。だがそこに、彼の姿はない。

「消え、た…？」

何が起こったのか見当もつかず、三人はそのまま、じっと立ち尽くしていた。

鋼は、冷たい床の上で目を覚ました。

「あれ？ ええと、そうだ。

急に地上からナイフが飛んできて、それで……え？」

身を起こして、そして鋼は気付いた。

周りの風景が、変わっていた。

さっきまで鋼は、森と草原、どこを見ても植物が存在する緑の世界にいたはずだった。

それが今は、女体女体女体、まるで酒池肉林の肉林部分だけを抜き出したような桃色世界に、鋼はいた。

そして、頭上から降ってくる、聞き覚えのある声。

「こ、コウ！？ こ、これはちがうのじゃぞ？！

ネットの知恵袋で、猫神と人が結ばれるゲームはと聞いたたら、こーゆー類のお勧めされただけで……。

って、待つんじゃない！ 本当にコウ、なのか？」

そこにはさっき会ったばかりの、十二、三歳くらいの着物姿の少女がいて……。

瞬間、鋼の頭をよぎったのは、

(三歳児がエロゲーかよ！)

という当然のツッコミだがそれは重要なことではなく、

(シロニヤはゲーム屋でも着物かよ！)

とも思ったがやっぱりそれもこの場面で言うべき大切なことではなく、

(女神じゃなくてゲーム屋が伏線だったのかよ！)

と驚きを表明したくもあつたがどうにもこうにもそれも大事なことでではなく、

「もしかしてここ、日本、なのか？」

最後にようやく、鋼の口から正しい言葉が紡がれた。

だが、しかし、それだけではない。

もう一つ。鋼が声を大にして叫びたくなるような、大きなダウト。

それは鋼の背後。この状況で、平然とエッチなゲームを手にとつて眺めている一人のお客。

彼女は緊縛された美少女の描かれたパッケージを棚にもどすと、言った。

「全くここは破廉恥極まりない場所ですね。

しかし……中々に私好みです」

その声を聞いても鋼は振り返れないまま、ただ魂だけで絶叫した。

（お、おかしいな！！）

なんか僕の後ろに、本物と間違っくらい完成度の高い忍者のコスプレをしたメガネ美少女がいる予感がする！！）

18歳未満お断り、桃色ゲーム売り場に前代未聞の帰還を果たした結城鋼。

ここから彼の新たななる冒険が始まるッ！！

第六十章 久しぶり同級生

どうやら、流れを考えるとこういうことらしい。

タナトスコールで死神が憑く 鋼、死ぬ 神の祝福で鋼召喚（『血縄の絆』でラトリスがもれなくついてくる！） タナトスコールで鋼復活

それを聞いた鋼は、ため息をついた。

「いや、神の祝福なんだからさ、そういう誤作動とか、よくないと思う」

「じゃ、じゃって、死んだんじゃからしょうがないじゃろ！

死ぬ方が悪いんじゃないよ！ 死ぬ方が！」

「しかも普通の転移みたいに『血縄の絆』でつながってる人まで連れてきちゃうとか……」

「か、神の祝福は昔からある物じゃからして、そういう新しい術式には対応しとらんのじゃ！」

「あと、三歳のくせにエッチなゲームとか……」

「そ、それはワシが悪かったのじゃあ……」

反省しとるからそれを責めるのはやめてほしいのじゃあ……」

やれやれだな、と言いたい気分である。

そして一番やれやれだなと言いたい相手は、

「ラトリス！ いい加減ゲーム見るのやめて、移動するぞ?!」

ここに至ってはまだ我関せずとゲームのエロパッケージを見ているラトリスで、鋼はついに堪え切れずにラトリスの肩を引っ張って、

「え？」

ラトリスがほとんど何の抵抗もなく、自分の方に倒れてきたことに驚いた。

「ラトリス？」

鋼が呼びかけると、ラトリスはぼんやりとした顔で答えた。

「申し訳ありませんハガネ様。

どうやらこの空気に中てられてしまったようです」

その口にするラトリスの顔は心なしか青白い。

「くっ、き？」

鋼はそこでようやく、自分の状態に気付いた。

「そういえば僕も、何だか体の動きが……」

日本にいた時の感覚でいたから気付かなかったが、たしかに向こうの世界にいた時に比べると体の動きが鈍い気がする。

「そうか。こちらの世界には魔素がないのじゃよ！」

「どづいつことだ？」

鋼はその言葉に、ラトリスを抱えたままシロニヤを振り返る。

「鬼娘……と言っても分からないじゃろうが、そいつが向こうの世界に行くのに、単純な転移ではなく転生をしなくてはならなかった理由じゃよ！」

「この世界と向こうの世界では世界の法則が異なるのじゃ！」

「法則……？ それって、物理定数とか、星の仕組みとかか？」

「そこらは適当にこちらと合わせてある。もっと根源的な話じゃよ！」

よいか、こちらの……ええい、こちらだのあちらだのと呼ぶのはめんどづいじゃよ！」

仮にこちらの世界を 世界、魔法のある向こうの世界を 世界、そしてどちらにも属さない中立の世界をシユタイン……」

「そういうのは今はいいよ！」
ボケを忘れないのも場合によりけりである。

「ええとじゃな、 世界は見た目こそこちら、 世界に似せておるが、 世界とは世界の構造が根本的に異なる。

一言で言つと、実は 世界の全ての物質は、 魔素と呼ばれる単一の素粒子でできているのじゃ！」

「うおい！ なんだその唐突かつ適当なSF的設定！」

いや、科学的な理論とかないからやつぱりSFではなくファンタジーの領分なのだろうか。

鋼は混乱した。

「魔素はぶつちやけ神様の力そのものじゃから、どんな物にもなれる。

人体もほとんど 世界の地球人の物を完全に模倣しているので、理論上はこつちでも暮らせるはずなのじゃ」

「だったら何が問題なんだ？」

現実には、鋼は体のだるさを感じているし、ラトリスはそれ以上に参っている。

「ただの人として生きていく分には問題はないはずじゃが、おぬしらの体の魔法的な部分、たとえば超人的な身体能力や、魔法を使う力なんかには、魔素が必要になるのじゃ。

世界になら空气中にただよう魔素の結晶、 霊子が無意識に取り込んで回復したりできるんじやが、当然こちらにはそんなもの全くないじゃろ？」

「そうになると、魔力不足で苦しくなってくる？」

「たぶん、そういうことなのじゃ！」

なるほど、と鋼はうなずいた。

体はたしかにだるい気がしていたが、よくよくたしかめてみると、現実世界にいた頃と同じくらいにもどっただけのようにも感じる。これはつまり、魔力的な物を使った人体のチート部分が使えなくなっているからだろう。

鋼としては、当面はこれで全く問題がない。

「それで、ラトリスを治すにはどうすればいいんだ？」
と、シロニヤに聞いて、

「とりあえずなのじゃが、ここから離れる方がよいのではないかの？
正直、そろそろ周りの視線が痛いじゃ」
その返答に、初めて自分たちが注目されていることに気付いた。

「…うあ」

鋼の口からうめき声が漏れた。

まあそれはそうだ。

エッチなゲーム売り場で忍者コスプレの女の子を抱いて和装少女と電波話をしている少年が気にならないとしたら、それは逆に欠陥人間だろう。

鋼は遅ればせながら顔を赤くして、

「じゃ、じゃあとりあえず外に出ようか」

と提案したのだが、

「あ、いや、その……」

そこでシロニヤが手を後ろに回して不審な動きを見せた。

「わ、ワシはちょっと、ここで済ませねばならない用事があるのじゃ。

じゃ、じゃから二人で先に行っておいて……」

「18歳未満のお子様のご購入は、法律で禁じられております！
いいからすぐに行くぞ！」

シロニヤが持っていたソフトを棚にもどし、鋼は問答無用でシロニヤを引きずって外に向かう。

「ま、待つんじゃない！ あのゲームには、おぬしを攻略するためのヒントが……」

「知るか！！ 全年齢版出るの待て！！」

最後の最後まで店内の皆様の視線を浴びながら、鋼たちはにぎやかに店から出て行ったのだった。

「大丈夫か、ラトリス」

「はい。慣れれば……問題ありません」

一時はフラフラだったラトリスも、少し休むとゆっくりとなら歩ける程度までには回復した。

「なあシロニヤ。」

さつきシロニヤは僕たちがこつちの世界の人間と同じくらいの能力になってるはずだって言ったけど、そうでもないんじゃないか？
こつちにいた時の僕には、女の子二人を引っ張ってくほどの力はなかったと思う」

「むう。そうじゃな。」

なら、魔力がないせいで能力がセーブされておるだけかもしれない」

本当ならその新しい仮説を検証してみたいところだが、今はとにかく落ち着く場所が欲しかった。

そしてそうになると、鋼には目的地は一つしか思いつかない。

「やっぱり……帰るしかないよな」

鋼の両親が待つはずの自分の家。
もう二度と帰ることはないだろうと思っていた場所だ。

「割り切ってたつもりだけど、いざ帰ってきたとなるとさすがに申し訳ないよなあ……。」

シロニヤ、僕が向こうに行った後、僕はどうなったことになったんだ？

ここに至って、鋼は今まで目を逸らし続けていたことを聞くしかなかった。

しかし、

「え？ ワシは知らんのじゃよ？」

たぶん体は見つかつたらんのじゃから、行方不明扱いにでもなつとるんじやないか？」

シロニヤは全く知らないらしい。

「んー。あの鬼ツ娘には時間があつたから知り合いに携帯メールくらい出しとつたようじゃが、おぬしの場合はどうがなないじゃろ。

何も死のうと思つて死んだワケじゃないんじやし、ほとんど即死だつたんじやし」

「そう思えればいいけどね」

「と、とにかくじゃ！ 今はラトリスを休ませるのが先決じゃろ！ 家に向かうのじゃつたらワシに秘策があるのじゃ！」

「秘策！？」

「うむ！ おぬしに神様の本気、見せてやるのじゃよー！」

そう言つて元気にほほえむシロニヤに、鋼は苦しかった気持ち少しだけ癒された気がした。

「……これが、神の本気か」

鋼はラトリスを後部座席から降ろしながら、タクシーの運転手にお金を払うシロニヤを冷めた目で見た。

「なんじゃよう！　すぐく速かったじゃろ！」

「ああ……。ま、電車賃すら持つてなかったし、助かったんだけどね」

「そうじゃそうじゃ！」

ワシじゃって普段は猫化して走って電車賃浮かせたりしとるんじやぞー！」

「神様も、大変なんだな……」

どうにも口を開く度に神様の権威が落ちている気がするのだが、鋼はそれ以上の追及をやめた。

その理由には、懐かしい我が家の前にもどってきたという緊張ももちろんある。

「ラトリス、もう少しだから」

鋼は弱ったラトリスに肩を貸して、家の前までやってきた。

「インターホンを鳴らさなくていいののか？」

シロニヤの問いに、鋼は首を振った。

「木曜のこの時間なら母さんはきつと買い物に行ってると思う。

まあ、いつもの習慣が変わっていなければ、だけど」

「なら、家には誰もおらんのか？」

「どうするのじゃ？」

「一応、こういう時の取り決めがあつてね。……こつちだ」

鋼は家の横、並んでいる植木鉢の前まで移動した。

そして、何かを噛み締めるように、思い出を少しずつ浮かび上がらせるように、話し出す。

「母さんは、いつも言っていたよ。」

鍵の、隠し場所について」

「む？ もしかして……」

「ああ。ここ、家の横にある右から二番目の植木鉢……」

「なるほど定番じゃ」

「……から東に三步、南に五歩、そこから90度左を向いて十七歩進んで、その場で右か左、自分の好きな方向に540度回転して、その時思い浮かべた1から9までの数字を倍にして八百一を足して四十で割った数を四捨五入して整数にした分だけ前に進み、そこから左に270度ターンした後、三步進んで二歩下がる動作を五セット繰り返し返した場所に鍵は隠されている、と」

「いや、分からのじゃよ！

複雑すぎじゃよ防犯対策ばつちりじゃよ！

セ〇ムも商売あがったりなんじゃよ！」

シロニヤは惑乱して何か叫んだ。

「ハ、ガネ様……」

その時、弱々しく鋼にもたれかかっていたラトリスが鋼を呼んだ。

「ラトリス、どうかした？」

鋼が気遣わしげに声をかけると、ラトリスは蚊の鳴くような細かい声で言った。

「そ、その手順に従うと、最後の三步進んで二歩下がるの工程の四回目と五回目は確実に家の壁にめりこんでしまいます」

「ええ！？ いや、いいよそんな、無理してツッコミしなくても！

え？ ていうか何で今ツッコミ！？」

ラトリス別にそんなにツッコミキヤラでもなかったよな？！」

瀕死のラトリスの健気な奮闘に、鋼も動揺を隠せない。

「そ、それで、鍵は結局どこにあるのじゃ？」

シロニヤが焦れて鋼の体を揺する。

「ああ。だから鍵は最初の植木鉢の下に隠してあるんだよ」
そう言いながら、あっさりと植木鉢の下から鍵を取り出す鋼に、

「じゃったら最初からそう言えばいいではないか!!」

すっかり踊らされたシロニヤが叫んだのだった。

「……じゃ、開けるよ」

実に数週間ぶりの我が家だ。

鋼にだって、込み上げる物はある。

それを全て飲み込んで、鋼は鍵をドアに差し込む……直前に、

「あ、帰ってきたんですか？ 今開けますね」

聞き覚えのある、それも、懐かしい日本語の音が聞こえ、次いで
鍵が内側から外される。

そうして、開いた扉から顔を出したのは、

「お帰りなさ……あ、れ？ あなた、は……」

鋼が、全く予想もしていなかった人物。

「な、んで……」

彼女こそが鋼のかつての同級生にして、学校では彼と二番目に仲の良かった女子生徒。

共通の友人を介して友達になったものの、不慮の事故によってさよならも言えずに別れたはずの鋼の友人。

つまり、そこに立っていたのは、まぎれもなく、

「何で僕の家にいるんだよ、クリステイナ」

魔法学院一回生、クリスティナ・ラズベルだった。

断章 5

「ふわぁああああ」

わたしの朝は、そんな大きな大きなあくびから始まりました。

あ、でも、そんなに責めないで欲しいんです。

だって、誰だって親類縁者どころか知り合いの一人もいないような異世界にやってきてしまったら、困って困って眠くなるのが道理というものです。……たぶん、そうです。きっと、いえ、ぜったいそうだと思います。

「異世界、かぁ……」

部屋の壁にかかった魔法学院の制服を眺め、わたしはもう一度大きく口を開け、今度はあくびの代わりに大きな大きなため息を吐き出しました。

あらためてつらい現実を思い出してしまって、わたしは若干へこんでいました。

二ヶ月前の何も知らない幸せな自分を思い返すたび、自業自得とはいえ、遠くに来てしまったなぁ、という思いはどうしてもぬぐいられません。

けれどわたしは、そこでハッと気づきました。こうして腐っていても仕方ありません。人というのは自分にやれることをやるしかないのだとあの人も言っていました。

「でも、わたしにやれること、ってなんだろう……」

魔法、でしょうか。でも、それだって……とまたネガティブな方向に考えが向きそうになるダメなわたし。

どうも朝というのは後ろ向きなことばかり考えてしまっただけで困ります。

そこでわたしは、自分のお気に入りのフレーズを心の中で唱えることにしました。

心はボロでも、故郷は錦。

これは、あの人が教えてくれた日本のことわざです。意味はよく覚えてないですけど、きっと心がボロボロになっても故郷を思えばがんばれる、という意味だと思います。

「心はボロでも、故郷は錦」

もう一度、口に出して唱えます。うんうん。だんだんと気分が上向いて参りました。

そこで大きく伸びをして、窓を開けて外の光を目いっぱいに取り込みます。

かくしてわたしは、ようやく一日の始まりを前向きに迎えることができましたのでした。

「これで、よし！」

わたしは朝の諸々の身支度を済ませると、最後に一張羅でもある魔法学院の制服に袖を通します。

そう、これがわたしの戦闘服。

まだ見習いとはいえ、いかにも魔術師然とした雰囲気演出してくれるデザインで、この服も今ではわたしのアイデンティティを支えてくれる大事な物となっているのです。

部屋の姿見に向かって、わたしは自分の姿をたしかめます。

服に乱れは……ありません。

今日も格好だけはピッカピカです。

何しろ特殊な素材を使っているこの服は、何度洗濯をしても色落ちしたり糸がほつれたりということがありません。

わたしの親友のようにオシャレに心が高い人は敬遠するこの服ですが、そう捨てた物ではないとわたしは思います。この服はいつだって、まるで新品のような着心地をわたしに提供してくれます。

「あつとつと」

制服の素晴らしさに感動している場合ではありません。

次に髪の毛のチェック。

こちらも……たぶん大丈夫そうです。

火の精霊の加護を受けている証である燃えるような赤毛と炎のように揺れる瞳が、鏡越しにわたしを見返していました。

と、そこで時間切れ。

「クリスちゃん！ 朝ご飯できたわよー！」

階下から聞こえるお母様の声に、

「はい！ 今行きまーす！」

勝手知ったる他人の家。

すっかり慣れた様子で返事を返すわたしがいます。

結城家にご厄介になってはや四十日。

わたし、クリステイナ・ラズベルがどうしてもこのような状況に陥ったかを説明するには、四十日前のある酒盛りの夜にまで時を遡らなければなりません。

その夜、学院図書館から帰ってきたリリーアさんとハガネさんを出迎えて、その後リリーアさんの提案で、監禁部屋脱出のちよつとしたお祝いと、三人のお別れ会を兼ねて三人……と白猫さん一匹とでお酒を飲みました。

リリーアさんは予想通りすぐに潰れてしまつて、神様のお使いだという白猫さんもすぐに酔っぱらつてハガネさんにじゃれついていました。

そこで、一人だけお酒を飲まなかつたハガネさんとまだ生き残つていたわたしとで、二人きりで宴会の片づけをして、少しだけですけどお話をしました。

実はハガネさんについては、性王なんて人の子孫だし、どんなに優しそうな男の人でも下半身は別だつて聞くし、もしかして襲われちゃうかな、なんて思つていたのですが、それはわたしの誤解でした。ハガネさんは最後までわたしに紳士的で、何だかきゅんと来てしまいました。

その時に確信したのです。

真の性王とは、がつつかないものだ、と。

あれくらい優しくてかつこよければ、女の人なんて向こうから寄つてきてしまうのでしょうか。だから彼はきつと、性王でありながら、

誰よりも紳士なのです。

それに、わたしは見ていました。

二日目の朝。白猫さんが耐え切れずに声を上げてしまったのですね。ぐにやめてしまいました。が、ハガネさんが白猫さんを撫でていた時の手つきのエロさときたら、尋常じゃありませんでした。

まだわたしたちと同じ年だそうですが、あの技量で確実に百人斬りくらいはもうヤツてしまっている。わたしは確信しています。

一日目の夜に、いつ襲われるのかと布団の中で震えながらドキワクしていた自分をわたしは恥じました。

それに、あのリリーアさんとの親しげな様子。

あの二人は確実にできています。昨日だって、たぶんわたしがいなければ夜の魔法対戦を……とそこまで考えたところで鼻の奥にツーンとした感覚。

どうやら鼻血が出てしまったようです。

わたしは急いで洗面所へと駆け込みました。

「いけないいけない。二人ともお友達なんだから、そういう妄想はひかえないと……」

鼻血を止めた後、洗面所の鏡に向かってわたしはそう言い聞かせました。

それから深呼吸をして心を静めて、もう一度部屋にもどろうとして、

もし、わたしがいないのをいいことに、二人が『おっぱじめて』いたらどうしよう。

わたしの手は止まりました。

そして、鼻血さんリターンズ。

こんばんは鼻血さん、また会いましたね。今夜もあなたとは長いお付き合いができそうだよ。

わたしはすぐさま洗面所に舞い戻りました。

それからすぐに鼻血は止まりましたが、なんとなく恐くて部屋に続く扉が開けられません。

今晩は魔法の実験をしようと思っていたのにどうしたものか、とわたしは途方に暮れて、そこではたと気付きました。

そうか。迷うことなんてなかったんだ、と。

やっぱり、わたしも酔っていたんでしよう。あるいは、ハガネさんにはつきり友達だと言ってもらって、浮かれていたのかもしれない。

洗面所で魔法の実験を試みようと思いつきました。

一応万能の魔術媒体である魔法の杖は持っていますし、アイテムボックスは当然身に着けています。

それに、洗面所という密室は、実験で大きな音を立てても隣の部屋にいる二人を起こさない、というメリットもあります。

冒険者カードとかの貴重品、それに肝心のアイテムボックスと魔力を同調させる補助具は部屋の中ですが、その辺りはありあまるやる気で何とかなるはずです、きつと。

「よし！」

気合は十分、やる気も十分。

これから試すのは、アイテムボックスの効果を魔法によって発動させる大魔法です。

いくら気合を入れても入れすぎるということはありません。

さて、では実際の作業を開始です。

まず、アイテムボックスを起動。

異次元とつながる感覚を頭の中に刻み込みます。

それから集中して集中して、自分に集められる限りの魔力を溜めます。

それが終わったら、いよいよ呪文の詠唱と魔法の発動。

呪文には、魔法言語は使いません。

どうせ過去にはないオリジナル魔法です。魔法言語の力に頼らず、自分の魔力をうまく編み上げるためだけを考えて、自分の中でもっとも慣れている言葉を使います。

「いざ開け！ 次元の扉！！」

そう叫んでみて、一瞬、『あれ？』と思いました。

なんとなく、いつもと感じが違ったような気がしたのです。

ですがそんなことばかりを考えてはいられません。

こんなわたしによくしてくれたリリーアさんのために、そして、わたしを友達だと言ってくれたハガネさんのために、この魔法は絶対に完成させなければいけないのです。

そして今日は、なぜだか成功する予感がしました。いつもと手応えが違うのです。

（今回はきつと、うまくいく！）

わたしはそう信じて、次元の扉を開こうと魔力を使い続け、結果……次元の扉が開くべき杖の先には、豆粒ほどの大きさの穴も、開いてはくれませんでした。

「けつきよく、ダメ、かあ……」

わたしははふう、とため息をついて、その場にへたり込みました。
「やっぱりわたしは落ちこぼれなんですかねえ」

口からネガティブな言葉が勝手にこぼれ落ちていきます。

さっきの翻訳魔法の実験だって、成功したと思ったのに結局失敗。
わたしは自分の感覚すら、もう信用出来なくなっていました。

もう嫌になるなあ、とわたしは視線を横に流して、

「じ、じ、次元の、扉？」

足元、わたしが魔法を使ったのとは1メートルほど離れた場所に、
とんでもない物を見つけたのです。

信じがたい思いで、観察します。猫が一匹、通れるか通れないか
というくらいのはんの小さな穴ですが、そこにはたしかに次元の扉
らしき物が出来ていました。

「どうしてこんな場所に？」

わたしは首をかしげますが、そんなことは大した問題ではありません。
せん。

きつと次元の扉が出来やすい場所とかがあったのでしょうか。時空
間が安定しない揺らぎの場所とか、以前に誰かが次元移動をした場
所とか……。

何だか考えている内にそんなバカなことあるはずないような気が
してきましたが、でもきつとそうなんです。そうだと決めたらそ
うなのです。

「あ、ダメです！ ダメですってば！」

ぼうつとしている間に、次元の扉がゆっくりと消えようとしてい

ました。

わたしはあわてて杖を取り、魔法を使って次元の扉を維持します。

とにかく、これがアイテムボックスの先につながっているとすれば、大発見です。きつとりリーアさんやハガネさんも褒めてくれます。

問題は、それをたしかめる方法なのですが……。

「やっぱり、わたしが直接のぞくしかないですよね」

魔法技術全盛期のこの時代ですが、最後に物を言うのはマジカルよりもアナログなんです。

わたしは覚悟を決めました。

「まずは……」

魔力をそそいで無理矢理に次元の扉を広げます。首がつつかえている内に扉が閉まって首チョンパ、なんて笑い話にもなりません。

そうしてアイテムボックスの中には、新しいアイテム『なまくび』が増えましたとき、ちゃんちゃん、とか……あ、ちよつとホラー風味ですけど、笑い話としても行けるかもしれません。

でもとにかく、そんなことはわたしは嫌です。全力で扉を拡張します。

魔力の残量も心もなくなってきました。

わたしは高レベルの自動MP回復アビリティを持っていますが、それだって即効性というワケではありません。

扉を支えていられる時間はあとわずか。

覚悟を決めて、次元の扉に文字通り首を突っ込むことにします。

潜水の時の要領で、大きく息を吸ってからわたしは次元の扉の中に頭を突っ込んで、と思ったら、勢いあまって上半身が全部入っちゃいました。

失敗失敗とわたしが体を戻そうとした、その瞬間、

プォーン!!

怪音を上げて、灰色の巨大な鉄の塊がわたしの目の前を横切って行きました。

「な、わ、っきゃう！」

突然のことに驚いたわたしは思い切り冷静さをなくし、反射的に体をばたつかせます。そしてそれは、この場合最悪の行動でした。重心が前のめりになったわたしの体はすりと次元の扉を抜け、

「ふえ？」

扉の向こう側に、落ちてしまったのです。

結論から言えば、そこはアイテムボックスの中などではありませんでした。

立ち並ぶ信じられないほどに高い建物の山。晴れているはずなのにどこか淀んで見える空。何より轟音と共に道を行く、色とりどりの金属の箱。

見たことのない世界です。想像したこともない光景です。

わたしは、自分が何かとんでもない場所に来てしまったことによろやく気付きました。

そして、

「次元の扉！」

すぐに元の世界に戻ることを考えました。

振り返ると、わたしがやってきた次元の扉は、無理矢理広げた後遺症か、よじれて今にも消えてしまいそうになっていました。

「た、頼みますから、まだ閉じないでくださいよう」

わたしは震える手で杖を握りしめます。

手に杖を持ったまま落ちて来たのは不幸中の幸いでした。

わたしはさっきのように魔法を使って次元の扉を広げようとして、

「な、なんで…?!」

魔法が使えなくなっていることに、愕然としました。

いえ、わたしの魔法を使う能力がなくなったワケではないのです。けれど、わたしの使える魔法力自体が十分の程度に減っています。こんなちつぽけな魔力では、次元の扉を支える魔法なんて使えるはずがありません。

それでもあきらめきれず、消えかかる次元の扉に魔力を注ぎ続けていると、

「あ、う…?」

突然、すさまじい倦怠感がわたしを襲います。

予想外の、しかし経験したことのある感覚です。

これは、MPがゼロになった時の疲労感。

でも、それはおかしなことでした。

いくら必死になっていたからと言って、こんなに早くMPがなくなるなんてこと、あるはずないのに……。

わたしは必死で原因を探ろうとして、恐ろしい事実気付きました。

この場所には、魔力が全く感じられないのです！

これでは魔法の威力は当然ながら弱まりますし、MPの消費も早くなります。

いえ、それどころか、たぶんここに存在しているだけでMPがどんどん減ってしまってしまうでしょう。

そんなことを考えている間にも、MPが空になった時の、リリーアさんいわく『風邪と二日酔いがいつぺんに来たような感じ』がわたしを襲います。

わたしはもはや立ち上がっていることも出来ず、その場に倒れ込みました。

そして、そのまま指一本動かさず、ゆっくりと次元の扉が消えていくのをただ見守るほかなかったのです。

わたしの唯一の希望だった、次元の扉が消えてしまっただけから数分後、

「よい、しよ、と」

わたしはようやく回復し、倒れていた体を起こしました。

幸いにもわたしに自動MP回復アビリティがあったからよかったものの、もし持っていなかったとしたら、ずっとMPゼロのまま動けなくなってしまうでしょう。

次元の扉が消えてしまい、魔力不足から自力で開くことも出来ません。

けれど、倒れている間に気付いた驚きの事実があります。

どうやらわたし、この人たちが話す言葉が分かるようなのです。

入口の方とはいえ、暗い路地に倒れていたわたしに気付いた人はいないようなのですが、道行く人の話し声は聞こえてきました。

彼らの話す言葉は明らかに大陸共通語ではないにもかかわらず、わたしには理解できました。

どうしてか、なんて、考えるまでもありません。

昨日、ハガネさんに使った翻訳の魔法の効果です。

わたしは神聖魔法言語を習得するつもりでハガネさんに魔法をかけて、ハガネさんの母国語を習得してしまったのです！

よくよく思い出してみれば、そう考えるのが一番しっくり来るのです。

昨夜のリリーアさんの言葉を思い出します。

『あなたたち、一体何話しているの？』

『何を言ってるのか、ひとつことも分からないわよ！』

これはてっきり話している話題が分からないのだと思っていました。リリーアさんほどの人が適当なことを言うはずがありません。彼女が『一言も分からない』と言ったら、本当に一言も分からない

かったに決まっています。

つまりわたしとハガネさんはその時、ハガネさんの国の言葉で話していたために、リリーアさんには文字通り一言も理解出来なかったのです！

だとすれば、わたしが『光よ！』と言っても魔法が出て来なかった理由も説明出来ます。そりゃあ魔法言語ではなく、単なる別の国の言葉ですからね。魔法が出た方がびつくりです。

ちょっと不自然なのは、ハガネさんがどうしてわたしの言葉が変わったことに気付かなかったかということですが、たぶんハガネさんにとって自分の故郷の言葉があまりにも自然だったせいで違和感を覚えなかったのだと思います。

白猫さんとは大陸共通語ではない言葉、たぶんその母国語、で話をしているようでしたし。

さて、そうするとわたしにも新しい希望が出て来るのです。

ハガネさんからもらった言葉が話されているということは、ここはハガネさんの故郷だと考えられます。

つまり、ハガネさんと同じ方法を取れば、学院まで戻れるってことなんです。

ああ、希望、すばらしいです。

わたしは暗い路地から出ると、そこには大きな通りがありました。あいかかわらず、びゅんびゅんとすごい迫力で鉄の塊が目の前を通り過ぎていきます。

「う………」

鈍い痛みと共に、その鉄の塊の名前が浮かび上がってきました。

これは『自動車』、あるいは『車』、と呼ばれる乗り物らしいです。

「車、かあ……」

最初に車を目にした時はすぐ目の前を通り過ぎたような気がしていましたが、そうは言ってもわたしと車の間には二メートル程度の間が空いていました。

なにびっくりすることに、道を見ると歩いている人と車の間には一メートルほどの距離しかありません。

あんな大きいもの、当たったら絶対大怪我です。怖くないんでしょうか。

ハガネさんもぐつぐつ煮立った紫色の溶岩みたいな物をごくごく飲んじゃう人でしたし、こっちの人は全員人として何か大事な神経が……いえ、みんな豪胆なのかもしれません。

でもわたしにはとても真似出来そうにないので出来るだけ車から離れた場所を歩きます。

歩いていて、次に驚いたのは『ビル』です。正確には『ビルディング』と言って、背の高い建物のことを言うそうです。

何でも高い物だと、軽く五十階を越えるとか。

そんな神様が立てるダンジョンみたいな物で毎日を過ごすとか、ちよつと意味が分かりません。

崩れたらどうするんでしょうか。

と、そこまで考えた時です。

わたしはようやく自分が何をしているのか把握しました。

どうもわたしは、ハガネさんの使う言葉だけでなく、その言葉にまつわる関連知識も翻訳の魔法で手に入れているようなのです。

もしかしてこれってトンデモすごいことなのではないでしょうか。

これはこっちで過ごすのに便利だというだけではありません。

脳がその記憶量に耐え切れないのか、使う時頭が痛くなつちゃうのが欠点ですが、考えてもみてください。これでこの近くの地理とか移動手段とかの情報を引き出せれば、きっと魔法学院に帰る方法が見つかるはずなのです。

わたしはこの考えに有頂天になりました。

「ハガネさん。わたし、もしかすると頭のいい子なのかもしれませ
ん」

今は遠い場所にいるはずのハガネさんにそう報告して、

「おっとつと、道の真ん中にいちやダメですよね」

通行人の邪魔にならないよう、さらに道の端に寄って、精神を集中します。

そして脳内検索。

地理的な知識と移動手段に関する知識。

激しい頭痛と共に、わたしの頭の中にびっくりするほどたくさん
の情報がなだれ込んできます。

この世界は丸いということ。この世界には百以上の国があるとい
うこと。この世界では車の他に車がたくさん集まったような『電車』
や、飛空艇のように空を飛ぶ『飛行機』などを使って移動すること。

そして、そのどれを使っても、魔法学院には戻れはしないこと。

そう。

ハガネさんの知識の中に、わたしの知っている場所の記憶は全く
ありませんでした。

その時わたしの頭の中に、わたしが必死で押し隠していた仮説が

浮かび上がります。

魔力がない国なんてあるはずがない。ここは、わたしがいた場所とは全く違う世界、つまり、異世界なのではないか、という仮説が。

「う、うそです、よね？ そんなはず、ないです」

わたしは痛みの引かない頭を酷使して、もっと深くまで情報の海に潜ります。

頭の中にあふれるのは、さっきとは比べ物にならないほどの量の情報たち。

人の生息域である地球と呼ばれる場所から離れることの出来る『宇宙船』という乗り物の存在。魔法を使える人間がいなくても、神様や魔法という考え方自体は存在していること。異世界転生、異世界トリップといった世界間の移動をモチーフとした物語。

けれど、そこにわたしの世界に戻る手段は、ありませんでした。

「あ、れ？」

MPがなくなったワケでもないのに、わたしの体がぐらぐら揺れて、立っていることも出来ません。

頭がぐるぐるして、どこが前なのか後ろなのか地面なのか空なのか、分からなくなっていました。

歩いてもない足がもつれて、わたしは地面に座り込みます。

前後左右上下の感覚はなくなっているのに、冬の地面の冷たさだけは足からじわじわとせり上がってきました。

それでも頭に残るのは、自分がもう戻れないという残酷な事実だけ。

「や、です。わたし、もう戻れないんですか？

そんなのって、ないですよ……」

わたしの口から泣き言がこぼれました。

魔法学院からトーキョの街に迷い込んだ時もびつくりしましたが、その時はいつでも元の場所に戻れるという安心感がありました。

それにその時のわたしには『魔法』という頼りになる相棒がいま
した。

でも今のわたしには、そんな支えすらありません。

見知らぬ世界。ただの一人も知り合いすらないこの場所に、わたしは帰る手段すら持たずに放り出されてしまったのです。

通りに人目もはばからずに座り込むわたしの前を、何人かの人たちが通り過ぎていきます。みな遠巻きに、わたしを気味悪そうに眺めていました。

泣きそうになります。いいえ、もう涙がこぼれていました。

「リリア、さん。ハガネ、さん。レメデス、せんせい……」

帰りたい、わたし、元の世界に帰りたいですよ……」

一度決壊してしまうと、もう止まりません。

涙が、後から後からこぼれていきました。

こんなことはいけなと思うのに、どうにかして止めたいと思うのに、ぜんぜん言うことを聞いてくれません。

そんなわたしを見て、遠くからこそそこそと何かを呟いていく通行人たちにみじめさが募り、ついには大声を上げて泣き出しそうになった、その時、

「ほらそのあんた、何でこんなところで泣いてんのよ。って、うわ。何その服！ コスプレ？」

わたしの顔に、影が差しました。

「ふえ？」

見上げると、そこにはわたしより少しお姉さんに見える女の人立っていた、

「あー、まだガキじゃんかー。まさかとは思うけど、迷子だったり？」

「え？ あう、ち、ちがいます。ただ、扉をくぐったら、消えちゃって、元の場所に戻れなくなって……」

「いや、それ完膚なきまでに徹頭徹尾迷子じゃん」

「え、いや、でもあの……」

その人の矢継ぎ早の言葉に、わたしはしどろもどろになるばかりです。

「ああ、まあいや。話はいいから動くな。あんたきちゃんない」

「え、あ、ごめ……」

「だーから動くなつてのよ！」

その人は、辛辣な言葉とは裏腹の優しい手つきで、わたしの涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔をハンカチで拭いてくれました。

そして、もう一度わたしの間抜け顔を見て、大きく嘆息します。

「はあ。迷子を探しに来てべつの迷子を拾っちゃうとか、あたしもつくづく運ないなー」

これがあの人、三枝なえぐさ牧さんまきとわたしの、初めての出会いだった
のです。

断章 6

「これがホンモノの電波って奴か、しょーじき甘く見てたわ……」

マキさんに誘われて入った喫茶店、その一番奥のテーブルで、マキさんが額を手で押さえながらそんなことを言いました。

ちなみに『電波』というのは通信に使う電気の波のことで、ビビッとくるらしいです。よく分かんないですか？ わたしもよく分かんないです。

マキさんは泣いているわたしを強制的に立ち上がらせると、おごるから何か食えと言って喫茶店に連れ込みました。

そこで事情を話してくれと言われたので、わたしはラーナにある魔法学院の学生だったのだけれども事故で世界移動をしてしまったここに来たのだと説明したんです。

それを聞いた時の反応が、そんなのでした。ちよつと落ち込みます。

やっぱりこつちの世界だと魔法とかはあまり一般的ではないせいでしょうか。あんまり信じてもらっていない気がしました。

しかしここで落ち込んでしまうのは二流のすることです。

友達から『空気クラッシュヤー』と呼ばれるほど気遣いが出るわたしは、空気が固まってしまふ前にここで違う話題を振ることにしました。

「そ、それで、マキ、さんはお買い物ですか？」

「あたし？ ああ、そんなもんかな。探したい物があって」
さらつと答えるマキさん。

何だか早々に話が終わってしまいそんな気配ですよこれはまずい

です。

わたしは必死で食らいつきます。

「へ、へー。何買いに来たんですか？ く、車ですか？ ビルですか？」

とうかわたし、その二つしかこの世界の物をまだ知りません。

「や、一介の女子高生がそんな物を買に来たりとかしないからマキさんのわたしに対する『不審者を見る度』が30から60に跳ね上がりました。

ちなみにこれが100を超えると『通報』されて『警視庁』というのがやってきて、『タイホ』されてしまつらしいです。

でも『警視庁』っていうのは『キャリア』と『こわもて』という生物が生息している建物の名前らしいんですよ。

建物が追いかけてくるとか、さすが異世界ハンパないです。

「じゃ、じゃあ、何を買いに来たんですか？」

「え？ ああ、正確に言えば買い物じゃなくて探し物だって探し物？」

「もつと正確に言えば、探し人、かねー」

そこでマキさんは少し遠い目をしました。

それでも一流気遣い人たるわたしはこんなところで負けたりしません。

果敢に話しかけます。

「あ、あの、人探し、では？」

「そーそ。それぞれとても軽い調子です。

この人にとつてはどっちでもいいみたいですな。

「それで、どなたを探しているんですか？」

「んー。そういやあんたに聞くのも手か」

そう言うと、マキさんはどこからか手のひらサイズの小さな絵を出して見せました。

ハガネさんの知識からすると、『携帯電話』と言っらしいです。

ちなみに『携帯電話』とは電波を使ってビビツと遠くの人とお話をしたり、あるいは文章を送ったりという通信機能のほか、今マキさんがやっているみたいに『写真』という瞬間的に目の前の映像を保存する機能とかもついているすごいアイテムみたいです。

携帯電話の『液晶画面』には、マキさんともう一人、控えめな笑顔を見せるマキさんと同じくらいの年の、かわいい女の子が映っていました。

「これがわたしの探してる奴なんだけど、見覚えは？」

「あ、あの……」

わたしは少しだけ迷ったんですが、やっぱり聞かなくちゃいけないと思って、勇気を出して言いました。

「も、もっとちがう写真はなんでしょうか？」

「ちがう、写真？」

「は、はい。たとえば、もうちょっとこう、エッチな姿が載ってるのとか！」

あ、いえ！ べつにわたしが見たいのではなくてですね！

そういうのを見ると思い出すかな、とか……あの……」

「わるいねークリステイナちゃん。いまあいつの写真これ一枚しかないんだ。」

だから、これで思い出してもらえると助かるなあ？」

やってしまいました！ マキさんは笑顔ですが目が笑っていません。
ん。

そしてマキさんからの『不審者を見る度』が一気に80まで上がっています。

そろそろチェックメイトです。

「す、すみません。見たことはないです
わたしは正直に言いました。」

そもそもわたしの世界では黒髪黒目の人って少ないんです。わたしの知り合いでは、やっぱりハガネさんくらいでしょうか。

まあハガネさんはこっちの生まれみたいなので、当然と言えば当然なんです。

それでも全くお役に立てないまま終わったのでは申し訳が立ちません。

「その人、お名前は何て言うんですか？」

ダメ元で名前を尋ねると、

「ん、こいつの名前？ 真白。真白、夕希って言うんだけど……」

「マシロ……ユーキ？」

なんと意外、そのファミリーネームにわたしは聞き覚えがありました。

まさか、そのマシロさんという方も性王の一族！？

そりゃあ性王なんですから、生めよ増やせよ地に満ちよを地で行っているでしょうけど、異世界にまで親類がいるとは……。

わたしが彼の一族の繁殖力に戦慄を覚えていると、その反応にマキさんが急に身を乗り出してきました。

「もしかして、何か知ってるの！？」

よっぽどそのマシロさんのことが大切みたいです。

わたしはその迫力にちよつとたじたじになりながら答えます。

「い、いえ。ご本人には面識はないんですけど、そのマシロ・ユーキさんの親戚かもしれない人を知ってるというか……」

「親戚？ それ、どんな人？」

「え、えと、名前はハガネ・ユ……」

「ッ、コウ!？」

「ひう!」

わたしがハガネさんの名を口にした瞬間、バンツと大きな音を立ててマキさんが勢いよく立ち上がって椅子が後ろに吹っ飛んでコーヒーがひっくり返りました。

「あーそうかあ。あんにやろめ。人も殺さないような顔して、こおんな子を引っ掛けてたとはね。

よし、そんじゃクリステイナちゃん。その話、お姉さんにくわしく話してみようか」

そう呟くマキさんはとてもうれしそうで、顔は満面の笑みを浮かべているのに、その迫力、圧迫感は一瞬にして話していた時以上でした。

わたしは……、

『あの、マキさん。ちゃんと話しますから、わたしの眼球にフォークを突きつけるのはやめてください。』

あとそれを言うなら虫も殺さない顔というか、どちらかという人を殺しそうな顔をしているのは今のあなたの方だと思えます』

……そんなことを思いながらも、現実にはなすすべもなく、

「は、はい……」

壊れた人形のようにコクコクと必死で首を縦に動かしたのでした。

そこであらためて、わたしはマキさんに事情を説明しました。

と言っても、さっきの話にハガネさんの話を付け加えただけなんですけど、それだけでなぜかマキさんには説得力のある話に変わったようでした。

「あいつが15歳とか、貴族の生まれとか、ところどころ信じられないけど……。」

そのすつとぼけた性格を聞く限り、まー間違いないかなー」
マキさんいわく、ハガネさんはこっちの世界ではちよつと変わったところはあつたけれど、普通の人だつたみたいです。

性王の子孫で今は英雄と呼ばれているハガネさんが普通の人だつたなんて、わたしには信じられませんでした。

それをマキさんに話すと、

「ま、変に誤解とかされそうなところも、あつたしね」

となぜか微妙な顔でうなずいていました。

そしてさらに、わたしに対する『不審者を見る度』まで90に上昇。なぜ!?

この世界つて、本当に理不尽だなと思いました。

今度はマキさんが事情を話してくれました。

さっきのマシロという人はこの人の親友だつたのですが、ハガネさんがいなくなつて十日ほど経つたある日、突然いなくなつてしまつたのだとか。

残されたのは、携帯の『メール』というのでマキさんに送られた、ちよつとしたメッセージだけ。

その内容は要約すると、『ハガネさん見つけたから追いかけて異世界に行つてきます! キヤハ』とのことでした。

どうやってハガネさんを見つけたのか。いかなる手段で異世界に向かつたのか。本当にキヤハ は要約に入れる必要があつたのか。全ては謎に包まれています。

「ま、そんな事情だね。最後に一緒にいた時、あいつはこの辺りで何かを見つけたみたいだからさ。」

あたしはその手がかりつていうか、あいつが見つけたもんを探してたびたびここを探ってるってワケ」

「はあー」

でも、だとするとその友達がいなくなっしてから一月以上、この人は親友を探し続けていたことになります。

この人は、見かけによらずに一途というか、友達思いというか、あ、いえ、見かけによらずとか言ったら失礼ですよ。

……それとも、もしかするとハガネさん目当ての部分もあるのでしようか。

「あ、あのー！」

わたしはその辺りを聞いてみることにしました。

「ど、どしたの？」

わたしは少しだけ迷ったんですが、やっぱり聞かなくちゃいけないと思って、勇気を出して言いました。

あれ、なんかデジャヴ？

でもわたしの口は勝手に動いていました。

「は、ハガネさんとの関係をお聞きしてもいいですか！？」

「あたしと？　もしかして、恋人だったとか、そういうの疑ってる？」

マキさんがどこか不機嫌そうな、もしくは痛い所を突かれたというような顔でそんな風に問い返してきました。

たしかに今の聞き方ではそう取られても仕方ありません。でも、違うんです。

「そ、そんな大それたこと、聞こうと思ったんじゃないんです。だって、相手はハガネさんだし。」

だから、ただ……関係、あったのかな、と」

「なんだそんなこと？　そりゃクラスメイトだし無関係ってこともな……」

「肉体関係！ あつたのかな！ と！」

「……………」
わたしが肝心な部分を強調してそう尋ねると、マキさんは急に黙り込んでしまいました。

「さあつて」

そして、コーヒー（二杯目）を何事もなかったかのように飲み干すと、立ち上がってわたしの腕をつかみました。

「クリステイナちゃん。これからちよいいつと、外行こうか？」

あれ？ もしかして今ので100越えちゃいました？

わたし、もしかしてタイーホですか？

真つ暗になる視界と未来。

その暗闇から、こわもて満載の警視庁が砂煙をあげて迫ってくる幻覚が見えました。シュール！！

残念、いえ、幸運なことに、そのシュールは現実になりませんでした。

わたしが連れて来られたのは、人気のないさびれた公園です。

これってまさか…………わたし、誘われてるんでしょうか！？

「魔法つての、ここでもちよつとは使えるんでしょ？ それ、見せてくれない？」

もちろん違いました。

マキさんいわく、信じたいけど証拠がないとさすがに厳しいから、

実際に魔法を使って見せてほしい、とのこと。

「火属性の魔法、とか得意なんだっけ？ 何が使えるの？」

「ええと、『キャンプ・ファイヤー』とかなら」

「わ。学生っぽいね。それでお願い」

「はい！」

と元気よく答えたものの、わたしは少し不安でした。

こつちの世界でも本当にきちんと魔法が使えるのでしょうか。

そんな不安を押し隠して、わたしは呪文を紡いで、

「燃え上がれ！ キャンプ・ファイヤー！」

わたしの杖から、燃え盛る火炎が湧き出てきました。

もちろん威力は十分の一、向こうの世界に比べると大したことはないのですが、

「すつご！ 人間火炎放射器！」

マキさんもよろこんでくれたみたいで、やっぱりうれしいです。

「十分な威力あるじゃん。これ、やっぱりキャンプで使うの？」

「はい！ 主な用途は陣地の焼き討ちですね。本来なら野戦用のキャンプを全焼させる程度の威力が……えう！」

はたかれました。何で？

「あんたさあ。異世界人だから電波なのかと思ったけど、もともとなんだね。読み違えてた」

「で、電波って何ですか！？」

「ビビッと来るんでしょうか？」

「一目ぼれだったんでしょうか？」

「やっぱり誘ってるんでしょうか？」

「もうこのネタいららないでしょうか？」

「あんた……向こうで天然とか言われてたでしょ？」

「は、はい。そういえば、たまに……」

わたしがうなずくと、マキさんもやっぱりとばかりにうなずき返してきました。

「なーんかゆつきーに似てんなーと思ったら、やっぱその天然なところが似てんだよね」

「はあ。そう、なんですか？」

天然ってどういう意味なんでしょうか。

向こうにいた時は、魔法で体をいじったりしてないって意味だと思ってたんですけど、もしかして違う意味なんですかね。

「あー、まあ、それはそれとして」

「はい？」

「あんたこれから、この世界では……」

「はい！」

「じゅもんつかうな！」

「は、い……？」

過酷な命令をされました。

「な、なるほど……」

この世界では魔法を使える人はいないそうです。

で、もし不用意に魔法を使っていると誰かに見られたら、警視庁よりも怖い黒づくめの『CIA（中央情報局）』や『KGB（国家保安委員会）』がやってきて、拉致られて拷問されて実験させられて解剖されちゃうらしいのです。

というか中央情報局とか国家保安委員会とか意味分かりません。

外国語ですか？ …… あ、異世界語でした。

そんなワケで魔法を封印することに不承不承納得するわたしです。エッチな拷問に興味がないワケではないですが、痛い拷問はぜっ

たいに嫌ですからね！

「うーん」

しかし困りました。

わたしから魔法を取ったら何が残るでしょうか……。

……間違いなく、エロだけです。

エロ百パーセントです！

まあ、それはそれで。

「じゃ、次、行くよ」

そんなバカな考えにひたっていたわたしの手を、マキさんが引って張って歩きます。

「え？ い、イクって、どこにですか？」

マキさんはわたしを、どんな世界に連れて行ってくれるのでしょうか。

そんな期待を込めたわたしの視線を、マキさんは真っ向から受け止めて、にやっと笑いました。

「ご両親のこと」

まさかのご成婚コース！？

「鋼さんのクラスメイトで、三枝 牧と申します。突然お伺いしてすみません。実は息子さんのことでお話があるんです……。」

というワケで、ハガネさんの家です。

いえ、もう皆さんそんなことありえないって分かっていたよ。わたしだってなんか薄々、そんなことだろうと思ってましたよ。

……ほんとですよ？

そこからはもうマキさんの独壇場でした。

ハガネさんのお母様と、それから遅れて帰ってきたお父様にも、順序立ててわたしたちの事情を話してくれました。わたしは時々相槌を打つくらい。

ただ、一度だけ役に立ったのは、マキさんが、
「じゃ、クリステイナちゃん。ちょっと魔法、使ってみてくれない？」

と言ってくれた時くらいです。

魔法を使うと言われてたばかりだったので、わたしはびっくりしました。

「いいんですか？」

「いまだけね」

マキさんからお許しが出ました。なら、張り切っていきましょう！

「……偉大なる火の化身、レッドドラゴンよ。今こそその吐息をもつて、全てを焼き尽くせ！ ドラゴン・ブレ……ひゃっ！」

突然マキさんがわたしに襲い掛かって口をふさいできました。

「あのおさ。ここ、家の中なんだ。燃えたら、困るんだ」

「……ん、ん」

マキさんは例の、人を殺しそうな目をしていました。わたしは必死でうなずきます。

「分かった？ ……じゃ、何か言うことあるよね？」

そう念押しされ、わたしはようやく、口を解放されました。

「ぶはっ！」

わたしは大きく息をついて、それからきちんとマキさんの目を見つめて、言います。

「マキさんの気持ちはうれしいですけど、わたし、初めては男の人がいいで……はぐー！」

「な、に、か、言うことは？」

「ご、ごめんなさいい……」

もしかするとわたし、マキさんのこと苦手かもしれない、と思った一瞬でした。

そこからの話はスムーズに進みました。

生存は絶望的だと思われた自分たちの息子が生きているかもしれないと分かって、ハガネさんのお父様とお母様はとても喜んで、わたしも少しもらい泣きしてしまいました。

そのあと、ハガネさんが『きよにゆー』を『ぼつき』でやつつけて、『ぼつきで勇者』なんて英雄になったと話したら、二人ともまた目頭を押さえていました。よく感動する人たちだと思います。

マキさんはそれから、自分の親友のマシロさんも異世界に行った可能性があること、自分は引き続き二人の搜索を続けることなんかを話していたようです。

そして最後に、ハガネさんが戻ってくる手がかりになるかもしれないし、行き場がないのなら、とハガネさんのご両親がわたしをしばらく引き取ってくれると約束してくれました。

驚きの、そしてびっくりするほどありがたい提案で、わたしはしばらく何も答えることが出来ませんでした。

「そして今に至るのでした、と」

わたしが結城家に引き取られてから四十日ほどが経ちました。

お母様とお父様はとても優しく、こんなわたしにも親切にしてくれました。

これで君もこの家の一員だよ、と家の合鍵を渡してもらった時は涙が出るほどうれしかったですし、わたしのことはおばさんじゃなくてお母さんと呼びなさい、と言われた時は本当に泣いてしまいました。

今ではお父様、とお母様、で定着しています。

あと携帯も買ってもらいました。スマホです。マキさんとはよくこれで連絡を取っています。

お二人には本当に感謝しているのですけど、日本人にはありえない赤髪赤目は非常に目立つことと、やっぱり法律的にわたしはこの世界にはいない存在なのでバレたら色々まずいこともあって、恩を返す手段があまりないのが口惜しいところです。

せめて家事で貢献しようとしたのですが、これがまた火事にしかなりません。

いえ、ダジャレではなく。

わたしにはあまり家事の才能はないようで、電子レンジを使えば卵を入れて電子レンジを爆発させ、ガスコンロを使えばフライパンを溶かし、オーブンを使えばマルチダウンを起こし、という具合でお母様にも早々に匙を投げられました。

最近では簡単なお掃除くらいしかやっていない自分がふがいないです。

逆に、そうやって悶々としているわたしを気遣って、お母様の方が簡単な仕事を割り振ってくれる始末。

ただ、完成した合鍵を外に隠してくる仕事、あれだけは頂けないです。

思い出すだけで震えがとまらないのですが、あれはわたしがこの家に来て、一週間くらい経った頃。

仕事が出来ないことが露見して、すっかりうなだれていたわたしに、お母様がこう言ってくれました。

「いつ鋼が帰って来てもいいように、このスペアキーを家の先祖代々の隠し場所にこっそり置いて来てくれる？」

「は、はい！」

もちろんわたしは喜び勇んでうなずいたのですが、それが間違いでした。

「いい返事ね。じゃあこのスペアキーを家の横にある右から二番目の植木鉢……」

「あ、そこなら分かります」

「……から東に三步、南に五歩、そこから90度左を向いて十七歩進んで、その場で右か左、自分の好きな方向に540度回転して、その時思い浮かべた1から9までの数字を倍にして八百一を足して四十で割った数を四捨五入して整数にした分だけ前に進み、そこから左に270度ターンした後、三步進んで二歩下がる動作を五セット繰り返し返した場所に隠してきてちょうだいね」

「わ、わ、わわ、分かりました……！」

わたしはその場で右に180度回転しようとして、

「でももう一度言ってください。メモ、取りますから！」

振り返ってあわててメモ帳のところまで走りました。

三回繰り返してもらって、何とかそれをメモ帳に書き取って、
「大丈夫？　今ので分かった？」

というお母様の心配そうな言葉に、

「だ、大丈夫です。い、行ってきます！」

そんなやせ我慢の言葉を返して、出発です。

あれ、こいつ本当は分かってないんじゃないか、みたい視線が後ろからガンガン突き刺さってきます。まるで針のすのこです。アイアンメイデンです。逆ハリネズミになってしまいそうです。

しかしわたしはそれを振り切って外に出て、件の植木鉢を見つけ、そこから東に三步、南に五歩進……めませんでした！

南に五歩も歩いたら、隣の家のお敷地に入ってしまうのです。

「ど、どうしよう……」

これは、塀を乗り越えるということなのでしょう。

でも、マキさんは勝手に他人の家に入ったらタイホ、と言っていました。

キャリアがすし詰めになった警視庁がわたしにのしかかってくる幻影がひさしぶりに現れます。この未来だけは回避したいです。

結局、ずっとその場でおろしているわたしに、お母様が真相を教えてくれたのは二時間後のこと。

これは要は数字のトリックという奴で、この通りに進むとどうやっても必ずスタート地点に帰ってくるらしいのです。

わたしはお母様に手伝ってもらって、泣きべそをかきながら植木鉢の下に鍵を隠しました。

だからこれは半分だけ嫌な思い出で、半分だけうれしい思い出です。

そのような経緯もあり、今のわたしに任された主な仕事は、「うん。今日も掃除おわり、です」
いなくなってしまうた、ハガネさんの部屋の掃除、です。

同じ年頃だから、とよく分からない理由で任されたこのお仕事。もちろんわたしは全力でこなしました。
ベッドの下はもちろん、百科事典の裏も、机の引き出しの底も、押し入れの奥までも完璧に掃除しました。
なのに全然、エッチな本が見つからな……もとい、お役に立てている気がしませんでした。

そこでわたしが目をつけたのが、パソコンです。
現代の風俗についてもっと勉強したいから、とお母様に言って許可をもらい、徹底的に調べました。

ここで全ての本棚の本の中身をたしかめたことが思わぬところで役に立って、分厚い類義語辞典の間からハガネさんが使ってるパスワードは入手済み。

わたしはパソコン入門書を片手に、三日間に渡ってねっちりみっちりとした捜査を行い……そして、ついにハガネさんの秘密フォルダを発見しました！

その秘密フォルダに何があったのか。

それはあんまりにも秘密すぎてとても口には出せません。

ただ一つだけ言えることは、ハガネさんは魔法少女だって全然イける口だっただけです。

何だか俄然、勇気が湧いてきました。

だからその日の夜、わたしは勇気を出して、初めて自分の力で、ハガネさんのために出来ることを考えて、お母様とお父様に提案しました。

それは、『ハガネさんの好きな週刊少年漫画誌を毎週買っておく仕事』です！

部屋を掃除して思いました。

もしハガネさんが帰ってきた時、あの海賊王のマンガや、あの銀髪侍のマンガの続きが読めないとなったら、どんなに悲しむでしょう。……あんなにもしろいのに。

その仕事は当然今に至るまで続いていて、わたしが買った分のマンガがもう山を作っています。

これをメンテナンスするのもわたしの仕事。

「じゃあクリスちゃん、お買い物行ってくるわねー！」
と言って、いつものタイムセールに向かうお母様を見送ると、次はマンガメンテの時間です。

どうしてもマンガ表面にたまってしまっほこりを払い、次は中身のチェック。

折れたりしていたら大変とわたしはページを一枚一枚めくってたしかめます。

「ふーむ」

その途中で、わたしはうなってしまいました。

何もマンガの保存状況がおもわしくないワケではありません。

ただ、この生徒会マンガのルビ振りのセンスはさすが過ぎると思うのです。

ほんともう、毎回脱帽させられます。

言ってみれば、『脱帽』バニシングという感じでしょうか。だいぶ違う気がします。

「あれ？」

気が付くと時間がバニシングしていて、ハツとしてしまいました。そろそろお母様が帰ってくる時間です。

「……ったら……か……言えば……は……いか!!」

外から話し声が聞こえてきました。

「お母様!? お迎えにいかないか……!」

わたしは階段を転がり落ちるみたいに駆け下りながら、玄関へ。

お母様はいつも、わざわざ出迎えなくていいのよ、と言ってくれますが、やっぱり誰かが家において、扉を開けてくれるというのはいいものです。

だからせめて、わたしはこの出迎えの習慣だけは絶やさないようになっているのです。

今日は油断していましたが、わたしは玄関が開く前に、何とか扉まで着いて、

「……………け……よ」

何を言っているかは分かりませんが、外から漏れ聞こえてきた声に、お母様が帰ってきたことを確信しました。

「あ、帰ってきたんですか？ 今開けますね」

いそいでやってきたことなんておくびにも出さず、わたしは鍵を開きます。

満面の笑顔を用意して、わたしはゆっくり扉を開いて、そして……。

「お帰りなさ……あ、れ？ あなた、は……」

第六十一章 大説明会

「……から、すぐ来てくださいね、と。」

すみません、お待たせしましたあ」

しばらく見ない間に、クリステイナはスマートフォンを自在に操れるほどに現代に適應していた。

驚きの再会からこちら、話もそこそこに鋼たちは家に入り、客間の布団……は現在クリステイナが使っているそうなので、鋼の部屋のベッドにラトリスを寝かしてきた。

ラトリス自身は少し休めば元気になると言っていたが、原因が原因だけにあまり樂觀視はできない。

苦しそうに寝ているラトリスを不安そうに見ていた鋼だが、

「コウ！ 異世界からやってきたのは、何もラトリスだけではないのじゃぞ？」

シロニヤのその言葉にハツとした。

「そうだ、忘れてた。クリステイナ、よく聞いてくれ！

向こうの世界の人間がこっちに来ると色々危ないみたいなんだ。

それは向こうの世界のなりたちとも関係があるんだけど、魔素と
いつ……」

鋼は真剣な顔でクリステイナに話し始めたのだが……。

「あ、こっちの世界って魔力がないから、MP不足でぐったりしちゃうし、能力値も向こうの十分の一になっちゃうんですよね。

わたしも来たばかりの時はびっくりしました」

逆に簡潔で分かりやすいクリステイナの説明を聞いて、シロニヤと二人で地面に膝をつく結果になった。

「わ、ワシらがあんなに苦勞して話し合ったことを、ほんの数行で……」

何だかにわかに『クリステイナ、実はバカじゃない疑惑』が発生してしまった。

「ところで、その割にはクリステイナは元氣そうだけど？」

「あ、わたしはMPを自動回復するアビリティを持ってますから。

まあ元の世界にいた時に比べると、回復速度がすごく遅くなってますけど……」

「MP自動回復か……」

これで鋼やクリステイナが比較的元氣で、ラトリスが体調を崩している理由がほぼ判明した。

そういえば魔法学院で判明したタレントの中に、MPを自動回復する物も入っていた覚えがあった。

「とすると、ラトリスの不調はMP不足か」

「MPってゼロになるとすごく気持ち悪いんですよ。

リリーアさんは『風邪と二日酔いがいっぺんにやってきた気分ね』って言うてました」

「あはは、リリーアらしいね」

懐かしい名前に、つい鋼の口元もほころびる。

だが、状況はそれなりに深刻だ。

魔法に満ち溢れていたあっちの世界ならともかく、ここでは魔力を補充する方法なんて思いつかない。

鋼が頭をひねっていると、クリステイナがおずおずと提案してくれた。

「あ、あの、だったらわたしのMP回復薬を使ってください」
「いいのか？」

「ハガネさんにはいい物を見せてもらった恩もありますし、わたしもMPがなくなった時のつらさは味わったことがありますから」

いい物というのが何を指すのか分からなかったが、そう言っただけで微笑むクリステイナに、鋼の中のクリステイナ株は天井知らずの上昇を見せたという。

ラトリスに、クリステイナのアイテムボックスに入っていたMP回復薬を飲ませると、青白かった顔に赤みもどり、見るからに表情がやわらいだ。

もちろんこちらの世界にいる限りラトリスのMPは常に減り続けてしまうはずであり、回復薬も所詮対症療法ではないが、血色のもどったラトリスの顔は鋼をずいぶんと安心させた。

こんな時こそ情報収集を、と無理に起き出そうとするラトリスを何とか眠らせて、鋼はクリステイナから事情を聞くために居間にもどった。

鋼とシロニヤはもう一度しっかりとクリステイナと向き合う。

「それじゃ、あらためて、クリステイナがここにいる理由を聞いたんだけど」

「あ、はい！ ああ、でも、わたしだけじゃうまく説明ができる自信がないので、助っ人を……」

クリステイナがそこまで言った時だった。

ピンポーン。

まるで図ったようなタイミングで玄関のチャイムが鳴らされた。

「あ、来たみたいです。」

「ちょっと、出てきますね。」

そう言つてクリステイナは、鋼が止める間もなくぱたぱたと玄関に歩いていく。

「あ、待つてました。上がってください。」

「お邪魔します。」

玄関から、誰かがやってくる気配。

そしてクリステイナと共に現れたのは、鋼の学校の制服を着た女の子。

「あれ、マキ？」

鋼とも親交のあつた、三枝 牧だった。

マキは、鋼の言葉にあいさつさえ返さなかつた。

ただ、冷たい視線で部屋の中を見回して、鋼を、そしてシロニヤをねめつける。

「あんただけ？ 真白は？」

そして、聞くものが凍えるような冷たい声で、端的にそれだけを聞く。

それを不思議に思いながら、鋼がただ首をかしげ、

「ええと、マシロ、って誰だっけ？」

そう口にした瞬間、

バシッ！

鋼の頬に閃光が走った。

一般人であるはずのマキの平手打ちは、こっちの世界で能力値十分の一、とかいう以前に頑強0の鋼には相当なダメージを与えた。打たれた頬を押さえ、びっくりした顔で自分を見上げる鋼に、マキは言い放った。

「あたしを恨んでくれてもいいよ。でも、あんたにはこれくらいしてやらないと分からないでしょ。どーせ、なーんも考えてないんだから」

突然の事態に、鋼だけでなくマキを連れてきたクリステイナや、同じ部屋にいたシロニヤまで固まっていた。

しかし、ほかの二人はともかく、それだけ言ってもまだ驚いた顔をしたまま反応を見せない鋼に、マキも焦れた。

「なに、その顔。なんか言いたいことでもあんの？」

不機嫌そのもの、という調子でそうマキが言って、ようやく鋼も口を開いた。

「いや、だつてまさか、マキが泣くとは思わなくて……」

「ッ！ な、泣いてない！」

マキはそう言うが、それ以上に反射的に目元に持って行った腕が
饒舌だった。

「にやにやすんな!」

「え、いや、でも……」

「でも、じゃない! いいから、正座!」

「ええ?」

鋼が助けを求めて左右を見たが、誰も目を合わせない。

シロニヤはまだ部屋の隅で震えているし、一方のクリステイナは、

「あのマキさんが一瞬で萌えキャラに……」。

これが、性王の力……!!」

何だか震えながらぶつぶつ言ってる意味マキより怖かった。

結局どうにもできずに視線をマキにもどすと、そこには当然顔を

真っ赤にしたマキがいて……。

「せ・い・ざ……!」

「……はい」

渋々ながら、その場に正座した鋼の前に、マキが鬼教官のように
仁王立ちした。

「いいい? 今日という今日はあたしも容赦しないかね!

そもそも、あんたって奴はねえ……」

マキの説教タイムが始まった。

本当ならその日、親子の感動の再会シーンが繰り広げられるはず
だったのだが……。

買い物から帰ってきた鋼の母親と、連絡を受けてあわてて仕事を
切り上げて帰ってきた鋼の父親を出迎えたのは、同級生に正座で説
教される我が子の姿だったという。

「その、本当に申し訳ありません。余所様の家で、あんなことを…。」

それに、結局お夕飯まで頂いてしまって……。」

「いいのよ。マキちゃんにはクリスマスちゃんのことでもずっとお世話になってたし」

我に返ってすっかり恐縮しているマキに、気にしなくていいとばかりに鋼の母親は朗らかに笑ったが、鋼がここぞとばかりに反撃する。

「いや、マキは逆に、普段の態度をちょっとは反省した方がいいって。」

ちよつと気が回るからって、かっこつけすぎなんだよ、いつも「あ、あんたは…！」

マキが手にしたハシを投げつける態勢を見せたものの、さすがに投げることはできず、悔しげに手を下した。

それを見て鋼が楽しげに笑う。

「ほら。スれたフリなんてしてるけど、ほんとはお嬢様育ちのくせに」

「……あんたの前では、普通に、してるじゃん」

ふてくされるように言うマキ。

「性王の力……」

なぜかそれを見て、鋼に憧れのまなざしを送るクリステイナ。

一心不乱に焼き魚を頬張るシロニヤ（猫形態）。

それらを愉快そうに眺める鋼の両親。

今日の結城家の夕食は、賑やかだった。

夕食が終わったところから、各々の状況の説明が始まった。

ちなみにラトリスは今は鋼の部屋でぐっすりと寝ていて、あとで話し合いの結果だけを伝えることに決めた。

まず先陣を切って説明を始めたのは、クリステイナ。

なんとクリステイナは四十日前、白猫シロニヤが出て来た次元の穴を広げてこっちの世界に転がり込んできたらしい。おまけに鋼から神聖魔法言語を覚えようとした時に間違っって日本語を習得したそうで、言葉の問題はなかったとか。

鋼としては、なんじゃそりゃ、と思わなくもなかったが、実際クリステイナはここにおいて流暢な日本語を話しているのだから、まあ疑う余地もないだろう。

ちなみにクリステイナを鋼の家に連れて来たのがマキで、その縁でクリステイナともメル友になっているらしい。……クリステイナ、ちよっと現代に適応しすぎじゃね、と思わなくもない。

次にマキの話だが、何でも彼女の親友の真白が鋼を追って異世界にやってきていたらしい。まさかと思っってシロニヤを振り返ると、「にゃ！」

と肯定されたから間違いない。……今の形態だと、否定の時でも「にゃ！」と言いきりすが、たぶん間違いない。

ついでに、真白についてはあれからすぐに思い出した。数えるほどしか話をしていない相手であっても、クラスが同じで名前がかぶっている相手を忘れるはずがない。その割にさっきすぐに出て来な

かったのは、まだ日本から離れすぎていて、とっさに出て来なかっただけ……と鋼は自分に言い訳をした。

鋼の両親からは、鋼が今、世間的にはどういう状況になっているかを聞いた。

クリステイナとマキが訪ねてきてからは、鋼の失踪届を取り消し、学校は休学扱いということにしてもらっているらしい。

あと、やっぱりちょっとだけ、感動の再会場面はあった。ただ、さすがに恥ずかしいので、鋼としてはそれについて語るつもりはない。

最後に鋼がどうなったのかについての説明があつて、やはりこれが一番長くかかった。鋼の死亡から転生、異世界での冒険の話は全員を驚かせた。

鋼の異世界での行動を比較的知っているクリステイナも、特級魔術師の資格をもらったというところで、ほえーっと緊張感のない驚きの声を出していたし、両親は鋼が三度も死んだというところに反応していたし、マキに至っては、
「うっわぁ。ゆっきーまさか、ほとんど遭遇すら出来てなかったとかどんだけ……」

完全にorzのポーズである。

そしてさらに、話が『向こうの世界は近々魔物によって滅ぼされる』というところにまでおよぶと、聞いている全員が顔を青ざめさせた。

鋼の両親は沈痛な面持ちで顔を見合わせ、マキはきゅっと唇をかみ、クリステイナは意味もなくオロオロと手を動かし始める始末だ。

全員の状況確認が終わって、そこでようやく、これからについての話に移る。

「ええと、まずクリステイナ。お前の魔法でまた次元の扉？っていうのを開いたりできないのか？」

「あ、それは無理ですう。もう場所も分かりませんし、分かったとしても、十分の一になっちゃったわたしの魔力じゃとてもとても……」

世界滅亡予告を聞かされて以来、すっかりダメ子にもどってしまったクリステイナが、弱々しい口調で答える。

だとすると……みんなの視線が、焼き魚に食いつく猫に集まる。

それに気付いたシロニヤが、猫の姿のまま仁王立ちして胸を張る。

「ふっふん！ ワシを誰と心得る！ いやしくも神、シロニヤ大明神様であるぞ！」

転生を司るワシにかかれば、異世界転移など朝飯前なのじゃ！」

「おおー」

どうせシメサバの味がするからと、鋼がシロニヤにあげた焼き魚を片手に持ちながらの大演説である。

が、

「ま、まあそれも全力状態の話であって、そもそも転生も召喚もなしに異世界転移とかかなりの反則技じゃし、そういう無理を通すには神様パワーがたくさん必要じゃし……」

なんだか雲行きが怪しくなる話の流れ。

「それで、結局？」

「う、うむ。実はコウに祝福を使ったせいで異世界転移するには力が足りないのじゃよ！」

そんなシロニヤの言葉に、

「うわぁん！ 神は死にました！」

とその場に崩れ落ちるクリステイナ。

こいつニーチェまで読んでんのか、と戦慄する鋼だが、その前にシロニヤが食って掛かった。

「し、失礼なことを言うんじゃないのじゃよ！」

そ、そうじゃな。あと二ヶ月くらいじっとして、神様パワーがたまれば異世界転移くらい簡単にやってみせるのじゃ！」

いきりたつシロニヤに、

「神の再誕！」

あっさり手のひら返しをするクリステイナ。

こいつ意外とお調子者なんじゃ、と疑う鋼ではあるが、とりあえずこれでクリステイナの帰還の目処は立った。

「そうか。とりあえずそれなら、向こうに行くだけなら何とかかなるんだな」

「はい！ シロニヤ様様様で……あれ、様多いですか？ とにかくそんな感じです！」

「今日が11月の10日だから、向こうに行けるのは、大体1月の10日くらいからか」

「だったら、学院もそろそろ授業をやり始める頃ですね！」

えへへ。向こうにもどつたら、一緒にリリーアさんに会いに行きましようね？

ハガネさんがまた戻ってくるなんて思ってないでしょうから、きっと喜んで……」

盛り上がる鋼とクリステイナ。

だが、そこで、

「ちょっと、待ってくれないか？」

今まで、ずっと黙っていた鋼の父親が、口を開いた。

「父さん？」

鋼のいぶかしげな視線を正面から受け止めて、彼は言った。

「鋼。もう向こうに行くのはやめなさい」

「……え？」

予想もしていなかった父親の言葉に、鋼が目をぱちくりとさせる。

「で、でも、ハガネさんは英雄で、魔術師で、向こうに仲間だって

……」

クリステイナまで混乱してまとまりのないことを言うが、

「それでも、だよ。滅んでしまうような世界、死んでしまうような場所に、親として、息子を送り出す訳にはいかない。

……いや、もうそんな言い訳はどうでもいい。なあ鋼。わたした

ちは、鋼にいらなくなって欲しくないんだ。もう、二度と」

それでも彼はぶれなかった。

まっすぐ、鋼だけを見つめてそう言った。

オロオロとするだけのシロニヤとクリステイナ。

鋼を見つめる父親とその父親の手に自分の手を重ねる母親。

その視線を受け止めて、考え込む鋼。

その中で一人、三枝牧だけが黙って顔を伏せていた。

二律背反に苦しむように、うつむき、唇を噛み締めて、何も言わずに、ただ、下ばかりを見つめていたのだった。

第六十二章 おいかけのいし（前書き）

注意

感想欄でご意見を頂いたので、念のため警告をさせて頂きます

帰還編のラストを盛り上げるため、この章前後からシリアス風な描写が入ります

いつもより若干重い雰囲気になるかと思いますが、所詮この作品ですので、あまり深く考えずに安心してお楽しみ頂ければ幸いです

第六十二章 おいかけのいし

マキの家は、そこそこ厳しい。

それでもクリステイナ関係で結城家にはよく来ていたため夕食までは許可が出たのだが、まさか何の準備もなしに泊まりというワケにもいかない。

話し合いには結論が出ないままではあったが、マキは家に帰ることになり、自然、鋼がそれを送るといった流れになった。

懐かしい自分の部屋にあらためて感傷的な気分になりながら、ラトリスが寝ていることを確認して以前の普段着に手早く着替える。何だかちよつとサイズが合わない感じがして違和感があったが、すぐに気のせいだと思い直してマキが待つ玄関に向かった。

実は、何度か家に招かれたこともあるので、マキの家の場所は鋼も知っている。

なんと、鋼の家から徒歩でも十五分、自転車を使えば五分程度で行き来できる距離だ。

中学までとは違い、高校ではこんなに家の近い知り合いは他にいないことが、鋼がマキに親しみを感じる理由の一つにもなっていた。

家までの帰り道、マキの口数は少なかった。

自分から何かを話すということはなく、鋼の言葉にも一言二言を返すだけ。

だが、もうすぐ家が見えてくる、というくらいの時になって、突然自分から口を開いた。

「あたしは、引き留めないからね」

「え？」

驚いて横に振り返る鋼に、マキは言葉を重ねる。

「真白が向こうにいる以上、あたしが引き留めるなんて思うな、って言った」

「あ、ああ。うん」

鋼はいきなりの話題に驚いたが、たぶんマキだっと思ってずっと考えてたんだろう、と逆に納得もした。

「そっぴやマキは、ずっと真白さんと仲良かったもんな。そりゃ、心配だよな。」

じゃ、もし僕が向こうへ行くって言ったなら、マキは応援してくれるってことか」

それはそれで心強いかもなー、と呑気に漏らす鋼に、マキは苛立ちを隠さずに答える。

「何でそーなの？ ぜんっぜん、そーゆーこと言ってるワケでもないけど」

「そっぴなのか？」

やはりどこか気の抜けたようなやり取り。

「いくらあたしでも、死ぬかもしれない場所に、行ってこい、なんて言ったりしないって」

「でもそれって、背中を押してくれるってことだろ？」

「ちがう!?!」

夜の街に、マキの余裕のない声が響く。

「…マキ？」

突然の怒声に目を丸くする鋼に、マキは目をあわせずに言う。

「大声出して、ゴメン。」

ただ、あたしは真白の味方だから、あんたが行くのをあたしが反対するワケにはいかないってだけ。

それ、ただだから。あたしからはそれ以上、何も言っつもりはないよ」

鋼には何がどう違うのかは分からなかったが、これ以上この話を続けてもいいことはなさそうだ。

軽い調子でまとめることにする。

「ま、行くか行かないか、なんて、向こうに行けるようになってから考えればいいだろ。」

今のところ二ヶ月は行く手段はないんだから、そんなに真剣に考えることじゃないって」

その、鋼の論調に、

「あいつと似たようなこと、言ってんじゃないっての…!」

かつていなくなる直前の親友の言葉を思い出したマキは、小声でそう吐き捨てた。

「ん?」

それに気付かず、不思議そうな顔をしている鋼に、マキは首を振った。

「もう、ここでいい。家、着いたから」

「え? …あ」

鋼が見上げると、そこにはたしかに見覚えのある建物があった。

「ああ。そうだな。じゃあ、マキ」

「…なに?」

マキは家の方を向いたまま、振り向きもしない。

「今日は、じゃないか。…今まで色々、ありがとう」

「ッ!?!」

「それじゃあ」

そこで踵を返す鋼の腕に、

「え? マ、キ…?」

マキが、しがみついていた。

鋼の腕に顔をうずめるような姿勢なので、マキの顔は見えない。ただどあのマキが、こんなことをするなんて鋼には信じられない。たしかに、何らかの異常な事態が起こっていた。

「放さないと言いたげに、まるで抱きしめるように腕をつかんだままで、マキは、ぼそぼそとしゃべり始める。

「あんたも、真白、いや、ゆっきーの奴もさ。」

どっちもどこ飛ぶか分かんない鉄砲玉みたいで、そんなのあたしなんかには止めれないってのは、分かってんだ」

くぐもった、なのに不自然なほど明るく、軽い声。

「なに、言ってるんだよ」

鋼はそこに余計に暗い物を感じて、背筋がぞわっと総毛立つ心地がした。

これ以上マキを追い詰めないように、できるだけ自然に、鋼は言葉返す。

それでもマキの口調は変化しない。

平坦なほど、明るい声で、

「だからさ。せめていなくなる時は、あたしに一言欲しいよって話。」

「メールなんかじゃなく、もちろん直接ね」

「そんなの、言われなくても……」

「ウソでしょ、それは。だったら何で、あんたもゆっきーもいきなりいなくなったのさ」

それを言われると、鋼としては言葉もない。

「勘違い、しないでよ。責めてるわけじゃないから。」

「ついていけない、あたしが悪いだけ」

「そんなこと……」

抱きしめられる鋼の腕に、ギュツと力が込められた。

「ゆつきーが大事だってんなら、あたしが向こうに行って探してくればいい話で、あんたが何より大事ってんなら、友達見捨てる覚悟で引き留めればいいってだけの話でさ。」

「どっちもできないあたしは……ちゅーとはんぱでするい、んだ」「そりゃ、気にしすぎ、だろ」

マキの震えが、腕を通して伝わってくる。

だが、いつも気丈にふるまってきたマキの、意外な本音が聞けた気は、した。

そこで崩れ落ちてしまうかと思ったマキは、

「そーかもね。そーいうところは、あるのかも」

しかしやつぱり、気丈だった。

今度は震えもない、けれど真摯な口調で、鋼に頼み込む。

「だけど、あたしには一緒に行くことも、止めることもできないのは、ホント。」

だからせめて、約束してよ。

どこかに行く時は、もう一度あたしに会いに来るって。黙っていなくなったり、しないって」

「むり、かな？」

やつぱりもう、マキの声は震えてはいない。

けれど、つかまれた腕にこもった力は、もう痛いほどになっていた。

最近女の子との約束が多いな、と思いつつ、鋼はうなずいた。

「分かったよ。約束する」

「そ。さんきゅー！」

マキはそう答えると、鋼の腕から離れて、パツと後ろを向いた。

「ほーらほら。用事済んだら、さっさと帰った帰った」

そしてすぐ、鋼を追い出しにかかる。

この変わり身の早さには鋼も苦笑した。

「せめてこっち向いてくれてもいいだろ？」

しかし、その返答は意外なもので、

「だめ。いま、顔、見せらんないから」

なんてマキに言われれば、鋼も引き下がるしかない。

「それじゃ、また」

そう言って歩き出すと、

「うん。また、ね」

後ろ向きのまま、マキが手を振って送ってくれた。

鋼が角を曲がって見えなくなってしまうても、マキはずっと、手を振り続けていた。

「……………ふう」

一人きりの家路について、鋼は肺にたまった息を吐き出した。

マキと二人きりの時間は独特の緊張感と他では得られない刺激があり、それはそれで貴重なのだが、一方で何か物足りない気もした。

マキと他の人で、一体何が違うのだろうか。

鋼はちよっとだけ考えて、

「ああ、そうか……………」

すぐに、気付いた。

「マキといると、ツッコミ入れる隙がまったくないんだ」

そしてそれを物足りなく感じる辺り、鋼は結構因果な人間なのかもしれなかった。

家に帰ると、玄関で両親が待っていた。

二人そろつての「おかえり」の言葉に、こちらも「ただいま」を返すと、避けては通れないことを話し合う。

クリステイナやシロニヤにも退席してもらって、時には涙がこぼし、時には怒声を交えながら、納得がいくまでとことん話し合った。鋼は向こうの世界に行くか行かないか、どちらかまだ決めかねていることを話し、もし行くことを決めたなら、二人にはそれを認めてほしいと伝えた。

両親は渋ったものの最終的にはそれを了承し、交換条件で、異世界に行くか行かないかにかかわらず、次の月曜日からはまた学校に通うように説得された。

休学措置がそう簡単に解除できるのかはよく分からなかったが、両親がはつきりと請け負ってくれたので、鋼はそれを了承、こうしてめでたく両者は合意を得た。

その話し合いが終わった頃には、すでに時計は夜中と言える時間を示していた。

とりあえず鋼も眠ることにしたのだが、病人であるラトリスを動かすワケにはいかないので、鋼が自分の部屋に予備の布団を敷いて寝ることになった。

というか、気を利かせたクリステイナが、もう布団を敷いてくれているらしい。

そして、鋼が自分の部屋に帰ると、

「なにやってんの、お前ら」

鋼が寝るはずの布団の上で、猫が枝にじゃれついていた。

「冬は猫科動物の温かさが恋しくなる時期なんじゃ！」

と意味不明なことを叫びながら白猫が枝に飛びかかって布団から落とそうとすると、

『隣に寝るのは、相棒の役目です！』

とばかりに枝がブルブル震え、白猫を振り落とす。

ツツコミどころ、満載である。

だがそれを見て、鋼は不覚にも家に帰った時よりも『帰ってきた』気分になってしまった。

しかし、あんまり甘くするとこれが毎日の恒例行事になりかねない。

「な、なあに。ちょっと領土争いをな」

などと不審なことを言うシロニヤを右手で脇にどけ、シロニヤを威嚇するように振動をしていた木の枝を左手でつかんで机に立てかける。

疲れているのに、布団を乗っ取られてはたまらない。

「ここは、僕の領土だからな」

一応そう主張してから、布団の上に横になった。

横にどけられた白猫と枝が『ここからが本当の勝負だ!』と言わんばかりににらみ合っていたような気がしたが、特には気にせず、

「ああ、そういえば……」

思いついて、鋼は着替えの時にポケットに移しておいた冒険者カードを取り出す。

魔力がないはずのこの世界でも、冒険者カードはきちんと機能していた。

「能力値は……変化なしか」

こつちの世界では能力は十分の一になっているはずだが、カードの数値上は特に変化はないようだった。

他に特に変わっている物はなく、アビリティやタレント欄はあいかわらず不明のまま。

「そういえば、フィート欄は全然チェックしてなかったな……」

言いながらフィートの項目を見ると、そこには鋼の歩んできた異世界での歴史が刻まれていた。

鋼の中に、次々と懐かしい思い出がよみがえる。

最初の『戦女神の加護』はミスレイの手紙によって手に入れたフィートだった。

次の『元生物史上最弱』は、少し変わっているものの、ギルドで

最弱ランクをたたき出した時のもの。

これらは初めてギルドに行つて、受付をしていたギルド員、キリスに教えてもらったものだと思ひ出す。

そして、次。

たしか『異界の神とマブダチ』とかだったなと思つてそこに書かれている項目をたしかめようとして、

「あぶなあああああああああい!!!」

危険すぎる内容に、思わず叫んでしまっていた。

「あ、危ないのはおぬしなんじゃよ!

いきなり叫んでどうしたんじゃ!？」

「う。悪かつたよ……」

シロニヤにまで注意されることになってしまつて、鋼も反省しきりである。

だが、こんなものを見てしまつては、ある程度は仕方ないと思うのだ。

三番目に書かれていたフィートは『異界の神とマブラブ』。

おそらくだが、シロニヤとの仲が発展してマブダチとラブラブの間くらいになつたからこゝろ変化したのだろうが、余計なことをしてくれた物である。

本家のタイトルの方も似たような連想からついたのだろうか。だが、

「ま、まあ、『ヴ』じゃなくて『ブ』だから平気だよな、うん」

無理矢理自分を納得させて、次へ。

「やっぱりあったのか、この称号」

称号ではなくてフィートなのだが、鋼はあまり細かいところは気にしなかった。

マブラブの次に出て来たのは『竜殺し』。

間違いなく巨竜を倒した時に手に入れたものだろう。

ゲーム好きの鋼からすれば、『竜殺し』とは実に胸おどる響きである。

ただ、ラーバドラゴン自体は中級冒険者が倒せる相手だったので、このフィートの希少価値は実に低そうだ。

「あれ、これって……」

その次にあった『命名者』というフィートに鋼は戸惑う。

「もしかして、クロニヤに名前をつけた時……？」

しかし、その程度のことではフィートは手に入るものなのだろうか。だが次の項目を見ると、そこにあったのは『輪廻転生』というエンジェルナイトにクラスチェンジできそうな物だったので、一度死んでしまったクロニヤ戦の時の物でまず間違いない。

だとすると、その直前で何かを名付けたとなるとクロニヤの件しかないはずだ。

疑問を抱きながらも、鋼の視線はその下へ向かう。

順番からすれば、次はダンジョンを攻略？した時の物になるが、あれは洞窟の見張りに立っていた冒険者に作業も手柄も全て丸投げしてしまったので、特に何も獲得していないだろうというのが鋼の予測だった。

そして、その予測は当たったようなのだが……。

「……なあ、シロニヤ？」

鋼は、少し硬い声でシロニヤに尋ねた。

「なんじゃ？」

少し不機嫌そうなシロニヤに、しかし鋼は構わず質問をぶつける。

「もしかして、シロニヤが僕に祝福を使ってくれた時、フィートに『シロニヤの祝福』みたいな物が追加されたりしたのかな？」

鋼の問いに、シロニヤはあっさり答えた。

「そりゃそうじゃる。フィートなんて実益のある二つ名みたいなものじゃが、特に神様関連の恩恵には敏感じゃからの。」

祝福なんぞを受けた日には、その瞬間に追加されるはずじゃ！

……もしや、ワシのことが何か書いてあるのかの？」

「い、いや……」

鋼は言葉を濁す。

「ふうむ？ じゃったら最後に獲得したフィートをワシに教えるのじゃー！」

「え、ええと……『魔道書の詠み手』だな」

「ウソじゃよ！ 今一瞬、目が下のを見てから上にもどったのじゃ！

一番下には何が書いてあったのじゃ？！ 早く吐くのじゃー！」

「何でそんなことばっかり目ざといんだよ……！」

鋼は叫ぶが、それは自白とほぼ同義だった。

「やっぱり隠してたではないか！ ほらほら、早く言うのじゃよ！ 当然の帰結として、さらに勢いを得たシロニヤが鋼を問い詰めるかかるが、

「いや、本当にホントなんだって！ 最近フィートは手に入れてないみたいなんだうわー残念だなー！」

「そんな大根にも笑われるような演技でワシは騙されんのじゃぞ！？」

それでも鋼が言えるはずがない。

おそらく『シロニヤの祝福』があつたであろうフィート欄の最後に、『シロニヤの思慕』なんてフィートがあつたなんて……。

シロニヤにだけは絶対、言えるはずがなかった。

と、激しく動いた鋼の服のポケットから、何かが落ちた。

「あ、それ……」

落ちたのは、二つの小さな石。

どちらも大きめの飴玉くらいの大きさで、真珠のように白く輝いている。

冒険者カードと一緒に、洋服に移しておいた物だ。

これは話を変える好機と、鋼が飛びつく。

「なあ。これって一体なんなんだ？ 『ドール・ア・ガーの塔』の最上階で見つけたんだけど」

「おお！ これはまちがいでなく『相思相愛の証石』じゃな」

「『相思相愛の証石』？」

「そうじゃ。使い方としては離れ離れになる恋人同士がお互いを見つけられるように片方ずつ持ち合う、とかじゃったかな？

効果は……まあ見てもらった方が早いのじゃ。

一つをワシに、もう一つを持って、隣の部屋に行くのじゃ」

うまく話がそらせたことをしめしめと思いながら、証石の片割れをシロニヤに預けて、隣の部屋に。

【そこで、証石を落としてみるのじゃ】

久しぶりのオラクルでシロニヤの声を聞いた鋼は、証石を握っていた手を開く。

すると証石はゆっくりと落ちて……と思ったら、途中から引き寄せられるように鋼の部屋の方へゆらゆらと動いて、

「か、壁を抜けた？」

壁に潜り込むようにして消えていった。

あわてて鋼が元の部屋にもどると、ちょうど鋼が落とした方の証

石がシロニヤのところへ届くところだった。

証石はシロニヤにぽてつとぶつかると、ぼわわぁん、と淡く光って、落ちた。

「な、なんなんだ、今の？」

「ん？ 再会の演出じゃよ？ もっと長い距離を進むと、もっと強く光るのじゃ！」

「いや、そういうことじゃなくて！」

それ、なんか壁抜けとかしたんだけど！？」

鋼が動揺しながら報告すると、シロニヤは鷹揚にうなずいた。

「この証石は人と人をつなげる力を持った石なんじゃ。まあ、正確に言うと、生物と生物を、じゃが。」

片方の証石を離すと、その証石はもう一つの証石を持った生き物のところへ、あるいは、最後に証石に触れていた生き物のところへ飛んでいくのじゃ」

「この場合は、その生き物っていうのがシロニヤだったってことだな？」

鋼はどこか嫌そうに確認する。

なんとなくこの石の設計思想に邪なものを感じたせいだ。

「うむ。これのすごいところは途中にどんな障害物や怪物があっても全てすり抜け、必ず直線距離で目標のところまで飛んでいくので相手を逃がすことがないということじゃな！」

「すでになんか、恋人同士の発想じゃないんだが……。」

でも、それでも逃げられないってことはないだろ？

たとえばほら、相手が石を壊したら？」

「なんとこの石、どうやっても壊せないのじゃ！」

ダンジョンの壁と同じ、破壊不可能オブジェクトという奴じゃな
「！」

「なんとという無駄スペック！ でも待て、じゃあ、相手が素早く逃

げたらどうするんだ？」

「相手が加速した分だけこの石も加速するのじゃ！ しかも相手が減速してもこちらは減速しない！」

「性格悪いな！ だけど途中で誰かに石を譲ればさすがに解決だろ？」

「それは……たしかにそうなのじゃ。

じゃから、どうしても逃がしたくない相手に使うなら、愛用の武器が防具にこっさり組み込むに限る、と酒の席でルウィーニアが言っていたのじゃ」

「やっぱり犯人は光の女神様かよ！！

というかこれ、相思相愛どころか完全にストーカー用のアイテムだよな！」

ベルアードが手に入れたりしなくて本当に正解だったと鋼は思った。

「と、ところでじゃが……」

「うん？」

シロニヤがめずらしく健気な雰囲気の話し始めるので、どうしたのかと思ったら、

「こ、この石、びっくりするくらい綺麗じゃよな。

他意はないんじゃないが、片方だけでいいからワシに譲ってくれるかの？」

「今の話をした後で平気でそんなことが言える、お前の度胸にびっくりだよ……！」

図太いとか図々しいとかいうレベルじゃなかった。

だが、シロニヤは微塵も動じない。

「ふつ、当たり前じゃる？」
不敵に笑うと、自分を指さして、言った。

「じゃってワシの心はぜんぶ、鋼でできているのじゃからな！」

「うまいこと言ったつもりかああああああああ！！！」

猫のくせにドヤ顔をしているシロニヤにイラッとした鋼が、シロニヤにつかみかかる。

「にゃんとおー！！！」

対して、猫形態になって敏捷性の増しているシロニヤも果敢に反撃。

「シロニヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「コオオオオオオオオオオオオオオオオウ！！！」

熱い夜は、まだまだ始まったばかりである。

ちなみに鋼 vs シロニヤの戦いは、騒ぎを聞きつけてやってきたクリステイナが、

「これがほんとの、夜のキャットファイト……！！！」

とじぶちやいてみなを凍らせるまで、ずっと続いたそつな。

第六十三章 鋼の反省回

目が覚めるとメガネ。

「うわぁああああああああああああああああああ！！！」

寝起きドツキリ体験を受ける率には定評のある鋼の今朝のおめざドツキリは、メガネと貧乳には定評のあるラトリスさん謹製のドツキリハプニングドツキリでした。

「な、なんじゃ？」

錯乱して変なことになっている鋼の声に跳び起きたのは、猫形態になって鋼の横に寝ていたシロニヤ。

そのシロニヤも、自分と密着している鋼がラトリスとかなりの密着度で密着しているのを見て、

「なんたる隙間率のなさ！ これぞ貧乳、匠の技か！」

錯乱して何だか変なことを言った。

「ええと、それで、ラトリスは何でこんなことを？」

ようやく落ち着いた鋼がラトリスに問いかけると、いつもの調子でラトリスが答えた。

「はい。どうやらハガネ様の近くにしていると体調が回復するようなので、無意識に近付いていったのではないかと」

「なんで、僕の近くにしていると調子が回復するんだ？」

鋼の問いに、クリステイナがまじめな顔で、

「愛、ですね……」
と答えたのでとりあえず殴っておく。

「いたい……」

「自業自得だ」

という感じでお手軽にクリステイナを黙らせたところで話を再開。
「なんで、僕の近くにいと調子が回復するんだ？」

と、せっかく仕切り直したにもかかわらず、

「あの、でも真面目な話、ラトリスさんが元気になった理由、分かると思います」

発言したのは、またクリステイナだった。

「へえ？ どういうことなんだ？」

とりあえず、握り拳を用意しながら聞く。

「ぶ、武力外交はよくないと思います！」

と非常に腰が引けた態度を取りながらも、

「えつとですね。こう、よく目を凝らしてみると、この部屋、少しだけ魔力があるんです。」

というか、何だかハガネさんの体から、魔力が出てるような……」
それなりな衝撃発言をかましてくれた。

もしかしてそういうタレントが……とシロニヤを横目で確認する
と、

「あるのじゃ」

もはや以心伝心。

鋼が何か言う前に肯定してきた。

そして日に日に人間から遠ざかっている気さえする、鋼のびつくり人間っぷりである。

その辺りの詳細は別にどうでもいいのか、

「そのような次第ですので、魔力回復を」と抱き着いてくるラトリスを、

「うわぁ！」

鋼はスウェーバックでかわす。

「どうして逃げられるのですか？」

「いや、逃げるってそりゃ！」

叫ぶ鋼に、

「ふむ……」

考え込むラトリス。

結果、

「ハガネ様、私がかくつついていては、迷惑ですか？」

ラトリスは泣き落としにかかってきた！

芸が細かいことに、メガネを外して潤んだ瞳で見上げてくる。

その威力に、鋼は内心、息を飲んだ。

ダメだ、こんなのNOが言えない日本人には、ましてや思春期の男子には断り切れない、と思いつつ、

「うん。まあ、そりゃあね！」

意外と普通にそう言い切ってしまう鋼は、日本人男子ではない疑惑が急浮上である。

「…そうですか」

そしてそれを聞いたラトリスが意外と普通にへこんだのはさすがに気が咎めたのだが、そこで終わらないのがラトリスだった。

「ではクリスティナ様。ご協力をお願いします」

「へ？ わ、わたしですかあ？ で、でも……」

「今なら、ドサクサ紛れに八ガネ様の体を触り回しても問題なしとします」

「クリステイナ、いつきまーす！」

ほんの数秒でクリステイナを陥落させる敏腕ラトリス。

「ちよ、ちよつと待った！ 色々とおかしい！」

必死で抵抗するものの、クリステイナに実は意外とないワケでもないふくらみを押し付けられつつ右半身を封じられ、

「シロニヤ、お前もか……」

「じゃって最近、スキンシップ不足じゃと思うんじゃ」

「お前も朝、ひつついてたくせにか！？」

わざわざ少女形態にもどったシロニヤに左足を封じられ、

「では、失礼いたします」

動けない鋼に迫りくるラトリス。

そして、そんな喧騒を部屋の入口から呆然と見守る母。

「息子が、しばらく見ない間にとんだハーレム野郎に……通報、通報しなきゃ！」

「どこに！？ っていうか誤解だよ母さん！」

ちなみに最後の鋼の台詞以外、ラトリスにあわせて大陸共通語で話しているので、母親に会話の内容は分かっています。 〓通報〓
こわもて満載の警視庁到着〓タイーホ〓GAME OVER！！

「いろいろと、ひどい目に、あつた……」

鋼は絶体絶命の状態からかうじてコンティニューできたが、数年ぶりくらいに母親からマジ説教をくらう羽目になった。

「はあ……」

フラフラで部屋にもどってきた鋼は、シロニヤに微妙な視線を送った。

「ど、どうしたんじゃ？」

いつにない湿度の高い目に、シロニヤもちょっとだけ動揺しながらそう尋ねる。

「いや、母さんに『もう完璧に犯罪の域だから、頼むからシロニヤちゃんだけはやめなさい』って言われてさ。

僕は『あいつあ見えて本当は三歳だから』って言い返そうとして、我ながらこれはないわあ、と思って黙ってたらやっぱり怒られた」

「ぬ、ぬう！ ワシは神様じゃぞー！」

「だからなんだよ……」

疲れ切った鋼。いつものツッコミにもキレがない。

ただ、恨めしげにシロニヤの体を上から下まで眺めまわした。

「な、なんじゃ？ そんなになめまわすようにワシの体を……ハッ

！ まさかワシの……」

「それはない」

「まだ何も言っておらんのに！？」

シロニヤは今日も元気いっぱいだ。

「なんかあらためて考えると、シロニヤってある意味すごいサバ読みというか、年齢詐称もいいところというか……」

鋼がそう言いかけると、

「ふ、ふざけるのではないのじゃ！

神様の年のことを言うなら、ワシなんてまだまだかわいいもんじやぞー！」

なぜかよく分からないところでシロニヤが切れた。

「よいか!? 分かりやすいところではアレじゃ!」

向こうの世界にいる古神、つまり、向こうの世界を創った創世メ
ンバーなんて、ほんとひどいもんじゃぞ!？」

「古神……」

聞き慣れない単語に、鋼の厨二病センサーがうずいたが、シロニ
ヤは無視して続ける。

「古神の中でも一番有名なルウィーニアなんてアレじゃよ? ずつ
と、たぶん生まれた時から姿だけは二十歳そこそこじゃよ?」

「え、ああ、まあ……」

しかし、戦の女神が七十代のおばあさんとかだったらそれは嫌だ
ろう。まあ、幼女な戦女神とかだったら、逆に需要がありそうで嫌
だが……。

「しかも精神年齢もそのくらい、いや、もっと前で止まっておるか
らの!」

古神の中でルウィーニアが一番有名なのは、ベルアードにフラれ
たあやつが『もう男なんて信じない!』とか言っつて、仕事に逃避
してるだけじゃし!」

「また聞きたくなかった暴露話を……」

ここに光の女神の信徒とかいなくてよかった、と鋼は胸を撫で下
ろす。まあ、ミスレイだったらこのくらいの話、むしろ積極的に加
わって一緒に盛り上がりそうだが。

「数百年もずっと失恋を引きずるとかアホじゃろあいつ!」

しかも酔つと、あの時ああしてればベルアードを……しか言わな
いのじゃ!

ほんつともう、信じられないほどつっざい女じゃよ!」

「いや、それも年齢に関係な……」

突然のマシಂಗントークに、たじたじになった鋼が制止しようとするが、シロニヤはまったく止まる気配がない。

「他のやつだってそうじゃ！ サニーだって、もう数千年、下手すれば数万年生きておるといふのに、人間から神になった時が若かったからって、ずっと若者気取りじゃぞ？」

「というか古神の中でも二番目に神格が高いというのに、『わたしは神様から力をもらっただけのただの人間』とか言い張っておるのがまったく理解できないのじゃ！」

「お前もつ何か、ただ知り合いの悪口言いたいだけだろ」

「そ、そんなことはべつにないのじゃよ!？」

あ、じゃが年齢詐称と言えば、あんのクツソいまましいクロ…

…

「クロ……なんだよ？」

「いや、いいのじゃ。あんな奴のこと、話す価値もない」

鋼としてはそれなりに続きが気になるところだったのだが、めずらしく低温な怒りを見せたシロニヤは、そこで話を打ち切ってしまった。

「と、とにかくじゃ。神様にとっての外見というのは、年齢よりもその本質、性質によって決まるのじゃ。」

じゃから、もう完全に神格が定まった古神のような神はともかく、ワシのようにまだ成長途中の神様なら、望む姿に自分を変えることじゃってできたりするのじゃ。」

お、おぬしがワシにどんな姿をしてほしいのか希望を言ってくれば、か、叶えなくもないかもしれんのじゃぞ？」

「え?」

「つ、つまり、おぬしの理想の姿になってやると言っておるのじゃ!」

不意打ち気味な提案に、鋼はしばし首をひねったが、「うーん。いや、やっぱりシロニヤは、そのままでもいいんじゃないか。」

うん、シロニヤは今のままが、一番かわいいと思う」

「え、な、う、うえ!？」

不意打ち返しされて、シロニヤは大いに狼狽する。

「あ、あ、いや、あの、その……じゃな! あ、あまりに急すぎてなんと行ってよいか分からないのじゃが、おぬしの気持ちは……」

「やっぱり子猫のもふもふって最強だよな!!」

「だいたい予想通りのオチじゃが、アレは仮の姿なんじゃよ!？」
シロニヤは涙混じりに絶叫した。

そんなこんなで始まった日本帰還後の二日目。金曜日。
鋼は今日は特に何もせず、部屋の整理や休養に時間を充てることにした。

どうやら体から魔力を出しているらしい鋼は、ラトリスのためにも部屋から動かない方がいい、というのは当然理由の一つだが、それ以外にも一応理由がある。

まず、鋼の部屋は一見片付いているようできて、よく見るとかなり荒らされているという不思議な状態だということ。ちなみにその犯人がクリステイナだと分かった時には、MPポーションの件で上がっていたクリステイナ株が大暴落する音が聞こえるほどだった。

特にパソコンの一件。

魔法学院の制服に着替えたクリステイナがやたら鋼の前でポーズとかをするので、一体どうしたのかと聞いたたら、

「え？ でもこういうの、好きなんですよね？」

と微妙にパソコンの方を見ながら言われた時は、軽く目の前が真っ暗になったものだ。

だから、夜〇月と大体同じ程度の工夫を凝らして部屋の中についた、鋼の秘密の図書館が暴かれていないか、確認したかったという意味合いもある。

あとはまあ、異世界ナイズされた鋼の思考回路を慣れ親しんだ現代社会の物にふれることで、少し現代に近付けておこうという目論見もある。

家の中ならいいが、外でいきなり大陸共通語なんかで話してしまつては、一瞬で不審者扱い余裕だろう。ついでに大陸共通語で話すラトリスがいるとむしろ逆効果になってしまうので、クリステイナに頼んでラトリスにも翻訳の魔法をかけてもらった。

その魔法にも六回失敗して七回目にやっと成功したので、こっちの世界に来て魔力が不安定になっているんだなと思つたら、クリステイナの火属性以外の魔法の成功率はもともとこのくらいらしい。世界間移動についてはクリステイナの次元の扉を多少あてにしている部分はあつたのだが、こうなると考え直した方がよさそうだと鋼は思った。

そして、何もしない時間を設けた、最大の理由は、
「ちゃんと、考えないと……」

これからのこと、それに自分のことを、きちんと考える時間を作

るためである。

昨日のマキの思いつめたような態度を思い出す。

あれはもちろん、真白と鋼、自分にとって親しかったはずの二人が自分に何も言わずに消えてしまったことがガシガシとマキの精神を削っていった結果だと思っただが、鋼がまたマキに一言もなしに消えると思われていたことは、ちよっぴり鋼の胸にもこたえた。

振り返ってみると、たしかに自分でもちよつとだけ、無鉄砲なことをしたり、仲間にきちんと説明をせずに行動していた場面があったのではないかと我が身を顧みざるを得ないくらいには、それなりに。

そういえば武闘大会の時も魔法学院の時も、なんだか説明不足で仲間に誤解をさせてしまったようだし、ダンジョンの時は結局説明すら何もしなかった。

これはよくない、と反省したのである。

で、とりあえず手始めに、掃除をしながらラトリスに昨日分かった話を説明しておいた。

さすがに取り乱すかな、と鋼は思っていたのだが、「そうですね。異世界ともなると、合流の手段も限られてしまうでしょう。」

そう考えると、私がハガネ様と一緒に飛ばされて来れたのは実に幸運でした」

と、自分が異世界に飛ばされたことも、もどるのが困難だということもあっさりを受け入れてくれた。

ただ一つ口をはさんだのは、シロニヤの祝福の下りで、

「私の聞き及ぶ限り、神というのは人を使徒にする程度で力を使い果たすという事はないはずなのですが。」

例えば風の神ウイステ様は、気まぐれで日に三度、人に祝福を授

けた事もあつたとか。

他にも同時に十人の使徒を作つたという水の神の……」

「それは向こうの世界の古神とかの話じゃろ?!

ワシはその、そういう祝福とか苦手なんじゃよ!

決してまだ生まれたてで力が弱いとか、そういうことではまったくないのじゃ!

へっ! 大体神格の高いやつらはろくな力の使い方しないんじゃないよ!

気まぐれで人にほいほい力を授ける、力ばかりありあまつた神様に、それに安易に乗っかる愚民共!

まったく、虫唾が走るのじゃ!」

なんだか心のやわらかい場所をえぐられたのか、シロニヤがやさぐれてしまった他は、まあ問題がなかったと言えるだろう。

鋼としては、神の力に安易に乗っかるとかそういう部分では、ちよつと耳が痛かったところもあつたのだが。

それに、ラトリスからの思わぬ情報提供もあつた。

「ユーキ・マシロという人物なら、確か今、魔法学院にいるはず」

「魔法学院?」

「はい。ハガネ様が卒業したのと入れ替わりで転入したと聞き及んでおります」

「ああ、そういえば、なんかそんな話を聞いたような、聞いていないような……」

正直に言えばよく覚えていないのだが、ラトリスが言うならそんなのだろう。

だとすれば、非常に好都合ではある。

好都合ではあるのだが……。

「ハガネ様?」

ラトリスの声に、我に返る。

「ああ、いや、なんでもない。掃除を続けようか」

ラトリスの怪訝そうな視線から逃げながら、鋼の思考は、一度囚われたある考えから離れることができなかったのだった。

ともあれ、そうして半日を部屋の中で過ごした、その結果、

「うーん。ハ○ター×ハ○ター、結構連載してるんだなあ……」

鋼は積まれていた週刊漫画雑誌を、ある意味全部片づけることに成功した。

まあ、掃除には失敗した、と言い換えてもいい。

夕方、マキからメールが届いた。
文面は、

『昨日は取り乱してしまつてごめんなさい。

ようやく少し、気持ちの整理がつきそうです。

ご迷惑でなかったら、明日、そちらに伺いたいと思います。

約束してくれたこと、嬉しかったです。』

という感じ。

ちなみにマキは普段のイメージに反してあまりメールを使わず、

来るメールは重要な用件か連絡事項だけ。

しかもたまに来るメールがなぜかいつも丁寧語で絵文字等は一切使われないため、友達からは『マキの閻魔メール』と名付けられて恐れられているとか。

鋼も最初の頃は、本人とのあまりのギャップと、丁寧でありながら異様な迫力を持つ文面に、なんだか気圧されたのを覚えている。

「ふう……」

画面を操作してマキのメールを閉じると、鋼はため息をついた。ぼんやりと、携帯の画面を眺める。

実は鋼のアドレス帳には、真白の電話番号とメールアドレスも入っている。

他ならぬマキが、「友達同士には仲良くなってもらいたいから」と言つて、鋼に教えたものだ。

だが、今その番号に電話をしても、誰も出る者はいない。

彼女は、もうすぐ滅んでしまうという向こうの世界にいるのだ。

そしてずっと目をそらしていたが、向こうの世界の滅びを回避しなければ、アステイヤラナ、ミスレイ、リリアにキルリスといった、向こうの世界の知り合いも全員死んでしまう。

「参った、なあ……」

鋼はずっと、世界規模の危機なんて鋼に解決できるような問題ではないと考えていた。そして、その考えは今でも変わっていない。

でも、今は少しだけ、解決が本当にできないのか、本当に何もできることがないのか、それをたしかめることくらいはできるのではないかと考えてもいる。

それに、真白。

彼女が向こうに渡った理由は今一つ判然としないが、その責任の一端が自分にあるのなら、できれば彼女を見つければ、彼女が望むのな

らこちらの世界に連れ帰りたい。あるいはせめて、マキともう一度きちんと話をさせたいとは考えている。

しかし、一番参ったことは、そのためには向こうの世界に行かなくてはいけないことだ。実は、単純に行くのか、行かないのか、ということと言うなら、実は心の天秤はだいぶ行く、という方に傾いている。しかし……。

「問題は時間、だよなあ……」

向こうの世界に行って真白を見つけ、そこからまたこちらの世界にもどつてくるとなると、シロニヤ任せではたぶんものすごい時間がかかる。行きの分のエネルギーをためるのに二ヶ月かかるのなら、帰りにも同じように二ヶ月かかるかもしれないし、転移した場所が魔法学院から遠ければ、あるいは二ヶ月の間に真白が魔法学院から去ってしまったえば、真白を見つけるのもっと時間がかかるかもしれない。

その間に魔王が復活したり、魔物が押し寄せてきたりで、真白があるいは鋼やその仲間たちの誰かが命を落としてしまう可能性を、鋼は否定しきれない。

「僕だって、死にたくはないんだけどなあ……」

思わず口に出してしまった本音を、

「ん？ コウ、今何か言ったかの？」

近くで猫になって丸まっていたシロニヤが拾うが、鋼は何でもない、と首を振った。

ふたたび考え込む鋼を心配そうに見るシロニヤの視線にも気付かず、鋼はふたたび思考に没頭する。

険しい道が、常に正解とは限らない。

すごく楽観的な見方をするなら、たとえば鋼が何もなくても真白が一人で助かる場合、つまり自力でもどつてくるか、魔王とやら

を倒して世界を平和にする、なんてこともありえなくはないのだ。

死を覚悟してまで一刻も早く真白の下に駆け付けるのか、それとも鋼がそこまでする必要はないと楽な道を選ぶのか。

鋼は今、大きな選択に直面していた。

結局一日のほとんどを自室の整理という名の思索に費やした鋼は、完全に日が沈み、外が闇に包まれた頃になって、

「よしー！」

ようやく晴れやかな顔で、立ち上がった。

そして、

「……シロニヤ。ちょっと、話があるんだ。

外まで一緒に来てくれないか？」

「なんじゃよもー！ せっかくマンガがよいところじゃったのに…

…」

猫形態のまま、器用に前足でマンガのページをめくるシロニヤだけを呼びつけ、両親にはコンビニに行くと声をかけて、外に出る。

シロニヤは、鋼に呼ばれた時こそは不満げな様子を見せていたものの、

「とうとう、決めたのじゃな。」

やっぱりおぬしは向こうの世界に……」

どこか誇らしげに、だが、同時にどこか悲しげにそつつぶやくと、鋼のあとを追った。

外に出た鋼とシロニヤは、ゆつくりと歩き始めた。

十一月とはいえ、今晚はかなり冷え込んでいた。

夜ということもあって、人通りはかなり少ない。

まるで世界に自分たちしかいないのではないかと錯覚するほど、静かな夜だった。

「月が、綺麗じゃな……」

「ああ」

見るといつの間にか、鋼の隣を歩いていたはずの猫は、着物を着た少女に変わっていた。

シロニヤの言葉に、鋼は空を見上げる。

向こうの世界で聞いた話を、なんとはなしに思い出した。

「そついえば、向こうの月は赤いんだつたよな。しかも、ずっと同じ場所から動かないんだつて本で読んだよ。一度くらい、見てみればよかった。」

いや、それとも……まだ、遅くないかな？」

鋼の、素直な感慨、に見えて、あることを示唆するようなその台詞。

しかしシロニヤはそれをあえて無視するような形で、言葉を紡い

だ。

「向こうの月は、不吉の象徴なのじゃ。

いや、象徴、ではないの。

人にとってアレは、不吉そのものじゃ」

「シロニヤ？」

月の魔力がそうさせるのか、シロニヤの様子も、いつもと違うように鋼には見えた。

「コウ。空に浮かぶ赤い月。アレは、魔王の封印なのじゃ」

「ま、おう…？」

鋼も以前からたびたび聞かされていた、しかし、一度もはっきりと説明されたことはなかったその存在。

それを、シロニヤは今、話そうとしていた。

「魔王とは、あの世界に最初から組み込まれたりリセットボタン。人の力によって挽回が絶望的なほどに魔物が勢力を伸ばした時、人の未来を刈り取るために必ず現れる、破滅じゃ。」

このままの勢いで魔物が増え続ければ、聖王歴1999年12月に、あの世界で魔王が目覚めるじゃろうと言われておる」

たしか向こうの暦では聖王歴1997年だったはずなので、もう二年と少ししか時間は残されていないことになる。いや、それとも、真白の救出ということだけを考えれば、まだ二年ある、と考えればいいのか。

だが、それで鋼の決意が揺らぐことはなかった。

鋼はもう、決めてしまっていたのだ。

どうしようもないほど強固に、茨の道を歩むことを自らの心に約してしまっていたのだった。

「これは、宣言、というか、シロニヤへの頼み、になるんだけど…」

…
「そう前置きして、シロニヤの顔を正面から見つめる。
シロニヤの曇りない瞳も、鋼の目を正面から見返していた。

「まず、これから二ヶ月でたまるシロニヤの神様としての力。それを世界移動のために……身勝手だけど、僕たちがもどるために使いたい。使って、ほしいんだ」

鋼としては、一世一代というくらいの勇気を振り絞って言ったその言葉に、しかしシロニヤは、
「そうか。やはりおぬしは、覚悟を決めたのじゃな」
まるで予想していたかのようにうなずいた。

狼狽したのは鋼だ。

一方のシロニヤは、まるで鋼のその反応すら予想していたとでも言うように、どこまでも泰然としていた。

「な、なんで……」

「ワシがおぬしを転生させた時、おぬしはどこにでもいるような、普通の学生の目をしとった。

「じゃが、今日、外に出ないかとワシに声をかけた時のおぬしは……死に正面から立ち向かう、戦士の目をしておった」

その言葉に、鋼はハツとした。

「もしかして、シロニヤ。

「じゃあお前、今日僕がずっと考えていたことも、全部分かってて、それで……」

シロニヤは自嘲するように笑った。

「なんとなく、じゃがな。

「ふふ。ワシはこれでも神様じゃぞ。しかも、だれよりもおぬしの傍にいた神様じゃ」

そのシロニヤの言葉に、鋼は啞然としながらも、どこか納得したような顔をする。

「…そつか。そう、だよな。」

あ、はは。敵わないな、シロニヤには……」

鋼は少しだけ笑って、すぐにまた、真剣な顔をする。

「ごめん、な。思いついた時、すぐ、話さなくて……。」

やっぱりお前が、気を悪くするんじゃないかって思って」

「どうしてそう思ったのじゃ？」

本当に不思議そうに問いかけてくるシロニヤに、鋼は歯切れ悪く答える。

「どうして、って。当たり前だろ。」

だって結局は、僕たちだけの力で解決するのを早々にあきらめて、他の、しかもなんとというか、すごく強大な、神様の力、つてのに、安易に頼るってことで、それはやっぱり、あんまりいい気持ち、しないだろ？」

よみがえるのは、シロニヤの口にした、『気まぐれで人にほいほい力を授ける、力ばかりありあまった神様に、それに安易に乗っかる愚民共』という言葉。

暴走しての言葉だったとはいえ、アレだって間違いなくシロニヤの本音の一部だったはずだ。

「でもそれが分かってるのに、それでも僕は、自分勝手な望みのためにシロニヤの力まで借りようとしている。」

だからシロニヤには、僕を怒る権利が……」

鋼の心の底からの、もしかすると初めてかもしれない、シロニヤへの謝意。

しかし、シロニヤはそれを、

「なんじゃ。そんなことか」

たったの一言で切り捨てた。

「そんなこと、って……」

普段のシロニヤの言動からは考えられないような言葉に、鋼は絶句した。

だがシロニヤは、淡々と続ける。

「ワシはただ、必要もないのに神の力に頼るやからを非難しただけじゃ。」

むしろおぬしくらい切羽つまつとるなら、神の力でもなんでも、利用できるものは利用しないと怒っておるところじゃ」

「シロニヤ……」

シロニヤの意外な反応に、鋼はその名を呼ぶことしかできなかった。

「それに、おぬしが自分のためにワシの力を借りるのを、ワシが怒る？」

そんなのはまるつきり逆じゃよ。状況がどうであれ、おぬしに頼られてワシが喜ばないはずがないではないか！」

そう口にしたシロニヤの表情には、一点の曇りもない。本当にシロニヤが心の底からそう思っているのが分かって、

「ありがとう……」

鋼は、それだけを口にするのが、やっとだった。

それから、お互いに照れくさそうに笑って、また月明かりの下を

歩き始める。

「しかし、意外と決断が早かったものじゃな。

さすがのおぬしも、今回ばかりはもうちょっとは迷うものかと思
っていたのじゃがな」

「あ、ああ。そう、だな。

真白のことがなければ、僕だつてこんな決断はしなかつたと思う。
それに、今だつて本当はどうするのが一番いいのかは分からない。
いよいよ異世界に行くつて時になって、やっぱり死ぬのは嫌だつ
て言つて、逃げ出してしまうかもしれない。二か月後か、あるいは
もうちょっと先か、とにかく土壇場になって、僕だけでもどらないな
んて言うかもしれない」

鋼は本音のつもりで言つたのだが、それをシロニヤは一笑に付す。

「そんなことはないじゃろ。おぬしはやると言つたらむしろ過剰な
までにやる人間じゃよ」

「そう、かな？ そういえば、マキは僕のこと、鉄砲玉みたい、と
か言つてたけど」

「ほう、あのハスツパーもよく分かつとるではないか」
「誰だよハスツパーって」

いや、文脈上マキのことだろうと鋼にも見当はついていたのだが、
シロニヤのネーミングセンスは鋼の理解を軽々と飛び越してくる。

「というかじゃな。この時期に決断したのはちょっとは意外じゃつ
たが、ぶつちやけまあアレじゃ。

おぬしは誰が何を言おうと、結局は向こうの世界に行くじやろう
などはワシも思つておつたのじゃ」

「マジか……」

そんなに鉄砲玉だと思われていたのか、と鋼はちょっと落ち込ん
だ。

しかし無理矢理に立ち直る。

「ま、まあ、そういう評価を一新するためにシロニヤに話したワケだしな！」

僕は生まれ変わった！ これからは一人で突っ走ったりしない！

どんな難題も仲間との友情パワーで全部解決していくんだ！」

「なんかそれもうさんくさいのう……」

胡乱なものでも見るような目で鋼を眺めるシロニヤ。

そのシロニヤに、鋼がふたたび頭を下げる。

「……というワケで、ラトリスとクリスティナにもこのことを伝えてほしいんだけど」

「おぬし……。新しく生まれ変わったとか友情パワーとか言いながら説明は他人任せじゃとか……あ、まあ、おぬしとワシはぜんぜん他人なんかじゃないのじゃけどな!？」

後半部分は綺麗にスルーして、鋼も答える。

「いや、だってさ。さすがにこういうの、僕からじゃ話しにくいだろう?」

体を張って頑張ります、みたいなノリは、自分で言うのはちょっと照れくさいのだ。

それをくみ取ってくれたのか、シロニヤはうなずいてくれた。

「まあ、分かったのじゃよ。」

おぬしに頼られてうれしくないはずない、なんて言ったばかりじやしな」

「ありがとう、シロニヤ」

お礼の言葉を口にしながら、鋼は自分が今までいかに一人で突っ走っていたのが自覚する。こんなに以心伝心な神様とか、呼んだらすぐに飛んできてくれる相棒とか、自分には変わり者だが心の温かい、得難い仲間がいる。

これからは仲間を信頼して、一緒に頑張って行こうと決意を新た

にした。

さしあたっては、まず、

「それじゃ、シロニヤ。コンビニに着いたら、何でも好きな食べ物、
一つ買ってあげるよ」

こんなところから始めてみるのもどうだろうか。

そう思って鋼が申し出ると、

「よし！ ならばガリオリ君じゃ！

ワシはあの、誕生日やお正月などにしか食べられないという超高級氷菓子、ガリオリ君を所望するのじゃ！」

「どんな生活環境！？」

とまあそのような感じで、この寒い中アイスを買うためにコンビニに走るシロニヤを見送って、鋼は、

「ほんと、安上がりな神様だなあ……」

とつぶやいたのだった。

家に帰った二人は、そこで別行動。

予定通りにシロニヤがラトリスとクリスティナに説明をしている間に、鋼が両親と話をすることになった。

まさに昨日の今日ではあるのだが、もう鋼の決心が翻る可能性がないのであれば早めに話しておくのが、また家を出ようという鋼の最低限の誠意というものだろう。

かといって、両親に全てを話して不安がらせることもない。

さすがに魔王がどうかという話や、向こうに行く手段とかそういう具体的な話は伏せて、ただ鋼が決断して、向こうの世界に渡ることを決めたということは正直に話した。

母親にはまた少し泣かれたし、何度も考え直さないかと言われたが、鋼の決心が固いことを知ると、二人は鋼の門出を応援して、精一杯サポートしてくれると言ってくれた。

その言葉に、鋼まで思わず涙ぐみそうになった時、

「コウ？ こっちの話は終わったのじゃが……」

先にラトリスたちに説明を終えたらしいシロニヤが顔を出した。

「ああ、今行くよ」

湿っぽい雰囲気は苦手だ。

鋼はこれを幸いと、シロニヤと一緒に行くことにした。

「ラトリスたちは、認めてくれた？」

自分の部屋に向かいながら、シロニヤに小声で尋ねる。

その返答は、

「もちろん！ 鋼の勇気に二人とも感動しておったぞ！」

そんな、すごくいい返事だった。

「そうかあ……」

対する鋼の返事はちよつと微妙だ。

実はラトリス辺りなら、

「その志は立派ですが、ハガネ様にそんな危険な事をさせる訳には参りません」

とか言っただけ思っていたのかもなあ、とちよつとだけ思っていたのだ。

まあ実際にはそんなに危ないワケではないだろうし、向こうの世界の人の命の価値って、色々な意味でモスキート級みたいだしそんなものか、と鋼は納得することにした。

何だかそんなことで一日葛藤していた自分がちょっとバカみたいではあるが、逆に言えば仲間のお墨付きを得たのだ、と頭を切り替える。

「コウを連れて来たのじゃぞ！」
となぜか自慢げなシロニヤに続いて部屋の中に入った。

入るとすぐ、やけにテンションの上がったクリステイナが飛びついてくる。

「えへへ！ ハガネさん！ 向こうの世界に帰るんですよね！」

すぐ荷造りを始めましょう！ さあ！ さあ！」

「いやそんな今すぐは無理だから！」

僕だつてこっちで色々やらなきゃいけないこともあるし！

心の準備だつてできてないし！」

苦心して、クリステイナを引きはがす。

「うう。こっちでやらなきゃいけないことって何ですか？」

「それこそ荷造りとか転移の下準備とかは必要だよ。」

それに、何が起こるか分からないだし、シロニヤのエネルギーはできるだけたまっていた方がいいだろ」

「神の力が足りないのに転移なんかにはチャレンジしたら、最悪次元のはざまに飛ばされて、*いしのなかにいる*状態になる可能性もあるのじゃ！」

よく分からないがシロニヤも援護射撃をしてくれた。いいぞもつとやれ。

「それじゃ、いつから荷造りですかあ？」

さらに食い下がってくるクリステイナ。

「何でそんなに荷造りしたいんだよ……。」

まあこれは完全に僕の都合になっちゃうけど、クリステイナが向

こうで学校に通ってるように、僕もこっちで学校に行ってるんだ。今年度が終わるまで、なんて言わないけど、最低でも二学期が終わって冬休みになる12月20日までは、こっちで学校に通いたいと思う」

「じゃあ12月21日から荷造りですか!？」
「すかさず斬り込んでくるクリステイナ。」

「……まあ別に、荷造りくらいしたいならしてもいいけど。……ただどここういうのってタイミングとか思い切りの問題もあるから、僕はクリスマスを目にしたいと思う」

某神様的には間違いなく特別な日だし、こう、聖夜に行動を起こすなら、何でも踏ん切りがつくような気も……しなくもない。

「クリスマス、12月25日じゃな。ワシの力がもどるのを1月10日前後とすると、そこまで二週間と少しと言ったところか」

そこで絶妙にシロニヤが補足してくれる。いまだ本調子ではないラトリスの秘書キャラポジを奪う勢いである。

「二週間で何かをやるっていうのはなかなか難しいけど、シロニヤの力がたまっても転移自体は先延ばしにできるんだし、二週間でも手がかりくらいはつかめるかもしれない。」

だからクリスマスまでは各自のんびり過ごして、とりあえずそこからの二週間で情報収集、魔王や世界転移の方法を探る、でどうかな?」

「全体の方針としては問題ありません。けれど、マシロ様については何も手を打たなくて宜しいのですか?」

鋭い質問がラトリスから飛ぶが、

「まあ、魔法学院にいて聞いてたし大丈夫かなと思ってる。彼女については、見つからなかったらその時にあらためて考えるしかないと思う」

「そついう事ならそれで構いません」

すぐに納得してくれた。

そこからは質問もなく、

「じゃあとりあえず、基本方針はそんな感じで。

ま、一応魔王に挑もうなんて大きな話にもなってるし、慣れない世界で焦る気持ちもあるかもしれないけどさ。

みんな、イブの夜までは休暇だとも思っただけの世界をのんびり楽しんで、クリスマスからまた動き出そう」

なんて適当にまとめた鋼の言葉にも、

「任せるじゃ！」「承りました」「分かりましたあ！」

元気な返事を頂いた。

「あー、でも待った。早めに準備できる物は色々あるからね。

ラトリスにはタナトスコールを付加した武器を用意してもらって、突発的な事態にも備えて、できればクリステイナにも『血縄の絆』の代わりになるような……え？ どちらも簡単にできるの？

でも『血縄の絆』はそう軽々しく……ええ！？ 使い捨てのもつと簡単な術式がある？ じゃあ何で自分にもそつちを使わなかったよー！

て、クリステイナ！ お前ホントは話全然聞いてなかったろ！

まだ荷造りは早いんだって！ というかお前もう帰りたいとかじゃなくて荷造りしたいだけだろ！

そしてシロニヤアアア！ 床にガリオリ君をこぼしたのなら

……」

そんな風に、マイペースすぎる仲間たちにわーわー騒いで指示を出しながら、鋼は、

(これが、仲間と共に歩む、ってことなのかな?)

なんて、ちょっと調子に乗ったことを考えていたという。

第六十四章 マキの楽しいデスマーチ

翌日、土曜日。

マキが家を訪ねてきた。

すさまじい量の教材と、とんでもない課題を持参して。

「コウ、あんたさあ。学校行くなって聞いたけど、分かってる？」

「二ヶ月近くも学校休んで、勉強ついていけると思ってたの？」

「あ……」

こうして地獄のデスマーチが始まった！！

なんて言ったところで、いくら休日とはいえマキもずっと鋼の家に入り浸っているワケにもいかず、そもそも一日でできることなど高が知れているワケで。

その日はとりあえず、当面の学習計画を練ることになった。

具体的に言えば、積み重ねが必須な数学、英語辺りを重点的に、理科系と古典漢文を要点だけ、歴史系と現代文、それに実技系科目は全捨てで、という感じの方針を決めた。

まあ方針もこれでいいのかよく分からないが、一日二日で取りもどせるような量でもないの、ぼちぼち頑張っていけばいいだろうと鋼自身は思っている。

しかし問題は、それだけではなかった。

「それとあんたさあ。大変なのは勉強だけじゃないって、分かってる？」

あたしも最初見た時びっくりしたけど、あんた、縮んでるじゃない

い

「あ……」

鋼はすっかり忘れていた。

そういえば、鋼の肉体はただいま絶賛十五歳設定。二歳ほど若返ってしまっているのだ。

たった二歳、と侮るなかれ。成長期の二年はとてつもなくでかい。そういえば服を着た時に感じた違和感の正体はこれだったのか、といまさらながらに合点した。

さすがに二ヶ月ぶりに会ったクラスメイトが若返っていたりしたら、きつとクラスのみんなもびっくりしてしまうだろう。

「根回し、しとこうか」

そう言っただ鋼は、ずっとかけようかどうか迷っていた、ある懐かしい番号に電話をかけた。

呼び出し音が数回、なかなか出ない。

鋼がかけなおそうかなと考え始めた頃、

「……もしもし」

低い男の声が、鋼の耳に届いた。

電話越しではあるが、懐かしい声に鋼のテンションも上がる。

「もしもし？ ひさしぶり！ ほら、オレだよオレ！」

「いや、オレって誰じゃよそれ！？」

とシロニヤにツッコまれるほどのハイテンションで鋼が返事をした。

「誰だよ。イタズラか？」

電話越しの声が、明らかかな苛立ちを見せる。

「だからオレ！ オレだって！」

「ふざけんなよ！ あんたが誰なのかは知らないけどな、その番号の持ち主は自分のことオレなんて……」

電話の向こうの声が、耐え難いほどに怒りを帯びたところで、鋼も口調を元にもどす。

「だから、僕だよ。……コウ。結城、鋼。

ひさしぶり、篤志」

「……コ、ウ？」

その言葉に、電話の相手、蒲田 篤志は、信じられない、とばかりに言葉を失ったのだった。

「いや、お前、本当にコウなのか？」

あ、いや、でも、失踪したって……」

「だからもどってきたんだよ」

「そんな……」

蒲田はまだ信じられない様子だった。

「なら質問してくれって。」

何でも答えるから、そしたらすぐホンモノだって分かるだろ？」

鋼の提案に、

「分かった。……じゃあ、そうだな。

お、俺が初めて買ったCDは？」

「坂田幾恵『ボイスンカラビュアハート毒色の純情』」

「な……!？」

まさか当てられるとは思わなかったのか、蒲田は息を飲んだ。

鋼自身、こんなドマイナー歌手のシングルCDの名前をよく覚えていたなと感心したくらいだ。

もしかすると、『瞬間記憶復元』のおかげかもしれないが。

「い、いや、これだけじゃ判断できねえ。

あれは名曲だからな。あてずっぽうで言っても当たるかもしれない」

「それはない」

鋼はずっぱり切ったが、蒲田は聞いていない。

「なら、俺たちの作った、学校一問一答第三弾、頭髪編！

これに答えられなくちゃ、お前をコウとは認められない！」

「望むところだ！」

蒲田の熱い提案に、鋼も熱く返す。

「なんなんじゃ、このやりとり……」

とシロニヤまで呆れる中で、鋼たちはエキサイトしていく。

「それじゃ、行くぞ？」「いつでも来い！」

「教頭アタマが？」「バーコード！」

「登山部登るは？」「ロンゲ岳」

「校長部屋では？」「カツラ脱ぐ！」

「マキは怒ると？」「怒髪天！」

そんな風に、蒲田が問いかけ、鋼が答える。
それを何度か繰り返して、

「ぶっ！」「へへ！」

二人はいつの間にか、笑っていた。

正解とか、正解じゃないとか、もうどうでもよかった。
ただ、互いの魂が、お互いを友と認めていた。

ひとしきり笑い合った後。

「なあ、コウ」

「ん？」

「おかえり」

「……ああ、ただいま」

二人は時間が経っても途切れない友情を、たしかめ合ったのだ。
た。

「一応、用事があつたんだけど、その前に報告かな。

どっちも僕がらみだけど、いい報告と悪い報告がある。

どっちから聞きたい？」

「なんだよ、悪いのまであるのか。

……じゃあ先に、いい報告から」

蒲田の声に、鋼は電話機の向こうにうなずいて、
「分かった。

また月曜から学校に通うことになったみたいだ。

またよろしく」

「お、こちらこそよろしく！」

さらに今度は蒲田には見えないのに電話機に頭を下げた。
鋼、実は日本人男子疑惑が強まった。

「で、悪い報告っていうのは？」

蒲田の問いに、

「実は……後ろにマキがいるの忘れてた」
「は？」

鋼は、震える声で答えた。

「しかも、お前の声がでかいから全部聞かれてた」

「おいおい……」

「今ちよつと僕、声がおかしいだろ？」

「え、ああ。たしかに……」

「なんでだと思っ？」

「え、いや……」

「それはな。今、まさにマキが僕に……」

……。

……。

……。

……」

「コウ？　おい、どうしたんだ？！　コウ？！」

「次、あなたの番だから」

ブツ！ ツー、ツー、ツー。

ホラーのように電話は切れたという。

「それで、本題なんだけど」

「あ、ああ」

仕切り直し。

そもそもの電話の目的は、旧交を温めることではなく、根回しである。

鋼は何事もなかったかのようにその話を切り出した。

「実は僕さ。ちょっと縮んじゃって……」

「はあ？ ええと、なんだって？」

「いや、背が縮んじゃって」

「いやいや、ワケ分らないって！

何でだよ！？ 身長なんて早々縮むものでもないだろ！」

蒲田の激しいツッコミももつともだ。

鋼はずいぶんと言いつに困って、結局、

「しゅ、修行しに山に、ええと、日本アルプスに行ってきたんだけど、そこになってた桃を食べたら身長が縮んだ！」

すんごい嘘をついた。

「ファンタジック!!」

許容量を超えた話には蒲田は叫ぶ。

実のところ、現実はずっとファンタジックというかファンタジーなのだが、さすがに話すのははばかられたのだ。

「それでまあ、僕が縮んでもあまり驚かず、当たり前のように接してほしいんだ。

縮んだって言っても、たぶん十センチくらいだし、普通にすればバレな……」

「バレる！ そりゃ一発でバレるよ！

つつか身体測定とかどうするんだよ!？」

「あー」

鋼の口から変な音が漏れる。

考えていなかったが、身体測定どころか健康診断とかされたらやばい結果になる自信があった。

そこで使うのは、鋼の必殺先送り。

「まあ、それはその時になって考えるとして。

……とにかく頼んだ!！」

「あ、おい！ まだ話は……!！」

ついでにと蒲田との話し合いすら先送りにすることにして、電話を切った。

おまけで携帯の電源も切る。

「よし！ これで、根回しは完璧だな！」

輝く笑顔でそう言い切る鋼に、

「蒲田も大変ね、これじゃ」

マキが後ろで、大きくため息をついたのだった。

そして電話を終えた鋼に、

「これ、シロニヤちゃんから」

ひょいっとマキが何かを投げてよこした。

「これ……」

飛んできたのは白い石のついたペンダントで、

「よく分かんないけど、おそろいのアクセだとかなんとか。

シロニヤちゃんは首輪にしたってさー」

「あ、い、っ、はあああ!！」

その白い石とは、明らかに『相思相愛の証石』だった。

これをつけている限り、鋼はシロニヤから逃れられないことになる。

肩をいからせて部屋を出ようとする鋼を、

「あー、ちよいと待った！」

手に見慣れないスイッチを持ったマキが引き留める。

振り返った鋼に、

「三分だけ、三分だけでいいから、付き合ってよ、ね！」

と言って、マキは手に持ったスイッチを思い切り押し込んだ。

その瞬間、

「な!？」

「うわ、やば! ほんとにできちゃったよ」

急に、鋼の部屋が半透明の幕のようなもので覆われたのが分かった。

単純に驚いている鋼とは違い、マキはスイッチの効果に純粹に感心しているようだ。

「それ、は？」

なぜだかものすごい嫌な予感を覚えて鋼が問うと、マキは満面の笑顔で答えた。

「あ、これ? シロニヤちゃんからもらったの。」

なんか家の裏庭に埋めてあったのを持ってきてくれたとか」

「家の、裏庭…?」

鋼の頭のどこかが警戒音を鳴らす。

「そ。このスイッチを押すと、装置から半径十メートル以内の任意の空間に結界を張ることができるんだけど、なーんかその中でも時間が200倍に加速されて……」

そこまで聞いた時点で、鋼は踵を返してドアに向かっていった。

だが……、

「あ、開かない?! いや、というより……」

「……このスイッチで結界を解除するまで、結界の中から出ることは、絶対にできないんだってさ」

その決断は、遅すぎた。

マキの不吉な宣告に、

「なん……だと……」

おののきながら、おそろおそろ振り返る鋼。

そこにはやはり、満面の笑顔のマキがいて、

「だいじょーぶ。たったの三分。体感でも、たったの十時間だから、ね？」

じゃ、勉強、しようか？」

そして真のデスマーチの幕が開いた。

結界が解除された時、

「僕は、僕はまだ、生きてるのか……?」

「や、ちよつと勉強しただけでおおげさだから」

鋼はたった一日で一年間を過ごしたかのように、げっそりとした様子で外に出て来た。

とはいえ、途中鋼の部屋を訪ねてきたクリスティナまで結界の中に入ってくるというアクセシビリティもあり、実は三分よりはだいぶ短い時間で、本日の勉強会は終了になってはいた。

この結界、外に出るのは許さなくせに、結界に触れた者を一瞬で中に引きずりこむ変な構造になっているらしい。そもそも空気とか循環しないと死ぬんじゃないかと色々思ったが、まあその辺りを魔法のアイテムに求めるのも無粋だろう。

密閉された狭い空間の中に鋼を閉じ込めておいたおかげか、

「うほっ！ いい魔力！」

とクリステイナがつぶやいて鋼たちをドン引きさせるくらい魔力がたまっていたらしく、クリステイナはこれ幸いと勉強している鋼たちの隣で魔術研究を始めた。

そういえば時間経過で作用するMP回復なんかはこの空間ではどうなっているのだろうと思ってクリステイナに聞くと、やっぱり200倍速されているから外と同じ感覚で使えるらしい。

ちなみに実際のクリステイナの言葉を引用するとこんな感じだが、

「特に但し書きがない限り、アビリティやタレントにおける時間とは作用者の主観時間なんです。

そもそも時間なんて物は相対的なものじゃないですか。

ほら、わたしも勉強の時は時間が長く感じますけど、スマホで見れるようにしたハガネさんの秘密フォ……もとい、楽しい時間はすぐに過ぎる、とか。

あの、目が怖いですハガネさん。た、ただの冗談ですよ。

ほ、本当を言うとさっきの例はちょっと違うんですけど、とにかく、ここでは外と同じ感覚でMPは回復していくはずですし、たとえばここで二十秒効果のある強化魔法を唱えたら、ここでの二十秒、外の基準で言えば0.1秒間だけ強化魔法は機能するんじゃないかなって思います。

ただ例外として、外に魔法の発動者、中にその魔法の作用者がいた場合。魔法の種類によってはもしかすると中では200倍の時間、効果が持続する可能性も……」

鋼はこの辺りで聞くのをやめた。

とにかくそんなクリステイナがたびたび勉強を妨害することもあり、何とか解放された鋼は、結界が解除された途端、その場に突っ伏した。

一方、なんだかホクホク顔で、まだまだ元気そうなマキは、

「明日は五分コースでもいいかなー？」

なんて、不吉なことをつぶやいたという。

そんな神様チートの助けもあり、たったの一日、というか数分間だけで、鋼はそれなりの学力を身に着けることに成功した。

また副産物として、まだ大した日数を過ごしていないはずなのに部屋には鋼の魔力が満ち、ラトリスがちょっと元気になった。

さらに、副産物の副産物として、

「なんかマキさんの体、ハガネさんの魔力が染みついてないですか？」

「ええ？」

もともと魔力がなかったはずのマキの体に鋼の魔力が入り込み、まるで魔力がある人みたいになってしまったらしい。

シロニヤの説明では、

「あー。たぶんアレじゃな。濃密な単一の魔力の中に魔力のないマ

キがいたせいで、うつつちやったんじゃな」

ということらしい。

「うつつたって、そんな風邪じゃないんだから……」

「じゃけどよかったじゃないか。」

よく考えたら魔力のない世界に向こうの人間が来たら魔力不足で危ないのと同じように、魔力のないこつちの世界の人間が魔力がたくさんある場所に来たら、魔力に中てられて死んじゃうって可能性もあつたんじゃし、それを考えれば……」

「さらっと言っなよ！」

マキが無事だったことに胸を撫で下ろしながら、とにかく両親にはあんまり自分の部屋に近付かないようにしてもらおうと思っ鋼。

というか、まだマキだつて無事だと決まったワケではない。

「マキ！ とりあえず、危険がないと分かるまでこの部屋には……」

出入り禁止、と言おうと思つたのだが、

「あーだいじょぶだいじょぶ！ あたしの家系って昔から霊媒体質でさ。」

こーい感じのことには強いんだ。

というか、魔力があるとかすごいじゃん？

あたしも魔法とか使えちゃったりして」

明るいマキの声にさえぎられた。

その軽い口調に、鋼はたしなめようともう一度説得を試みる。

「あのな。本当に危ないかもしれないんだぞ？

もし体を壊したりしたら、冗談じゃすまな……」

しかし、

「……あたしも、冗談ではやってない」

思ったよりもずっと真剣なマキの目と声に、思わず口を閉ざした。

「コウ、さ。あたしにまだ、話してないこと、あるよね？」

「え？ あ、ええと……」

そしてあつという間に攻守交替。

マキが苛烈に攻める。

「クリステイナちゃんから聞いたんだけど、また、向こうに行くって決めたんだよね？」

「あ、ああ。い、一応昨日、そういうことに……」

答えながら、鋼の額から汗が流れる。

「コウさあ。あたしと今日、ずっと一緒にいたよね？」

「そ、そうだった、な？」

「あたし、ずっとコウから言ってくれるの、待ってたんだけど？」

「あ、いや、その……」

これ、なんだか浮気を責められている夫みたいだ、と鋼は他人事のように思った。

「あんたがそういう奴だって分かってるから、もうなんも言わないけどさ。」

その代わり、あたしもあんたがこっちにいる間は好き勝手にやらせてもらうから」

鋼がたじたじになっている間に、マキはさっさと結論を出してしまっ。

「だ、だけど、こればかりはやっぱり危ないから……」

ここはマキのためにも引いてはならない場面だと鋼は最後の反撃に出るが、

「へえ？ この部屋って、魔王と戦いに行くよりも危ないの？」

その一言で、鋼の反撃の芽は全部つぶされた。
そして、

「明日やっぱり、五分コースね」

鋼の精神的死刑までが、その時決定されたのだった。

「ちなみに魔力ってどうやったら散らせるんだ？」

「え？ 普通に窓開ければいいんじゃないですか？」

「換気感覚かよー！」

向こうの世界って、何するのもアバウトだなーと思った鋼だった。

第六十五章 シロニヤの危機

あえて結論から言えば、

「意外とバレないもんだな」

鋼が縮んでしまったことは、どうやら周りには気付かれてはいないようだった。

まあ元々鋼はあまり社交的な方でもなかった上、二ヶ月も会っていないければ人の印象なんて薄れるもので、マキと蒲田以外で鋼が縮んだ（というか若返った）ことに気付いた人間は少なくとも表立っては一人もいなかった。

かといって別に、鋼が学校に溶け込むのに苦労がなかったかと言えばそうでもない。

学校に行った途端に教師からの呼び出しがあり、山盛りになった補習課題があり、興味津々のクラスメイトたちの質問攻めがありで色々と盛りだくさんだった。

鋼の失言に対するマキや蒲田のフォロー、人の意識を逸らす鞆の中の枝からの超常現象的な援護、そしてどんなピンチの時でもオラクルで要らないことをしゃべり倒してくるシロニヤの無駄話、などの心強い仲間のサポートがなければ、とても乗り切れはしなかっただろうと鋼は思う。

家で待機している二人も、十分に頑張ってくれている。

ラトリスは魔力濃度の高い鋼の部屋、そして少しだけ魔力の残留している鋼の家以外にはほとんど外に出られないが、家事などの方面で隙のない活躍をしてくれているらしい。

料理を教えれば一度で全ての手順を完璧に覚え、掃除をさせれば通常の三倍の速度でこなし、機械系に弱いはずのファンタジー世界

の住人でありながら、掃除機どころか洗濯機まで完璧に使いこなし、パソコンで家計簿までつけてくれるという万能っぷりだった。

クリステイナだって頑張っている。

今まで週に一度、月曜日に買い続けてくれた週刊誌だが、それに加えて水曜日にも別の週刊誌を買いに行ってくれるようになった。しかも二冊。

週に三冊も週刊少年漫画雑誌を買うという快挙は、熟練のマンガ好きもなかなかない記録であると鋼は思った。

クリステイナは正直マンガ読んでる時が一番平和なので、もういっそ木曜日にも買うようにしてメインマンガ誌をフルコンプしちゃうばいばいんじゃないかなと鋼は思う。

ちなみに心底どうでもいい話だが、少女マンガは肌に合わないらしい。というか、少年マンガのノリが大好きなようだ。

「友情、チート、勝利！ 少年マンガってすばらしいじゃないですか！」

天然のくせにどこか歪んだ女の子だった。

そして、

【キングクリ○ゾン！】

そんな生活が続いて、あつという間に一月ほどが過ぎた。

「なあ、そういう風に頭の中で急に叫びだすの、いい加減やめてくれないか？」

【じゃ、じゃが一応の礼儀としてじゃな……】

「礼儀って何の礼儀だよ」

なのにシロニヤのオラクルのうざさは一向に改善していなかった。

しかも、最近ネット小説にはまっているらしく、授業中でも何でもお構いなしに、

【オレTUE系のネット小説って、もうこれ読者試してるだろってくらい、実戦と実践をまちがって使つとるよな？】

【主人公が高校生くらいの場合、交通事故で死んで幼女女神で転生がテンプレじゃが、社会人じゃとストーリーカー女に刺されて即赤子スタートが圧倒的に多いのは、やっぱりニーズの違いかのう？】

【『創造者』^{クリエイター}って文字を見た瞬間、反射的にブラウザバックしたくなるのはなぜじゃろうな？】

とか何とか問いかけてくるのは本当にやめてほしい。

「あのさ。もうクリスマスまであんまり時間がないし、期末テストだって近いし、僕はきちんと勉強しないといけないんだよ。」

だから、いい加減、一人で遊んどいてくれよ」

【むう！？ なんじゃよその言い方は！！】

ワシがせっかく授業中は退屈じやろうと思って、会話のネタを探してやっていたというのに！！】

「お前！ アレ確信犯だったのかよ！」

一ヶ月もしてようやく明かされた驚愕の事実には鋼は驚いた。だって驚愕の事実なのに驚かなかつたら詐欺であるからしてかなり驚いてついでに愕然として、そして怒った。

授業中にそんなことを言われたせいで、教師を間違えて「シロニヤ」と呼んでしまったり、数学の問題を当てられたのに「でもそれがゲームクリエイターゲーム創造者だったら逆にワクワクするだろ？」とかワケの分からないことを言ってしまったりして、たいそう恥をかいたのは鋼なのだ。

鋼は心を鬼にして言った。

「シロニヤ。しばらく、話しかけてこないでくれないか？」

【な、なんじゃとお！？】

シロニヤは驚いた声を上げるが、鋼は容赦はしない。

またもどつてくる予定はあるとはいえ、向こうの世界に行くことが決まっている以上、こっちの世界に心残りはあまり残して置きたくなかった。

「シロニヤの気持ちはうれしいけど、正直迷惑なんだよ。」

家に帰ったらいくらでも遊んでやるから、学校では……」

と、鋼がそこまで言つと、

【コウのバーカバーカ！！　コウなんてもう知らないんじゃないからな
ー！！】

子供のような罵声が鋼の頭に響き、シロニヤの気配が遠ざかっていく。

「子供のようになっていつか、まんま子供だよな」
考えてみればシロニヤは三歳児なのだ。
そう思うともうちよつと優しくしてもよかったかな、とも思うが、
やっぱり学校生活に支障が出るのは困る。

そんな風に一人でぼんやり考えていると、
「うわあ、まあたこんなとこにいるし！」

あんだ、ほんとにもうちよつとしっかりしてくんない？

あんだがバカなことやるたびに、こっちはフォローで大変なんだ
けど」

「それって逆に言えば『コウが何をやってもあたしが助ける』って
意思表示……いて！　殴ることはないだろうが！」

ギャーギャーと言い合いをしながらマキと蒲田が歩いて来て、鋼
は苦笑を浮かべながら学校生活という名の自分の日常にもどったの
だった。

鋼がなごやかな時間を過ごす一方で、

「まったく、コウのやつはほんとにもう、アレなんじゃよ！」

冷たくて、冷血で、冷徹で、冷酷で、ええと、ああいうやつをな

んと言っんじやったかな？

たしか、冷たいやつじゃから……冷奴、じゃったつけ？

とにかくもうほんとアレなんじゃよ！！」

鋼がいたら間違いない、『アレってどれだよ！』とかツッコミを入れられそうなることをつぶやきながら、不機嫌そうに歩いているのはシロニヤ（猫形態）である。

シロニヤから言わせてもらおうと、最近、鋼の付き合いがすごぶる悪い。

勉強だけならまだ我慢もできる。しかし、こつちの世界でも能力値を上げられると知った途端、鋼は筋トレまでするようになって、シロニヤと遊ぶ時間はますます減っていった。

こちらの世界で能力値が十分の一になったとはいえ、鋼の筋力と敏捷の値は格段に高かった。鋼はこちらの世界でも、高校二年生としてはすでに破格の腕力を持っているはずだ。

なのに延々と腕立てを繰り返す鋼を見て、マキまで呆れ顔で、

「あんだ、それ以上強くなってどうすんのよ」

とそれとなく諭したが、鋼はあくまで、向こつちの世界に行く時のために頑張る、と言いついて、決してやめようとはしなかった。

シロニヤも一度だけ、鋼にどうしてそんなに筋力を鍛えているのか、聞いてみたことがある。

その時、鋼は、

「いざつて時にさくつとやれるように、だよ。ほら、即死じゃないと痛みが長引くだろ？」

暗い笑みでそう答えた。一体何をさくつとやっちゃうつつもりなのかは、シロニヤは怖くて聞けなかった。

多少人間寄りになったとはいえ、神様であるシロニヤの感性では

まだ今一つ分からないのだが、やっぱり鋼にとって、命のやり取りのある向こうの世界に行くのはもしかするとすごいストレスなのかもしれない。だとすると、自分に今できることに集中して恐怖を忘れようとしているのかもしれないな、なんてことをぼんやりと思った。

そんな事情もあって、シロニヤだってできるだけ鋼の学校生活の邪魔をしないように立ちまわったり、あまり向こうの世界の話や暗い気持ちになる話をしないようにと色々気を遣ったりはしているのだ。

今日だって鋼の高校の近くまで来たものの、会いに行ったら迷惑だろうと近くの建物から鋼の姿を確認するまでに留め、それだけじや寂しいからとちょっとだけオラクルで鋼に話しかけただけだというのに、あの態度。

「この怒りはガリ○リ君くらいではおさまらんのじゃぞ！」

ガリ○リ君（梨味）くらいでなければぜったい許さないのじゃ！」
だが結局は許す許さないの基準はガリ○リ君だった。

とはいえ梨味はもう販売していないので、結果的には鬼難易度ではあった。

そうやってプリプリと怒りながら、シロニヤが鉄骨が剥き出しになった、工事中のビルの隣に差し掛かった時だった。

「この建物、いつ見ても工事中じゃよなー」
とか呑気な感想をつぶやいて、子猫の歩幅でトコトコと歩いていると、突然、

（な、なんじゃ？ 体が動かないのじゃー！）

足が一步も動かせなくなった。

それどころか、口すら動かせず、鳴いて助けを呼ぶこともできない。

(も、もしかしてこれは、あの時の……)

この感覚は、しかしシロニヤにとって初めてのことではない。

過去に二回、どちらも二ヶ月以上前に、シロニヤはこれを経験している。

一回目は、横断歩道を渡っている時に急に体が動かなくなり、そこに計ったようなタイミングで車が突っ込んできた。

その時は、偶然通りかかった一人の少年に身を挺してかばわれ、何とか事なきを得た。

二回目は、歩道を歩いている途中で突然体が動かなくなり、そのちょうど真上から重そうな植木鉢が落ちてきた。

その時もまた、今度は通りかかった一人の少女に間一髪で抱え上げられ、何とか無事に済んだ。

言わずと知れた、鋼と真白、それぞれとの初対面の場面である。

そして、三回目の今。

もちろん周りには鋼も真白もないし、それどころかこの辺りに人の気配はない。

一回目、二回目と同じように何かが襲ってくれば、単なる子猫程

度に身体能力が落ちているシロニヤは殺されかねない。

(しまったのじゃ！ アレからしばらく何もなかったから、警戒するのを忘れておったのじゃ！)

後悔しても今さら遅い。

これから一体何が起こるのか。

不吉な予感を覚え、かろうじて動かせる目で見上を見て、シロニヤはまさに目をむいた。

(それは……どう考えてもやりすぎじゃろ！)

工事中で、剥き出しになったビルの鉄骨。それを止めているボルトやロープが明らかに不自然な動きで外れていき、今にも落下しそうになっていた。

その落下予測地点は、もちろんシロニヤの頭上。

(コウ！ コウー！)

身動きのままならないシロニヤは、オラクルで必死に鋼に助けを求めた。

それは、古典の授業中に起こった。

【コウ！ コウー！】

オラクルで騒がしくがなり立てるシロニヤの声に、
（なんなんだよ。さっきはもう、僕のことなんて知らないって……）
鋼は邪険な態度を取ろうとするが、

【緊急事態なのじゃ！ と、とにかく、これを見るのじゃ！】
焦ったシロニヤの言葉と共に、鋼の脳裏に映像が浮かび上がって
くる。

（な、なんだ？）
動けなくなったシロニヤと、その上で今にも落ちようとする鉄骨
の映像が、リアルタイムで鋼の頭に投影される。

長い長い時を経て、今、オラクル（テレビ電話つき）が初めて役
に立った瞬間だった。

それを見た鋼は、一瞬で平和ボケした頭がぞつとするくらいに冷
えるのを感じた。

「おいおいおいおい！！」
小声で叫ぶ。

本当に冗談になっていなかった。
本当に冗談抜きで、危険な状況だった。

「くそっ！！」

めずらしく感情を押さえ切れずに鋼は小さく毒づいて、しかしそ

ここからの行動は迅速だった。

鞆の中から木の枝をひつつかんでイスから立ち上がるなり、

「先生！ トイレに行つてきます！」

と叫んだかと思うと、

「あ、ああ……」

という教師の返事が終わる前に窓に駆け寄り、

「あ、おい！ そっちはトイレじゃ……！」

「すみません！ 漏れそうなんで！」

答えにならないことを言い放つて、

「すぐもどつてきますから！」

躊躇なく窓から外に飛び出し、螺旋状に空の階段を駆け上がる。

「一、二、三階……」

窓際の女生徒の呆然とした声を踏み台に、屋上まで一気に登っていく。

「どこだ、シロニヤ！ ああいや、そうか！」

そのまま屋上に着地、ポケットを探る手ももどかしく、中から白い石のついたペンダントを取り出すと、それをかざす。

「この方向！ ……剥き出しの鉄骨、あのビルか！」

鋼の叫びに応えるように、間一髪、鋼の投げた木の枝が、鉄骨がシロニヤに届くよりもコンマー秒ほど早く、シロニヤの下に辿り着く！

……鉄骨をはるかに凌駕する速度のままです。

「にゃ、にゃあああああああー！」

当然、すさまじい勢いで木の枝に衝突されたシロニヤはゴムマリよりも簡単にすっ飛んで行って、一瞬遅れてその場に落ちた鉄骨が作り出した土煙に紛れ、見えなくなってしまった。

「うっわ、やっべ……」

それを見て、鋼は顔を青くする。

鉄骨から助けることばかりに頭がいつて、木の枝自体がぶつかるダメージを考えるのを忘れていた。

これでシロニヤが死んでいたらどうしよう。とうとう神殺しの仲間入りか、なんて風に最悪の事態を鋼は一瞬だけ考えたが、

【うっわ、やっべ、じゃないのじゃよ！ めっちゃくちや痛かったのじゃよー！】

直後、シロニヤからオラクルで通信が入る。

鋼はほつと胸を撫で下ろした。

だが、まだまだ油断はできない。

「シロニヤ！ いいからとりあえず、その枝につかまってくれ！」
鋼はすぐに指示を出す。

【こうかの？】

すぐに聞こえる、シロニヤの不思議そうな声。
それを確認して、

「しっかりつかまつてろよ！ 来い、相棒！！」
鋼がそう叫びながら手をかかげると、

【わきゃあああああああああああ！！】

投げた時を超えるんじゃないかというほどのすごい勢いで、木の枝とシロニヤ、それに枝にからまった証石のペンダントが飛んでくる。

「よし！ ナイスジャンプ！」

鋼は右手で木の枝を、左手でシロニヤを器用にキャッチ。
シロニヤをそつと地面に下ろした。

「ケガはないか？」

見たところ派手な外傷はないが、あれほどのことがあったのだ。
どこかケガをしてもおかしくはない。

「枝がぶつかったおながものすごく痛いじゃ。」

……じゃが、まあケガというほどでもないのじゃ。」

だからシロニヤが鋼の問いにそう答えるのを聞いて、鋼は心の底から安堵した。

そうすると、気になって来るのが襲撃者の正体だ。

鉄骨の動きは不自然すぎて、鋼にはとても自然現象や普通の人間の仕業には思えなかった。

「それで、一体何があったんだ？」

端的にそう尋ねると、

「おぬしに初めて会った時と同じじゃ。

あの場所に行った途端、おそらく何者かの攻撃を受けて、体が固まって動けなくなったのじゃ」

意外な言葉を聞かされて、鋼は目をぱちぱちさせた。

「あ、あれ？ 初めて会った時って、交通事故の時だよな？」

あの時お前、何かに攻撃されてたのか？」

「じゃから、助けてもらってすぐに教えたいじゃろ！」

横断歩道を渡ってる途中、急に体が動かなくなった、と」

「え？ ああ、そういえばそう……だったかな？」

実はシロニヤが車にびっくりして体が固まっていただけだと思っていた、とは今さら言えなかった。

「実はそのあとも、同じようなことがもう一回あったんじゃ。

最近は何もなかったから、油断しておったんじゃが……」

「それにしても、一体誰が？ 心当たりはあるのか？」

鋼の問いに、シロニヤは顔を険しくする。

「いくら仮の姿とはいえ、神であるワシを拘束できる力の持ち主。

そしてそれだけの力を持っていなながらワシを直接殺そうとしないのは、おそらく因果律による揺り返しを軽減するため。

つまり、相手はおそらくワシと同じ……」

そこで急に、シロニヤは口をつぐんだ。

「シロニヤ？」

鋼が呼びかけても答えない。

ただ、憎しみの交じったまなざしで、目の前の空間を見つめていた。

「ん？　ここに、何か……」

そう言っつて、鋼が前に向き直った瞬間だった。

「え……？」

唐突に、あまりに何の脈絡もなく、そこに闇が生まれた。

そして闇は形を変え、実体を得て、一つの姿を形作る。

「あーあ、また失敗しちゃった」

どこか幼くも感じられる声と共に、ある一つの獣が、そこに現界する。

それは鋼が想像する中で、世界でもっとも美しく、そしてもっとも不吉な姿。

「く、黒いシロニヤ！？　……まさか、クロニヤか！？」

「クロニヤじゃないよ、クロナだよ、っと」

軽快に返事を返した闇から生まれた獣。それは姿形がシロニヤそっくりの、真っ黒な猫だった。

闇から生まれた黒猫は、茶目つ気たつぷりの仕種で鋼たちに頭を下げた。

「やあどうも。はじめまして、『鋼お兄ちゃん』。

僕は不運と不幸を司る神様のクロナ。

まあ生まれてから二年しか経ってないから、見習いみたいなものだけどね」

そして、あっけに取られる鋼ににやつと笑いかけて、

「いつも『姉』がお世話になっていきます、って言った方がいいかな？」

一瞬だけシロニヤの方を見て、そんなことを口にした。

「姉？ まさか、シロニヤと兄弟なのか？」

あわてて鋼がシロニヤを振り向くと、シロニヤは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「認めるのも虫唾が走るが……クロナは父親違いの、ワシの兄弟神じゃ」

その表情のまま、シロニヤは渋々うなずいた。

「アツハハ！ おかげでクロナとか、ほんとテキトーな名前つけられちゃって、まいったよ。

ま、僕と姉は、正確には兄弟じゃなくて、し……」

「だまるのじゃ！ この性悪！」

陽気に話し出そうとしたクロナをさえぎって、シロニヤが鋭い声を上げる。

「ワシを狙ってたのはおぬしじゃな！ 一体なぜこんなことをする！」

その言葉に、黒猫は器用に肩をすくめてみせた。

「父様の命令でね。ほら、父様は『神人類育成計画』反対派だからな。」

向こうの世界に人を転生させるお姉ちゃんがジヤマだったんじゃないかな？」

「『神人類育成計画』……」

鋼は記憶を探る。たしか、向こうの世界で人を進化させて、神のような力を持った人間を作るという計画だったはずだ。

そのために向こうの世界に人を送りたくない、というのは乱暴だとは思うが、理解はできる考え方だった。

「ていうかね。お姉ちゃん危機感なさすぎ。

二回も襲われたんだから、ひ弱な仮の姿になんてなるべきじゃないし、交通事故に植木鉢、こんな不運で命狙われたんだから、すぐに僕が犯人じゃないかって予想くらいしなないと」

「ぬ、ぬぐう……」

年下の、しかも自分の命を狙ってきた相手に危機感のなさをダメ出しされ、シロニヤはうめき声を出した。

どうやら旗色が悪そうなシロニヤの代わりに、鋼が前に出る。

「お前はまだ、シロニヤの命を狙うつもりなのか？」

もちろん本気でクロナがあきらめるとは思っていない。

この言葉は、念のための確認のつもりだった。

しかし、

「んーん。僕はもう手を引くよ」

返ってきた答えは、意外なもの。

「そもそもね。僕の任務はお姉ちゃんが異世界転生だの異世界転移だのできないように、適度に痛めつけることなワケ。

だけとお姉ちゃん、僕が何もしなくても神様としての力をほとんど使い果たしちゃってるじゃないか。

見たところ、異世界転移ができるまであと一月ってところかな？」

「う、うぐぐ……」

完全に見透かされていた。

「やっぱりね。」

うん。あと一ヶ月あれば、もうだいじょうぶなんだ。

お姉ちゃんを殺しちゃうのも寝覚め悪いし、僕の仕事はこれで終わりにするよ」

これで話は終わり、とばかりに去っていかうとするクロナ。

だが、鋼はクロナの言葉を聞き咎めた。

「ちよつと待った！ あと一ヶ月あれば大丈夫って、どういふことだ？

あと一ヶ月の間に、一体何が……」

質問をした鋼を、黒猫はじつと見つめてから、ゆっくりと口を開いた。

「……そーだね。」

鋼お兄ちゃんには迷惑かけちゃったし、特別に教えちゃおっか」
不運と不吉を司るといふその黒猫は、特に気負う様子もなく、あつさり言った。

「あのね。どうも今年の12月31日。

今から二十一日後に、向こうの世界の魔王は復活するみたいなんだ」

「なっ！」

これには、鋼も驚きでとっさに言葉が出なかった。

だが、それを聞いたシロニヤが代わりに食ってかかる。

「バカな！？ 魔王が復活するのは、聖王歴1999年、あと二年

後のはずじゃ！　それがどうして……」

「状況が変わったらしいよ。僕も詳しくは知らないけど、誰かが魔王に入れ知恵でもしたんじゃないかな？」

「やっぱりこれも、僕の父さん辺りの差し金だと思っただけだね」

「なん、という……」

突然の、予想もしない事態の変化に、シロニヤも言葉を失った。

何も言えずに立ち尽くす二人を前に、

「これは僕の忠告だけど、魔王が復活したらはつきり言って人に勝ち目なんてない。

この世界にいながら向こうの世界の魔王の復活を止められるとは思えないし、向こうの世界のことなんて忘れて、こっちでおもしろおかしく過ごすことをお勧めするよ。

「……じゃね！」

最後まで軽薄な態度を貫いて、今度こそクロナは闇と化して空気に溶けて消えた。

クロナが姿を消して数秒。

「うーん。あんまり聞きたくないこと、聞いちゃったなあ……」

固まっていた鋼が、ようやく動き出した。

「う、うむ。そう、じゃな……」

それに釣られて、シロニヤもぎこちなくうなずきを返す。

「ま、それについては後で話すとして、とりあえず僕は授業にもど

ってくるよ」

「え？ 今からもどるのか！？」

「いや、そりゃそうだろ！ 荷物完全に置いてきちゃったし、トイレって言うて出て来ちゃったんだぞ！？」

トイレ長蔵とか、変なあだ名がついたら嫌じゃないか！！」

「う、うむ？ そういう問題じゃろうか……」

シロニヤは首をかしげたが、鋼はさっさと歩きだしてしまった。

シロニヤは引き留める気力もなく、

「はあ。それにしてもとっさに窓から出てきちゃったけど、どうしようかなあ……」。

ちよっと漏れそうだったから急いで、でごまかし切れるかなあ

……」

鋼がぶつくさ言いながら、校舎の中にもどっていくのをただ見送ったのだった。

そして、

「危ない、ところじゃった……」

誰もいなくなった学校の屋上で、シロニヤはぼつりとそう漏らす。

紙一重だった、と思う。

今回、相手も猫形態だから何とか助かった。
だがこうやって向こうから関わってきた以上、もはや事態は予断を許さない。

クロナはもう手は出さないと断っていたが、そんな言葉、到底信用なんてできないし、次に会う時に相手がまた、猫形態だとは限らない。

シロニヤは重い想像を振り払おうと首を振って、けれど果たせず、大きいため息をついた。

肉球にぐつと力を込め、決意を新たにす。

「とにかく、あやつの間人形態が黒髪のロリ巨乳美少女じゃということ、ぜったいにコウにバレないようにしなければならんのじゃよ！」

そう力強い宣言をすると、ようやくシロニヤは動き出した。

「まったく、キャラかぶりの上に局所的に上位互換とか、ほんと最悪なんじゃよ！」

不運を司るクロナの姉妹神にして、人の世の因果と転生を司る神、シロニヤ。

こっちはこっちで、かなり呑気な性格だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5652v/>

天啓的異世界転生譚

2011年10月16日01時08分発行